

南山大学大学院人間文化研究科人類学専攻提出博士論文

西アフリカ内陸における近代とは何か  
——ムブン川湾曲部における政治・経済・イスラームの歴史人類学

人間文化研究科人類学専攻

D2012HA001

中尾 世治

指導教員 坂井 信三 教授

2017 年 1 月 20 日提出

## 目次

序論 .....	1
1. 西アフリカ内陸の歴史人類学と近代.....	1
1-1. 歴史人類学の起源と文化接触論(1910 年代から 1940 年代) .....	2
1-2. 植民地状況論(1950 年代) .....	7
1-3. 新史資料の発掘と停滞(1960 年代から 1980 年代) .....	9
1-4. マルクス主義の席卷——アジア的生産様式論と従属理論(1960 年代から 1970 年代).....	10
1-5. 伝統の創造と市民社会論(1980 年代以降) .....	15
1-6. フーコーの植民地史研究(1990 年代以降) .....	22
1-7. 先行研究の問題点と本稿における近代 .....	27
2. 通史と地域設定 .....	30
2-1. 既存のナショナルな通史とその問題点 .....	31
2-2. 地域設定の問題.....	33
3. 史資料の認識とその分析手法としての歴史人類学.....	35
3-1. 史料の概要と一般的な制約 .....	36
3-2. 民族誌としての史料、史料としての民族誌・小説.....	38
4. 通史としての統合のための枠組と本稿の構成.....	46
 第 1 部 19 世紀までのムブン川湾曲部における持続と変容：政治・経済・イスラーム の新たな複合の萌芽 .....	
1 章 西アフリカ内陸の農村社会の形成と特徴 .....	49
1-1. 狩猟採集文化の変容(6,000 BC-2,000 BC) .....	49
1-2. 緑のサハラにおける牧畜と採集の混合経済(5,000 BC-2,000BC).....	51
1-3. 栽培種と家畜をもつ狩猟採集民(2000 BC- 0AD) .....	53

1-4. 定住——農耕と牧畜の専門化(0 BC-AD1000) .....	56
1-5. 10 世紀以降の西アフリカ内陸の社会変動 .....	60
1-6. 村落——親族原理と先住原理 .....	70
1-7. 国家——富の蓄積と暴力 .....	73
<b>2 章 ムフン川湾曲部の歴史的世界 .....</b>	<b>83</b>
2-1. グル語派の分布と地理的特徴 .....	83
2-2. ムフン川湾曲部の言語分布の検討のための留意 .....	88
2-3. ムフン川湾曲部の言語分布の意味 .....	94
2-4. ムフン川湾曲部の概観 .....	99
2-5. ムフン川湾曲部の村落の人口規模と特徴 .....	102
2-6. 先着原理と村落の分離 .....	112
2-7. ムフン川湾曲部における戦争 .....	116
2-8. 国家に抗するシステム .....	123
<b>3 章 ムフン川湾曲部における周縁的なジハードと国家形成 .....</b>	<b>126</b>
3-1. 16 世紀までのヴォルタ川流域へのマンデ系諸民族の拡散 .....	127
3-2. 16 世紀から 19 世紀初頭までのイスラームの変容 .....	130
3-3. ムフン川湾曲部におけるムスリムの拡散 .....	136
3-3-1. サファネとその周辺におけるムスリムの拡散 .....	136
3-3-2. ダフィンのマラブーについての口頭伝承における主題 .....	143
3-4. マフムード・カラントオのジハード .....	153
3-4-1. マフムード・カラントオの出自 .....	154
3-4-2. マフムード・カラントオの修学先をめぐる歴史の競合 .....	156
3-4-3. マッカ巡礼とジハードの動因 .....	159
3-4-4. ジハードの概要と稀少な奇跡譚 .....	164

3-4-5. ジハーダの代表的な協力者たち.....	167
3-4-6. ジハーダの展開と挫折.....	173
3-4-4. ジハーダの概要と稀少な奇跡譚.....	164
3-5. ムブン川湾曲部における政治、経済、宗教の再編成の萌芽.....	183
<b>第2部 植民地統治の確立：植民地統治による政治・経済・宗教の変容.....</b>	
<b>4章 「国家をもたない社会」における「平定」と暴力の独占.....</b>	<b>192</b>
4-1. 探索とローカルな政治関係.....	187
4-2. 「空白地」における「平定」.....	199
4-3. ヴォルタ-バニ戦争と暴力の独占.....	211
4-4. 「平定」と国家をもたない社会の消滅.....	229
<b>5章 内陸における植民地経済.....</b>	<b>232</b>
5-1. フランと人頭税.....	229
5-2. 人頭税と植民地統治.....	236
5-3. 換金作物の経済.....	246
5-4. フランによる植民地経済.....	256
5-5. 家畜による資本形成.....	261
5-6. 植民地経済とは何か.....	273
<b>6章 宗教-政治の出現：植民地行政、カトリック宣教団、イスラームの接触領域....</b>	<b>278</b>
6-1. 教育とライシテ：植民地行政とカトリック宣教団の宗教-政治.....	274
6-2. フロンティアの変貌.....	286
6-3. マサラにおける抵抗運動と監査官による事件化.....	299
6-4. 植民地統治以降の宗教をとりまく条件.....	313



第3部 ブラザヴィル会議以降の政治とイスラーム：ムフン川湾曲部における新たな政治・経済・イスラームの複合 .....	
7章 オート・ヴォルタ植民地における政党政治 .....	318
7-1. ブラザヴィル会議からオート・ヴォルタ植民地再構成まで：ボボ・ジュラソ／ワガドゥグ、RDA／UV .....	313
7-1-1. ブラザヴィル会議 .....	313
7-1-2. ボボ・ジュラソにおける政党政治の起源 .....	315
7-1-3. ワガドゥグにおける政党政治の起源 .....	323
7-1-4. CEFA とモロ・ナーバの政治活動の対照性 .....	332
7-2. 第三勢力の出現とムフン川湾曲部における政党政治 .....	334
7-2-1. オート・ヴォルタ植民地再構成後の政党の流れ .....	334
7-2-2. ムフン川湾曲部における政党政治 .....	339
7-3. オート・ヴォルタ植民地における政党政治 .....	353
7-3-1. 基幹法以後のオート・ヴォルタ植民地の政党間の政治 .....	353
7-3-2. オート・ヴォルタ植民地の政党政治の全体像 .....	356
7-4. 国家をもたない社会における政党政治とは何か .....	368
8章 ボボ・ジュラソにおけるイスラーム改革主義運動 .....	375
8-1. 第二次世界大戦までのボボ・ジュラソにおけるイスラームの展開 .....	370
8-1-1. 18世紀以前のボボ・ジュラソのイスラーム .....	370
8-1-2. コン王国のワタラとマラブー .....	374
8-1-3. 19世紀後半のイスラームの変容——サノゴとサヌ .....	377
8-1-4. 20世紀初頭の植民地としての拡張と新たなムスリム移住民 .....	380
8-1-5. ボボ・ジュラソにおけるイスラームの展開の特徴 .....	383
8-2. ボボ・ジュラソ事件と植民地行政の介入による意図せざる結果 .....	386
8-2-1. ボボ・ジュラソ事件と事件までの経緯 .....	387

8-2-2. 襲撃者たちの特徴と不透明な真相 .....	394
8-2-3. 植民地行政の認識と対応 .....	395
8-2-4. 「行政的処罰」とその帰結 .....	401
8-3. 「外来者」と「土着民」の対立とイスラーム改革主義の形成 .....	403
8-3-1. 「外来者」と「土着民」の対立 .....	403
8-3-2. 対立の修復の試みと同時代の仏領西アフリカにおけるイスラーム改革主義運動 .....	407
8-3-3. ボボ・ジュラソにおけるメデルサ .....	411
8-3-4. ムスリム文化連合のメデルサと「土着民のメデルサ」 .....	419
8-3-5. ムスリム文化連合の目的と活動 .....	425
8-4. ボボ・ジュラソにおけるイスラーム改革主義運動 .....	435
<b>9 章 西アフリカ内陸における近代と新しい歴史人類学 .....</b>	<b>440</b>
9-1. 西アフリカ内陸における近代 .....	434
9-1-1. 政治・経済・宗教の複合の萌芽としてのカラントオのジハード .....	434
9-1-2. 植民地統治における経済、政治の布置の変容 .....	435
9-1-3. カトリック宣教団と宗教-政治 .....	438
9-1-4. ムスリム文化連合における政治-経済-宗教の新たな複合 .....	442
9-1-5. 植民地統治とは何であったのか .....	445
9-1-6. 植民地統治以前からの変容 .....	446
9-2. 口頭-文書の歴史人類学の再興にむけて .....	448
9-2-1. ポストモダン人類学の先へ: 史料としての民族誌と歴史の一登場人物としての人類学者 .....	448
9-2-2. 諸言語の社会的布置と口頭-文書の歴史人類学 .....	461
<b>結論 .....</b>	<b>473</b>

あとがき .....	476
文献目録 .....	482

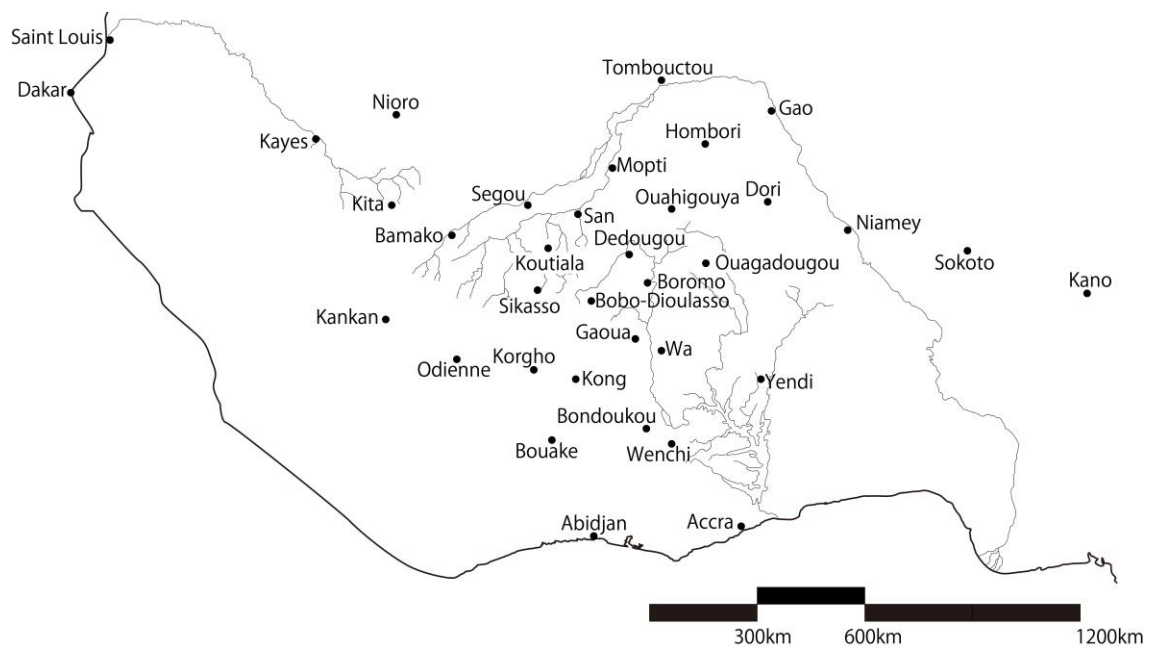


図 1. 西アフリカ広域の河川と都市(L'hote and Mahé 1996 をもとに筆者作成。)

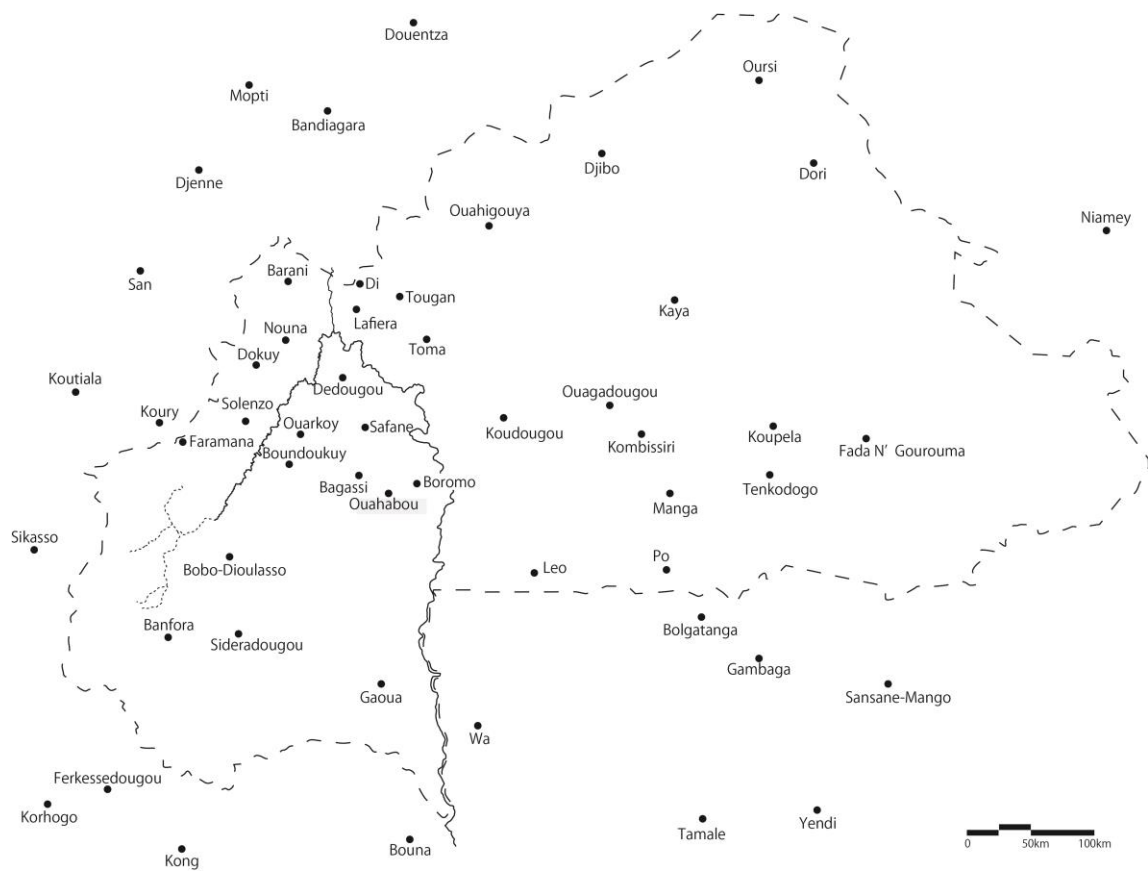


図 2. ブルキナファソの地図(点線は現在の国境、線はムフン川；ブルキナファソ地理院 (l'Institut géographique du Burkina)発行の全国図から筆者作成。)



図 3. ムブン川湾曲部の都市・村(ブルキナファソ地理院発行の全国図及び各県の県地図をもとに著者作成。)



### 1. 人名及び地名の表記について

基本的にフランス語読みを採用した。村名などの地名は現地語名とフランス語読みが必ずしも対応しているわけではないが、一般的に、先行研究及びブルキナファソ国内の公的な文書においてはフランス語読みに対応した表記がなされている。したがって、地名については、()内にフランス語表記を書き、それに対応したフランス語読みをカタカナで表記する。ただし、シンサニのように、**Sansanding** が一般的であったものが、現在では、現地語名のシンサニに対応して **Sinsani** の表記が一般的になりつつある。これらについては、現地語名を採用した。

人名も同様に、現地語名・アラビア語表記とフランス語表記が対応していないものが一部にみられる。たとえば、サヌは歴史的には **Sanon** と表記され、現在でも **Sanon** と自ら署名する場合もあり、**Sanon** と **Sanou** の表記が混在している状況にある。ほかに、**Sanogo/Saghanogo**、**Magane/Mangane** などがあるが、これらの場合については、基本的に現地語名に対応したカタカナ表記を行った。

### 2. 引用について

文献・史資料からの直接引用は「」で示し、引用した文章内に()を含むものがあり、これと区別するため、引用者による補足は[]内に示した。

引用した文献の出版年は()内に示すが、再版書・訳書などについては、初出の場合やその原書の出版年が文脈から必要と思われる場合には、[]内に原書の出版年を示した。

### 3. 史資料の出典の表記について

著者によるインタビューに基づく資料は、実施年月日・地名・人名に加え、()内に社会的属性を示した。また、公文書館などの史料については、公文書館などの略号・史料番号・史料タイトルを示した。

なお、本稿で言及する文書館史料の略号は以下の通りである。

CNABF: le Centre National des Archives du Burkina Faso

(ブルキナファソ国立公文書センター)

ANOM: l'Archives Nationales d'Outre-Mer

(フランス国立海外公文書館)

ANCI: l'Archives Nationales de la Côte d'Ivoire

(コートディヴォワール国立公文書館)

AHCD: l'Archives du Haut-Commissariat du Dedougou

(ブルキナファソ・デドゥグ高等弁務官資料室)

AHCH: l'Archives du Haut-Commissariat du Houet

(ブルキナファソ・ウエ高等弁務官資料室)





## 序論

本稿では、歴史人類学の視角から、ムフン川湾曲部（ブルキナファソ西部）におけるイスラームの植民地統治以前から独立(1960 年)までの通史を叙述し、西アフリカ内陸における近代がいかなるものであったのかを明らかにする。序論では、まず、西アフリカ内陸を対象とした歴史人類学の先行研究をまとめ、先行研究の問題点とそれを踏まえた本稿における近代の概念規定を述べる。つぎに、ブルキナファソを対象とした既存の通史の特徴と問題点を指摘し、その問題点を乗り越えるための本稿における地域設定について明らかにする。そのうえで、本稿で取り扱う史料を概観し、それぞれの史料の性質を踏まえた本稿における分析の方法論を示し、それらの方法論を用いることが本稿でいう歴史人類学であることを述べる。最後に、通史としての統合のための理論的な枠組を明らかにし、それを踏まえた本稿全体の構成を述べる。

### 1. 西アフリカ内陸の歴史人類学と近代

西アフリカ内陸を対象とした歴史人類学では、おおまかにいえば、1950 年代以降、伝統と近代が分離したものとして捉えられていたものが、伝統と近代の併存から両者の混淆として捉えられるようになった。とはいえ、伝統と近代の併存や混淆といった把握は 1980 年代以降の論者(たとえば、Comaroff and Comaroff 1993: xxxi)が断じるほど歴史の浅いものではなく、類似した主張が何度も繰り返し、別様な理論によって語られてきた。その複雑に絡み合う学説史の全貌を明らかにすることはここでの目的を越えている。ここでは、西アフリカ内陸を対象とした歴史人類学の展開をまとめつつ<sup>1</sup>、どのように近代という主題を論じてきたのかを明らかにする。そのうえで、先行研究の問題点を指摘し、それを乗り越えるための本稿における近代の概念規定を述べる<sup>2</sup>。

---

<sup>1</sup> なお、本稿の対象としている地域がフランス語圏西アフリカに含まれるため、フランスの歴史人類学の系譜が主として辿られることはあらかじめ断っておきたい。英語や日本語による西アフリカ内陸を対象とした歴史人類学の成果はほとんどふれることができなかった。その意味で以下にまとめた研究はフランスの歴史人類学に焦点をあてた——フランスの歴史人類学の成果についても、言及できなかったものも多いが——簡潔なものとなっている。英語や日本語でなされた研究を包括したものは別稿に譲りたい。

<sup>2</sup> なお、アフリカの近代史を概観した近年の著作は、基本的にいって近代の概念規定を避ける傾向にあり、ほとんど参考にならない。たとえば、『近代アフリカの歴史』(Reid 2012[2009])では、近代という概念についての考察がまったくなされていない。あるいは、『オックスフォード・ハンドブック アフリカ近代史』(Parker and Reid 2013a)では、主題ごとに著名な歴史学者による概観がなされており、その序文において、近代という概念に

### 1-1. 歴史人類学の起源と文化接触論(1910年代から1940年代)

西アフリカの歴史人類学の起点は、仏領西アフリカ連合の総督であったクローゼルの求めに応じて(Sibeaud 2002: 231)、植民地行政官のドラフォスが著した三巻本の大著『オー・セネガル・ニジェール』(Delafosse 1912a, b, c)に求められるだろう。この第2巻では、西アフリカ内陸の歴史を諸王国の勃興の歴史としてまとめ、最後にフランスによる征服の過程を記述している(Delafosse 1912b)。もっとも、トリオ(Triaud 1998: 210)が指摘するように、西アフリカ内陸の歴史をヨーロッパの言語で最初に記述したのはドラフォスではなかった。

英語圏では、1841年にコーリーが、アル・バクリー、アル・イドリーシー、イブン・バットゥータ、イブン・ハルドゥーンなどの中世のサハラ以北のアラビア語史料にあらわれる西アフリカ内陸の歴史をまとめている(Cooley 1966[1841])。ここで言及されたアラビア語史料は探検家や植民地行政官たちに基礎的な知識を提供することになる。たとえば、間接統治のイデオログであり、1900年から1906年までナイジェリア北部の高等弁務官を務めたフレドリック・ルガードの妻のショウがまとめた西アフリカ内陸の歴史書も、中世史に関してはコーリーの著作をほぼ下敷きにして書かれ、西アフリカ内陸でのイギリスの征服過程を付け加えている(Shaw 1964[1906])。ここでは、植民地統治のために、「我々に先行してきた諸文明についての統合された知識」が必要とされた(ibid.: 6)のである。

したがって、ドラフォスの新規性は西アフリカ内陸に歴史を見いだしたことやその歴史を植民地統治の前提として援用しようとすることにはなかった。ドラフォスが行なったことは、フランスによる征服や植民地統治の確立の過程のなかで得られた、住民たちの有していたアラビア語文書や口頭伝承を既存の知識に統合させたことであった。たとえば、「ワガドゥグ帝国」(l'empire de Ouagadougou)の歴史叙述は行政官によって作成された「ワガドゥグ管区のモノグラフィー」(la monographie du cercle de Ouagadougou)に依拠している(Delafosse 1912b: 181)。こうした「モノグラフィー」ないしは「概要」(la notice)は、民政移管がなされ、オー・セネガル・ニジェール植民地の構成された1904年に、各管区ごとに植民地行政官によって作成された。ドラフォスの『オー・セネガル・ニジェール』はこ

---

「明確な分析的ウェイトをおくこと」は退けられ、そのことによって、「近代のリミットを19世紀、あるいはある程度はそれ以前に拡張することで、植民地を少なくとも「脱中心化」することを試みる」という消極的な提案を行なっている(Parker and Reid 2013b: 10)。なお、アフリカの近代史を冠した著作群の系譜と現状についての本格的な検討は別の機会に行なう。

うした「モノグラフィー」や「概要」を統合させたものであった。

『オー・セネガル・ニジェール』は、一部ではアラビア語の文書によって、多くの場合、口頭によって共有されたローカルな歴史的な知識をフランス語の文書に移し替え、編年的に再構成したという点において画期的なものであった。18 世紀末の探検家のマンゴ・パーク以来、探検家、軍人、植民地行政官は、西アフリカ内陸のローカルな知識を文書化していったが、ドラフォスは自身もこうした文書化を行ないつつ、文字化された文書を体系的に収集し——その統合の仕方には恣意的なものも多く含まれているが——統合することで、歴史を再構成させたのである。

一方で、ドラフォスは歴史叙述に特化していたわけではなく、歴史を再構成するうえでの明確な方法論を有していなかったことも指摘しなければならないだろう。三巻本の『オー・セネガル・ニジェール』は、オー・セネガル・ニジェール植民地の自然地理を含む全体的な把握を目指すものであった。すなわち、第一巻で自然地理、人種・言語による集団の分類と記述をおこない(Delafose 1912a)、第二巻で諸王国の興亡と征服過程を叙述し(Delafose 1912b)、第三巻において経済、社会組織、慣習と法、宗教をまとめている(Delafose 1912c)。こうした叙述の形式は、植民地行政官の報告書の模範となるものであった一方で<sup>3</sup>、この著作がモースからは評価されなかったように(竹沢 2001: 144)、歴史への高い関心はモースの弟子のグリオールたちに引き継がれることはなかった。

しかし、ドラフォスのいわば実用人類学的な潮流は、異なる角度からの歴史への着目を生み出すことになる。第一次世界大戦終結後、国際連盟が設立されると、植民地統治の国際標準化、植民地学の国際的な展開の流れが生じるようになった。その代表的なものとして、国際連盟の委任統治制度と国際アフリカ言語文化研究所が挙げられるだろう。

委任統治制度は、間接統治の理念をもったスマッツの構想のもとに、第一次世界大戦の敗戦国の植民地をいかに統治するかという問題を解消するために導入された(Anghie 2005: 119, 175-176)。1920 年に、委任統治についての審査をおこなう常設委任統治委員会(Permanent Mandates Commission, PMC)が設立されたが、この PMC のイギリスの委員が間接統治を推し進める主要な論客のルガード卿であった(等松 2011: 17, 20)。ちなみに、PMC の日本の最初の委員が柳田国男である。農政学者としての柳田は、PMC の委員としての活動を通して、植民地学の国際的な動向を理解し——特に、言語問題が最も関心を寄

---

<sup>3</sup> たとえば、植民地行政官のモンテユによるジェンネ管区についての民族誌(Monteil 1971[1932])はこの好例であろう。

せたもののひとつであった——独自のフォークロアの構想にいたっている<sup>4</sup>。

国際アフリカ言語文化研究所は、ロックフェラー財団<sup>5</sup>からの資金援助を受けて、1926年にロンドンに設立された(Salamone 2000: 20)。第一期の所長はPMCのイギリスの委員であったルガード卿であり、アフリカ諸社会についての調査と、その調査に基づく統治による現地社会の改善が同研究所の目的とされた(ibid.: 20)。この研究所のメンバーとなったのが、ドラフォスであり、マリノフスキーである<sup>6</sup>(Sibeud 2002: 267; De L'Estoile 2007: 95)。

ドラフォスは就任直後に亡くなり、その後任となったラブレを押しつけて、この研究所において主導的な役割を果たしたのがマリノフスキーであった。マリノフスキーは、1920年代以降、社会変動への着目や改良主義的な実用人類学に傾倒し、その主張を国際アフリカ言語文化研究所の発行する『アフリカ』誌で展開していった<sup>7</sup>。たとえば、1929年に『アフリカ』誌に掲載された「実用人類学」と題された論文では、植民地統治の改善に資する人類学的研究として、現地の経済、司法、教育、衛生などの調査に加え、「ヨーロッパ文化と未開な部族生活の接触」を研究する必要を説いている(Malinowski 1929: 22)。こうした研究は、メアやハンターの『アフリカ』誌に載せた論文(Mair 1934; Huter 1934)によって、文化接触(culture contact)研究として定式化されることになった。

マリノフスキーは1931年にロックフェラー財団による大型研究助成を取得すると、彼の学生たちをアフリカ諸国に派遣し、フィールドワークを実施させた(Goody 1995: chp. 2)。こうした学生の一人がフォーテスであった(ibid.: 29-34)。1936年、フォーテスはフィールドワークの成果として、「動態的プロセスとしての文化接触：ゴールド・コースト北部領土における調査」と題した論文(Fortes 1936)を『アフリカ』誌に載せている。

フォーテスはマリノフスキー、メア、ハンターの議論を踏まえつつ、ある文化から別の文化への要素の機械的な押し込みではなく、文書をもつ社会(literate societies)と文書をもつ以前の社会(pre-literate societies)との社会的な相互作用のプロセスとして、文化接触を捉え、そのために慣習ではなくコミュニティを対象とすると述べている(ibid.: 26)。フォー

---

<sup>4</sup> 岩本は、「常民」概念の一つの起源として、柳田による第三回常設委任統治委員会の英文の報告「委任統治領における原住民の福祉と発展」に言及している(岩本 1994)。

<sup>5</sup> 正確には、1929年にロックフェラー財団に統合される前の、ローラ・スペルマン・ロックフェラー記念財団である(Salamone 2000: 20)。

<sup>6</sup> ドラフォスの死後はラブレがメンバーとして参加した(Sibeud 2002: 267; De L'Estoile 2007: 95)。ドラフォスやラブレもまた、間接統治の支持者であり、特にラブレはイギリス式の間接統治を高く評価していた(Wilder 2003b)。

<sup>7</sup> その経緯については、清水 1999; 田中 2001 を参照。

テスは、行政官、診療所、宣教団の存在や、労働移民による社会変容といった植民地行政と植民地経済による変容を主としてとりあげているが、一方で、モシの布が仏領西アフリカから輸入されるか、北部領域のモシの居住区で織られたものが、モシの交易者によって市場で売られているといった必ずしも植民地とは直接的に関連しない変容についても若干の記述をおこなっている(ibid.: 38)。この点はフォーテスも十分留意していたようである。結論部分では、ハウサ、モシ、ダゴンバなどといった「アフリカ人の接触エージェント」の影響を考慮する必要があると述べている(ibid.: 54)。さらに、フォーテスはより南部のアシヤンティの社会では、ココア産業の「歴史的・社会学的な研究」が求められるであろうとしている(ibid.: 54)。つまり、文化接触の研究は——フォーテスはすぐにこの研究から離れることになるが——プロセスの記述となるために、歴史的な研究を要請するとともに、ヨーロッパ人だけではなく、西アフリカ内陸の諸民族の接触へと関心を拡張させるものであった。

この論文はその冒頭において予告されていたが、メアの編集した『アフリカにおける文化接触の研究手法』(Mair 1938b)に再録されることになる。マリノフスキーはこの論集に長大な序文を書き、この論集全体と各論文について長々と批判を行なっている(Malinowski 1938)。この時期にはすでにマリノフスキーと弟子たちのあいだで、マリノフスキーの理論と彼の人格をめぐる亀裂が入っており(竹沢 2007: 56-57, 77)、マリノフスキーによる批判もまた半ば学問的なものであり、半ば感情的なものであったように思われる。細部にわたる批判の内容をここではすべてとりあげないが<sup>8</sup>、理論上の重要な点は2つある。一つはゼロ・ポイント仮説をめぐるものであり、もう一つは文化接触のプロセスの設定をめぐるものであった。まず、前者からとりあげよう。

メアは、変化を理解するためには、たとえ不完全であったとしても、変化の始まる以前の状態を再構成しなければならないと主張している(Mair 1938a: 5)。マリノフスキーも、変化の程度を評価するためには、変化の始まる以前の状態、すなわち、文化接触のゼロ・ポイントの知識が必要であるかのようにみえるとする(Malinowski 1938: xxv)。しかし、フィールドワークにおいて語られる過去は理想化されており、それをそのままゼロ・ポイントとして仮定することはできず(ibid.: xxvi)、「断片的な資料から多大な労力をかけ慎重に復元しなければならないような過去」(ibid.: xxvi)ではなく、伝統については熟知することは重要であるが、再構成された過去の知識は重要ではないと主張する(ibid.: xxx)。

---

<sup>8</sup> なお、マリノフスキーの批判の詳細については清水(1999)。

他方で、マリノフスキーは、文化変化のプロセスについても論じている。彼によれば、文化変化は、ヨーロッパ文化とアフリカ文化の接触と動態的な相互作用の生み出す一つのプロセスであり、第三の「西欧化されたアフリカ文化」を生み出すものである(ibid.: xix)。そのうえで、マリノフスキーは、この論集の論者たちがヨーロッパの文化とアフリカの文化の混淆を捉えるにあたって、その混淆をそれぞれの文化から借用されたものとして捉えていると批判している(ibid.: xxii)。

これらの論点はマリノフスキーの死後に反論がなされることになる。マリノフスキーが1942年に亡くなると、その3年後に文化接触研究についての彼の論文と未発表原稿をまとめた『文化変化の動態』(Malinowski 1945)が出版された。これに対してグラックマン<sup>9</sup>が『アフリカ』誌に長大な書評論文を載せている(Gluckman 1947)。

グラックマンは、マリノフスキーの歴史の否認を標的として批判を展開し、歴史の再構成の擁護を行なっている(ibid.: 104-106)。すなわち、歴史の再構成は、現在の理解のために必要であり、社会的なプロセスの分析のためのデータとして必要であると主張している(ibid.: 106)。そして、グラックマンは、社会の変容を論じるには歴史の分析が要請され、マリノフスキーによる歴史の再構成の否認と文化の変容の理論は矛盾していると指摘している(ibid.: 106)。

さらに、グラックマンは、マリノフスキーや彼の遺稿をまとめた編者による自身の論文の誤読を指摘しつつ、マリノフスキーによる文化変化のプロセスを批判している。すなわち、マリノフスキーはヨーロッパの文化とアフリカの文化が統合された第三の文化に焦点化しているが、この2つの文化は必ずしも統合されておらず、統合されずにコンフリクトが生じているプロセスこそがまさに変容を捉えるうえで重要であると主張している(ibid.: 109, 120)。

このコンフリクトへの着目が、グラックマンを中心としたマンチェスター学派の儀礼研究におけるコミュニティ内部の葛藤や矛盾をコミュニティの統合のプロセスとして把握する理論的視座につながっていくことは論を待たないであろう。とはいえ、ここで着目する点は、そこではない。重要な点は、植民地統治以降の文化や社会の変容を論じるには、歴史の研究が理論上、不可避免的に必要とされるということである。グラックマン自身は、こうした歴史への関心を失っていったが、グラックマンの論じた理論構成は植民地統治以降の社会変容を主題とするのちの研究に引き継がれることになる。その人物こそ、植民地状

---

<sup>9</sup> グラックマンのそれ以前の研究については、田中 2001; Werbner 1984: 161-162。

況という概念を生み出したバランディエであった。

## 1-2. 植民地状況論(1950年代)

ポスト・コロニアル리즘の影響を受けた歴史学のいわゆる「帝國的展開」(imperial turn)——この潮流についてはのちに論じる——において、1951年のバランディエの植民地状況についての論文はポストコロニアル研究の始点に位置づけられている(ex. Cooper and Stoler 1997: 15; Cooper 2005: 7, 33, 35-36)。そのなかで、バランディエの画期とされる点は、(1)第二次世界大戦後の植民地の問題を「全体性」のなかで捉えることで、(2)特定の民族集団に分析対象を限定させず、(3)親族や妖術ではなく、軍事征服、経済的搾取、人種主義的イデオロギーに焦点をあて、(4)植民者の権力と被植民者の関係性の総体を、モースのいう「全体的社会事象」に歴史的なパースペクティブを加えた植民地状況という概念に定式化したこととされる(Cooper 2005: 35)。

さらに、先行する重要な研究として、くだんのバランディエの論文に引用されている、グラックマンの1940年のいわゆるブリッジ論文(Gluckman 1940)——橋の竣工式における白人と現地民との相互行為を丁寧に分析した論文——を挙げて、この論文が、あるひとつの植民地状況のミクロな政治(micropolitics of a colonial situation)と、植民地状況そのもののマクロな政治(macropolitics of the colonial situation)の双方を論じたものであると評している(Cooper 2005: 35-36)。つまり、現在の「ローカル」と「グローバル」の双方向的な構成や複雑に絡み合うネットワークの分析に通じるものとして解釈されている(ibid.: 36)。

バランディエの学問形成の理論的・実践的な背景もまた非常に複雑なもので、それらについては、すでに多くの研究がなされているため<sup>10</sup>、ここでは西アフリカ内陸における歴史人類学の展開という視角から、上述の要約では抜け落ちている論点をいくつか指摘しておきたい。

まず、バランディエは、デュルケームの機能主義を導入した後に独自の展開を遂げたイ

---

<sup>10</sup> 植民地状況の理論的な背景として、バランディエ自身はサルトル、モース、そして、直接的な師のギュルヴィッチを挙げている(Balandier 2002)。嶋田はバランディエの学問の形成過程を概観しつつ、その理論をギュルヴィッチとの関係において説明している(嶋田 1988)。2001年以降、学説史上・歴史上の人物としてのバランディエ研究ともいえるべき研究があらわれており、人類学の学説史上の植民地状況概念の位置づけと概念の意味内容の微妙な変遷についてはコパンとメルルが詳細に論じている(Copan 2001; Merle 2013)。また、マンはフランス黒アフリカ研究所勤務時代のバランディエと同僚で政治運動を行っていたマデイラ・ケイタ(Madeira Keita)の研究と当時の政治的な状況を明らかにしている(Mann 2013)。



ギリス社会人類学の理論を受け継ぎ、拡張させたといえる(Copan 2001: 33)。ただし、バランディエは、こうした理論を踏まえて調査をしたというよりも、調査後の理論形成の際に、グラックマンらの議論を受容したようである。植民地状況という概念自体は前年の論文(Balandier 1950)に現われていたが、ここでは『植民地化の心理学』を著したマンノーニ(Mannoni 1950)が言及されている(Copan 2001: 37; Merle 2013: 219-220)。ここでは、マリノフスキーの文化接触論へのグラックマンの論文(Gluckman 1947)をなぞるかたちでの批判はおろか、彼らについての言及が一切なく、1951年の「植民地状況：理論的アプローチ」という論文(Balandier 1951)において初めてグラックマンらの研究が登場している(Copan 2001: 37)。そして、1950年の論文は、のちの『黒アフリカ社会の研究』(バランディエ 1983[1955])のダイジェストといえるような内容のものであり、この『黒アフリカ社会の研究』の1章には1951年の「植民地状況」論文に加筆・修正したものが充てられている。つまり、バランディエの植民地状況と歴史についての関心は、グラックマンらの受容以前からあったのであろう。

そのうえで、重要な点は、1950年論文(Balandier 1950)における植民地状況概念が史料の把握と結びついたより明示的で具体的なものであったということである。バランディエは、コンゴのブラザヴィルとガボンのリーブルヴィルには、1900年から1950年までの植民地行政による報告書が保管されていることを述べたうえで(ibid.: 77)、このように書いている。「これらの文書は、多少なりとも正確な観察と統計だけではなく、それぞれの時代に行政が直面していた「問題群」を指し示すものである。それらの文書に拠って、植民地権力の手段と方法だけでなく、現地の社会の対応をも把握することができる。部分的にはこうした媒介を通じて、社会構造の進化がいかに「植民地状況」との接合を生じさせているのかを研究することができるのである」(ibid.: 77、強調は原文)。実際のところ、コンゴにおける征服から植民地統治による変容を述べ、メシアニズム運動の形成と展開を跡付けた『黒アフリカ社会の研究』(バランディエ 1983)は、自身の聞き取りによるデータと宣教団の史料を用いつつ、行政文書を大量に駆使して構成されている。先に引用したバランディエの見解をもう少しおしすすめていえば、行政文書とはそれ自体が植民地状況を明確に体现したものであったのである。おそらくバランディエにとって、植民地状況概念の着想のひとつがこの行政文書の把握の仕方にあったのだろう。

このように捉えると、植民地状況概念を通じて、バランディエが西アフリカ内陸の歴史人類学に大きな方法論的な転換をなしていたとみることができる。つまり、バランディエ

は歴史的なパースペクティブの必要性を単に主張しただけではなく、行政文書に対する新たな理論的な立場を導入したのである。批判的に行政文書を読み解くことで、行政文書それ自体が植民地状況の産物として理解しうるものとなり、行政文書を当事者からの聞き取りと同様に用いることで、植民地行政と現地の社会との双方を明らかにすることをバランディエは実践していた。

ドラフォスは自らもこのような行政文書を作成し、植民地行政の末端から提出された報告書を縦横無尽に用いつつ、圧巻の『オー・セネガル・ニジェール』を著したことはすでに述べたとおりである。したがって、行政文書を用いること、それ自体は仏領西アフリカのそれまでの人類学のなかでは珍しいものではなかった<sup>11</sup>。バランディエが導入したことは、行政文書それ自体を植民地状況の産物として理解し、行政文書を用いて植民地行政と現地の社会との双方を明らかにしようとする行政文書の新たな捉え方の提示であった。そして、行政文書についての把握のあり方が社会を捉える理論と直結するという、いわば史料論と社会論が相互に内在的に結びつくものとして植民地状況概念を胎動させていた。

もっとも、こうした理論の萌芽は早々に失われてしまった。バランディエの理論についての通説は本節の冒頭で述べたとおりである。植民地研究という枠を外して一般的に言い換えれば、歴史と政治経済への着目、対象を特定の民族集団に限定しないことが推奨されたとまとめることができるだろう。そして、おおまかにいえば、1960年代以降、西アフリカ内陸の歴史人類学は、歴史と政治経済に着目しつつ、対象を特定の民族集団に限定しない研究として展開していくことになる。

### 1-3. 新史資料の発掘と停滞(1960年代から1980年代)

1960年代から1980年代ごろまでの西アフリカ内陸の歴史人類学と歴史学は、西アフリカ諸国の独立ともあいまって、歴史への関心が急速に高まり、史資料の新発見が相次いでいた。こうした新発見によって、研究の厚みが大幅に増したことがこの時代の特徴である。たとえば、大西洋奴隷貿易の史料の大規模な精査・発見がなされ、推計を含むものの史料に基づく数値が初めて示されたのもこの時期である(Curtin 1969)。大西洋奴隷貿易研究の副産物として、この時期にアメリカ大陸に渡った元奴隷の手記などの発見もなされ、植民地統治以前の西アフリカ内陸についての新たな史料が明らかになっている(Curtin 1967)。

---

<sup>11</sup> たとえば、Tauxier 1912; Monteil 1972[1932]; Paulme 1940.より正確に言えば、トクシエ、モンテイユの民族誌は自らの作成した行政文書を元にして書いている。

口頭伝承の研究は植民地統治期から継続されていたが、まとまった大著が出版されたのはおおむね 1960 年代以降といってよいだろう。特にフランス語圏西アフリカでは、フランス黒アフリカ研究所にかかわる研究者を中心として、西アフリカ内陸の歴史研究を代表するような分厚いモノグラフが出された。ハンパテ・バとダジェによるマーシナ帝国(Daget et Bâ 1955)、イザールによるヤテンガ王国(Izard 1970)、ペルソンによるサモリ帝国(Person 1968, 1970, 1975)などを対象とした口頭伝承に基づく研究が挙げられるだろう。ただし、こうした研究はいずれも王国を対象としたものであった。個別論文を除けば、1971 年にホートンが指摘したように(Horton 1971)、国家をもたない社会の歴史研究はほとんど手付かずのままだに残された。

西アフリカ内陸に残されたアラビア語史料の「発見」もまた、植民地統治末期からなされ、1960 年代以降に、その成果を続々と明らかにするようになった。特にヴォルタ川流域でのアラビア語史料と口頭伝承を用いた歴史研究は、長距離交易商人で学者であったムスリムの歴史的な伝播のプロセスや諸王国との関係などを明らかにしていった(たとえば、Levtzion 1968; Wilks 1968, 1989; Wilks et al. 1986)。

こうした新史資料の発掘は西アフリカ内陸の歴史をより詳細にしていっていった。他方で、西アフリカ内陸では、1990 年代以降、口頭伝承と一部のアラビア語史料を除けば、植民地統治以前の新史料はほとんどみつかることはなかった。後に述べるように、1990 年代以降、西アフリカ内陸の歴史人類学と歴史学の理論は植民地史研究にシフトしていったが、これは理論的な動向の推移だけではなく、植民地統治以前の史料研究が飽和したことにも由来するように思われる。ともあれ、1960 年代以降の新史資料の発掘と並行して、1960 年代から 1970 年代にかけて、西アフリカ内陸の歴史人類学と歴史学を横断するような理論が勃興するようになった。

#### **1-4. マルクス主義の席卷——アジア的生産様式論と従属理論(1960 年代から 1970 年代)**

1960 年代から 1970 年代ごろまでの西アフリカ内陸の歴史人類学と歴史学はマルクス主義に大きく影響を受けて展開していった。この流れは、アジア的生産様式論と従属理論を背景とする。おおまかにいえば、前者は植民地統治以前からの社会進化を主題とし、後者は植民地統治以後の近代を主題としていたといえるだろう。

この新時代の幕開けを告げたのは、マルクス主義の理論家で活動家でもあったシュレ＝カナールによる大著『黒アフリカ史』第一巻(シュレ＝カナール 1987[1958])である。この

著作は4つの点で画期となるものであった。

第一に、この著作はマルクス主義の理論枠組によって、歴史に段階的な変化を設定した。詳細は割愛するが、生業形態と分業の複雑さによって規定される生産様式とその生み出す社会内の矛盾によって、狩猟採集社会から農耕社会、農耕社会から国家への進歩が生じたと説明している(ibid. 68-76)。第二に、植民地統治期に書かれた民族誌を広範に参照している。先に述べた生産様式と社会の具体的なあり方の説明のために、西アフリカ内陸の諸民族の民族誌が広範に参照され、まとめられている(ibid.: 77-98)。第三に、大西洋奴隷貿易によって、西アフリカ内陸社会が大きく変容したことを指摘している。すなわち、16世紀以降の西アフリカ内陸の諸国家が大西洋奴隷貿易の影響を受けて、奴隷の入手と売却に特化するようになり、独自の発展が阻害されたと論じている(ibid.: 113-115)。第四に、フランス軍による征服のプロセスを批判的に詳述し、その帝国主義のイデオロギーの破綻と征服の非人道性を告発している。シュレ＝カナールが参照しているのは、すでに出版されていた軍人や植民地行政官たちの手記であるが、これらを批判的に読みこむことで、フランス軍による征服の欺瞞を明らかにしている(ibid.: 212-262)。

シュレ＝カナールによる著作が、いかに先進的なものであったのかは、この著作の3年前にケンブリッジ大学出版会から出版されたファージュによる『西アフリカ歴史入門』(Fage 1955)と比較すると明らかであろう。『西アフリカ歴史入門』では、15世紀までの諸王国の興亡をまとめた後に、16世紀以降はヨーロッパ諸国の貿易の競合と征服と支配を書いて、その書を閉じている。植民地統治とそれに至るまでのヨーロッパ諸国の経緯が整理して書かれていることを除けば、その枠組は基本的に50年ほど前に書かれたショウ(Shaw 1964[1906])の著作とほとんど変わることはなかった。

シュレ＝カナールは『黒アフリカ史』においてすでに西アフリカ内陸独自の生産様式論を論じていたが(たとえば、シュレ＝カナール 1987: 80-81)、1964年4月と10月に、『パンセ』誌が「アジア的生产様式」の特集を組むと、いわゆるアジア的生产様式論争が展開し、議論はアフリカの歴史学を越えて、他地域の歴史学と人類学へと波及することになる。

フランスにおいて、この論争をリードしたのは、フランス共産党の理論研究組織として1959年に設立されたマルクス主義調査研究センター(Centre d'études et des recherches marxistes)であった(福本 2014: 114)。この研究センターの東洋部会のなかで、古典古代史を専門としたパランの主導のもと、1962年からアジア的生产様式についての共同研究が開始され、シュレ＝カナールはこれに参加し、1963年からは研究センターの副所長となって

いる(ibid.: 115)。この共同研究には、ベトナム、マダガスカル、中国の地域研究者に加えて、のちに経済人類学者となるゴドリエや農学・人類学のオードリクールといったメンバーが参与していた(ibid.: 115)。シュレ＝カナールは『パンセ』の1964年10月号にアジア的生産様式のアフリカ史への適用についての論文(Suret-Canale 1964)を載せ、この号には、主要な論客となったゴドリエも「アジア的生産様式概念と社会進化のマルクス主義的構想」という論文(Godelier 1969)を発表し、広く引用されることになる。

比較可能な基礎的データを欠き、定義の問題に終始したアジア的生産様式論そのものに積極的な学問的意義を見いだすことは困難である。しかし、重要な点は、この論争を通じて西アフリカ内陸の歴史人類学と歴史学が相互に参照されることになり、これらが大まかな研究の方向性を共有していったことである。

画期となったのは、フランス語圏中央アフリカを対象とする代表的な歴史学者となったコクリ＝ヴィドロヴィッチによる「アフリカ的生産様式の探究」(Coquery-Vidrovich 1969)であろう。コクリ＝ヴィドロヴィッチは、サハラ以南アフリカにおいて特徴的であることは、家父長的な共同体経済と特定集団に独占された長距離交易の交錯しない併存が「アフリカ的生産様式」であるとしている。この論文ものに英訳され、広く読まれることとなった。

もっとも、この論文を注意して読めば理解できるのだが、この図式はそもそも1960年のメイヤスーによるコートディヴォワールのグロの経済活動についての論文(Meillassoux 1960)にみられるものであった。ここでは、メイヤスーはマルクスに加えて、モースやポランニーを援用しつつ、親族関係に規定されて農産物が分配される自律的な経済と外来者による交易とが併存していることを明らかにしていた。コクリ＝ヴィドロヴィッチの論文に触発されたかどうかは定かではないが、メイヤスーは農村の経済と外来者の交易のそれぞれについて研究を展開していく。

まず、外来者における交易の研究がどのように展開していったかをみていこう。コクリ＝ヴィドロヴィッチの1969年論文(Coquery-Vidrovich 1969)の2年後には、メイヤスーは西アフリカ内陸の植民地統治以前の長距離交易の共同研究の論集を発表し(Meillassoux 1971)、1975年には奴隷についての論集をまとめている(Meillassoux 1975)。これらの論集は共通する分析概念によって結ばれたものではなかったが、共通の問題系ないしは問題設定を可能にしたといえるだろう。長距離交易と奴隷の獲得は植民地統治以前において国家形成の主要な要因であり、これらの解明は西アフリカ内陸の国家のあり方を明らかにしう

るものであった。実際のところ、これらの共同研究を引き継いで、戦争と国家の共同研究がなされ(Bazin et Terray 1982)、奴隷の獲得と売買による戦争国家の概念が形成されることになった。これらの研究は西アフリカ内陸の内在的な社会変容の歴史に焦点をあてたものとして理解できるだろう。

他方で、農村については、メイヤスーは独自の生産様式概念を形成していった。メイヤスーは生粋のマルクス主義者であったが、ゴドリエの議論とは距離をとっており(Meillassoux 1967)、アジア的生产様式とは離れて、独自に理論を構成するに至った。すなわち、前資本主義社会の農村においては食糧と女性という再生産の手段の所有こそが重要であり、その結果として農村社会では男性の年長者による支配が確立されるとした(Meillassoux 1972)。これは 1975 年の著作のなかで家内制生産様式として定式化されることになった(メイヤスー1977[1975])。

さらに、家内制生産様式をまとめた著作では、メイヤスーはレーの議論を受けつついわゆる接合理論を展開している(ibid.)。レーはアジア的生产様式をリネージ的生产様式として組み替えたうえで、リネージ的生产様式が資本主義経済の浸透と併存し、むしろ、資本主義経済がリネージ的生产様式を温存するという——たとえば、植民地支配によって伝統的首長が政治的に強化され、労働者を送り出すといった——かたちで両者が接合すると論じた(Rey 1971, 1973)。メイヤスーはこうした接合理論を踏まえて、基本的には賃金労働が念頭におかれている資本主義的生产様式は、家内制生産様式を温存させ、男性年長者の支配を強化し、その強化によってやがて家内制生産様式そのものも危機に陥ると議論を展開している(メイヤスー1977)。

こうした接合理論は、同時代に提起されていた従属理論の部分的な修正として議論されていた。従属理論では、世界経済の中心部における資本主義の発展によって、植民地に周辺資本主義が形成されるとし、周辺資本主義は一次産品の供給を通じて中心部の資本主義に従属し、自立性を欠くと論じられた(アミン 1979a, b, 1981[1970])。このような潮流のなかで、コクリ＝ヴィドロヴィッチは生産様式論と従属理論を踏まえて、サハラ以南アフリカ諸国の低開発がいかに歴史的に形成されたのかという点で植民地統治以後の経済史をまとめている(Coquery-Vidrovitch 1976)。

このように、1960 年代から 1970 年代までのアジア的生产様式論と従属理論は、西アフリカ内陸の歴史人類学と歴史学を交錯させるひとつの潮流を生み出したといえるだろう。アジア的生产様式論とそれと部分的に重なる経済人類学は、同時代にやや先行してアメリ

かで流行していたボランニーらの議論を受容(たとえば、Meillassoux 1960; Dalton 1969)、あるいは批判していくことで(Lovejoy 1982)、植民地統治以前の、つまり資本主義経済以前の西アフリカ内陸の経済発展をより詳細に明らかにしたといえるだろう。

他方で、従属理論を引き継ぎ、拡張させた世界システム論(ウォーラーステイン 1981[1972])の流行によって、西アフリカ内陸の社会が資本主義経済に接合、あるいは包摂されたものとして捉える視座が歴史人類学と歴史学に共通して広がっていくことになる。レーやメイヤスーの議論は実証的なデータの薄いものではあったが、西アフリカ内陸の歴史を世界規模の資本主義経済の拡張とともに捉えるといった歴史観は世界システム論とともに一般化した(Cooper 1981, 1994)。そのなかで、資本主義経済に包摂され、いわゆる伝統社会が資本主義経済によって維持・強化されるという論法が共有され、次節でふれる伝統の創造(ホブズホームとレンジャー 1992[1983])や呪術の近代性(Comaroff and Comaroff 1993; Geschiere 1995)を論じた論者たちの前提となっていた。

一方、こうしたマルクス主義に強く影響を受けた議論を批判していった論者たちも、人類学と歴史学の成果を統合した豊かな研究を残している。たとえば、イギリスの社会人類学者のグッディは土地の支配に基づく封建制概念を西アフリカ内陸に適応することを批判し<sup>12</sup>、西アフリカ内陸の歴史においては生産手段ではなく破壊手段が国家形成の大きな要因となったと論じている(Goody 1971a)。あるいは、イギリスの代表的な帝国史研究者のホプキンスは、従属理論における実証的なデータの欠落を批判し、16 世紀以降の大西洋貿易や植民地統治のなかでアフリカの商人たちが主体的に経済活動を拡張させていったことを指摘している(Hopkins 1973)。これらは、それ以降の研究の共通の基盤となった。特に、ホプキンスの歴史観は、従属理論の後退以後、西アフリカ内陸の経済史研究の基本的な見方となっていた<sup>13</sup>。

1960 年代から 1970 年代にかけてのマルクス主義の席卷は、前項で述べた新史資料の発掘と連動して、西アフリカ内陸の歴史研究を大きく転換させた。おおまかにいえば、植民

---

<sup>12</sup> なお、1960 年代初頭には、アジア的生産様式論争にやや先行して、『アフリカの伝統的政治体系』(Fortes and Evans-Prichard 1940)とマルクス主義における封建性概念をめぐる議論が展開されていた(たとえば、Maquet 1961, 1962; Kabore 1962; Goody 1963)。グッディのこの著作は(Goody 1971a)、この議論の延長線に位置づけられ、この議論はイギリスとフランスの社会人類学、マルクス主義、歴史研究の交錯するひとつの論点を提供したといえるだろう。

<sup>13</sup> 1980 年代以降のこうした経済史研究のレビューについては、Hopkins 2009; Austin 2011, 2014b を参照。

地統治のイデオロギーに対する批判的視座が明確な前提となり、歴史人類学と歴史学は相互に補完しつつ、資本主義経済と同時に併存した西アフリカ内陸の内在的な発展が論じられるようになったといえるだろう。そして、前項の末尾で述べた新史料の発掘の限界と並行して、1980年代以降、植民地統治とそれによる社会の変容に焦点をあてた歴史研究が主流となっていく。

### 1-5. 伝統の創造と市民社会論(1980年代以降)

1980年代以降の歴史人類学では、メイヤスーの経済史的な関心を共有した研究が独自の展開を遂げ、2つのグローバルな議論に接続していくことになった。ひとつは伝統の創造についての議論であり、もうひとつはアフリカ市民社会論であった。まず、前者からみていこう。

メイヤスーによる植民地統治以前の奴隷交易の歴史研究の枠組を出発点として、アムセルはマリ南部の長距離交易商人の研究を植民地統治以前から現在に至るまでの長い時間軸のなかで捉えなおすモノグラフ(Amselle 1977)を上程していた。現状を歴史的な過程のなかで捉える視座は民族概念を批判的に捉え、その歴史的な構築を西アフリカ内陸の植民地統治以前の諸民族の交流と植民地統治による統治の単位として固定化から明らかにする研究へと引き継がれ(Amselle et M'Bokolo 1985)、こうした問題意識はのちに同時代に英語圏で展開されていた人類学におけるポスト・コロニアリズム研究の用語によって説明されることになるだろう(Amselle 1993)。アムセルはその民族論においては『創られた伝統』に言及していないが、民族が歴史的に構築されたものであること、特に植民地統治の影響を受けて大きく変容したという議論は、植民地統治期に種々の伝統が創造されたとする同時代の英語圏の歴史学のなかで展開されたものと類似したものであった。

1980年代以降の歴史研究に大きな影響力をもつことになった論集『創られた伝統』(ホブズホームとレンジャー1992[1983])には、主としてジンバブエを対象とした歴史学者のレンジャーが寄稿している(レンジャー1992)。レンジャーは1960年代の独立の前後で流行していた、植民地統治が開始される初期の抵抗を扱った研究からスタートし(Ranger 1967)、独立運動に初期抵抗の記憶が援用されているとする議論を展開し(Ranger 1968)、このような記憶の援用には「伝統」の修正や創造がなされることを論じていた(Ranger 1977)。さらに、1979年には、間接統治のなかで民族分類に基づく首長の任命がなされ、その結果として首長が自らの地位を高めていくプロセスが対象化された(Ranger 1979)。『創られた伝統』



に載せた論文をこうした問題意識の延長線にあり、初期抵抗研究から派生したアフリカ史研究の一つの達成であったともいえるだろう。そして、西アフリカ内陸を対象とした歴史人類学や歴史学のなかでも、『創られた伝統』の議論を前提とした研究がなされるようになっていった(たとえば、Hawkins 1996; Lentz 1993, 2000)。

こうした研究のなかでは、もはや、伝統と近代は対置されるものではなく、あるいは支配者と被支配者を明確に区別されるものとして捉えるのではなく、伝統と近代が歴史的に混淆されたもの、あるいは植民地統治期は支配者と被支配者の区別の曖昧な絡み合いの歴史として捉えられるようになっていく。このような見方そのものは、すでに述べたように、バランディエ、あるいはグラックマンにまで遡るものであるが、より一般化されたかたちで提示され、文学理論と結びついた同時代のアメリカの人類学における理論(マーカスとフィッシャー1989[1986]; クリフォードとマーカス 1996[1986]; クリフォード 2001[1988])のグローバル化に伴って広く共有されることになった。これらの理論を援用しつつ、アムセルが問題意識を「人類学と歴史」(Amselle 1992)としてまとめていることは、人類学のグローバル化の兆候であったともいえるだろう。ともあれ、アムセルとレンジャーという、異なる学問的な背景をもつ研究の潮流が類似した理論的立場に収斂していったのである。

もうひとつのグローバル化された議論はアフリカ市民社会論である。この議論の直接的な起源の一つはバヤールの国家論と「下からの政治」にもとめられるが、これに先行するかたちで国家・社会間の問題(真島 2006)を論じたのが、コートディヴォワールを対象とした歴史人類学者のドゾンとショヴォーであった。

ドゾンとショヴォーもまた、1970年代まではメイヤスーに代表されるフランスの歴史人類学の問題関心を共有していたといえるだろう。ショヴォーは植民地統治以前のバウレの経済と政治組織についての論文をまとめ(Chauveau 1976, 1977)、ドゾンは植民地統治期のプランテーションの導入によって、狩猟と戦闘に特化していた男性と農耕に従事する女性という性分業が変容し、輸出用作物の管理によって男性の優位が継続されたことを論じていた(Dozon 1977a, b)。こうした歴史研究を踏まえて、彼らはベテやバウレの居住域のコートディヴォワール中央部の農耕の歴史についての共同研究(Chauveau et al. 1981)を皮切りに、「民族」論を越えた独自の市民社会論を展開することになる。

大きな転換点となったのは、「コートディヴォワールにおける、植民地化、プランテーション経済、市民社会」(Chauveau et Dozon 1985)である。ここでは、コートディヴォワール史研究を一変させた(真島 2007: 297)とされる、この論文をやや立ち入って紹介しておこ

う。

この論文の冒頭では、「進行中の「近代国民国家」」が人類学の対象となりうることが宣言される(ibid. : 63)。そのうえで、近代国民国家であるコートディヴォワールの社会の歴史において、コーヒー・ココアのプランテーション経済が特権的な位置を占めていることを指摘している(ibid. : 65)。ただし、ここでのプランテーション経済への着目は従属理論のような経済決定論としてではなく(ibid. : 64, 65)、コートディヴォワールの「横糸とその歴史とある種の自己同一性」を理解するために要請されるとする(ibid. : 65)。

まず、プランテーション経済は森林地帯に居住する諸民族の社会の変容の駆動因であった(ibid. : 65)。開拓による土地の領有のプロセスのなかで、諸民族の一部は破壊され、あるいは復興し、新規に創出された(ibid. : 65-66)。こうした変容は、森林地帯にのみ限定されるものではなかった(ibid. : 66)。コートディヴォワール北部や近隣の植民地からの諸民族の移入によって、コートディヴォワール内部での中心と周縁が形成された(ibid. : 66)。

こうした労働移民によって、「地元民」と「移住民」という社会的なカテゴリーが生まれることになった(ibid. : 66)。両者のあいだには、土地と労働力へのアクセスの差異に起因する新たな社会的階層制を生みだし、集合的な戦略やコンフリクトの原因となった(ibid. : 67)。そして、まさに「ここにプランテーション経済の本質的な側面の一つであり、イヴォワール「市民社会」のるつぼと呼ぶものが見出せるのである」(ibid. : 67)。コートディヴォワール南部での都市化による教育の普及と賃金労働もまた、プランテーション経済の発展に起因するものであり(ibid. : 67)、こうしたプランテーション経済の発展によって、地域、民族、職業によるアソシアシオンが生じ、政党もまたその一つとして捉えられる(ibid. : 68)。

つまり、プランテーション経済を軸として、「地元民」と「移住民」という社会的カテゴリーが形成され、プランテーション経済の利害をめぐる政治の場としてイヴォワール市民社会が構成された。たしかにヨーロッパ人の主導によってプランテーション経済は始まったが、その帰結は住民の単なる「反応」にとどまらなかった(ibid. : 76)。プランテーション経済を軸としてイヴォワール市民社会は、住民たちの経済合理的な開拓と移住、土地と労働力をめぐる主体的な闘争の結果として立ち現われたのである(ibid. : 76)。これが近代国民国家であるコートディヴォワールを対象とした新たな歴史人類学であった。

真島が指摘するように、ここには「1980年代以後の人類学が新たな民族誌的主体の必要に迫られ見いだした方法論的ツールのひとつである」「アフリカの主体の顕揚という物語」(真島 2007: 310)をみいだすことができる。さらに、ショヴォーとドゾンのいうところの市

民社会がプランテーション経済を動かす経済合理的な主体によって構成されていること (ibid.: 311) もまたみてとれるだろう。こうした「アフリカの主体の顕揚」や経済合理的な主体は、低開発の状況をうみだす非合理的な諸制度に受動的に従うアフリカ人像を浮かび上がらせた従属理論に対する反発という点で、1980年代以降のアフリカを対象とする政治学や経済(史)学のなかに共通してみられるものとなった<sup>14</sup>。特に、フーコー、ドゥルーズ、ド・セルトーなどの理論を組み合わせ、ショヴォーとドゾンの上述の研究と並行して展開された、バヤールの議論は、他領域を巻き込み統合するように展開していった<sup>15</sup>。

広範な政治理論をレビューした1976年の段階で、バヤールは従属理論などの既存の政治理論に対する乗り越えを企図しており (Bayart 1976)、そのオルタナティブとして提示されたのが、1981年にバヤールらの主導によって創刊された『アフリカ政治』誌の第1号に掲載された「黒アフリカにおける下からの政治」 (Bayart 1981) である。ここでいう「下からの政治」とは、「重要ではない」とみなされている「社会的な実践」である (ibid.: 53)。たとえば、プランテーションによるベテの社会の変容を扱った論文において、新たな耕作法の導入が「算段(un calcul)と社会・経済的な実践の産物」であること (Dozon 1970b: 16) などが例として引き合いに出されている (Bayart 1981: 59)。このような「下からの政治」とは、ド・セルトーのというような歴史や状況に応じてなされる戦術であり、フーコーのこのようなミクロな権力の作動するものとして展開される (ibid.: 61-64)。

このような「下からの政治」は、市民社会や国家を対象とするようになるだろう。国家と社会とのあいだのコンフリクトを含む両義的で複雑な動態的關係として構想される市民社会 (Bayart 1983: 99) はまさに、「下からの政治」が繰り広げられる場となった。さらに、国家そのものがこのような市民社会にいわば包摂されるかのように論じられる。すなわち、ポストコロニアルのサハラ以南アフリカの国家は、種々の人間関係のリゾーム(根)の絡み合いとして構成され、国家に蓄積された富をめぐって、リゾームに埋め込まれた様々なアクターが戦術を展開するリゾーム国家であるとされる (Bayart 1989)。

---

<sup>14</sup> このことの背景には、1980年代以降の構造調整と1990年代以降の政治的自由化とグローバル化、そのことと並行した学際研究の称揚と学問そのもののグローバル化(英語化)という、現代史と学説史の入り組んだ歴史があるだろう。しかし、これについては、別の機会に論じることとしたい。

<sup>15</sup> 以下では、近年の経済史学の想定する主体とバヤールの理論との類似性については言及できなかったが、アフリカの経済史学を専門とするエリスとバヤールの共著論文 (Bayart and Ellis 2000) にみられるように、従属理論への批判とグローバルな経済との接合におけるアフリカの人びとの主体的な領有という志向性は、1980年代以降の西アフリカの(開発)経済(史)研究とゆるやかに共有されている。

バヤールの議論は主要な著作の英訳とともに 1980 年代から始まり 1990 年代以降に急増するアフリカ市民社会論とアフリカ国家論の主要な一角を構成するようになった<sup>16</sup>。こうした市民社会論と国家論の隆盛と並行して、1990 年代以降、バヤールの「下からの政治」の理論はアフリカのいわゆる妖術の近代性の主要な論者(Geschiere 1995; Comaroff and Comaroff 1999; Moore and Sanders 2001)によって援用されて論じられるようになる。そこで論じられることは、植民地統治以降の延長線上にあるポストコロニアル状況のなかでのミクロな政治にあらわれる妖術であり、そのような状況と妖術を生じさせるような、それぞれの地域ごとの複数の近代性が論じられている。

妖術研究のほかに、アフリカの宗教研究のなかでバヤールの議論と親和性が高かったのは、西アフリカのイスラーム(史)研究であった。植民地統治期に勢力を拡張し、大きな社会的勢力となっていたセネガルのスーフィー教団の研究で知られるクロン(Coulon 1981)やクルイズ＝オブライアン(Cruise O'Brien 1971)は早くからバヤールに言及されている(たとえば、Bayart 1983: 101, 105, 109)。実際のところ、『アフリカ政治』誌が創刊された 1981 年の第 4 号にクロンらの編集によるイスラーム特集が組まれ、クルイズ＝オブライアンもスーフィー教団と政治についての論考(Cruise O'Brien 1981)を寄せている。セネガルでは、植民地統治期にスーフィー教団を統治のための基礎的な単位として利用してきたため、スーフィー教団はまさに国家と社会とのあいだのコンフリクトを含む両義的で複雑な動態的關係を体現するものとして理解されたのである。

そうしたなかで、1980 年代には政治学から西アフリカのイスラーム研究への接近がみられた。その代表格がオタイェクである。オタイェクはリビアのアフリカ外交についての論文(Otayek 1981)を出発点として、1984 年にナイジェリアとブルキナファソのイスラームの「政治」を論じた論文(Otayek 1984a, b)から本格的にイスラーム改革主義運動の研究を展開していった。これらの論文は基本的に事例報告の域をでていないが、重要な点は 1980 年代半ばに西アフリカのイスラームが単独で政治学の対象となった、ということである。

1993 年には、オタイェクはサハラ以南アフリカにおけるイスラーム改革主義運動をテーマにした論集を編んでいる(Otayek 1993a)。この論集の序論では、イスラーム改革主義運動はアラブ化(arabisation)として把握され、アラブ化によって生じる国際政治と国内の広義

---

<sup>16</sup> アフリカ国家論についてのレビューは川端 2006、特にバヤールとメダールの国家論については加茂 2006、バヤールの「下からの政治」については岩田 2006、アフリカ市民社会論については遠藤 2000 をそれぞれ参照。

の政治、そして、イスラームの普遍主義と西アフリカの地域的なイスラームとのあいだのアイデンティティ・ポリティクスがとりあげられている。後者では、アイデンティ・ポリティクスを論じるアムセルの著作(Amselle 1990)が参照されている(Otayek 1993a: 15)。この地点で政治学と人類学は同じ対象と同じ用語で説明するようになったのである。

そして、オタイェクの最初の論集が出版された同年の1993年に、バヤールの編集による論集『黒アフリカにおける近代と宗教』(Bayart 1993)が出版された。この論集では3本の論文においてイスラーム改革主義運動が扱われ、ブルキナファソのイスラーム改革主義運動を対象としたオタイェクの論文(Otayek 1993b)もそこに含まれている。1980年代以降、西アフリカ諸国で社会的な存在感を強めていったイスラーム改革主義運動もまた、バヤールのいう市民社会の格好の対象であったといえよう。

こうした理論動向は西アフリカ内陸のイスラームを対象とした歴史人類学と接続するようになる。同時代のアフリカ政治学の理論動向に直接的には言及していないものの、仏領西アフリカのスーフィー教団とイスラーム改革主義運動の歴史を、公的領域としての「イスラームの領域」(Islamic sphere)の形成としてまとめた論文(Launay and Soares 1999)が発表されると、これ以降、この論文を前提とした西アフリカのイスラームと政治、公共性が論じられるようになった。バヤールの理論との関係でいえば、オタイェクとソアレスの編集による『アフリカにおけるイスラームとムスリム政治』(Otayek and Soares 2007)において明確にバヤールの議論に言及されるようになっていく。つまり、ここでいう「ムスリム政治」とは、日常の諸活動の「下からの政治」であるとされるのである(ibid.: 1)。

1980年代以降の領域と対象を越えて目まぐるしく展開する歴史人類学の動向の全体を捉えることは容易ではない。一方で、時代と地域と対象を異にする種々の研究が似通った理論のなかで展開されていることはいなめないだろう。時代を経るごとに各論文の文献目録は重々しくなっていくが、既視感を禁じえない。本節で言及した諸研究におおまかに共通する理論上の立場は、以下の3点にまとめられる。

第一に、歴史と政治経済への着目はほぼ前提とされている。一方で、ほとんどの研究において、経済についての具体的な検討はなされていない。また、「下からの政治」に特徴的なように、広義の政治を扱っても、具体的な制度が記述、検討されることもほとんどないといっていよい<sup>17</sup>。

---

<sup>17</sup> そもそも、バヤールの議論は国家の制度的な側面以外に焦点をあてる試みであった。政治学では、バヤールが制度的側面をほとんど考察していないという批判がなされている(加

第二に、独自の戦術／戦略を有した複数のアクター／エージェンシーによる競合が対象とされている。これは何らかのシステムに従属する個人／集団という想定へのアンチテーゼ——直接的には、多くの場合、初期抵抗論、従属理論、世界システム論へのアンチテーゼ——として導入された視角である。ただし、複数のアクター／エージェンシーによる競合という想定は、往々にして、その想定 of 都合上、ネットワークと政治空間のどちらか、あるいは両者の記述／分析に帰結するという点は指摘する必要がある。

アクター／エージェンシーという概念は特定の集団に還元されないものであるため、論理的に、複数の集団を繋ぎ合わせるネットワークの想定が要請される。他方で、競合はそれ自体が動態であり、政治であるため、何らかの場でなされる必要がある<sup>18</sup>。市民社会概念が広く論じられたことにはさまざまな要因が考えられるが、理論的には、競合を対象としたため、競合が生じる場として、市民社会というアリーナを仮構することが要請されたものと考えられる。

もっとも、筆者も、独自の戦術／戦略を有した複数のアクター／エージェンシーによる競合という記述のあり方をすべて排除すべきであると主張しているわけではない。本稿においても、これに類するような論述を行なっている。しかし、このような競合のみが研究の対象となる必要はないということは強調しておきたい。特に、政治が動態と同義になる——社会の外部に政治が想定される——というバランディエ(Balandier 1967)以来の理論上の難点は克服されるべきであろう。政治はシュミット(1970[1932])のいうような友・敵関係を構成する原理としても捉えうる。また、政治組織を構成する具体的な制度についても検討・分析が必要とされるだろう。

第三に、伝統と近代は対置されず、両者は混淆したものとして捉えられている。この立場の極端なケースは複数の近代を想定するようになる(たとえば、Comaroff and Comaroff 1997)。複数の近代という想定は極端なものではあるが、近代とローカルな伝統が混淆したものであり、ローカルな歴史のなかで近代が捉えられる場合、そこでいう近代とはヨーロ

---

茂 2006: 92)。

<sup>18</sup> 純粹に理論的にいえば、以下のようなになる。最小限の A と B の競合を想定する。競合は時間軸上の変化として記述される。A と B はそれぞれの戦術が異なるため、A と B のそれぞれの変化を記述する 2 つの時間軸が必要とされる。A と B の 2 つの時間軸がそれぞれ独自に展開するため、この 2 つの並行する時間軸は共通の土俵となる 1 つの空間上で展開されなければならない。(特定の制度／地域であれ、理論的に想定されたものであれ)共通の土俵となる空間が記述には必要とされる。なお、複数の主体／アクター／エージェンシーが相互に関係した変化を論じる場合も同様である。

ッパにおける近代とは異なったものが想定される。しかし、クーパーが指摘するように、複数の近代が西洋の近代と異なるのであれば、なぜ近代と呼ばれなくてはならないのか不明確となる(Cooper 2005: 114)。さらに、イスラームの近代などのようにパッケージ化する考え方には、特定の人びとに時代を超越した本質を付与する傾向がみられることもしてき得るだろう(ibid.: 114)。

他方で、クーパーの示す代替案もそれほど魅力的とはいえない。クーパーは、近代のより明確な概念の定義を行うのではなく、近代という語によって何が語られてきたのかを分析すべきであるとされるのである(ibid.: 115)。つまり、近代とは、主張形成概念(claim-making concept)であるとされ、近代という語の用いられ方を主題とするべきであるとする(ibid.: 115)。言説研究へと誘導するクーパーの論の運びは、彼自身によって主導されている、1990年代以降の西アフリカを含む植民地史研究のなかに位置づけられるだろう。最後に、この潮流を批判的に検討し、先行研究の問題点と本稿における近代の含意について述べる。

#### 1-6. フーコーの植民地史研究(1990年代以降)

1990年代以降、「帝國的展開」とも称される(Burton 2003)、フーコーに影響を受けた植民地史研究が流行する<sup>19</sup>。なお、ここで言及する研究は基本的に歴史学者によるものであるが、これらの研究は「近代性の人類学」としてまとめられる人類学の議論と重なり合っている<sup>20</sup>。その意味においては、以下に検討する研究も歴史人類学として捉えられる。

1990年代以降の植民地史研究を一定程度方向づけたのは、蘭領東インドを対象とした歴史学者のストーラーと仏領西アフリカを対象とした歴史学者のクーパーによる論集『帝国の緊張関係』(Cooper and Stoler 1997)である。ストーラーが目指したことは、「フーコーを植民地において読むという試み」(ストーラー2010[2003]: 28)であり、具体的には、(1)支配する側も一枚岩で捉えないこと(Cooper and Stoler 1997: 6, 34-35)、(2)「人種」、「部族」、ジェンダーの分類上のカテゴリーがいかに構築されたのかを捉えること(ibid.: 11, 24-27)、

---

<sup>19</sup> この研究動向とそれ以前の研究との連続性については、すでに多くのレビュー論文が書かれている(たとえば、Cooper 2002; Wilder 2003a; Mann 2005; Conklin 2008; Schaub: 2008; Gagné 2012)。ここではその内容を繰り返さない。

<sup>20</sup> 『近代性の人類学: フーコー、統治性、生活政治』(Anthropologies of Modernity: Foucault, Governmentality and Life Politics)と題されたリーディングス(Inda 2005a)とその序論(Inda 2005b)を参照。

(3)植民地と宗主国を一体とした帝国として捉えること(ibid.: 22-24, 28-32)、である。

その試みを全面的に展開したストーラーの『肉体の知識と帝国の権力』(ストーラー2010)を検討していこう。この著作の主要な問いは、「いかに頻繁に政治的なものと私的なものが結びついているかを明らかにし、私的なものと公的なものがどのように作りだされるかをつきとめ、どのような愛情が植民地において文化的逸脱と認められたのか…。子育てと植民地権力、育ての親と文化的境界、使用人と感情、是認されないセックスと孤児と人種、こうした結びつきが国家の中心的関心事となり、いかに植民地政策の中核に位置しているのか」(ibid.: 11)である。具体的には、「ヨーロッパ人」という法的なカテゴリーの境界には揺らぎがあり、「ヨーロッパ人」が必ずしも「支配する者」ではなかったこと(ibid.: chp. 2)、白人女性と有色男性とのあいだの性的関係は禁止され、その逆は奨励されていたが、20世紀初頭には、合理化された植民地支配、ブルジョワの体面と道徳、夫に対するヨーロッパ人女性の保護観察能力の向上によって、抑制されることになったこと(ibid.: chp. 3)、混血性が優生学的な知識と相まって恐怖の対象となると同時に混血児が無国籍の破壊分子としてみられていたこと(ibid.: chp. 4)、19世紀後半の蘭領東インドの児童福祉が、ヨーロッパにおける保育所の設立の運動と思想と連動して動いており、使用人の人種と言語教育が論争の対象となっていたこと(ibid.: chp. 5)を論じている。つまり、ストーラー自身が書いているように、これらはフーコーの『性の歴史』と『社会は防衛しなければならない』(フーコー2007a[1997])における人種主義についての議論を応用し、19世紀から20世紀初頭の蘭領東インドと同時代のヨーロッパにおける言説を対象にして行ったものといえる。

ストーラーは、優生学、人種主義、児童福祉という点に焦点をあて、「ヨーロッパ人」といった社会的なカテゴリーがいかに形成されていたのかという問題について、宗主国と植民地を一体として捉え、「ヨーロッパ人」という社会的なカテゴリーがその外延において揺らぎがあったという点で、植民者を一枚岩として捉えない視座をたしかに提供しているとはいえるだろう。しかし、この種の議論が、宗主国の歴史研究に貢献することはあっても、植民地の歴史研究に、在地の歴史の理解に、どれほどまで新たな見識をもたらしているといえるのだろうか。叙述と分析の対象が植民者と、植民者と密接に関連することがあった在地の人びとに限定されてしまっているのではないだろうか。

実際のところ、仏領西アフリカ史研究において、「帝國的展開」のもとに展開された研究



の大半は、宗主国フランスのなかの西アフリカを問題としている<sup>21</sup>。これらの研究のなかで最も頻繁に研究の対象となったのは、仏領西アフリカの村々から徴兵され、第一次世界大戦、第二次世界大戦、インドシナ戦争を戦った「セネガル歩兵」である(たとえば、Zehfuss 2005; Mann 2006; Lunn 2009; Ginio 2010; 平野 2014)。これは、「セネガル狙撃兵」が「アフリカとフランスを繋ぐリンク」(Klein 2007)——クレインは肯定的な意味合いで指摘していることだが——であったことに拠るだろう。つまり、「セネガル歩兵」は「帝国」としてのフランスの軍隊に組み込まれ、「帝国」内を行き来し、フランス人と密接に関連することがあった在地の人びとであった。穿った見方とすれば、「セネガル歩兵」という対象そのものが植民地と宗主国を一体とした「帝国」のなかに明示的に埋め込まれ、種々の行政官、政治家、軍人、小説家などによる錯綜する言説の対象であり、かつ「セネガル歩兵」というカテゴリーそのものが歴史的・政治的に構築された人種主義を前提としていることから、まさに「帝国の緊張関係」を表現するために適した対象であった。多くの研究が「セネガル歩兵」をめぐる表象と言説を対象にし(たとえば、Zehfuss 2005; Lunn 2009; Ginio 2010; 平野 2014)、実際の内実について議論したものは、仏領スーダン(現在のマリ)中部のサンの「セネガル歩兵」を扱ったマン(Mann 2006)のモノグラフが例外となっている。

マンは、「セネガル歩兵」の社会的な立ち位置の歴史的変遷と、「セネガル歩兵」に代表される「相互義務」の言説の双方を同時に論じている。マンによれば、1950年以前の「セネガル歩兵」のほとんどが戦士、奴隷、外部者の息子であったが、彼らは軍役からの帰還後、衛兵、事務員、通訳といった行政の仕事を得ることになった。第二次世界大戦後、退役軍人は植民地行政官にとっては潜在的脅威として認識された一方で、独立運動を主導した政治家にとっても退役軍人として年金を取得する植民地行政側の勢力として捉えられた。そうしたなかで、退役軍人たちは自らの立場を守るために、それぞれの政治的判断を下していった。他方でマンは、植民地統治以前の主人と奴隷のパトロネージの関係に、「文明化の使命」を前提とする「相互義務」の言説を重ね合わせている。すなわち、植民地の臣民は「セネガル歩兵」としてフランスに奉仕する義務を果たし、その義務に対して、フランスは「文明化」させる——市民権、年金、平等を付与する——義務を負うという言説があり、この言説が退役軍人を両義的な——宗主国に対する年金の支給要求といった権利主張

---

<sup>21</sup> Wilder 2003aに挙げられている文献のなかで直接的に西アフリカを対象としている研究が皆無であることは注目すべき点である。あくまでもフランスのナショナル・ヒストリーをどのように相対化するかというフランスの近現代史研究の問題として展開されている。その典型としては、『植民地共和国フランス』(バンセルら 2011[2003])が挙げられる。

が、宗主国からの独立の立場からすると、宗主国・植民地の関係をあたかも維持させるかのよう映るという——立ち位置におくということ、そして、このような言説が 1996 年のパリでの旧仏領アフリカ植民地出身の「不法滞在者」による教会占拠事件で再燃していたことを指摘している。支配と被支配という単純な図式は融解し、「セネガル歩兵」のいわば社会史とそれをめぐる言説研究は結合され、フランスと仏領スーダンを一体として捉える歴史が模範的に示されているといえる。

他方で、マンは「セネガル歩兵」という社会的なカテゴリーがいかに構築されたかという論点をすすめ、その社会的なカテゴリーに帰属するといった政治的な意思表示がいかなる意味をもつのか——ある社会的なカテゴリーについての言説を付随する政治性——を論じるようになった<sup>22</sup>。しかし、このような研究の方向性は 3 つの問題を抱えている。

第一に、帝国という設定は、宗主国と植民地の双方を同時に捉えるという点で分析上の長所をもっているが、宗主国との関連によって(しか)植民地を捉えられないという点での短所をもっている。仏領西アフリカを対象とした帝国の研究とは、あくまでも帝国としてのフランスの研究であって、西アフリカの研究ではない。

第二に、結局のところ、帝国なるものが一体どのようなものであるのか——たとえば、具体的な制度や、その制度を成り立たせている資源の流れ——が正面から論じられていない。社会的なカテゴリーとその言説に拘泥することで、理論的な構築物としての帝国を論じるあまり、実体としての植民地への関心が妨げられている。近年、「帝國的展開」という研究動向とは離れて、小川は第一次世界大戦の「セネガル歩兵」とその徴兵について仏領西アフリカ植民地出身の政治家とオランダ出身の植民地行政官の 2 人に焦点をあてた歴史を提示しているが、その 2 人を中心とした第一部と第三部に加えて、第二部を正当にも「西アフリカ植民地とは何だったのか」として論じている(小川 2015)。「セネガル歩兵」を論じるには、制度とその内部での資源配分といった実体としての植民地統治を論じることが不可避的である。こうした問題意識は、むしろ、古典的な研究において、よくみられるもの

---

<sup>22</sup> 「[クーパーやストーラーなどによる研究が解き明かしたような]帝国の実践に本質的なこれらの[臣民という]カテゴリーを創造し、定義し、調整する大半の試みは、マリのようなポストコロニアルの国家(nation)とポスト帝國的なフランスの創造にとってそれぞれ等しく極めて重要なものであった。実際、その意味では、こうした試みは植民地主義がこれらの二つの近代国家を「つくった」こと以上のものである。とはいえ、歴史学者によって詳細にわたって分析される帝國的な文化は…政治的に帰属すること、あるいは権利を主張することといったポストコロニアルな手段を説明したり、あるいは意味内容を付与することには成功していなかった」(Mann 2006: 8)。

であった(Cohen 1971; Suret-Canal 1972; Echenberg 1991)。これらの研究は仏領西アフリカを単位とした大枠を論じており、いまだ広大に整理し検討すべき課題が残されている。たしかに、古典的な研究には「帝國的展開」の論者が主張していたように、支配する側とされる側を厳然とわけていた。しかし、そうであるならば、求められていることは、実体として植民地統治がいかなるものであったのかという問いを理論的に洗練させることであろう。

第三に、「フーコーを植民地において読むという試み」を統治によって構成された社会的なカテゴリーについての研究に限定してしまっている。フーコーの著作を読めば、社会的なカテゴリーのみを主題としているわけではないことが理解される。

たとえば、17世紀から18世紀にかけて西ヨーロッパで漸次的に生じた、規律・訓練を共通してもつ刑務所・学校・軍隊・病院・工場(フーコー1977[1975]: 144, 146, 226-227)とは、仏領西アフリカにおいては、まさに植民地行政がこれらを一つのセットとして西アフリカに導入したものである。さらに、フーコーによれば、これらの諸制度の形成は資本主義経済の生成と不可分に結びついたものである<sup>23</sup>。そうであるとするのであれば、「規律・訓練的な方式」と相互に結びついているとされる「生産装置の技術論上の変容、労働の分業」(ibid.: 221)が存在しない地域に、刑務所・学校・軍隊・病院・工場を移植しようとする試みとはいかなるものであったのだろうか。あるいは、西ヨーロッパの近代史において刑務所と賃金労働が「歴史的な双子」と表現しうるのであれば(Foucault 2013: 72)、賃金労働の存在しなかった地域で、植民地行政が奴隷制を廃止させ、強制労働を導入したことと刑務所を導入したことは、どのように捉えられるのであろうか。

フーコーのいう統治性もまた、別様に捉えられるだろう。「人口を主要な標的とし、主要

---

<sup>23</sup> 「西洋の経済的な離陸上昇が、資本の蓄積を可能にしたさまざまな方式とともに始まったとすれば、伝統的で祭式的で暴力的で費用のかかる権力形態、しかもやがて通用しなくなって、服従強制の巧妙で計画的な一つの技術論全体によってとって替わられたこの権力形態にたいする政治的な離陸上昇を可能にしたのが、人々の蓄積を管理するためのもろもろの方法だと、多分言ってよいだろう。実際、この二つの過程、人々の蓄積および資本の蓄積は分離しえないのであって、人々を保有すると同時に活用する性能のある生産装置の増加がもしも起こらなければ、人々の蓄積の問題の解決は不可能だったろうし、逆に、人々の累積的な多様性を役立たせる諸技術こそが、資本の蓄積の動きを速めるのである。より一般的でない或る水準について言うと、生産装置の技術論上の変容、労働の分業、規律・訓練的な方式の磨きあげは、相互にきわめて緊密な関連の総体を保ってきた」(フーコー 1977: 221)。ここではフーコーはマルクスの『資本論』を引用している。なお、フーコーの解釈として、『言葉と物』と『監獄の誕生』が資本主義の起源を探るという点で一貫していることの指摘は小泉(2009)を参照。

な知の形式として政治経済学を、主な技術的道具として治安装置を持った、複雑ではあるが固有なこの権力形式」(フーコー2006a[1978]: 271)を指す統治性は、少なくとも、仏領西アフリカにまったく同じものがあつたと考えすることはできない。たとえば、本稿 6 章で述べるように、オート・ヴォルタ植民地における人口とは、官吏の対象というよりも、むしろ、推定される人口から導き出される人頭税の徴集量の設定のための指標であつた。フーコーの想定する統治性と仏領西アフリカにおける統治性が異なるのであれば、刑務所・学校・軍隊・病院・工場が植民地行政のなかでいかに結合されていたのかを問わなければならないだろう。

### 1-7. 先行研究の問題点と本稿における近代

およそ 100 年にわたる西アフリカ内陸を対象とした歴史人類学の先行研究をおおまかに辿ってきた。網羅的というには程遠いが、主要な研究と理論についてはふれることができたとはいえるだろう。これらを踏まえて、1980 年代以降の研究に共通する問題点を指摘し、本稿における近代が何を含意するのかを述べる。

1980 年代以降の研究に通底する最大の問題は、ほとんどの研究において、実質的に、近代と植民地統治に由来する変容を同一視している点にある。たしかに、16 世紀以降の大西洋奴隷貿易と連動して西アフリカ内陸に大きな政治経済的な変容が生じたことは——かなり素朴に論じられていたとはいえ、すでにシュレ＝カナール(1987[1958])が指摘しているように——西アフリカ史研究の常識となっている<sup>24</sup>。その意味では、近代の資本主義経済の拡張の歴史と連動して、西アフリカ内陸の歴史が把握されているとはいえるだろう。

しかし、市民社会や近代性を論じる近年の研究がそうであるように、植民地統治以前の変容とそれ以降の変容は連続したものとして捉えられていない。植民地統治以前の歴史により過敏であつたショヴォーとドゾン(Chauveau et Dozon 1985)でさえ、そのコートディヴォワール史の再構成において、植民地統治以前は、ほとんどゼロ・ポイントとして把握されている。

もっとも、近年の経済史研究には、このことの例外があることは確認しておかなければならないだろう。たとえば、19 世紀のゴールド・コーストにおける奴隷貿易の非合法化と

---

<sup>24</sup> たとえば、『近代アフリカの歴史』(Reid 2012[2009])という著作は地理と民族を概観した後、大西洋奴隷貿易からアフリカの近代史を叙述している。ただし、非常に遺憾なことに、版を重ねているこの著作には近代とはいかなるものであるかについての考察が全くなされていない。

それに伴うパーム油の生産の急激な拡大が、奴隷の交易を可能にしていた内陸の商人や運搬者たちのネットワークに支えられて生じたことを論じた研究は(たとえば、Lynn 2002; Austin 2009, 2014a, 2014b)、植民地統治以前からの変容が植民地統治以降に加速するといった見方を示している<sup>25</sup>。こうした見方は、植民地統治期にのみ焦点をあて、植民地統治以前の社会をゼロ・ポイントとして想定する歴史観を相対化している。

たしかに征服と植民地統治によって、西アフリカ内陸の内在的な発展の多くは失われることになった。しかし、本稿で具体的に論じるように、その内在的な発展のすべてが潰れたとはいえないだろう。つまり、極めて単純なことではあるが、植民地統治以前の 19 世紀においても、それ以前の時代からの持続と変容の 2 つの側面があり、20 世紀初頭以降にはそれらに加えて植民地統治に由来する変容が同時に生じていた。こうしたことから本稿では、19 世紀にみられる持続と変容が、20 世紀初頭以降の植民地統治に由来する変容に合流したものとして近代を捉える<sup>26</sup>。

そして、このような近代の把握の仕方は、複数の近代とそれに対する批判の難点を克服するだろう。そもそも、ヨーロッパに由来する単一の近代と非ヨーロッパを含む複数の近代の二者択一を迫るようなクーパーの論法(Cooper 2005: 114-115)には明らかに議論の飛躍がある。クーパーの論法は、具体的な事象の検討から離れて、暗黙の裡に、西欧哲学史のなかで繰り返されてきた普遍と特殊についての一般論にすりかえ、非ヨーロッパにおける近代を論じることが普遍と特殊のアポリアに陥るかのように議論を収斂させている。このような哲学の一般論ではなく、より実体的に近代を論じる必要がある。実際のところ、論理的には、それほど難しい問題ではない。ヨーロッパの近代と(本稿の対象とする)ムブン川湾曲部の近代がある要素については共有し、その他の要素については共有せず、ある要素については、ヨーロッパの近代と共有するものがあるがゆえに、ムブン川湾曲部の近代は近代と呼びうる。

---

<sup>25</sup> ただし、2000 年代以降に急増した数世紀にまたがる経済史研究は、それほど成果をもたらしているとはいえない。全体としては、新史料が付加されていないため、すでに知られていることの整理と確認にとどまっている。こうした研究には、大西洋奴隷貿易の奴隷の「輸出量」とその後の国別の経済発展の相関を統計学的に分析し、奴隷の「輸出量」と経済発展は消極的な関係にあることを示した研究(Nunn 2008)や 16 世紀から 21 世紀までのアフリカの経済史が土地の豊富さと労働力の希少さによって特徴づけられ、こうした条件のなかで種々の時代と地域の住民によってなされた戦略についてまとめた研究(Austin 2008)などが挙げられる。

<sup>26</sup> したがって、近代とは時期区分としては植民地統治以降に限定される。ここで批判しているのは、時期区分ではなく、植民地統治に由来する変容のみを近代とする立場である。

輸出用換金作物生産のほとんど成功しなかったムブン川湾曲部を含むオート・ヴォルタ植民地において、ヨーロッパの近代と共有する要素とは基本的に行政機構であった。近代教育や賃金労働などは行政機構に付随して生じたものである。行政機構の個別の特徴については——たとえば、役人の絶対的・相対的な人員の多寡などにおいて——宗主国のフランスと植民地においては大きく異なっていた。しかし、治安維持(暴力の独占)と徴税をおこない、全体としてはヒエラルキカルな組織として構成され、大量の文書によって行動基準を定めるという行政機構の全体的な特徴は、宗主国のフランスと植民地において共有されている<sup>27</sup>。

このように具体的な制度に着目し、実体として植民地統治がいかなるものかを明らかにすることで、植民地統治に由来する変容とそれ以前からの変容を峻別して捉えることが可能となる。このようなあり方は、支配者と被支配者を明確に区分するような初期抵抗論への回帰とみなされるのかもしれない。しかし、たとえば、伝統の創造についての議論が、支配者と非支配者の連続性、伝統と近代の混淆を強調するとき、そこで焦点化される事象はすべからず植民地状況の産物となっていないだろうか。あるいは、植民地史研究が、支配者と非支配者の連続性を踏まえて、宗主国と植民地を一体とした帝国という視座に固執した結果、種々のエージェンシーのネットワークが交錯する帝国内でのミクロな権力の競合ばかりが論じられてはいないだろうか。単純なことであるが、20 世紀に生じた変容のすべてを植民地統治に帰さないのであれば、植民地統治によって生じた変容を具体的に特定することで、19 世紀にみられた持続と変容とどのような関係にあるかが具体的に明らかになると考えられる。

このことは別の角度から言い換えられる。すでに述べたように、1990 年代以降、全体としていえば、植民地統治以前の西アフリカ内陸の新史料の発掘はまばらなものとなり<sup>28</sup>、歴史人類学と歴史学は植民地統治期に集中するようになってきている。そのため、こうした

---

<sup>27</sup> なお、ヨーロッパの近代と非ヨーロッパの近代が共有する要素は非ヨーロッパの地域ごとに異なっているだろう。より正確に言えば、ヨーロッパ諸国によって導入され、なおかつそれ以前にその地域には存在しなかった諸要素のうち、ヨーロッパの近代と非ヨーロッパの近代の共有するものをここではとりあげている。

<sup>28</sup> もっとも、これは一般論として述べており、いくつかの例外は存在している。たとえば、Bellagamba et al. 2013 に収録されるいくつかの論文や Reese 2014 に言及されている諸研究では、これまで報告されていなかった、植民地統治以前のアラビア語史料が用いられている。とはいえ、これらがこれまでの歴史研究を大きく覆すものになっているとはいえないだろう。

研究では、植民地統治以前の歴史は基本的に既存の研究の整理に終始し<sup>29</sup>、植民地統治以前の歴史の研究とそれ以降の歴史の研究を同時に扱うような研究はほとんどみられなくなっている<sup>30</sup>。このことは植民地統治以降の研究では史料の相対的な豊富さから主として行政文書が用いられ、植民地統治以前の歴史研究では——豊富なアラビア語史料の有する一部の地域を除いては——主として口頭伝承が用いられるという、依拠する史資料の性質の差異に由来するともいえるだろう。しかし、先に述べたように、植民地統治によって生じた変容を具体的に特定することをひとつの目的とするのであれば、行政文書は格好の分析対象となるだろう。

20 世紀に生じた変容のすべてを植民地統治に由来するものとみなさないのであれば、植民地統治によって生じた変容を具体的に特定したうえで、19 世紀にみられた持続と変容とどのような関係にあるかを具体的に明らかにする必要がある。バランディエが指摘するように、行政文書は植民地状況を明確に体现したものである(Balandier 1950: 77)。植民地統治に由来する変容を特定し、具体的に検討する史料としては行政文書は最適なものといえるだろう。したがって、植民地行政の具体的な制度の検討は口頭伝承によって再構成される歴史とは直接的には重なり合わないが、そのことはそれ自体としては特殊なことではなく、検討上の欠落となるものではない。このような史資料の把握の仕方は、本稿における歴史人類学がどのようなものであるのかを規定する。次節では、対象地域の通史としての先行研究をまとめ、地域設定のあり方と史資料の性質について述べて、特に後者の点から本稿でいう歴史人類学とは何かを明らかにする。

## 2. 通史と地域設定

---

<sup>29</sup> これについては枚挙のいとまがないが、そもそも植民地統治期に焦点をあてているため、本稿の対象とする地域、隣接する地域の近年の研究(たとえば、Saul and Mayor 2001; Fourchard 2001; Soares 2005; Allman and Parker 2005; Mann 2006; Weiss 2008; Hilgers 2009; Iddrisu 2012; Kobo 2012b)において、そのような傾向は容易に看取することができる。

<sup>30</sup> 例外は農村における土地の占有をめぐる歴史研究(Jacob 2007; Lentz 2013)である。西アフリカ内陸において、土地の占有は移住の経緯と深く関連しているため(本稿 1 章及び 2 章)、植民地統治以前の移住の歴史についての検討が不可欠なものとなっている。本稿の対象とするイスラーム史は、こうした土地をめぐる歴史と原理から離れていくように展開していったため、これらの研究とは異なるような議論を組み立てなければならなかった。これらの研究と、真島(2006, 2007)の理論を踏まえた土地の占有をめぐる佐久間による歴史人類学の成果(2013)を、西アフリカ内陸の歴史人類学のなかでどのように位置づけるかについては別稿に譲りたい。

冒頭で述べたように、本稿はブルキナファソに位置するムフン川湾曲部の通史を描くことを目的としている。現在、ブルキナファソというナショナルなレベルでの代表的な通史がないことから、不完全であっても通史を書く必要性があると考えているからである。ブルキナファソというナショナルなレベルでの通史は 4 つあるが、いずれも大きな問題を抱えており、代表的な著作はないといってよい。ここでは、既存の通史の特徴と問題点を指摘し、その問題点を乗り越えるための本稿における地域設定について明らかにする。

## 2-1. 既存のナショナルな通史とその問題点

最も古いナショナルな通史は、オート・ヴォルタ(現、ブルキナファソ)独立直後に出版された『オート・ヴォルタ歴史概要』(Guilhem et Hebert 1961)である。これは 1993 年まで用いられた 120 ページほどの中学生・高校生を対象とした教科書であり、著者のギレムはワガドゥグの師範学校の校長、エベールはボボ・ジュラソ(正確にはトゥシアナ)の中学校教員であった(Kiethega 2003: 50)。特にエベールは植民地期からボボ・ジュラソの口頭伝承の聞き書きをおこなってきた郷土史家であったが、この教科書では約半分がモシ王国の歴史にさかれ、各民族についての短い概観、征服期、植民地史が書かれている。つまり、ほとんどがモシ王国と植民地期の政治史となっている。

2 つ目の通史は、高級官僚を務めたバリマが国立フランス海外領学校に提出した修士論文を本にした『オート・ヴォルタの生成』(Balima 1970)である。この本では、モシ王国と征服期、植民地期が扱われているが、他の民族についてはほとんど触れられていない。1 つ目の教科書も実質的にそのような内容であったが、オート・ヴォルタのナショナル・ヒストリーをモシのナショナル・ヒストリーとして語っている。200 ページほどの分量であるが、100 ページほどは政党、省庁、国会議員の一覧などが参考資料として付則されている。

年代が前後するが、この著者はのちに 400 ページにもなる大著『ブルキナファソの諸民族の伝説と歴史』(Balima 1996a)を書き上げている。これが 3 冊目である。ブルキナファソ全体の歴史を 1 冊にまとめている著作を強いてあげるとすれば、この本になるだろう。植民地統治以前、征服期、植民地期、独立後を対象とし、特に植民地統治以前と征服期ではモシ以外の諸民族についてもページを割いて書きこんでいる。しかし、ほとんどの場合、典拠が示されておらず、記述の厚みも地域や時代によってばらばらになっている。率直に言えば、知り得た事柄を地域と時代ごとにそのまま書き込んである著作である。

上記の 3 冊に共通する点を述べておこう。第一に、基本的に政治史、事件史であった。



第二に、歴史叙述の明確な枠組が設定されていなかった。第三に、モシの歴史が多くを占めていた。第四に、これらはブルキナファソの(正確には出身者ではない)住人による著作であった。最後の点について補足すると、このことはブルキナファソが優秀な歴史研究者を輩出しなかったことを意味しない。フランスの大学で博士号を取得したのち、優れた業績を残した研究者たちは通史ではなく、より限定された主題のなかで歴史研究を進めてきた。その要因を後に述べるが、ブルキナファソの通史を書くことには学術上の困難があり、そのために書かれてこなかったといえる。

4冊目は、ブルキナファソのビリフォルを対象としたフランスの開発人類学者であるサボネ＝ギュヨによる『ブルキナファソにおける国家と諸社会：アフリカの政治についての試論』(Savonnet-Guyot 1986)である。副題に「アフリカの政治についての試論」とあるように、厳密にはブルキナファソの通史の提示を目的としていない著作ではあるが、サンカラによる革命政権誕生までの広義の政治についての歴史をまとめようとしたという点では通史として捉えることもできるだろう。この本では社会構造に焦点をあてて、その社会構造が植民地期、独立後にどのように変容したのかを明らかにしようとしたという点において、これまでに挙げた著作とは異なっている。

この目的のために、サボネ＝ギュヨは全体の半分の分量を割いて、自身が調査したビリフォル、詳細な民族誌があるブワ、モシのヤテング王国の社会構造を説明し、それぞれリネージ体系、村落共同体体系、君主制体系としてまとめている。これらが植民地期の行政体系の導入によって、ヤテング王国は既存の体制が強化され、前者二つではリネージや村落の単位を越えた管区(カントン)長というローカルな権力の集中が生じ、独立後の広義の政治の歪みとなったことを指摘している。全体としての主張そのものは妥当であり、狭義の政治史を脱却したという点では評価できる。しかし、ビリフォル、ブワ、モシのヤテングという対象の選択が恣意的であり、それらの選択に歴史的な必然性はまったくない。また、あくまでも社会構造に焦点が当たっているため、それぞれの対象地域の歴史的な叙述が非常に少なく、それぞれのローカルな歴史と西アフリカ内陸の歴史がどのように接続しているのかという全体像を得ることができない。そもそも、通史を提示することが目的ではないため、このような批判は不当ではあるが、やはり、通史の困難さが露呈しているといえる。

このように、ブルキナファソというナショナルなレベルでの代表的な通史がないことが理解されるだろう。もっとも、このことはブルキナファソの諸民族や諸主題を対象とした

歴史研究がないことを意味しない。著名な研究を挙げれば、モシの代表的な王国についての研究、植民地統治期の歴史人口学的研究、ブルキナファソの征服史研究、1915年から1916年のムブン川湾曲部を中心として展開した住民とフランス軍との戦争についてのモノグラフ、ワガドゥグとボボ・ジュラソの都市史研究、ブルキナファソ南部からガーナ北部にまたがるヴォルタ系諸民族の移住史研究が代表的なものであり、それぞれ高い評価を受けている<sup>31</sup>。つまり、特定の地域や主題の歴史に関しては、一定の研究蓄積があるが、それらを

---

<sup>31</sup> ブルキナファソの歴史研究史は、大まかに四つの時代区分に分けられる。第一期(1900-1930年代)には諸王国の歴史を口頭伝承からまとめた研究がなされた。代表的なものとしては、のちにオート・ヴォルタ植民地となる地域に赴任していた行政官・民族誌家のトクシエ(Tauxier 1912, 1917)、医師のクレメール(Cremer 1924)、モシの王国の口頭伝承を収集したフロベニウス(Frobenius 1986[1911-1925])、カトリック教徒であり、植民地官吏となったモシのデロブソム(Delobsom 1932)、ボボ・ジュラソに教師として赴任したセネガル出身のシレ・バ(Cire-Ba 1930)などがある。これらの研究は基本的に口頭伝承、観察された事実を記述したものであり、年代の安直な特定方法や口頭伝承の相互検証の欠如、ヨーロッパ由来の概念の安易な当てはめといった問題点を含むが、現在では一次史料としての価値をもっている。第二期(1930-1980年代)になると、特定の民族集団、王国についての古典的な民族誌が出現するようになった。オート・ヴォルタ植民地に赴任しており、かつモースに学んだラブレによるロビの民族誌(Labouret 1931)はブルキナファソの民族誌研究だけではなく、フランス民族誌学研究にとっても一つの達成であった。その後、1948年のオート・ヴォルタ植民地再構成後に IFAN のオート・ヴォルタ支部が設立され、その支部の研究員や関連して研究活動を行なった研究者たちから良質な民族誌が数多く出された。具体的には、ボボの結社についての民族誌(Le Moal 1980)、ブワの村落社会についての民族誌(Capron 1973)、親族構造や奴隷制をまとめたサモの民族誌的研究(Heritier 1975)、口頭伝承と社会組織からワイグヤのモシの諸王国についての歴史を再構成した民族誌(Izard 1985)、ワガドゥグのモシ王国の民族誌(Skinner 1989)、口頭伝承と社会組織からテンコドゴのモシ王国についての歴史研究(Kawada 2002)などがある。第三期(1980年代以降)では、特定の民族集団に特化した古典的な民族誌研究を離れて、特定の地域の特定の主題について論じる研究が出現した。代表的なものとしては、ブルキナファソ南部のダガリ、ロビ、ビリフなどの諸民族の伝播の歴史と土地所有の問題を論じてきたドイツのレンズらの研究(Lentz 2013 など)が近年では民族学と歴史学を横断する目覚ましい成果を挙げている。同様に民族学と歴史学を横断する研究としては、ボボの「家」とコンによるボボの征服をまとめた研究(Saul 1998)を基礎として、1915-1916年のムブン川湾曲部で生じたヴォルタ・バニ戦争についてのモノグラフ(Saul and Royer 2001)が提示された。こうした征服の過程を歴史的に裏付ける研究には一定の蓄積があり、ダガリへのフランスの征服の過程をまとめたモノグラフ(Dupprey 1984)やブルキナファソを単位としてフランスの征服を全般を跡付けた歴史研究(Kambou-Ferrand 1993b)が代表的である。正統派の歴史研究としては、征服史研究の他に、ワガドゥグとボボ・ジュラソの植民地期の都市の発展を論じた(Fourchand 2001 など)がある。玉石混交であるが、ブルキナファソの歴史についての二度の国際シンポジウムとその成果をまとめた論集がブルキナファソの政治史から社会史、宗教史に至る広大な領域を扱っている(Massa et Madiéga 1995; Madiéga et Nao 2003a, 2003b)。ブルキナファソの歴史研究のなかで最も研究蓄積があり、精度が高いものは移民に着目した歴史人口学である。ブルキナファソのコートディヴォワールへの移民は植民地期より大規模に生じており、1980年代以降、アフリカの歴史人口学研究を牽引した研究者たちが植民地資料

横断する研究がないといえる。このような現状は、地域設定と史資料のそれぞれの問題に  
拠るものと考えることができる。以下にそれぞれの問題とその乗り越えについて述べる。

## 2-2. 地域設定の問題

ブルキナファソの歴史を叙述するにあたって、問題となることはその地域の設定である  
(Madiaga 2003)。まず、国民国家批判(たとえば、アンダーソン 1997[1983])を経た現在に  
おいて、ナショナルな枠組で素朴に歴史を再構成することはできない。まして、しばしば  
指摘されるように、サハラ以南アフリカの諸国の国境線は植民者の都合によって引かれた  
ものであり、植民地統治以前の空間的な枠組として、現在の国境線を導入することにはま  
ったく根拠がない。こうしたことを踏まえて、マディエガは歴史的に統合された地域とい  
う枠組を提案している(Madiaga 2003)。

しかし、このことも問題を含んでいる。西アフリカ内陸の植民地統治以前の国家、ある  
いは言語、物質文化、民族意識などを指標として、境界を設定することは非常に困難であ  
るからである(たとえば、川田 2004: chp. 2)。経済的な統合もまた、同様である。交易は飛  
び地状のパッチワークのようになっており、全体としての広域の範囲は広いものの、均質  
的、あるいは同心円状に交易圏が広がっているとはいえず、むしろ、交易商人が立ち寄り  
特定の村落や町が点々と散らばっていた(Saul 2004)。そして、政治、文化、経済のいずれ  
の局面で地域的な統一性や統合性を把握するにせよ、どの立場の人びとに着目するのか、  
あるいはどの要素に着目するのかによって、設定される空間の範囲は異なりうる。あるい  
は、西アフリカ内陸の生態上の区分は現在の複数の国家をまたぐような非常に広範なもの  
であり(本稿 1 章)、そのことによって歴史叙述の枠組を与えることはできない。

したがって、通史の対象となるべき空間は、どの要素に着目するか、どの人びとに焦点  
をあてるかによって、異なってくる。また、時代によっても、括られる範囲が変動する。  
そうであるならば、どの要素に着目し、どのような人びとに焦点をあてるのかを明示し、  
対象となる時代や集団に応じて対象となる空間を拡張、場合によっては狭めることが求め  
られるだろう。

実際のところ、国家関係に着目するのであれば、18 世紀から 19 世紀にかけての西アフリ  
カ内陸の広域の政治的な関係は、ニジェール川中流域とヴォルタ川中流域とのあいだにあ

---

を批判的に読み解きながら精度の高い研究を量産している(たとえば、Cordell and Greogry  
1980, 1982; Gervais 1983, 1993b; Gervais and Marcoux 1993)。

る諸国家の関係性とそれらを貫く交易によって規定されていた(本稿 2 章)。他方で、同時代のムブン川湾曲部をズームアップし、そのなかでの政治的な関係をみると、そうした諸国家の関係性は直接的には影響を与えず、むしろ、村落間の同盟関係とそれらの友-敵関係が重要な問題として浮かび上がる(本稿 2 章及び 3 章)。

他方で、植民地統治以降は、オート・ヴォルタ植民地という単位が植民地行政との関係においては重要となる(本稿第 2 部および第 3 部)。すでにみたように、ショヴォーとドゾン  
はコートディヴォワール植民地という行政上の区分のなかでプランテーション経済が成立し、その行政上の区分が実体としての意味をもつことを論じていたが(Chauveau et Dozon 1985)、輸出用換金作物である綿花生産の政策が実質的に破綻し、港湾を有しない内陸のオート・ヴォルタ植民地にあつては、行政機構が農村から通貨を吸い上げ、不均衡な分配をおこなうことで、オート・ヴォルタ植民地という単位に実体的な意味を付与することになった(本稿 5 章)。しかし、ショヴォーとドゾンの論じるコートディヴォワールのように、オート・ヴォルタにおいて単一の市民社会が構成されたとはいえない。ムブン川湾曲部に焦点をあてれば、第二次世界大戦後の政党政治が、ある意味においてはそれ以前のローカルな闘争の延長線上にあったからである(本稿 7 章)。

つまり、植民地統治以前の持続と変容、植民地統治以降の変容を明確に捉えるためには、その対象や時代に応じて、対象とする地域設定を変える必要がある。明確な境界をもつローカルな地域を設定した場合、のちの国家の範囲につながる植民地という単位で作用した変化を捉えられず、設定されたローカルな地域の範囲に時代を越えたある種の本質を見出すことになってしまう。他方で、ショヴォーとドゾンのように、国家のみを人類学の分析の対象とした場合(Chauveau et Dozon 1985)、国家を単位とした変容だけに焦点が当たってしまうだろう。必要とされることは、リジットな地域設定ではなく、分析の対象となる要素に応じた柔軟で緩やかに設定される地域の範囲であり、ローカルな範囲で生じる変容と広域に生じている変容との連続性と非連続性を明らかにすることである。

こうしたことを踏まえて、緩やかに設定されたムブン川湾曲部という地域を中心として、時代や主題ごとに記述をおこなう地域の範囲は変化する。植民地統治以前の歴史を扱った本稿第 1 部では、西アフリカ内陸という広域とムブン川湾曲部というローカルな空間の双方にみられる持続と変容がどのように接合し、あるいは接合しなかったのか、広域に接合する変容がローカルにはどのような意味をもったものとして捉えられるのかが検討される。植民地統治以降の歴史を対象とした本稿第 2 部と第 3 部では、オート・ヴォルタ植民地と

いう行政単位とムブン川湾曲部との双方を分析の対象とし、植民地行政の導入によって生じた変容と、そのこととは関連しつつも、それ以前から継続された変容との関係を明らかにする。地理設定としてのナショナル・ヒストリーの困難はこのようにして解消されるだろう。

### 3. 史資料の認識とその分析手法としての歴史人類学

つぎに、本稿で取り扱う史料についての検討を行う。まず、どのような史料があり、どのような史料にアクセスしたのかを述べる。つぎに、各史料の性質について論じ、それぞれの性質を踏まえた本稿における分析の方法論を示し、それらの方法論を用いることが本稿でいう歴史人類学であることを述べる。

#### 3-1. 史料の概要と一般的な制約

ブルキナファソを対象とした歴史学が固有のナショナル・ヒストリーを書けなかった要因の一つに、フランス植民地統治期の行政文書の分散・散逸が挙げられるだろう。文字史料をベースとする歴史学の研究では、フランス語で書かれた文字史料が基礎的な一次資料となっている。一次資料は、(1)各種の報告・調書・通達・電信などの行政文書、(2)カトリック宣教団による日誌・報告・記事・論文などの史料、(3)ムスリム文化連合の活動記録の史料、(4)行政官民族誌家・教員・民族誌家による報告・論文・民族誌・回想録・伝記的小説の史料に大別できる。本稿ではこれらすべてを駆使して論述を行うが、多くの先行研究と同様に、圧倒的に数量の多い行政文書に依拠している。

1990年代までの行政文書の状況については、すでに報告され、ブルキナファソ特有の問題が指摘されている(Gervais 1993a; Ouedraogo 2003; Sissao 2003)。このことは、植民地の領域区分の歴史と深く関わっている。1900年に現在のブルキナファソの領域でのフランス軍の征服がいったん終了し、この領域は軍管区による統治を経た後、1904年に編成されたオー・セネガル・ニジェール植民地に組み込まれた。その後、オー・セネガル・ニジェール植民地から分割して、オート・ヴォルタ植民地(現、ブルキナファソ)が1919年に編成された。しかし、1933年に隣接する植民地に分割併合され、1947年にかつての領域とほぼ重なるオート・ヴォルタ植民地が再構成され、1960年に独立を果たした。行政文書は植民地行政の実務での使用が主たる目的の文書であったため、1933年に分割併合された際に、隣接する植民地に移管され、現在のマリ、コートディヴォワール、ニジェールの公文書館

に 1946 年以前の行政文書が部分的に保管され、史料が分散してしまっている。また、こうした移管の際に、多くの行政文書が散逸したことは想像に難くない。仏領西アフリカの他の植民地の歴史研究と条件が大きく異なるのは、この点である。

2 つ目のブルキナファソ特有の問題は、仏領西アフリカから独立した他の諸国家と異なっており、2001 年まで国立公文書館がなかったという点である。2000 年以前においては、歴史研究者は、植民地期の行政文書を保管していた各省庁と研究所にアクセスしていた。2001 年にブルキナファソ国立公文書センターが設立されると、ここに各省庁と研究所から移管された(Cissé 2004: 3)。個人からの寄贈も受け付け、2014 年現在も整理作業が進行しており、基本的には保管していた省庁ごとに分類・整理したカタログを新たなカタログが出されている。こうしたことから、これまでアクセスされてこなかった新史料が公開される一方で、2000 年以前に歴史研究者が用いてきた史料——基礎的で情報量の多いと推測される史料——が必ずしも国立公文書センターで見つけることができないという問題点を有している。また、国立公文書センターで現在公開されている史料の大半は、オート・ヴォルタ植民地が再構成された 1947 年以降のものとなっており、一定の限界を有しているといわなければならない。

3 つ目の問題は植民地統治期の行政文書の散逸である。植民地期の行政文書はオート・ヴォルタ植民地という単位のほか、それよりも一段階の下位の行政区分である管区においても作成・保管されており、当時の行政文書を旧管区の拠点となった都市の高等弁務官(l'Haut-Commissariat)事務所が現在、これを引き継いでいる。ボボ・ジュラソ、デドゥグの事務所には史料のカタログがなく、デドゥグでは整理・分類がなされていなかった。こうしたボボ・ジュラソ、デドゥグに残された行政文書には、2000 年代以前に複数の人類学者がアクセスしている。著者はそれぞれの事務所で植民地期の行政文書のすべてに目を通し、断片的な新史料を見つけることができた一方で、先行研究で引用していた史料を見つけることはできなかった。

コートディヴォワール国立公文書館においても、先行研究が用いている一部の史料を見つけることができなかった。コートディヴォワール国立公文書館では、1988 年にオート・ヴォルタ植民地に関連する史料をまとめたカタログが作成されているが、2015 年の筆者による調査では、このカタログに記載されている史料の大半の所在が不明となっていた。フランス国立海外公文書館とこの公文書館に所蔵されているセネガル国立公文書館所蔵史料のマイクロフィルムでは、先行研究が参照している史料にアクセスできないという事態は

生じなかったが、これらの公文書館の所蔵資料においても、植民地期の各種の年次報告に欠番が多々みられる。

まとめると、一般論としていえば、仏領西アフリカから独立した他の諸国と比して、ブルキナファソの行政文書は分散・散逸の度合いが相対的に大きく、通史の困難も基本的にはこのことに求められるだろう。行政文書には、植民地行政の関心による偏向が前提としてあるが、そのことに加え、史料管理の問題から偶発的にアクセスできる史料に大きな偏りがある。ある特定の時代の特定の地域や事柄に関しては、相当数の史料にアクセスすることができるが、その前後の時代や同時代の隣接地域に関する史料がほとんど欠落しているというケースがほとんどである。その結果、包括的な通史を書くには、空白となってしまう時代や地域が生じてしまうのである。こうした史料上の制約から通史を書くことは困難になっている。

たしかにこのような史料の制約は容易に埋められるものではない。とはいえ、聞き取りで得られたデータに加え、これまであまり参照されることのなかった、調書・通達・通信などの断片的な史料、カトリック宣教団の残した種々の史料や元植民地行政官の回想録、ムスリム文化連合の活動記録、植民地行政官や人類学者による民族誌などの参照しうる史料を総動員することによって、多少なりとも、この史料上の制約は補完されるだろう。膨大な史料から叙述される他地域の重厚な通史と比較すれば、本稿で叙述する通史は軽いものとなるであろう。しかし、すでに述べたとおり、そのような通史さえもないという現状を鑑みれば、通史を書くことの意義は明らかである。さらに、こうした多種多様な史資料の読解は、独自の歴史人類学のあり方を要請する。このことを次節で述べ、本稿における歴史人類学の意味を明らかにしよう。

### 3-2. 民族誌としての史料、史料としての民族誌・小説

本稿では、筆者自身の聞き取りによって得られた資料と公文書館等における史料調査によって得られた上述の広範な史料を用いて、ムブン川湾曲部の歴史を再構成する<sup>32</sup>。これら

---

<sup>32</sup> これらの調査は2012年から2016年にかけて断続的に実施され(2012年10月-2013年1月、2013年6月-2014年1月、2015年2月-3月、2016年2月-3月)、ブルキナファソでは計11か月のフィールド調査と史料調査、コートディヴォワール国立公文書館及びフランス国立海外公文書館において計2か月の史料調査を行なった。なお、聞き取りは、ダフィン語、ジュラ語、フランス語を解する調査助手とともにいった。サファネ周辺ではスワロ・セレ、ボボ・ジュラソ周辺ではユースフ・トゥグマがそれぞれ調査助手として通訳を行なった。聞き取りは基本的に筆者のフランス語の質問を通訳を介して行ったが、フランス語

の性質の異なる史資料を取り扱うことについては、方法論について述べておきたい。そして、この方法論こそが、植民地統治以前と植民地統治以降の歴史をつなげる、本稿のいう歴史人類学である。

聞き取りによる資料と文字史料はある意味においては基本的な条件を同じくしている。口頭伝承と文字史料はともに語り手／書き手の解釈を内包したものであり(川田 2001[1976]: 5-6)、テキストであれ、非テキストであれ、「だれが、どこで、だれを対象として、いつ、なにを、どのように、表象しているのか、制作しているのか、そして偶然もふくめてなにゆえ現在にまで伝わってきたのか」という史料批判が必要とされる(福井 2004: 80, 83)。このような基本的な条件と史料批判の前提を踏まえたうえで、本稿で参照する聞き取りによる資料と文字史料は両者の類似と差異に応じて、およそ 3 つにわけられる。すなわち、聞き取りによる資料と文字史料には、その両者が、(1)ほぼ同質なものと捉えうるもの、(2)差異があるものの連続したものとして捉えうるもの、(3)まったく異質なものにわけられる。

(1)ほぼ同質なものと捉えうるものの最たる例は、村の起源譚である。本稿 2 章で論じるように、西アフリカ内陸においては先着原理によって、基本的に、土地の最初の到来者が土地の霊との関係を結び、その子孫が土地の主となり、村の土地の用益権を有するようになっている。したがって、誰が最初にやってきたのかという歴史は、村内において非常に重要な社会的意味をもっており、どの村に行っても、村の起源譚は長いものであれ、極端に短いものであれ、必ず存在していた。サファネやその周辺の村々で筆者は、こうした村の起源譚を多く聞いてまわった。

こうした調査は歴史人類学の研究としては基本的なものである。たとえば、ガーナ北部で調査を行なった歴史人類学者のレンズはこうした村々の起源譚を集中的に収集し、村落社会のモビリティの志向性を読みとっている(Lentz 2013)。あるいは、特定の村や地域の歴史を対象としたブルキナファソのワガドゥグ大学の修士論文にも、自身が聞き取った、いくつかの村の起源譚がとりあげられている(Vinama 1983; Larou 1985; Kan 1986)。

こうした村の起源譚を聞き取り、文書化していたのは、人類学者だけではない。ブルキ

---

を解するインフォーマントとなった人びとの一部とはフランス語で直接インタビューを行なった。なお、本稿のもととなった調査は 2012 年から 2015 年の調査は特別研究員奨励費(2012 年度・2015 年度)、2016 年の調査は総合地球環境学研究所「砂漠化をめぐる風と人と土」プロジェクト(代表・田中樹)の研究費によって可能となった。ここに記して、ここに深く御礼申し上げます。



ナファソ国立公文書センターには、まったく網羅的ではないものの、村長選挙についての報告を記した行政文書が大量に残されている。この村長選挙についての文書は、選挙の立会人、立候補者の氏名、投票結果についての簡潔な報告のほかに、その村において村長の継承がどのようになされていたのかを記述した文書が付属され、多くの場合、その文書に村の起源譚が「〇〇村の歴史」といった表題で記述がなされている。こうした文書の大半は数行程度の内容のものであるが、例外的に A4 用紙 1 枚の半分を埋めるほどのものもあった。筆者の調査の範囲では、こうした文書は独立以後に作成されたものであったが、どのような経緯で、こうした起源譚が村長選挙の報告に付随して書き残されるようになったのかは明らかではない。とはいえ、村長位の継承関係を記録していることを踏まえれば、村内の基本的な政治関係の把握という意図で、選挙の際に、先着者の子孫である土地の主と当時の村長との関係がどのようになっているのかを記録させるようにしたと推測できるだろう。

つまり、村の住民、人類学者、役人の三者はそれぞれやや異なる動機で村の起源譚に価値を見出す一方で、村の住民から語られた起源譚を文書化するという点においては人類学者も役人も同じであるといえる。たしかに、行政文書には、起源譚の語り手が誰であるのか、その語りがどの程度要約されたものであるのかは示されていない。その意味においては人類学者の報告と全く同じものとはいえないが、村内での複数の語りや語り口の詳細を分析の範囲に含めないのであれば、人類学者の民族誌に引用される村の起源譚とほぼ同質ななものとして扱うことができる。

このように口頭伝承の語りの形式にほぼ対応するような文書の形式が存在する例は、ほとんど例外的なものではある。しかし、住民、人類学者、役人の三者が異なる動機で特定の情報に価値を見出し、人類学者と役人が異なる仕方ではほぼ同質なものを文字化するということは他にも挙げられる。たとえば、クルアーン学校の開設申請書類に添付された、申請者のマラブー(ムスリムの学者／宗教職能者)の修学歴についての文書、親族関係や政治的な立場などの記載を含む郡長(カントン長)・村長などの個人調書は、断片化／整理された情報となっているが、本人や周囲の人物からの聞き取りによって人類学者が得る情報と——もちろん、人類学者と役人の書いたもの双方にそれぞれ個別のバイアスがかかるもの——ほぼ同質なものである。ここであげた行政文書は、聞き取りから得られた資料を読み解くときと同様に、関連する情報を相互比較することによって、歴史の再構成に役立つものである。

このようにしてみると、語られたことを文書化したという点において、筆者の聞き取りによって得られた資料、聞き取りをまとめた先行研究の民族誌、行政文書は、同じ地平に位置していることがわかるだろう。つまり、民族誌は史料として、行政文書はある種の民族誌(の断片)として捉えられるのである。

実際のところ、歴史的にみても、行政文書と民族誌は連続的なものであり、過去の民族誌は行政文書のように史料として扱うことのできるものとなっている。西アフリカ内陸の歴史人類学を概観した際に、ドラフォスの『オー・セネガル・ニジェール』(Delafosse 1912a, b, c)が、1904年に植民地行政官によって作成された各管区ごとの「モノグラフィー」や「概要」を統合させたものであったことはすでに指摘したとおりである。

たとえば、筆者は19世紀にムブン川湾曲部で生じたマフムード・カラントオによるジハードについての口頭伝承の聞き取りを行ってきたが、このジハードが展開した地域をカバーする、1904年当時のクリ管区の「モノグラフィー」では、この管区の歴史をまとめた項目には、カラントオのジハードについてのまとめがなされている。もちろん、このなかでの記述のもととなった内容が誰によって語られたのか、植民地行政官による統合や修正がどの程度なされたのかは定かではない。しかし、「モノグラフィー」において書かれている内容が、筆者の聞き取りによって得られた語りとともに、ジハードについての語りとのバリエーションの一つとして捉えられることは確かであろう。

こうした「モノグラフィー」の延長線上に位置づけられるのが、1900年代にオート・ヴォルタ植民地の行政官であったトクシエによる民族誌(Tauxier 1912)である。この民族誌は雑多な内容を含んだものであるが、基本的には民族ごとの人口規模、村落規模、ローカルな権力関係、経済状況、婚資などが記述されている。特に、村落の人口規模や民族ごとの人口規模、物価などや所有する家畜の数量などは、管区ごとに植民地行政官が作成する年次報告にみられるもので、トクシエがこうした年次報告を参照した、あるいは実際に自らそのような年次報告を書いていたことが推測される。そして、この民族誌のなかにも、歴史についての断片的な記述があり、カラントオのジハードについての語りをトクシエが再構成したものが書かれている(Tauxier 1912: 410)。

カラントオのジハードを扱った本稿3章で詳述するが、こうしたジハードについての語りの報告は、その後の歴史研究や民族誌のなかでも、断片的になされている(たとえば、Dupperay 1984: 56-59; Larou 1985: 109-111; Jacob 1997: 293; Saul and Royar 2001: 53-57; Bazero 2004: 60-63)。そのなかでは、直接引用がなされたり、語られた村と年代、

語り手の氏名、場合によっては、語り手の社会的属性が明記されている。この点では、こうした研究が行政文書やトクシエの民族誌とは一線を画すアカデミックなものとなっていることは確かである。しかし、こうした歴史研究や民族誌の記述が、ジハードについての語りを文書化したものとしては行政文書やトクシエの民族誌と同じであり、史料の質が異なるもののジハードについての語りのバリエーションとして捉えられることは明らかである。こうした聞き取りによって得られた資料とほぼ同質な史料の分析は、口頭伝承とその他の史資料の補完によって記述・分析をおこなう歴史人類学とまったく地続きのものである。これらは、主として本稿第1部の2章および3章で扱われ、部分的には第3部の7章と8章にあらわれるだろう。

つぎに、(2)聞き取りによる資料と差異があるものの連続したものとして捉えうる史料としては、特定の事件に関する尋問調書、諜報による報告、カトリック宣教団の日誌、伝記的小説が挙げられる。当事者の直接的な証言が直接引用のかたちで書き残される尋問調書が民族誌のように読みなおされうるのは、アナール学派の歴史人類学の著作として名高い、14世紀の異端審問調書からその時代のフランス農村の生活世界を描き出した『モンタイユー』(ル・ロワ・ラデュリ 1990, 1991[1975])によって雄弁に示されている。当事者の直接的な証言が直接引用によって書かれているという点で、尋問調書、諜報による報告、カトリック宣教団の日誌は、聞き取りによる資料と連続したものとなっている。ル・ロワ・ラデュリの依拠した異端審問調書に比べれば、そこに書かれている証言は圧倒的に断片的で不完全なものであるが、それでも当事者たちからの観点を歴史の再構成に組み込めるという点で、他の行政文書とは異なる重要な位置づけを有している。

もっとも、『モンタイユー』に対するロザルドの執拗な批判によって明らかのように、このような調書において書かれている証言がそのまま事実を反映しているとみなすことは素朴にすぎる(ロザルド 1996[1986]: 143-148)。『モンタイユー』の依拠している異端審問調書が書かれた歴史的な文脈を考慮する必要があるという指摘は(ibid.: 148)、そのまま、本稿の扱うこの種の行政文書についてもあてはまる。これらの文書は、その書き手である植民地行政官、「現地人官吏」、宣教師の認識枠組によって構成されており、このような文書を書き残すこと自体が政治的な行為であった。つまり、こうした史料は、書かれた内容だけではなく、その内容がどのように構成され、何が書かれておらず、なぜ書かれたのかという点も含んで、それ自体が分析の対象となるものである。

このような史料の分析は、必ずしも書き手だけを対象とするものではない。それほど事

例は多くないものの、こうした尋問調書にあらわれる証言には、書き手の意図からすれば、不必要と思われることが書かれているものがある(本稿 6 章 2 節)。そこでなされている証言それ自体が言語遂行的な意味をもち、その証言の内容には証言者の特定の意図を読みとることができる。

さらに、こうした尋問調書において、ほとんどの場合、証言者は現地語から翻訳されてフランス語で記述されている。このことは、支配者と被支配者、現地語とフランス語の双方の世界を行き交う媒介者として活動することになった「現地人官吏」の通訳たちの存在の重要性を浮かび上がらせるだろう<sup>33</sup>。本稿で特に重要となるのは、1920 年代から 1930 年代初頭までオート・ヴォルタ植民地で「現地人官吏」として勤務していたハンパテ・バである。

ハンパテ・バは 1940 年代前半からフランス黒アフリカ研究所の民族学部門に勤務し、1960 年代まで自身の収集した口頭伝承に基づくモノグラフや文明論の著作を書き上げていたが、1973 年に伝記的小説『ワングランの不思議』(バア 1984[1973])を出版し、翌年に黒アフリカ文学大賞を受賞している。文学賞を受賞した、この著作の主人公ワングランもまた 1920 年代にオート・ヴォルタ植民地に勤務していた「現地人官吏」の通訳であった。その後出版された、生い立ちからオート・ヴォルタ植民地勤務時代を描いた二巻本の自伝(Bâ 1992, 1994)とともに、これらの作品は西アフリカ文学の代表的なものとみなされている。

ハンパテ・バの伝記的小説は事実に基づくものと明記されていたにもかかわらず、長らく文学——さらにいえば、口頭伝承の伝統を生かした文学——として読まれてきたが、近年、これらの小説が歴史研究の対象となるようになった。詳細は本稿 6 章に譲るが、2000 年代以降、ハンパテ・バの伝記的小説に書かれた内容と植民地統治期の行政文書とを対照させる、いわば史料批判がなされ、その記述の一部は明確に行政文書と対応することが明らかにされてきている。

ハンパテ・バの伝記的小説においても、そこに書かれている内容がすべて事実を反映していると素朴に捉えることはできない。しかし、小説内で具体的に言及されている年代・地名・人物を手掛かりとして、他の史料との相互参照をすることで、1920 年代から 1930 年代初頭のオート・ヴォルタ植民地の状況を部分的に明らかにすることができる。

---

<sup>33</sup> こうした植民地期の「現地人官吏」や通訳の役割と歴史研究における意義については、Lawrance, B. et al. 2006 を参照。

このような史料は、(1)にまとめられる史料群とは異なって、聞き取りで得られた資料と同列に並べることはできない。(1)にまとめられる史料群は、聞き取りによって得られた資料と書かれた内容とに、ある種の一致を見出せる同型の史資料であった。すなわち、語りの形式の一致(村の起源譚)、情報の形式の一致(師弟関係や親族関係)、対象の一致(ジハードについての伝承)が見出すことができ、そのために、ほとんど同じ土俵で論じることが可能なものであった。

しかし、(2)にまとめられる史料群は、いずれも明確に年月日が特定される過去の出来事<sup>34</sup>についての個別的な証言(の引用)である。本稿の対象とする歴史は 50 年以上遡るものであり、当事者からの聞き取りは行うことができなかった。最も年代の近いイスラーム改革主義運動においても、当事者の子の世代からインタビューを行なうことになった。そのため、年月日が特定される過去の具体的な出来事について、筆者の聞き取りからは得ることはできなかった。こうしたことから、(2)にまとめられる史料群と聞き取りの資料とを同じ土俵で論じることができない。

ここで求められる方法論は、他の史料によって再構成される同時代の状況や、特定の人物や地名についての情報を踏まえて、(2)にまとめられる史料を読み解き、こうした史料に書かれている内容から他の史料の記述に別の光をあてるといふ、史料間の可能な限りの相互参照である。ここでは、ある史料から得られる同時代のコンテキストによって、別の史料のテキストを読み、そのテキストの読解によって、同時代のコンテキストに別の側面を付け加えるといったことがなされる。端的に言えば、それはテキストとコンテキストを共振させることである。

こうしたことは、フィールド調査のなかで発せられた語りというテキストを、調査を通じて身体化された経験や観察、種々の史資料によって構築された広いコンテキストのなかに位置づけ、解釈するという人類学の民族誌記述のある種のあり方(竹沢 2007: 265, 328-329; 2008: 11, 14)と広い意味では通底している。その点において、(2)にまとめられる史料を扱う分析と記述もまた、歴史人類学と呼びうる。たしかに、フィールド調査のなかで発せられる現在の当事者の語りと比べると、(2)の史料における過去の当事者の証言は、大きな制約を負っている。しかし、当事者による文字史料が稀少であるという西アフリカ内陸の固有の条件を踏まえれば、このような隘路から新たな地平をめざすことこそが求め

---

<sup>34</sup> ハンパテ・バの小説では、2-3 年ほど単位で年代の曖昧な記述がみられるが、言及されている出来事は、年月日が特定される過去の出来事である。

られている。このような史料とその分析は、植民地統治以降の歴史を扱った本稿 6 章や、本稿 7 章と本稿 8 章で部分的になされるだろう。

最後に、(3)聞き取りによって得られる資料とはまったく異質な史料を検討する。これらには、各種の統計を含む年次報告書、月間報告、植民地行政官のあいだで交わされた通達や電信、征服にかかわった軍人の回顧録が挙げられる。これらの史料の位置づけと分析の方法論について述べていこう。

各種の報告書、通達・電信、軍人の回顧録は、征服と植民地統治がいかになされたのかを克明に記した史料となっている。これらの史料には植民地支配のイデオロギーが散りばめられているだけではなく、征服のプロセスのなかで、軍人たちがどのようにムブン川湾曲部の社会を捉え、植民地行政官がどのように植民地を把握していたのかが克明に記されている。あるいは、人口、農作物の生産量、輸出入の収支、財政収入と支出などの統計は、植民地行政が具体的に何を基盤とし、どのように運営されていたのかを示している。他方で、通達や電信の発信者と受信者に留意しつつ、これらの史料を大量に詳細に読み込めば、植民地行政官のなかでの意見対立や思惑の違いなどのミクロな実態もまた明らかになる。もちろん、これらの文書においても書かれている内容をそのまま鵜呑みにすることはできないが、行政機構の全体と細部を把握するための史料としては、第一級のものとなっていることは確かである。

これらの文書は基本的に植民地行政の内部やその関係者のなかで流通しており、これらが聞き取りによって得られる資料とはまったく性質が異なるものである。しかし、これらの史料から明らかになる植民地行政の活動が、オート・ヴォルタ植民地の住民たちとまったく無関係ではないこともまた、明白なことである。多くの論者たちが指摘するように、植民地行政の導入によって、西アフリカ内陸の諸社会は大きく変容してきたのである。

しかし、西アフリカ内陸における歴史人類学の先行研究の問題点をまとめた箇所述べてように、20 世紀に生じた変容のすべてを植民地統治に由来するものとみなすことはできない。19 世紀にみられた持続と変容が、20 世紀初頭以降の植民地統治によって生じた変容とどのような関係にあるかを明らかにするためには、植民地統治によって生じた変容を具体的な制度から分析し、特定する必要がある。

若いバランディエがいうように、各種の報告書といった「これらの文書は、多少なりとも正確な観察と統計だけではなく、それぞれの時代に行政が直面していた「問題群」を指し示すものである」(Balandier 1950: 77)。そして、この「問題群」は植民地行政と西アフ

リカ内陸の諸社会とのあいだで生じたものであり、そのことがまさにバランディエのいう植民地状況である。

少なくとも管見の限りでは、これまでの研究のなかで見落とされてきたが、バランディエの植民地状況概念は行政文書に対するこのような新たな理論的な立場と結びついたものであった。この種の行政文書の分析は、(1)の史料の利用にみられるようなオーソドックスな歴史人類学からはかけ離れたものであることは確かである。しかし、バランディエの行った歴史人類学の理論的な拡張を踏まえれば、当地の社会と植民地行政をまったくの乖離した存在として捉えるのではなく、両者が不可分にかかわりあう植民地状況が存在し、その植民地状況を捉える歴史人類学として、上述の史料認識のもとに、(3)の行政文書を扱うことが理解できるのではないだろうか。このような歴史人類学の記述と分析は、主として本稿第2部、部分的には第3部の7章と8章で行う。

ここでまとめた、本稿における歴史人類学の立場に重なり合う研究は、それぞれ個別には挙げることができる<sup>35</sup>。この歴史人類学が、理論的にどのように統合され、人類学の学説史上のどのように位置づけられるのかについては、本稿全体の記述と分析を踏まえたうえで、本稿9章2節で行う。

#### 4. 通史としての統合のための枠組と本稿の構成

これまで論じてきたように、本稿では、性質の異なる史資料とそれに応じた方法論に基づいて分析をおこなう。このような異なる方法論によって分析される個別の内容もまた、異なったものとなっている。これらを通史として統合させるために、導入される全体としての視座が、本稿における近代概念である。すなわち、本稿でいう近代とは、19世紀にみられる持続と変容が、20世紀初頭以降の植民地統治に由来する変容に合流したものであり、

---

<sup>35</sup> 村の起源譚についての史料はかなり特殊な行政文書であるが、(1)で言及した「モノグラフィ」などの利用はブルキナファソを対象とした歴史人類学では非常に一般的である(たとえば、Duperray 1984; Saul and Mayor 2001; Kawada 2002)。(2)については、このような史料そのものを扱う研究は多いが、史料認識の類似したものとしては、真島(2000)が挙げられるだろう。(3)の史料を扱う研究そのものは多く、最も精度の高いものはオート・ヴォルタ植民地を対象にした歴史人口学(特に、Cordell and Greogry 1982; Gervais 1993b; Gervais and Marcoux 1993)があげられ、こうした人口統計が植民地行政によってどのようになされたのかを明らかにした研究(Gervais 1993b, 1998)がある。(3)の史料認識の仕方は、バランディエの植民地状況概念と結びつけた点などで、焦点のあてられる点と表現が異なるものとなったが、インド史をフィールドにした歴史人類学的研究の三瀬(2000, 2002)ですでに示されているものと重なり合うものである。

このような視座に基づいて、本稿全体が構成される。

本稿においては、史資料の多寡とその性質の違いによって、それぞれの章ごとに偏った定性的記述と定量的記述がなされている。そのため、同じ性質の史料を用いた一貫した叙述は望めない。この制約を乗り越えるため、本稿では、それぞれの章ごとになされた分析から再構成される個別的な歴史を、より抽象度の高い、政治、経済、イスラームのそれぞれの領域における持続と変容として記述することで、史資料と方法論の異なる各章の内容を通史として本稿 9 章において統合する。すなわち、本稿では、全体として、西アフリカ内陸における近代を、政治、経済、イスラームのそれぞれの領域における持続と変容、それらの領域間の関係性の変容として把握する<sup>36</sup>。

史資料と方法論の異なる分析と記述を統合するための、政治、経済、イスラームのそれぞれの領域は、人びとの生に集合性を生じさせる活動とその活動のなされる場として、ゆるやかに以下のように定義する。

ここでいう政治の領域とは、友・敵関係を構成する原理であると同時に、狭義の権力によって人びとを結びつける活動とその活動のなされる場である。さらに、ブラザヴィル会議以降は、政党政治という狭義の政治がなされる場が構成されるようになったと本稿では捉える。

経済の領域は、財の生産・流通・交換・分配・消費と、貨幣による交換と貨幣の徴収・分配という、人びとを結びつける活動とその活動のなされる場として定義される。ここでは、市場経済とその他、あるいは貨幣経済とその他という区分は用いないが、植民地統治以降は、行政機構の運営それ自体が独自の経済の領域を生みだしたと本稿では捉えている。

本稿でいうイスラームの領域は、「ムスリムをムスリムとして導く、(特定の歴史を持ち、特定のコンテキストに位置づけられた)制度化された実践」(Asad 1986: 15)によってムスリムを結びつける活動とその活動のなされる場である<sup>37</sup>。ここでいう「制度化」は「慣習化された」と言い換えてもよいだろう。他方で、シンクレティズムと名指されようと、ムスリムであることは非ムスリムではないことの立場をとることである。具体的な内容について

---

<sup>36</sup> このような通史としての統合をおこなうための理論的な枠組みから導かれることであるが、本稿では、特定のコミュニティを歴史を貫く主体としては設定しない。具体的な諸集団は、時代と主題に対応した各章の分析のなかであられるが、通史のなかでの一貫した主体としては記述されない。

<sup>37</sup> このように定義される、本稿におけるイスラームの領域は、ローネイとソアレス(Launay and Soares 1999)とは異なる。なお、彼らのいう「イスラームの領域」概念への本稿の立場からの検討と批判については、本稿 8 章 4 節を参照。



は本稿 3 章に譲るが、植民地統治以前から、ムスリムであることは非ムスリムとの関係のなかで意味づけられてきた。つまり、本稿でいうイスラームの領域は、ムスリムと非ムスリムの関係性によって規定される、ムスリムを結びつける活動とその活動のなされる場とも言い換えられるだろう。

このような理論的枠組を踏まえて、本稿は以下のように構成される。

まず、第 1 部では、19 世紀までの西アフリカ内陸全体とムフン川湾曲部の社会とその歴史をそれぞれ 1 章と 2 章で扱い、それらを踏まえて 19 世紀のムフン川湾曲部で生じたマフムード・カラントオのジハードを 3 章で論じる。

第 2 部では、1890 年代から 1930 年代ごろまでのオート・ヴォルタ植民地を対象として、植民地統治に由来する変容を論じる。4 章では、軍人による探索から征服、植民地統治の確立に至るまでのプロセスを扱い、植民地統治以降の政治の変容を分析する。5 章では、主として植民地行政の各種の報告書にみられる統計を分析し、植民地統治以降の経済の変容を論じ、6 章ではカトリック宣教団の活動に焦点をあてつつ、イスラームを含む宗教の条件が植民地統治のなかでいかに形成されたかを明らかにする。

第 3 部では、1940 年代から 1960 年代のムフン川湾曲部における政治とイスラームを対象として、19 世紀にみられる持続と変容が、20 世紀初頭以降の植民地統治に由来する変容といかに接合し、あるいは接合しなかったのかを論じる。7 章ではブラザヴィル会議以降の政党政治をいかに展開されたのかをオート・ヴォルタ植民地全体の政治闘争とムフン川湾曲部のローカルな闘争とを対照させつつ論じる。8 章ではムフン川湾曲部西部のボボ・ジュラソで生じたイスラーム改革主義運動をボボ・ジュラソのイスラームの展開とともに論じ、第二次世界大戦後のイスラーム改革主義運動が植民地統治とそれ以前のイスラームの展開とどのように関連しているのかを明らかにする。そして、1 章から 8 章までの記述と分析を踏まえて、9 章において、通史としての統合を行ない、これらの研究が示す歴史人類学の方角性を論じ、結論において、全体の簡潔なまとめと本稿の意義を述べる。

## 第 1 部 19 世紀までのムブン川湾曲部における持続と変容：政治・経済・イスラームの新たな複合の萌芽

第 1 部では、19 世紀までのムブン川湾曲部の社会が、どのような特徴を持続的に有し、どのような変容が生じてきたのかを、19 世紀前半にこの地域で生じたジハードを西アフリカ内陸の広域の文脈とムブン川湾曲部のローカルな文脈の双方から位置づけることで明らかにする。

1 章では、西アフリカ内陸を広域に捉え、新石器時代から 19 世紀ごろまでにどのような持続的な特徴をもつ社会が形成されてきたのかを明らかにする。2 章では、より地域を限定し、本稿の対象となるムブン川湾曲部において、19 世紀までの農村社会が、「国家に抗するシステム」としてまとめられる特徴を有する、国家をもたない社会であったことを指摘する。これらを踏まえて、3 章では、19 世紀前半にムブン川湾曲部で生じたマフムード・カラントオのジハードをとりあげ、このジハードが、それ以前とは異なる政治と経済とイスラームの新たな複合を生みだし、「国家に抗するシステム」の閾値を越えつつあったことを示す。このことによって、19 世紀末のフランスによる征服直前のムブン川湾曲部の諸社会にどのような持続と変容がみられるのかを明らかにする。

### 1 章 西アフリカ内陸の農村社会の形成と特徴

まず、本章では、西アフリカ考古学の近年の研究蓄積を整理しつつ、1970 年代までに経済史学、文化人類学によってモデル化された西アフリカ内陸の農村の特徴に若干の修正を加え、19 世紀までのムブン川湾曲部の社会がどのようなものであったのかを明らかにする。

近年の西アフリカ考古学の研究動向を大雑把にまとめると、(1)狩猟採集の変容(紀元前 2 千年紀から 1 千年紀)、(2)農耕と牧畜の段階的発展(紀元前 1 千年紀から紀元 2 千年紀初頭)という 2 つの論点の提示・深化が生じたといえる。これまでは、完新世中期の乾燥化による気候変動、それによる牧畜の導入、農耕の開始、バンツー系農民の移住があったと大雑把に語られてきたが(たとえば、門村 1987; 市川 1997; 竹沢とシセ 2008)、これらがより詳細に検討されるようになってきている。

#### 1-1. 狩猟採集文化の変容(6,000 BC-2,000 BC)

歴史言語学の研究に拠れば、西アフリカ内陸では農耕以前に狩猟採集文化が新たな複合を有するようになったと想定されている。

まず、ニジェール・コンゴ語族では、ウシ、ヤギ、ヤムイモの語彙が共通してみられている(Ehret 1984: 29)。また、「耕す」という動詞も——たとえば、土を掘るといった関連する別の意味であったかもしれないが——共通してみられる(ibid.: 29)。近年の見解では、ヤムイモが栽培されていたかどうかは不明であるが、野生種を長期間にわたって利用していたと考えられている(Blench 2007: 415)。のちに述べるように、ウシやヤギについても同様であろう。他方で、弓と矢、矢毒、イヌといった語彙もニジェール・コンゴ語族に共有されていることが指摘されている(Blench 2006)。

つぎに、農学の研究では、主要な栽培種について、野生種と栽培種の分布域の比較から、穀物では東西のアフリカのサバンナにおいて、ヤムイモは西アフリカの森林地帯が起源地であると推測できることが早くから指摘されてきた(たとえば、中尾 1966; Harlan 1971)。

ヤムイモは考古資料として残存しにくいため、考古学的な裏付けができないが、西アフリカの森林地帯で(長期の定住を伴わない)ヤムイモのある程度の選択的な利用、弓と矢、矢毒、イヌの導入という狩猟技術の進展が生じたと考えられる。

このことは西アフリカの文化的な中心地がサバンナと森林地帯の 2 つにわかれていた可能性を示唆している。そして、注意を喚起すべき点は、現在のブルキナファソがこの二つの中心地の中間に位置していることである。

現在のブルキナファソの言語分布は、18 世紀前後に到来したと考えられている、アフロ・アジア語族のハウサ、タマシェク、大西洋コンゴ語派のフルベを除くと、北西部を中心としたマンデ語派の諸言語と、南部と東側にまたがるグル語群(ヴォルタ語群)の二つに大きく分けられる(Lewis 2009)。単純化していえば、北はマンデ語派、南はグル語群にわかれる。グリーンバークの古典的な見解では、マンデ語派とグル語群はニジェール・コンゴ語族に属しているが、マンデ語派はニジェール・コンゴ語族に入らないという見解が一定の研究者から提起され続けている(Mukarovsky 1966; Dimmendaal 2008)。少なくとも、マンデ語派とその他の語派との分岐は非常に早く、プロト・ニジェール・コンゴ語族からの第一回目の分岐、ないしは第二回目の分岐として想定されている(Williamson and Blench 2000; Ehret 2000、図 1-1)。他方で、グル語群はバンツー諸語との分岐が相当程度近接している(ibid.)。つまり、西アフリカでの森林地帯において、狩猟と採集の両面で技術的な革新が遅くとも 4,000-3,000 年前には生じており、グル語群とバンツー諸語はこうした文化を共有していたと考えられる。

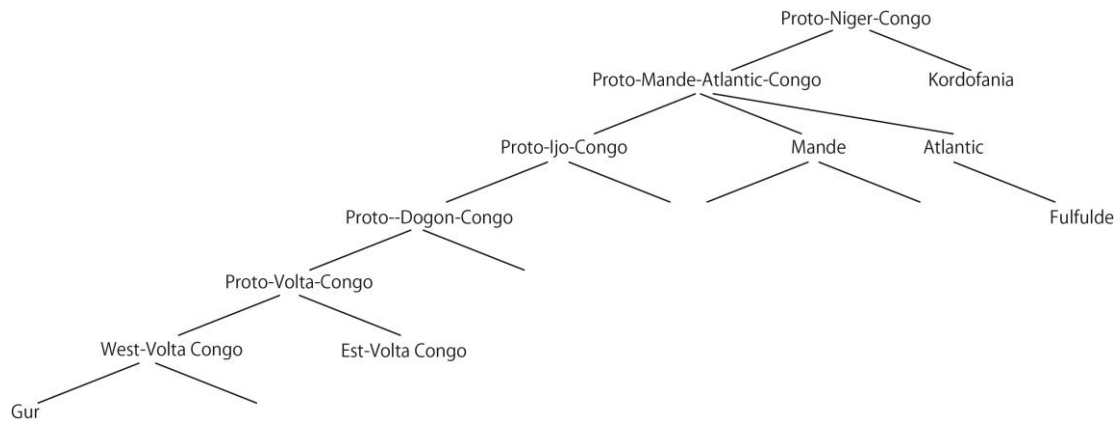


図 1-1. ニジェール・コンゴ語族の言語系統図(Williamson and Blench 2000: 18, 20-21 を基に筆者作成)

## 1-2. 緑のサハラにおける牧畜と採集の混合経済(5,000 BC-2,000BC)

西アフリカ内陸における牧畜の起源は、いまだ最終的な決着をみていないものの、一般的には、サハラにあると考えられている。牧畜にどこまで依存していたのかは不明であるが、発掘調査をまとめたものからは、サハラでは 7,500-6,500 年前からウシを利用していたとされる(Marshall and Hildebrand 2002: 109、図 1-2)。また、最古の家畜のヤギとヒツジは 7000-6700 年前の東部サハラの遺跡から出土している(ibid.: 110)。また、のちに述べるように、ウシの西アフリカの導入は 4,000-2,500 年前のあいだにおさまっている。このことから、マーシャルらは、農耕が牧畜に先行した(もしくは同時並行した)南西アジア、メソアメリカ、北東部アメリカと比較して、アフリカでは牧畜が農耕よりもかなり先行していることに注意を喚起している(ibid.)。もっとも、この議論はサハラを念頭においたもので、西アフリカでは家畜と栽培種の出現時期にそれほど大きな差はない。ともあれ、サハラで成立した家畜の利用が農耕を伴うものではなかったことは重要な点である。

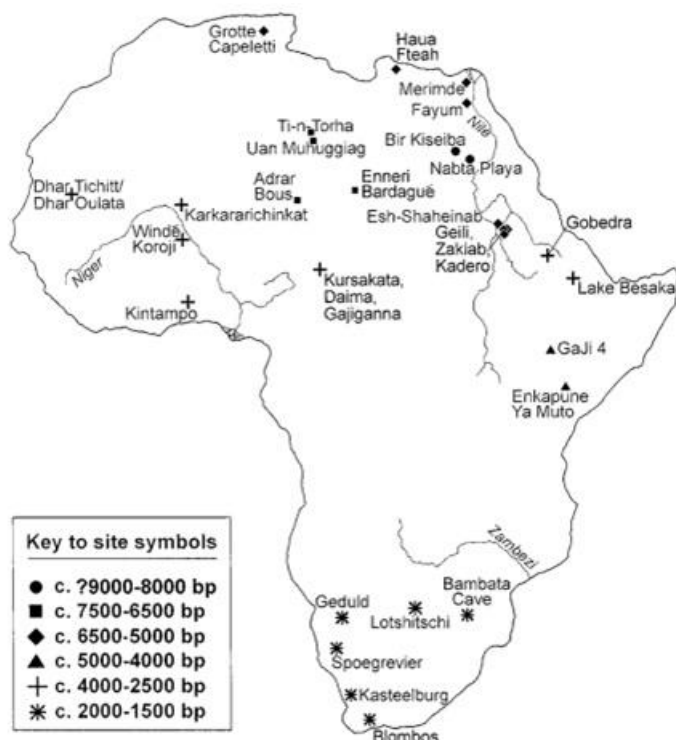


図 1-2. 家畜ウシの初期の出土遺跡(Marshall and Hildebrand 2002: 110)

マーシャルらは栽培化が生じなかったことの原因を、完新世初期の不安定な気候変動と遊動生活にもとめている(Marshall and Hildebrand 2002: 139)。同じ場所での定期的な播種が可能ではなかったと考えているのである。マーシャルらは別の事例を引いているが、牧畜と採集の組み合わせについては、サヘル地域での農牧をおこなう民族の研究において報告がなされている。どのような生業であったのか、現状の民族誌からかなり具体的なイメージがつかめるだろう。

たとえば、ニジェールのサヘル地域の牧畜民のケル・タマシエクは農牧をおこなっているが、日常的にイネ科草本種子の採集をおこなっており、食糧不足の際には例年以上に重要になることを指摘している(Bernus 1967, 1980)。また、ブルキナファソ北東部のサヘル地域に定住して農牧をおこなうケル・タマシエクの生業活動を報告した石本は、バオバブ(*Adansonia digitata*)などの葉、イネ科草本(*Panicum laetum*; *Setaria pallide-fusca*; *Eragrostis* sp.; *Echinochloa colona*; *Oryza barthii*; *Cenchrus biflorus*)の種子、スイレン科植物(*Nymphaea* sp.)の塊茎の採集がなされていることを報告している(石本 2012: 85-87)。採集法には籠をふって種子をかき入れる方法と刈り取る方法があり、1 ヶ月に満たない短期採集行と 3-4 ヶ月におよぶ長期採集行があることを指摘しているが、いずれの方法や採取行

においても採集地について生育状況の知識の有無によって作業効率が大きく変動すること  
を明らかにしている(ibid.: 88-89, 96-97)。収穫量についても詳細な記述がなされているが、  
たとえば、野生イネを1人で10日間、採集をおこない、20kg、1世帯の10-15日分の食事  
をまかなう程度を収穫している(ibid.: 90)。長期採集行は出稼ぎ、賃労働の増加によって年々  
減少しているが、1990年代以前には、採集物が数ヶ月分の食糧をまかなう年も多かったと  
いう聞き取りが紹介されている(ibid.: 99-101)。単純な比較はできないが、牧畜と採集活動  
が並行して行われていたことの具体的なイメージがつかめるだろう。

一般論としていえば、動物飼養によって全食料をまかなう社会は非常に稀であり、大部  
分の牧畜民は自らの社会内で農耕を営むか、農耕民との接触によって農産物を得てきてい  
る(福井 1987)。アフリカの乾燥・半乾燥地域に位置する10の牧畜社会における摂取カロリ  
ーを比較した研究では、農産物からの摂取カロリーが最も低いケニアのトゥルカナでさえ  
農産物からの摂取カロリーは全体の8%を占め、西アフリカの4例(ニジェールのタマシェ  
ク、フルベ、マリのタマシェク、セネガルのフルベ)においてはいずれもおおよそ50%以上と  
なり、10の牧畜社会のなかで最も高いのはニジェールのフルベで63%にも及んでいること  
が示されている(Galvin and Little 1999)。このような生態人類学の成果は、割合の大小は  
あるものの、牧畜と採集活動の併存状況を示唆している。

しかし、より重要な点は西アフリカと東アフリカの牧畜のあり方の違いであろう。一般  
論としていえば、西アフリカでは牧畜民は牧畜に専門特化しているが、東アフリカでは生  
態系に応じて農耕をおこなう比率が変化する半農半牧という生業形態になっている。福井  
は、古代エジプトの壁画にはウシの耕作利用が描かれているのに対して、サハラの岩壁画  
にはそれがないことに注目して、農業と牧畜が有機的に結びつかない農牧システムの起源  
として、サハラの牧畜を捉えている(福井 1999: 40-41)。

要するに、牧畜への専門特化が進んだのは、この段階ではなかった。別の角度からであ  
るが、サハラの牧畜を stock keep として捉え、専門特化は後の時代に進行したとリンセー  
レは主張している(Linseele 2010)。

### 1-3. 栽培種と家畜をもつ狩猟採集民(2000 BC- 0AD)

論者によっては、西アフリカの大半では、家畜と同様に、栽培種も緑のサハラに住んで  
いた人びとによって持ち込まれたと想定している(たとえば、Linseele 2010: 58)。しかし、  
一般的にいて、ウシ、ヤギ、ヒツジ、ニワトリといった代表的な家畜の起源地がアフリ

カ大陸ではないのに対して(Linseele 2013: 157-159)、アフリカイネ、ミレット、ソルガムといった主要な穀物は西アフリカ起源であること(中尾 1966; Harlan 1971)を踏まえると、栽培種については緑のサハラに居住していた人びとによって持ち込まれたと断定することができない。緑のサハラに住んでいた人びとであるのか、西アフリカの森林地帯に住んでいた人びとであるのかは別として、乾燥化が生じた紀元前 2 千年紀に、現在の西アフリカのサヘル、サバンナに居住していた人びとが、この地で栽培種を生み出したと考えるのが妥当であろう。

紀元前 2 千年紀の西アフリカのいくつかの遺跡では、ウシの骨の出土が報告されている(表 1-1)。最も古いのは、紀元前 2 千年紀初頭と想定されるマリのウィンデ・コロジ西(Winde Koroji Ouest)遺跡の事例であるが(MacDonald 1996)、近年の再検討によれば、このウシは野生種に近いものであったとされる(Linseele 2007: 132, 137)。また、ブルキナファソ北部の遺跡群では、紀元前 2,000-1,000 年の遺構は極端に規模が小さく、家畜の骨も出土しておらず、非常に遊動性に富んでいたと解釈されている(Linseele 2013: 151)。

ウシ( <i>Bos primigenius</i> f. <i>taurus</i> )／サンガウシ(Sanga cattle)／ゼブ・ウシ( <i>Bos primigenius</i> f. <i>indicus</i> )			
国	遺跡	年代	文献
ナイジェリア	ブカルクラリ遺跡(Bukarkurari)	紀元前1600-1500年	Linseele 2007
マリ	ウィンデ・コロジ西遺跡(Winde Koroji Ouest)	紀元前2200-850年	MacDonald 1996
モーリタニア	コバディ遺跡(Kobadi)	紀元前1600年	Jousse and Chenal-Velarde 2002
	ティレムシ遺跡(Tilemsi)	紀元前2千年紀	Smith 1974, 1975
	コリマ南遺跡(Kolima-Sud)	紀元前1100-900年	MacDonald 1994
	ダール・ティシット遺跡群(Dhar Tichitt)	紀元前1500-1100年	Munson 1976
	ダール・ティシット遺跡群(Dhar Tichitt)	紀元前990-905年	MacDonald et al. 2003

表 1-1. ウシの骨を出土した紀元前 2 千年紀の西アフリカの遺跡(なお、ウシとゼブ・ウシは出土する骨の形態からは識別ができないため、このような表記となっている(Linseele 2013: 151))

トウジンビエもまた、紀元前 2 千年紀のあいだにモーリタニアからナイジェリア、ガーナ北部まで広がっている(表 1-2)。最古のトウジンビエは近年更新され、マリのティレムシ遺跡から出土した紀元前 2,500 年のものが最古とされる(Manning et al. 2011)。しかし、その他の遺跡では紀元前 2 千年紀から出土しており、トウジンビエへの依存は地域によって差異がある。ブルキナファソの北東部の遺跡群の一部からは、この時期にトウジンビエが出土しているが、わずかなものであり、野生の植物の利用が優勢であった(Kahlheber and Neumann 2007: 321)。他方で、ガーナ北部のビリミ遺跡では、植物遺存体の 50%がトウジ

ンビエであるのに対して、11%が野生種の穀物となっており、トウジンビエに特化していたことがわかる(D'Andre and Cassey 2002: 159)。ビリミ遺跡の報告者は、どのような栽培を行っていたかを具体的に明らかにする手がかりにかけるとしつつも、遊動性を減少させたことは確かであろうとしている(ibid.: 163)。モーリタニアのダール・ティシット遺跡群はよりインテンシブにトウジンビエを利用していた。この遺跡群では、トウジンビエは豊富に出土しており、穀物倉を思わせる遺構も報告されている(Amblard 1996; Amblard-Pison 1999)。また、ウシの骨も出土していることから(Munson 1976; MacDonald et al. 2003)、半農半牧の生業形態をより洗練化させていたと思われる。

栽培の初期段階のステップがどのようなものであったのかについては議論が分かれている。一部の論者は、ティレムシ遺跡やビリミ遺跡から出土したトウジンビエの種子が小さいことから、栽培の初期段階を示すものと解釈している(D'Andrea et al. 2000; Manning et al. 2011)。ブルキナファソ北東部の遺跡群から出土したトウジンビエも種子が小さいものであったが、必ずしもそのように解釈する必要性はない(Kahlheber and Neumann 2007: 324, 329)。種子のサイズと重量の増加は選別の結果として生じるものであり、単に選別が行われなかったと解釈できる(ibid.: 329)。言い換えれば、最初に栽培を導入した人びとは比較的簡単な技法で栽培していたのであり、意図的な選別は後の時代に生じたといえる(ibid.: 329)。また、紀元前 2 千年紀には、西アフリカではトウジンビエだけが唯一の栽培種であったこと、ガーナ北部を除けば、完全な定住がいまだ確立されていなかったことを考慮すると、栽培は生業のなかではマイナーな役割であったと推測される(ibid.: 330)。つまり、乾燥化の結果として形成されたサヘル、サバンナ地帯で遊動生活を営んでいた諸集団の意図的でない選別がトウジンビエのドメスティケーションを生じさせたのである。あるいは、後年のアフリカイネ、フォニオ、ソルガムといった栽培種の導入は定住以後のリスク拡散の戦略として導入された可能性がある。

しかし、一方で一部の地域では家畜や栽培種と無関係の狩猟採集が 10 世紀前後まで継続していたことにも注意を払う必要がある。ブルキナファソ南部のゴブナング(Gobnangou)遺跡では、11 世紀まで、野生植物と野生動物のみを利用し、例外的に家畜化されたイヌの遺骸が出土しただけであった (Frank et al. 2001)。近年の報告ではこの遺跡、もしくは近隣の遺跡にトウジンビエの利用が紀元前 2000 年ごろにわずかにあったことが示されているが(Dueppen and Gallagher 2013)、この報告においても、紀元 1 千年紀まで遊動生活が継続していたとされる(ibid.)。同様に、マリのコルンコロカレ(Korounkorokale)遺跡において



も、5 世紀から 9 世紀ごろまで狩猟採集生活が継続されていた(MacDonald 1997)。

トウジンビエ(*Pennisetum glaucum*)

国	遺跡	年代	文献
ブルキナファソ	ウルシ西(Oursi West)	1200-1100 BC	Kahlheber and Neumann 2007: 325
	ティン・アコフ(Tin Akof)	1900-900 BC	Kahlheber and Neumann 2007: 325
	ゴブナンブ(Gobnangou)	2000 BC	Dueppen and Gallagher 2013
マリ	ウィンデ・コロジ西(Winde Koroji Ouest)	2100-1100 BC	MacDonald 1996
	ティレムシ(Tilemsi)	2200 BC	Manning et al. 2011
モーリタニア	ダール・ティシット(Dhar Tichitt)	1000 BC	Jacques-Felix 1971; Munson 1971, 1976
	ウエド・チェッビ(Oued Chebbi)	1000 BC	Amblard and Pernes 1989
	ジガニヤイ(Djiganyai)	1650-1500 BC	MacDonald et al. 2003
ガーナ	ビリミ(Birimi)	1750-1100 BC	D'Andrea and Casey 2002; D'Andrea et al. 2001
ナイジェリア	ガジガンナ(Gajiganna)	1200-1000 BC	Klee et al. 2004

表 1-2. 紀元前 2 千年紀のトウジンビエの初期の出土状況

まとめると、紀元前 2 千年紀では、全体としては狩猟採集の遊動生活が継続し、ウシとトウジンビエの利用が西アフリカの広域でパッチ状に広がっていった。マリのウィンデ・コロジ西遺跡、ティレムシ遺跡、モーリタニアのダール・ティシット遺跡群では、ウシとトウジンビエの双方の利用が報告されているが、上記の 3 つの遺跡以外ではどちらかのみが出土していることに留意する必要があるだろう。このことから、農耕と牧畜は必ずしもセットとなっていたわけではなく、ウシとトウジンビエの利用の拡散は特定の方向をもっていなかったといえる。

#### 1-4. 定住——農耕と牧畜の専門化(0 BC-AD1000)

西アフリカにおける編年では、鉄器時代は紀元前 1 千年紀中葉から紀元 2 千年紀初頭に位置づけられる(McEchern 1997)。この時代の考古学的な特徴は、必ずしもすべての文化において鉄器が重要な役割を果たしたわけではない(DeCorse and Spiers 2001)。むしろ、より恒久的な定住と複雑な社会の形成が特徴であった(McIntosh 1994)。

ブレウニグとネウマンは、西アフリカの遺跡には共通して紀元前 1 千年紀に遺跡が放棄されており、この断絶は同時代の乾燥化の進行とそれに対する適応の結果であるとする非常に興味深い仮説を提示している(Breunig and Neumann 2000b)。このような断絶はブルキナファソ北東部の遺跡群やナイジェリア北部の遺跡群にもみられる(Linseele 2010: 62)。たとえば、トウジンビエを出土した遺跡群は紀元前 2 千年紀に集中しており(表 1-2)、マリ、モーリタニア、ガーナ、ブルキナファソの 4 か国で紀元前 1 千年紀にトウジンビエを出土した遺跡はわずか 3 つにすぎない(表 1-3)。

トウジンビエ(*Pennisetum glaucum*)

国	遺跡	年代	文献
モーリタニア	ブ・ハザマ(Bou Khzama)	800-400 BC	MacDonald et al. 2003
マリ	ジェンネ・ジェノ(Jenne-Jeno)	250 BC-AD 1400	McIntosh 1995
	ジャ(Dia)	800 BC-AD 1700	Bedaux et al. 2001; Murray 2004, 2005

表 1-3. 紀元前 1 千年紀のトウジンビエの出土状況(なお、ナイジェリアの遺跡は除く)

ここで挙げられているジャ遺跡やジェンネ・ジェノ遺跡がニジェール川中流域に位置し、水が豊富にあったことに注意を喚起すべきだろう。乾燥化によって水資源の獲得が不安定になったなか、水を安定的に利用できるニジェール川中流域が重要な意味をもつようになったことは想像に難くない。実際のところ、ジャ、ジェンネは、乾燥化が始まった紀元前 1 千年紀から居住が開始され、数キロの居住地の移転はあったものの、現在まで居住が継続され、歴史的に重要な街となっている。西アフリカにおける定住化の先駆がニジェール川中流域にあったことは間違いない。その周辺地域での定住化はやや遅れていた。現在のブルキナファソの北東部、および北西部において、紀元後から明確な住居址が出土している(たとえば、Petit et al. 2011; Dueppen 2012)。

起源千年紀からは、專業集團の登場によって、社会的な分業が確立していったと考えられる。すでに前節で述べたように、專業的な牧畜民の出現は、彼らに農産物を提供する農耕社会を前提としている(Linseel 2010)。したがって、定住的な農耕社会が出現した紀元前後以降に、專業的な牧畜社会が成立したと考えられる。專業的な牧畜社会の成立は考古資料からは検証しにくい、近年のヒトゲノム研究(Černý, V. et al. 2011)が、その一端を明らかにしている。

チャド、カメルーン、ニジェール、ブルキナファソ、マリの 5 か国にまたがる遊牧のフルベと定住農耕民の遺伝子の分析から、フルベの(父系に遺伝する)Y 染色体ハプログループが農民よりも多様性に富んでいることから、農民の男性の祖先よりもフルベの男性の祖先の方がより大きなポピュレーションであったこと、これらの遺伝子がフルベのなかでプールされることで Y 染色体の多様性が保持されつつ、言語的な統一性が保たれたとされる。また、ミトコンドリア DNA(母系から遺伝)ではフルベの多様性は低く<sup>1</sup>、そのハプログループの特徴からも農民とフルベとのあいだの婚姻がほとんどなされていなかったことが示唆されている(Černý, V. et al. 2011)。現在の遊牧民であるフルベの祖先が連続して遊牧をして

<sup>1</sup> ただし、これは狩猟採集民にもよくみられる傾向で、近年の人口減が女性の相対的・絶対的な現象を引き起こした結果でもある。

いたと仮定すると、専門的な遊牧民はその出現時には多種多様な集団であったが、専門化後は農耕民との婚姻をほとんど行わず、Y 染色体の多様性が保持されたと考えられる。

土器の生産では、西アフリカは日本列島に次いで世界で二番目に古い土器を有している。マリのウンジュグ(Ounjougou)遺跡では 12,000 年前の土器片の出土が報告されている(Huysecom et al. 2009)。一部の論者は、トウジンビエの最古の遺跡から、縄文の施文がなされた土器片(Cord-wrapped roulette decorated pottery)をみつけたこと、複数のトウジンビエを出土した遺跡でも、そのような土器が確認されたことから、縄文の施文と農耕との関連を指摘している(Ozainne et al. 2014)。しかし、重大な変化は、住居址がでてくる時代から土器の種類が明らかに多くなっていることであろう(図 1-3)。こうした土器の器形の多様化は、ジャ遺跡が最も古く紀元前 1 千年紀から(Bedaux et al. 2005)、ジェンネ=ジェノ遺跡では紀元後から生じている(McIntosh 1995)。やや図式的なきらいはあるが、3,000 年ほどのタイムスパンでのブルキナファソ北東部の土器の編年からは、紀元後以降に土器の器形の多様化の傾向がみられる(図 1-3)。

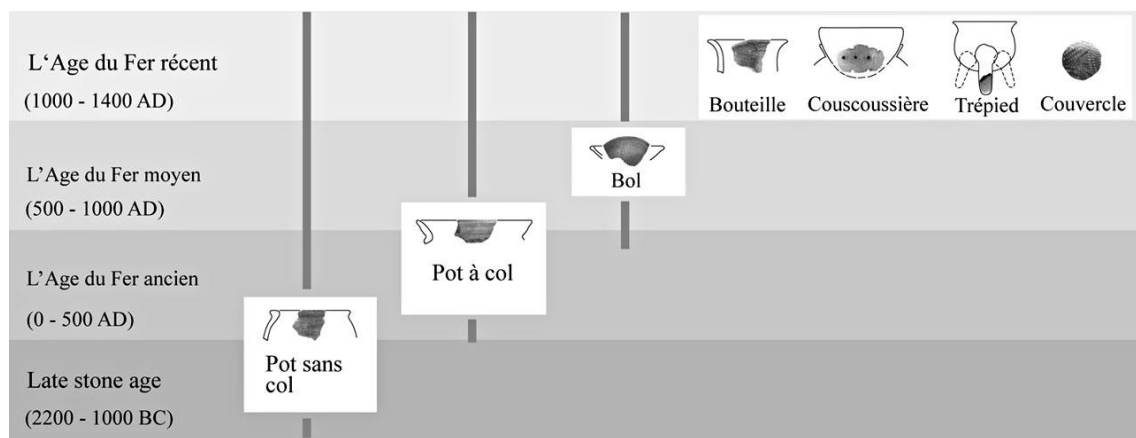


図 1-3. ブルキナファソ北東部の遺跡群出土土器の後期石器時代から鉄器時代までの編年 (Czerniewicz 2004: 131)

一般論としていえば、このような器形の多様化は、定住農耕に対応した食文化の充実と相関しているだろう。現状では、資料的な限界が大きいが、ブルキナファソ北西部の遺跡群についての植物考古学の成果からは、豆類、トウジンビエからつくるトーにつけるソー ルのもととなるローゼルが、紀元 1 千年紀に出土している(表 1-4, 1-5)。

国	遺跡	年代	文献	バンバラムメ( <i>Vigna subterranea</i> )	ササゲ( <i>Vigna unguiculata</i> )
ブルキナファソ	キッシン(Kissi)	Kissi 22	AD 80-200	Kahlheber 2004	○
		Kissi 40	AD 900-1050	Kahlheber 2004	○
		Kissi 40	AD 1000-1200	Kahlheber 2004	(○)
	ウルシ北(Oursi Nord)		AD 400-1250	Kahlheber 2004	○
	ウルシ西(Oursi West)	鉄器時代	AD 50-250	Kahlheber 2004	○
	ウルシ(Oursi)	Oursi 1	AD 0-250	Kahlheber 2004	○
		Oursi 2	AD 850-1000	Kahlheber 2004	○
	ウルシ・フ・ベロー(Oursi hu-beero)		AD 1000-1200	Kahlheber 2004	○
	サウガ(Saouga)	Saouga A	AD 750-1150	Kahlheber 2004	○
		Saouga B	AD 750-1350	Kahlheber 2004	○

表 1-4. 栽培種の豆類の出現(Kahlheber and Neumann 2007: 325-328 の図を簡略化)

国	遺跡		年代	文献	ローゼル( <i>Hibiscus sabdariffa</i> )
ブルキナファソ	キッシン(Kissi)	Kissi 40	AD 900-1050	Kahlheber 2004	(○)
	ウルシ北(Oursi Nord)		AD 400-1250	Kahlheber 2004	○
	ウルシ西(Oursi West)	鉄器時代	AD 50-250	Kahlheber 2004	○
	ウルシ・フ・ベーロ(Oursi hu-beero)		AD 1000-1200	Kahlheber 2004	○
	サウガ(Saouga)	Saouga A	AD 750-1150	Kahlheber 2004	(○)

表 1-5. ソースのもとになるローゼル(Kahlheber and Neumann 2007: 325-328 の図を簡略化)

他方で、西アフリカで鉄生産が一般的に開始されるのも、紀元 1 千年紀である。サハラ以南アフリカ最古の製鉄の遺跡で、製鉄技術の独自発展の有力な証拠とみなされているのが、ブルキナファソ北東部のトラ・シラ・トモ(Tora Sira Tomo)遺跡(700-200 BC)である(Holl and Kote 2000; Holl 2009a, 2009b)。その後、マリのジェンネ・ジェノ遺跡(McIntosh 1996)、ジャ遺跡(Bedaux et al. 2005)、ブルキナファソ北東部の遺跡群(Dueppen 2012)、ブルキナファソ北西部の遺跡群(Petit et al. 2001)の紀元 1 千年紀の地層から鉄製品が一定程度出土している。

西アフリカでは、世襲の専門職能集団がひろくみられ、鍛冶屋、土器づくり、グリオ(語り部)をプロト・タイプとしており、鍛冶屋(夫)と土器づくり(妻)というセットが生じている(Tamari 1991)。こうした世襲の専門職能集団の成立を、土器の器形の多様化、製鉄技術の発展と広がり求めることができるかもしれない。

ともあれ、近年の考古学の成果は、以下の 4 点にまとめられるだろう。すなわち、西アフリカでは、(1)紀元前 2 千年紀に一部の遺跡においてウシとトウジンビエの利用が確認されているが、農耕や牧畜に全面的に依存していたわけではなく、むしろ、全体としては狩猟採集の遊動生活が継続されていたこと、(2)紀元前 1 千年紀からニジェール川中流域の一部の遺跡で定住生活が始まり、紀元 1 千年紀を通じて西アフリカの多くの地域で農耕に依存する定住生活がひろく行われるようになったこと、さらに、(3)この時代に牧畜の専門

化、鉄利用の開始が生じ、(4)10 世紀ごろから土器の器形の多様化、豆類などの利用が行われるようになったことである。

### 1-5. 10 世紀以降の西アフリカ内陸の社会変動

10 世紀頃になると、サハラ砂漠以北において書かれたアラビア語の地理書や歴史書に「スーダーン」についての記述が登場している<sup>2</sup>。これらのアラビア語史料群では、サハラ砂漠の岩塩と内陸の金の交易について繰り返し書かれおり、金の交易をおこなう国家が西アフリカ内陸に存在したことは、中世以来、サハラ砂漠以北に知られるようになっていた。

たとえば、11 世紀半ばのバクリーによるものでは、(1)ガーナという名の王の称号と国名をもつ国家が同時代に存在していたこと、(2)ムスリムがおり、モスクがあったが、王は非ムスリムであり、ムスリムと非ムスリムは別の区画に住んでいたこと、(3)強力な軍隊をもち、(4)サハラ砂漠の岩塩と内陸の金を交換する交易がなされていたことが記述されている (Cuque 1985: 327-332)。特に、ムスリムは別の区画に住んでおり、非ムスリムの王の庇護を受けていた点が、17 世紀から 19 世紀にかけてのより内陸のヴォルタ川中流域におけるムスリムと王国との関係に類似しており、どちらのケースにおいても、平和的な交易商人は歓迎され、政治的に脅威になった時に拒絶されていたことが指摘されている (Levtzion 1979: 208-209)。

14 世紀後半に書かれたイブン・ハルドゥーンの『イバルの書』では、13 世紀頃に「スーダーン」においてマリー・ジャータがソソとガーナを征服したことが記されている (Cuque 1985: 342-344)。この内容が、現在までグリオによって語られる、マリ王国<sup>3</sup>の始祖とされ

---

<sup>2</sup> すでに、荻谷がこれらのアラビア語史料群の原文にあたって、アラビア語からその内容を紹介している (荻谷 2012: 38-60)。そのため、ここでは、アラビア語史料の内容について、最低限度の言及に留める。

<sup>3</sup> マリ王国は慣行として「マリ帝国」と表記されてきたが、「帝国」とする根拠が特に示されてきたわけではないため、ここでは「王国」とする。この点は詳細な検討を要するが、ドラフォスによる『オー・セネガル・ニジェール』の歴史叙述では「王国」ではなく、一貫して「帝国」という語が採用されており (Delafosse 1912c)、これが現在まで影響を与えた可能性がある。ただし、この著作では、一部を除いて、ガーナ、モシの諸王国もまた「帝国」とされており、こうした著名な諸国の表記については後の時代に変遷があったことをうかがわせる。また、「マリ帝国」についていえば、フランスによる征服と統治の過程で、フランス軍人と植民地行政官によって、口頭伝承の『スンジャータの物語』が文書化されていったという経緯があり、この文書化自体が帝国主義の一部であり、帝国主義に対する西アフリカ内陸の人びとの応答であったことを踏まえると (Bulman 1999)、マリ「帝国」という表象は 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての時代のなかで形成されたことは確かであろう。口頭伝承だけではなく、フランスの征服以前から東洋学のなかでの西アフリカ内陸についてのアラビア語史料による知識の蓄積、トンブクトゥの年代記

るスンジャータ・ケイタを主人公とする長大な叙事詩伝承『スンジャータの物語』(Sunjata maana)と酷似していることが知られている(中村 1995: 100)。『スンジャータの物語』の内容は寓話的であり、マリ王国についてのグリオの口頭伝承を研究した中村は「支配者の末裔を自認するホロン・リネージュを中心とする出自階層的國家体制を正当化するための國家憲章の原典としての機能を果たしてきた」ことを指摘している(ibid.: 106)。この『スンジャータ物語』は、鍛冶屋の王のスマゴロ・カンテのソソ王国をスンジャータが打ち破り、鍛冶屋を含む内婚の專業職能民として服従させるという逸話を含んでおり、西アフリカ内陸に広くみられる、鍛冶屋・土器づくり、グリオ(語り部)などの内婚制專業職能民の起源と秩序を説明する語りとなっている(Tamari 1991: 238-240)。こうした專業職能民についての記述は 14 世紀以降のアラビア語の史料にもみられており、少なくともこの時代には專業職能民が存在していたことが指摘されている(ibid.: 232-236)。

このように、アラビア語史料に基づく研究では、遅くとも 9 世紀には、サハラ砂漠を越えた金の交易がおこなわれていたこと、こうした交易を通じて一部にイスラームが浸透していったこと、ガーナやマリといった國家が存在していたこと、口頭伝承に基づく研究では、マリ王国の成立が内婚制專業職能集團の成立と結びつけられて語られていることを明らかにしている。

発掘調査に基づく研究では、8 世紀以降の利用の痕跡が確認できるいくつかの遺跡が報告されている(図 1-4, 1-5)。これらの遺跡のうち、サヘルのアウダグスト遺跡、クンビ・サレー遺跡、エッスーク遺跡、古ガオ遺跡からは、石材の建築が出土している(Robert・Chaleix 1989; Insoll 1996; Bertier 1997; Nixon 2007; 竹沢・シセ 2008; Takezawa et Cissé 2016)。一般的に、これらの建築物は建築に要する労働力と資源を動員できたことから、それぞれの地域における國家の興隆に対応して発展していったものとして捉えられている。

他方で、内陸デルタのジャ遺跡(Bedeaux et al. 2005)、ジェンネ・ジェノ遺跡(McIntosh and McIntosh 1980; S. McIntosh 1995)では、大規模な建造物が認められなかったことはサヘルの遺跡と好対照を示している。ジェンネ・ジェノ遺跡を発掘したマッキントッシュは、中核の形成・人口増大・規模の増大をみせているものの、従来これに付随すると考えられてきた生業の集約化・高度に可視化した階層・公共建造物の出現がみられないことに注目し、非階層的な複合社會が生成したと論じている(R. McIntosh 1998; S. McIntosh 1999)。

---

の歴史觀、ドラフォスらによる年代記の「発見」とその歴史觀の受容、ドラフォスらの歴史觀の西アフリカへの再流入といった点が検討されなければならないだろう。



図 1-4. 8 世紀以降の西アフリカ内陸の主要な遺跡と都市

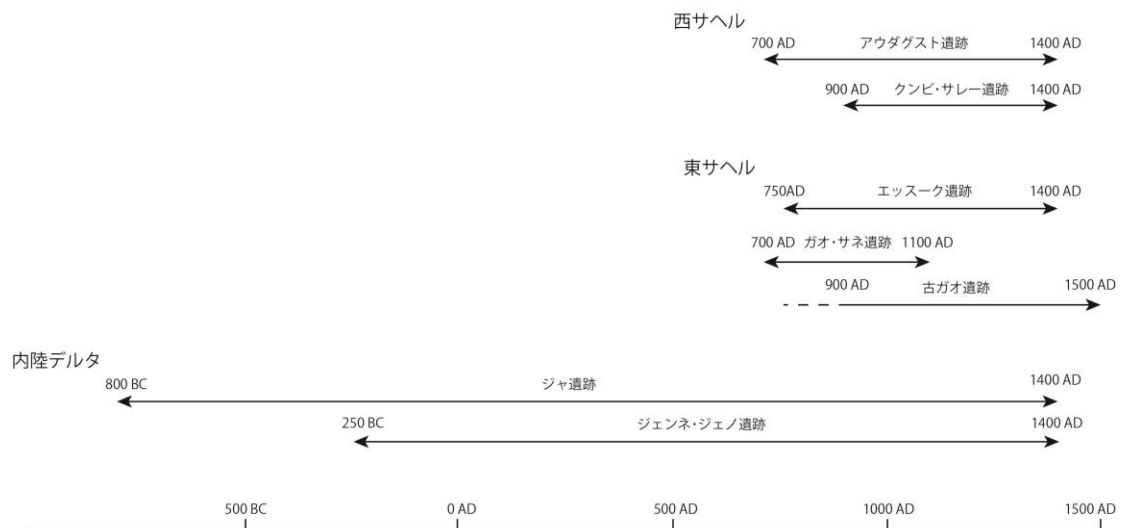


図 1-5. 8 世紀以降の西アフリカ内陸の主要な遺跡の利用の年代<sup>4</sup>

<sup>4</sup> McIntosh and McIntosh 1980; Robert-Chaleix 1989; S. McIntosh 1995; Insoll 1996; Bertier 1997; Bedeaux et al. 2005; Nixon 2007; 竹沢・シセ 2008; Cissé 2010; Takezawa et Cissé 2016 から筆者作成。

これらの立論には一定の留保がおかれるが<sup>5</sup>、これらの遺跡すべてで出土したビーズからは一定の傾向をみてとることができる(表 1-6, 1-7, 1-8, 1-9, 1-10, 1-11)。すなわち、(1)サヘルの遺跡から出土したビーズは総量として内陸デルタの遺跡よりも多く、(2)内陸デルタの遺跡では少量のガラス・ビーズが出土しているが、テラコッタ・ビーズの割合が高く、(3)サヘルの遺跡ではガラス・ビーズの割合が高いということである<sup>6</sup>。

ジェンネ・ジェノ遺跡					
時期	I/II	III	IV	合計	%
素材	個数	個数	個数		
テラコッタ	4	12	15	31	61%
岩石	7	2	3	12	24%
ガラス	2	1	5	8	16%
骨	0	0	0	0	0%
合計	13	15	23	51	

表 1-6. ジェンネ・ジェノ遺跡より出土したビーズの素材による分類(S. McIntosh 1996: 227-231; McIntosh and Brill 1996: 248, 250-252 を基に筆者作成<sup>7</sup>)

ジャ遺跡							
時期	I	II	III	IV	V	合計	%
素材	個数	個数	個数	個数	個数		
テラコッタ	10	0	14	54	3	81	64%
岩石	6	0	4	5	1	16	13%
ガラス	1	2	2	13	0	18	14%
骨	5	0	2	4	0	11	9%
合計	22	2	22	76	4	126	

<sup>5</sup> マッキントッシュの立論については、考古遺物として残存しなかったものが権力と深い関係をもっていた可能性が指摘できる。たとえば、近代の遺跡として、シェイク・アマドゥのジハードによって建設されたハムダライの王宮跡地の発掘では豪華な遺物は報告されていない(Galley et al. 1990)。また、この遺跡に現存する石造の防壁は王宮が放棄された後の時代に建設されたものである(Sanankoua 1990: 81)。もちろん、ジハードの理念に則って、禁欲的な生活を実践した結果としてもみることではできよう。しかし、強力な国家権力が存在したとしても、必ずしも考古遺物として反映されるわけではないことは、この事例からいいうる。より厳密に言えば、大規模建造物・灌漑システム・条里的な都市計画などのアジアやヨーロッパでみられるような中央集権による権力の大規模の物質的な具現化がなされなかったといいかえることができるだろう。そして、このようなアジアやヨーロッパの基準で比較した場合、少なくとも現状で発掘されている限りでは、サヘル地域の石造建築物もまた、格段に規模の小さいものと言わざるをえない。したがって、建築物の素材の差異や遺構としての公的なモニュメントの不在が中央集権の存在の有無に直結するかどうかは判断が留保される。

<sup>6</sup> 他方で、ブルキナファソ北東部のキッシ(Kissi)遺跡で、5世紀から7世紀の層から数百のガラス・ビーズとカーネリアン・ビーズが出土しており、北からガラス・ビーズが持ち込まれたことが示唆されている(Magnavita 2003)。出土時期がガオ・サネ遺跡よりも古く、チャド湖周辺を経由して持ち込まれた可能性がある。

<sup>7</sup> ジェンネ・ジェノ遺跡については、1981年におこなわれた発掘調査の成果のみを参照した。



表 1-7. ジャ遺跡より出土したビーズの素材による分類(Shmidt 2005: 266-272 を基に著者作成)

ガオ・サネ遺跡		
	合計	%
素材		
テラコッタ	265	24%
岩石	21	2%
ガラス	782	71%
骨	38	3%
合計	1106	

表 1-8. ガオ・サネ遺跡より出土したビーズの素材による分類(Cissé 2010: 222, 243, 249 を基に筆者作成)

古ガオ遺跡				
時期	A	B	合計	%
素材	個数	個数		
テラコッタ	6	7	13	7%
岩石	1	4	5	3%
ガラス	90	75	165	89%
骨	0	0	0	0%
貝	2	0	2	1%
合計	99	86	185	

表 1-9. 古ガオ遺跡より出土したビーズの素材による分類(Roy 2000: 113-117 を基に筆者作成<sup>8</sup>)

エッスーク遺跡						
時期	I	II	III	IV	合計	%
素材	個数	個数	個数	個数		
テラコッタ	0	0	0	0	0	0%
岩石	0	1	1	2	4	1%
ガラス	0	43	305	31	379	98%
貝	0	0	1	1	2	1%
骨	0	0	0	1	1	0%
ダチョウの卵殻	0	0	1	0	1	0%
象牙	0	0	0	1	1	0%
合計	0	44	308	36	388	

表 1-10. エッスーク遺跡より出土したビーズの素材による分類(Nixon 2007: 287, 299, 300 を基に筆者作成)

<sup>8</sup> 古ガオ遺跡については 1996 年の報告書ではビーズの数量的なデータが明示されておらず (Insoll 1996)、MM(B), MM(C)より出土したビーズのみの数値である。

クンビ・サレー遺跡							
時期	I	II	III	IV	V	合計	%
素材	個数	個数	個数	個数	個数		
テラコッタ	0	0	2	59	2	63	21%
岩石						18	6%
ガラス						192	63%
貝						5	2%
銅						26	9%
合計	0	0	2	59	2	304	
*テラコッタ以外に関しては、層位ごとの出土についての記載がなかった							

表 1-11. クンビ・サレー遺跡より出土したビーズの素材による分類(Bertier 1997: 89, 94 を基に筆者作成)

ガラス・ビーズはサハラ越え交易によってもたらされたことから、これらは、8 世紀から 14 世紀頃までの西アフリカ内陸において、サヘルと内陸デルタの交易関係が希薄であったこと、特にサハラ越え交易のネットワークが内陸デルタには十分に及んでいなかったことを推測させる。ガラス製品、金属製品、陶器といった北アフリカ由来の遺物も、内陸デルタの遺跡ではガラス・ビーズと同様にほとんど出土していないことから、14 世紀頃まではサハラ越え交易のネットワークが内陸デルタに直結していなかったと解釈できる<sup>9</sup>。

注目すべき点は、内陸デルタのジャ遺跡とジェンネ・ジェノ遺跡では、双方の遺跡とも 14 世紀頃には放棄され、現在のジャとジェンネに町を中心が移動していることである。特に、16 世紀以降、ジェンネは内陸デルタとサヘルをつなぐ商業都市として種々の史料で言及されているが<sup>10</sup>、15 世紀末までアラビア語史料で言及されず、14 世紀に内陸デルタを旅行したイブン・バットゥータもまた、その旅行記において、ジャ、ジェンネにまったく触れていない(McIntosh and McIntosh 1981: 2-7)。つまり、15 世紀頃に、内陸デルタとサヘルを直接的につなぐ交易が発展し、古いジェンネ(ジェンネ・ジェノ遺跡)が放棄され、新しい商業都市としてのジェンネが成立したと考えられる。

こうした 15 世紀頃を境とした変化は、アラビア語の銘文をもった墓碑においても確認することができる。西アフリカ内陸での銘文をもった墓碑の分布は、エススーク、ジュンハ

<sup>9</sup> もっとも、サハラ越え交易のネットワークが内陸デルタに直結していないとはいえ、両者が完全に切り離されているとはいえない。内陸デルタからも少量ではあれ、ガラス・ビーズが出土していることからである。この少量のガラス・ビーズは交易ネットワークの末端に紛れ込み浸透していったモノといえるだろう。これは東西サヘルから内陸デルタへの小規模のモノの移動である。つまり、非組織的・不定期・小規模のモノの交換／贈与の連鎖によって、少量のガラス・ビーズが内陸デルタへと流入したと考えられる。そのような意味においては、東西サヘルの諸社会と内陸デルタの諸社会は連続的であったと推測できる。

<sup>10</sup> これらの史料の記述については、ジェンネの口頭伝承とともに、伊東が詳細に紹介している(伊東 2016: 15-17, 23-40)。

ン、ガオ、ガオ・サネ、クキヤといったガオを中心とした東部のサヘルの一部の地域に限定されている<sup>11</sup>。こうした墓碑は、11 世紀前半から製作がなされ<sup>12</sup>、ガオ・サネではすぐに墓地としての利用が途絶え、ガオとエッスークでは 14 世紀後半に製作が行なわれなくなり、15 世紀後半を最後にクキヤでの銘文をもつ墓碑がなくなっている<sup>13</sup>。モラエス・ファリアスは、東サヘルにおける銘文をもった墓碑製作の終焉の理由として、ソンガイ王国アスキヤ朝の成立とトンブクトゥの勃興を挙げている(Moraes Farias 2003: ccxlv)。

トンブクトゥには、銘文をもった墓碑がみられない。トンブクトゥをひとつの中心とした 16 世紀以降のイスラーム法学の学術伝統のなかで、墓碑の禁止を明言している『ムクタサル』(*Mukhtasar*)が標準的なテキストとして用いられたことも興味深い事実である(Reichmuth 2000: 427; Moraes Farias 2003: ccxlv)。一歩進めていえば、墓碑製作の終焉は、14 世紀以降に徐々に力をもち始めた、トンブクトゥを中心としたイスラームの宗教実践が、それ以前の東サヘルのイスラームの宗教実践にとってかわった証拠として捉えることができるのではないだろうか。

トンブクトゥについての最も古い記述は、イブン・バットゥータによる 14 世紀半ばのものである。彼は、住民の大部分はベルベル系のマッスーフアであること、アンダルスのグラナダ出身の詩人とエジプトのアレクサンドリアの商人の墓があることを記述している(家島訳 2002: 64)。ここでは、これ以上の記述はない。さきにあげた、西サヘルのイーワラータン(ワラータ)、内陸デルタ周辺と推定されるマリ王国の首都、東サヘルのカウカウ(ガオ)では、それぞれの土地の法学者についての言及(ibid.: 28, 39, 70)があるのに対し、トンブクトゥではこうした記述がない。また、イーワラータン、マリの首都、カウカウにつ

---

<sup>11</sup> こうした墓碑については、モラエス・ファリアスのコーパス(Moraes Farias 2003)と追加の報告(坂井・大稔 2008)をあわせて、総数 271 個が報告されている。なお、風化などによって破損し、割れた複数の墓碑のうち、対応関係が明白であり、もともとひとつの墓碑と確認できるものと解釈されているものは、1 個としてカウントした。

<sup>12</sup> 最も古い墓碑は、エッスークの 1013/1014 年(ヒジュラ暦 404 年)の墓碑(n. 106)である(Moraes Farias 2003: 89)。ガオ・サネでは 1042 年 10 月 16 日(ヒジュラ暦 434 年 2 月 15 日)の墓碑(n. 31)(ibid.: 32)、ガオでは 1127/1128 年(ヒジュラ暦 521 年)の墓碑(n. 102)(ibid.: 83)、クキヤでは 1182/1201 年(ヒジュラ暦 578/598 年)の墓碑(n. 188)(ibid.: 160)が、それぞれの地域において最も古い墓碑であった。このことから、北アフリカに近い、エッスーク→ガオ・サネ→ガオ→クキヤという順で、銘文をもった墓碑製作の慣習が伝播していったと考えられる。

<sup>13</sup> それぞれの地域における、最も年代の新しい墓碑は、ガオ・サネでは 1280 年 4 月 16 日/1299 年 9 月 12 日(ヒジュラ暦 678 年 12 月 14 日/698 年 12 月 14 日)の墓碑(n. 28)(Moraes Farias 2003: 30)、ガオでは 1364 年 10 月 24 日(ヒジュラ暦 766 年 1 月 27 日)の墓碑(n. 82)(ibid.: 70-71)、エッスークでは 1385/1387 年(ヒジュラ暦 787 年 1 月/789 年 1 月)の墓碑(n. 139)(ibid.: 118)、クキヤでは 1489 年 10 月 19 日(894 年 11 月 24 日)の墓碑(n. 233)(ibid.: 198)である。

いては、14 世紀以前にも、その町の地名についての言及があるが、トンブクトゥの地名が史料に登場するのは、イブン・バットゥータのものが最初である。こうしたことから、おそらく 14 世紀ごろには、確実に定住がなされていたことが推測されている(たとえば、Saad 1983: 36-37)。

14 世紀から 16 世紀までのトンブクトゥの状況については、17 世紀に書かれた年代記からうかがわれる。トンブクトゥは 1336/1337 年から約百年余りマリ王国によって支配を受け、それにかわって 1433/1434 年にトゥアレグの人びとがトンブクトゥを支配し、独立する(trans. Huwick 1998: 30-31)。しかし、1468/1469 年にソンガイ王国のソンニ・アリによって侵攻を受け、以後、サード朝モロッコによる侵略まで、かたちのうえではソンガイ王国の支配下に入っている(ibid.: 31)。また、レオ・アフリカヌスによって、16 世紀初頭にはトンブクトゥがサハラ越え交易で得た商品の取引をおこなう商人によって非常に栄えていたことが述べられている(ibid.: 280-281)。このようなことから、西アフリカ史の研究者では一般的に、15 世紀ごろになると従来のサハラ越え交易路が変更され、トンブクトゥを起点とした輸出入がおこなわれるようになり、新興勢力としてトンブクトゥが台頭したとされている(たとえば、Saad 1983: 11)。そして、この新興勢力に対して、危機感を抱いたソンニ・アリが政治経済上の重要な拠点であるトンブクトゥを制圧したとする(ibid.: 11)。このような想定は懐疑の対象となりうるものであるが、このような想定の背後には、トンブクトゥが圧倒的に有利な立地条件にあったということの認識があるように思われる。

図 1-6 のようにトンブクトゥは、ニジェール川の湾曲する北端に位置し、サハラと内陸デルタの中間地点に位置している。広域のニジェール川を利用した水上運搬、南北の生態の差異に応じた異なる商品の中継交易という二つの点において、他に類のない良好な立地条件であるといえる。また、町の規模は大いに縮小し、年代記にあらわされる数多くのウラマーたちの活躍する「輝ける黄金時代」とは比較にならないほどに衰退したと考えられている 19 世紀においても、中継交易によって、商人が多くの富を得ていたことが知られている<sup>14</sup>。このことを踏まえれば、注目すべきは、むしろ、このような立地条件にもかかわらず、なぜ 14 世紀以前には言及もされないほどの小規模な居住地であったのかということである。

---

<sup>14</sup> サハラ越え交易の規模についての実証的な研究はほとんどなされていない。しかし、19 世紀後半のサハラ越え交易の規模は一部、明らかにされている。1861 年の西スーダンからサハラ砂漠を経由しトリポリに輸入された輸入総額は約 1,500,000 フランであり、1874-1880 年、1883 年、1885 年、1888 年の年平均輸入総額は約 11,000,000 フランであった(Newbury 1966: 237, 239)。

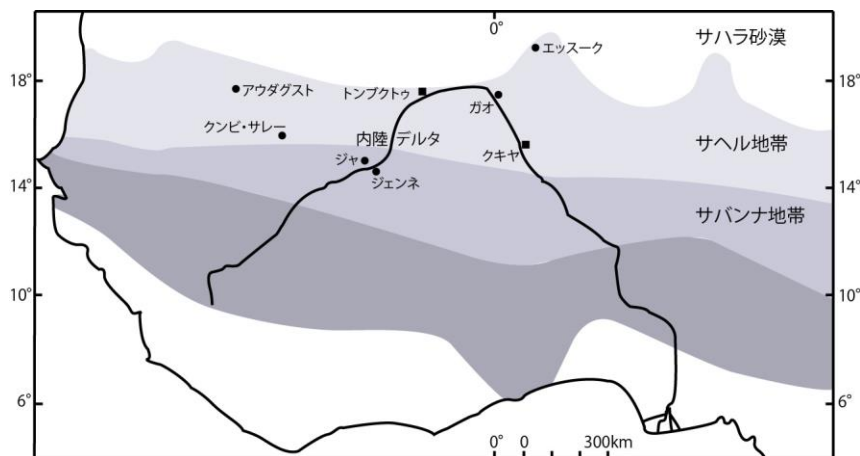


図 1-6. 植生の分布(Vernet 1993: 79 を一部改編)

水上運搬も中継交易も、後背地域にある程度の規模の需要と広域の交易ネットワークがなければ、十全に機能しない。水上運搬は運搬の速度と量において陸上のそれよりも効率的であるが、このような輸送手段が用いられるには、不定期な／少人数の取引ではなく、ある程度定期的で集団による取引がなされなければならないだろう。そして、中継交易の拠点として機能するには、サバンナの距離の離れた地域との定期的な通商関係がなければならない。つまり、15 世紀までは、後背地の需要や広域の交易ネットワークが未発達であった。

このように、15 世紀ごろには、サヘルと内陸デルタをつなぐ交易路が確立し、現在のトンブクトゥとジェンネが発展したとみることができる。すでに述べたように、この時期には、ガオを王都とするソンガイ王国がトンブクトゥを制圧し、ジェンネなどの内陸デルタを支配域にいれるようになっていた。15 世紀末に、ソンガイ王国でアスキヤ・ムハンマドが即位すると、トンブクトゥのウラマー(イスラーム学者)に庇護を与え、各地にカーディー(イスラーム法官)を任命したとされる<sup>15</sup>(Levtzion 1978: 340-341)。王国内の統治にウラマー

<sup>15</sup> 17 世紀に書かれたトンブクトゥの年代記によれば、1469 年、ソンガイ王国の暴君ソンニ・アリによって、トンブクトゥのウラマーたちは、連行され、一部は虐殺された(trans. Hunwick 1999: 93-95)。しかし一方で、ソンニ・アリは、一部のウラマーには敬意をあらわし、多くの女性を贈っている(ibid.: 95-96)。その後、1493 年にソンガイ王国の王位を継承したアスキヤ・ムハンマドは、トンブクトゥのウラマーを敬愛し、助言を求め、ソンニ・アリによって囚われたウラマーを解放し、ウラマーのウマル('Umar b. Muhammad Aqīt)をトンブクトゥの首長に任命したとされる(ibid.: 103)。このことは、17 世紀に書かれた、後の年代記では、アスキヤ・ムハンマドがウマルを訪問し、伺いを立て、ウマルがトンブクトゥの自治をアスキヤ・ムハンマドに確約させる問答をおこなうというようにより劇画化されて描かれている(trans. Houdas et

が積極的に関与するようになったのである。

興味深いことに、西アフリカ内陸の現存する、最も古いアラビア語史料は 15 世紀ごろに遡ることがわかっている。表 1-12 は、19 世紀以前のトンブクトゥにおいて著書を表わしたウラマーの一覧である。ここからは、トンブクトゥではおそくとも 15 世紀半ばごろから、自らの手による文書の生産を開始し、断続的に継続していったことが読みとれる。西アフリカ独自のアラビア語による文書の生産・流通の文化がこの時代に生じた。

	著者名	生没年	著作件数
①	MUHAMMAD al-Kābarī Abū 'Abd Allāh (Modibbo Muhammad)	fl. 1450	1
②	Sīdī YAHYĀ b. 'ABD AL-RAHĪM b. 'ABD AL-RAHMĀN al-Tha'libī al-Tadallisī	d. 1461/1462	1
③	MAHMŪD b. 'UMAR b. MUHAMMAD AQĪT al-Sanhājī al-Masūfī	b. 1463/1464 – d. 1548	2
④	MUHAMMAD b. 'UTHMĀN al-Kābarī	d. 1562	1
⑤	MAHMŪD b. MAHMŪD b. 'UMAR b. MUHAMMAD AQĪT	b. 1503/1504 – d. 1565	1
⑥	AHMAD b. al-hājī AHMAD b. 'UMAR b. MUHAMMAD AQĪT	b. 1522 – d. 1583	8
⑦	MUHAMMAD b. MAHMŪD b. ABĪ BAKR al-Wangarī (Muhammad Baghayogho)	b. 1523/1524 – d. 1594	5
⑧	AHMAD b. MUHAMMAD b. SA'ĪD	b. 1524/1525 – d. 1568	1
⑨	MUHAMMAD BĀBĀ b. MUHAMMAD al-AMĪN b. HABĪB b. al-MUKHTĀR	b. 1525 – d. 1606	6
⑩	ABŪ BAKR b. al-hājī AHMAD b. 'UMAR b. MUHAMMAD AQĪT (Bābakar Bēr)	b. 1526/1526 – d. 1583/1584	2
⑪	MAHMŪD KA'TI b. al-hājī al-MUTAWAKKIL KA'TI al-Kurminī al-Tinbuktī al-WA'kurī	d. 1593	1
⑫	AHMAD BĀBĀ b. AHMAD b. al-hājī AHMAD b. 'UMAR b. MUHAMMAD AQĪT	b. 1556 – d. 1627	68
⑬	MUHAMMAD b. AL-MUSTAFA' b. AHMAD b. MAHMŪD b. ABĪ BAKR-BAGHAYOGHO	unknown (fl. 16th?)	1
⑭	ABD al-RAHMĀN b. 'ABD ALLĀH b. 'IMRĀN b. 'ĀMIR al-Sa'dī	b. 1596	1
⑮	AHMAD b. ANDA AG-MUHAMMAD b. AHMAD BURYU b. AHMAD b. ANDA AG-MUHAMMAD	d. 1634/1635	3
⑯	MUHAMMAD b. AHMAD b. MAHMŪD b. ABĪ BAKR BAGHAYOGHO	d. 1655	8
⑰	MUHAMMAD b. MUHAMMAD BAGHAYOGHO b. MUHAMMAD GOR'D b. MUHAMMAD SĀJĪ	d. 1714/1720	3
⑱	SA'ĪD b. MUHAMMAD BAGHAYOGHO	fl. 1743/1744	1
⑲	Mulāy QĀSIM b. Mulāy SULAYMĀN	fl. 1800	1

表 1-12. 19 世紀以前のトンブクトゥのウラマーによって書かれた現存している著作件数 (Hunwick 2003: 14-42 から筆者作成) <sup>16</sup>

しかし、1591 年にサード朝モロッコのスルタン、アフマド・マンスールの侵攻をうけて、ソンガイ王国が崩壊し、ニジェール川中流域の政治的な秩序は不安定なものとなった。また、同時期には、西アフリカの大西洋岸にヨーロッパ諸国の交易拠点が形成され、ニジェール川中流域の政治経済が再編成されることになった。坂井は、こうした 17 世紀以降の政治経済の再編を以下の 3 点でまとめている。すなわち、(1)交易の中心がサハラ越え交易から大西洋岸貿易へと移行したこと、(2)金・コーラの実だけではなく、奴隷、アラビアゴム、

Delafosse 1981: 115-117)。ウラマーを重視する統治は、トンブクトゥに限定されず、たとえば、アスキヤ・ムハンマドの息子アスキヤ・イシャークが、マフムード・ブン・バガヨゴ(Mahmūd b. Baghayogho)をジェンネのカーディーに、彼の息子ムハンマド(Muhammad Baghayogho)が、ガオのカーディーに任命されている(trans. Hunwick 1999: 26-27, 64)。

<sup>16</sup> なお、著作ごとにその分量はまちまちであり、著作件数はあくまで目安である。現在、マリで報告されている限りでは、19 世紀以前の歴史史料はこの一覧に示した著者のものに限られている。

蜜蝋、牛皮、奴隷貿易のための食料としての穀物といった地域社会で生産される商品の交易がおこなわれるようになったこと、(3)人頭税を通じた地域社会の生産物への介入と奴隷の確保をおこなう国家の形成が生じたこと、である(坂井 2003: 90-103)。つまり、大西洋岸の奴隷貿易の未曾有の発展によって、西アフリカ内陸では、奴隷の「生産」と交易の著しい発展がみられた。

これと並行して、トンブクトゥで発展したアラビア語文書の生産・流通の文化は、各地へ拡散するようになる。サード朝モロッコによるトンブクトゥへの侵攻によって不安定な政治状況がサハラに生まれ、16 世紀後半や 17 世紀には困難な状況のもとでのマッカ巡礼は必ずしも果たされなくともよいというファトワー(イスラーム法見解)が出されるようになる(Al-Naqar 1972: 46-47)。ここでは、ウラマーと王権との密接な関係は失われ、マッカ巡礼にともなう知識の輸入も制限されることになる。すでに自律した知識の再生産の機能をもったウラマーたちは西アフリカ内陸で活動するようになっていったと推測される。たとえば、内陸デルタの南部のサバンナ地域との長距離交易を担ったジュラの商人たちは、自らの学術伝統をもつようになるが、これは 15 世紀末のトンブクトゥに由来すると考えられている(Wilks 1968, 1982, 2000)。このジュラを典型とするようなマンデのムスリムたちの「商業と学問のネットワーク」は、こうして 15 世紀以降に形成されるようになった(坂井 2003)。

最後に、民族誌や歴史史料から再構成される西アフリカ内陸の村落と国家の特徴をまとめておこう。

#### 1-6. 村落——親族原理と先住原理

ホートンによれば、国家をもたない西アフリカの諸社会を構成する体系として、(1)分節リネージ体系(親族原理)、(2)先住者と新参者との補完関係(先住原理)、(3)年齢組織や儀礼結社の 3 つの類型を示している(Horton 1971)。重要な点は、これらが定住と農耕を前提としており、かつ、論理的には、これらの三つの要素は相互に関連しつつ、(3)年齢組織や儀礼結社は(1)親族原理と(2)先住原理を基盤としているということにある。さらにいえば、1960 年代以降、内戦という例外状態を除けば、(3)年齢組織や儀礼結社はその影響力を失っているが、(1)親族原理と(2)先住原理は、かたちをかえつつも、持続的に影響力を保持している。

分節リネージ体系の成立は、定住を前提としている。一般論としていえば、定住化によって社会の構成員の流動性が減少し、生産と消費の単位に固定化が生じ、親族集団が構成

される(Rousseau 2006: 71-74)。分節リネージ体系は集団の内部の関係を組織化する原理であり、これを転用して、外部の集団を内部化する原理である。分節が高順位であればあるほど、社会的な記憶は不明確になり、祖先の積極的な「措定」によって、外部者を集団内部に取り込むことが可能となる。

先住者と新参者の補完関係は、リネージ間の関係を組織化する原理である。これは先住者が土地の霊と儀礼を通した契約を結ぶことで、土地の用益権を有し、これを儀礼を介して新参者に配分するというものである。この原理もまた、定住を前提とする。定住を前提としなければ、先住であるか新参であるかは基本的には意味をもたない。先住は居住地と農耕地の開拓、狩猟地の確保という点で社会的に重要であり、土地の霊との関係の構築という点で象徴的にも重要視される(Lentz 2013: 15-16)。さらに、土地の霊は祖先と同一視されていくのが一般的であり(ibid.: 16)、その意味では、先住原理は親族原理と関連している。

一般論としていえば、年齢組織は定住農耕と親族原理を前提として成立している。たとえば、メイヤスーがやや図式的に描いたように、家長の相続が年長者から若年者に対してなされることと、農業生産物の分配が年長者からなされることによって、西アフリカの農村社会では年長者が優位にある(メイヤスー1977[1975])。年長者と若年者の世代間格差が固定化されると(Rousseau 2006: 146-148)、世代間格差の実体的カテゴリーとしての年齢組織が出現すると考えられる(ibid.: 144)。

年齢組織と儀礼結社は多くの場合、前者が後者の基礎を成している<sup>17</sup>。また、儀礼結社の多くは先住の原理と関連しているように思われる。たとえば、仮面結社では、大抵の場合、重要な仮面ないしは結社長の相続は先住者によって独占されていた。他方で、政治上の権威者と儀礼上の権威者が異なる場合が多く、これは国家形成の阻害要因ないしは国家の要件を満たさない要素として捉えられてきた<sup>18</sup>。

上述の(1)から(3)までの要素は、村という居住パターンによって結実していた。西アフリカ内陸の国家をもたない社会において、政治の基本的な単位は村であった(Gallais 1960;

---

<sup>17</sup> たとえば、ポロ結社(真島 1991, 1997)、ボボ(Le Moal 1980)、ブワ(Capron 1973)の仮面結社があげられる。

<sup>18</sup> やや脱線するが、かつて木村(1986: 16)は、狩猟採集社会と牧畜社会に仮面の文化がみられず、農耕社会にのみ認められることを指摘していたが、西アフリカに限定すれば、問題は次のように解かれるのかもしれない。すなわち、仮面そのものは定住や農耕を前提としないが、仮面に意味付けを与える仮面結社は年齢組織を基礎とし、年齢組織は定住と農耕を前提とするがゆえに、仮面の文化は農耕社会にのみ存在する。言い換えれば、定住と農耕は仮面の成立の必要条件であり、すべての農耕社会に仮面が存在するわけではないため、定住と農耕は仮面の成立の十分条件ではなかった、といえる。



Capron 1973; Saul and Royer 2001: chap. 1)。村はその土地の用益権を根拠づける先住原理によって基本的には構成され、村の構成要素であるコンセションや街区は単一もしくは少数のリネージの集住、すなわち、親族原理によって成立している。

地域によって、あるいは論者によって、強調の差があるが、先住原理と親族原理は部分的に重複しつつ、村外のネットワークを構成している。先住原理についていえば、村内のなかだけではなく、村々のあいだでも先住原理が働き、相対的に古い村が象徴的・社会的に重要な意味をもっている(たとえば、Saul and Royer 2001: chap. 1; Lentz 2013: chap. 1)。これは特定のリネージが相対的に古く定住した集団となり、複数の村々に散らばっているという点で、先住原理と親族原理は部分的に重なり合っている。とはいえ、単一の最大リネージだけで特定の区画の村々がすべて構成されるということは考えられないため、先住原理と親族原理は完全に一致することはないだろう。つまり、論理的には、村外のネットワークは、先住原理を基礎としつつ、それに親族原理が付随すると定式化できる。おそらく先住原理と親族原理の重複が最も進んだパターンがニジェール河谷のカフ(*kafu*, *kafu*)であり(坂井 2015b)、ムフン川湾曲部ではこの先住原理の方がやや優越し(本稿 2 章 6 節)、よりパッチワークの同盟関係となっていたと考えられる。

先住原理と親族原理は生態的条件に結びついて村という形態そのものの再生産にも寄与していたと解釈できる。狩猟と移動耕作(*shifting cultivation*)は新しい土地を必要とし(Lentz 2013: 29)、さらに不安的な気候による飢饉は一部の村々の離散を余儀なくしたであろう。先住原理、親族原理は村内での地位を固定し、特定のリネージに優位に働くため、村を出て自ら新しい村で一旗揚げるという動機づけになった(ibid.: 29)。あるいは、他の村へ逃げ込むということも十分にありえたであろう。

一般論としていえば、西アフリカでは、土地の生産性が低く、かつ土地が豊富にある(Goody 1971a; Hopkins 1973)。土地の生産性が低ければ、生産量が経年的に累積して上昇せず、同じ土地に留まることにそれほどインセンティブが働かない。さらに、他の土地が豊富にあれば、村内での劣位に甘んじるよりは、他の新しい土地の開拓を選択するのが合理的である。人文地理学者のガレは、「村」という居住形態とそれを単位とした社会組織が、年間降雨量 500mm から 1,500mm の範囲に収まる西アフリカ内陸サバンナに広くみられることを指摘しているが(Gallais 1960)、これはこのような生態条件と先住原理・親族原理によって説明されるだろう。

まとめれば、定住・農耕以後の西アフリカの諸社会は、(1)分節リネージ体系を有する親

族原理と先着者が土地の用益権を配分する先着原理の二つの原理を基盤とし、(2)これらの二つの原理をもとに村落が一つの自律的な政治的な単位となっていたが、(3)親族関係は村落を超えたネットワークをもち、先着原理もまた村落間の新旧を基礎とした優劣がゆるやかに存在していたといえる<sup>19</sup>。そして、こうした村落は、植民地統治以降、統治の(人頭税徴集の)最小単位としての意味を付与されることになる(本稿 5 章)。

## 1-7. 国家——富の蓄積と暴力

前節後半で触れた、土地と粗放的な農耕との関係は、国家形成の要因として、1970 年代に人類学(Goody 1971a; メイヤスー1977[1975])と経済史学(Hopkins 1973)のそれぞれ代表的な研究者によって定式化された<sup>20</sup>。すなわち、西アフリカの諸社会を特徴づける条件は、土地それ自体の豊富さとその生産性の低さであり、それに適合した粗放的な農耕が採用され、土地よりも人間の保有が富の源泉となるということである。

この問題系を現在まで継続して論じているのは、開発経済学である(たとえば、峯 1999; 平野 2003, 2009)。たとえば、平野によれば、1960 年代以降、西アフリカを含むサハラ以南アフリカでは全体として、土地の生産性が向上せず、人口の増加とその労働力による耕作面積の拡大で生産量を上昇させてきたが、2000 年代以降、耕作地の拡大が限界に達しつつあるとされる(平野 2003, 2009)。つまり、土地と農法と労働(者/力)の結びつきは、少なくとも、20 世紀後半までは有効であり、少なくとも、戦争によって奴隷を「生産」することで富を取得していた戦争国家の成立以降、300 年間にわたって長期持続していた。

とはいえ、前節で検討した「村」では、一定の歴史的な条件が課されなければ、人間の保有が富の源泉になるとは言い難い。このことをまず、確認していこう。

### 1-7-1. 人間の保有が富となる条件

搾取という論点を含むかどうかという差があるが、グッディとメイヤスーはともに類似した論理を展開している。すなわち、土地が豊富であり、土地の生産性が低い場合、土地

---

<sup>19</sup> ただし、これは 20 世紀初頭から半ばまでの人類学の成果に拠っており、こうした「村」のあり方がどこまで遡るかは厳密には実証することは困難である。

<sup>20</sup> その後、人類学においては、こうした問題系そのものが議論の対象とならなくなり、経済史学においては、これらを前提とした研究が展開されることになった。なお、例外としては、これらのテーゼをアフリカ史全体に拡張し、広大な土地のフロンティアを「植民地化」していくアフリカ人という像で描き出した歴史家イリフェの著作がある(Iliffe 2007[1995])。

には価値が生じず、むしろ、「家」<sup>21</sup>内部の人員の多さが富を生じさせるため、西アフリカには一夫多妻制が広くみられると指摘している(たとえば、Goody 1973; メイヤスー1977: 63-91)。しかし、「家」内部での人員の操作は、それ自体として、富の蓄積をもたらさない。

まず、「家」の人員は世代を超えて継承されない。基本的には、家長が亡くなった場合、家長の住むコンセションは再編成され、新たに家長になった男性の母親以外の夫人たちが同じコンセションに居残り続けることは稀であるとされる(たとえば、Fortes 1971; Goody 1971b)。「家」の規模の拡大は、前節で触れたような原理で、端的に「家」の分裂を引き起こすだけである。

つぎに、女性が資本化すると捉える場合、女性の資本化は、少なくとも、ヒトないしはヒトの労働力の商品化を前提とする。メイヤスーは、婚姻を通じた女性と農業生産物の独占による若年者に対する年長者の支配関係を指摘したうえで(メイヤスー1977: 84-85)、年長者による女性の労働と出産の能力の搾取を指摘している(ibid.: 134)。メイヤスーの用語法とはやや異なるが、「女性、穀倉と資本」というタイトルをもじっていえば、西アフリカの農村社会では、「女性」と「穀倉」(＝農業生産物)という「資本」を年長者が独占し、若年者と女性を搾取しているという主張になる。しかし、メイヤスーはかなり性急に議論を運んでいることは間違いないだろう<sup>22</sup>。少なくとも、一般的にいて、搾取を立証するには理論的にも実証的にも複雑な手続きを要する<sup>23</sup>。

歴史的な条件は異なるが、2000年代のガーナ北部のダゴンバの農村における生産と分配

---

<sup>21</sup> 西アフリカの社会人類学では、「村」内部の社会的な生活の最小単位を物理的な建物と結びつけた「家内集団」(domestic group)として概念化していたが(Fortes 1969)、1990年代以降、レヴィ＝ストロースの「家」(house/maison)概念の再評価の流れのなかで(ex. Carsten and Hugh-Jones 1995)、物理的な建物とそこに居住する集団を不可分な「家」として捉えることが提起されている(Saul 1998; Tegan 2000)。

<sup>22</sup> ただし、メイヤスーの問題意識に寄り添うのであれば、彼の主張は、年長者と若年者の経済的な落差が若者組による反抗を生み、場合によっては、国家形成の引き金となるという立論の伏線となっているという点が見逃しがたい(たとえば、Meillassoux 1975; Bazin 1975, 1982)。

<sup>23</sup> たとえば、西アフリカの一夫多妻について家長による女性の搾取という立論の問題は以下の批判が決定的である。「これらの議論から明白なのは、家計や農村経済のしくみは思ったよりも複雑だという点である。男性が女性の労働を搾取していると仮定する前に、労働や分配の経済価値が評価されなくてはならないし、機会費用は地域、各家庭、女性ひとりひとりの経済状況の文脈が明らかにされなくてはならない。また、人々の経済的福利をあえて男女比較するのであれば、作物生産における労働と分配関係だけではなく、もっと全体的な議論が必要になる。女性が男性から貰った作物を料理に使い、最終的に男性の口にも入っているのであれば、男女の栄養状態を比較しなければならないだろう。また、耕起から除草までの費用も、男性、女性の家内労働の費用も検討の一項目に含まれなければならない。計算式をどのように組み立て、また実際どのように測るのか。複雑で困難な作業である」(友松 2015: 229)。

の詳細な検討から得られた結論は示唆的である。すなわち、多くの夫人と子を有する「家」は裕福だと評価されうるが、「家」の構成員の食糧確保や度重なる婚資などによって、「家」の規模の拡大は家長の負担の増加になっている(友松 2015: chap. 2)。興味深いことに、同様の指摘が、1930 年代にガーナ北部のタレンシを調査したフォーテスによってもなされている。フォーテスによれば、息子が多いがゆえに平均以上に裕福である者がよくみられるが、富の一部は嫁の数を増やすためや規模の大きくなった家族を養うために用いられ、最終的には分散してしまうという(フォーテス 1972[1940]: 304)。また、彼はこのようにも書いている。こうした息子が多いがゆえに平均以上に裕福である者には、社会的な特権が富に伴わない(ibid.: 304)。まとめると、「家」の人員は世代を超えて継承されず、その富もまた継承されないがゆえに、世襲される社会的な特権がないと解釈できる。また、国家形成がこのような富をもったものによってなされるという主張はなされてこなかった。ここに「村」の論理と「国家」の論理の線を引くべきだろう。

この線はどのようにして超えるのか。先述のフォーテスの論文には、そのヒントも記されている。「農業の危険率は極めて高い。雨は気まぐれであり、雨期に晴天が続いて穀物がだめになり、生活物資の困窮が広範にわたって生じることもある。一世代前には旱魃が続いて飢餓を招くと、人々は絶望的になって自分自身の子供、あるいは隣人の子供をつかまえてマンブルシ族に貸したり売りつけて奴隷にし、かわりに食料を手に入れたりした」(ibid.: 302)。補足すると、旱魃による困窮のために、自分の子を奴隷として売するという事例は、19 世紀末のトゥーガン(現在のブルキナファソ)のサモでも報告されている(Hubbel 2001: 40)。あるいは、ドゴンでは、植民地化によって奴隷制が禁止されたことで、嬰兒殺しと堕胎が増加したと報告されている(Paulme 1940: 433-434)。つまり、ヒトないしはヒトの労働力の商品化が生じている場合、「家」の構成員は貨幣を得るための安全保障になりうる、ということである。そして、西アフリカでは、ヒトの労働力の商品よりも、ヒトの商品、すなわち、奴隷が歴史的に先行していた。奴隷とはいかなるものであるのか。これまで同様、実態よりも論理の記述を重視して、整理していく。

### 1-7-2. 労働(者)と市場の分類学

奴隷とは、社会的な再生産を社会的に不可能にした状態であり、いわば、「親」となることを法的に不可能にしていることであり、その意味において、親族のアンチテーゼが奴隷である(Meillassoux 1986: 35; Finley 1980: 75, 77)。このように捉えると、外来者は奴隷と

連続的であるが、外来者はリネージュのなかに受動的に受け入れるのに対して(Meillassoux 1986: 28-33)、奴隷は積極的に戦争の結果として暴力的に取得される。とはいえ、外来者のように出身の共同体を自ら出てこないとすれば、奴隷の獲得は原理的にいって暴力的にならざるをえない。したがって、親族と奴隷のスペクトルの中間に外来者を位置づけるという定義は、論理的にいって、奴隷の獲得が暴力的であることを含みこむ。他方で、この外来者の受け入れという点で、奴隷制は「村」の論理の延長線上にある(図 1-7)。

「元奴隷かどうかは、そいつの先祖がどこから来たのか聞けばわかる。返事に窮したり、曖昧なところがあったら、そいつの先祖が奴隷だったっていうことだ。もちろん、だからといって、何があるわけじゃない<sup>24</sup>。」フィンリーとメイヤスーの立論の核心は、この言葉でも言い換えられるだろう。先住原理と親族原理は来歴を表象し、帰属と社会的カテゴリーを生じさせる。親族の極北は、来歴と帰属を失うことである。



図 1-7. 親族と奴隷のスペクトル(筆者作成)

これに対して、一部の論者は、アフリカにおける奴隷をアメリカ大陸での奴隷と区別し、前者は親族の同化システムの一つとして捉えられ(Miers and Kopytoff 1977)、主人と奴隷とのあいだに忌避や隔離がなく、奴隷身分に固定されないことを強調している(嶋田 1995: 104)。しかし、これらの主張はフィンリーとメイヤスーの立論の核心を外している。というのも、フィンリーとメイヤスーの立論は、日常生活における処遇のあり方を奴隷の定義に組み込んでおらず——悲惨さが一般的には奴隷の意味に含まれているが、奴隷制がなくとも悲惨さが生じていることは自明である——、従来もっていた来歴と帰属が失われることに焦点が当てられており、同化とはそもそもこうした来歴と帰属を消失させることである。

ところで、フィンリーは適切にも、労働力を商品化しているのが賃金労働者であり、ヒ

<sup>24</sup> これは、筆者がある地方都市の周辺の村々の起源譚の聞き取りを行うために、調査助手とともに地方都市の安宿に連泊していた頃、夜、彼から聞いた話であった。

トそのものを商品化しているのが奴隷であることを指摘している(Finley 1980: 68)。このことを 親族と奴隷のスペクトル(図 1-7)と組み合わせて考えると、市場の有無、商品化の対象を労働力／ヒト(労働者)によって分類すると、図 1-8 のような四象限が描けるだろう。

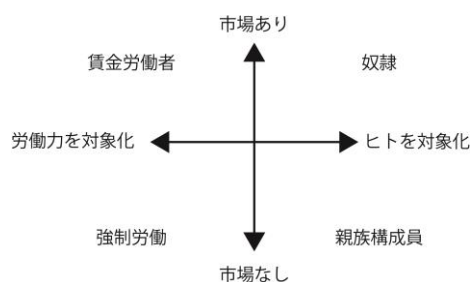


図 1-8. 市場と労働の四象限(筆者作成)

ここでいう「強制労働」は、主として、仏領植民地統治期における「強制労働」を念頭においている。ただし、この四象限における「強制労働」の定義には、自発(ボランタリー)か強制かという区分は入れておらず、あくまでも、「労働力を対象化し」「市場がない」という条件に限定している。というのも、奴隷の議論でも同様であるが、自発性の有無、強制性の有無は、修正主義者によっていくらかでも変更可能なものになってしまうからである。強制労働と「親族構成員」(「家内労働者」)とのあいだには、「共同労働」が位置するだろう。

いずれにせよ、この四象限によって示される重要な点は、(1)西アフリカでは植民地統治以前において労働力の対象化が生じなかったこと、(2)植民地統治は奴隷を廃止する代わりに強制労働に移行させたこと、(3)国家は親族の領域からヒトを引きはがすように作用したことである。

### 1-7-3. 奴隷社会と国家の形成

フィンリーは、奴隷社会(slave societies)と奴隷のある社会(societies with slaves)を区別し、前者では社会の 3 割から 4 割が奴隷で構成され、奴隷が生産の主要な資源となる社会と定義し、古代ギリシア・ローマ、ブラジル、西インド、アメリカ合衆国を具体例として指摘した(Finley 1980)。そして、おそらく 19 世紀には、西アフリカの国家をもつ社会は奴隷社会となっていたと推測されている。仏領スーダン植民地では、1900 年前後には 700,000 人の奴隷がおり、全人口の 25-33%が奴隷であったと推計されている(Klein 1987)。仏領ギ

ニア植民地においても、奴隷の人口は 422,000 人とされ、4 割から 5 割が奴隷であったと推計されている(ibid.)。

本稿の対象となるムブン川湾曲部を含むオート・ヴォルタ植民地では、奴隷についての植民地行政による文書が不足している。部分的な報告を統合すると、少なくとも、数万の奴隷がいたとされ<sup>25</sup>、総人口の 5%以内と推測される<sup>26</sup>。現在のブルキナファソの領域に対応する地域は、隣接する現在のマリやギニアと比して、奴隷が生産の主要な資源となることはなかったということがいえるだろう。つまり、広域に西アフリカという単位でみると、奴隷社会と奴隷のある社会が併存している状況が、少なくとも 19 世紀までには成立していたのである。

こうした奴隷社会は、これまで述べてきた、粗放的な農耕が採用され、土地よりも人間の保有が富の源泉となるという生態的な条件とは異なる大西洋奴隷貿易という未曾有の激変である歴史的な条件によって成立した。大西洋奴隷貿易の実証的な研究は、1990 年代以降、急速に進展してきた<sup>27</sup>。16 世紀から 1860 年代までの間にアフリカからアメリカ諸地域に航行した奴隷船に関する約 35,000 件の航海データがデータベース化され、奴隷船の名前、船長、船の所有者、航海データ、また「中間航路」を運ばれた奴隷の人数や年齢、性など 200 種類におよぶ情報がまとめられている。こうしたデータベースから、大西洋奴隷貿易において取引された奴隷の総数が図のように推計されている(図 1-9)。

<sup>25</sup> 1904 年の植民地行政による調査では、のちにオート・ヴォルタ植民地となる領域では、約 12 万人の奴隷がいたと推計されている。

管区	奴隷の人口
Gourma	15,000
Dori	41,500
Bobo-Dioulasso	7,550
Tenkodogo	15,000
Leo	15,000
Yatenga	8,090
Ouagadougou	—
Lobi-Gaoua	8,000
Diebougou	6,000
Kouri	—
合計	116,140

表は 1904 年の後にオート・ヴォルタ植民地となる管区ごとの奴隷の推計を示したもの。  
Bazero 2007: 132-135 から筆者作成。

<sup>26</sup> 1911 年時点で後のオート・ヴォルタ植民地となる地域の総人口は 2,869,983 人とされる (Gervais 1998: 73)。単純に、1904 年の奴隷の合計を、1911 年の総人口で割ると、約 4%となる。

<sup>27</sup> こうした研究をレビューしたものとしては、小林(2009)と布留川(2015)がある。

	Senegambia	Sierra Leone	Windward Coast	Gold Coast	Bight of Benin	Bight of Biafra	West Central Africa	Southeast Africa	All Regions
1519-1600	10.7	2		10.7	10.7	10.7	221.2		266
1601-1650	6.4			5.2	2.4	25.5	461.9	2	503.5
1651-1675	17.7	0.4	0.1	35.4	21.9	58.6	104.3	1.2	239.8
1676-1700	36.5	3.5	0.7	50.3	223.5	51.5	132.6	10.9	509.5
1701-1725	39.9	7.1	4.2	181.7	408.3	45.8	257.2	14.4	958.6
1726-1750	69.9	10.5	14.3	186.3	306.1	166	552.8	5.4	1311.3
1751-1775	130.4	96.9	105.1	263.9	250.5	340.1	714.9	3.3	1905.2
1776-1800	72.4	106	19.5	240.7	264.6	360.4	816.2	41.2	1921.1
1801-1825	91.7	69.7	24	69	263.3	260.3	700.9	131.8	1610.6
1826-1850	22.8	100.4	14.4		257.3	191.5	770.6	247.5	1604.5
1851-1867		16.1	0.6		25.9	7.3	155	26.8	231.7
All Years	498.5	412.7	183	1043.2	2034.6	1517.9	4887.5	484.5	11062
Share of Trade	4.5%	3.7%	1.7%	9.4%	18.4%	13.7%	44.2%	4.4%	100.0%

図 1-9. 輸出地域別の大西洋奴隷貿易の規模と変遷(Eltis 2001: table II, 網掛けは筆者)

16 世紀から 19 世紀までのあいだに、アフリカ全体からは約 11,000,000 人、西アフリカからは約 4,200,000 人、ムブン川湾湾曲部から南下した海岸部であるゴールド・コーストからは約 1,000,000 人が「輸出」された。ゴールド・コーストにおける奴隷の「輸出」の変遷をみると、18 世紀から急増していることがわかる。1471 年からポルトガルがゴールド・コーストで金の貿易を開始(Wilks 1982: 464)して以降、16 世紀を通して約 10,000 人ほどであった奴隷の「輸出」は徐々に増加し<sup>28</sup>、1676 年から 1700 年までの四半世紀のあいだに「輸出」された奴隷は約 50,000 人に達し、1701 年から 1725 年までのあいだでは約 180,000 人と 3 倍以上に膨れ上がっている<sup>29</sup>。18 世紀を通じてゴールド・コーストからは、約 870,000 人が「輸出」された。19 世紀になると、イギリスが奴隷貿易を非合法化し、増加傾向にあった「輸出」は急速に途絶えることになった。

ゴールド・コーストにおける奴隷貿易の拡張は、ゴールド・コーストの海岸部からヴォルタ川中流域までに版図を広げたアシャンティ王国の興隆に対応している<sup>30</sup>(Wilks 1975)。

<sup>28</sup> 16 世紀初頭には、他の西アフリカ海岸部からゴールド・コーストに「再輸出」されるケースがあった。ポルトガル商人によってベナンで買われた奴隷がゴールド・コーストに持ち込まれ、知られている限りでは、1529 年から 1535 年のあいだに合計 2,140 名が売却された(Daaku 1972: 239)。

<sup>29</sup> 17 世紀においては、金や奴隷をおさえて、象牙がゴールド・コーストから輸出された最大の商品であった。この時期の貿易についての論文では以下のように書かれている。「オランダだけでも 1623-36 年において、年間約 84,000 ポンドは象牙を輸出していた。18 世紀初頭のイギリスとオランダの象牙輸出をあわせても 160,000 ポンドである。ポルトガルは 17 世紀初頭において商品貿易にあまり積極的で放ったため、イギリスとフランスとポルトガルをあわせてオランダと同じ量になると思われる。したがって、象牙のトータルでの輸出量は年間 160,000 ポンドである」(Van Den Boogaart 1992: 375)。

<sup>30</sup> ただし、ウィルクスによるいわゆるビッグバン説は近年の研究では否定的な見解が示されて



ゴールド・コーストにおける奴隷と金の輸出によって、18 世紀初頭に成立したアシャンティ王国はそれ自体が奴隷獲得の手段であった度重なる遠征をおこない、貿易によって火薬と銃<sup>31</sup>を輸入し、さらに国家を拡張させていった。戦争によって奴隷を獲得し、この奴隷の売却によって、銃や馬などの武器を入手し、さらに戦争を拡張させるといった国家の形態は、ニジェール川中流域の 18 世紀のセゲー王国、19 世紀前半のマーシナ国、19 世紀後半のトゥクロール帝国、あるいは、ヴォルタ川上流域のモシの諸王国においても共通してみられる(たとえば、Bazin 1982; Roberts 1987; Bazémo 2007)。大西洋奴隷貿易は、奴隷と国家と戦争という新たな結び付きを西アフリカ内陸に形成させる有力な動因となった。

ゴールド・コーストにおける奴隷貿易は、19 世紀までにはムフン川湾曲部へと影響を及ぼすようになる。ムフン川湾曲部に隣接するガーナ北部の奴隷交易の歴史を概観したダールによれば、ガーナ北部での奴隷狩りが活性化するのは 18 世紀半ば以降であるとされる(Der 1998: 7)。この時期に、ガーナ北部のダンゴバ王国とゴンジャ王国がアシャンティ王国の軍隊に敗れ、毎年、奴隷をアシャンティ王国に供給することが義務づけられた(ibid.: 9-11)。これによって、さらに北部に位置する「国家をもたない」諸民族が奴隷狩りの対象となった(ibid.: 7)。19 世紀に入ると、状況はより悪化する。19 世紀初頭に、現在のニジェールのニジェール川湾曲部東部出身のザバリマ(Zabarima)/ザベルマ(Zaberma)と呼ばれるムスリムの集団が、現在のガーナ北部に移住し、グルンシを対象に奴隷狩りを活発化するようにになっている(Wilks 1989: 103-105; Der 1998: 18-20)。

重要な点は、ゴールド・コーストにおける奴隷貿易が非合法化された 19 世紀以降も内陸での奴隷狩りは終結しなかったことである。すでに 19 世紀には、各地の強力な国家を背景にして、ニジェール川中流域における綿花・綿布生産(Roberts 1980)、チャド湖周辺の染織物生産(Shea 2006)、ヴォルタ川下流域の森林地帯におけるパーム油生産(Sutton 1983)が発

---

いる。すなわち、ウィルクスによれば、15 世紀後半のヨーロッパ人のゴールド・コーストへの入植によって、現在のガーナ南部の森林地帯では、狩猟採集活動から定住農耕への大規模な変化が生じたと論じられているが(Wilks 1975)、考古資料からは紀元 1 千年紀には農耕・定住の証拠がみつかっており、かつ 15 世紀半ば前になぜか一度、遺跡が放棄されている(たとえば、Chouin and Decorse 2010)。

<sup>31</sup> 奴隷貿易以外の大西洋岸での貿易については、断片的なデータしか示されていないが、銃と火薬がヨーロッパからの主要な輸入品の一つであったことは確かである。たとえば、15 世紀後半のゴールド・コーストの輸入品のなかで火薬が最も大きな割合を占めていたこと(Daaku 1972: 240)、18 世紀後半にはイギリスから西アフリカへの輸出の約 45%を銃が占め、毎年 15 万から 20 万丁がもたらされたこと(Inikori 1977)、後の研究ではさらに多くの銃が持ち込まれ、バーミンガムの工場には西アフリカへの輸出に特化したものさえあり、奴隷貿易の拡張と武器輸出のあいだには相関がみられること(Richards 1980)が明らかにされている

展し、労働者としての奴隷の需要が非常に高まっていた。たとえば、ニジェール川中流域には、50 人から 200 人ほどの奴隷が集住したプランテーションが存在し、当時のニジェール川中流域の主要な都市であったシンサニの 19 世紀前半の代表的な商人は 3,000 人もの奴隷を所有していたとされる(Roberts 1980: 173)。また、この奴隷を用いて生産された穀物と綿布は、サハラ砂漠辺縁の岩塩と交換されていたが、サハラ砂漠辺縁においても、奴隷を用いたアラビアゴムの生産がなされるようになっていた(坂井 2003: 350-351)。

このように、18 世紀を通じて、年間約 9,000 人規模で「輸出」された奴隷の流れはおしとどめられ、そのうちの一部は内陸へと還流していったものと考えられる。19 世紀末の西アフリカ内陸の主要な都市の人口規模が 3,000 人から最も多く見積もって 50,000 人の規模であったことを考えると<sup>32</sup>、ひとつの都市分の人口が内陸内を移動していたことになる。ムブン川湾曲部では、20 世紀初頭においても 3,000 人規模の町は存在せず(本稿 2 章)、シンサニの商人が 3,000 人もの奴隷を所有していたことはムブン川湾曲部のような辺境の農村からすると、驚異的な規模のものであったことが理解できるだろう。

まとめれば、以下のことが指摘できるだろう。まず、「家」内部の人員の多さが富を生じさせるため、西アフリカには一夫多妻制が広くみられるが、これはヒトないしはヒトの労働力の商品化が生じている場合においてのみ、「家」の構成員は貨幣を得るための安全保障になりうることを指摘した。つまり、人員の増加は単純には世代を超えた富とならず、奴

<sup>32</sup> パークの旅行記の記述では、ニジェール川中流域の代表的な都市であった、セグーの 1795 年の人口が 3,000 人、シンサニの人口は 8,000 人から 10,000 人(1795 年)、11,000 人(1805 年)であったとされる(パーク 1978: 191, 198, 423)。また、ヴォルタ川中流域の代表的な都市の人口は、19 世紀の種々の報告においては、最大で 50,000 人、最小で 3,000 人となっている(Johnson 1965 v.1: 14, 24, 26, 35, 38, 40, 60, 89, 91, 95, 143, 150, 155)。

1906 年と 1909 年の仏領西アフリカの主要都市人口推計は以下。

植民地	都市	1906				1909			
		フランス人	シリア人	「原住民」	総人口	フランス人	シリア人	「原住民」	総人口
セネガル	ダカール	2200	21	20350	24831	1311	159	14987	17000
	サンレイ	1200	27	23201	24679	960	29	21591	22676
ギニア	カンカン	32	0	11634	11666	44	0	4095	4214
	コナクリ	393	41	5450	6238	458	118	6269	7252
コートディヴォワール	コロゴ	49	0	2063	2118				
	アビジャン					73	0	1131	1303
ダホメイ	ポルト・ノーヴォ	108	8	18218	19039	111	5	25000	25137
オー・セネガル・ニジェール	ボボ・ジュラソ	27	4	7757	7788	18	0	6500	6518
	バマコ	75	0	6463	6539	158	2	8300	8339
	セグー	27	0	6225	6255	35	0	5702	5721
	カイ	214	6	5695	5932	158	8	5762	5932
	ジェンネ	4	0	4897	4904	9	0	5200	5209
ニジェール	トンブクトウ	60	1	5000	5127	77	0	6230	6307
	ガオ	11	0	2542	2553				

なお、この表は以下の報告書(Gouvernement général de l'Afrique occidentale française 1906: 34-35; 1910: 68-69)に基づき、筆者が作成した。

隷(労働者)ないしは労働力の商品化が生じた場合においてのみ、貨幣を介して資本となりえる。

奴隷の市場は大西洋岸奴隷貿易によって非常に発展し、18 世紀以降には、奴隷は西アフリカ内陸の生産活動に振り当てられるようになり、遅くとも 19 世紀には、ニジェール川中流域、ヴォルタ川下流域の森林地帯、チャド湖付近で活発な生産活動がおこなわれるようになった。少なくとも、ニジェール川中流域は、その社会の構成員の 3 割以上が奴隷であり、奴隷が生産にとって必要不可欠となっていた。その意味で、ニジェール川中流域は奴隷社会であり、奴隷を「生産」するための国家を必要としていた。本稿の対象となるムブン川湾曲部は、こうした奴隷社会に隣接する奴隷をもつ社会であり、国家の後背地として奴隷を供給する場であった。

こうしたことを踏まえて、2 章では、さらに地域を限定させ、19 世紀までのムブン川湾曲部における農村社会がどのように形成されてきたのかを論じる。

## 2 章 ムフン川湾曲部の歴史的世界

本章では、19 世紀までのムフン川湾曲部における農村社会がいかなる特徴を有していたのかを明らかにする。1 節では、ムフン川湾曲部が、おおまかにグル語派の分布域のなかに位置していること、サバンナ地帯に位置し雑穀農耕を行なっていることをまとめる。2 節と 3 節では、ムフン川湾曲部の言語の分布がどのようなもので、そのことがいかなる含意をもっているのかを明らかにする。2 節では、言語の分布を把握するための留意点を指摘し、3 節では言語の分布からムフン川湾曲部ではモザイク状に民族集団が分布していることを明らかにし、グル語派内での重層的な移住に加え、マンデ語派の断続的な南下によって形成されたことを指摘する。4 節では、考古資料から 5 世紀頃から村落を単位とした定住の雑穀耕作を中心とした農耕社会が成立したことを指摘し、5 節では歴史人口学的な検討を加え、ムフン川湾曲部の村落の人口規模とその安定性を明らかにする。6 節においては、口頭伝承と歴史史料による村落の起源譚をまとめ、先着原理とそれによる村落の分散傾向を指摘する。7 節では、口頭伝承から 19 世紀前半のマフムード・カラントオのジハード以前の戦争を検討し、ムフン川湾曲部の社会が、村落間の同盟関係とその同盟関係によって単一の中心が構成されにくい特徴を有することを論じる。これらを踏まえて、8 節では、ムフン川湾曲部の社会の特徴を「国家に抗するシステム」としてまとめる。

なお、本稿でいうムフン川とは、歴史的には、ヨーロッパ人による探索以降、黒ヴォルタ川と呼称されてきた。現在、黒ヴォルタ川の湾曲部(上流域)が流れるブルキナファソでは、黒ヴォルタ川ではなく、ムフン川という呼称が採用され、行政単位の名義にも使用されているが、中流・下流域の流れるガーナでは黒ヴォルタ川という呼称が採用されている。したがって、以下では、ブルキナファソ国内の黒ヴォルタ川を指す場合には、ムフン川とし、ガーナ国内の黒ヴォルタ川を指す場合は、そのまま黒ヴォルタ川として言及する。

### 2-1. グル語派の分布と地理的特徴

本稿の対象とするムフン川湾曲部は、のちに詳しく述べるように、マンデ語派とグル語派の大きく分けて二つの言語集団が交錯している地域である。この地域は、グル語派の広域の分布をみるとその特徴がよく理解できる。

グル語派は先述のように、ニジェール・コンゴ語族に属し、黒ヴォルタ川(現、ムフン川)と白ヴォルタ川の上中流域に分布するため、ドラフォスの言語分類以後、ヴォルタ語派と

して記述されてきた<sup>1</sup>(Delafosse 1912)。ジャック・グッディは初めて上程したダガリについての民族誌の冒頭で、ヴォルタ語派について言及している(Goody 1967[1956]: 1-3)。そのうえで、グリーンバークらのその後の言語分類を参照し、基本的にはドラフォスを支持しつつ、ヴォルタ語派のロビと「モシのサブ・グループ」(後述するが、現在の言語分類の用語ではオティ・ヴォルタ語派(Oti-Volta)におよそ相当)が北緯 15 度から 8 度のスーダン気候に位置していることを図示している(図 2-1)。つまり、ロビと「モシのサブ・グループ」がサヘル地域と森林地帯との中間に位置していることを指摘している。

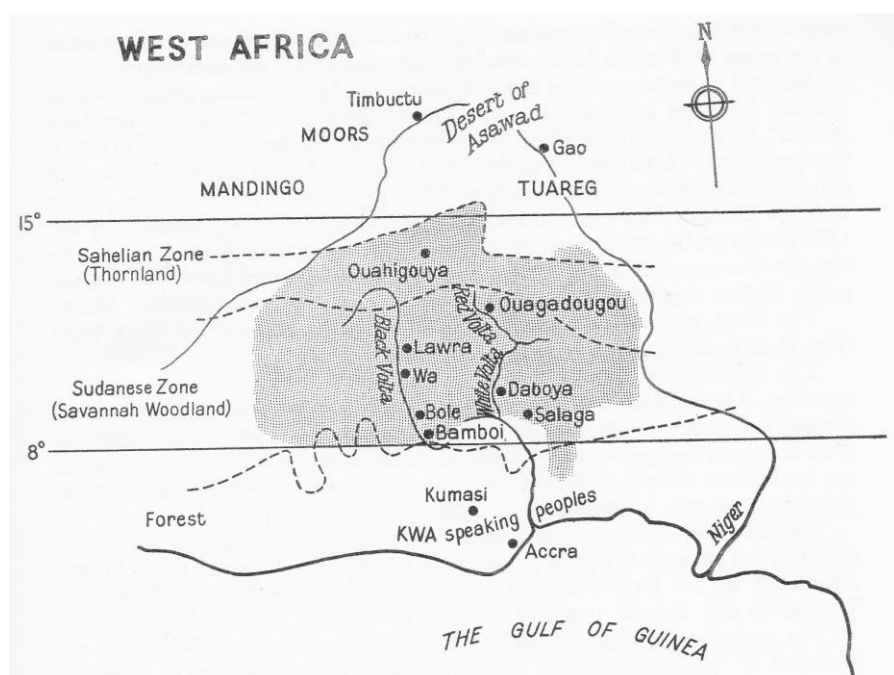


図 2-1. ロビとモシのサブ・グループの分布図(Goody 1967: 3)

当時の仏領植民地と英領植民地、現在の仏語圏と英語圏を横断してヴォルタ川流域の諸民族を包括的に捉える視座は、その後、グッディ本人を含めてほとんど失われてしまった<sup>2</sup>。その意味において、現在、グッディによって示されたグル語派の包括的な理解の情勢を再認識することに意義はあるだろう。

<sup>1</sup> このドラフォスのヴォルタ語派という分類は、後のオート・ヴォルタの成立時にも、若干の影響を及ぼすが、この点については、別の章で論じる。

<sup>2</sup> この例外としては、二つの論集(Fiéloux et al. 1993; Hagberg and Tengan 2000)や日本の人類学者川田とドイツの人類学者レンズの研究がある。しかし、これらの研究も基本的には国境をまたがる個別の民族の事例検討に留まっている。

しかし、他方で、グッディの図は現在の言語分類の水準からみると若干の修正を必要とする。まず、グル語派内部の言語のうち、ロビと「モシのサブ・グループ」のみをとりあげることに言語分類上の根拠がない。ロビはプロト・グルンシ・キルマ・ロビ(表 2-1, **proto-GKT**)に分類されるが、「モシのサブ・グループ」としてグッディが例示している、モシ、ダグバネ、マンプルシ、ダガリは西オティ・ヴォルタ(表 2-1, **proto-Oti-Volta** の下位分類)に位置づけられる。仮に両者を包括する、グル語派のプロト・セントラルで一括して把握したとしても、これらの言語集団と地理的に隣接するティエフォやヴィエモを除外するわけにはいかず、結局のところ、グル語派全体を分布の単位としなければならない。

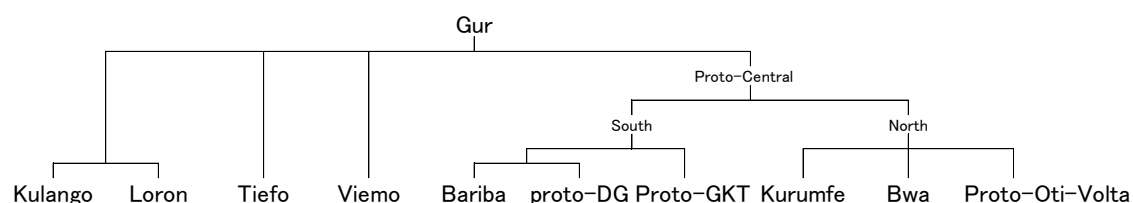


表 2-1. グル語派の言語分類(Manessy 1999: 16 を一部簡略化)

そこで、グル語派を広義で捉え、図 2-2 において、*Ethnologue* においてグル語派と分類されている諸言語の話者が多数派となっている地域を地図にまとめた。この図をみると、グル語派はブルキナファソを中心として、コートディヴォワール北部、ガーナ北部、トーゴ北部、ベナン北部の大部分、マリ南部、ニジェール南西部、ナイジェリア北西部の一部に広がっている。おおまかにいえば、ムフン川(黒ヴォルタ川)と白ボルタ川を中心に分布しているともいいかえられる。

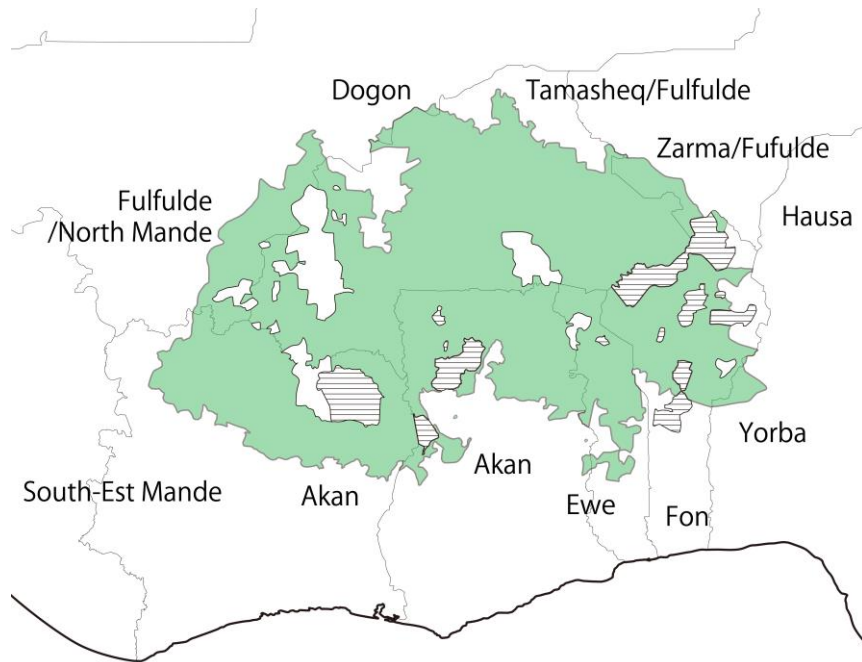


図 2-2. 西アフリカ内陸におけるグル語派の分布(Gordon 2016 におけるマリ、コートディヴ  
ォワール、ブルキナファソ、ガーナ、トーゴ、ベナン、ナイジェリア、ニジェールの言語  
分布図を基に筆者作成。なお、網掛けは自然保護地区)

図 2-3 は図 2-2 に 1951 年から 1989 年までの平均年間降水量の分布を重ね合わせたもの  
である。灰色の濃い部分が年間降水量 1,200mm 以上、灰色の薄い部分が 400mm から  
1,200mm、白色の部分は 400mm 以下である。おおまかにいえば、大部分が年間降水量  
400mm から 1,200mm のあいだに収まっていることがみてとれるだろう。厳密にいえば、  
年間降水量と一致するわけではないが、グル語派の分布域が北からスーダン・サヘル気候  
帯、スーダン気候帯と合致している。

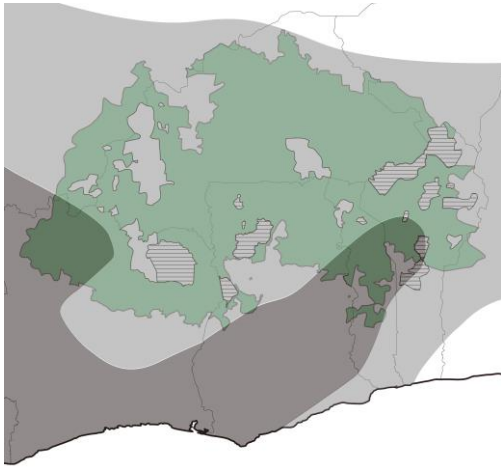


図 2-3. 西アフリカ内陸におけるグル語派と年間降水量の分布(図 2 と L'hote and Mahé 1996 から筆者作成)

年間降水量は生業のあり方とおおまかに相関している。モロコシ、ソルガム、トウジンビエの雑穀耕作はおよそ年間降水量 400mm 以上の地域でなされており(図 2-4)、キャッサバの根菜耕作はさらに南下するごとに単位面積当たりの耕作面積が大きくなっている(図 2-4)。つまり、グル語派のおよそ北半分は雑穀耕作を主としておこない、南半分はこれにキャッサバの耕作を加えた農耕をおこなう集団であるといえる。やや戯画化して付け加えれば、北はサヘルの牧畜民が、南は(コートディヴォワールを除いて)森林地帯のキャッサバを主とする農耕民が多数派となっている地域にそれぞれグル語派は隣接しているといえる。



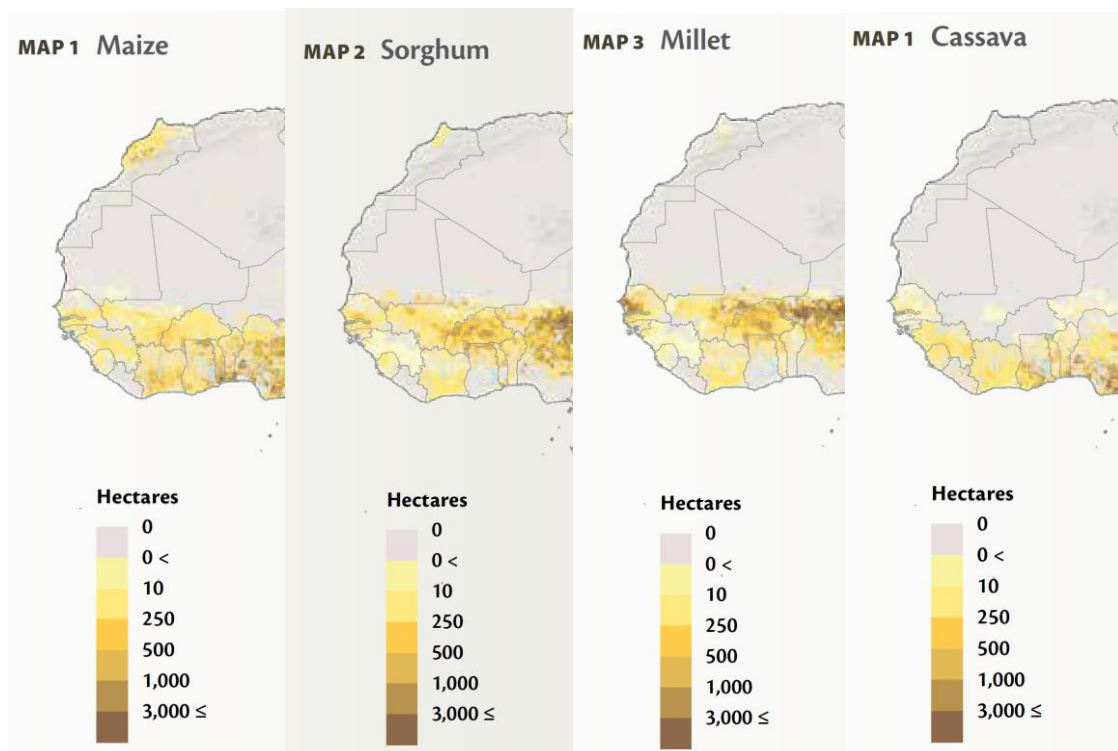


図 2-4. 主要作物の 100 km<sup>2</sup>あたりの耕作面積(Sebastian 2014 : 21, 23)

ふたたび、図 2-2 のグル語派の分布をみると、北西部に他の言語系統との入り食い状況が他の地域と比して激しいことが理解できる。この北西部に分布する非グル語派の言語集団はすべてマンデ語派に属している。そして、この北西部こそ、本稿で主題とするムフン川湾曲部とそれに隣接する地域である。

## 2-2. ムフン川湾曲部の言語分布の検討のための留意

ムフン川湾曲部とそれに隣接する地域の言語の分布をさらに細かくみていく。ただし、ここまでズームアップすると、言語分類の問題点が目立ってくる。あらかじめ、留意すべき点を断っておかなければならないだろう。

ここで用いた図は言語学上のまばらでむらのある成果とブルキナファソの人口統計局のデータを用いて作成されており、一定程度の単純化がなされていることを前提としている。したがって、つぎの三点が留意点として指摘できる。

まず、第一に、言語集団の単位を設定することの困難さがある。どこまでが方言であり、どこまでが独立した言語であるのか、その境界が曖昧となる場合がある。さらに、すべての言語において統一した基準で境界を設けることは困難である。たとえば、*Ethnologue* で

はブルキナファソ国内で 68 の言語が数え上げられているが(Gordon 2016)、これらの一部にはマチャ・サモ(Matya Samo)、マヤ・サモ(Maya Samo)、南部サモ(Southern Samo)などといった民族名の下位区分を設定しているものが少なくない。一方、筆者の調査したダフィン(行政上の記述では Marka)では研究者によってはダフィンの内部に 6 つの下位区分を設けているが(Diallo 2000)、ダフィンは一つの区分しかなされていない。したがって、統一を図るためには、民族内の下位区分は無視せざるをえない。

とはいえ、これらをすべて民族名に一致させたとしても問題は解消されない。これらの民族内の言語の差異が、他の民族間の言語の差異よりも異なっているといえるのかどうかといった比較のための標準的な尺度が設定されなければならない。たとえば、オティ・ヴォルタに分類されるモレ語とダガラ語の差異よりも、さきにあげた民族内の言語の差異が小さいといえるのかどうかといった問題が残るだろう。したがって、ここでの言語の分布は言語分類を基礎としつつも、自称の民族分類に基づいたものであるといえる。

第二に、*Ethnologue* の図は国内移住についてはほとんど考慮に入れていない。ブルキナファソは植民地統治以降、内戦などの時期を例外として、コートディヴォワールとガーナに移民を送り続けていることが広く知られているが、国内移住、コートディヴォワールやガーナからの移民が一定程度なされていることが指摘されている。少なくともサンプル調査では、国外移民や国内都市への移住よりも国内なされていることが報告されている(表 2-2)。たとえば、ムフン川湾曲部を包含する行政区分である「ムフン川湾曲地域」(Region de la Boucle du Mouhoun)においては植民地以前にはモシはマイノリティであったが、近年の地方行政の報告書ではこの地域で最も話されている言語はモシに対して先住のブワやサモやダフィンをおさえてモシがトップになっている(図 2-5)。もっとも、この元となった行政による調査の趣旨が不明確であり、やや混乱した情報となっていることは否めない。この調査は母語ではなく、「話している言語」を尋ねているため、モシの移住民とモレ語圏の都市への出稼ぎ経験者、この地域の最大の都市であるデドゥグにおけるリングフランカとしてのモレ語の使用者が混同した数値になっているように思われる。したがって、モシの移住民は図 2-5 で挙げた数値よりも大きく下回るであろう。一方で、筆者の調査した限りのわずかな範囲でも、独立以降に、村内にモシの居住区が構成されたり、モシの村が設立したといったことがみられたことも事実である。さらに、図 2-5 にみられるジュラ、フルベについても同様のことが指摘できる。いずれにせよ、言語分布の図はこのような変化をまったく考慮していない。

第三に、現実には言語分布図のように、明瞭に境界線が引かれているわけではない。これは村落自体と村落内部の双方においてあてはまる。たとえば、ブワとダフィンの境界域とされるところでは、双方の多数派の村落が入り組んだように分布しており、村落内部に他の民族の住人がいることは非常によくみられる状況である。言語分布の図についての明白な問題としては、ジュラの居住地域とされる箇所は村落部におけるジュラの人口規模などの明白な過大評価であり、実際には周辺に位置づけられる諸民族との混淆状況にある。これらの点に留意して、実際にはさらに複雑なモザイクが構成されていると想定する必要がある。

	国内		国外
	都市	農村	
1900-1931	9.8%	40.6%	23.7%
1932-1946	10.0%	40.8%	25.4%
1947-1959	9.6%	43.5%	38.0%
1960-1973	10.4%	46.5%	40.4%

表 2-2. 1900 年から 1973 年までのブルキナファソにおける移民の移住先の割合<sup>3</sup>(Gregory et al. 1989: 84, 86, 92, 98 より筆者作成)

<sup>3</sup> これは 1974-1975 年にブルキナでおこなわれた移民に関する調査に基づいている (Gregory et al. 1989: 74)。都市部と農村部、農村部はモシとその他にカテゴライズした村から 11 の村をサンプリングし、5 年以上の滞在経験者を移民とし、移民歴を質問し、まとめたものである (ibid.: 74-75)。元の論文では、出身地と移民先のカテゴリーとして、それぞれ、ワガドゥグ／ボボ・ジュラソ、その他の都市、モシ農村部、その他、コートディヴォワール、ガーナ、その他の外国が設定されているが、ここでは移住先のみをとりあげ、ワガドゥグ／ボボ・ジュラソ、その他の都市を都市、モシ農村部、その他を農村、コートディヴォワール、ガーナ、その他の外国を国外とした。なお、出身地にはコートディヴォワールなどの外国も含まれており、ここでの国内の農村への移住者は国外からの移住民も一定数含まれている。

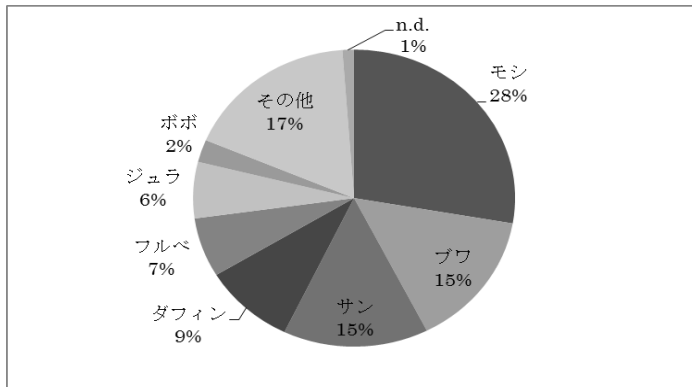


図 2-5. 2006 年現在のムブン湾曲地域における住民の使用言語割合(Lougue et Zan 2009: 42 から筆者作成)

しかし、これらの三点は言語分布から歴史を再構成することそのものを必ずしも退けるものではない。三点目からそれぞれ検討する。

まず、三点目は、言語分布の情報が非常にきめの粗いものであり、境界部においてはその傾向が顕著であることを示している。言い換えれば、言語分布の情報は広域においては意味をもちえ、ここから引き出せる含意は全体としての傾向であるといえる。

二点目は、植民地以前の歴史を再構成する際には、むしろ有益に働く。後述するように、植民地以前の 19 世紀では各地で戦争・奴隷狩りが頻繁に生じており、それらからの逃避を理由とした移住、長距離交易に従事した一部の人びとを除けば、広域の移動は一般の人びとにとって困難なものであった。したがって、植民地統治以降の国内外からの人の移動をほとんど考慮に入れていない言語分布は植民地以前の 19 世紀の言語分布に相対的に近いものとなっているといえる。

一点目は、言語分類を基礎としつつも、最小単位が基本的に自称の民族分類に基づいたものであるということであった。人類学では常識化したように、民族とはそれ自体として自律的に境界をもった集団ではなく、他集団との相互関係と差異化のなかで生態的・歴史的・政治的に構築される集団である(たとえば、Barth 1969)。また、国家による統治のなかで、人口把握や行政区分を通じて、民族が境界をもった集団として実体化されるといったことが生じた(たとえば、Amselle et M'Bokolo 1985)。したがって、ブルキナファソの生態的・歴史的・政治的条件を考慮しなければならない。

こうした民族間の差異化の状況は、グル語派の北のマリのニジェール川中流域と南のコートディヴォワールを対照的な事例としてとりあげることができるだろう。ニジェール川

中流域では、ニジェール川の氾濫のために生態条件がモザイク状に異なる空間が構成され、農耕民と牧畜民と漁撈民がそれぞれの生態条件に適応した生業形態をもち、これらの三者が相互依存関係にあることから、生業形態と民族表象が重なり合っていることが指摘されている(Gallais 1962, 1984; 坂井 1988)。これに対して、コートディヴォワールでは、フランスの植民地統治期に、ドラフォスによって示されたコートディヴォワール内の 5 つの言語分類をさらに細分化した「種族」(race)と「部族」(tribu)の分類をもとに、主として輸用作物生産の貢献度に基づく差別的な表象が与えられ、コートディヴォワールを「東」、「西」、「北」に分割する地域表象が民族的な実体をもつ区分として構成されたことが明らかにされている(Chauveau et al. 1981; 真島 1999)。つまり、ニジェール川中流域では主として生態的条件を基礎として政治的に民族表象を構成しているのに対して、コートディヴォワールでは植民地統治の志向性を基礎として政治的に民族表象が構成されている。これに対して、ブルキナファソの状況はどのように捉えられるであろうか。

前項の耕作面積の図 2-4 でみたように、ブルキナファソの大半は雑穀耕作による農耕民によって民族の差異を越えて居住している。ブルキナファソの北東部、北部に居住する牧畜民のフルベとタマシェク、長距離交易に従事したジュラ、ハウサ、ヤルセを除けば、基本的に住人は農耕民であり、生業が民族識別の指標とはなりえない。

他方で、植民地統治のあり方はコートディヴォワールとは相当程度異なっていた。詳細は本稿 4 章と 5 章で論じるが、要点を三つあげておきたい。

第一に、オート・ヴォルタ植民地(ブルキナファソの前身)は、主として「モシの国」として想定されていた。1919 年のオート・ヴォルタ植民地の成立には様々な要因があるが、主たる要因の一つは「人口密度の高い」とされたモシの労働力を用いて、輸出用換金作物の綿花生産をおこなわせる「開発」計画に求められる(本稿 6 章)。また、オート・ヴォルタ植民地は、1933 年の解体を経て、1947 年に再構成されたが、この時の再構成の起源と原動力はモシの各王の嘆願とその受理にあった(本稿 7 章)。つまり、オート・ヴォルタ植民地の二度にわたる成立の背景には、「モシの国」を成立させるという意図があった。

第二に、オート・ヴォルタ植民地という大区分も含めて、行政区分は多数派となる民族をしばしば指標としたが、少数派となる多民族が多く含まれていることは含意されていた。植民地統治初期の軍政期、オー・セネガル・ニジェール植民地期においては、管区(セルクル)名が、「ロビ」、「ボボ」、「モシ」といった管区内の多数派の民族名で記述されることがしばしばあったが、この時においても、管区内に他の民族がいることが把握されていた(本稿

4 章)。また、南東部の相対的に湿潤な気候を除けば、生態的条件に大差がなく、輸出用換金作物の生産量は主として人口規模によって左右されていた。そのため、管区ごとの生産量の差異は人口規模によって把握された。仏領西アフリカを単位とすれば、「人口密度の高い」とされた「モシの国」としてオート・ヴォルタ植民地は理解されたが、オート・ヴォルタ植民地内部は、民族というよりも管区単位で理解されることとなった。したがって、便宜的に多数派の民族名を用いることはあったが、民族は行政上の指標として有効ではなく、ほとんど用いられることはなかった。また、上述のように、コートディヴォワール植民地では、管区の上位カテゴリーとして「東」、「西」、「北」という分割が行われていたとされるが、このような管区の上位カテゴリーはオート・ヴォルタ植民地ではみられなかった。

第三に、オート・ヴォルタ植民地後期<sup>4</sup>では、政党政治の導入によって、西の RDA(アフリカ民主連合)と東の UV(ヴォルタ連盟)という政党の優位の差を、西のジュラと東のモシといった民族を指標として表象することがみられた。モレ語のブルキナとジュラ語のファソを結びつけた、ブルキナファソという国名に代表されるように、現在でも、ブルキナファソ国内外において、西にはジュラ語話者が多く、東にはモレ語話者が多いといったことが語られているが、こうした東西をジュラとモシで対比して語る言説は植民地期の状況に起源をもつものと考えられる。実際の事象としては、東西の差異はボボ・ジュラソとワガドゥグという都市の差異とそれらの都市を中心とした磁場としたものといえる(本稿 7 章)。

具体的には、RDA が優勢であったボボ・ジュラソで実際に RDA の活動を担ったのは、植民地統治以後にボボ・ジュラソに移住してきた近隣の植民地のジュラの商人や賃金労働者であり、それ以前に居住していたジュラとは異なっていた(ibid.)。つまり、政党政治の文脈においては、西の RDA の主たる担い手をジュラとすることに意味はあったが、西部の住人全体を表象するものとしてはほとんど意味をもたなかった。一方、ブルキナファソ西部におけるジュラ語話者の増加は、ボボ・ジュラソが植民地期に行政施設や商社の支店の設置に伴って、都市としての人口を増加させ、経済規模を大きくしていった結果として理解できる。すなわち、ボボ・ジュラソの周辺地域からの都市への人口流入によって、ジュラ語がリングフランカとして周辺地域で地位を高めていったことの帰結である。

しかし、後述するように、植民地後期の政党政治は初期の段階では民族の差異が強調さ

---

<sup>4</sup> オート・ヴォルタ植民地が再構成された、1947 年から 1959 年までの期間をここでは指す。

れたが、1950年代半ば以降、東西の政党の融和／妥協がおこなわれ、民族を基盤とした政党政治はほとんど行われることがなかった(ibid.)。1980年代までの複数政党制、1980年代半ばのサンカラの革命政権期に確立され、その基盤を引きついだコンパオレの実質的な一党独裁制を経て、2014年の政変以後の政治状況においても、政党が民族を基盤とすることはなかった<sup>5</sup>。

ボボ・ジュラソとワガドゥグという国内の二大都市を中心として形成されているリングフランカとしてのジュラ語とモレ語の地位の高さが、東西のジュラとモシの対比となったが、1950年代半ば以降、民族を基盤とする政党が構成されなかったため、民族が政治的境界をもつようにはならなかったといえる。現在でも、自他の識別としてジュラとモシの差異がステレオタイプな民族表象<sup>6</sup>として語られる場面は珍しいことではないが、こうした民族表象が政治的に動員されることはなく、境界が明確に線をもって出現することはない。

こうしたブルキナファソの詳細な生態的・歴史的・政治的条件を踏まえれば、ブルキナファソにおける言語分布はより正確で含蓄の深いものとして理解できるだろう。

### 2-3. ムフン川湾曲部の言語分布の意味

図 2-6 はブルキナファソの言語分布である。このことから読み取れる点は、(1)東部は広範囲にモレ語話者が広がっていること、(2)西部は言語集団がモザイク状に細かく入り組んでいること、(3)グル語派の分布域に入り込む形になっている言語集団はすべてマンデ語派である一方で、言語系統が必ずしも一致しないマンデ語派であることの三点である。

(1)東部は広範囲にモレ語話者が広がっていることはすぐに理解されるだろう。口頭伝承や歴史史料に基づく研究では、この地域には植民地統治の開始される直前において、北からヤテंगा、ワガドゥグ、テンコドゴというモシの王国がすでに広がっていたことが知られており(Izard 1985; Skinner 1989; Kawada 2002)、モレ語話者の広範な分布はこうした王国の勢力圏とされる地域と大枠においては合致している。こうした王国がどのような意味において統治を行っていたのかについてはおくとしても、王国の成立と拡張によって、モシの居住地域が広がり、戦争奴隷を前節で述べたようなかたちで自集団に組み込んでい

<sup>5</sup> このことは、サンカラの革命政権時代に、国名をブルキナファソとし、サンカラ自身が英雄としてナショナル・シンボルとなることで、ブルキナベ(ブルキナファソ人)というナショナル・アイデンティティが確立したことの裏返しであると考えられる。

<sup>6</sup> たとえば、モシの側からの語りとして、勤勉な農耕民のモシと怠惰で商業をやりくりするジュラといったことが語られる。

ったことが容易に推測される。

(2) 東部に比して、西部ではモザイク状に言語集団が入り組んで分布していることが理解できる。植民地期以前の 19 世紀、この地域には基本的に国家をもたない社会が広がっていた。結論からいえば、モザイク状の分布は重層的に民族が西部のムブン川湾曲部に移住してきた結果として解釈でき、特にモシ王国の拡張が生じていた 18 世紀から 19 世紀には諸王国の征服や奴隷狩りから逃避するための西部への移住が起こっていた。

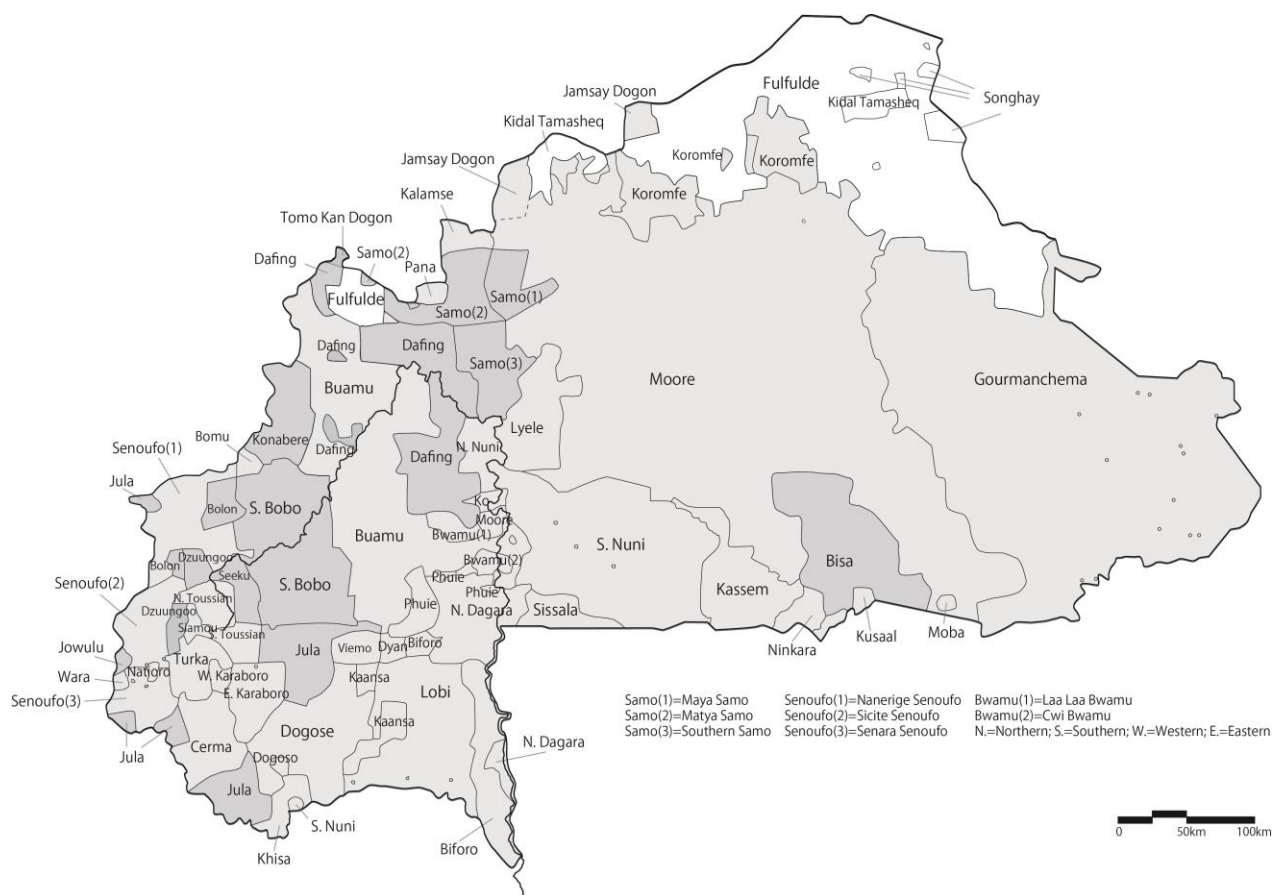


図 2-6. ブルキナファソの言語分布(Gordon 2016 におけるブルキナファソの言語集団分布図を一部簡略化し、著者作成。網掛けの濃い集団はマンデ語派、薄い集団はグル語派、白い集団はその他となっている。)

図 2-6 をみると(3)西部は言語集団がモザイク状に細かく入り組んでいることが指摘できる。まず、ムブン川湾曲部にみられるグル語派内部の言語系統をみていこう(表 2-3)。この表から明らかなことは、グル語派内部の言語系統では多様な言語集団がムブン川湾曲部に



居住していることである。重要な点は言語系統上の分岐からみると距離の離れている言語が地理的にはそれほど離れていない、ないしは隣接していることにある。過去に分化した集団がふたたび近接するようになった結果として解釈できるだろう。少なく見積もっても、数百年のタイムスパンで言語上の分岐を繰り返しつつ<sup>7</sup>、幾度にもわたる重層的な移入によって、19世紀にはこの地域に集住するようになっていた。

図 2-6 の言語分布が言語分類を基礎としつつも、自称の民族分類に基づいたものであることはすでに述べたとおりである。また、このような自称による民族の区分は、その民族集団それ自体の特性というよりも、他集団との差異化の結果として一般的に理解できることもまたすでに確認したとおりである。このことを考慮に入れると、非常に細かなレベルで生じている諸民族のモザイクはそれぞれの民族が他の民族との差異を認めた結果としても理解できるだろう。前節で述べた先着原理がこのことに影響を与えている可能性は否定できない。言い換えれば、重層的に移入が生じている状態のなかで、先着原理によって、自集団と他集団との細かな差異化が生じた結果として、諸民族のモザイクは捉えることができるだろう。

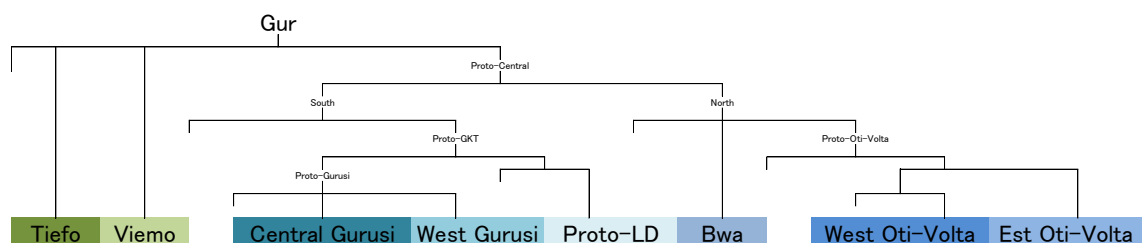


表 2-3. ムフン川湾曲部に分布するグル語派内部の言語系統(Manessy 1999: 16 を一部簡略化)

図 2-6 のムフン川湾曲部のマンデ語派の分布をみると、(3)グル語派の分布域に入り込む形になっている言語集団はすべてマンデ語派である一方で、言語系統が必ずしも一致しないマンデ語派であることがわかる(表 2-4)。一般的にマンデの起源地はニジェール川上流域

<sup>7</sup> モシ王国の成立時期には、さまざまな見解があるが、懐疑の度を強めた場合においても、遅くとも17世紀には、ヤテंगा、ワガドゥグ、テンコドゴの王国が成立している。この時点でモレ語を含む西オティ・ヴォルタの言語分岐が完了したものとみなすと、西オティ・ヴォルタより上位の言語分岐は19世紀の段階で、少なくとも200年以上は遡ることになる。

と想定されており、これらの集団においても「マンデから来た」ことは共通認識をもっている。途上の経路を無視すれば、ムブン川湾曲部からみて、北からこれらの集団が移住してきたことは確かなことである。

さらに興味深いことは、ムブン川湾曲部に分布し、地域によっては隣接しているマンデ語派の集団の言語系統が、グル語派内部のそれよりもさらに上位の分岐によってなされている点である。このことから想定されることは、全体の傾向としては、少なくとも 500 年以上<sup>8</sup>のタイムスパンで北からマンデ語派の南下が断続的に生じていたということである。

ムブン川湾曲部に分布するマンデ語派は、サモ、ボボ、マンディング(ジュラ、ダフィン)である。このうち、南下の時代の前後関係がはっきりしているのは、ボボとマンディングである。ボボには、ボボとザラ(ボボ・ジュラ)が含まれており、ボボはザラに対して先着であり、ザラはボボの言語に同一化したと語られている(Le Moal 1980)。また、ボボの南に隣接して分布しているジュラは基本的には 18 世紀に北上したコン王国の末裔にあたる(中尾 2016a: 152-158)。つまり、ボボとマンディングでは、ボボのほうが南下が古いことが確かなものといえる。

他方で、マンディング内の下位区分とされるジュラ語とダフィン語では言語上のほとんど差異がみられず、リングフランカとしてのジュラ語の地位が確立した現在ではジュラ語の「方言」としてダフィン語はみなされている。ダフィンのサファネに残されたアラビア語の手稿書によれば、16 世紀後半にはサファネにダフィンが居住していたこと(Ray 1998: 138)、18 世紀初頭の史料にダフィンとダフィンの主要な村落の一つであるサファネについての言及があること(Dupuis 1824: cxxx, cxxxi; Wilks 1968b: 166)、口頭伝承ではサファネよりも古いダフィンの村が数多くあることから、15 世紀にはダフィンの南下が開始されていたと考えることができる。

---

<sup>8</sup> 一般的に、マンデ語派の拡散の起点は 15 世紀の「マリ帝国」の崩壊に求められる。しかし、表 2-4 にみられるように、言語系統上の分岐があまりにも早い段階で生じていた、サモ、ボボ、マンディング(ジュラ、ダフィン)の三者の南下の時期をひとしく 15 世紀に求めることは、論理的にいて、妥当ではない。おそらくサモやボボの分岐は 15 世紀よりも遡るものと推測される。

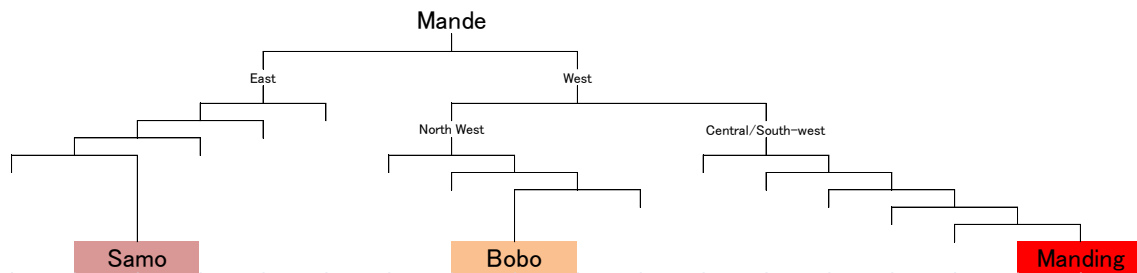


表 2-4. ムフン川湾曲部に分布するマンデ語派内部の言語系統(Williamson and Blench 2000: 20 を一部簡略)

これらの言語分類上の民族の差異を裏付け、別の意味を引き出した研究として、ムフン川湾曲部の一部を含むブルキナファソ中部から南部にかけて分布する集団を対象とした、遺伝学者と言語学者による共同研究の成果がある<sup>9</sup>(Barbieri et al. 2012)。この研究では、父方から遺伝する Y 染色体ハプログループが言語分類上の差異と対応するかたちでそれぞれ異なっていたことを明らかにしつつ、他方でミトコンドリア DNA ハプログループでは諸民族間で有意な差異がなかったことを報告している(ibid.、図 2-7)。つまり、言語集団は男性の祖先を共有しているが、女性の祖先を共有していなかったこと(ibid.)、言い換えれば、長期的なタイムスパンでみると女性の何らかのかたちでの交換が生じていたことを示している。

以上をまとめよう。ブルキナファソの言語分布からは、モシの諸王国があったブルキナファソ東部とは対照的に、ムフン川湾曲部は民族集団が細かくモザイク状に分布していることがわかった。こうしたモザイク状の分布は、グル語派内での重層的な移住に加え、マンデ語派の断続的な南下によって成立したものであるとみることができる。遺伝学的には、これらの民族は父方の祖先を実体的に共有する集団であるが、母方の祖先は少なくともブルキナファソ・レベルでの共有がみられ、民族は相互に自律的なアイデンティティーを保ちつつ交流をもっていたということであった。

<sup>9</sup> 2008 年、ブルキナファソの文部科学省の承認を得て、北部サモ、南部サモ、マルカ、ピサ(以上がマンデ)、サモヤ(Samoya)、パナ(Pana)、モシ、リエラ(Lyela)、ヌーナ、カッセーナ(以上がグル)の人びとから 352 のサンプルをとり実施した。なお、サンプル取得者には、出生地、両親、祖父母の母語についての確認のインタビューをおこない、言語集団の特定を行なっている(Barbieri et al. 2012)。

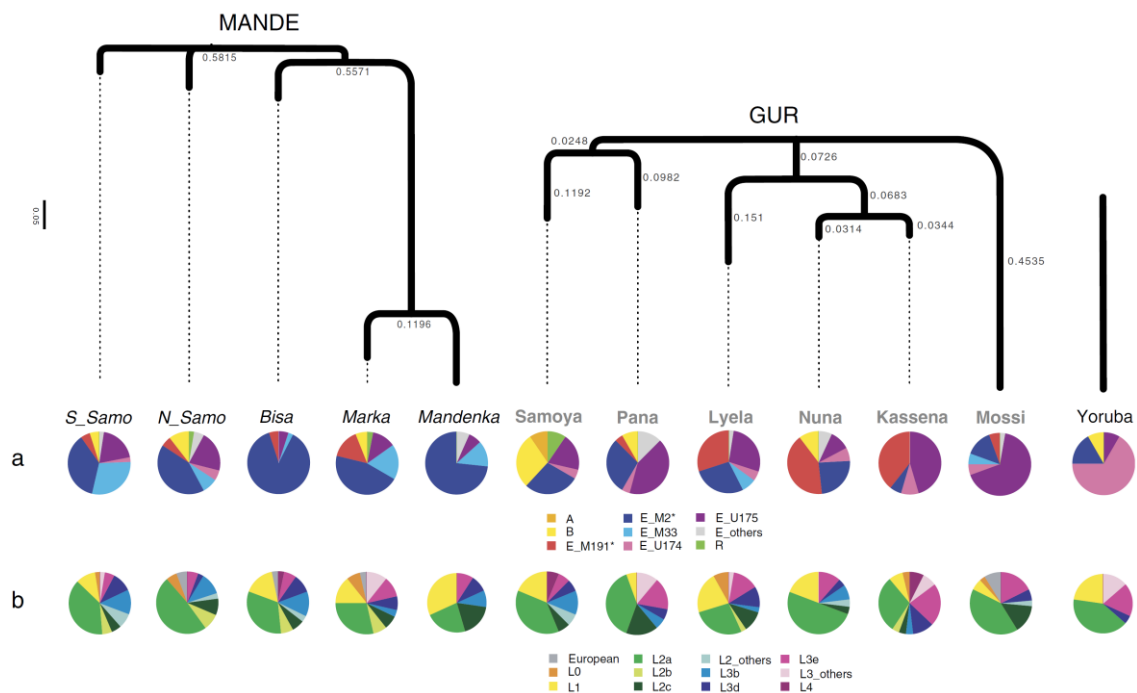


図 2-7. ブルキナファソ中部の諸民族の Y 染色体ハプログループ(a)とミトコンドリア DNA ハプログループ(b)の割合と距離(Barbieri et al. 2012: fig. 3)

## 2-4. ムフン川湾曲部の概観

これまでムフン川湾曲部をグル語派の分布から広域に捉えてきたが、さらにズームアップしてムフン川湾曲部の全体を概観したい。

ムフン川湾曲部の中心地域は、スーダン・サヘル気候に位置し、年間降水量が 700mm から 900mm ほどである(Lougue et Zan 2009: 24)。この地域の大半は農耕民であり、5 月ごろから 9 月末ごろまでの雨季に播種や除草がおこなわれ、乾季の 10 月ごろから 1 月ごろまで収穫が行われ、雨季の始まる前の 5 月ごろに耕起などの農地の準備がなされる。トウモロコシ、トウジンビエ、落花生、ゴマ、綿花、野菜などの栽培がなされ、現在では乾季のあいだに若者が出稼ぎに出ることが一般的であるが、かつては一部の人間がこの時期に南の森林地帯のコーラの実と北のニジェール川中流域の岩塩の取引に従事していた。ただし、この地域は後述するボロモを除き、取引の拠点が出現することはない、非常に小規模の営みであったと推測される。

ムフン川付近では漁撈がおこなわれているが、小規模なもので漁撈民としてアイデンティファイしている集団はいない。川沿いの村では小規模の水稲耕作もおこなわれているが、大規模なものではなく、ニジェール川中流域のように地域全体の生業に影響をあたえるよ

うなものではない。牧畜民のフルベは特に 19 世紀以降から移住してきたとされている。村の起源伝承では農耕民だけでなく狩人が登場する場合があります、かつては集団猟が一定の社会的経済的な意味をもっていた可能性がある。しかし、抵抗戦争以後の武器徴発や 1960 年代以降の開墾による森林の減少などによって、現在では、狩猟そのものの意義が失われている。また、狩人としてのアイデンティティを保持しているリネージも 19 世紀以前において狩猟のみによって生計を立てていたとは考えにくく、過去においても現在でも、基本的には農耕民を中心として社会が構成されている。

西アフリカ内陸に広くみられる特徴である、世襲の職能集団も存在している。かつては、農民としての自由民、鍛冶屋・土器つくりとグリオなどの職能民、奴隷の三層にわかれ、各層内での内婚が義務づけられていた。ただし、すべての村に職能民が必ず居住していた／しているわけではない。また、奴隷の取引は後述するように、一部ではなされていたが非常に小規模なものであったと考えられる。

この地域では、言語の異なる民族集団の農耕民が複数混在している。大雑把に言えば、ムブン川の湾曲部の西部と北西部はブワ、北部から中部はダフィン、北東部はサモ、南東部にコ、南西部にダガリが居住している。西アフリカ内陸で広くみられる、先着の原理があり、土地に最初に来たものがその土地で拓いた村落の宗教的・政治的な長である「土地の主」(*masa*)となっている。土地の主の役割や含意は民族、あるいは地域によって微妙な差異があるようであるが、ダフィンでは「土地を統べる者」を意味する。土地の主は土地の精霊祭祀をおこない、土地の用益権を有している。植民地化以降、こうした土地の主は村長(*chef du village*)に任命されることとなったが、村長の解任などを理由に村長と土地の主が分離した村もあった。また、土地の主は供儀を行うため、ムスリムが土地の主になることはできない／かったと考えられている。現在では、村落は多民族で構成されているが、マジョリティはいずれかの民族であり、土地の主はほとんどの場合、マジョリティの民族の出身者である。

サヘルの乾燥地域と森林地帯の縁のあいだの西アフリカの大部分の地域では、村落がエスニシティもしくは言語的つながりとは関係なく居住の典型的な形態である、とガレ(*Gallais 1960*)は指摘している。彼によれば、村落は物理的な複合物ではなく、社会政治的組織の独自の形態であり、社会的政治的な基本単位であった。こうした認識は、マリ南部とブルキナファソ北部のブワの社会の民族誌を描いたカプロンの報告によっても確かめられる(*Capron 1973*)。もっとも、この地域には、村落を越えた親族間のつながりや、最も古

い先着の村落の土地の主による村落を越えた緩やかな影響力や、村同士の同盟関係があり、すべての事柄が村落で自閉していたとは考えられないが(Saul and Royer 2001: chp. 1)、一般的にいて、少なくとも現在では、村落は政治的に一つの単位をなしていたとされている。ある村落が別の村落に隷属するというような関係はみられず、基本的には村落を単位として政治的な意思決定がなされていた。

植民地統治以前のこの地域を知る手掛かりは主として口頭伝承であるが、発掘調査も行われており、二つの遺跡についての報告がなされている。

一つ目はムブン川湾曲部のデドゥグから北西に 20km ほどのトラ・シラ・トモ(Tora Sira Tomo)遺跡(700-200 BC)である(Holl and Kote 2000; Holl 2009a)。この遺跡では製鉄場が発見され、サハラ以南アフリカの製鉄技術の独自発展の有力な証拠とされている(Holl 2009b)。製鉄技術の評価はおくとしても、この地域で 2000 年以上居住があったことが確かめられているといえる。二つ目はムブン川湾曲部のキリコンゴ(Kirikongo)遺跡(2th-15th AD)である(Dueppen 2012)。この発掘の報告では、5 世紀頃より定住化が生じ、外部の威信財なしに独自に発展し、8 世紀から 12 世紀のあいだに鍛冶屋に権力が集中したが、後の時代に脱中心化とされている。この種の立論の妥当性はおくとしても、タカラガイとガラス・ビーズが少量出土しており、かつこうした「威信財」が明白な差異化の指標となりえていないことは確かである。

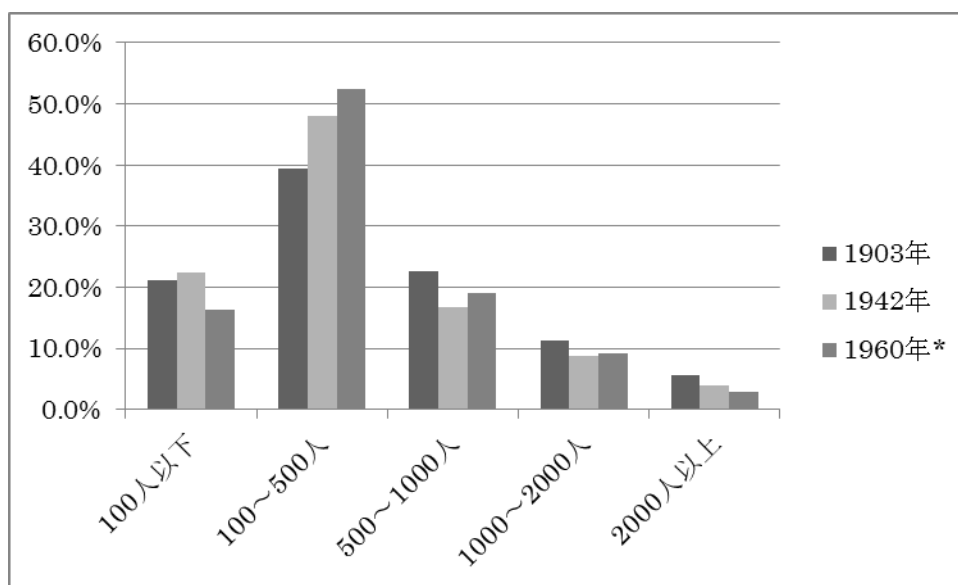
重要な点は紀元前 7 世紀頃から狩猟採集活動する集団がこの地域で居住を開始し、5 世紀頃より定住化し農耕を営む集団が出現したという点にあるといえるだろう。さらにいえば、こうした遺跡は大規模な集住を示すものではなく、先に指摘した通り、中央集権的な秩序を示す明確な遺物も出土していない。この地域のダフィンの口頭伝承(Koulibaly 1970; Blegna 1990)とブワの口頭伝承(Cremer 1924; Kan 1986)では、村の起源譚が移住者の話であること、口頭伝承で伝えられる最も古い村は現存していないこと、村のあいだでの戦争がしばしば生じ、覇権を握るような村が出現したこともあるが現在まで存続しなかったことが明らかになっている。また、この地域全体の歴史を物語るような口頭伝承は存在していない。

つまり、定住による雑穀耕作を開始した 5 世紀頃より村落を単位とした農耕社会がこの地位に広く分布していたことが想定される。次節では、この村落と村落間の関係を人口規模から検討していく。

## 2-5. ムフン川湾曲部の村落の人口規模と特徴

図 2-8、表 2-5 で、ムフン川湾曲部を含む、1903 年のクリ(Koury)管区の 71 の村落、1942 年のデドゥグ管区の 125 の村落についての人口規模の分布と 1960 年のオート・ヴォルタ全体の村落における人口規模の分布をまとめたものである。なお、1903 年と 1942 年に記載のある村落は部分的には一致しているが、大半においてはそれぞれ異なる地域を対象としている。また、これら二つの村落ごとの人口統計は、管区内のすべての村落を網羅しているわけではない。その意味において、この図表で示されていることは、厳密に言えば、経時的な変化ではない。

しかし、むしろ、この図表からは、村落の人口規模の分布が概して同じような傾向をもっていることが理解されるだろう。すなわち、人口規模が 100 人から 500 人の村落が最も多く、これより小規模の 100 人以下の村落、やや規模が起きくなった 500 人から 1,000 人の村落がそれにつづき、1,000 人規模の村落が全体の約 1 割、2,000 人以上が 5%以下となっている。



	1903年	1942年	1960年*
100人以下	21.1%	22.4%	16.3%
100～500人	39.4%	48.0%	52.5%
500～1000人	22.5%	16.8%	19.1%
1000～2000人	11.3%	8.8%	9.2%
2000人以上	5.6%	4.0%	2.9%

図 2-8, 表 2-5: ムフン川湾曲部における村落の人口規模 (ANOM 14miom/688 Monographie du Cercle de Koury. 1903.; CNABF 44V48 Etat par cantons et villages de la population de la subdivision de Dedougou, 16 juillet 1942.; Clairin 1961 : 19 から筆者作成。\*はオート・ヴォルタ全体における村落の人口規模の分布を示している)

さて、ここで用いた史料は植民地期の人口統計であるが、この情報はどれほどの信憑性があるのだろうか。結論からいえば、オート・ヴォルタ全体としては人口のやや過小評価が推測されるが、村レベルではあまり誤差がないものと考えられる。以下にその理由を手短かにまとめる。

まず、仏領植民地における人口統計の歴史的な発展を概観すると、基本的には、1945 年以前では人口統計はかなり大まかなものにとどまっていた<sup>10</sup>(Gervais and Marcoux 1993:

<sup>10</sup> フランス本国において人口統計の近代的なデータ収集と統計学が行政のなかで確立されたのは20世紀前半のことであり、植民地においては、1943年に植民地統計(le colonial des statistiques)が設立し、1944-1946年に、最初の統計年鑑(l'Annuaire statistique)が刊行され、1945年以降、人口統計のための教育機関の設置と法整備がなされ、国立人口学研究所(l'Institut National d'Études Démographiques)が1946年に成立し、1946年以降にサンプリング・サーベイ技法が導入された(Gervais and Marcoux 1993: 385-386)。



385)。仏領西アフリカ全体の人口統計の問題点としては、(1)領土の広大さに比して調査を担う行政官の人員が圧倒的に足りないこと、(2)人口はほとんど人頭税の徴集のためのデータであり、人頭税が課される対象<sup>11)</sup>のみが数え上げられた可能性があることが指摘されている<sup>12)</sup>(Gervais 1993b: 24)。なお、(2)については、オート・ヴォルタでは 1930 年代に非徴税対象者も人口統計に組み込まれ、1937 年からは村ベースでの人頭税の徴集から世帯ベースでの徴集への変更が行われており、改善がなされている(Cordell and Gregory 1982: 210)。

行政官の人員不足と人頭税徴集のための人口統計という問題点は人口の過大評価と過小評価のどちらにも作用している(Cordell and Gregory 1980, 1982, 1983; Gervais 1983)。一方で行政官はより多くの人頭税を徴収するために人口を過大評価しようとし、他方で住民は人頭税逃れのために少なく申告したり、一時的な離村をおこなうことで過小評価にしようとする。結果的に、過大評価と過小評価のどちらに振れていたのか、評価することは困難なものとなっている。

大まかにいえば、オート・ヴォルタを単位としてはやや過小評価であった可能性が高い。仏領西アフリカ全体では、1950 年から 1959 年のあいだの年平均人口増加率が 4.41%であったが、この数値は明らかに高すぎるものが指摘されている(Gervaisb 1993: 26)。オート・ヴォルタでは、1951 年から独立後の最初のセンサスが行われた 1961 年までの(連続的)年平均人口増加率は 3.68%であり<sup>13)</sup>、やや高いと考えられる。これは独立後の年平均自然人口増加率(移入による人口増加を省いた増加率)をみると明らかである。

サハラ以南アフリカでの 1950 年から 2004 年までの年平均自然人口増加率の最大は 1980 年から 1984 年の 2.9%であり、国別年代別で最も高い数値は 1980 年から 1984 年のケニアで 3.8%である<sup>14)</sup>(Tabutin et Schoumaker 2004: 592-593)。オート・ヴォルタの 1950 年代において、1980 年代を上回る保健衛生が改善したとは到底考えられない。したがって、年平均人口増加率は大きくとも 2%と想定しなければならない。さらに、次章で述べるように

---

<sup>11)</sup> 人頭税が課される対象は領域によって異なっており、一部では 15 歳以上であり、他方では 8 歳以上であった(Gervais 1993b: 24)。

<sup>12)</sup> これらの他に、人口統計の情報が末端から上層部へ伝達される際の誤記入などの誤差、情報が上層部によって操作される可能性などが指摘されているが(Gervais 1993b: 25)、ここでとりあげた村レベルの人口統計は末端の情報であるため、これらの点は該当しない。

<sup>13)</sup> オート・ヴォルタ植民地をカバーする範囲の人口の変遷は Gervais 1998: 73-75 がまとめている。この数値は Gervais 1998: 73-75 から算出した。

<sup>14)</sup> なお、1950 年から 2004 年までのデータは、1950-1954 年、1960-1964 年、1970-1974 年、1980-1984 年、1990-1994 年、2000-2004 年と区切られている(Tabutin et Schoumaker 2004: 592-593)。

1920年代から現在に至るまでブルキナファソ(オート・ヴォルタ)はコートディヴォワール、ガーナ(ゴールド・コースト)へ継続的に移民を送り続けており、人の移動による人口の変動はむしろ減少に働いた。オート・ヴォルタにおける1961年統計と1958年統計のあいだには約100万人の落差があり、1961年統計に合致させて考えるべきである。

そこで、得られている統計値から人口増減の傾きの変化が生じている年代ごとに連続的年平均人口増加率をもとめ、1961年統計から1910年までの人口推計を計算し、得られている統計値と比較したものが図2-9である。1911年<sup>15</sup>と1942年の推計値と統計値の差をもとめると、それぞれ、約500,000人、約640,000人、割合では約17%、約21%、過小評価されている。つまり、推計では、人口が統計値よりもそれぞれ約1.17倍、約1.21倍大きいと想定される。そこで、先に示した1902年と1942年の統計値を村ごとにそれぞれ掛け合わせ、その人口規模の分布をふたたびまとめたものが図2-9と表2-6である。

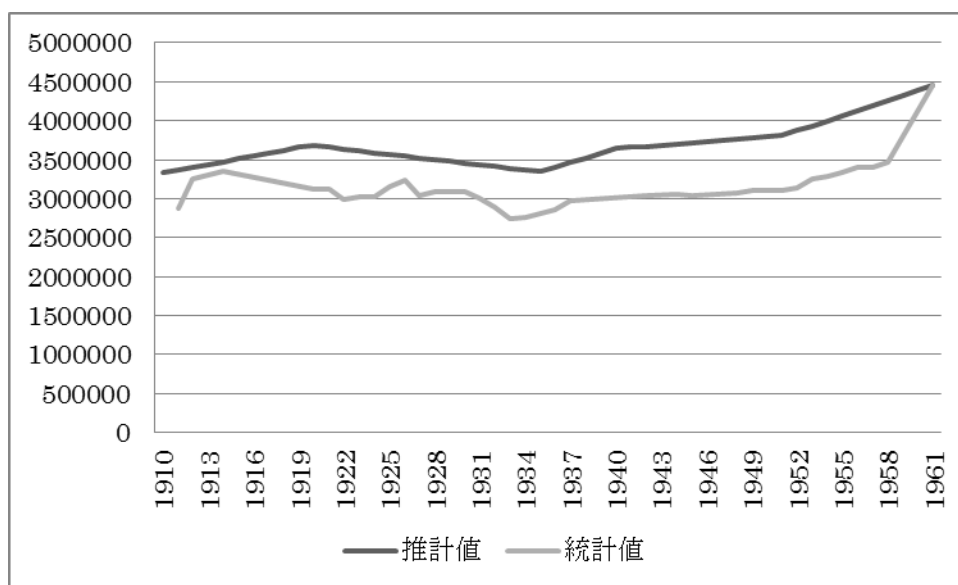


図2-9. 1910年から1961年までのオート・ヴォルタにおける人口統計値と推計値<sup>16</sup>

<sup>15</sup> 1910年以前では、後にオート・ヴォルタ植民地をカバーする領域の人口を復元するための史料に欠いている。

<sup>16</sup> 統計値のなかで人口増減の傾きが変動する時点において連続的年平均人口増加率をもとめ、これらの数値(1958-1951年(0.015768394)、1944-1949年(0.004197938)、1933-1937年(0.017155147)、1920-1932年(-0.006397857)、1912-1914年(0.010442236))を、それぞれを1961-1950年、1949-1940年、1939-1935年、1934-1919年、1918-1910年の年平均人口増加率とし、1961年から  $P_t = \frac{P_{t+1}}{a+1}$ 、P=人口、a=年平均人口増加率、t=年として計算して求めた。なお、この推計では次章で述べる1915-1916年のヴォルタ・バニ戦争での人口減少を考慮に入れていない。

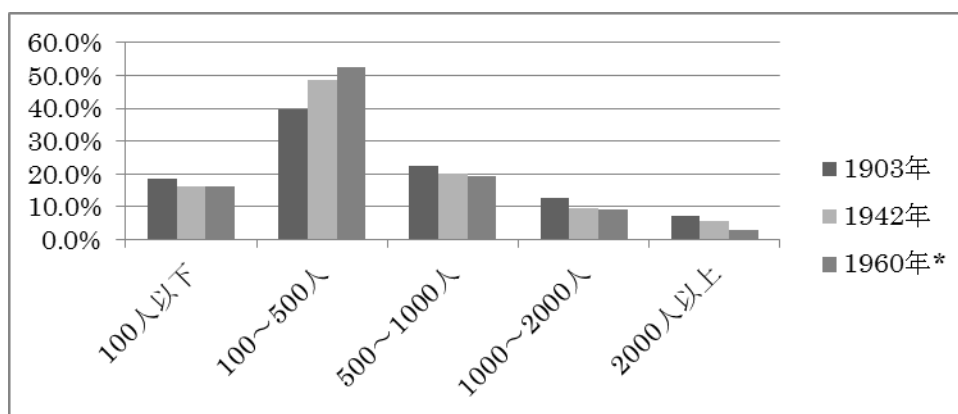
村落の人口規模が小さいこと自体から想定されることではあるが、大まかにいって村落の人口規模の分布は 2・3 倍で増加しない限り大きく変動しない。したがって、図 2-10、表 2-6 にみられるように、約 20%の誤差では図 2-8、表 2-5 で示した人口の分布と全体としてはほとんど傾向が変わらないことが理解できるだろう。

このことから論理的に村落の人口規模の分布が長期持続的で安定的な特徴を有していることが指摘できる。たとえば、1942 年統計では 30 人以下の村落が 5 つあり、全体の 5%を占めており、すべての村落の人口が一律に 5 倍増加した場合、100 人以下の村落は消滅し、人口規模の分布は 500 人から 1,000 人の村落の割合が最も多くなるように移動する。しかし、人口が 5 倍に増えることは公衆衛生などの条件が劇的に変化したとしても 50 年で生じることではない。

ブルキナファソの総人口は 1961 年から 2006 年までの 55 年のあいだで約 3 倍の増加となっているものの、2000 年代以降、村落部での人口増加率は伸び悩んでおり、さらに人口が密集する都市部での加速度的な増加は村落部では生じえない。実際に、1961 年、1976 年、1986 年、1996 年、2006 年の「ムフン川湾曲地域」の村落レベルの人口規模の分布の変化を追うと、1996 年にやや 500 人から 1,000 人の村落の割合が増加したものの、2006 年にはふたたび 1986 年の人口規模の分布に戻っている<sup>17</sup>。このことの要因についてはここでは深追いしないが、公衆衛生の条件が向上し、年平均自然人口増加率が 2%以上となったとしても、少なくとも半世紀というタイムスパンでは村落の人口規模の分布は変動しなかったことは指摘できるだろう。

---

<sup>17</sup> Recensement général de la population. Décembre 1975. Résultats définitifs. v1. les données nationales. p. 49, ; Institut National de la Statistique et de la Démographie 1989 Deuxième recensement général de la population du 10 au 20 Décembre 1985. Principales données définitives. Ouagadougou: Direction de la Démographie. p. 10; Recensement général de la population et de l'habitation 1996. Fichier des villages au Burkina Faso.



	1903年	1942年	1960年*
100人以下	18.3%	16.0%	16.3%
100～500人	39.4%	48.8%	52.5%
500～1000人	22.5%	20.0%	19.1%
1000～2000人	12.7%	9.6%	9.2%
2000人以上	7.0%	5.6%	2.9%

図 2-10, 表 2-6: 推計値に基づくムブン川湾曲部における村落の人口規模

1942 年統計が大まかに妥当であることを踏まえて、1942 年統計の詳細を検討していこう。1942 年の人口統計はデドゥグの準管区(subdivision)における 6 つの管区の 125 の村落それぞれの人口を示している<sup>18</sup>。なお、このフランス植民地期のこの時代のこの地域での行政区分は、管区(cercle)(>準管区(subdivision))>郡(canton)>村落(village)というように階層的に序列化されていた(本稿 4 章)。統計値では、1,000 人以下の村落が 8 割以上を占めており(推計値も同様)、小規模の村落が多く、やや規模の大きい少数の村落があることがわかる。1,000 人以下の 109 の村落の人口の平均は約 282 人であり(推計値: 109 村落、約 342 人)、1942 年代のこの地域の一般的な村落の規模として理解ができる。

他方、2,000 人以上の村落は、デドゥグ(Dedougou、3,252 人(3,939 人)<sup>19</sup>)、サファネ(Safane、2,942 人(3,564 人))、チェリバ(Tcheriba、2,742 人(3,322 人))、ワッハーブ(Ouahabou、2,379 人(2,882 人))、ドゥルーラ(Douroula、2,241 人(2,715 人))である。さきにあげた一般的な村落の人口規模と比べると約 10 倍であり、あまりにかけ離れている。デドゥグは準管区長兼郡長、サファネ、ドゥルーラ、チェリバは郡長、ワッハーブは後述するジハードの拠点で

<sup>18</sup> 具体的には、ワッハーブやボロモなどの自立村(les villages autonomes)を加えた、ウリ(Oury)、チェリバ(Tcheriba)、ティッセ(Tisse)、サファネ(Safane)、デドゥグ(Dedougou)、ドゥルーラ(Douroula)のカントンの村である。この史料は一部散逸しており、残念ながら網羅的なものではない。

<sup>19</sup> カッコ内は推計値。なお、小数点切り上げ。

あり、この時代は郡に属さない自立村落であった。郡長のおかれた村落は概して人口規模が高いことが指摘できる。デドゥグの6つの郡のうち、4つが人口規模の上位に位置していることがわかる。

残りの郡長は、ウリ(Oury、1,865人(2,259人))とティッセ(Tisse、382人(463人))である。ティッセは例外的に人口規模が小さいが、このカントンに含まれる村落がすべて500人以下である。デドゥグは1911年にセルクルの拠点となった(Saul and Royer 2001: 75)。著者のデドゥグでの聞き取りでは、植民地支配の拠点が置かれたことによって、他の地域から多くのムスリム商人がやってきたこと、こうした余所者たちは市場の近くに集住し、街区を形成し、その街区にモスクを建てたことが伝えられている<sup>20</sup>。また、フランス侵入以前ではデドゥグがその周辺で単独優位な状況になかった。こうしたことから、いくつか核となる村落が植民地化以前に存在したが、植民地化の影響によってカントンの拠点となる村落の人口が加速度的に増加したと考えられる。

100人以上500人以下の人口規模の村落が最も割合が高く、およそ280人から350人が8割を占める村落の平均であることを1942年統計は示しているが、このような村落の人口規模は先行研究のなかでも部分的に指摘されてきている。

たとえば、デドゥグ周辺の植民地化以前の中心的な村であったパサコンゴ(Pasakongo)とマサラ(Massala)の口頭伝承を調査したカンは、植民地化以前にすでにそれぞれの村に居住していたリネージの数を念頭に、500人程度であると推測している(Kan 1986)。

また、西アフリカ内陸サバンナの広域に村落の形態を比較したガレは、人口規模に応じて、三つの段階の村落があることを指摘している(Gallais 1960)。この類型から村落の大まかなイメージがつかめるだろう。

まず、最も小規模で離散的な村の形態として、成人男性30人か40人ほどのリネージが、誰もいない土地に互いに離れて住んで、畑を拓いている状態が想定される。400mほどの範囲をもって、小道によって接合された離れたコンセションが街区を構成し、いくつかの街区の集まりが村とみなされる。中規模の村は、コンセション同士が互いに隣り合っている。この接合された複数のコンセションによって構成される街区それ自体は空地によってまだ分離されている。このなかば離散的な村の範囲は2kmほどに広がっている。最後

---

<sup>20</sup> 2013/8/26 Dedougou, Mamadou Bâ, Isa Sidibe(デドゥグのマラブー); 2013/8/27 Dedougou, Baziru Dayo(デドゥグの土地の主); 2013/8/27 Dedougou, Adama Sidibe(デドゥグのマラブー)。なお、デドゥグのマラブーについては、デドゥグの大モスクのイマームから歴史的な経緯を知る人物としての紹介を受けた。

の最も規模の大きいものは完全にクラスター化された村である。コンセッションだけでなく、街区もまたそれぞれ隣り合って建てられており、その結果として、騒々しい社会生活をもった町が形成される。この人口はしばしば 1,000 人を超えるとされる。

つまり、コンセッションを最小単位として、コンセッションの集合を街区、街区の集合を村として把握される。そして、コンセッションや街区の空間的な凝集性と村全体の規模による三つの規模の村のタイポロジーを示している。ガレはそれぞれに具体的な人口をあげていないが、最小の村は 100 名前後、中間規模の村は 500 名前後、最大の規模の村が 1,000 名を超えるものと捉えられる。こうしたタイポロジーは先に述べた人口規模による村の分類とおよそ対応している。

対象地域のより具体的な研究でも類似したタイポロジーを見出すことができる。ブルキナファソ、ムブン湾曲部西部のソレンゾ(Solenzo)のセルクルのブワの村落を調査した社会人類学者のカプロンは、小集落(un village-hameau)と中核村(un village-métropole)に区分して捉えている<sup>21</sup>(Capron 1973: 87, 183-184)。

ここでは、小集落は人口 100-400 人程度とされ(ibid.: 87)、平均して 140-180 人ほどとされる(ibid.: 190)。具体例として提示されている村は、二つの拡張リネージで構成され、人口が 170 名である(ibid.: 190)。統計的には、拡張リネージを単位とした外婚の規則がみられ(ibid.: 227)、この拡張リネージの単位で除草や新たな農地開拓といった共同労働がなされ、拡張リネージの下位区分の「家」ごとに収穫や炊事や家計の管理がなされる(ibid.: 230, 232)。

中核村は人口 500 人を超える規模のものが想定され、具体例として挙げられている村は人口 546 人である(ibid.: 183, 195)。中核村の場合、「家」の集合である街区ごとに街区長と街区内の長老の会合が意思決定をおこない、共同労働や街区以内のもめごとの解消がなされる(ibid.: 195)。小集落と中核村の差異はいわば街区の有無として提示されている。中核村の場合、藍染めや交易などの非農業的な活動や街区を越えた問題の調整が存在している(ibid.: 195)。中核村は小集落に対して一定の影響力をもつが、徴税などはなく、一時的な軍事的動員、あるいは村落間の仲裁や調停といった介入がなされる程度のものである(ibid.: 241-242)。基本的には、村ごとに政治的に自律しており(ibid.: 202)、村の内部の土地の用益権については他の村からの干渉を受けないとされている(ibid.: 314)。

---

<sup>21</sup> カプロンは再編成された村(un village regroupement)というカテゴリーをもう一つも受けているが、これは 19 世紀末のドクイ(Dokuy)を中心としてフルベによる奴隷狩りや 20 世紀初頭の抵抗戦争によって生じた村として規定してされている(Capron 1973: 183, 190)。

以上から、おしなべて均質的な村落が広がっているのではなく、人口 500 人ほどを目安として、(i)それ以上の中規模の村落とそれ以下の小規模の村落があること、(ii)中規模の村落は一定の影響を持つことがしばしばあるがいずれの村落も政治的に自律していることが明らかになった。他方で、カプロンの研究のなかで、1000 人を超える大規模の村落が対象地域になかったことから、1000 人を超える大規模の村落はやや例外的に形成されたものと推測される。このことは人口増加の単純推計からも裏付けられるだろう。

図 2-11 は初期値を 30 人とした人口を、年平均人口増加率 2%、1.5%、1.1%として単純に増加させたものである。

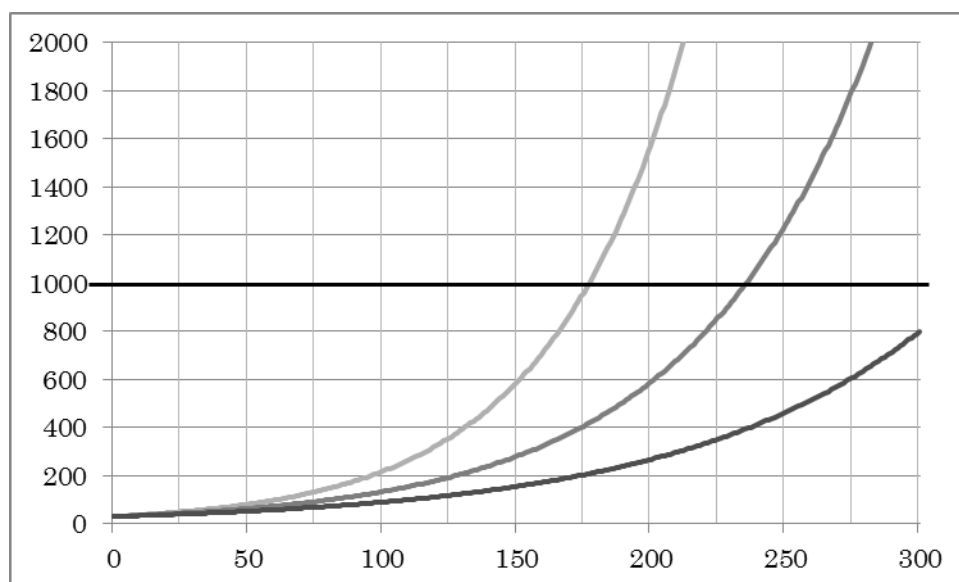


図 2-11. 初期値 30 人とした村落の人口増加の単純推計(筆者作成)

すでにみたとおり、サハラ以南アフリカ諸国の独立後の年平均人口増加率が 2%を若干超えるものであった(Tabutin et Schoumaker 2004: 592-593)。サハラ以南アフリカの大陸レベルでの植民地以前の人口推計をおこなったマニングは、サハラ以南アフリカの独立後の統計に加えて、1871 年から 1961 年までの英領インドの州ごとの年平均人口増加率を参照している(Manning 2010: 257-258, 272)。それによれば、英領インドの年平均人口増加率は 1940 年以前では高くとも 2%であり、1920 年以前には 2%が現われることはほとんどなく、1871 年から 1921 年までの年平均の人口増加率は 1%ほどである(ibid.: 258)。不完全なデータであるが、より生態的・社会的条件が類似しているデータとしては、1934 年から 1935 年にかけて、現在のガーナ北部のタレンシでフォーテスがおこなった出生率の研究が挙げ

られる(Fortes 1943)。それによれば、タレンシの純再生産率は女性では 1.2%であるとされる<sup>22</sup>(ibid.: 112)。これは子どもをもつ母親と父親へのインタビューによって再構成されたものであるが、ここでは年齢階級別の女性の人口が示されておらず、人口置換水準、人口増加率は不明となっている。しかし、純再生産率が年平均人口増加率を上回することは考えられないため、おそらく年平均人口増加率は 1.2%を下回るものと想定される。これらは諸条件が異なっているが、いずれにせよ、植民地統治以前の年平均人口増加率は 2%をほぼ確実に下回り、実際には 1.2%をさらに下回るものと想定される。

つまり、図 2-11 で示した人口増加の単純推計は増加率を高く見積もった場合となっている。しかし、非常に高く見積もった年平均人口増加率が 2%であるとしても人口 30 人から 1,000 人に達するまでにおよそ 175 年、1.2%だとすると 300 年以上の時間がかかることが想定される。さらに、この単純推計は前章で述べたような村落内部からの分離や移住、飢饉による人口減少や村落そのものの放棄を想定していない。およそ 200 年から 300 年ほどのタイムスパンで同じ土地で持続的に人口を増加させることはかなり困難であるといわざるをえない。たとえば、1950 年代後半にムブン川湾曲部のダフィンの口頭伝承の聞き書きを行なった行政官のクリバリは、19 世紀前半に生じたカラントオのジハード以前の出来事をまとめているが、そこに登場する 6 つの村落のうち 2 つはその当時ですでに放棄されており、そのなかには「最も古いダフィンの村落」とされたニエメレドゥグ(Gnèmèrèdougou)も含まれている(Koulibaly 1970: 43-44)。

また、相対的に古く重要な村落と位置づけられている村落が 1,000 人を超えるほどの人口規模を有していたと考えることもできない。先に挙げた 1943 年統計に含まれる 125 の村落のうち、最も古いと語れているのはバヌ(Banou)であるが、バヌの人口は 383 人(推計値, 464 人)である。バヌは次章で述べるバニ・ボルタ戦争に関与した中心的な村落の一つであり、1916 年 2 月 28 日から 3 月 1 日かけてフランス軍による村落への砲撃を受けている(Saul and Royer 2001: 182-183)。戦争による被害とその後の人口流出を考えると、植民地統治以前の人口が 500 人を超えていたことは間違いないが、他方で 1,000 人を超えていたかどうか

---

<sup>22</sup> 後に 1978 年の論文でフォーテスは、1960 年のセンサスではガーナ北部の人口が、フォーテスが初めてタレンシを訪れたときから倍増しており、かつての自身の純再生産率の数値は誤りであるとしている(Fortes 1978: 126)。しかし、植民地期のゴールド・コーストの人口統計は相当程度、過小評価されたものであり(Manning 2010: 249)、医療体制や公衆衛生などの条件が特に改変されていない状況(Fortes 1943: 100)を踏まえると、むしろ、フォーテスの計測値のほうが妥当であった可能性が高い。



かは疑問である。少なくとも、特定地域の最も古い村落の人口規模がその地域のなかで最も大きくなるとはいえないことは指摘できるだろう。口頭伝承からは、バヌから西に約 20km のサファネが長距離交易商人や高名なマラブーを迎え、バヌよりも発展していたことは確認され、植民地行政がサファネをカントン長に選択したこともこのことが要因と考えられる。バヌの事例から想定されることは、当然のことではあるが、実際の村落の人口増加が図 2-11 で示した単純推計とは重ならず、村落としての存続年数が長いことが 1,000 人以上の村落の形成に直結しているわけではないことが理解される。

人口は幾何級数的に増加するため、人口規模が大きければ大きいほど増加する速度は速くなっていく。図 2-11 の単純推計でもみてとれるように、人口規模が 1,000 人を超えると 200 人に至るまでの速度は格段に早くなっている。しかし、前述のとおり、実際には現在に至るまでムブン川湾曲部での村落の人口規模の分布をみると、100 人から 500 人の村落が最も大きな割合を占めている。10 年単位の短いタイムスパンでは様々な個別の要因が考えられるが、数百年単位のタイムスパンで考えると、人口規模が 1,000 人以下に留まり続ける何らかの要因があったと考えることが妥当であるように思われる。

村落の持続年数の長さは人口増加の必要条件であるが、この持続年数の長さが 1,000 人以上の村落の形成に直結していないこと、1,000 人以下に人口規模が留まり続けることには何らかの要因が考えられること、これらから以下の 2 点を想定することができる。すなわち、(1)村落は一定の人口規模になると村落内における分離・移住が生じること、(2)人口 1,000 人以上の村落の形成には持続年数とは別の歴史的な要因があることである。まず、(1)と(2)を検討していこう。

## 2-6. 先着原理と村落の分離

坂井は西アフリカ内陸の社会構造を広くレビューした箇所(坂井 2003: 59-60)、地域社会の権威が先着の原理で保証されていることをまとめている。それによれば、地域社会の権威は、土地の用益権をめぐる組織され、儀礼的に根拠づけられた先住権をめぐるイデオロギーに基づいていた。具体的には、一定の地理的領域に最初に住み着いた集団が、土地の精霊と儀礼的契約を交わして土地の用益権を確保したという神話的表象にもとづいて、その親族集団のシニア・ラインが土地祭祀をおこなう「土地の主」の地位を継承する。後から来た集団はなにがしかの儀礼的贈与によって居住と土地利用の権利を「土地の主」から認めてもらう。「土地の主」の権威は精霊に対する毎年の供儀で再確認され、更新される。

こうした先着の原理はムブン川湾曲部の諸民族にも等しくみられる(たとえば、ブワについては Capron 1973; Kan 1986、ダフィンについては Blegna 1990、コについては Vinama 1983、ダガリについては Duperray 1984)。このように、最初に来たりネージが土地の権利を得るために、村の起源譚においては先着者が誰であったのかが重要な争点になる。たとえば、この地域のダフィンの村であるシウ(Siou)の起源譚をみてみよう<sup>23</sup>。

#### 事例 1

セレはマンデからやってきた。…最初にこの土地にやってきたセレは、目印として日干しレンガを置いて、この土地に住み着いた。その後に、イエダがやってきて、やはり目印として小石を置いて、この土地に住み着いた。雨季が過ぎた後、二人は出会い、口論となった。「最初に来たのは私だ」。「いや、最初に来たのは私だ」。「私は印を置いている」。「私も置いている。見に行こう」。そうして、印のある場所にいくと小石だけが残されていた。イエダは言った。「この小石が私の置いた印だ」。セレは言った。「いや、私は日干しレンガを置いたのだ。日干しレンガは雨で流されてしまったのだ。だから、その印がわからなくなってしまったのだ。私が最初に来たのだから、私が土地の主になる」。こうしてセレがこの村の土地の主となった。

細部が微妙に異なるのだが、同様の起源譚はサファネ、マーコンゴ、カロで聞き取ることができた<sup>24</sup>。サファネのサッキラによれば、サファネではセレが石を、サッキラが日干しレンガを置き、セレが土地の主となったという<sup>25</sup>。1980年代に調査したラルも同様の口頭伝承をセレからも聞き取っていた(Larou 1985)。しかし、現在のセレの土地の主もグリオの長もこの口論の箇所を削除して物語っている<sup>26</sup>。先着を争うというこうした起源譚そのものが、土地の主の権威をめぐる村のなかでの潜在的な緊張関係を表しているだけでなく、サファネの事例は村落の起源譚の政治性と可変性を如実に示している。実際のところ、起源譚が

---

<sup>23</sup> 2013/7/4 Siou, Mamadou Sere(村長の息子。村長は前年に亡くなったばかりで、この当時、村長位は不在となっていた。)

<sup>24</sup> 2013/8/11 Safane, Lasina Sakkira(サファネ、ブワベ街区のイマーム); 2013/8/19 Makongo, Nyeme Tantie(マーコンゴの土地の主), Mousa Sanogo(マーコンゴの土地の主の友人); 2013/8/24 Karo, Lasina Dayo(カロのイマーム)。

<sup>25</sup> 2013/8/11 Safane, Lasina Sakkira(サファネ、ブワベ街区のイマーム)。

<sup>26</sup> 2013/8/1 Safane, Mousa Sere(サファネの土地の主); 2013/8/3 Safane, Sidiki Konate(サファネのグリオ長)。

後に修正されるということもありえることであろう。村のなかで土地の主が変わったといったことはほとんど語られることはなかったが、たとえば、ダーの村では、村内の諍いが絶えず、土地の主がたびたび変わり、イラは「4回」土地の主になったという<sup>27</sup>。

こうした村の起源譚は、オート・ヴォルタの独立以後の村長を選出する選挙の際に村長の継承の方法などの情報とともに行政によって記録されている。現在の行政区分である「ムフン湾曲地域」のすべての村についての史料が残されているわけではないが、その一部には筆者の調査で聞かれた口頭伝承に類似したものがみられる。先着をめぐって二者が目印をおき、その目印の妥当性をめぐって口論をするという内容のものは、たとえば、バガシ県のディディエ村の起源譚にもみられる<sup>28</sup>。目印をめぐるものではないが、住み始めた日数を競って口論をするという起源譚も報告され、この史料によれば、この村は植民地統治以前に形成されたとされるが、口論をした両者の対立関係は現在でも継続していることを伝えている<sup>29</sup>。やや極端な事例ではあるが、場合によっては、村落の起源とその語りはアクチュアリティをもった政治性を有しているといえる。ブルキナファソ南部とガーナ北部のダガリの村落における起源譚を研究したレンズもまた、同様のアクチュアリティを見出している(Lentz 2013: 19)。

他方で、レンズは定住性(sedentariness)に対して、モビリティのイデオロギーをダガリの村落の起源譚から読み取っている。起源譚における故郷からの離脱の動機は、狩猟地をめぐる兄弟の諍い、飢えや食料の希求、故郷の村落の人口多寡などが語られるが——これらはムフン川湾曲部の村落の起源譚でもしばしば聞かれる内容である——これらは文化的に十分な空間と自律性を有することが理想とする文化的な規定があるとしている(ibid.: 34)。前章でまとめたように、先着原理は先着者に対して優位に働くため、そのなかで自律的であることを目指すのであれば、村落を出て新たに自らの村落を切り開く必要がある。レンズは起源譚にあらわれる狩人の新たな土地を求める冒険について、一定のリアリティがあることを指摘している(ibid.: 35)。前章で理論的にまとめたように、飢饉、戦争、新天地の希求といった動機から、新たな村落の開拓がなされていたことが想定される。たとえば、1950年代に新たに設立されたバガシ県のグラン・バレ(Grand-Bale)村の起源譚を1980年に

---

<sup>27</sup> 2013/7/5 Da, Adama Ira(ダーの土地の主)。

<sup>28</sup> CNABF 22V103 Historique du village de Didie.

<sup>29</sup> CNABF 22V105 Historique du village de Kopoie, le 29 avril 1982.これも同様にバガシ県の村落の事例。

記録した行政史料は生き生きとその状況を伝えている<sup>30</sup>。

## 事例 2

グランバレはブワの言葉ではトゥン(Toun)と呼ばれている。[設立者となった]トマ(Thomas)は…ボボ・ジュラソでキリスト教徒になった後に、生まれ故郷のヤホ(Yaho)村から出て、畑を耕し子どもたちを食べさせていくための土地を求めた。この土地に住み着いたのは 1953 年のことであった。毎日、彼と彼の妻はグラン・バレの土地に赴き、将来のための建物を建て、午後 4 時になると[ヤホ]に戻った。なぜなら、森での仕事は非常に危険だったからだ。

1954 年、トマは、多大なる苦勞と、しかし村をつくる希望をもって、この土地に住み着くことを決心した。この村は森の境界と隣接していたため、トマとその妻は、人肉にとっても食欲な——祖先が「食べて、頭を残しておくもの」と呼んだ——動物、ライオンやヒョウやハイエナといった野生の猛獣に常に脅かされていた。[こうした危険があったので]トマは子どもたちをヤホの両親に預けていた。…

1955 年にはヤホから人びとがトマの屋敷に移り住み、住居を建てるようになった。このなかには弟のイエンジ(Yenzi)も含まれていた。…[行政上]村はつねにヤホのなかに位置づけられてきたが、村に住むようになってから 10 年経ち、トマはグラン・バレ村の村長に選出された。

ヤホとグラン・バレのあいだはおよそ 10km ほどの距離にあり、こうした近距離での村の開拓もしばしばみられる。しかし、こうした移住もまた、後に述べるムフン川湾曲部内の戦乱によって複雑に入り乱れたものとなっていた。次にあげるのは、バガシ県のバッサアン村の起源譚である<sup>31</sup>。

## 事例 3

バッサアン(Bassouan)の土地の[原義である]マッサアン(Massouan)はマルカの言葉で「私は満足している」を意味する。

---

<sup>30</sup> CNABF 22V103 Historique du village de Grand-Bale, le 14 mai 1980.

<sup>31</sup> CNABF 22V103 Historique du village de Bassouan.

レパン・ボマ(Lepan Boma)は、母方の祖先によって住まわれていた、バッサンの最初の設立者である。彼の父であるカトン・レパン(Katon Lepan)はもともとポンポイ(Pompoi)村の出身であったが、その村落が隣接する村落と戦争をしたため、妻と子供ともに母方の家族の暮すニアコンゴ(Niakongo)に逃げ込んできた。ニアコンゴに長く住んだのち、カトンの死後、ニアコンゴの住人達は彼らの小さな甥のために自由に耕せる土地を探す決定をした。

カトンの長男であるボマは村を離れることに同意し、数キロ離れた藪を切り開き、そこに住むことにした。彼はそこをマッサンを名付けたが、植民地行政官の書き間違いによって、バッサンとなった。

ここで挙げられているのは、戦乱からの逃避として別の村落に身を寄せた後に、自らの土地を得る必要があることが村内で決定され、本人も同意したという内容のものである。レンズのいう自律性の尊重は村落からの離脱者だけではなく、場合によっては、村内からも要請されるものであったことが窺われる。また、戦乱は人の移動や村落の消滅・併合の要因としてミクロに作用していた。

筆者の調査では、19 世紀のジハード以前の戦争についてはほとんど語られなかったが、ムフン川湾曲部の先行研究では、19 世紀以前の戦争について語られている。次節では、こうした 19 世紀以前の戦争を検討する。

## 2-7. ムフン川湾曲部における戦争

この地域のダフィンの口頭伝承を紹介したクリバリの論文(Koulibaly 1970)には、19 世紀以前の戦争についての記述がある。以下に、内容(ibid.: 43-45)をまとめたものを載せる。



図 2-12. 現在のムフン県とバレ県の主要な村<sup>32</sup>

#### 事例 4

デドゥグの南にダフナ(Dafna)という村があった。この村は現在でもある。かつて、この村で、ある妊婦が農民に体罰として叩かれることがあった。この妊婦は許可なく枯草を集めていたのだ。出産後、新生児は母の受けた傷跡をもって生まれてきた。母は、この体罰のこと、この村に住み続けることの苦痛を子に聞かせた。この子の名をイキエ・ジナ(Ikié Zina)という。イキエは、母の恨みを果すためにまた戻ることを決めて、ダフナを出た。どれくらいの歳月がたったのか。イキエはダフナに戻ってきた。

イキエは[現在では失われた、ダフィンの最古の村だとされる]ニエメレドゥグのダフィ

<sup>32</sup> ブルキナファソ地理院(l'Institut géographique du Burkina Faso)の県別地図から筆者作成。

ンの長に庇護を求めていた。彼は同時に[この村の]コナテの長のところにも行った。コナテのグループはよく組織され、槍と弓矢で武装された男たちの先頭に立って、イキエはダフナへと進軍し、村を完全に壊してしまった。イキエは、近隣のボボやサモにも戦争を仕掛けた。

イキエ・ジナは現在のヌーナ(Nouna)、ジバッソ(Djibasso)から、セグー王国の支配下にあったベネナ(Bènèna)までの地域を隷属させ、ほかにソレンゾ(Solenzo)、ウォルコイエ(Workoye)、サファネ、ボロモ、トゥガン(Tougan)、トマ(Toma)、カッスーム(Kassoum)を従属させた。

イキエ・ジナの後継者はドゥルーラ(Douroula)の東に 3 キロのクッシリ(Koussiry)という村を作り、イキエの戦士であったクリバリは、カッサコンゴ(Kassakongo)とニャコンゴ(Gnâcongo)を築いた。ニャコンゴは現在では失われている。雨季の最中に、ニエメレドゥグは赤い蛆虫に食い荒らされ、村は悪い精霊の餌食になった。住民はケレベやサー・ケレベに移住した。ケレベはニエメレのつぎに最も古く最も重要な村であった。

この論文には典拠が書かれていないが、筆者のドゥルーラでの調査では、この論文のもとになった報告のコピーを入手することができた<sup>33</sup>。そこでは、この逸話がダフナで収集されたことが記されている。正確に言えば、この逸話はダフナでしか収集されなかった可能性がある。筆者の調査では、この村より 30km ほど離れたデドゥグとその周辺のダフィンの村々、40km ほど離れ従属されたとされるサファネとその周辺のダフィンの村々で、イキエに関することは何一つ語られなかった。また、1990 年代に 20 世紀初頭の抵抗戦争についての聞き取り調査を行った研究者も、19 世紀以前のダフィンの状況に触れているものの、このイキエの逸話については触れていない(Saul and Royer 2001)。これは記憶が失われたということであらわすとともに、こうした記憶を広域に存続させる社会的な基盤を欠いていたことの証左である。たとえば、マリ帝国の建国神話の口頭伝承やモシの諸王国の口頭伝承などの王国の歴史伝承とは状況は大きく異なっている。

つぎに、ダフナの問題に別のニエメレドゥグの者たちが介入したこと、ダフナでの戦争

---

<sup>33</sup> ドゥルーラで入手した文書。表題は *Ikïe Zina entre en scene*。本文では、調査がドゥルーラで 1969 年 1 月 26 日、3 月 3 日、デドゥグで同年 2 月 17 日、ダフナで 2 月 18 日、トラで 2 月 19 日、ケレベで 3 月 27 日に行なわれたことが書かれている。一部省略がみられるが内容がクリバリ(Koulibaly 1970)の論文と酷似しており、論文の発表年代を考慮すると調査の一次報告であった蓋然性が高い。

を契機に他の村にまで侵略したこと、さらに最終的にこれらの戦争は報復と略奪におわり、それらの村々に君臨することがなかったことが、重要である。言い換えれば、この戦争は征服戦争ではなく、国家を形成するような運動ではなかった。

最後に、政治的な中心が永続しなかったこと——ニエメレドゥグがおそらく飢饉で放棄されたこと——も見逃せない。この村以外にも、現在残されていない村々がしばしば登場していることから、こうした村の放棄は長いタイムスパンのなかでは珍しいことではなかったと考えられる。そして、この逸話にあるような影響力を発揮したニエメレドゥグもそれが永続することはなかった。

つぎに、ドゥルーラより南に 20km ほど下ったブワの事例をみていく。1910 年代にこの地域に医師として赴任していたクレメールはブワの民族誌を残している (Cremer 1924)。そこには、村内での殺人や村同士の戦争についての記録が残されている。この民族誌に書かれている、モンダクイ (Mondakuy) とパサコンゴ (Passakongo) の戦争、デドゥグ (Dedougou)、ノクイ (Nokuy)、パサコンゴの戦争を紹介する。

#### 事例 5

モンダクイはカーリ (Kari) の支配下にある小さな村であるが、彼はデドゥグの保護を求めてやってきた。…

ある日、モンダクイ [のひと] がパサコンゴ [のひと] と口論をし、両者は鬭い、殺しあった。我々は言った。「みろ、これが我々の言っていたカリのお土産だ。」そこで我々は、出発し、和平のために話に入り、赦しを請うた。すべては拒否され、弓はひかれ続けた。

…[モンダクイの者たちは] 暗い夜にパサコンゴにむかった。みな横になり、寝ていた。彼らは剣をとり、松明をかかげ、長の家に入っていく、彼にかぶさっているむしろをとり、咽喉を掻き斬った。彼らを見た者は誰もおらず、静かに村を去った。モンダクイの近くにまで来ると、彼らは戦の雄叫びをあげ、斬った長の首をみせた。…

デドゥグの我々は、彼ら [モンダクイ] にこの戦いの手助けはできないと言った。そして、戦いをやめ、供物を捧げて、赦しを請わねばならないことを伝えた。彼らはヤギをつれ、パサコンゴに行き、こう説明した。我々はデドゥグから支援を得られると思っていたが、デドゥグは拒否し、和平を成すように命じた、と。彼ら [モンダクイ] は納得せず、それ以後、デドゥグに追従することはなくなった。これが供物だ。パサコンゴは受け入れた…」 (ibid.: 132-133)。



## 事例 6

かつてデドゥグとノクイは結ばれていた。奴隷を手に入れた我々の者たちはノクイの人びとに奴隷を与えていた。なぜなら、ノクイはより古い村であるからだ。ある日、我々の者が、らい病の女をわがものとしようと、ノクイにそれを申し出に行ったが、病気を理由に断られた。デドゥグはこの女を売り、その時から奴隷を手に入れても、自分たちで世話することになった。

パサコンゴの心はノクイへの怒りに燃えていた。パサコンゴには我々デドゥグの人間がノクイを攻撃する軍に参加していた。この者が弓をひくとその矢はノクイの誰かを傷つけた。撃たれた者はデドゥグの生まれの者が矢を放ったと確信した。…

ノクイの人びとは、こうしたことがあったから、デドゥグとは離れ、同盟は解消された。彼ら[ノクイ]はパサコンゴに敵対し、スリ(Souri)、マサラ(Massala)、レンニ(Lenni)、モンダクイ、ウラニ(Oulani)[の村の者]を呼び寄せ、これらすべてで我々のデドゥグを包囲しようとした。闘いは始まり、死者が生じ、傷ついた者が多く出た。

さて、ここに、カロ(Karo)の人びとが表れて、和平を主張し、赦しを求めた。…敵意は収まり、幾ばくかの時が過ぎた」(ibid.: 134)。

## 事例 7

この話はこれで終わらない。デドゥグのある一家がパサコンゴを通った際に、パサコンゴの者に子供を奪われそうになり、父親が負傷する。この父親は、デドゥグの葬式にやってきた、このパサコンゴの男を襲撃し、後日、負傷がもとで死ぬ。この男の両親は怒り、パサコンゴに住むデドゥグの出身者を殺害し、息子を殺した人物への報復をデドゥグに要請する。デドゥグはこれを拒否した。パサコンゴの者たちが戦のためにデドゥグに侵入してきた。デドゥグの者たちは茂みのなかに身を隠した。パサコンゴの者たちが殺された男の遺骸をみつけ、彼を運ぶために木々を集めだしたところを、隠れていたデドゥグの者たちが襲い掛かった。そうして、スリ、ノクイ、マサラ、モンダクイ、ウラニの村の者たちはデドゥグが悪いとし、デドゥグを破壊することに決めた。しかし、ふたたび、カロの人びとが仲裁し、戦争は起こらなかった(ibid.: 134-136)。

これらの口頭伝承は、1911 年に準管区の拠点となったデドゥグ(Saul and Royer 2001:

75)で収集された。したがって、語りの中心はデドゥグとなっている。まず、事例 5 ではデドゥグの庇護のもとにモンドクイが入る。しかし、モンドクイとパサコンゴとのあいだに紛争が生じると、デドゥグはモンドクイにパサコンゴとの和平を強制し、これによってモンドクイはデドゥグから離れる、という筋の話である。つぎに、事例 6 ではデドゥグはノクイと同盟関係にあったが、ノクイがパサコンゴと対立すると、デドゥグはパサコンゴ側につき、スリ、マサラ、モンダクイなどの村々によって包囲されそうになるが、第三者の村が介入し、戦争は終結する。最後に、事例 7 ではデドゥグとパサコンゴのあいだで事件が生じ、両村のあいだの戦争に発展し、スリ、ノクイ、マサラ、モンダクイ、ウラニによってデドゥグが包囲されそうになるが、やはり、第三者の村が介入し、戦争は終結する。この口頭伝承でみてとれることは、村同士の関係性である。具体的には以下の 2 点にまとめられる。第一に、同盟関係があったが、容易に変化しうる緩やかなものであった。いずれの事例でも確認できるが、すぐにデドゥグを見限ったモンドクイは典型的である。第二に、ある村と別の村との関係悪化は、同盟関係を介在して、連鎖的に他の村々との関係を悪化させた。これは事例 5 と事例 6 にあらわれている。

ダフィンの事例 4、ブワの事例 5 においても、共通してみられることは、1 章で述べた村同士の先着の原理である。ダフィンのニエメレドゥグ、ブワのノクイは、村が古いがゆえに影響力を持っていたとされている。もっとも、この種の主張や影響力が周辺のすべての村に共通するものであったかどうかは留意が必要である。たとえば、1980 年代にパサコンゴ、マサラなどで調査を行ったカンによれば、デドゥグ周辺の村々で最も古いブワの村はパサコンゴとマサラであるとされている(Kan 1986: 29)。筆者の収集したデドゥグの高等弁務官事務所(l'Haut-commissariat)所蔵の「パサコンゴというボボの村の歴史」と題された史料では、フランス侵入以前には、パサコンゴは、スアクイ(Souakuy)、マサラ(Massala)、ティオンクイ(Tionkuy)、ノクイ、ハベレクイ(Haberekuy)、クーナ(Kouna)を含む「小さな郡」の長であったと書かれている<sup>34</sup>。また、この史料では、パサコンゴは現在では失われたベニンクイ(Beninkuy)から派生したとされている。これらからは 2 つのことがいえる。ひとつは中心が可変的であることであり、もうひとつは飢饉などの理由で村が放棄されることがしばしばあるということである。なお、次章にふたたび言及することになるが、カラ

---

<sup>34</sup> AHCD s.c. Historique du village Bobo de Passakongo. 年代著者ともに不明であるが、行政文書の書式で書かれており、オート・ヴォルタ共和国と書かれていることから、独立以後に行政官によって書かれたものだと考えられる。

ンタオのジハード以前にパサコンゴがドゥルーラを襲撃していたことも記されている。ムスリムの多く住むドゥルーラとは対立関係にあったことが推測されるだろう。

最後に、デドゥグより約 60km 南に位置するフォビリ(Fobiri)周辺の事例を取りあげる。フォビリ周辺では、すでに失われたソンノン(Son-non)という村が最も古い村であり、かつてはすべてのダフィンの村に影響力をもったとされる(Blegna 1990: 40, 43)。フォビリもまた、ソンノンを起源とするが、ソンノンの放棄の理由は特に書かれていない(ibid.: 43)。さて、フォビリ周辺での戦争の鍵となるのは、ヤホ(Yaho)村の存在であった。以下、ブレニャによる報告(ibid.: 48-51)をまとめる。

#### 事例 8

ヤホはワクイ(Ouakuy)というブワの村から分派した集団がラワ(Lawa)村の住人に土地をもとめて、村を拓いた。拡大し影響力をもつようになると、ヤホは土地をめぐって対立したラワを破壊し、他のダフィンの村々を襲い、奴隷としていった。ラワから逃げてフォビリに住むようになった者がヤホを挑発し、ヤホとフォビリのあいだで戦争が生じた。この戦争は 50 年近く続いたとされるが、ヤホのだまし討ちによっていったん幕を閉じる。フォビリの男たちが集団獵の準備をしているときに、突然、ヤホの軍が村に攻め入ってきたのだ。この戦に敗れ、多くの家族が村を去り、村は一時的に放棄されてしまった。これは 8 度目の離散であるという。サファネから来たマラブーに平和の祈願を頼み、幾世代にもわたって守護する護符をもらい、フォビリの者がヤホに和平の交渉に行き、白いヒツジを差し出すことで決着した。

ヤホは次章で扱うジハードにも登場することになるのだが(本稿 3 章 4 節 6 項)、ここでは戦争の要因としての土地と奴隷の獲得について述べておきたい。まず、領土の拡張のための征服戦争がおこなわれたという報告はされていない。事例 8 の戦争の発端は先住者と後から来た者との土地をめぐり争いである。記述にあるように、フォビリに勝利した後、この土地を支配におくというようなことも生じていない。たとえば、事例 4 のイキエの戦争においても、最終的にイキエは征服したいずれかの村に落ち着くことはなく、新しい村を拓いている。

18 世紀ごろから、西アフリカ内陸では国家が戦争によって奴隷を獲得し、これを商人に売ることによって国家を運営するような形態の戦争国家が出現してくる(本稿 1 章 7 節)。19 世紀

以前に奴隷は高価な「商品」のひとつであった。この地域の人口規模はかなり小さいもので大規模な奴隷の「生産」は不可能であったが、たとえ数人であれ、戦争で得られた奴隷は小規模の村にとっては大きな富であったことが想像される。周辺の村々への戦争を繰り返したヤホの行動は奴隷の獲得を目的としたものであったと解釈することもできるだろう。

以上をまとめよう。まず、(1)19世紀以前に複数の戦争があった。戦争が常態といえるかどうかは別として、例外的ではなかった。また、すでに述べたように、(2)戦争は征服戦争ではなく、報復や奴隷狩りを目的とするものであった。つぎに、(3)緩やかな同盟関係が存在し、盟主となる村があった。人口規模について述べたように、やや人口規模の大きい500人程度の村が少数存在したと推定される。つまり、「国家のない社会」であっても、おしなべてみな同じ規模の村が点在していたのではなく、いくつかの比較的規模の大きな核となる村が複数存在していた、といえる。ただし、(4)盟主となった村もしばしば放棄され、中心は可変的であった。事例4のニエメレドゥグ、事例5のノクイ、事例8のフォビリの起源村のソンノンは、かつてあった影響力のある中心が放棄された事例となっている。そして、(5)同盟関係などによって当事者の周辺の村は(どのような態度をとるにせよ)戦争に巻き込まれた。事例5ではモンダクイとパサコンゴの戦争にデドゥグが呼び出され、デドゥグが調停に介入している。事例6ではノクイとパサコンゴとの戦争にデドゥグの人間が参加していたという理由でデドゥグも巻き込まれ、ノクイは他の村々——ウラニ、マサラなどを呼び寄せ、これらすべてで我々のデドゥグを包囲しようとしている。事例7でも似通った連鎖がみられる。デドゥグとパサコンゴとの対立に、やはり、ウラニ、マサラなどの村々が参戦している。事例8はヤホの襲撃を受けた避難民がフォビリとヤホの対立関係を引き起こした。特定の村から襲撃を受けた避難民がその村への怨念を抱え、避難先の村を結果的に戦争に巻き込んでいく、という構図である。最後に、(6)村が基本的には最小の政治的主体であった。いずれの事例においても、村の名前がほとんど戦争にまつわる行為の主体であり、客体である。攻撃の目標は特定の村であり、攻撃をしかける主体も村となっている。この地域の村を越えた政治的な関係、あるいは歴史を理解しようとする、村がある種の集合的な人格をもつこと、このことを強調しておきたい。

## 2-8. 国家に抗するシステム

前節でまとめたことは国家に抗するシステムとして捉えられる。以下、クラストルを参照して、国家に抗するシステムを明らかにする。

『暴力の考古学』(クラストル 2003[1977])において、クラストルは「未開社会」を本質的に戦争へと向かう社会として規定したうえで(ibid.: 10)、「未開社会」の細分化を戦争の結果として捉えている。「細分化の結果が戦争なのではなく、戦争の結果が細分化なのである。細分化は、ただ単に戦争の結果であるのではなく、その目的である。戦争は、求められる結果をもたらす原因であると同時に、求められる目的を達成する手段である。その目的ならびに結果とは、未開社会を細分化することである」(ibid.: 57)。集団を「一なるもの」にまとめようとする国家に対して、戦争によって「未開社会」は「多なるもの」に細分化していくという。その意味において、「戦争が多くあればあるほど統合化の程度は弱まり、国家の最良の敵は戦争である。未開社会はそれが《戦争-へと向かう-社会》であるかぎり、国家に抗する社会なのである」(ibid.: 111)。

細分化が戦争の結果であること、戦争の「目的」が細分化であることは、クラストルが強引に主張するほど一般化はできないだろう。後に述べる国家を形成させるような征服戦争は戦争の結果として国家を生じさせるし、細分化のために戦争をおこなっているとは言い難いことから戦争の「目的」それ自体が細分化であるとはいえない。

しかし、前節でみたような戦争群は確かに細分化を結果として生じさせているように思われる。(5)当事者の周辺の村は戦争に巻き込まれ、敵対関係の網の目は錯綜している。(4)地域の中心は可変的であり、戦争によっても立場が変更された。たとえば、事例3や事例5のように先着の原理によって権威が保証されている村からの離脱や対立があった。つまり、特定の条件下では戦争は集団の細分化を招くとはいえる。

ここに権力の集中とは対極の権力の偏在という論点を組み込むと、以下のように国家に抗するシステムを組み立て直すことができる。(a)権力の集中が生じていない社会的条件のもとでは、軍事力が遍在する。したがって、(b)小さな揉め事が周囲を巻き込んだ戦争になりやすい。(c)こうした戦争は、特定の同盟関係が構成されたり、変容したりする契機となりうる。一方で、(d)軍事力が遍在しているため、覇権を握ろうとする特定の集団が敵対関係の網の目を構成し、相互に覇権の形成を抑制させる。したがって、(e)戦争は一定地域内の集団の細分化を生じさせる。これが国家に抗するシステムである。

クラストルは、首長位の不安定さと戦争自体が自己目的化していることが「国家に抗する社会」を特徴づけているとした(クラストル 1987[1974], 2003[1977])。特に後者について、戦士の勇猛さに高い価値をおき、復讐が重要視され、婚姻後の殺人にイニシエーションとしての意味があったこと、つまり、戦争の自己目的化のイデオロギー的側面をヴィヴェイ

ロス・デ・カストロは指摘している(ヴィヴェイロス・デ・カストロ 2015[2002])。こうした南米の民族誌によって定式化された「国家に抗する社会」の特徴と比較すると、戦争へと向かうイデオロギーはムフン川湾曲部の口頭伝承では確認できなかった。むしろ、口頭伝承では、個人的な復讐が村落間、同盟間の抗争へと発展していったこと、覇権を握ろうとする運動が連鎖的に周囲を敵に回してしまうこと、こうした敵対関係がさらにのちの抗争での前提となることが読みとれる。つまり、小規模の村落が遍在しているなかでは、同盟関係をもった村々をすべて征服することは困難であったと推測される。このことは、クラストルの同語反復的な論理構成——たとえば、首長位の不安定さによって国家は出現しないが、国家が存在しないがゆえに首長位が不安定であるという論理構成——をより明確に説明するだろう。国家をもたない社会は国家をもたないがゆえに、つまり、小規模の村落＝小規模の軍事力が遍在しているために、国家が成立しないといえる。

最後に 2 章全体のまとめを述べておこう。2 章ではムフン川湾曲部の村落の特徴を明らかにした。具体的には、ムフン川湾曲部の村落は、(a)土地の生産性の低さと土地の豊富さ、先住者が優位に立つという広範に共有されたイデオロギーによって分散する傾向にあり、(b)村落は一定の人口規模(およそ 1000 人以下)になると村落内における分離・移住が生じること、さらに、(c)人口 500 人以上の中核村が点在し、親族関係や呪物を共有するゆるやかな同盟関係があること、(d)こうした同盟関係によって村落間の抗争が複数の村落間の抗争へと発展することで、村落を越えて強固なヒエラルキーをもつ国家の出現を阻んでいたと想定されることを 2 章で論じ、特に(d)同盟関係が戦争時に機能することで連鎖的に敵対的な関係が構築され、国家の出現を阻むシステムを「国家をもたない社会」における「国家に抗するシステム」と定義づけた。

こうしたことを踏まえて、3 章では、ムフン川湾曲部の「国家をもたない社会」から、いかに国家が生成した事例である、19 世紀のカランタオによるジハードを論じる。

### 3 章 ムフン川湾曲部における周縁的なジハードと国家形成

本章では、19 世紀前半にムフン川湾曲部で生じたマフムド・カラントオのジハードを、西アフリカ内陸という広い文脈とムフン川湾曲部という狭い文脈の双方から論じる。

マフムド・カラントオのジハードの研究史は長い。それにもかかわらず、包括的な研究がなされてこなかった。マフムド・カラントオのジハードの研究史をふりかえって、興味深いことはマフムド・カラントオのジハードを主題的に扱ったのはワガドゥグ大学の修士論文(Kote 1982)のみであるにもかかわらず、さまざまな研究や報告のなかでそれぞれ新たに一次資料を収集し断片的に論じられてきたことである(Binger 1892 t.1: 415-416; Tauxier 1912: 410-411, 1924; Cremer 1924: 144-147; Martin 1965: 80-83; Levtzion 1968: 148-150; Coulibaly 1969: 3-5, 1970; Al-Naqar 1972: 121-122; Dupperay 1984: 56-59; Larou 1985: 109-111; Wilks 1989: 101-103; Jacob 1997: 293; Saul and Royer 2001: 53-57; Bazero 2004: 60-63)。このうち、1960 年代にレヴツィオンとウィルクスによって、ワッハーブ、コーホ、ボロモ、ウェンチ、ボボ・ジュラソで収集された、いずれかのアラビア語史料(IASAR/65, 66, 70, 77, 83, 232, 348, 349, 438)に基づく研究はすべて英語で発表されている(Martin 1965; Levtzion 1968; Al-Naqar 1972; Wilks 1989)。聞き取り調査は、レヴツィオン(Levtzion 1968)、ソールとロイヤー(Saul and Royer 2001)を除くと、すべてフランス語によって発表されている。具体的には、ブワの村々(Cremer 1924)、ダフィンのワッハーブとボロモ(Binger 1892 t.1; Tauxier 1912, 1924)、ドゥルーラ(Coulibaly 1969, 1970)、ボロモ(Dupperay 1984; Jacob 1997)、サファネ(Levtzion 1968; Larou 1985)、ラーとチェリバ(Saul and Royer 2001)、プーラ(Bazero 2004)でそれぞれ聞き取りがなされている。なお、筆者は、マフムド・カラントオのジハードについては、ワッハーブ、ドゥルーラ、サファネ、サーニ、ジナコンゴ、コーホ、ナヌー、ボロモ、プラにおいて聞き取り調査をおこなった。

これらすべての研究において、カラントオのジハードについての全体的な評価が述べられているわけではないが、おおまかには 4 つの見解にわかれている。一つは非イスラームの蛮行に対する報復とイスラームへの改宗を目指した運動とみなすものである(Tauxier 1912, 1924; Coulibaly 1969, 1970)。二つ目は論者によって程度の差はあるものの、奴隷狩りを目的としていたとするものである(Binger 1892 t.1; Dupperay 1984)。三つ目はアラビア語史料に基づくもので同時代のマーシナ、あるいはワにおけるイスラーム改革と連動していた思想上の変化とみなすものである(Martin 1965; Levtzion 1968; Al-Naqar 1972; Wilks

1989)。四つ目はムフン湾曲部全体においてカラントオのジハード以前から村々のあいだでの戦が頻発しており、このジハードもまたこの地域特有の村同士の戦乱のひとつとしてみなすものである(Cremer 1924; Saul and Royer 2001)。ただし、いずれの論者においても、あるいは歴史的な事実としても、小規模のジハードであり、地域全体に直接的な影響力をもったわけではないことは共通した見解となっている。

先行研究の問題点は、4点ある。第一点は——このジハードが広域にわたる強固な中央集権的な政治体制が構築できなかったがゆえに——歴史の語り手の立場によって語られる内容に変化が生じていることが前提として捉えられていないことである。つまり、伝承がなぜ異なるのかについて十分な注意が払われていない。この点にかかわるが、第二点として、このジハードへの周縁的参加者への聞き取りがなされていなかった。これまでの聞き取り調査では、前述のようにほとんどひとつ、あるいは類似した政治的立場の村での聞き取りしかおこなわれてこなかった。第三点は主としてフランス語圏の聞き取りによる人類学的研究と主として英語圏のアラビア語史料に重点をおく歴史学的研究とが相互に十分に照合されていない。おおまかには、人類学的研究は歴史学的研究を参照しておらず、歴史学的研究は人類学的研究の都合の良いところを部分的に引用している。最後に、先行研究は、舞台となったムフン川湾曲部のローカルなコンテクストとそのイスラームの長く緩慢な歴史のなかに、ジハードを位置づけられていない。

したがって、本章では、まず、ヴォルタ川流域へのムスリムの拡散の歴史、18世紀から19世紀に起きていたヴォルタ川流域で生じていた政治・経済状況の変化をまとめる。そのうえで、カラントオのジハードについての史資料を検討し、このジハードがどのように位置づけられるのかを明らかにする。

### 3-1. 16世紀までのヴォルタ川流域へのマンデ系諸民族の拡散

ヴォルタ川流域へのムスリムの拡散は考古資料、口頭伝承、アラビア語史料のそれぞれに基づく、南北の長距離交易の確立、マンデ系諸民族の南下、ムスリムの拡散の三つの論点が結び付けられ、あるいは混同されながら論じられてきた(たとえば、Wilks 1982; Weiss 2008: chp. 2)。結論からいえば、16世紀以前の事柄を明らかにするための史資料は——それ以降の時代においても断片的であるが、それ以上に——非常に断片的であり、大雑把な特徴しかつかむことができない。とはいえ、いくつかの特徴を指摘することができるだろう。以下では、まず、考古資料、口頭伝承、アラビア語史料からそれぞれ16世紀ごろまで



のヴォルタ川流域へのムスリムの拡散について明らかになっている内容をまとめていきたい。

西アフリカ内陸における南北の長距離交易の拡張は 15 世紀以前に遡るものと考えられている。決定的な証拠には欠いているもののいくつかの考古学の成果が報告されている。最も古い事例では、ブルキナファソ北東部のキッシ(Kissi)遺跡で、5 世紀から 7 世紀の層から数百のガラス・ビーズとカーネリアン・ビーズが出土しており、北からガラス・ビーズが持ち込まれたことが示唆されている(Magnavita 2003)。ブルキナファソ東部のムフン川湾曲部のキリコンゴ(Kirikongo)遺跡においても、8 世紀から 12 世紀の層からタカラガイとガラス・ビーズが少量出土している(Dueppen 2012)。ガーナでの事例はさらに時代が下り、ガーナ中部の森林地帯の境界に位置するバンダ(Banda)遺跡では、14 世紀から 17 世紀半ばの層から、カバの牙もしくは象牙の加工品が数十個出土している(Stahl and Stahl 2004: 92)。同様のガーナ中部のベゴ(Begho)遺跡は、14 世紀半ばから 18 世紀頃まで居住されていたと考えられており、大量のガラス・ビーズ、銅製品、16 世紀後半と推定される青や白の中国製の磁器の破片、10 個ほどのタカラガイが出土している(Posnansky 1973: 158)。これらの報告から、少なくともいえることは、北アフリカ由来のモノが遅くとも 12 世紀頃までには現在のブルキナファソのサバンナに到来していること、ガーナ中部での南北の交易を示す確かな証拠は 14 世紀以降に現れていることである。

現在のブルキナファソを経由して南下した長距離交易商人を含むマンデ系の民族は、ヤルセ、ダフィン、ボボ・ジュラ、ダガリ・ジュラである。口頭伝承やアラビア語史料の断片的な言及から移住が開始された相対的な年代は理解されるだろう。

ヤルセは、モシとヤルセの口頭伝承において、最初にヤルセが到来した時期のモシのワダドゥグ国王の名前が知られていることから、その国王の統治期と推測される 16 世紀前半に到達したものと考えられる(Levtzion 1969: 164; Izard 1971: 217)。

ダフィンについては、18 世紀に書かれたと推測されるサファネに残された文書<sup>1</sup>に基づけば、16 世紀後半にサファネに現在のイマームの祖先となるサコが到来したとされる(Ray 1998: 138)。サコ到来以前のサファネではシセがイマームであったこと、サファネよりも創設が古いとされるダフィンの村々があることを考慮すると、遅くとも 15 世紀にはダフィン

---

<sup>1</sup> これはフランスの人類学者のレイがサファネでコピーをとった手稿書であり、カラモコ・タスリマの同時代とされるサファネのサコが書いたものとされる(Ray 1998: 138)。なお、この手稿書は現在、サファネにはないとされ、現在のところ、この手稿書を直接参照し、言及しているのは、レイ一人となっている。

はムフン川湾曲部に到来していたと考えられる。

ボボ・ジュラソとその周辺では、ボボ・ジュラとジュラが弁別されている。この弁別には、いくつかの要素があるが、歴史的には、17 世紀初頭のコン王国による遠征によって、あるいはそれ以降に、コンを経由して到来したムスリムはジュラとされ、この遠征以前にすでにこの土地に定住し、かつ先住のボボよりも後に来たマンデ由来の者たちはボボ・ジュラとされる(中尾 2016a: 152-158)。したがって、遅くとも 16 世紀にはボボ・ジュラは現在のムフン川湾曲部から南東のボボ・ジュラソ周辺に居住していたと想定される。

ダガリ・ジュラは、地域によってはカントンシ(Kantonsi)と自称し、マンデの起源ではあるが、ダガリの言語を話すという点でジュラと識別されている(Wilks 1989: 54)。ガーナ北部のパレウォゴ(Palewogo)はダガリ・ジュラが初期の段階に定住した中心地の一つであり、ワ王国が成立する以前<sup>2</sup>にパレウォゴは存在していたため(ibid.: 54)、早ければ 16 世紀以前、遅くとも 18 世紀以前にはダガリ・ジュラはガーナ北部まで南下していた。

総じていえば、遅くとも 15 世紀から 16 世紀ごろにはムスリムを含むマンデ系の諸民族が南下していたといえる。ただし、留意しなければならない点は、ダフィンもボボ・ジュラもすべてがムスリムであったわけではないということである。ダフィンの最初期の到来者は非ムスリムであり、いずれの村でもムスリムがマジョリティであったということとはなかった。ボボ・ジュラの場合、ボボの社会のなかに包摂されており、かつボボ・ジュラのなかにも非ムスリムが多くいた。こうした住民は長距離交易に参加していなかったとされ、マラブーのリネージであっても一般論として農閑期に長距離交易をおこなっていたという口頭伝承が聞かれるのみで、どの程度のものであったのか判断することができない。おそらく小規模のものであったと推測される。

アラビア語史料に基づく研究では、マンデ系のムスリムが南下し、アカンの森林地帯に到達したのは 15 世紀から 16 世紀のことであると考えられている(Wilks 2000: 99)。この時期に、現在のガーナ中部のサバンナと森林地帯の縁にビトゥ(Bitu)もしくはビグ(Bighu)と言及される交易の中心地があったことは広く知られている(Wilks 1982)。16 世紀から 19 世紀までの種々のアラビア語の年代記・地理書のなかに、ビトゥについての言及があり、金とコーラの実を産出する土地であることが記されている(ibid.: 343-345)。ジュラがこの金とコーラの実を北に輸出する交易を担ったとされ、ビトゥにはこうしたジュラのムスリムが

---

<sup>2</sup> のちにふれるが、ワ王国は 16 世紀末から 18 世紀初頭のあいだに成立したと考えられている(Wilks 1989: 85)。

居住していたことがボンドゥクに残されたアラビア語の史料からウィルクスが明らかにしている(ibid.: 348)。また、コートディヴォワール北部からガーナ北部にかけて、コン、ブナ、ボンドゥクなどにビトゥから来たとするジュラが多くいることから(Wilks 1985: 477)、ある種の象徴的な中心地であったことは確かである。

このように、16 世紀ごろまでには、南北の長距離交易が一定程度行われ、マンデ系諸民族が南下し、いくつかの居住地が存在していた。以下で具体的に特定のリネージあるいは特定の個人の移住にふれるが、こうした居住地を経由し、新たな土地に定住する場合もあれば、マンデ(ニジェール川中流域)から直接的に新たな土地に定住する場合もある。16 世紀以前からマンデ系の諸民族の南への移住は生じていたが、その移住は 16 世紀から少なくとも植民地統治開始期まで継続して起きていた。言い換えれば、特定の集団が大挙して特定の時期に移住したわけではなく、あるいは一つの中心となる中継地から拡散したわけでもなかった。

### 3-2. 16 世紀から 19 世紀初頭までのイスラームの変容

16 世紀以降に生じた共通した変化は、この時代に生じた国家の形成に伴って、国家の王都ないしは商都にモスクが建てられ、そのモスクにイマームにマンデ系のムスリムが選ばれたということである。このことは、古典的には、長距離交易を担っていたとされるムスリムによる平和的なイスラーム化(Levtzion 1968)、異教徒との共存をおこなうアルハジ・サリム・スワレの学術伝統に基づく平和主義的なイスラーム(Wilks 1968a, 2000)としてまとめられる。ヴォルタ川流域に移住したマラブーのすべてがスワレの学統に属していたかという点を脇におけば(この点は次節で述べる)、全体としては妥当な見解である。こうした見解を踏まえつつ、先行研究の整理・検討から、16 世紀以降に生じた変化として、次の点を新たに指摘したい。すなわち、16 世紀から 18 世紀までに成立したとされる諸王国のなかで、ゴンジャ王国、ダゴンバ王国のイマーム位は安定していたが、コン王国、ギャマン王国、ワ王国のイマーム位が変動した。後者においては、コンが学術の中心となり、学術の刷新が生じたということである。

ゴンジャについては、18 世紀に書かれたとされる『ゴンジャ年代記』<sup>3</sup>では、前節でふれ

---

<sup>3</sup> ウィルクスは、『ゴンジャ年代記』は、1747 年にゴンジャのイマームとなったシーディー・ウマル・ブン・スマ(Sidi 'Umar b. Suma)が 1751/2 年に書きあげ、彼の息子でイマーム位を継承したウマル・クナンディ・ブン・ウマル('Umar Kunandi b. 'Umar)が 1764 年

たビトゥでの金の確保を目的として、マリ王国の国王が兄弟の二人の王子である兄のウマル(Umar)と弟のナンバ(Namba、あるいはジャッパ(Jakpa))を長としたナンバ騎馬軍を派遣し、ナンバがビトゥとその周辺地域を征服し、ヤグブムを首都として、ナンバがゴンジャ王国の初代国王となったとされる(Wilks et al. 1986: 21-22, 44)。このゴンジャ王国の成立は、16 世紀前半(Levtzion 1968: 53)、もしくは 16 世紀なかばと考えられている(Wilks 2000: 99)。この征服が生じた際に、ビトゥのマラブーであったイスマイル・カマガテ(Isma'il Kamaghatay)が初代国王のナンバに祝福を与え、ナンバらはイスマイルに贈与を与えたとされる(Wilks et al. 1986: 91)。イスマイルの息子のムハンマド・アル・アブヤド(Muhammad al-Abyad)はナンバの息子のマンウラ(Manwura)に祝福を与え(ibid.: 91)、マンウラは勝利を得たことに謝してイスラームに改宗した(ibid.: 92-93)。そして、ゴンジャ王国内のあらゆるイマームは、アブヤド<sup>4</sup>の子孫を自称するサクパレ(Sakpare)と呼ばれる集団<sup>5</sup>から輩出されることとなっていた<sup>6</sup>(Levtzion 1968: 56)。

ダゴンバについては比較的詳細な研究がなされている。やや冗長になるが、要点をまとめると以下のようになる。

口頭伝承ではモシ・マンプリシ・ダゴンバ・ナヌンバの諸王国は 15 世紀後半<sup>7</sup>に出現したと考えられている(川田 1977: 332)。口頭伝承では、これらの諸王国は、グベワ(Gbewa)を共通の祖先とし、それ以降にモシ諸王国の祖先とマンプリシ・ダゴンバ・ナヌンバの祖先

---

にアップデートしたものと捉えている(Wilks 2000: 99)。

<sup>4</sup> ムハンマド・アル・アブヤドはゴンジャの口頭伝承におけるファティ・モルクペ(Fati Morukpe)として知られている(Wilks et al. 1986: 125)。

<sup>5</sup> ゴンジャのムスリムの共同体は、伝統的で世襲のムスリム共同体と、ゴンジャ王国後に移住してきた外来者のムスリムとに分かれている(Levtzion 1968: 55)。前者には、サクパレのほかに、ゴンジャ王国の初代国王ナンバ(口頭伝承におけるジャッパ(Jakpa)の子孫を自称する集団が含まれている(ibid.: 56)。

<sup>6</sup> 実際のところ、サクパレがすべてアブヤドの子孫とみなすことはできないだろう。たとえば、ナンバが最初に建てたグブイペ(Gbuipe)のモスク(Wilks et al. 1986: 93)のイマーム位は、ジャバガテ(Jabaghatay)によって世襲されていた(Levtzion 1968: 60-61)。アブヤドはカマガテであるから(Wilks et al. 1986: 91)、実際には、すべてのサクパレがアブヤドの子孫とはいえないだろう。より重要な点は、ゴンジャ王国成立以前から居住していたムスリムと成立以後に移住してきたムスリムとを分けることにあったと考えられる(註 5 参照)。

<sup>7</sup> より古い時代に設定する研究者もいる(たとえば、Izard 1970)。15 世紀以前に遡る根拠は、推測を除けば、『ダーリーフ・スーダーン』の記述しかない。ここで基本的な争点となっているのは、『ターリーフ・スーダーン』に書かれている「ムス」のソンガイへの侵略という記述が、(1)モシを指すのか、(2)モシを指したとして、それが特定の王国を指しているのか、という点であり、(3)ソンガイへの侵略について語るモシ側の口頭伝承がないことの評価である(川田 2000)。

の分岐が生じ、モシの諸王国は現在のブルキナファソ東部、マンプリシ・ダゴンバ・ナヌンバは現在のガーナ北部で形成された(ibid.: 333-334、図 3-1)。

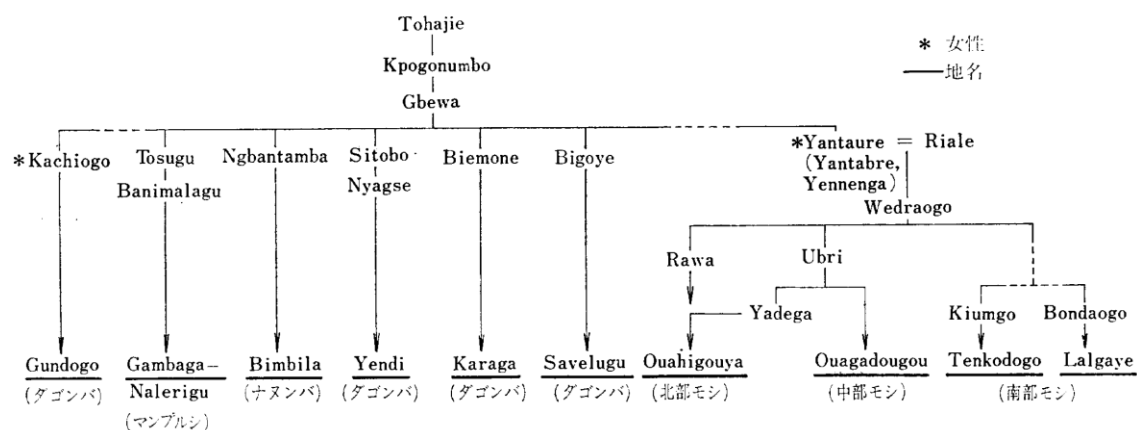


図 3-1. モシ・マンプリシ・ダゴンバ・ナヌンバの諸王国の始祖の分岐(川田 1977: 334)

これらの諸王国に共通していることは、初期の時代において王都が頻繁に移動したのちに、王都が定着するという経過をたどるという点であるが、マンプリシ王国とダゴンバ王国では他の王国と早い年代に王都が定着している(ibid.: 359-360)。ダゴンバ王国における王都の定着には、それぞれ遠征をおこない、王国を拡張させたとされるニャグセ(Nyagsi/Nyagse)とルロ(Luro)という王が画期となっている。

ニャグセは現在のダゴンバ地域の白ヴォルタ川の東とオティ川の西に挟まれた地域で遠征をおこない(Ferguson 1972: 23-28)、白ヴォルタ川東岸のイエンディ(Yendi)に王都を定めた(ibid.: 28)。ニャグセの後継者は三代にわたって白ヴォルタ川の西に遠征をおこなったが、その後は東へと方向を変え、オティ川の東にまで遠征がなされ、ルロ王が白ヴォルタ川東岸のイエンディから約 100km 東南東の現在のイエンディを新たな王都に見定めた(ibid.: 34-36)。実際にはルロ王の二代後に新しいイエンディが王都となるのだが(ibid.: 34)、これによって、白ヴォルタ川東岸のイエンディは「古いイエンディ」(Yendi-Dabari)と呼ばれることになった<sup>8</sup>。この新しいイエンディが王都として定着したのは、17 世紀後半のことと推

<sup>8</sup> なお、「古いイエンディ」では、発掘調査がなされ、17 世紀後半に放棄されたとされているが(Shinnie and Ozanne 1963)、その根拠は希薄であり、口頭伝承研究から構築された年代観を投影しているように思われる。

定されている<sup>9</sup>。

ダゴンバの最初のムスリムはルロ王の統治期にトンブクトゥからモシのサルマテンガ<sup>10</sup>(Salmatenga)などを経由して「古いイェンディ」に到来したスレイマン・バガヨゴ(Sulayman Bagayugu)であるとされている(Ferguson 1972: 48, 55-56, 60, 64, 66)。なお、16世紀から17世紀にかけてトンブクトゥにはバガヨゴを名乗る多くのウラマーがいたが、こうしたバガヨゴとの結びつきを示す直接的な証拠はない(ibid.: 57-60)。スレイマンは「古いイェンディ」からサバリ(Sabari)に移り、そこでモスクを建て、イエリ・ナー(Yeri Na=ムスリムの長)となり、これ以降、サバリのイエリ・ナーはバガユグが継いでいる(ibid.: 77-78)。

ルロ王の息子のトゥトゥグリ(Tutuguri)王が、彼がスレイマンにサダカとして与えた女性奴隷を、スレイマンがトゥトゥグリ王に贈りかえし、その女性がのちのムハンマド・ザンギナ(Zangina)王を産んだという口頭伝承がある(ibid.: 80)。また、ルロ王によって、幼いザンギナはサバリのスレイマンの息子に預けられ、クルアーンを学んだとされる(ibid.: 90)。こうしたことから、ムハンマド・ザンギナ王は本格的にイスラームに帰依したダゴンバの最初の王となった(ibid.: 94)。

ダゴンバのイスラームでは、おそらくその政治文化と結びついて、多くの称号が生まれている<sup>11</sup>。重要な称号として、少なくとも、イーダン・モレ(Yidan Mole)、ゼモレ(Zemole)、マダハ・ナー(Madaha Na)、ヤ・リマム(Ya Limam)がある。イーダン・モレは、スレイマンがダゴンバに到来する以前に居住したサルマテンガでスレイマンから教えを受けたとされる「モシ」のムスリムであるタルミーズ(talmidh)という集団の長を指す称号であり、タ

<sup>9</sup> この年代の推定は、ダゴンバの王の系譜と『ゴンジャ年代記』における記述を組み合わせたものである。現在のイェンディが王都として定着したのが、ルロ王から二代目の後継のザガレ(Zagale)王であるとされ(Ferguson 1972: 34)、この王の統治期は継承関係と『ゴンジャ年代記』の記述から推測して、1669年から1683年と推定されている(ibid.: 17)。これは、『ゴンジャ年代記』では、(a)マンプルシのアタビア(Atabia)王の統治期が1690-1741/2年であること(Wilks et al. 1986: 101)、(b)ザガレ王から三代後のムハンマド・ザンギナ(Muhammad Zangina)王の死去が1714/15年であること(ibid.: 98)が記述されており、(a)については、口頭伝承からザガレ王から二代後の時代がアタビア王と同年代であることがわかっている(川田 1977: 355)。これらからザガレ王の統治期は17世紀後半である蓋然性が高い。

<sup>10</sup> ファーガソンによる地名の同定では、ブルキナファソのカヤの付近にあるとされている(Ferguson 1972: 66)。

<sup>11</sup> 印象の域をでないが、ダゴンバには、称号を新たに多く生み出していく政治文化があるように思われる。植民地統治期以降のダゴンバの「家長」の称号が急増したことについての友松(2015: chp. 5)の議論を参照。

ルミーズはマウルードなどのイスラームの祭事を取りしきる職位となっている(ibid.: 105-107)。同様に、マダハ・ナーはハウサのムスリムの集団の長を指す称号である(ibid.: 207-208)。ゼモレは国王個人のために毎日礼拝をおこなう職位であり(ibid.: 192)、ヤ・リマムは国全体のためのイマームの職位となっている(ibid.: 236)。これらの称号の成立年代や由来などの詳細は省略するが、特徴的なことは、こうした称号は安定的に特定の集団によって継承されており(ibid.: 193-194, 242)、少なくとも、表面的には、植民地統治以前においてはダゴンバのイスラームのあり方を劇的に変容させる革新運動は生じなかったと結論付けられるだろう。

このように、ゴンジャ王国とダゴンバ王国では、イマーム位(あるいはそれに類する職位)が安定して継承されており、口頭伝承のなかでも革新的な運動があったとは語られていないことが確認できる。これに対して、以下でとりあげる、ギャマン王国、ワ王国、コン王国では、イマーム位が安定せず、途上で革新的な運動が生じている。これらをそれぞれみていこう。

ギャマン(Gyaman)王国は 17 世紀ごろにガーナ中部の森林地帯とサバンナ地帯の境界域に形成され(Muhammad 1974: 10)、この王国下にあったボンドゥクの最初のイマームにはビトゥで政治的な指導者であったとされるウスマン・カマガテ('Uthman Kamaghatay)が就任した(ibid.: 16)。しかし、18 世紀頃に、イマーム位はカマガテからティミアタイ(Timiatay)にとって代われる(ibid.: 17-20)。ティミアタイの口頭伝承では、「カマガテは人びとのために祈禱すべきであったが、彼らは適切な祈り方を知らず、カマガテのイマームは一日中寝てばかりいて…大酒のみであった」ため、イマーム位が交代されたという(ibid.: 17)。

ガーナ北部に生じたワ(Wa)王国がいつ生じたのか正確にはわかっていないが、イマーム位と王位の系譜の分析からは、16 世紀末から 18 世紀初頭のあいだにあると結論付けられている(Wilks 1989: 85)。口頭伝承では、ワには王国成立以前からマンデ系のムスリム、一部にはダガリ-ジュラ(カントンシ)のムスリムが居住していたとされるが(ibid.: 53-55)、最初のイマームとなったのは、ダフィンのランフィエラを経由したヤムル・トラオレ(Ya'muru Tarawiri)である(ibid.: 58-60)。口頭伝承と 20 世紀初頭に書かれたアラビア語の史料によれば、ワのイマームはすべてヤムルの子孫であるとされているが(ibid.: 69)、18 世紀後半ごろには、「すべてのカラモコ(イスラームの知識をもった学者)は死んでしまい」、後にイマームとなるサイードがコンで学んだ後に、イマームとなり、ワのイスラームの革新者(mujaddid)になったとされる(ibid.: 76)。

コン(Kong)王国は、18 世紀初頭にコートディヴォワール北東部に成立する(Saul 1998: 544)。コン王国はジェンネとの交易路確保のため、ニジェール川中流域まで遠征し、その過程でムブン川湾曲部の南西のボボ・ジュラソを征服した(ibid.: 548)。イマームの地位は初代国王のセク・ワッタラ(1710-1745)の統治下でジェンネから来てコンに定住したカラモコ・トゥレに 1750 年に譲られたが、この新しいイマームはすでに高齢で 3 年後の 1753 年に死去してしまった(Kodjo 2004: 223)。トゥレの後にイマームになったのは、ファーマ・ダオ(fama Dao)と呼ばれ、一部の口頭伝承によれば、バモロ・ベレ(Bamoro Bele)というダフィンの出身のムスリムであったが、彼の到来は大きな混乱を巻き起こした(ibid.: 224)。口頭伝承によれば、彼は妖術師(subagatye)であり、ムスリム内部での対立が生じ、この当時のモスクは破壊された(ibid.: 225)。ベレの死後、コートディヴォワール北部のボロン(Boron)のマラブーであったサノゴがイマームとして呼ばれ、この時期にモスクが再建されたという(ibid.: 227-228)。

このコンに来て、イマームとなった人物がアル・アッバス・サノゴ(Al‘Abbas Saghanughu)であり、ボロンに住んでいた彼の父がムハンマド・アス・ムスタファ・サノゴ(Muhammad al-Mustafa Saghanughu)である(Wilks 1968a: 173; Kodjo 2004: 228)。ワのイスラームを革新したとされるサイード・トラオレは、アル・アッバス・サノゴから教えを受けたとされ(Wilks 1989: 76)、ボンドゥクのイマームのティミタイアも、ティミタイアに交替してから 5 代目のイマーム(Said Timiatay)がこのサノゴの学術伝統に入っている(図 3-2)。ウィルクスは、こうして 18 世紀から 19 世紀にかけてのサノゴによる刷新があったとし、コンでは 1785/6 年、ボンドゥクでは 1797/8 年、ワでは 1801/2 年に新しい金曜モスクの建設があったこと、世襲ではなく学習の質によって継承される新しいスタイルのイマームが生じたこと、金曜の集団礼拝の実施がおこなわれるようになったことを挙げている(Wilks 2000: 101)。

Ash-Shaik al-Akbar	d. 1731/2
Muhammad al-Abyad	d. 1779/80
Muhammad al-Aswad	d. 1824/5
Qadir	d. 1858/9
Said	d. 1855/6
Ibrahim	d. 1895/6
Ismail	d. 1895/6
Kunadi	d. 1921/2
Muhammad Qudus	d. 1959/60

表 3-1. ティミタイア以降のボンドゥクのイマーム位の系譜と没年(Muhammad 1974: 22)



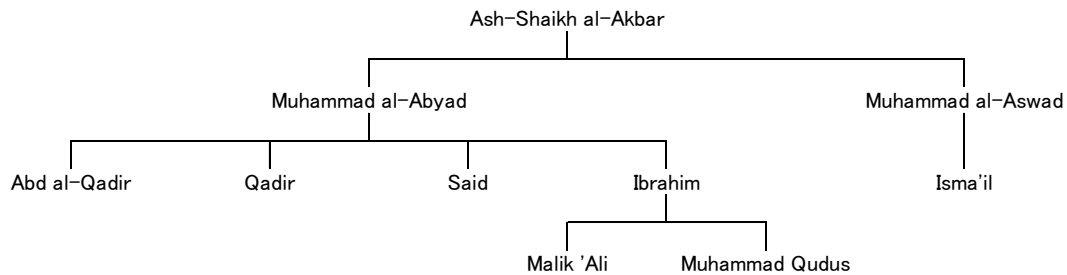


図 3-2. ティミタイア以降のボンドゥクのイマームらの親族図(Muhammad 1974: 19, 22; Wilks 1968a: appendix II から筆者作成)

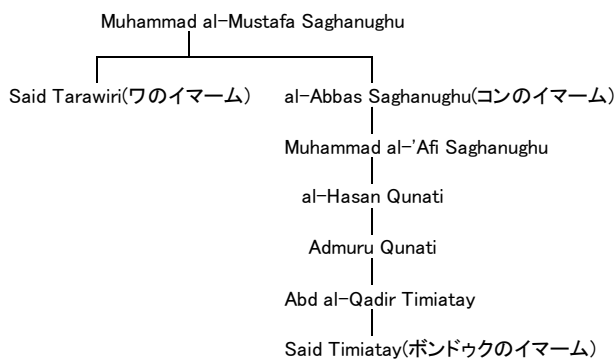


図 3-3. サノゴの学術伝統の師弟関係の系譜(Wilks 1968a: 182, 184, appendix II から筆者作成)

このように、ゴンジャ王国、ダゴンバ王国では、イマーム位が安定していたのに対して、ギャマン王国、ワ王国、コン王国ではイマーム位は安定せず、コンのサノゴを中心に 18 世紀末から 19 世紀初頭に学術の刷新が生じたことがわかる。また、前節で述べたことの再確認となるが、一つの中心から拡散していったわけではないことを指摘しなければならない。こうしたことを踏まえつつ、カラントオのジハード以前の 19 世紀初頭までのムフン川湾曲部のサファネ周辺でムスリムの拡散がどのように生じてきたのかを次節で述べる。

### 3-3. ムフン川湾曲部におけるムスリムの拡散

#### 3-3-1. サファネとその周辺におけるムスリムの拡散

ブルキナファソ西部に位置するダフィンの居住域は、ムフン川を挟んで南北に縦長に広がっている(図 3-4, 5)。ダフィンを対象として行われた言語学的な調査では、サファネ周辺

は高い言語的な同質性があり、他の地域と区別されることが指摘されている(Harrison and Harrison 2001a: 26)。サファネ周辺の村々では、大まかにいえば、デドゥグ以北の村々との交流はほとんどなく、口頭伝承においても頻繁に言及されるわけではなかった。

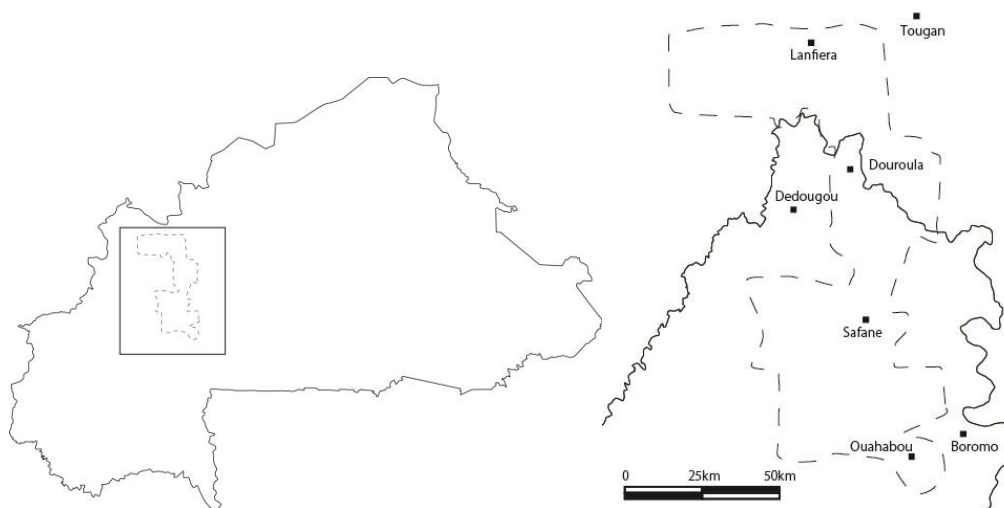


図 3-4(左). ブルキナファソにおけるダフィンの居住域

図 3-5(右). ダフィンの居住域(点線が居住域、実線はムフン川)

現存している町／村のなかで、ダフィンの歴史をもつイスラームの中心地として一般的に言及されるのは、図 3-4、3-5 にあげたランフィエラ、ドゥルラ、サファネ、ワッハーブである。このうち、最後のワッハーブはカラントオのジハードの拠点となった町であり、ジハード以前、ムスリムは居住していなかった<sup>12</sup>。筆者の調査では、デドゥグ以南のダフィンにおいて、ジハードの勢力を除いて、19 世紀までにムスリムが居住していたとされる村は、サファネ周辺では、マーコンゴ(Makongo)、ヌーヌー(Nounou)、サファネ(Safane)、バラ(Bara)、シウ(Siou)、サーニ(Sani)、ジナコンゴ(Zinakongo)、ビフォロ(Biforo)、ハベ(Habe)の 9 つの村のみであった。ムスリムは村内においても少数派であったが、南部のダフィンのなかでも少数派であったことがわかる<sup>13</sup>。ムスリムは少数であり、植民地統治以前は特定のリネージに限定されていた。複数のムスリムのリネージが集まっていたサファネ

<sup>12</sup> たとえば、2013/7/9 Sani, Amadou Cissé(サーニの村長)。

<sup>13</sup> 1955 年の報告では、デドゥグ管区ではムスリムは全体の 28.4%と見積もられている(AHCD s.c. Religion, novembre 1955, Dedougou.)。カラントオのジハードの勢力が含まれ、かつ植民地期にムスリムは増加していたことを踏まえると、19 世紀初頭においてはムスリムは全体の人口の 2 割以下ほどと推測される。

を例外として、ムスリムが到来した村には一つの村に一つのムスリムのリネージがあった。こうした状況もあって、ムスリムは調停役や呪術的なサービスを行うマラブーであった。この点は、ムスリム内部に戦士とマラブーの分化が生じていたコンの状況(Quimby 1972)とは異なる。

上述の9つの村に19世紀までに居住していたマラブーのジャム(クラン)はフォファナ、サノゴ、サコ、シセである(表3-2)。サコはヌーヌーのサコとサファネのサコは経由地を異にした別集団であったが、他のフォファナ、サノゴ、シセは経由地を共有した同一集団であったと考えられる。その拡散の経路は比較的単純なものであり、図3-6のようにまとめられる。

ジャム(クラン名)	移動経路	インフォーマント
Fofana	Suramana→Biforo, Siou	2013/6/27 Siou, Abdoulaye Fofana
	Faramana→Toton→Habe→Biforo	2013/7/1 Biforo, al-Hadj Ousman Fofana
	Faramana→Siraro→Habe→Biforo	2013/7/1 Biforo, al-Hadj Lansina Fofana
	Nyamina→Makkah→Faramana→Safane→Siraro→Biforo	2013/7/1 Biforo, Sidiki Fofana
	Toton→Siraro, Biforo	2013/8/15 Siralo, Souleyman Fofana, Yousouf Fofana
Sanogo	Mali→Taslina→Lanfiera→Bara, Zinakongo	2013/7/3 Bara, Ousman Sanogo
	Lanfiera→Nounou→Makongo	2013/8/19 Makongo, Mousa Sanogo, Ibrahim Sanogo
	Lanfiera→Safane	2013/8/10 Safane, Mamadou Sanogo
Sako	Suramana→Nounou	2013/8/18 Nounou, al-Hadj Mousa Sako
	Nyamina→Safane	2013/8/2 Safane, al-Hadj Amada Sako
Cisse	Nema→Safane	2013/8/2 Safane, Karim Cisse
	Sinsani→Timbuktu→Djenne→Safane→Sani	2013/7/7 Sani, Amadou Cisse
Toure	Kong→Safane	2013/8/11 Safane, Lansa Toure

表 3-2. 19 世紀までにサファネ周辺に居住していたムスリム<sup>14</sup>

<sup>14</sup> なお、インフォーマントは各村のすべてイマーム、ないしはマラブーである。

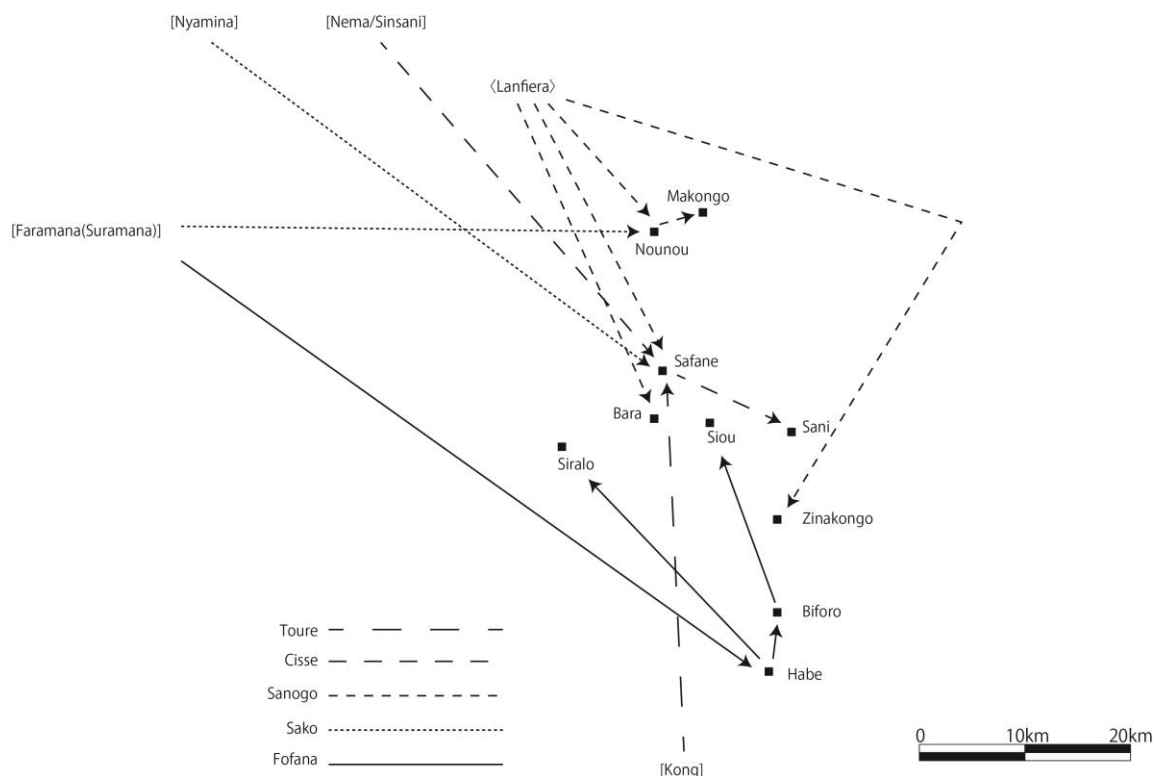


図 3-6. 19 世紀以前にサファネ周辺に到来したムスリムの拡散の経路(□で示した地名は現在のダフィンの居住地外、< >で示したランフィエラは北部ダフィンに位置している)

トゥレとサノゴは、最も経路が明瞭であり、歴史が浅いと想定される。トゥレはダフィンではなく、ジュラであり、「植民地統治の始まる直前」、すなわち、19 世紀末にコンからサファネに到来したという<sup>15</sup>。サノゴは共通して北部ダフィンのランフィエラを経由して、バラ、マーコンゴ、ジナコンゴに到来している。これはランフィエラからのサノゴの拡散が歴史的にそれほど古くなかったからではないかと考えている。ランフィエラのサノゴは北部ダフィンでの先行研究によって一定程度明らかになっている。ランフィエラから南東に 30km ほどのティセ(Tisse)村に生まれたダフィンのファリク・サノゴ(Fariku Sanogo)が小さなモスクを建て、多くの学生を集め、彼の息子であるカラモコ・バこと、ママドゥ・サノゴ(Mamadou Sanogo)がジェンネで修学した後、ランフィエラにもどって、さらにランフィエラの名声を高めたとされる(Echenberg 1969: 538)。カラモコ・バは 19 世紀末に生じたアル・カリのジハードに反対し、当初、フランス軍に好意的な印象をもたれたが、反乱の嫌疑をかけられ、フランス軍によって殺害された(本稿 4 章 2 節)。つまり、ファリク・サ

<sup>15</sup> 2013/8/11 Safane, Lansa Toure(サファネ、シサラベ街区のイマーム)。

ノゴは 19 世紀前半ごろにランフィエラで活動していたと推定される。したがって、19 世紀以降サノゴがバラ、マーコンゴ、ジナコンゴに到来したのであろう。なお、1985 年に収集されたサファネの口頭伝承では、ランフィエラのカラモコ・バとサファネの後のイマームとなるサコのカラモコ・サンサンコロ(Karamoko Sansankoro)は同時期に「マンデ」で学んだとされる(Larou 1985: 93)。

もっとも、ランフィエラは 19 世紀のサノゴ以前からイスラームの長い歴史をもつ村であったと考えられる。たとえば、ワのイマームとなったトラオレはランフィエラを経由している(Wilks 1989: 58-59)。少なくとも、19 世紀以降はコンから内陸に至る交易路の経由地の一つであったことは確かである。19 世紀初頭のヴォルタ川流域の交易路をまとめたアラビア語の文書にはランフィエラについての言及があり(Dupuis 1824: cxxxi)、19 世紀半ばに西アフリカ内陸を旅行したバルトもまた、直接この地を訪れていないが、バンバラのインフォーマントから得られた内陸の交易路のなかにランフィエラが含まれている(Barth 1859[1849]: 648)。これらにはサファネも同様に言及されており(Dupuis 1824: cxxxi; Barth 1859: 648)、ランフィエラとサファネはローカルなイスラームの中心地であると同時に、交易路上に位置する村であったと考えられる。

つぎに、フォファナとヌーヌーのサコは、ファラマナ(Faramana, スラマナ Suramana)という共通の経由地をたどっている。ファラマナという地名をもつ町はブルキナファソの北東部、マリ国境と接する地域に位置し、言語分布によれば、ファラマナとその周辺地域では飛び地状にマルカ・ジュラ(Marka-Dyula)<sup>16</sup>と分類されている集団が居住している(Harrison and Harrison 2001b)。実際のところ、一部の聞き取りでもファラマナがマリとブルキナファソ北東部の国境地域にある村であることが教示された<sup>17</sup>。残念ながら、ファラマナと、ファラマナを経由した集団の定着地については、19 世紀以降のヨーロッパ人の旅行記において言及はない。また、ヌーヌーのサコは年代を推定するリファレンスに欠き、フォファナはサファネのサコに言及しているが前後関係の特定には問題があるため(後述する)、両集団とも年代の特定は困難となっている。

口頭伝承のなかで、直接的に到来時期の前後関係がわかっているのは、シセとサコである。両者の口頭伝承とも、シセが先にサファネに定着した後に、サコがやってきたことは

---

<sup>16</sup> ブルキナファソでは行政用語としてのマルカはダフィンと同義である。

<sup>17</sup> 2013/7/1 Biforo, al-Hadj Ousman Fofana(ビフォロのイマーム)。

共通している<sup>18</sup>。すでに述べたように、サファネは遅くとも 19 世紀には交易路上にある村としてダフィンの外部にも知られており(Dupuis 1824: cxxxi; Barth 1859: 648)、図 3-6 に示したとおり、植民地統治以前にシセ、サコ、ランフィエラのサノゴ、コンのトゥレが到来し、マラブーを引きつけている。しかし、興味深いことに、サファネのサコはランフィエラのサノゴやハベのフォファナ、あるいはサファネのシセのように近隣の村落に拡散していない。

他方で、サファネを遠く離れた地域で、サファネの「アフマド・サンサンコロ・サコ」(Ahmad Sansankoro Sako)という人物が言及されている。サファネから南東に 80km ほど、あるいはワッハーブからさらに東に 40km ほどのウンデ(Hounde)のワカラ(Ouakara)という村に 19 世紀前半ごろにアフマドは居住した後に、カルバ(Karba)村を新設し、改宗者を生みだし、クルアーン学校を開いたのちに、この地を去り、3 年ごとにこの村を訪れてはイスラームを普及させていったという口頭伝承が残されている(Philiponeau 2009: 978)。同名の人物は、ガーナ北部のワの歴史のなかにも登場する。1860 年代、ワ王国の国王がサファネのイマームに「カラモコ」(学者)を派遣するように依頼し、「アフマド・サンサンコリ」(Ahmad Sansankori)という人物がワに到来し、ハウサの女性と結婚し、他のダフィンも彼の下に集まるようになったという(Wilks 1989: 63)。このほかにもサファネ出身のマラブーの言及がある<sup>19</sup>。

ここまでのサファネ周辺のムスリムの拡散のあり方を、他地域のマンデ系ムスリムの事例を参照しつつ、まとめよう。第一に、ミクロな拡散状況においても、経由地が単一ではないことが理解できるだろう。ダフィンと総称される集団のムスリムにおいても、経由地は同一ではない。

第二に、あえてまとめれば、経由地とその拡散のあり方は 3 つに類型化できるだろう。すなわち、(1)ランフィエラのサノゴのように周辺に拡散していくタイプ、(2)サファネのサコのように飛び地状に拡散していくタイプ、(3)フォファナやサコのファラマナのようになかば伝説的な経由地として言及されるタイプである。特に、(3)のファラマナは、ジュラの

---

<sup>18</sup> 2013/7/7 Sani, Amadou Cissé(サーニの村長); 2013/8/2 Safane, al-Hadj Aamada Sako(サファネの大モスクのイマーム); 2013/8/2 Safane, Karim Cissé(サファネのシセの家長)。

<sup>19</sup> たとえば、19 世紀後半のコートディヴォワール北部のブナ(Bouna)の有力なマラブーであったカラモコ・マーマ(Karamoko Mama)はサファネ出身とされる(Mouhammad 1974: 84-85)。

拡散の際に言及されるビトゥと類似している。ビトゥの場合、中世のアラビア語史料に言及されている点では異なるが、コートディヴォワール北部からガーナ北部のコン、ブナ、ボンドゥクなどの種々のクランのジュラがビトゥをなかば伝説的な経由地として言及している(Wilks 1985: 477)。

第三に、このような拡散のあり方は、セネガンビアのマンデ系ムスリムのジャカンケの事例とは対照的なものとなっている。ジャカンケでは、アル・ハジ・サリム・スワレがムスリムの拡散を生じさせた単一の始祖としての「歴史的人格」<sup>20</sup>を与えられているのに対して(Sanneh 1976)、サファネ周辺では、ダフィンのムスリムを唯一の始祖に帰す口頭伝承は存在していない。あるいは、より範囲を広げて、前節でまとめたように、実際には、ヴォルタ河流域に拡散したマンデ系ムスリムもまた、単一の始祖に起源をもとめることができない。ジャカンケとの対比で強調しておきたいことは、一つの経由地から拡散したわけではないということだけではなく、規範を示す「歴史的人格」としての単一の始祖が口頭伝承で語られないということである。

ジャカンケの場合、口頭伝承においても、アラビア語史料においても、ジャカンケの行動規範や理念が「歴史的人格」としてのスワレに明瞭に投影されている。サンネーは、スワレの歴史をまとめて、このように述べている。「アル・ハジ・サリム[・スワレ]が[ジャカマーシナを]離れようと決めた。このことを史料は、戦争に巻き込まれることや、世俗的な責任を着せられることに対する根源的な嫌悪感であったとして記述している。したがって、ジャカンケの歴史には二つの重要な主題が導入されている。すなわち、この場合では戦争による拡散であり、政治や軍事的な衝突からの回避である」(Sanneh 1976: 57)。

口頭伝承では次のようなものが典型といえるだろう。「あるときジャカンケの学者アル・ハジ・サリム・スワレは、マリンケの戦士ムサ・シソコをともなってメッカ巡礼に赴いた。そこでは、何かの手違いで、学者であるアル・ハジ・サリムは軍隊の指揮権を象徴する杖を授けられ、戦士であるムサが学者の杖を授かった。しかしこれでは両者の資質に合わないで、二人は次のような約束を交わして杖を取り換えた。すなわち、アル・ハジ・サリムとその一族は、以後政治的野心を一切放棄してシソコ一族に政治をゆだね、一方シソコ

---

<sup>20</sup> エージェンシー、カリスマとしての「歴史的人格」という点では、本稿とは立場を異にするが、歴史の語りにおいて、現状(／規範)を説明のために逸話を付帯される固有人名を「歴史的人格」とし、この「歴史的人格」が他の「歴史的人格」や固有の地名と関連付けられることによって、時空間軸上の線的な流れを構成する結節点としての「歴史的人格」という概念を坂井(2009a)に拠った。

一族は政治権力を手に入れるかわりにウラマーを尊敬し保護する、という約束であった。これ以来、ムスリムのスワレー族と戦士であるシソコー族は冗談関係を結び、互いに決して相手の領分を犯さないことになった」(Smith 1965: 265)。

つまり、ジャカンケでは、学術の始祖としてのスワレが、「平和主義」の理念を体現する「歴史的人格」として語られている<sup>21</sup>。こうした「平和主義」は、サファネ周辺のダフィンのムスリムの口頭伝承においても、部分的には語られており、先行研究で指摘されている通り、ダフィンも含むヴォルタ川流域に拡散したマンデ系ムスリムがこうした「平和主義」を一定程度共有していたことは確かではあろう(Wilks 1968a, 2000; Levtzion 1968)。

しかし、サファネ周辺のダフィンのマラブーの口頭伝承においては、やや異なる主題がたびたびあらわれている。次項では、こうした口頭伝承のいくつかの主題を明らかにしていく。

### 3-3-2. ダフィンのマラブーについての口頭伝承における主題——共存、呪力、葛藤

ここでは、ダフィンのマラブーについての口頭伝承における主題を、共存、呪力、葛藤の3つに分けて、それぞれ順を追って、明らかにしていく。まず、前項で引用したジャカンケの口頭伝承にみられた戦士と学者の分担と相互承認という共存の主題を取りあげる。

この主題が最も明瞭に語られたのは、やや例外的なビフォロの口頭伝承であった。2章で述べたように、西アフリカ内陸では、先住者が土地の主となり、供儀によって土地の霊との関係を保ち、村内のもめごとを解消する役割を果たす。しかし、プレンディというリネージが土地の主となっているビフォロでは、例外的に、先着のリネージが後から来たリネージに土地の主の地位を譲渡するという事例があった<sup>22</sup>。以下は、ビフォロの起源譚である。

---

<sup>21</sup> 19世紀のジャカンケのカラモコ・バが、スワレにこうした「歴史的人格」を付すようになり、このジャカンケの存在を知っていた20世紀半ばのボボ・ジュラソのアル・ハジ・マルハバ・サノゴがヴォルタ川流域に拡散したマンデ系ムスリムのあり方に重ね合わせ、こうした語りの形式が出現したという仮説を筆者はもっているが、この点については別稿で論じる。

<sup>22</sup> 著者の聞き取りをおこなったムフン川湾曲部の27の村では、村の起源譚にムスリムと非ムスリムが同時に登場する事例はこのビフォロだけであった。ムフン川湾曲部より北に数十キロのバラニ(Barani)周辺で調査したジャロは、新たに村を創設する際に、鍛冶屋が土地を選定したあと、マラブーが積極的に参与するという口頭伝承を伝えている(Diallo 1997: 99)。また、著者の調査したムフン川湾曲部のボロモ近辺のブワの村であるカルバ(Karba)でも土地の主とマラブーが村の創設の際に協力したという口頭伝承が報告されている(Philiponeau 2009)。



### 事例 1：ビフォロの起源譚

「この村はプレンディのものではない。ムスリムのフォファナが最初に住んでいたのだ。プレンディがマリからここにきたときに、フォファナは枯れ川のあたりに住んでいた。あるとき、フォファナの飼っていたヤギが首を切らずに死んだため、このヤギをプレンディに贈った。フォファナはプレンディに言った。「ここは少し遠いね。一緒に住まないか。」プレンディはフォファナに言った。「俺たちは礼拝をしないが、供犠をする。それでもいいか。」「何の問題もない」とフォファナは答えた。

そういうわけで…プレンディが土地の主となった。」(□は引用者、以下同様)<sup>23</sup>

フォファナはムスリムであったため、クルアーンの規定にある、咽喉と食道を切るという屠殺法ではないかたちで死んだ動物の肉を食べることができなかった。プレンディとフォファナの出会いはムスリムと在来宗教の宗教実践の相互承認によって説明されている。実際、先着者であるフォファナがなぜ土地の主にならなかったのかという著者の質問に対して、ビフォロのフォファナは次のように答えている。

### 事例 2：ビフォロのフォファナの説明

「土地の主の仕事はムスリムではできない。…たとえば、井戸を掘るとき、[土地の主は]供犠をしなくてはならない。あるいは、村で口論があったとき、仲裁して供犠をしなくてはならない。こうしたものが土地の主の仕事である。…ムスリムは首を切らずに死んだ動物を食べることはできない。そうして死んだ動物を食べるのが土地の主である。」<sup>24</sup>

ビフォロでは、ムスリムと在来宗教の宗教実践は相互に承認され、社会的な役割を分割し、共存していたと語られている。しかし、こうした共存の規範を示すような口頭伝承は稀であり、特にさしたる出来事もなく定着する事例が多い<sup>25</sup>。もちろん、これはムスリムと

<sup>23</sup> 2013/7/1 Biforo, Plendi Lasina(ビフォロの村長)。

<sup>24</sup> 2013/7/1 Biforo, Sidiki Fofana(ビフォロのマラブー)。

<sup>25</sup> 植民地統治以前にムスリムが定着した村のシウ、バラ、ジナコンゴ、サーニ、マーコンゴでは特にそのような逸話をもった口頭伝承は聞かれなかった(2013/6/26 Siou, Daiyu Drissa(シウのダイユーの家長); 2013/7/3 Bara, Foadin Kote(バラの土地の主); 2013/7/3 Bara, Ousman Sanogo(バラのイマーム); 2013/7/5 Zinakongo, Yousouf Konate(ジナコンゴの村長); 2013/7/7 Sani, Amadou Cissé(サーニの村長); 2013/8/19 Makongo, Nyeme Tantie(マーコンゴの土地の主))。

土地の主との役割分担や相互承認が、そのことの規範を示す口頭伝承をもたない村々のなかに存在しないことを意味しないであろう<sup>26</sup>。ジャカンケのアル・ハジ・サリム・スワレにみられたような、規範を付託するような「歴史的人格」がなかったとみるほうが適切である。

一方で、サファネのサコやシラロのフォファナにおいては、それぞれの始祖のマラブーの呪力を強調する口頭伝承が聞かれた。これには、それぞれ異なる内容のものと類似した内容をもつものがあるが、まずは前者の方からみていこう。

### 事例 3：サファネのサコの始祖のマリク・サコ(Malik Sako)

「シセはサコを見て偉大なマラブーだとわかった。シセは土地の主のところへ行って、こう言った。「偉大なマラブーを見た。もし引き留めなかったら、彼はどこかへ行ってしまうだろう。ここに住むように頼んだ方がよい。[偉大なマラブーとともに]アッラーに礼拝をすれば、この村も発展するだろう。」

サコはサファネで 40 日間、礼拝を続けた。40 日目の日には、大火が燃え上がり、動物たちがいっせいに鳴き声をあげ、すべての土器やヒョウタンが壊れた。ジンが出ていったのだ。

サコはセレに「しばらく私はここに住みます」と言った。雨季が過ぎた後、人びとはサコに身のまわりの物と娘を与え、サコはこの娘と結婚した。しばらくして、この娘は子を身ごもった。サコは旅を続けるつもりであったが、身重の妻は旅をすることができないため、サファネにとどまった。やがて、子供が産まれた。サコは旅を続けるつもりであったが、子供が小さくて旅をすることができなかった。…サコはセレに言った。「このように旅を続けることはできません。ここにとどまろうと思います。しかし、二つのことをお願いしたい。一つは建物を建てるための場所がほしい。もう一つは耕すための土地がほしい。」

セレは納得して、土地を与えた。与えられた土地は…サンサンコロ(sansankoro=森

---

<sup>26</sup> たとえば、調停者としてのムスリムの役割は、チェリバ(Millet 1990: 17-18)、シウ(2013/7/4 Siou, Mamadou Sere(シウの村長の息子))、サファネ(2013/8/2 Safane, al-Hadj Aamada Sako; 2013/8/6 Safane, al-Hadj Aamada Sako(サファネの大モスクのイマーム))、シラロ(2013/8/15 Siralo, Souleyman Fofana, Yousouf Fofana(シラロのイマームとその息子))、ヤンコソ(2013/8/13 Yankosso, Dauda Iye(ヤンコソのイマーム))において、ダフィンの一般論として語られた。

の意味)と言った。時を経て、サンゴロキナ(sangorokina)という街区の名前になった。人々はサンゴロキナで礼拝を始めるようになった。

サコは偉大なマラブーであったので、シセはサコにイマームの地位を譲った。そのサコの名前をマリク・サコ(Malik Sako)という。彼は家族とともにサファネに来て住み着いたのだ。サコがサファネのイマームになったことでサファネは発展していった。」

27

#### 事例 4：シラロのフォファナの始祖のラシナ・フォファナ(Lasina Fofana)

「フォファナがシラロに住み着いた頃、シラロでは土を掘っても水が得られなかった。土地の主は人々を呼び寄せて、話し合いをもった。ある者が言った。「余所者がここに来て住み着いている。その者はいろいろなことをよく知っている。だから、彼にこのことを話してみてもどうか。」土地の主は「問題ない。彼に頼んでみよう」と応じた。そこで、土地の主はフォファナに相談することにした。フォファナは言った。「問題ありません。アッラーはすべてを見えています。よい行いをすれば、水は得られるでしょう。」そして、フォファナはアッラーに祈った。しばらくして、フォファナは土地の主「グリオに頼んで、人々を集めてください。井戸を掘るのです」と言った。そこで、土地の主はグリオを呼び寄せ、人々を集めるように命じた。…人びとが井戸を掘ると、やがて水が湧いてきた。その頃、ずっと水を得ることができなかったのに、井戸を掘り始めたその日のうちに水を得ることができたのだ。」<sup>28</sup>

すでに述べたように、村の定着の際に奇跡譚を伴う始祖の口頭伝承は、サファネとシラロのみであった。興味深いことに、サファネの土地の主のセレとシラロのイマームのフォファナからは、類似した内容の口頭伝承が語られている。

#### 事例 5：サファネの土地の主のセレによる語り

「サンサコロという街区は、森という意味である。この街区はサコの家族に与えられたもので、古い時代には、サコはサンサンコロと呼ばれていた。

とある偉大なマラブーが、タリベとともに、メッカ巡礼の旅をしていた。シラロを通

---

<sup>27</sup> 2013/8/2 Safane, al-Hadj Aamada Sako(サファネの大モスクのイマーム).

<sup>28</sup> 2013/8/15 Siralo, Souleyman Fofana, Yousouf Fofana(シラロのイマームとその息子).

った際に、そこで礼拝をし、モスクを建て、500 人ほどの子供たちがそこで学んだ。その後、シラロを発って、サファネを通りがかった。偉大な人物にあったときは、人はその人が偉大であることがわかるものだ。サファネの人びとはこのマラブーを見るなり、彼が偉大な人物であることに気がついた。そこで[土地の主の]セレの家族はその人に会いに行った。そして、「どこに行かれるのですか」とマラブーに尋ねた。マラブーは「メッカにいくつもりです」と答えた。セレは「あなたは偉大な人物で、大マラブーです。私もあなたにここにとどまっていたきたいのです。実は、ここにはジンがいます。病気にもなっていないのに、私どもの子供たちがよく死んでしまいます。家畜もそうです。これは一体どういうことでしょうか」と語った。「あなたはジンを見つけだすことができますか」とセレは言った。[マラブーの]サコは「さがすことはできます」と答えた。セレはここにとどまって一緒に住んでくれるように頼み込んだ。「それではあそこの森に住もう。あそこの森にジンがいますから」とサコは答えた。

サコはその森に囲いをつくり、そこでアッラーに祈った。すると、子供のみならず、人が死ぬことがなくなった。3 年間、誰も死ぬことはなかった。そのあいだは、新しい墓が建てられることはなかったのだ。

こうしたことがあって、サファネの人々はサコにとどまってもらうように頼み込んだ。サコは納得して、家を建て、そこに住むようになった。」<sup>29</sup>

#### 事例 6：シラロのイマームのフォファナによる語り

「…サファネの土地の主は、[シラロのフォファナが先述の井戸の問題を解決したという]この話を聞いてシラロの土地の主の人に人を遣わせた。使いの者が事の真偽を確かめると、「余所者が来て、ここに住んでいるのだが、彼のおかげで水を得ることができるようになった。彼の名前はラーシナ・フォファナという」とシラロの土地の主は話した。使いの者はシラロの土地の主に言った。「サファネのサンサンコロというところに多くの獣が棲んでおり、人々を殺して問題となっています。ラーシナ・フォファナという人をサファネに呼び寄せるわけにはいかないでしょうか。」そこで、シラロの土地の主は使いの者をラーシナのところへ案内した。ラーシナはこのことを聞いて、「自分にはサファネにいく時間がないのですが、代わりにベレ(Bere)を遣わしましょう」と言った。そして、ベレはサファネのサンサンコロに赴き、祝福を行った。すると、獣たちはみな逃げていった。ベ

---

<sup>29</sup> 2013/8/1 Safane, Mousa Sere(サファネの土地の主).

レは、人びとにベレ・サンサンコロと呼ばれて尊敬され、偉大なマラブーになった。サファネとシラロ[のイスラーム]はもともと同じようなものであるが、今日ではこのことを知られていない。」<sup>30</sup>

まず、先に引用したサファネのイマームによるサファネのサコの始祖についての語りと上述の 2 つの語りの相違点と共通点を整理しよう。三者に共通しているは、(1)サンサンコロはもともと森であり、(2)マラブーは森に住むようになったという点である。(3)森にジン／獣がいて、それをマラブーの呪力で解決したという点では、サファネの土地の主の語りとシラロのイマームの語りは一致している。相違点は、経由地をめぐるものである。サファネのイマームはシラロに言及せず、サファネの土地の主はシラロを経由したとし、シラロのイマームはシラロから遣わされた者がサファネに到来したとしている。

シラロのイマームの語りの末尾で明瞭に示されている通り、この相違点はサファネのイスラームの起源をめぐる歴史の語りにおける競合であるとみるのが妥当であろう。すなわち、サファネのイスラームはもともとシラロから派生したという主張(事例 6)、シラロとは無関係に成立したという主張(事例 3)、これらを折衷された、シラロのイスラームがのちにサファネに到来するイマームによってもたらされたという主張(事例 5)の競合である。

すでにみたとおり、奇跡譚を伴う始祖の口頭伝承は、ジハードを起こしたカラントオを除けば、サファネとシラロのみであった。このことを踏まえると、こうした競合は奇跡を生じさせた呪力をもつ始祖のマラブーがサファネのサコであるのか、シラロのフォファナであるのかをめぐるものであったと言い換えることができるであろう。つまり、ここでは始祖の呪力の帰属が競合となっている。これらは始祖のマラブーの呪力を主題とした口頭伝承としてまとめられるだろう。

最後に、ムスリムと非ムスリムとのあいだの葛藤を主題とした口頭伝承をとりあげる。この葛藤の主題は共存の主題と結びついたもの、呪力の主題と結びついたもの、単なる抗争を伝えたものの三つがある。まず、最初の葛藤と共存を主題とした口頭伝承をみていこう。ヌーヌーのイマームであるサコがいかにヌーヌーに住むようになったのかを語った事例をとりあげよう。ここでも事例 1 にみられた屠殺法がムスリムと非ムスリムを区別する指標として現れている。

---

<sup>30</sup> 2013/8/15 Siralo, Souleyman Fofana, Yousouf Fofana(シラロのイマームとその息子).

#### 事例 7：ヌーヌーのサコの起源

[サコがヌーヌーにやってきた]その当時、ヌーヌーにはムスリムはいなかった。ムスリム帽をかぶった者がいれば、その者は住人に殺された。ヌーヌーの近くには、獲物の多く棲んでいる狩り場があって、多くの村の狩り人がそこにやってきて、狩りのために寝泊まりした。そこで狩りをしては、多くの獲物の肉を手に入れていた。

サコの三人兄弟のニーサとムムヌは…弓と縄をもって狩り場に行った。他にも狩り人たちが来ており、獲物にむかって矢を放った。…獲物をつかまえた狩り人たちは、縄につなぎ、そして、頭をかち割って殺した。みなムスリムではなかったから、首を切って殺さなかったのだ。そのなかで、ニーサとムムヌは手に入れた獲物の首を切る。これを見た狩り人たちは口々に「どこから来た奴だ！どこから来た奴だ！」と叫んだ。それを聞いた、狩り人の三人が「何を叫んでいるんだ！一体何だ！」と叫び返した。そうすると、みな口々に叫ぶ。「そいつは余所者だ！」くだんの三人も叫ぶ。「一体何だ！」「こいつは余所者のせいだ！」みな口々に叫んだ。

ヌーヌーの最初のムスリムは、ニーサらのサコの三人兄弟だ。みな、ムスリムではない。みな、獲物の肉を集めて、それぞれ家に帰っていった。そして、ニーサとムムヌもまた獲物を切り分けた…ニーサは土地の主に[打ちとった獲物の]前足と首を捧げてこう言った。「後ろ足ではなく、前足を捧げます。土地の主は後ろにあるものではなく、前にあるものを召しあがるものですから。」土地の主は言った。「おー！そうだ！そのとおりだ！」「[狩り場では]失礼をいたしました」とニーサが言うと「何も失礼なことはない。さあ、なかに入れ」と土地の主は応じた。その当時、土地の主はイスラームを知らず、「アッサラーム、アライクム」すら何を言っているのか、まったくわからなかった。

こうしたことがあってから三日たった後、ニーサとムムヌはふたたび土地の主のところへ赴いた。「ここに住みたいのですが、よいでしょうか。ここはとてもよいところです。」ニーサとムムヌは言った。「よいだろう。わしもお前の話が好きだ」と土地の主は答えた。…「わしには 2 つの舌はない。だから、お前たちに土地を与えよう。…わしよりもニーサはよくものを知っている。お前がお祈りをするのであれば、わしはより偉大な土地の主になろう。お前が護符をあたえれば、わしはアッラーに感謝する。首を切る、わしの友は、ニーサだ。」<sup>31</sup>

---

<sup>31</sup> 2013/8/18 Nounou, al-Hadj Mousa Sako(ヌーヌーのイマーム).

この語りから確認できることは、非ムスリムが多数派の地域にあってムスリムの宗教実践を守ることはマジョリティからすると奇異であり、時として危険にさらされるものであったということである。ここでは、ムスリムと非ムスリムの共存の主題が語られているが、ムスリムのサコは土地の主におもねることでこの村に住むことが可能になっている。土地の主から語られるムスリムとの互惠関係は、マイノリティであるムスリムの機転に裏打ちされたものとして提示されている。

つぎにみる口頭伝承は、ビフォロのフォファナの経由地であるファラマナを出ることになった所以を語るものである。

#### 事例 8：フォラマナでの出来事

「ファラマナではつぎのような出来事があって、村を出ることになった。祭りのあったある日のこと、屠った後のヤギの肉をめぐって口論があった。すでに屠られたヤギの肉を、「これは私のヤギだ」という者があったのだ。屠った当人も「いいや、これは私のヤギだ。それにすでに切られて肉となっているのだから、お前のヤギとはわかるまい」と譲らなかった。フォファナは、自分のヤギだと主張する者を擁護して、その者にかわって謝った。しかし、屠った当人は譲らなかった。フォファナは土地の主のところに行って仲裁を頼んだが、相手にされず、各人をまわってすでに配られた肉を集めた。…そして、その場にいた人たちにすべての肉が集まったことを確かめさせ、その肉を袋のなかに入れ、袋を閉じて、自宅に戻り、部屋の入り口の脇に袋を置き、アッラーに祈った。このとき、フォファナの部屋の脇では子供たちがクルアーンの暗唱をしていた。フォファナが祈り続けると、袋が動き始めた。暗唱をしていた子供たちはそれに気づいて集まってきた。子供らのひとりがそれを知らせようとフォファナの部屋にむかって「アッサラーム、アライクム」と子供は言った。「ワライクム、アッサラーム」フォファナは答え、「中に入りなさい」と言った。子供はフォファナに袋が動き始めたことを伝えたが、フォファナはそのままにしておきなさいと言って、祈り続けた。子供たちは言いつけを守って、そのままにしておき、やがて袋のことを忘れた。子供たちが忘れた頃、ヤギが生き返ったのだ。そして、自分のヤギであると主張した男を呼び寄せ、「これはあなたのヤギか」と尋ねた。その男は「これは私のヤギではない」と答えた。それでもフォファナは「もっていきなさい」と言うと、男は拒否した。フォファナは怒ったが、男は受け取

らず、愛想をつかしたフォファナはファラマナを出ることにした。」<sup>32</sup>

ファラマナを経由地とするヌーヌーのサコも細部に異動があるが、同様の口頭伝承を伝えている。概略をまとめると、(a)ヤギがサコの畑に入り込んだのを追い払おうとして誤って、サコがヤギを殺してしまい、(b)サコはヤギの持ち主に謝り、弁償を申し出たが、持ち主は死んでしまった同じヤギを要求し、(c)サコが死んだヤギの隣で祈禱を続けるとヤギは生き返り、(d)ヤギを持ち主に返そうとしたが、持ち主は謝罪を受けいれず、(e)サコはあきれてファラマナを出る、というものである<sup>33</sup>。

この口頭伝承では、不条理が前景化している。この不条理の細部をみると、ムスリムと非ムスリムとの葛藤をみてとることができる。ビフォロのフォファナとヌーヌーのサコの口頭伝承で共通している点は、(1)死んだヤギを要求するという持ち主の不条理な要求であり、(2)その不条理な要求をマラブーの呪力で克服したものの、(3)このマラブーの呪力の成果を受けいれない持ち主の不条理な態度である。このことは、類似しているが、結果が異なっている口頭伝承と比較すると明瞭になる。

次の事例は、ボボ・ジュラソに居住するダフィンのマラブーのデメによって語られた口頭伝承である。デメはコンに移住した後に、19世紀末に生じたサモリ軍によるコンの征服直前にコンから脱して、ボロモ周辺の村に居住し、その後、ボボ・ジュラソに移り住んだという。したがって、語られる出来事は、カランタオのジハード以後の時代のものである。

#### 事例9：ボロモ周辺の村での出来事

「ボロモあたりに居住したとき、デメはその家族とタリベと奴隷とで一緒にやってきた。その時、タリベは空腹に耐えかねて、通りがかったヒツジをつかまえて、食べてしまった。食事も済んだ頃、タリベのもとに、ヒツジの持ち主が現われて、「誰がお前の主だ」と問い詰めた。デメがその場に行くと、持ち主はデメにこう言った。「なんで俺のヒツジを食べたんだ。」「食べてしまったのであれば、お金を払おう。」「お金の問題ではない。」「それなら、他のヒツジを与えよう。」「いや、俺が欲しいのはあのヒツジなのだ。」「それなら、わかった。問題ない。」デメはタリベを呼んで、ヒツジの皮をひとつの場所に集めさせた。デメが数珠をとりながら祈ると、ヒツジは蘇った。これを見たヒツジの持ち

<sup>32</sup> 2013/7/1 Biforo, Sidiki Fofana(ビフォロのマラブー).

<sup>33</sup> 2013/8/18 Nounou, al-Hadj Mousa Sako(ヌーヌーのイマーム).



主はシャハーダを唱えて、ムスリムになった。そういうわけで、デメはその村に長いあいだ住んだ。」<sup>34</sup>

この事例は、(1)死んだヤギを要求するという持ち主の不条理な要求、(2)その不条理な要求をマラブーの呪力で克服したという点までは共通しているが、(4)その呪力を見て持ち主がムスリムに改宗し、村に住み続け、さきのファラマナの出来事の口頭伝承とは真逆の結果となっている。つまり、この口頭伝承で明瞭なことは、マラブーの呪力が非ムスリムの村人に受け入れられたという点である。このようにしてみると、ビフォロのフォファナとヌーヌーのサコによる口頭伝承は、マラブーの呪力が受け入れられず村を出るというムスリムと非ムスリムの葛藤を主題としていることがわかる。

さらに、より直接的にムスリムと非ムスリムの抗争があったことをサファネの土地の主が伝えている。

#### 事例 10：サファネのシセと非ムスリムとの諍い

「[サコが来る以前の]古い時代に、サファネで、[土地の主の]セレとムスリムのシセとのあいだに大きな諍いがあった。セレはシセを「お前はいつお祈りするんだ」とからかった。セレは礼拝の時間も知らなかったのだ。セレとシセはそれから口論をした。セレは口論ですまず、殺しあいになると思っていたが、シセはただの口論で終わるものだと考えていた。夜になるセレは棒をもって、モスクにおしかけ、ある者は殺され、ある者はサファネから逃げ出していった。最初にシセによって建てられたモスクは壊れてしまい、40 年間、誰もそこではお祈りをしなかった。その後、ザカリヤ・シセ(Zakariya Cissé)という人物が戻ってきて、最初のモスクがあった場所にモスクを再建した。ザカリヤ・シセの子供をバーベカキ(Babekaki)という。これは「誰もそばにいない」という意味である。バーベカキの本名はアブドゥライ・シセ(Abdoulay Cissé)という。」<sup>35</sup>

この口頭伝承は、特別な説明を必要としないだろう。先に述べたように、ムスリムが少数派であった南部ダフィンの地域において、ムスリムの慣行が奇異に映ったことは想像に

---

<sup>34</sup> 2014/1/4 Bobo-Dioulasso, Sheikh Sowari Deme(ボボ・ジュラソ居住のダフィンのマラブー).

<sup>35</sup> 2013/8/5 Safane, Mousa Sere(サファネの土地の主).

難くない。本章 2 節でまとめた先行研究では、国家とそのなかの代表的なムスリムについて対象としてきた。そこでまとめられたムスリムと非ムスリムの共存や「平和主義」(Levtzion 1968; Wilks 1968, 2000)は、国家の庇護のもとに安定的な地位が与えられたなかでのものであったといえることができるだろう。事例 10 は極端なものであったとしても、葛藤を主題とする口頭伝承からはムスリムと非ムスリムの関係が必ずしも安定的なものではなかったと結論付けられる。カラントオのジハードは、このようなムスリムと非ムスリムとの葛藤を基本的な背景として生じたと読み取ることも可能である。

また、事例 10 において、諍いがサコの到来以前に生じていたことにも注意を払う必要がある。図 3-6 においても明瞭のように、19 世紀にはサファネには複数のマラブーのリネージが定着するようになっていた。サファネでは、一つの村に一つのマラブーのリネージがいるというかつての状況が変容していたのである。そのなかで、一つのリネージがイマーム位を世襲するという慣行に疑問が付されるようになったこともまた、想像に難くない。こうしたムスリム内部での葛藤もまた、カラントオのジハードの素地となっていたであろう。

こうしたことを踏まえつつ、次節では、19 世紀のヴォルタ川流域の政治経済状況を明らかにしながら、カラントオのジハードを検討する。

### 3-4. マフムード・カラントオのジハード

マフムード・カラントオ(Mahmud/Mamadou/Mamoudou<sup>36</sup> Karantao)のジハードについての史資料が、最低限度、共有していることは、(1)マッカ巡礼を行い、(2)マッカ巡礼の後にはジハードを起こし、(3)拠点となるワッハーブ、ボロモ、コーホ、ナヌーを征服し、ジハードの勢力の居住地とした、ということである。

年代については、マフムードの後継者となったムクタール・カラントオ(Mukhtar Karantao)の統治期の 1887 年にバンジェールが訪れており、彼が 19 世紀前半に生じたと推測していること(Binger 1892 t. I : 416)、1960 年代にドゥルラ、サファネ、ワッハーブ、ボロモ、コーホで調査を行ったレヴツィオンは、彼のインフォーマンの父あるいは祖父がジハードに参加していたこと、ボロモのあるジハードの参加者が 1914 年に亡くなっていることから 19 世紀半ばと推測している(Levtzion 1968: 148-149)。本稿では、後者の立場を

---

<sup>36</sup> 口頭伝承、先行研究ともに、発音・綴りが一致していない。ここでは綴りの一貫しているアラビア語史料における表記のマフムードを採用する。

とる。ムクタールはジハードを継続させており、そのジハードの時期が 19 世紀末と想定されていることを踏まえると、マフムードのジハードは 19 世紀半ばに開始されたと推定される。

### 3-4-1. マフムード・カラントオの出自

カラントオの出自については、ジハード後にカラントオが住み着くことになったワッハーブの村長<sup>37</sup>と大イマーム<sup>38</sup>、サーニの村長<sup>39</sup>、サファネの大イマーム<sup>40</sup>、1960 年代におそらくワッハーブで収集された口頭伝承(Levtzion 1968: 148)、1943 年に作成されたワッハーブの郡長の個人調書<sup>41</sup>、1900 年代にのちにオート・ヴォルタ植民地にあたる地域の植民地行政官であったトクシエが口頭伝承を再構成したもの(Tauxier 1912: 410)、1969 年のドゥルーラの当時の村長による口頭伝承<sup>42</sup>が言及している。

このうち、ワッハーブでの語りでは、カラントオの祖先がアラブの出身であるとし、サーニのイマームはマリの出身であると語っている。

マフムード・カラントオの祖父の名前はスレイマン(Souleyman)・カラントオとされ<sup>43</sup>、父の名前はシーディー・ムハンマド(Sidi Muhammad)・カラントオである<sup>44</sup>。一部の口頭伝承ではシーディーがダフィンに到来したのか明確に言及がなされていないが<sup>45</sup>、父のシーディ

---

<sup>37</sup> 2013/7/11 Ouahabou, al-Hadj Karamoko Karantao(ワッハーブの村長、マフムード・カラントオの子孫)。

<sup>38</sup> 2013/7/11 Ouahabou, Shaka Sanogo(ワッハーブのイマーム)。

<sup>39</sup> 2013/7/9 Sani, Amadou Cissé(サーニの村長)。

<sup>40</sup> 2013/8/2 Safane, al-Hadj Amada Sako(サファネの大モスクのイマーム)。

<sup>41</sup> CNABF 27V11 Carnet signalétique de chef de canton. Chef de Canton de Ouahabou, Yaya Karantao, 1943.

<sup>42</sup> ドゥルーラで入手した文書。表題は *Ikie Zina entre en scène*。本文では、調査がドゥルーラで 1969 年 1 月 26 日、3 月 3 日、デドゥグで同年 2 月 17 日、ダフナで 2 月 18 日、トラで 2 月 19 日、ケレベで 3 月 27 日に行なわれたことが書かれている。一部省略がみられるが内容がクリバリ(Koulibaly 1970)の論文と酷似しており、論文の発表年代を考慮すると調査の一次報告であった蓋然性が高い。クリバリ(Koulibaly 1970)の論文では典拠が明示されていないため、この文書を用いる。

<sup>43</sup> 2013/7/11 Ouahabou, al-Hadj Karamoko Karantao(ワッハーブの村長)。

<sup>44</sup> 2013/7/11 Ouahabou, al-Hadj Karamoko Karantao(ワッハーブの村長).; 2013/7/11 Ouahabou, Shaka Sanogo(ワッハーブのイマーム).; 2013/8/2 Safane, al-Hadj Amada Sako(サファネの大モスクのイマーム).; Levtzion 1968: 148; Tauxier 1912: 410; CNABF 27V11 Carnet signalétique de chef de canton. Chef de Canton de Ouahabou, Yaya Karantao, 1943.; *Ikie Zina entre en scène*.

<sup>45</sup> *Ikie Zina entre en scène*. ; 2013/8/2 Safane, al-Hadj Amada Sako(サファネの大モスクのイマーム).; Levtzion 1968: 148.

一の代になって初めてダフィンに來たという点は広く共有されている<sup>46</sup>。

重要な点は、カラントオは、ダフィンのいずれの村でも、イマーム位にはなく、ジハード以前にすでに到來していた、前節で検討したフォファナ、シセ、サコ、サノゴ、トゥレに対して、新参のマラブー(イスラームの宗教職能者)であったことである。ジハードは既存の権威にある者ではなく、新参のマラブーによってなされたのである。

ワッハーブの首長は、スレイマンがアラブを發って、トンブクトゥにつき、黒人の女性と結婚し、子供をもうけたと語る一方で<sup>47</sup>、ワッハーブのイマームは、シーディーがアラブを發って、トンブクトゥにつき、黒人の女性と結婚し、子供をもうけたと語っている<sup>48</sup>。他の口頭伝承ではトンブクトゥではなく、ジェンネ周辺(Tauxier 1912: 410; Levtizon 1968: 148)、あるいはジェンネ周辺のトゥマニマ(Toumanima /Toumagnouma/Toumaniouma)とされている<sup>49</sup>。

一部の伝承ではトゥマニマを「追われた」とし<sup>50</sup>、トクシエは「フルベに追われた」としているが(Tauxier 1912: 410)、サーニの口頭伝承を除いては、トゥマニマ、あるいはトンブクトゥを發った経緯は語られなかった。サーニの口頭伝承は以下のようにその経緯を伝えている。

#### 事例 11：トゥマニマでの出来事

「マフムード・カラントオの父であるシーディーはマリを出て、[現在のマリの]トゥマニマ(Toumanima)に住みついた。シーディーはこの村のイマームとなった。あるとき、村のなかでもめ事があった。村では、この解決のために、供犠が行われ、その肉の分配が行われた。それをみていたシーディーは「その肉を食べてはいけない。他の村に贈るべきだ」と言った。トゥマニマ村の首長は「シーディーは余所者なのだから、私たちのやり方を変えるべきではない。さあ、一緒に食べるのだ」と言った。他の村の者たちもこ

<sup>46</sup> 2013/7/11 Ouahabou, al-Hadj Karamoko Karantao(ワッハーブの村長)..; 2013/7/11 Ouahabou, Shaka Sanogo(ワッハーブのイマーム).; 2013/8/2 Safane, al-Hadj Amada Sako(サファネの大モスクのイマーム).; Tauxier 1912: 410; CNABF 27V11 Carnet signalétique de chef de canton. Chef de Canton de Ouahabou, Yaya Karantao, 1943.

<sup>47</sup> 2013/7/11 Ouahabou, al-Hadj Karamoko Karantao(ワッハーブの村長)..

<sup>48</sup> 2013/7/11 Ouahabou, Shaka Sanogo(ワッハーブのイマーム).

<sup>49</sup> 2013/7/9 Sani, Amadou Cissé(サーニの村長).; CNABF 27V11 Carnet signalétique de chef de canton. Chef de Canton de Ouahabou, Yaya Karantao, 1943.; Ikie Zina entre en scène.

<sup>50</sup> CNABF 27V11 Carnet signalétique de chef de canton. Chef de Canton de Ouahabou, Yaya Karantao, 1943.

れに同調していた。シーディーは「ここに問題があるのだ。これは小さな問題ではない」と言い捨てた。こうしたことが多くあったから、シーディーはまだ小さな子供であったマフムードをつれて村を出て、ドゥルーラに居着いた。」<sup>51</sup>

ここでは、シーディーが非イスラーム的な慣行を拒絶・批判していたことが、村を離れる契機として語られている。前節でみたムスリムと非ムスリムの葛藤の主題に連なる口頭伝承であるが、前節でとりあげたものと大きく異なる点は、非イスラーム的な慣行が明示的に批判されていることである。ここには、ダフィンのムスリムが長い間抱えていた葛藤との連続性とともに、明示的な批判の展開という点での断絶をもみてとることができるだろう。

### 3-4-2. マフムード・カラントオの修学先をめぐる歴史の競合

マフムードの修学歴については、史資料間で大きく異なっている。表 3-2 は修学先を一覧にしてまとめたものである。結論からいえば、修学先はマラブーとしての正統性をどこにもとめるのかという点と関わっており、共通した事実をまとめることは困難である。

番号	修学先(師匠の人名)
1	Safane(Cisse)
2	Safane(Sako)
3	Douroula(?)
4	Taslima(?)
5	Douroula(Baba Diallo)
6	?(Sidi Karantao)→Safane(?)
7	Taslima(Karamoko Yara)
8	Taslima?(Taslima Saghanogho)→Safane(Siddiq, Karamokho Yara)→Joulaso(Yahya b. 'Abd al-Rahman)
9	?(Muhammad al-Abyad b. Abi Bakr)

表 3-2. マフムード・カラントオの修学先<sup>52</sup>

まず、表からいえることは、6 番のアラビア語史料(IASAR/66, 77)に書かれた修学歴が異様に詳細であることである。このアラビア語史料(IASAR/66, 77)は同一の内容のもので、マ

<sup>51</sup> 2013/7/9 Sani, Amadou Cissé(サーニの村長).

<sup>52</sup> 典拠は以下。1: 2013/7/9 Sani, Amadou Cissé(サーニの村長)., 2: 2013/8/2 Safane, al-Hadj Amada Sako(サファネの大モスクのイマーム)., 3: 2013/7/11 Ouahabou, al-Hadj Karamoko Karantao(ワッハーブの村長).; 2013/7/11 Ouahabou, Shaka Sanogo(ワッハーブのイマーム).; 4: 2013/7/11 Koho, Mahmud Konate(コーホのイマーム)., 5: Ikie Zina entre en scène., 6: Levztion 1968: 148, 7: Wilks 1989: 101, 8: IASAR/66, 77(Martin 1965: 81; Al-Naqar 1972: 121-122), 9: IASAR 232, 438(Wilks 1989: 101).

フムードのジハードに至るいきさつを述べており、英文にほぼ全訳がなされている(Martin 1965: 81-83; Al-Naqar 1972: 121-122)。1960年代にワッハーブとボボ・ジュラソで収集がなされ、著者・年代は不明である<sup>53</sup>。

これによれば、マフムードはシェク・タスリマ・サノゴ(Shaykh Taslima Saghanughu)から学んだ後、サファネのシェク・シッディーク(Shaykh Siddiq)に学び、彼の死後、盲目の聖者(wali)であるカラモコ・ヤラ(Karamughu Yara)から学んだ後、サファネで最も学識の高い人物となり、「ジュラソ」(Julassu)のイマーム・ヤフヤ・ブン・アブドゥル・ラフマーン(Imam Yahya b. 'Abd al-Rahman)に学んだとされる。

一見すると、このアラビア語史料は口頭伝承とかけ離れたもののように思われるが<sup>54</sup>、ムブン川湾曲部の口頭伝承のなかで登場する著名なマラブーや縁のある地名に言及している。

口頭伝承によれば、タスリマの現在地は不明であるが、サノゴはタスリマを経由して、ランフィエラ、あるいはドゥルーラに到来している<sup>55</sup>。つまり、タスリマは人名ではなく、地名として、タスリマのサノゴから学んだと解することができる。また別の口頭伝承では、タスリマでダガリ・マーマ(Dagari Mama)とともに学んだ<sup>56</sup>、あるいはタスリマでアリ・トラオレ(Ali Tarawiri)と親しくなり、その息子とともにドゥルーラで修学したカラモコ・ヤラ(Karamoko Yara)に学んだとされる<sup>57</sup>。

盲目の聖者カラモコ・ヤラは、サファネで筆者が聞いた口頭伝承の奇跡を起したとされる盲目の聖者バーバ・ジャラ(Baba Dialla)<sup>58</sup>に対応している。ドゥルーラの口頭伝承では、バーバ・ディロ(Baba Diero)はドゥルーラの著名なマラブーであり、マフムードはドゥルー

---

<sup>53</sup> Arabic Manuscripts from West Africa: A Catalog of the Herskovits Library Collection(<http://digital.library.northwestern.edu/arbms/index.html>)による IASAR/66, 77 の項目を参照。

<sup>54</sup> 実際、レヴツィオンはこれらの史料に言及しながらも、これらを用いず、口頭伝承でマフムードとそのジハードを再構成している(Levtizon 1968: 148-150)。

<sup>55</sup> 2013/7/3 Bara, Ousman Sanogo(バラのイマーム).; 2013/8/30 Douroula, Souleyman Soware(ドゥルーラのマラブー)。

<sup>56</sup> 2013/7/11 Koho, Mahmud Konate(コーホのイマーム)。

<sup>57</sup> これはウィルクスが 1966 年にアリの孫からワッハーブで聞いた口頭伝承である(Wilks 1989: 101)。

<sup>58</sup> バーバ・ジャラの口頭伝承はやや錯綜している。サファネの村長によれば、サファネのサンゴロ・キナ(sangoro-kina、サンゴロ街区)にかつて、盲目のクルアーンとすべてのハディースを暗唱していた「マラブー・ジャラ」(marabout Dialla)、あるいはカンゴ・ジャラ(Kango Dialla)が住んでいたこと、彼に学んだものは誰もいなかったこと(2013/8/1, 2013/8/5 Safane, Mousa Sere(サファネの土地の主))、あるいは、デドゥグ周辺のブワのカロの第二代イマームはドゥルーラのバーバ・ジャロに学んだという(2013/8/24 Karo, Lacina Dayo(カロのイマーム))。

ラのバーバ・ディロから学んだとされる<sup>59</sup>。また、ウィルクスがボロモで収集した口頭伝承によれば、バーバ・ヤラはダフィンにティジャーニーヤを導入した初期の人物であるとされている(Wilks 1989: 101)。

サファネのシェク・シッディークについては原文そのものの情報量が過少でサファネで学んだということを付加しているように読み取れるが、ボボ・ジュラソの「イマーム」とされるヤフヤは、ボボ・ジュラソに到来した高名なマラブーのサノゴの一族のアブドゥル・ラフマーン(Wilks 1968a)の息子であり、高名なマラブーとのつながりを強調している。

つまり、このアラビア語史料(IASAR/66, 77)はムフン川湾曲部の著名なマラブーやゆかりのある地名を列挙して、マフムードの正統性を担保しているように思われる。あるいは、この文書にはムフン川湾曲部におけるイスラームの歴史的な展開に強い関心がみられ、マフムードにこの地域での知的伝統が集約されていくように書いているともいえるだろう。

口頭伝承では、このように多くの人物や地名に言及することはみられないが、共通した認識を示すことは困難となっている。サーニのシセはサファネでシセから、サファネのサコはサファネでサコから、ワッハーブの口頭伝承ではドゥルラで学んだとし、ドゥルラの口頭伝承はドゥルラのバーバ・ジャロから、コーホのダガリはダガリ・マーマとともにタスリマで学んだとし、ボロモのトラオレはトラオレとともにタスリマでカラモコ・ヤラに学んだとしている。つまり、場所は、サファネ、ドゥルラ、タスリマの三つのケースがあり、師匠はシセ、サコ、バーバ・ジャロの三つのケースがある。

サーニのシセやサファネのサコのように、祖先がマフムードの師であったとする明白に歴史の操作と思われるものもあるが、重要な点は、この地域の歴史についてある程度の知識があれば知られているカラントオのジハードの主導者の修学先について、安定的な口頭伝承が存在しないということである。

さらに、別のアラビア語の史料(Wilks 1989: 101)からは、まったく別の視点が得られる。これらの史料(IASAR 232, 438)は、タフシール(解釈学)のイスナードである。イスナードとは特定の書物について学び終えた際に与えられる教授免状であり、誰から学んだのかが、与えられた本人からその師匠、師匠の師匠…というように連綿と書かれている文書である(Wilks 1968)。ウィルクスは、現在のブルキナファソの南西部のディエブグ(Diebougou)のイマームと、現在のガーナの中部のウェンチ(Wenchi)のマラブーのタフシールのイスナードのなかにマフムード・カラントオが登場することを指摘している(Wilks 1989: 101)。こ

---

<sup>59</sup> Ikie Zina entre en scène.

のイスナードによれば、本章 2 節で言及した改革者のサノゴの一族のなかで最初にボボ・ジュラソに到来したとされるサイード・ブン・アル・ムスタファ・サノゴ(Sa'id b. al-Mustafa Saghanughu)の弟子であるムハンマド・アル・アブヤド・ブン・アビーバクル(Muhammad al-Abyad b. Abi Bakr)から学んでいる(ibid.: 101)。ウィルクスはさらに進めて、カラントオのジハードによって成立した村の一つであるコーホ(Koho)の初代イマームに任命されたヤクブ・ブン・アブドゥルカーディル(Ya'qub b. 'Abd al-Qadir)がワのイマームであったと推定し、19 世紀初頭に生じていたサノゴの学統の革新の展開していたワでの古いムスリムと革新派との緊張関係が、カラントオのジハードに直結していたと論じている(ibid.: 103)。このことはコーホの口頭伝承と関連して、カラントオのジハードの一面を明らかにしているのだが、ここではこれ以上踏み込まない。このような蓋然性の高い学術上の刷新が口頭伝承にはほとんどみられなかったという点だけを確認しておこう。

### 3-4-3. マッカ巡礼とジハードの動因

マフムードが、修学を終えた後に、マッカ巡礼を果たしたこと、マッカ巡礼の前後でジハードの動因となる出来事が生じたことはすべての史資料で共通している。マッカ巡礼までの足取りもまた様々に異なっているが、この点は深追いせずに、ジハードの動機についての説明にどのようなものがあるのかをここでは整理しておこう。

ジハードの動機についての説明には、(a)ムスリムが少ないことを理由としてマッカ巡礼以前からジハードを計画していたとするもの、(b)マッカ巡礼によってジハードを計画するようになったとするもの、(c)マッカ巡礼以前の非ムスリムとのコンフリクトを原因としてジハードを計画するようになったとするもの、(d)マッカ巡礼によってジハードを構想するようになったが直接的な原因は巡礼以後の非ムスリムとのコンフリクトにあったとするものの四つのパターンがある。

(a)の口頭伝承は、ワッハーブとコーホのイマームによって語られた。それぞれ該当箇所をみていこう。

#### 事例 12：ジハードの決意(1)

「ドゥルーラを出たあと、カラントオは新たな土地を探してサファネにいったが、そこには長くとどまらず、ワッハーブ村に行った。その頃のワッハーブ村にはムスリムは多くいなかった。村の古い名前をピーフンという。そこで、カラントオは「マッカに行き、その



後、もどってジハードをする。そうすれば、みなムスリムになるであろう」と決意した。」

60

### 事例 13：ジハードの決意(2)

「ダガリ・マーマはタスリマに住んでいた。…彼はそこでマフムード・カラントオに出会った。ダガリとカラントオは同じマラブーから学んだ。カラントオはダガリよりも年長者であった。ある日の夜、二人は同じ部屋で床につくと、ダガリは「ここで学を修めたら、マッカに行き、ふたたび戻ってきてジハードをするつもりだ」と打ち明けた。カラントオは「私もそう考えていた。ここで学を修めたら、マッカに行き、ふたたび戻ってきてジハードをするつもりだ」と答えた。ダガリは「君がそう考えているのなら、一緒にやろう。君がマッカにいき、私はダフィンにとどまり、君の帰りをまとう」と応じた。その頃、ダフィンにもダガリにもムスリムは多くいなかったのだ。」<sup>61</sup>

二つの口頭伝承はともにムスリムが少なかったことをジハードの動機として説明している点で共通している。事例 12 ではマフムードが単独で構想し、事例 13 ではダガリ・マーマがマフムードよりも先にジハードの構想を語っており、後者では語りの主人公がダガリ・マーマとなっているのだが、この点は後に論じる。

(b)マッカ巡礼によってジハードを計画するようになったとする説明は、アラビア語史料(IASAR/66, 77)においてなされている。それによれば、マッカ巡礼の際に、シリアでアブドゥルカーディル・アル・ジャイラーニー(‘Abd al-Qadir al-Jaylani)の子孫でカーディリーヤのアブドゥル・ラヒーム(‘Abd al-Rahim)に学び、出身地にもどったうえで、「国々を征服し、征服したすべての町にモスクを建てることのために祈った」とされる(Martin 1965: 82; al-Naqar 1972: 122; Wilks 1989: 101)。ウィルクスはこのことをもって、「平和主義」のスワレの学統に学んだマフムードがジハードを起こす契機がマッカ巡礼にあったとしている(Wilks 1989: 101)。とはいえ、興味深いことに口頭伝承では、マッカ巡礼で高名なマラブーに学んだということに言及がなかった。

(c)マッカ巡礼以前の非ムスリムとのコンフリクトを原因としてジハードを計画するようになったとする口頭伝承には、以下のものがある。

---

<sup>60</sup> 2013/7/11 Ouahabu, Shaka Sanogo(ワッハーブのイマーム).

<sup>61</sup> 2013/7/11 Koho, Mahmud Konate(コーホのイマーム).

#### 事例 14：ボロモでの出来事(1)

「カラントオはサファネにいき、あるマラブーを訪れた。「私はマッカにいく道をさがしています」とカラントオは言った。そのマラブーは答えた。「もしマッカにいくのであれば、まずサーニに行かねばならない。サーニの人々はお前のために祈ってくれるだろう。」そこでカラントオはサーニにいき、その後、ボロモへと向かった。ボロモの人たちは穴を掘り、そこに木々を覆って隠した落とし穴を作っていた。その頃、ボロモでは、余所者をその落とし穴にはめ、ボロモの人びとは彼らを殺していた。カラントオがやってくると、彼の連れていたロバが落とし穴にひっかかった。ロバには塩を載せていたのだが、これもまた穴に落ちた。ボロモの人々は穴に落ちた塩を引きずり出して、わがものとした。その後、カラントオはマッカへと向かった。

マッカでは、人びとはカラントオに「お前はムハンマドの孤児だ」と口々に言った。カラマントオは言う。「私はジハードをする。」マッカの人は「どこで行うのだ。余所者に対して、値をつり上げたり、殺したりする村々でおこなうのがよい」と言った。」<sup>62</sup>

#### 事例 15：ボロモでの出来事(2)

「カラントオがドゥルーラからやってきた。彼はボロモに着いて途方に暮れていた。ボロモでは、荷物を下ろすと、コ(Ko)の人びとがここの土地は我々のものだからといって、荷物に対してのお金を要求していたからだ。カラントオはすべての荷物をそのままボロモにおいて、マッカに巡礼に行った。」<sup>63</sup>

これらの口頭伝承のポイントは、ボロモの先住者であるコが交易を阻んでいたこと、である。カラントオと交易について、整理しておこう。サーニの大イマームの口頭伝承は、カラントオが交易をしていたことをにおわせているが<sup>64</sup>、すべての口頭伝承において、カラントオが交易を行っていたという直接的な言及はなされなかった。また、ワッハーブでは、そのことを否定していた<sup>65</sup>。

---

<sup>62</sup> 2013/7/9 Sani, Amadou Cissé(サーニの村長).

<sup>63</sup> 2013/7/30 Boromo, Boubacar Guira(ボロモの村長).

<sup>64</sup> 2013/7/9 Sani, Amadou Cissé(サーニの村長).

<sup>65</sup> 2013/7/11 Ouahabou, al-Hadj Karamoko Karantao(ワッハーブの村長)..; 2013/7/11 Ouahabou, Shaka Sanogo(ワッハーブのイマーム).

ボロモのヤルセのイマームであるセヌーもまた、カラントオに言及しなかったが、類似した口頭伝承を伝えている。

#### 事例 16：ボロモでの出来事(3)

「セヌー(Senou)はガーナをでて、トゥイ(Toui)に住み着き、そこでお祈りをして、ムスリムを探して、ウリ(Oury)を通して、ボロモにロバとともにやってきた。コはそのロバを罾にかけてつかまえて、殺した。セヌーは「ロバの弁償をしろ。なぜ私のロバを殺したのだ」と言った。コは「お前のロバはこの土地で寝そべったのだ。我々の土地のうえで寝そべったものはすべて我々のものだ。我々がなにをしようと勝手だ」と答えた。セヌーは「ムスリムではないからこのようなことをするのだ」と言い返し、口論が生じ、戦があった。」<sup>66</sup>

これらの三つの口頭伝承は、先住者のコによって外部者が攻撃されること、そのことがジハードの動機となったこと、事例 14、15 では、さらに限定して、交易が阻害されたことを伝えている。

(d)マッカ巡礼によってジハードを構想するようになったが直接的な原因は巡礼以後の非ムスリムとのコンフリクトにあったとする口頭伝承は、ボロモではなく、ドゥバコロ(Doubakoro/Dounakoro/Doubakorodougou/Dabakoro)に舞台をおいている。

#### 事例 17：ドゥバコロでの出来事(1)

「成人すると、マフムード・カラントオはマッカに巡礼に行った。…イスラームの聖地から帰還すると、カラントオは自らが神聖なる使命を帯びるようになったと感じていた。彼はその意図を彼の師匠で養父となったバーバ・ジャロに伝えた。バーバ・ジャロの助言を聞き入れた後に、カラントオはドゥルーラを出て、ボロモの周辺にある(現在では廃墟となっている)ドゥバコロ(Doubakorodougou)に向かった。学生や信徒たちが彼に従うようになり、500 名ほどになった。5 年のあいだ、カラントオはドゥバコロに滞在し、彼の使命の準備をした。土着民はイスラームに敵意を持っており、カラントオが指導者であることを理解すると、彼を攻撃した。そのとき、カラントオは信徒とともに畑にいた。彼らはこうした襲撃に我慢ならなかった。カラントオは生き残った者たちを連れて村に

---

<sup>66</sup> 2013/7/30 Boromo, Zakariya Senou(ボロモのマラブー).

もどった。…ドゥバコロの闘いの三日後、カラントオは軍隊を引き連れて、ボロモを襲撃し、1日の闘いの後に、これを征服した。」<sup>67</sup>

ドゥバコロでクルアーン学校を開き、先住者によって攻撃を受け、それに対する報復からジハードが始まるという口頭伝承は、トクシエ(Tauxier 1912: 410)、レヴツィオン(Levtzion 1968: 148)、行政文書<sup>68</sup>のなかに共通してみられる。ドゥバコロという固有名は、別の口頭伝承のなかでやや異なって語られたのだが、その点については後述する。

事例 14 から事例 17 まで共通して、ボロモの先住者はコという民族であったことが語られている。実際のところ、ジハードによって先住者のコはボロモを離れた後に、植民地統治統治以降の 1936 年に、ボロモに帰還することになる(Jacob 2007: 134)。デュプレイは、1974 年にこうしたボロモのコによるカラントオについての口頭伝承を収集し、それを直接引用して報告している。

#### 事例 18：ドゥバコロでの出来事(2)

「カラントオの戦争があったとき、コの首長はソ(So)といった。カラントオはロバに塩を載せて、さらに南の、現在のガーナに売ろうとしてドゥルラからやってきた。コは罾を仕掛けてカラントオを捕らえ、その売り物と家畜を没収し、彼らの首長のものとした。カラントオはマッカ巡礼に旅立った。戻ってくると、彼はボロモの近くのドゥバコロ(Dounakoro)に住み着いた。彼はコと協調して、無為に 3 年間、ドゥバコロにとどまった。彼はコの儀礼にも参加し、ミレットを集めて大きな祭りの時のためのミレット・ビールを準備しさえした。しかし同時に、彼は交易によって銃を買い、秘密裏に戦の準備をしていた。カラントオのところの人びとには女が不足していた。あるとき、彼らのところに作物を売りに来た 7 人のコの女たちが捕まり、捕虜となってしまった。彼女たちの夫は武装して取り返しにいった。カラントオは命令を下し、数人を殺し、他の者たちは[妻を奪うという]罪を負ったカラントオへの復讐を歌いながら逃げ帰っていった。しかし、カラントオはモシとともに武器を増やしていた。そして、コが二度目の攻撃を仕掛けると、さらに銃の数が多くなり、逃げ出さざるをえなかった。ここから、ボロモのコは散り散

---

<sup>67</sup> Ikie Zina entre en scène.

<sup>68</sup> CNABF 27V11 Carnet signalétique de chef de canton. Chef de Canton de Ouahabou, Yaya Karantao, 1943.

りになった。数年間、ヴォルタ川をわたり、[グルンシのサブ・グループとされる民族の]ヌヌマ(Nounouma)とまじりあった。多くの者たちがカラントオによって殺された。これはただ彼が勝利者であったということだけである。カラントオが目的としていたことは、略奪の復讐以外の何物でもなかったからだ。」(Duperray 1984: 58)

この口頭伝承は、ボロモでの出来事についての事例 14-16 とドゥバコロでの出来事についての事例 17 とを統合するような語りの内容となっている。つまり、マッカ巡礼以前にマフムードはボロモでコによる襲撃を受けており、マッカ巡礼後、ドゥバコロでコとのコンフリクトが生じ、ジハードが開始されたというものである。

他方で、この口頭伝承が重要である点は、2 章で紹介したジハード以前の戦争にみられるような復讐が戦争の動因として語られていることである。被征服者であるコの側からすれば、カラントオのジハードはそれ以前の戦争と同じ文脈で理解されたといえる。

このようにしてみると、ここでとりあげた口頭伝承は、ジハードの動因について、微妙に重なり合った 5 つの側面を説明しているとみることができる。第一は、ムスリムが少なく、イスラームを広めるという点(事例 12-13)、第二は、マッカ巡礼によって得られた革新的なイスラームを広めるという点(IASAR/66, 77)、第三は、交易路での安全の確保という点(事例 14-16)、第四は、非ムスリムとのコンフリクトという点(事例 17)、第五は、非ムスリムに対する復讐という点(事例 18)である。

#### 3-4-4. ジハードの概要と稀少な奇跡譚

細部に差異があるが、マッカ巡礼の後に、マフムードは同志を募り、ジハードの準備を行なう。ジハードの概要について、大まかに合意されている点は、マフムードには 3 名の代表的な協力者がいたとされることである<sup>69</sup>。すなわち、ヤルセのアムザラ・ギラ(Amzara Guira)、ダフィンの狩り人のアラサン(Allasan)こと、ドゥバコロ・クリバリ(Doubakoro Kouribary)、ダガリのダガリ・マーマ(Dagari Mama)こと、マーマ・セヌー(Mama Senou)である。

ジハードがどのような方向で進行したのかについても微妙な差異があるが、これらの協

---

<sup>69</sup> Levztzion 1968: 148; 2013/7/9 Sani, Amadou Cissé(サーニの村長); 2013/7/11 Koho, Amidou Senou(コーホの村長); 2013/7/11 Koho, Mahmud Konate(コーホのイマーム); 2013/7/14 Nanou, Inousa Kouribary(ナヌーの村長); 2013/7/30 Boromo, Boubacar Guira(ボロモの村長); 2013/7/30 Boromo, Zakariya Senou(ボロモのマラブー)。

力者たちを従えて、ボロモ、ワッハーブ、コーホ、ナヌーを攻略したことは一致している。そして、これらの村々にアラビア語の新しい呼称を与えている。ボロモにはダール・サラム(Dar Salam)、コーホはシュクル・ラーヒ(Shukr-llahi)、ナヌーはハムダライ(Hamdallaye)、ワッハーブはかつての名をピーフン(Pifun)といった<sup>70</sup>。バンジェールが1888年にワッハーブ、ボロモを訪れた時点ですでに、カラントオのジハードの勢力はこれらのワッハーブ、ボロモ、コーホ、ナヌーの限定されており、かつ新しい呼称はワッハーブしか残っていなかった(Binger 1892 t. I: 416)。ワッハーブはカラントオが村長となり、ボロモはヤルセのギラ、コーホはダガリのセヌー、ナヌーはダフィンの狩人のクリバリがそれぞれ村長に任命されており、現在に至っている。

戦争についての際立った逸話は、ナヌーの攻略のものである。それ以外の村では、戦を始める前に、3日間説得を続け、4日目に攻撃を開始する、という逸話が伝えられている<sup>71</sup>。

#### 事例 19：ナヌーの攻略(1)

「カラントオはナヌーへと向かった。ナヌーの住民は村から迎え打ち、弓でカラントオを射たが、鏃は彼の歯に当たり砕け散った。そこで、ナヌーの住民は、一方ではカラントオの一行のマラブーと交渉し金を与え、他方では村で住民たちは土を掘り、穴を作って、そこで供犠を行った。そうして、カラントオの一行はナヌーのまえに立ち往生した。これを見たカラントオは「この村では供犠が行われている」と言った。一行のなかのある者が「みなはここにとどまって、師が話をつけるのがよいのではないのでしょうか」と提案した。カラントオはこの提案を受け入れて、白馬に乗って単身ナヌーに行った。ナヌーの端につくと、カラントオは馬から降りて祈禱をした。「たとえ戦になるとしても、ナヌーの人々がムスリムになるように」とアッラーに祈ったのだ。祈禱が終わると、カラントオは白馬をひいて、ナヌーに入ってしまった。入ってみると、村にはひとりもおらず、みな森へと逃げてしまっていた。こうしたことがあって、ナヌーでは誰も殺すことはなかった。一方、残されたカラントオの一行は長いこと、そこでカラントオが帰って

---

<sup>70</sup> Martin 1965 : 82; Levzion 1968: 148; 2013/7/9 Sani, Amadou Cissé(サーニの村長).; 2013/7/11 Ouahabou, al-Hadj Karamoko Karantao(ワッハーブの村長).; 2013/7/11 Ouahabou, Shaka Sanogo(ワッハーブのイマーム).; 2013/7/11 Koho, Amidou Senou(コーホの村長).; 2013/7/11 Koho, Mahmud Konate(コーホのイマーム).; 2013/7/14 Nanou, Inousa Kouribary(ナヌーの村長).

<sup>71</sup> 2013/7/9 Sani, Amadou Cissé(サーニの村長)..; 2013/7/11 Koho, Amidou Senou(コーホの村長).

くるのを待っていたが、なかなか戻ってこないで、ナヌーに行ってみることにした。すると、そこには誰もおらず、ただカラントオだけが佇んでいた。」<sup>72</sup>

#### 事例 20：ナヌーの攻略(2)

「ナヌーとその住人たちは呪力をもっており、ムスリムではなかった。ナヌーにカラントオの一行が入ろうとすると、ナヌーの人々が放ったミツバチに一行は襲われ、村から逃げ出すこととなった。カラントオとドゥバコロは、ワッハーブからナヌーまでの道の途中に、四角く囲った石をおいて、その囲いの中で、7 日間にわたって祈禱を続けた。一行のなかにいたセヌーが「7 日間、祈ったのだから、ナヌーにはもう誰もいないでしょう」と言った。そこで一行がナヌーに入ってみるとセヌーのいうとおり、住民はみな逃げ出していた。コーコ(Koko)という村に逃れたのだ。だから、ナヌーでは戦はなかった。」<sup>73</sup>

ナヌーの先住者が呪力を持っていたこと、この呪力とカラントオの祈禱とが対峙しカラントオが勝ったこと、ナヌーでは殺し合いがなされなかったことの三点が大筋として共通している。なお、このカラントオが礼拝した場所については、複数の話者によって言及され<sup>74</sup>、特別な参拝地となっているわけではなかったが、ワッハーブとナヌーの道の途中に、石の配列が現存している。

他方で、マフムードに関する奇跡譚は先行研究ではまったく言及されず、アラビア語の史料(Martin 1965: 82; al-Naqar 1972: 122)にも登場しない。筆者による調査においても、ほとんど語られることはなく、断片的なものであった。ナヌーの攻略についての口頭伝承(事例 19, 20)を除けば、戦争のあとにワッハーブのモスクを一日<sup>75</sup>、あるいは一週間<sup>76</sup>で建立したこと、サファネで学んでいた際にカラントオの運んだ薪から燃える音がしたこと<sup>77</sup>、マッカから女性のジンを伴ってきたこと<sup>78</sup>である。

たとえば、同時代の 19 世紀初頭に現在のマリのジャでイスラームの革新をなしたアルフ

---

<sup>72</sup> 2013/7/9 Sani, Amadou Cissé(サーニの村長)..

<sup>73</sup> 2013/7/14 Nanou, Inousa Kouribary(ナヌーの村長).

<sup>74</sup> 2013/7/11 Koho, Amidou Senou(コーホの村長).; 2013/7/14 Nanou, Inousa Kouribary(ナヌーの村長).

<sup>75</sup> 2013/7/9 Sani, Amadou Cissé(サーニの村長).

<sup>76</sup> 2013/7/11 Ouahabou, Shaka Sanogo(ワッハーブのイマーム).

<sup>77</sup> 2013/7/9 Sani, Amadou Cissé(サーニの村長).

<sup>78</sup> 2013/7/13 Zinakongo, Yousouf Konate(ジナコンゴの村長).

ァ・ボアリ・カラベンタと比較してみよう。アルファ・ボワリの奇跡譚には、幼少期に無くなってしまったはずの食べ物が大量に出現したこと(坂井 2003: 376-377)、修行の際に神話上の人物と出会ったこと(ibid.: 379)、修業後の最初の居住地で藪にいた悪霊を追い払ったこと(ibid.: 379)、農作物に被害を与えていた鳥を礼拝で消し去ったこと(ibid.: 382)、ジンを捕縛してしまったこと(ibid.: 382)、顧客を大金持ちにしたこと(ibid.: 384)、アルファ・ボワリが作成した護符を他人が覗き見ると激しい光が出てその者を失明させたこと(ibid.: 384-385)、マッカのカーバ神殿を現前に出現させたこと(ibid.: 387)などと枚挙にいとまがない。このように、アルファ・ボワリ・カラベンタの口頭伝承と比較すると、圧倒的に奇跡譚が稀少であることが理解されるだろう。

さらに議論を進めれば、このことは単にマフムードの奇跡譚が稀少であるということだけではなく、口頭伝承のなかで語られるマフムードという符号が、前節の末尾で論じたような「歴史的人格」としての影響力が少なく、口頭伝承を組織化させるように十全に機能していないといえる。さきの修学先をめぐる歴史の競合にみられるように、マフムードという「歴史的人格」を中心にして語りが構成されているのではなく、むしろ、サファネ、ドゥルーラ、タスリマというすでにムスリムの古い町として知られている土地の固有名や、バーバ・ジャロやサノゴの高名な学者といった「歴史的人格」にマフムードが従属するようなかたちで語りが構成されている。

こうしたことはトートロジーではあるが、カラントオのジハードがこの地域にひろく影響力を与えなかったこと、あるいはジハードによって広範に影響を与える社会的な秩序を組織化できなかったことに対応している。すでに述べたように、ジハードによって成立した実質的な支配は四つの村に限定されていた。これらの村々に、アラビア語の名称が新しく与えたが、カラントオを村長とするワッハーブにしか、この名前が残らなかったことは、ジハード勢力内部でのカラントオの影響力の脆弱さを暗示している。

実際のところ、ワッハーブ以外の他の 3 つの村——ボロモ、ナヌー、コーホ——で語られた口頭伝承においても、それぞれの村の村長となった始祖の「歴史的人格」にマフムードは従属する内容となっている。この点を次に論じていこう。

### 3-4-5. ジハードの代表的な協力者たち

すでに述べたように、マフムードには 3 名のヤルセのギラ、ダフィンのクリバリ、ダガリのセヌーという 3 つの民族の代表的な協力者がいた。口頭伝承では、ギラは交易商人、



クリバリは狩人、セヌーはマラブーという役割が与えられている。まず、ギラの口頭伝承をみていこう。

#### 事例 21：ヤーヤ・ギラとジハード(1)

「ギラはヤテング(Yatenga)に住んでいた。ギラがボロモに来たときには、すでにコが住んでいた。その当時は、ギラはヤテングからボロモを通して現在のガーナに行き、コーラの実を買い、ヤテングで売っていた。

…マッカからもどったカラントオは、プラ(Poura)に落ち着いた。その畑で祈禱をしていた。そのとき、ヤーヤ・ギラがプラを通りがかり、挨拶をした。ヤーヤはガーナに行く途中であることをカラントオに説明した。ヤーヤはカラントオからイスラームの教えを受けた。なぜなら、カラントオは真のムスリムであったからだ。カラントオはボロモにイスラームを広めたいということを説いた。ボロモにはフェッティッシュしかいなかったからだ。ヤーヤは了解して、ガーナから戻ったら、一緒にボロモに行くことに納得した。グルシのヤテングにはギラの一族がいて、そこでは馬を多く持っていることを説明して、ヤテングから一族を呼び寄せ、ジハードの準備をした。」<sup>79</sup>

ナヌーのクリバリの口頭伝承によれば、ギラはボロモでの戦いの後に到来し、戦争をするカラントオを支持し、ボロモで馬を売り、財産をなしたとされる<sup>80</sup>。レヴツィオンによって収集された口頭伝承ではヤーヤ・ギラがワイグヤ(モシのヤテング王国の王都)から来たこと(Levtzion 1968: 148)、バンジェールもまた、「ヤテングのモシ」がワッハーブに到来していたこと(Binger 1892 t.I: 416)を書き残している。

デュブレイは、1974年にボロモでヤーヤ・ギラの子孫である当時の郡長から語られた、やや異なるバージョンの口頭伝承を紹介している。

#### 事例 22：ヤーヤ・ギラとジハード(2)

「彼ら[ボロモの(ヤルセも含む)モシの祖先]はプラで金を買うために馬を連れてグルシ(Gourcy)から来たムスリムの商人であった。マフムード・カラントオは彼らの長であったヤーヤ・ギラと出会うと、彼をつかまえて、自分がマッカから戻ってきたこと、彼の地

---

<sup>79</sup> 2013/7/30 Boromo, Boubacar Guira(ボロモの村長).

<sup>80</sup> 2013/7/14 Nanou, Inousa Kouribary(ナヌーの村長).

で人びとに以下の予言を受けたことを語った。それによれば、ジハードを始める前に多くの人びとに取り巻かれたモシの男と出会うであろうということであった。その予言でなされた男の特徴は寸分たがわず、ヤーヤにぴたりと合っているという。ヤーヤは両親にジハードに参加することを事前に告げ、富を隠しておくように伝えることをカラントオに求めた。グルシの長老はヤーヤに祝福を与え、幾人かの同行者とともにドゥバコロに向かい、カラントオの後に、この土地に住み着き、土地を耕しながら、武器を手に入れた。」(Duperray 1984: 58-59)

ここでみられるマッカでの予言という要素は、ナヌーのクリバリの口頭伝承にも登場しているが、この口頭伝承ではより明白にカラントオを語りの背景に押しのけている。

#### 事例 23：ドゥバコロ・クリバリとジハード

「クリバリの祖先はマリを出て、ワイグヤにいき、デドゥグの近くに住み、そして、ボロモに居着いた狩人であった。クリバリはボゴトゥ(Bogotou)というボロモの一角に住んでいた。そこは今では森になっている。そこに人が住んでいた跡ぐらいは見つかるかもしれない。

…クリバリは狩りだけで暮らしており、獲物をボロモの市場で売っていた。…カラントオはマッカに行き…マッカの人にこう言った。「戦いの準備をしている。なぜなら、そこにはムスリムがいないからだ。戦いをしてイスラームに改宗させるのだ。」マッカの人は言った。「その土地には何人か同じ考えをもった人びとがいる。その者たちと協力するのがよい。剣と銃をお前に与えよう。銃をその土地で売り、買いに来た者があれば、その者とともに戦いなさい。」そして、彼は剣と銃をカラントオに与えた。

マッカからもどったカラントオはガーナで銃を売ろうとしたが、誰も買おうとせず、途方に暮れて、ボロモに行きついた。カラントオは銃を袋に入れたまま、市場で人びとに声をかけていた。そこに、ボロモの市場で獣の肉を売っていたドゥバコロ・クリバリが通りがかり、カラントオに袋のなかの銃を買いいたいと求めた。銃の値段について二人は話し合ったが、ドゥバコロは袋のなかの銃をついぞ直に見ることはなかった。カラントオはマッカの人が予言した人物とはこの男に違いないと確信し、ドゥバコロとともにボロモで7年間過ごし、ドゥバコロを説得した。…

…カラントオも呪力をもっていたが、戦いで最も呪力を発揮したのはドゥバコロであ

る。ボロモ、ワッハーブ、ナヌー、コーホでの戦いは、ドゥバコロ戦争(*doubakoro-kere*)と呼ばれた。カラントオがそのように呼ばれることはない。

ドゥバコロ戦争が終わった後、ドゥバコロはナヌーに住むようになった。…長い間、カラントオはドゥバコロを呼び出すことはなかったが、ある日、ドゥバコロは家族にこう言った。「カラントオが私を呼んでいる。私はワッハーブにいかねばならない。裏切りがあった。ワッハーブに行けば、私は死ぬだろう。」ワッハーブでは、カラントオは落とし穴をつくらせていた。そして、ドゥバコロがカラントオのもとに着くと、カラントオは落とし穴のある場所を指さし、「そこに座れ」と言った。「あなたが座りなさい」ドゥバコロは応じた。このやりとりを三回繰り返した後に、ドゥバコロは「わかった。そこに座ろう」と言い、穴に落ち、殺された。

しかし、戦いはドゥバコロ戦争で終わらなかった。カラントオはバガシに攻め込んだ。カラントオは村に入ることすらできず、ジンに食いつかれ、そこで死んだ。このことを人びとは話さない。カラントオが捕まって死んだことについては。人々は遺体をワッハーブへ運び、モスクのなかに墓を作って埋葬した。」<sup>81</sup>

カラントオに協力者がいたことについては、トクシエが報告をし(Tauxier 1912: 410)、レヴツィオンが補足し(Levtzion 1968: 148)、その内容が他に引用されるようになった<sup>82</sup>(たとえば、Duperray 1984: 59; Saul and Royer 2001: 53-54)。しかし、ナヌーのドゥバコロはこれまで言及されてこなかった<sup>83</sup>。

特に注意を引くことは、レヴツィオンは、サファネ、ボロモ、ワッハーブ、コーホ、ドゥルラで 1960 年に調査を行っているが、ナヌーでは調査を行っていないことである。これは 1960 年代当時——少なくとも、現在ではそうであるが——ナヌーが重要なマラブーの

---

<sup>81</sup> 2013/7/14 Nanou, Inousa Kouribary(ナヌーの村長)。

<sup>82</sup> 具体的には、トクシエは、マフムードの父とともに「ジェンネから来たマルカ[ダフィン]」、「ワガドゥグ周辺から来たモシ」、「ワ周辺から来たダガリ・ジュラ」に言及し(Tauxier 1912: 410)、レヴツィオンは、「サファネ周辺から来たダフィンのムスリム」、「ヤーヤ・ギラのリーダーシップのもとワイグヤから来たムスリムの集団」、「マーマ・ダガリ[マーマ・セヌー]によって率いられ、タスリマとブレディエ(Bredie)から来たカントンシ[ダガリ・ジュラ]」を挙げている(Levtzion 1968: 148)。

<sup>83</sup> このことはナヌー以外の土地で語られた口頭伝承がナヌーのクリバリに言及しないことを意味しない。コーホのイマームとボロモの長による口頭伝承において、ナヌーのクリバリの言及があった(2013/7/11 Koho, Mahmud Konate(コーホのイマーム); 2013/7/30 Boromo, Boubacar Guira(ボロモの村長))。

いる土地とみなされていなかったことによるのではないかと考えられる。もう一つ傍証を挙げれば、1922年から1923年までの重要なマラブーについての個人調書がとられた際に、ワッハーブ、ボロモ、コーホのムスリムについては調書が残されているが、ナヌーについては一人も言及されていない<sup>84</sup>。そして、これらは口頭伝承の内容と合致している。口頭伝承によれば、すでに述べたようにボロモのギラはムスリムの交易商人であり、次に述べるコーホのセヌーはマラブーであったのに対して、ナヌーのクリバリはあくまでも狩人であった。実際のところ、この口頭伝承(事例 23)では、イスラームがほとんど主題となっていない。

事例 23 の重要な点は、四つある。第一に、ボロモのギラにみられたように、マッカでの予言を媒介して、ドゥバコロ・クリバリが主人公となり、カラントオは脇役になっている。第二に、さきに検討したように、ドゥバコロは狩人であったことから、カラントオのジハードはマラブーだけではなく、あるいは既存のムスリムだけではなく、狩人も巻き込み、改宗させるものであった<sup>85</sup>。第三に、ドゥバコロにとって、戦争はボロモ、ワッハーブ、ナヌー、コーホでの戦いに限定され、それ以降の戦争は別のものと認識されていた。「ドゥバコロ戦争」という呼称に明白にみられるように、この戦争は、カラントオによる、ジハードとみなしていなかった。つまり、ジハードの参加者は必ずしもカラントオのジハードの構想、あるいは世界観を共有していたわけではなかった。カラントオによるドゥバコロの殺害という内容は——真偽は別として、少なくとも——このことを示している。

最後に、コーホのダガリ・マーマについての口頭伝承をみていこう。

#### 事例 24：ダガリ・マーマとジハード

「[ダガリ・マーマとカラントオがタスリマで同じマラブーから学んだ後に]カラントオがマッカに着くと、「私はジハードを始める」とマッカに人びとに言った。マッカの人は「もしジハードをするのであれば、正しさを示すものが必要であろう」と言い、剣を用意した。カラントオはこれに納得し、「友とともに、使命を果たすつもりだ」と答えた。こうしてカラントオは剣をうけとって、マッカを発った。

ダフィンにもどって、ダガリに再会すると、カラントオは剣をダガリに与えようとし

---

<sup>84</sup> CNABF 225 Correspondances au sujet des marabouts; fiches biographiques des marabouts influents 1922-1923.

<sup>85</sup> ナヌーの村長となったクリバリはムスリムである。

たが、ダガリはこれを受け取らなかった。「私と君は兄弟のようなものだが、この剣は受け取れない」とダガリは言った。そこで、カラントオはこの剣をもつことにした。

…[ジハードが開始され]ナヌーに向かう途中、一行は森のなかで一人の狩人に出会う。一行はイスラームを広める目的を彼に話すと、「何の問題もないさ。そうしよう。そうしよう。一緒にやろう」と狩人は事も無げに了解した。彼の名前をアラソン(Allason)という。これは、神が授けた、という意味である。アラソンは協力することにためらいもなく、思う存分手助けをした。そして、ナヌーはアッラーによって与えられた。

ダガリとカラントオが始め、これに、アラソンとひとりのモシの男を加えた、四人がこの地のイスラームを発展させた。…ダガリがこれらのジハードの発案者であり、最初の人物であった。その次に、カラントオがいた。しかし、ダガリは年長であるカラントオを兄として敬して、その地位をカラントオに譲ったのだ。

…他の村の人間のなかには、カラントオが一連のジハードを行ったという者がいるかもしれない。しかし、これらを為したのは、さきにあげた四人[カラントオ、ダガリ・マーマ、アラソン[ドゥバコロ・クリバリ]、ヤーヤ・ギラ]のムスリムである。この時代に、人びとが尋ねても、カラントオはそう答えたであろう。カラントオ一人によって始められたわけでも、彼一人によって成し遂げられたのでもない。ただ、カラントオは四人のなかで一番年長であり、年長者を敬うことは当然であるから、カラントオが代表的な存在になっているのだ。」<sup>86</sup>

ジハードの起点をダガリ・マーマにもとめ、カラントオよりもダガリ・マーマが重要であったことを強調している点は、ドゥバコロの口頭伝承(事例 23)と共通している。ヤーヤ・ギラやドゥバコロ・クリバリの口頭伝承とは異なり、マッカでの予言という要素をもっていないが、これはカラントオの修学先をめぐる歴史の競合にダガリ・マーマの口頭伝承も参与していることによる。すなわち、ダガリ・マーマはタスリマでカラントオとともに同じマラブーから学んだとされ<sup>87</sup>、マラブーとしてのダガリ・マーマの正統性が主張されている。

---

<sup>86</sup> 2013/7/11 Koho, Mahmud Konate(コーホのイマーム).

<sup>87</sup> 2013/7/11 Koho, Amidou Senou(コーホの村長); 2013/7/11 Koho, Mahmud Konate(コーホのイマーム).

アラビア語史料(IASAR/66, 77)には、マフムード・カラントオが、マッカ巡礼後、ワ<sup>88</sup>に赴き、ジハードへの参加者を募った際に、ワのタリベ(学生)であった「ダガトゥ・ジュアラ」(Daghat Juala)が「最初に忠誠を誓った」という逸話が書かれている(Martin 1965: 83; al-Naqar 1972: 122)。ここでの「ダガドゥ・ジュアラ」とは、ダガリ・ジュラのことであろう。マフムードの修学先を検討した際にすでに述べたように、この文書(IASAR/66, 77)がムブン川湾曲部におけるイスラームの歴史的な展開に強い関心をもち、マフムードにこの地域での知的伝統が集約されるように構成して書かれている。そうした性格をもった文書において、他の協力者についての言及はなく、ダガリ・ジュラが「最初に忠誠を誓った」者たちとして位置づけられている。細部は異なるが、ダガリ・マーマの口頭伝承と類似した傾向をみてとることができるだろう。つまり、ダガリ・ジュラについての語りにはマラブーとしての重要性を付与しようとする傾向がみられる。

このように、カラントオのジハードの代表的な協力者は、ヤルセの交易商人(ヤーヤ・ギラ)、ダフィンの狩人(ドゥバコロ・クリバリ／アラソン)、ダガリ・ジュラのマラブー(ダガリ・マーマ)という人格が与えられている。これらの協力者の人名は、行政文書に登場する人名とほぼ対応しており、名指された人物が実在したことは確かである<sup>89</sup>。実在した人物が口頭伝承に対応する人格を有していたかどうかは別として、ダフィン、ヤルセ、ダガリ・ジュラという三つの民族のそれぞれから一定数の参加者がいたこと、これらの参加者には、交易商人、狩人、マラブーがいたことは確かであろう。

### 3-4-6. ジハードの展開と挫折

ジハードがどのように展開したのかについての口頭伝承・史料もまた、細部に多くのバ

---

<sup>88</sup> 現在のガーナ北部のワ王国の王都。3-2 を参照。

<sup>89</sup> ヤーヤ・ギラについては、彼を継いでボロモの村長となった息子のスマナ・ギラ(Soumana Guira)の調書に、「ヤーヤ・ギラ(Yaya Guira)の息子…ヤーヤは 1914 年に亡くなったが、司令官(commandant)の地位をママドゥ・カラントオ(Mamadou Karantao)から受けた」という記述がある(CNABF 225 Correspondance au sujet des marabouts; fiches biographiques des marabouts influents 1922-1923.)。ドゥバコロ・クリバリについては、ナヌーの村の歴史についての文書のなかに、「ナヌーはシコ・ブド(Siko Boudo)というレオ(Leo)のナナヌ(Nananou)から来た人物によって創始された。…ジハードによって、ジュラのアラッソ・クリバリ(Alasso Coulibaly)が村長となった」とある(CNABF 22V106 Historique du village de Nanou.)。同様にコーホの村の歴史についての文書に、「コーホ村の創始者はカキ・ラミエン(Kaki Lamien)というが…村長は、カラントオのジハードに参加したマリキ・セヌ(Maliki Seynou)に代わったとある(CNABF 22V106 Historique du village de Koho.)。

リエーションがみられるが、ボロモ、ナヌー、ワッハーブ、コーコ以外でも戦争を行っていたことは共通している。まとめると、(1)ボロモ周辺、(2)ドゥルラからソコンゴまでの南北、(3)ポンポイ、バガシというワッハーブの西隣という三つの地域で戦争があったことについては複数の口頭伝承・史料で合致している<sup>90</sup>。他方、(4)ウリ、(5)ヤホはそれぞれ一つの史料・口頭伝承のみで言及されているが<sup>91</sup>、後者はムフタルの時代のヤホ周辺での戦争との混同が生じたと推測される<sup>92</sup>。

全体としては、ジハードはムフン川湾曲部の右岸で展開し、ボロモ周辺では基本的に成功をおさめたが、他の地域では部分的な勝利を得たものの、激しい抵抗を受け、最終的には敗退したといえる。2章でみたように、この地域では基本的な政治的な単位は村であるが、中核村を中心とした同盟関係がみられ、ジハードに際しても、同盟関係が機能したことが一部の先行研究・史料から読み解くことができる。

これらを踏まえて、図 3-7 では、口頭伝承・先行研究・史料の断片的な記述を統合し、ジハードの展開の進路、地域の同盟の盟主とその政治的な立場をまとめた。図 3-7 を参照しつつ、以下では、ボロモ周辺から北上し、ドゥルラ、ソコンゴを経由し、バガシという順序で、それぞれのジハードの展開について検討していく。

---

<sup>90</sup> すべての口頭伝承・史料が(1)(2)(3)に言及しているわけではない。また、(1)と(2)の前後関係についても一致はみられない。

<sup>91</sup> ウリについては ANOM 14miom/688 Monographie et histoire de Koury 1903.(CNABF 27V11 Carnet signalétique de chef de canton. Chef de Canton de Ouahabou, Yaya Karantao, 1943.にもウリについての言及があるが、1903 年の文書を参照した可能性がある)、ヤホについては 2013/7/11 Koho, Amidou Senou(コーホの村長)。

<sup>92</sup> ヤホ周辺のフォビリ(Fobiri)で調査を行ったブレニャによれば、ヤホはムフタルと結んで、マム(Mamou)を攻め立てたとされる(Blegna 1990: 53-54)。



図 3-7. マフムード・カラントオのジハドの展開<sup>93</sup>

ボロモ周辺は、先行研究や行政文書での断片的な言及も多く、比較的再構成しやすくなっている。ボロモ周辺には、コ(Ko/Winye)という民族の 7 つの主要なリネージュがそれぞれの中核村とその周辺に居住していた(Jacob 2003a: 79)。この地域では、ボロモ、ナヌー、

<sup>93</sup> コの同盟の盟主(Oury, Kiena, Diby, Nanou)については Jacob 1997: 293, 2003a: 79, 2003b: 168, Diby と Doubakoro の位置については Jacob 2002: 26、ダフィンの同盟については Saul and Royer 2001 で言及されており、具体的には、Banou(ibid.: 39, 41)、Lah(ibid.: 47)、Tcheriba(ibid.: 48)、Bona と Datomo(ibid.: 124, 128)、Douroula の地域での中心的な位置づけについては Ikie Zina entre en scène.、ブワの同盟の盟主としての Passakongo, Sokongo については Cremer 1924: 11, 131-136, 144-146、Bagassi が周辺村を庇護する立場にあったことについては CNABF 22V103 Historique du village de Haho にそれぞれ言及がある。その他の情報については本文を参照。



ワッハーブ以外に、少なくとも、ディビ(Diby)、ボロン(Boron)という村が攻撃され、廃墟となった<sup>94</sup>。しかし、周辺村のすべてが攻撃の対象となったわけではない。シビ(Siby)、ウロボノ(Ouroubono)には、ジハードから逃げてきた住民がいることが報告されているが、直接攻撃されたことには言及されていない<sup>95</sup>。また、バンディオ(Bandio)はカラントオの権威を認め、服従の意を示したことで攻撃を免れたとされる<sup>96</sup>。

興味深いことは、ボロモの北に隣接するワコ(Ouako)などの村々がカラントオによって征服、占領されなかったことである。カラントオはコの 7 つの主要なリネージのうち、ボロモのイエワナ(Yewana)、ディビのミネ(Mine)、ナヌーのブド(Boudo)を攻撃しており(Jacob 2003b: 168)、北のUri、シビなどの村々のリネージはダフィンのダ(Da)、ジナコンゴ(Zinakongo)と同盟を結んで、カラントオに対抗したとされる(Jacob 1998: 293)。さらに、ヤコブによれば、ジハード以前、北のUriなどは南のボロモ、ナヌーなどと対立していた(ibid.: 293)。つまり、大雑把に言えば、コの北部はダフィンの一部と同盟を結ぶことでカラントオに対抗しえたが、もともと、コの北部と敵対していたコの南部は有効に対抗できず、その居住域の一部をカラントオの軍隊が征服、占領できたといえる。

サファネの大イマームのサコは、戦争によって改宗をさせる小ジハードに対して、平和的に改宗させる大ジハードを続けてきたことを強調しており<sup>97</sup>、サファネのサコを中心にカラントオのジハードに対しては反対していた。後に述べるドゥルーラとケレベ(Kerebe)を除いて、ダフィンの村々のなかで明白にカラントオ支持を示していたのはサーニだけであった。

サーニ、あるいはサーニのシセがカラントオのジハードに加わったことは複数の口頭伝承で言及されている<sup>98</sup>。サーニの起源についてはやや混乱しており、1971 年にボロモの司

---

<sup>94</sup> ディビについては Jacob 2003b: 168、ボロンについては CNABF 22V105 Historique du village de Boro。なお、後者の文書によれば、ボロンは後に、ボロ(Boro)村として再建されている。

<sup>95</sup> Vinama 1983: 30 はシビとウロボノにカラントオのジハードの「難民」の子孫がいることを報告している。また、カラントオのジハードの同時代にすでにウロボノが存在していたことについては CNABF 22V104 Historique du village de Oroubono。

<sup>96</sup> Kote 1982: 68 cited in Saul and Royer 2001: 55, 327。なお、バンディオの歴史についての行政文書はカラントオについては一切言及がない(CNABF 22V103 Historique de Bandio.)。

<sup>97</sup> 2013/8/2 Safane, al-Hadj Amada Sako。

<sup>98</sup> 2013/7/9 Sani, Amadou Cissé(サーニの村長); 2013/7/11 Koho, Mahmoud Konate(コーホのイマーム); 2013/7/14 Nanou, Inousa Kouribary(ナヌーの村長); CNABF 22V104 Historique du village de Sani。

令官がサーニの歴史を聞き取った際の文書では、ドゥルーラでのカラントオのジハードに参加した後にサーニがつくられたとされる一方で<sup>99</sup>、現在のサーニの口頭伝承ではジハードの頃には、すでにサーニがあったとされる<sup>100</sup>。仮に存在していたとしても、サーニは同盟関係を構成させるような中核村ではなかったことを考えると、サファネ周辺のダフィンのなかでカラントオへのジハードに積極的に参与したのは全体からすれば、少数派であったと考えられる。他方で、チェリバ(Tcheriba)、ジナコンゴ、ダートモ(Datomo)は村全体としては敵対したものの、村内で親ジハード派と反ジハード派の対立があったとされる(Saul and Royer 2001: 57)。筆者の調査では、後にジナコンゴのイマームとなったコナテ(Konate)はジハード以前にカラントオに出会い、彼に共鳴し、彼とともにダートモに赴き、カラントオによって三日三晩の説得が行なわれたという口頭伝承が聞かれた<sup>101</sup>。しかし、ダートモでのカラントオの説得は失敗に終わり、コナテはカラントオとの再会を誓ったが、ジハード後も呼ばれる機会がなかったとされる。つまり、ジハードの勢力はダフィンの村々の住人に働きかけを行い、一部では賛同者を得ることができたが、サファネ周辺では既存の権威によって拒絶された。

一方で、マフムードのジハードの戦跡についての口頭伝承・史料では、戦争の対象となったダフィンの村についてはまったく言及されていないことも注目すべき点である<sup>102</sup>。たしかに、集合的な記憶に残らない「小規模な」戦闘があったという可能性は否定できない。たとえば、村を破壊されたボロンについては、後に再建されたボロの村の行政文書のみによって知られており、マフムードのジハード全体を語る、他の口頭伝承や史料には、ボロンの名前は登場していない。したがって、こうした「小規模な」戦闘はありうるだろう。

---

<sup>99</sup> CNABF 22V104 Historique du village de Sani.

<sup>100</sup> 2013/7/9 Sani, Amadou Cissé(サーニの村長).

<sup>101</sup> 2013/7/5 Zinakongo, Yousouf Konate(ジナコンゴの村長).

<sup>102</sup> レヴツィオンが収集した「サファネのインフォーマント」による口頭伝承と筆者の調査でのサファネの首長による口頭伝承のみが、具体的な村名を挙げずに、ダフィンの村とも戦争を行なったことに言及している。レヴツィオンは、「サファネのインフォーマント」によって、マフムードがムスリムと非ムスリムを区別なく戦ったことを非難されていることを紹介し、大半のダフィンのムスリムはこのジハードを拒絶したと述べている(Levtzion 1968: 150)。また、サファネの土地の主によれば、マフムードはダフィンの村にも攻め込んだため、ダフィンはブワとともに復讐のために戦ったとされる(2013/8/1 Safane, Mousa Sere(サファネの土地の主).)。このような漠然とした内容の評価は困難である。肯定的に読みとるのであれば、集合的な記憶に残らない小規模な戦闘があった可能性は否定できないが、後に述べるように、マフムードの後継者のムフタルは、明確にサファネ付近で戦争をおこしていたため、このことと混同されている可能性も十分にありうる。

しかし、集合的な記憶に残る、同盟関係を構成するような中核村との戦闘、あるいは大規模な勝利や敗退がなかったことは確かである。このことは、ウリ、シビなどとダ、ジナコンゴの同盟関係(Jacob 1998: 293)、チェリバを中心とする同盟関係(Saul and Royer 2001: 48)、ボナとダートモを中心とする同盟関係(ibid.: 124, 128)が、ジハード勢力を阻んだことを物語っている。

サファネ周辺とは対照的に、ドゥルーラ周辺での戦争については、情報量の多寡や個別の戦闘の評価の差異はあるものの多くの口頭伝承・史料で言及されている<sup>103</sup>。特に、マサラ(Massala)、パサコンゴ(Passakongo)は言及されることが多く、集合的な記憶として特に重要であったと考えられる。その一方で、ジハード側についたドゥルーラでの口頭伝承と反ジハード側として戦ったデドゥグの口頭伝承<sup>104</sup>を除いては、村の名前が言及されているのみとなっている。

ドゥルーラの口頭伝承の要点をまとめると以下ようになる。(1)ドゥルーラはジハードを支持し、(2)ドゥルーラでジハードに参加する人びとを集め、(3)グリ(Gouri)とソロニ(Soroni)という近隣の村を威嚇によって服従させ<sup>105</sup>、(4)マサラ、パサコンゴ、スクイ、ブロンカラ、デドゥグに遠征をおこなったが、(5)隣接するトラ(Tora)はドゥルーラに居住するトラからの移住者の懇願によってトラへの攻撃は行われなかった<sup>106</sup>。

ボロモ周辺とドゥルーラ周辺を除けば、マフムードのジハードは敗退に終わっていることを踏まえると、ドゥルーラ周辺でのジハードの成功はドゥルーラの積極的な参与の結果

---

<sup>103</sup> クリ管区の 1903 年の概要報告はマサラ、パサコンゴ、デドゥグを攻撃したことに言及し(ANOM 14miom/688 Monographie et histoire de Koury 1903.)、トクシエはマサラでジハードの進軍が止められたこと、パサコンゴで強力な抵抗にあったことを述べ(Tauxier 1912: 410-411)、クレメールはデドゥグの口頭伝承から、キレベ(Kirebe, Kerebe の誤記)を通り、マサラ、パサコンゴで戦闘があったことを報告し(Cremer 1924: 144-145)、ヤーヤ・カラントオの調書はスクルニ(Soukourouni, Souakuy の誤記か?)、パサコンゴを通過したとし(CNABF 27V11 Carnet signalétique de chef de canton. Chef de Canton de Ouahabou, Yaya Karantao, 1943.)、クリバリが収集したドゥルーラの口頭伝承では、マサラ、パサコンゴ、スアクイ(Soukuy, Souakuy の誤記か?)、ブロンカラ(Buronkara, 現在地不明)、デドゥグを通る遠征を行なったとしている(Ikie Zina entre en scène.)。また、パサコンゴで調査を行なっている神代ちひろ氏(京都大学大学院アジア・アフリカ地域文化研究研究科博士後期課程)からの口頭でのご教授によれば、パサコンゴには外部者による襲撃があったとする口頭伝承がある。

<sup>104</sup> ドゥルーラの口頭伝承については Ikie Zina entre en scène、デドゥグの口頭伝承についてはクレメール(Cremer 1924)を参照。

<sup>105</sup> 別の口頭伝承では、ドゥルーラ周辺のゴニ(Goni, Gouri と同じか)、イエ(Ye)、ニウルニ(Niwuruni)が挙げられている(Kote 1982: 68 cited in Saul and Royer 2001: 55, 327)。

<sup>106</sup> Ikie Zina entre en scène。

であるとみなせるだろう。また、トラの事例はジハードがローカルな文脈のなかで具体的な襲撃対象を選別していたことを物語っている。

1910年代にデドゥグでクレメールによって収集された口頭伝承は、ドゥルラ周辺でのジハードの経過を生々しく伝えている。なお、反ジハード側からのジハードそのものについての具体的な語りは、この口頭伝承が唯一のものである。

#### 事例 25：ドゥルラ周辺のジハードの経過

「軍隊、ジュラ[ここではジハードの勢力の意味]の軍隊は強固なものだった。彼[マフムード]はボロモにいて、つぎにワッハーブに行った。彼はすべてを征服し、われわれの郡<sup>107</sup>に近づいた。パサコンゴの人びとは言った。「へ、へ、奴らは降伏しないぞ！だが、みてみる、奴らはボロモを出て、ドゥルラに来て、キリベ<sup>108</sup>を通った。みんな、奴らに情けをもとめている。」

夜が明け、パサコンゴとマサラの戦士たちは集まって、ジュラの力が彼らに及ばない、ここの人たちには及ばない、打ち負かすことなどできないと断言していた。彼らは[周囲の村への戦争を呼びかける]警告の叫び声をあげ、茂みのなかでそれに応える声がした。われわれのデドゥグも彼らにカリ(Kari)とともに応えたのだ。

ある日、マルカ[先の「ジュラ」と同様にここではジハードの勢力の意味]が動き始め、マサラに近づくと、彼らは密集して攻撃し始めた。われわれはみな、パサコンゴ、カリ、ポコンゴ(Pokongo)とともに、列になって、弓を引いたが、無駄だった。マルカは進んできて、最初の家を奪うと、人びとを捕まえ、殺し、喉を掻き切った。他の住民はパサコンゴに逃げていき、口々に抵抗することはできないと言った。そして、パサコンゴはジュラによって取り囲まれた。彼らは牛の革で身体を守り、弓矢が通らなかったのだ。パサコンゴ[の人びと]は脱出を図り、デドゥグに逃げてきた。われわれもまた、カリまで逃げた。[デドゥグの]村長は、二人の鍛冶屋とともに[マフムードに]会いに行った。服従のしるしとしてヤギと白いニワトリをもって、こう言った。「パサコンゴの人びとが道をふさぐために出ていったのだ。デドゥグはこれに加わるのを断った。」マルカはわれわれの

---

<sup>107</sup> フランス語の原文で *canton*(郡)と訳されている。この時代に郡はないため、われわれの土地、領域といった意味として解するのが妥当であろう。

<sup>108</sup> 原文は *Kiribe*。ドゥルラから北西に位置するケベレ(*Kebere*)を指すと思われる。ケベレにはケベレを創始したムスリムの戦士が周囲に戦争を仕掛けたという口頭伝承がある(*Ik'ie Zina entre en scène*)。

語りを受け入れ、服従を退けなかった。われわれの村は許されたのだ。

スリ (Souri)[の人びと]はこうしたものを拒否して、奴らを追った。カマデナ (Kamadena)[の人びと]もまた同じようにした。しかし、マルカはマサラを出て、カリまで追ってきた。奴らはカリにパサコンゴの者たちを村から出せ、部外者[パサコンゴから逃げてきた人びと]か、お前たち自身か、どちらかを選べ、と言った。カリの人びとは[村から]出てきて、[マフムードと]話し合った。彼らは、カリ[出身]の女がパサコンゴに嫁いでいるから、彼らを外に出すわけにはいかないと拒否した。マルカはこれを拒絶した。「服従し、女を集め、すべてわれわれに差し出せ。」奴らは[カリを陥落させ]彼らを捕まえた…。」(Cremer 1924: 144-145)

まず、指摘できることは、この語りには何ら宗教的な要素が含まれていないことである。祈禱や呪力が重要な要素として含まれていた、本章 4 節 4 項でみたジハード側の具体的な戦争の語りとは対照的である。ジハードを受けた側にとって、ジハードは単なる戦争、さらにいえば、本稿 2 章で検討したジハード以前の戦争と——外来者による侵略という点を除けば——ほとんど変わらないものであった。

つぎに、こうした戦争において、やはり本稿 2 章でみたような同盟関係が機能していたことも重要である。この時点では、少なくとも、パサコンゴ、マサラ、カリ、デドゥグ、ポコンゴには同盟関係が機能し、戦争の協力が行なわれている。また、同盟関係先の村に逃げ込むことで、その逃亡先の村に戦争が広がっていくという点でも、同盟関係が戦争の活性化をもたらしているといえる。さらに付け加えれば、デドゥグの降伏の素早い選択は、過去のデドゥグとパサコンゴの遺恨の延長線上にあったと考えることができる。ジハードが生じた時期からそれほど遠くない過去に、デドゥグとパサコンゴのあいだに諍いがあり、カロ(Karo)村の仲裁で戦争が回避されたという経緯があった(ibid.: 134-136)。その意味では、ボロモ周辺と同様に、すでにある同盟同士の敵対関係をジハード勢力が顕然させる、あるいは利用するという事態がここでは生じていたといえる。

そして、この戦争が領土の獲得、領域の拡張を直接的に求めていなかったこともわかる。マフムードの軍隊は征服した、あるいは服従した、いずれかの村に留まることはなく、敵の敗走者を執拗に追うというかたちで遠征を継続させていた。また、服従の意を示したデドゥグに対して、村長を自軍の出身者に交代させる、あるいは主従の関係を構築する儀礼などが行なわれていない。すでに言及しているように、先行研究の一部では、マフムード

の権威を認め、服従を示した村々があったことが指摘されているが、それらにおいても、デドゥグに対するような態度をとっていたのではないかと推測される。実際のところ、マフムードの軍隊が去った後、デドゥグとカラントオの勢力のあいだには、直接的な交流は一切なかった。

さて、クレメールの収集した口頭伝承はカリの陥落で終わっていない。その後、ジハード勢力は南下し、敵対勢力が集結したプンドゥ(Poundou)<sup>109</sup>での戦いに勝利し、さらにソコンゴ(Sokongo)を取り囲み、二年間、兵糧攻めをしたが、ついに陥落させることができなかったと伝えている(ibid.: 146-147)。ソコンゴで戦いがあったことについては、口頭伝承・史料で言及されている<sup>110</sup>。トクシエはソコンゴの包囲が 9 カ月に及んだとし(Tauxier 1912: 410)、ドゥルーラの口頭伝承では、ワルコイ(Ouarkoye)、ボンドクイ(Bondokuy)の住人がソコンゴに「逃げ込み」、ソコンゴとともに戦ったとしている<sup>111</sup>。特に、後者の口頭伝承は、ソコンゴにおいても同盟関係が機能し、周辺村からの支援があったことを示唆している。

こうした敗退についての口頭伝承・史料は、バガシ(Bagassi)においても確認することができる。行政文書の断片的な記述によれば、バガシは周辺の 8 つの村を束ねる村であったこと<sup>112</sup>、バガシ周辺のサヤロ(Sayaro)がマフムードのバガシ攻撃の際に反ジハード側として参戦したこと<sup>113</sup>が語られており、バガシでも同盟関係が機能していたことが推測される。他方で、バガシでの戦争の内容には、バガシに攻め込んだとするもの<sup>114</sup>、バガシで敗退したというもの<sup>115</sup>、バガシで敗退してそこでマフムードが死んだとするもの<sup>116</sup>という三つのバリエーションがある。結論からいえば、マフムードの死因については秘匿され、おそらくマフムードはバガシで戦死したと考えられる。

---

<sup>109</sup> ドゥルーラの口頭伝承もまた、カリとプンドゥで戦いがあったことに言及している(Ikie Zina entre en scène.)。

<sup>110</sup> ANOM 14miom/688 Monographie et histoire de Koury 1903.; Ikie Zina entre en scène.; Tauxier 1912: 410.; 2013/7/11 Koho, Amidou Senou(コーホの村長)。

<sup>111</sup> Ikie Zina entre en scène.

<sup>112</sup> CNABF 22V103 Historique du village de Haho.

<sup>113</sup> CNABF 22V103 Historique du village de Sayaro.

<sup>114</sup> ANOM 14miom/688 Monographie et histoire de Koury 1903.; Cremer 1924: 144.; CNABF 27V11 Carnet signalétique de chef de canton. Chef de Canton de Ouahabou, Yaya Karantao, 1943.

<sup>115</sup> Ikie Zina entre en scène.

<sup>116</sup> ナヌーのクリバリの口頭伝承は、単にバガシに攻め込んだ際に亡くなったとしているが(2013/7/14 Nanou, Inousa Kouribary(ナヌーの村長))、トクシエはバガシに攻め込む途上で亡くなったとし(Tauxier 1912: 411)、デュプレイはバガシに二度攻め、三度目に死去したとしている(Duperray 1984: 59)。

マフムードの死去からそれほど年数の経っていない1888年にワッハーブを訪れたバンジェールがマフムードの敗戦や死因について何ら情報を得ていないこと(Binger 1892 t. I: 416)、3つの口頭伝承の例外を除いて、カラントオのジハードについての口頭伝承・史料では、マフムードの死去についてまったく語られていないことから、マフムードの死因は、少なくとも、広く知られることとはなっていなかったと推測される。また、マフムードの死去について語っている3つの口頭伝承が共通して言及しており、この点については内容の混乱がなく、バガシでの戦死の蓋然性が高い。このことから、敗退による不慮の死がマフムードの権威を低下させ、マフムードを強力な「歴史的人格」として構成させるような歴史の語りを生みだしえなくなったと想定することもできるだろう。

第一に、図3-7で明らかのように、地理的には、ムブン川湾曲部の右岸、あるいは湾曲部の内部を周回するように展開したことである。ジハードの勢力はムブン川を渡ることはなかった。

このことと部分的に重なるが、第二に、全方位的にジハードが展開したわけではなく、特定の民族全体が標的となったわけではなかった。マフムードのジハードでは、コ(ボロモ、ナヌーなど)、ブワ(パサコンゴ、マサラなど)、ボボ(バガシ)と敵対したが、そのすべての村が標的となったわけではなく、コではウロボノ、ブワではトラ、ボボではバンディオといった村は明白に標的となることを免れている。また、ダフィンと交戦した明示的な口頭伝承はないが、これはダフィンを標的としなかったというよりも、サファネ周辺のダフィンの主要な同盟がジハード勢力に明確に敵対していたことに拠る。

第三に、ダフィンの既存の勢力のなかにも一定数の共鳴者がおり、こうした共鳴者を代表するドゥルーラはジハードの北部での展開に重要な役割を果たしていた。他方で、これらは十分に組織化されなかった。これは、サファネ周辺のダフィンの同盟関係がドゥルーラ周辺とボロモ周辺を断絶する効果をもたらしていたとも言い換えることができる。

第四に、ソコンゴ、バガシでの敗退が顕著な例であるが、種々の同盟関係がジハードの拡張を抑えたといえる。さらに重要な点は、ジハード勢力は一つの集合体であったが、反ジハード勢力は全体としてはまったく相互に関係しない種々の同盟関係であったことである。すでに述べたように、このジハードは特定の民族全体に対する戦争ではなく、コ、ブワ、ボボといった民族全体が連合して、ジハード勢力と対峙したわけではなかった。あくまでも、それぞれの地域ごとの同盟関係がそれぞれの地域ごとにジハード勢力に敵対していた。そして、戦争時の協力関係、あるいは戦線の拡大は、事例25でみたように、同盟関

係を軸にして連鎖的に生じていた。2章でみた「国家に抗するシステム」としての同盟関係が、国家形成の運動としてのジハードを阻んでいたといえる。

他方で、マフムードを継いだムフタールの時代になると、種々の同盟関係がジハード勢力を利用するというような事態もみられるようになる。いずれも最終的にジハード勢力が敗退する事例であるが、ヤホを中心とする同盟関係が敵対するマム(Mamou)を中心とする同盟を制圧するために、ムフタールと協同して、マムに攻め込んだが敗退したこと(Blegna 1990: 53-54)、ムフタールがディエブグ(Diebougou)まで遠征した際に、ディエブグの先住者であったディヤン(Dyan)はこれを歓迎したが、周辺に近年移住していたダガリとプオ(Phuo)の民族の村の同盟がジハード勢力を撃退したこと(Kuba 2003: 144-145)、グルンシの土地で外来勢力として略奪を繰り返していたザベルマ(Zaberma)とムフタールは同盟を結び、サファネに攻め上がるが、やはりダフィンの同盟に敗退したこと(Duperray 1984: 60)が挙げられるだろう。

第五に、ジハードの勢力は必ずしも領土の確立や支配を念頭においていなかった。これはドゥルラ周辺での一連の戦争において顕著にみられる。コン王国のボボ・ジュラソへの遠征にみられるように、既存の支配地の領土を拡張するのではなく、起源地を離れて、戦争と略奪を繰り返した後に、村を設立して定住するというパターンは、ヴォルタ川流域に広くみられ(Saul 1998)、マフムードのジハードもまた、そうしたパターンに合致している(Saul and Royer 2001: 57)。また、本稿2章でみた、ジハード以前のイキエ・ジナの戦争においても、こうしたパターンをみてとることができ、戦争の形式という点では、マフムードのジハードは、既存の枠組みを超えるものではなかった。特に、ジハードに敵対していた勢力や非ムスリムによる語りでは、こうした傾向が強かった。

### 3-5. ムフン川湾曲部における政治、経済、宗教の再編成の萌芽

最後に、カラントオのジハードを、国家形成(政治)、長距離交易(経済)、イスラーム(宗教)の三つの水準において検討し、本論の第一部のまとめとしたい。

すでに述べてきたように、カラントオのジハードは、ゆるやかな同盟関係をもつ、中核村と小規模の村落が点在する「国家をもたない社会」において出現した、なかば成功し、なかば失敗した国家形成の運動であった。

このことは、口頭伝承において語られるジハードについての認識の相違からもみてとることができるだろう。立場によって評価はわかれているが、少なくとも、ムスリムのなか



では、この戦争がジハードであることは認識されており、それ以前の戦争とは意味付けが異なることは確かである。また、19 世紀初頭には、ニジェール川中流域でシェイク・アマドゥのジハードによる国家が成立しており、直接的に思想上の関連があったかどうかは別にしても、こうしたジハードによる国家形成という形式について、ムブン川湾曲部のムスリムが完全に無知であったとは考えにくい<sup>117</sup>。他方で、ナヌーの口頭伝承(事例 23)にみられるようにジハードの参与者の一部では、ジハードとしての位置づけがそれほど重要とみなされておらず、非ムスリムのコヤブワの口頭伝承では、この戦争がジハードとしては認識されていなかった(事例 18, 事例 25)。つまり、それぞれの立場によって、この戦争がそれ以前の戦争と同種のものであるのかどうか、「正しい」ジハードであるのかどうかという二つの基準において、評価がわかれている。先行研究における評価もまた、こうしたローカルな立場の違いをそれぞれ反映したものとなっている<sup>118</sup>。

前項でみたように、カラントオのジハードは各地の同盟による抵抗を受け、敗退する。このことは「国家に抗するシステム」が機能したものと捉えられることを述べた。しかし、この同盟が、クラストル(1987)が論じるように、国家に抗することを目的としたとはいえない。たしかに、近年の一部の論者が論じるように、国家に抗することが自己目的化しているように捉えると、社会の動態的な側面が捉えられない(Sztutman 2011)。前述のように、マフムード・カラントオの後継者のムフタルによるジハードでは、一部の同盟は、結果的には失敗したものの、カラントオの勢力を利用していた。敵・友関係を構成する複数の同盟は、小規模の軍事力が遍在するという条件下では、一部の抗争が連鎖的に戦争へと展開させるように働き、結果として、国家の形成を阻害するように作用するが、カラントオの

---

<sup>117</sup> たとえば、1888 年にワッハーブを訪れたバンジェールによれば、アル・ハジ・オマルのジハードから逃げてきたフータ・ジャロン、ボンドゥク、バケル、カルタなどの出身者がワッハーブに居住していたとされ(Binger 1892 t. I: 421)、後年のワッハーブのマラブーの個人証書にも「サヘル」出身の「モール」人がいた(ANCI 5EE70(2) Fiche des renseignements sur marabouts du Cercle de Dedougou.)。やや時代が下るが、ムブン川湾曲部の北に位置するダフィンのムスリムの主要な中心地の一つであったランフィエラのカラモコ・バは 1870 年代にジェンネで修学しており(Echenberg 1969: 538)、カラモコ・バの同時代人であったサファネの大モスクのイマームもまた、ジェンネで学んでいた(Larou 1985)。

<sup>118</sup> たとえば、非ムスリムの改宗を目的としたものとするもの(Koulibaly 1970)、改宗ではなく、奴隷狩りが目的となっていたとするもの(Binger 1892 t. I; Dupperay 1984)、ジハード以前の戦争と連続したものとするもの(Cremer 1924; Saul and Royer 2001)といった先行件におけるジハードの評価は、ムブン川湾曲部における、ジハードに対する種々の立場を反映したものとなっている。

ジハード勢力が一度、成立すると、その存在を前提として行動を行ない、必ずしも、「国家に抗する」ようには働かないといえる。

このような意味において、カランタオによる国家形成の試みは、「国家をもたない社会」と国家とのあいだに位置づけられ、そのことによって、この戦争についてのローカルな評価が既存の戦争からジハードまで立場によって異なるものとなっている。さらにいえば、口頭伝承から再構成される歴史的事実(国家形成の程度)と口頭伝承の意味内容(戦争の意味の評価)との対応関係が読みとれる。

この対応関係は、カランタオのジハードの広域での位置づけと多民族の協力者の存在においても確認できる。先行研究では指摘されていないが、カランタオのジハード、あるいはその口頭伝承の大きな特徴の一つは、ダフィン、ヤルセ、ダガリ・ジュラという三つの民族の協調があったこと、そのことによって、マフムードに口頭伝承が中心化されていないことである。

本稿 2 章で述べたように、ムフン川湾曲部は、18 世紀には周囲を国家に包囲されるような諸国家の後背地となっていた。このことと不可分に結びついていることであるが、ムフン川湾曲部は、経済的にもまた中心地に包囲、ないしは中心地から除外されてきていた。図 3-8 に示したのは、19 世紀末の西アフリカ内陸の主要な交易路と都市の人口規模である。気候帯の境目となるトンブクトゥ、ジェンネ、セグー、コン、サラガに人口が集中していたことがみてとれるだろう。西アフリカ内陸の交易は、大まかにいえば、サハラ砂漠の岩塩を南の森林地帯のコーラの実と交換する南北の交易、主として戦争によって「獲得」された奴隷の売買を基礎として、各中心地で生産される綿布・皮革製品、南の大西洋海岸部からの銃や火薬を含むヨーロッパ(／植民地)産品、北のサハラ砂漠からの中東産品が交換された(Hopkins 1973: chp. 3)。南北の主要な交易路は、およそ二つのラインで存在したといえる。一つは、ジェンネ、ボボ・ジュラソ、コンをつなぐジュラの交易路、もう一つ、トンブクトゥ、ジェンネ、ワイグヤ、ワガドゥグ、サラガをつなぐヤルセとハウサの交易路である(ibid.: 63-65、図 3-8)。

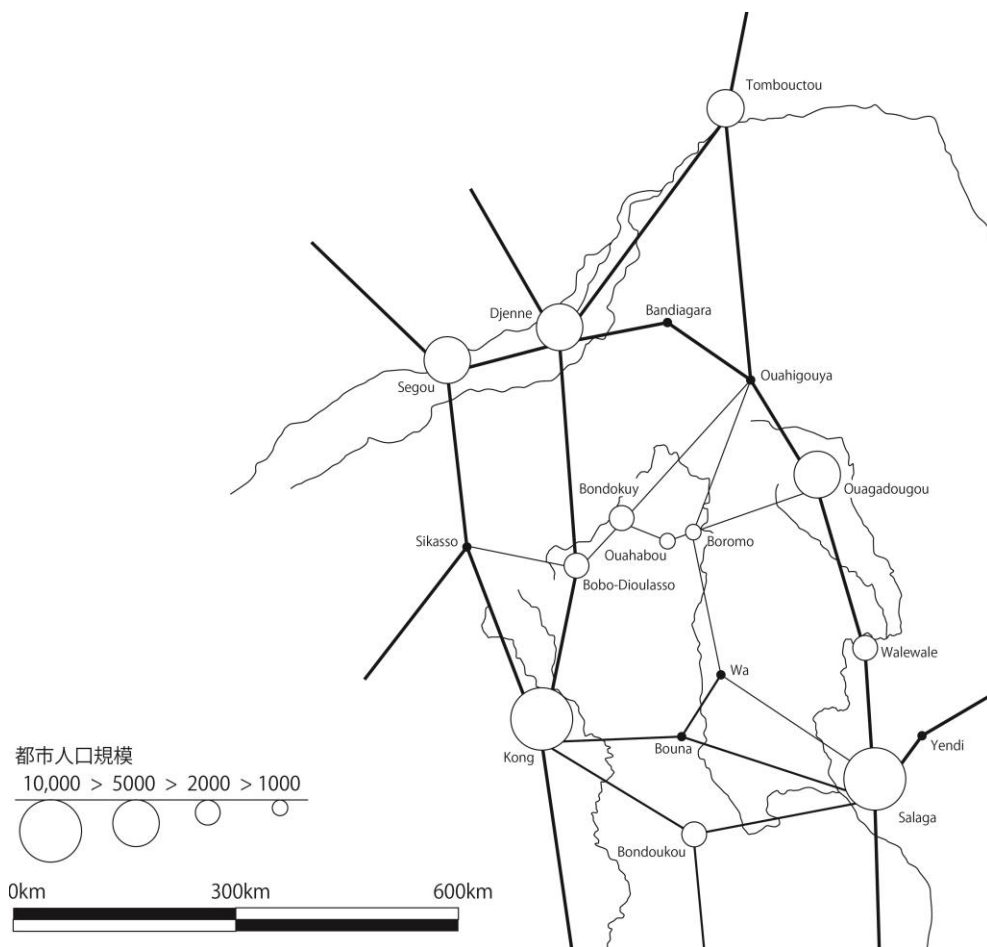


図 3-8. 19 世紀末の西アフリカ内陸の主要な交易路と都市の人口規模<sup>119</sup>

つまり、ムフン川湾曲部は諸国家の後背地であっただけではなく、南北をつなぐ二つの交易路の中間にあたる空白地でもあった(図 3-8)。カランタオのジハードは、この空白地において、ワイグヤとボロモ、ボロモとワをつなぐ交易路を確保するものであった。その点からいえば、このジハードが、ヤルセ、ダガリ・ジュラ、ダフィンの 3 つの民族の協力によって成し遂げられたことのある種の必然性がみてとれる。すなわち、ワイグヤとボロモのあいだで交易をおこなっていたヤルセ、ボロモとワのあいだに居住域を展開するようになっていたダガリ・ジュラが、ダフィンのムフン川湾曲部において結集し、空白地であった交

<sup>119</sup> 交易路は Binger 1892 t. II: 401; 人口については、1887-1888 年のコン、ボンドクイ、ボボ・ジュラソ、バガシ、ワッハーブ、ボロモ、ワッハーブ、ワレワレ(Binger 1892 t. I: 298, 370, 408, 412, 415, 427, 459; Binger 1892 t. II: 37)、1906 年のトンブクトウ、ジェンネ、セグー(Gouvernement général de l'Afrique occidentale française 1907: 34-35)、1885 年、1888 年のサラガ(Johnson 1965 v.1: 89, 150)から筆者作成。

易路を確保する運動が、カラントオのジハードであったとみなすことができる<sup>120</sup>。

このように、カラントオのジハードは、南北の新たな安定的な交易路の確保をもたらすものであったが、同時にボボ・ジュラソとワガドゥグをつなぐ東西の交易路を切り開くものであった。1888年にコンを訪れたバンジェールによれば、コンと(ワガドゥグなどの)モシの居住域をつなぐ直接的で安全なルートはなく、南のボンドゥク、サラガを経由するルートか、ボボ・ジュラソ、ダフィンの居住域を経由する北のルートしかないとしている(Binger 1892 t. I: 317)。言い換えれば、コン-ジェンネ、トンブクトゥ-サラガという南北の二大交易路を東西に架け橋するルートはカラントオのジハード以前にはコン-サラガの南のルートしかなく、ジハードによって、ボボ・ジュラソ-ワガドゥグをつなぐ東西の新たな交易路が出現し、それによってヤルセとハウサの交易圏をさらに西へと拡張させたといえる<sup>121</sup>。

他方で、18世紀以降の西アフリカ内陸における他の国家と同様に(Bazin 1982; Roberts 1987; Der 1998)、カラントオのジハード勢力もまた、戦争による奴隷の獲得と売買によっ

---

<sup>120</sup> ダガリ-ジュラについては、民族の拡散という点でも、おおまかには類似した視角を得ることができるかもしれない。19世紀前半ごろからダガリは拡張し、現在のワのあたりから全体として北上してきていた(Kuba and Lentz 2002: 377)。他方、ヤルセも含むモシのムブン川湾曲部への移住は20世紀初頭に生じており(Benoit 1982: 32)、あまり対応していない。

<sup>121</sup> 強力な国家体制を背景として、染織物・皮革を他地域に輸出していたチャド湖周辺のハウサの長距離交易商人は、18世紀頃から、現在のガーナ北部、ブルキナファソ東南部の各地にハウサの居住区(ゾンゴ)をつくり、広域に商業活動を展開していた(Goody and Mustapha 1967; Adamu 1978; Lovejoy 1986)。従来の研究では、ハウサの交易圏はゾンゴの現存するワガドゥグ、イェンディ以東に限定されるものとして大まかに認識されてきた。しかし、バンジェールによれば、ボボ・ジュラソとジェンネの交易路は、ほとんど「モシとハウサ」によって独占されているとされ(Binger 1892 t. I: 370)、1895年のダフィンのワルコイ(Ouarkoy)の市場についての報告では、ハウサの商人が取引に参加していることが述べられている(ANOM SOUDAN/III/3 Lettre du Capitaine Destenave au gouverneur du Soudan français, le 13 juillet 1895.)。重要な点は、ボボ・ジュラソの「モシとハウサ」が20世紀以降のボボ・ジュラソ管区報告書において言及されず、ボボ・ジュラソにもハウサ居住区(ゾンゴ)が現存せず、その記憶も失われていることである。筆者のボボ・ジュラソでの調査では、「最も古い」とされるハウサの商人は1950年代にニジェールから移住してきた人物であり、彼もまた彼以前のハウサについては何も知らないとしている(2014/01/02 Bobo-Dioulasso, Barso Bwa)。ジュラソバ街区、コンブグ街区においても、ハウサについての聞き取りをおこなったが、植民地統治以前はおろか、独立以前のハウサの移住者を見つけることはできなかった。こうしたことから、19世紀末にボボ・ジュラソに移住してきたハウサの商人は20世紀初頭には他地域に移住したものと考えられる。なお、この移住の動因については5章で述べる。

て多くの資金を得ていたものと考えられる<sup>122</sup>。こうした事態は、本稿 1 章でまとめた西アフリカ内陸における生態的・歴史的条件を考慮する必要があるだろう。すなわち、土地の生産性が低く、土地が豊富にある場合、土地は資本化せず、人間そのものの保有が経済的に重要になるという生態的条件に加え(Goody 1971a; Hopkins 1973: chp. 2; メイヤスー 1977[1975])、19 世紀には、ニジェール川中流域における綿花・綿布生産(Roberts 1980)、チャド湖周辺の染織物生産(Shea 2006)、ヴォルタ川下流域の森林地帯におけるパーム油生産(Sutton 1983)の隆盛に伴って、労働者としての奴隷の重要が非常に高まっていた。こうした背景から、現在のガーナ北部では、18 世紀半ば以降、「国家をもたない社会」に対する奴隷狩りが活性化しており<sup>123</sup>、その意味では、カラントオのジハードは国家の後背地、あるいは奴隷狩りのフロンティアで生じたといえる。

西アフリカ内陸のイスラーム史におけるカラントオのジハードの位置づけは両義的なものである。カラントオは、先着のマラブーのリネージによるイマーム位の世襲の慣行<sup>124</sup>、供儀を行ない土地の分配をおこなう土地の主(本稿 2 章)の制度を廃し<sup>125</sup>、先着者のリネージ

---

<sup>122</sup> カラントオのジハード勢力による奴隷の売買についての情報もまた、断片的なものである。バンジェールは、カラントオのジハードによって捕虜が一定程度生じたこと(Binger 1892 t. I: 416)、「一人、二人の捕虜であれば、農耕に使役させ、ほとんど[売のための]旅に出ることはなかった」こと(ibid.: 421-422)、100 人の捕虜をワガドゥグの国王に贈り、50 頭の馬を獲ようとしたこと(ibid.: 477)を記述している。また、1923 年のデドゥグ管区司令官のアーカイブ調査では、ムブン川湾曲部において、1898 年には、チェリバ、ワルコイ、ワッハーブに主要な奴隷市場があり、奴隷売買は一般的であったと報告されている(ANCI 5EE61 Rapport de l'administrateur du cercle au sujet de l'esclavage. Dedougou, le 24 janvier 1923.)。

<sup>123</sup> ガーナ北部の奴隷交易の歴史を概観したダールによれば、ガーナ北部での奴隷狩りが活性化するのは 18 世紀半ば以降であるとされる(Der 1998: 7)。この時期に、ガーナ北部のダンゴバ王国とゴンジャ王国がアシャンティ王国の軍隊に敗れ、毎年、奴隷をアシャンティ王国に供給することが義務づけられた(ibid.: 9-11)。これによって、さらに北部に位置する「国家をもたない」諸民族が奴隷狩りの対象となった(ibid.: 7)。19 世紀に入ると、状況はより悪化する。19 世紀初頭に、現在のニジェールのニジェール川湾曲部東部出身のザバリマ(Zabarima)／ザベルマ(Zaberma)と呼ばれるムスリムの集団が、現在のガーナ北部に移住し、グルンシを対象に奴隷狩りを活発化するようになった(Wilks 1989: 103-105; Der 1998: 18-20)。

<sup>124</sup> このことは歴史の語りのなかでは語られなかったが、カラントオのジハードによって成立したボロモ、コーホ、ワッハーブ、ナヌーのイマーム、カラントオのジハードに共鳴していたサーニ、(のちに共鳴者がイマームとなった)ジナコンゴにおいては、世襲ではなく、学術の高さによって選出されると説明がなされ、他の村落(註 92 の表にある村落)においてはすべて世襲であった。

<sup>125</sup> ワッハーブでは外来者に対する土地の分配が土地の主ではなく、「村長」によってなされることがブルキナファソの土地制度に関する古典的な研究で指摘されている(Boutilier 1964: 161)。また、筆者の調査においても、ジハードによって成立したボロモ、コーホ、

の土地の主による土地の霊との供儀を通して共同体の維持を行なうという原理を変更させ、ムスリムによってのみ構成される空間を生み出したといえる。イマーム位世襲の慣行の廃止は、19 世紀初頭に生じていたサノゴの学統による革新(本章 3 節)と重なるものであり、その意味では、マフムードが思想的にサノゴの学統に連なっていたこと(Wilks 1989: 103)を裏付けるものである。

しかし、重要な点はこのようなことが口頭伝承ではまったく語られなかったことにあるだろう。これは、伝統的なタフシールのシルシラを有し、それに価値を認め、保存するというブッキッシュなマラブーのあり方が一般的でなかったことに拠る<sup>126</sup>。マラブーたちのあいだにあっても、数世代のちには、その学術的な刷新は語り継がれるほど重要なものとはならなかった(本章 4 節 2 項)。

ジハード勢力を越えたムブン川湾曲部のイスラームに与えた影響もまた、わずかなものであったと考えられる。デドゥグ管区におけるムスリムは 1970 年代まで少数派にとどまっており<sup>127</sup>、サファネとその周辺の村落におけるモスクの建立は 1960 年代頃から緩やかに伸び

---

ワッハーブ、ナヌーにおいては、土地の主が不在であることが確認された。

<sup>126</sup> 筆者による調査では、こうしたシルシラについて何ら情報を得ることができなかった。1950 年代にボロモでは、ウィルクスによって年代不明のシルシラが 4 つ収集されているが(Wilks 1968a: appendix I)、これらはカラントオを経由していない(ibid.: appendix I, 1989: 101)。また、ウィルクスによるムブン川湾曲部のイスラーム史についての記述では、ボボ・ジュラソのアル・ハジ・マルハバ・サノゴ(この人物については 9 章で言及する)からの聞き取りしか参照していない(Wilks 1968a, 1989, 2000)。穿った見方をすれば、1950 年代に、ウィルクスが再構成しようと試みていたイスラームの思想史的な側面に関心を抱くようなローカルな知識人がいなかったことを暗に示しているように思われる。さらにいえば、口頭伝承において、カラントオのジハード勢力に組していた子孫のあいだにおいてさえ、マフムードの修学先が一致していない。このことは、マフムードの学んだ学術的な伝統について、共通認識が生じるほどの社会的な重要性が与えられていなかったことを示している。一般論としていえば、世俗教育、イスラーム改革主義による近代的なアラビア語教育へのアクセスが一定程度可能になった現在において、伝統的な教授法に基づくイスラーム学の学習にそれほど大きな社会的な位置づけが与えられておらず、このこともまた、このような口頭伝承の現状を説明するだろう。

<sup>127</sup> 1977 年まではムスリムは 3 割ほどであったが、2006 年現在の統計ではムスリムが 6 割に達している。

1959 年と 1977 年のデドゥグ管区の宗教分布は以下(AHCD s.c. Rapport annuel du Cercle de Dedougou. 1959. ; AHCD s.c. Rapport politique annuel du Cercle de Dedougou. 1977.)。

	カトリック		ムスリム		プロテスタント		アニミスト		合計
1959年	1823	2.4%	15964	21.3%	527	0.7%	56722	75.6%	75036
1977年	5255	5.0%	33422	32.0%	2762	2.6%	62886	60.3%	104325

2006 年統計によるムブン湾曲部州全体の宗教分布は以下(Lougue et Zan 2009: 160 を基に筆者作成)。

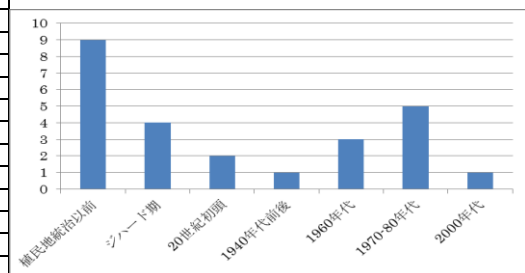
ている<sup>128</sup>。

		アニミスト		ムスリム		カトリック		プロテスタント		その他		無宗教		合計
ムブン州全体	都市	2949	2.4%	74242	60.9%	37140	30.5%	6422	5.3%	999	0.8%	171	0.1%	121923
	農村	213042	16.1%	822715	62.3%	218209	16.5%	57798	4.4%	4765	0.4%	4306	0.3%	1320826
	合計	215991	15.0%	896957	62.2%	255349	17.7%	64220	4.5%	5755	0.4%	4477	0.3%	1442749

<sup>128</sup> 聞き取りでは、近隣のマラブーから改宗を勧められたり、コートディヴォワールやガーナなどの出稼ぎ先で改宗して帰ってきてモスクを建てるようになったというような話が聞かれたが、ムスリムが急増するような運動や出来事、あるいは特定の年代などといったことはなかった。

サファネ周辺のモスクの建立年代については以下。

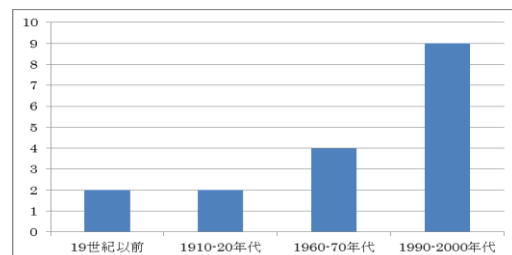
番号	村名称	現在のイマームのリネージ	最初のモスクの建造時期
1	Siou	Fofana	植民地以前
2	Biforo	Fofana	植民地以前
3	Bona	Kote	1970年代
4	Bara	Sanogo	植民地以前
5	Zinakongo	Sako	20世紀初頭
6	Da	Ira	1960年代
7	Sani	Cisse	植民地以前
8	Momina	Ira	1980年代
9	Datomo	Dao	植民地以前
10	Kokon	Bari(Fulbe)	2000年代
11	Ouahabou	Sanogo	19世紀半ば(ジハード時)
12	Koho	Konate	19世紀半ば(ジハード時)
13	Nanou	Sanogo	19世紀半ば(ジハード時)
14	Boromo	Dao	19世紀半ば(ジハード時)
15	Yankasso	Iye	1960年代
16	Banga	Dao	不明
17	Sin	Dao	植民地以前
18	Siralo	Fofana	植民地以前
19	Toton	-	なし
20	Nounou	Sako	20世紀初頭
21	Makongo	Sanogo	1940年代前後
22	Kongoso	Dissa	1980年代
23	Bilakongo	Nieme	1970-80年代
24	Kira	Sere	1970年代
25	Kona	Kaasha	不明
26	Tiekuy	Guira(Mossi)	1960年代
27	Karo	Dayo	植民地以前
28	Safane	Sako	植民地以前



筆者の調査ではムスリムの多い村や歴史的な出来事に関連する村を中心にまわったため、比較的古い村に偏っているが、それでも1960年代以降にモスクが多く建設されるようになっていった変化はみてとれるだろう。

また、サファネにおけるモスクの建立年代は以下。

通し番号	街区	建立者名	建立年
1	Masabe	Yaya Fofana	2004年
2	Masabe	Mousa Sere	1977年→2005年
3	Touwabe	Aboulay Bako	1998年
4	Touwabe	?	不明***
5	Kongoso	Taiyourou Kone	2009年
6	Sisarabe	Cisse	19世紀以前****
7	Sisarabe	Cisse	2013年
8	Sisarabe	Toure	不明****
9	Koinabe	Yakouba Dao	2009年
10	Buwabe	Aruijima Sakira	1973年
11	Buwabe	al-Hadj Noal Jakite	1998年
12	Sangorokina	Amadou Konate	1968年→2000年
13	Sangorokina	al-Rasina Omar Sako	1990年
14	Sangorokina	Sako?	2000年代?
15	Sangorokina	Al-Kati Sanogo	1920年→1998年→2012年
16	Bousabe	Abouna Traore	1910年代後半→1998年
17	Bousabe	N'Bi Sako	2011年
18	Bousabe	Mamadou Sako	1971年
19	*	Malik Sako	19世紀以前



\*サファネの大モスクで市場に隣接し、主要な街区の境界に位置している

\*\*「→」は建て替えを意味している

\*\*\*ワッハブ主義者のモスクで個人の邸宅の中庭にあるとされる

\*\*\*\*現在は放棄されている

この表からは20世紀以後に三つのエポックがあったことが推測される。1910-20年代、1960-70年代、1990-2000年代の変化である。サファネの土地の主であったセレがイスラ

ジハード以後に建立されたモスクのイマームのなかで、カラントオの勢力の土地で学んだイマームはジナコンゴを除いて皆無であった<sup>129</sup>。また、1920年代から1930年代のカラントオの勢力の(ボロモ、ワッハーブ、コーホの)マラブー37名の出生地はすべてこの勢力内部に限られていた<sup>130</sup>。つまり、カラントオのジハードによって成立した町や村のマラブーとその他のマラブーとのあいだには相互交流がほとんどなく、ムブン川湾曲部全体に与えた影響は限定的なものであったと考えられる。言い換えれば、カラントオのジハードはムブン川湾曲部全体としてのイスラーム化にはほとんど貢献しなかったといえる。

以上で検討してきたように、国家形成(政治)、長距離交易(経済)、イスラーム(宗教)はそれぞれゆるやかに関連し、カラントオのジハードに結実していた。それぞれの領域において、新秩序をもたらそうとする運動であった。その意味においては、ムブン川湾曲部に政治、経済、宗教の再編成をおこなうものであったと捉えることができる。他方で、これまで論じてきたように、それぞれの領域における変容は限定的、あるいは萌芽的な段階に留まっていた。そして、このことは、カラントオのジハードについての口頭伝承における差異の大きさや「歴史的人格」の不在と関連している。カラントオのジハードの意味がムブン川湾曲部全体において共有されておらず、口頭伝承から再構成される歴史的事実と口頭伝承の意味内容とが対応しているといえる。

---

ームに改宗したのが1910年代であるとされ、サノゴやトラオレといった新たにサファネに住み着くことになったマラブーたちがモスクを建設している。1960-70年代には、19世紀以前から定住し、のちに改宗した自由民のリネージであるセレやサッキラなどが自前のモスクを建てるようになった。1980年代が空白になっている理由はわからなかったが、1990年代以降、中東の資金援助によるモスク建設がおこなわれたり、教義的なイスラームには縁遠い者たちも改宗し、自分たちの街区にモスクを建てるようになってきている。この二つが1990年代以降のモスクの急増の要因であると推測される。

なお、これらは筆者による2013年8-10月の調査に基づく。

<sup>129</sup> この点は、註93に挙げた表の村での2013年8-10月の筆者の調査による。

<sup>130</sup> ANCI 5EE70(2) Fiches des renseignements sur marabouts du Cercle de Dedougou. ただし、一族の起源地が他のダフィンの村落(ヌーヌーとサファネ)であったマラブーが2名いた。



## 第2部 植民地統治の確立：植民地統治による政治・経済・宗教の変容

第2部では、主として1890年代から1930年代までの、オート・ヴォルタ植民地におけるフランスによる植民地統治について論じる。4章では、ムブン川湾曲部における軍人による探索から「平定」(pacification)、暴力の独占が生じるまでのプロセスを記述・分析し、植民地統治によって国家をもたない社会の政治がどのように変容したのかを明らかにする。5章では、主として行政機構と人頭税に着目しつつ、植民地統治以降に生じた経済の変容を論じる。6章では主としてカトリック宣教団の活動に焦点をあてて、植民地統治以降の宗教の条件がいかに形成され、その条件が間接的にイスラームに影響を与えたことを述べる。

### 4章 「国家をもたない社会」における「平定」と暴力の独占

4章では、ムブン川湾曲部におけるフランス軍の「平定」がどのように生じたのかを述べる。フランス軍は国家を標的とし、基本的には保護条約の制定、征服をおこなったが、すべての国家が保護条約を結んだわけではなく、征服を受けたわけでもなかった。また、「国家をもたない社会」に対しては、国家に相当する主体がなかったため、保護条約を無理やり創りあげたケースと何もしなかったケースがあった。さらに、国家の征服は比較的スムーズに進行したが、「国家をもたない社会」では困難を極めた。フランスは1899年にはムブン川湾曲部を軍管区の領土と把握し、征服は完了したと考えていたが、これはあくまでフランス側の見解に過ぎなかった。実際には、征服から植民地統治の成立までの過程は切れ目のない連続体となっており、それがいつ成立したのかは判断基準によって分かれるものである。本稿では、植民地行政による暴力の独占という点から、1916年のヴォルタ・バニ戦争の終結をもって、植民地統治が完全に成立したという立場をとる。

本章で論じるように、フランス軍の「平定」の過程は、広域の友・敵関係とローカルな友・敵関係のネットワークに依存しつつ、それらを利用しながら展開し、フランス軍自体が、友・敵関係の広範なネットワークを構成していくことになった。理念的にいえば、フランス軍は、自身と敵対関係にある勢力に対して敵対関係にある勢力、つまり、敵の敵を味方として、その味方の敵を敵として、「平定」を進めていった。言い換えれば、フランス軍の「平定」はフランス軍の友・敵関係のネットワークに組み込まれている勢力を対象として、進行することになった。したがって、「平定」は基本的にあくまでも友・敵関係のネットワークとその連鎖によって生じており、不均衡なものであった。ムブン川湾曲部では、ブセのアル・カリが「平定」の対象となり、ワッハーブのカランタオはその対象とならなかった。こう

した不均衡は、フランス軍の戦略的な判断というよりも、友-敵関係のネットワークに依存したために生じたといえる。

本章では、まず、「平定」のプロセスを探索期(1887-1892 年)、征服期(1894-1898 年)に分け、1 節では探索期のバンジェール、クローザ、モンテイユがそれぞれどのようなローカルな友-敵関係に規定されて、ムブン川湾曲部からワッハーブまでの探索を行なったのかを論じ、2 節では征服期の「平定」がどのように行われたのかを述べる。3 節では「平定」後からヴォルタ-バニ戦争までの経過をまとめ、「国家をもたない社会」における「平定」がどのように生じ、暴力の独占がいかになされたのかを論じる。4 節において、これらの記述を踏まえて、征服から植民地統治の確立によって、ムブン川湾曲部の政治体制がどのように変容したのかを明らかにする。

#### 4-1. 探索とローカルな政治関係

バンジェール、クローザ、モンテイユが、探索期(1887-1892 年)にムブン川湾曲部を通過し、それぞれ報告を残している。特に、バンジェールの旅行記(Binger 1892 t.I, t. II)はこの土地に足を踏み入れた初めてのヨーロッパ人であり、政治経済に関する情報が生き生きと描きこまれており、現在でも必ず参照される史料となっている。三者とも、未踏の土地の情報収集と保護条約の締結を目的として派遣された。この過程で、ローカルな友-敵関係とローカルな情報の不足に規定されながら、フランス軍はいかにローカルな勢力と関係を構築し(そこね)ていった。

まず、これらの使節が派遣された同時代の背景を概略しなければならないだろう。バンジェールが派遣される 1887 年までの同時代の政治経済状況の要点は三つある<sup>1</sup>。

---

<sup>1</sup> フランス国内の 1870 年代以降の植民地政策の転換については、ここでは検討しないが、地理学協会、サハラ横断鉄道計画が重要であろう。1870 年代以降の地理学協会の活動を通して、サハラ横断鉄道計画という構想が提示・普及され、内陸侵攻を後押しする探検調査が促進されたことであった (Brunschwig 1967: 175; Kanya-Forstner 1969: 60-66; d'Andurain 2012: 67-69)。地理学協会や協会の構成員がサハラ横断鉄道計画という構想を提示・普及させ、探検調査の資金提供や調査そのものをおこなったこと、植民地拡張のイデオロギーを内閣閣僚や国会議員が共有し、西アフリカもまた植民地拡張の対象に組みこまれていったことが特筆すべき点である (Kanya-Forstner 1969: 60-66; d'Andurain 2012: 67-69)。ガンベッタ首相が 1878 年以降のフランス本国の積極的な植民地拡張へと舵を切る政策転換をおこない (Ageron 1972)、1883-1894 年にかけてフェリー内閣の政務次官のフォーールが植民地省創設に奔走したこと (Blanchard 1955)、さらにフェリーに近い人物でやはり植民地拡張のイデオログであったアナトーの活動も重要である (Grupp 1971)。1870 年代以降、「植民地科学」のフランス高等教育への著作の刊行や制度化が進んでいったことも

第一に、フランス軍はニジェール川に内陸進出のための拠点を整備していた。具体的には、1879年から1883年までのあいだにニジェール川に至るまでの経路に——小国家との保護条約の締結やいくつかの戦闘を繰り返しながら——駐屯地をつくり(図4-1)、1880年にこの土地を支配するトゥクロール帝国との——フランス軍側は署名していないとする——友好条約を締結し、内陸進出のための足掛かりをつくっていた(シュレ=カナール 1987[1961]: 209, 212-213, 217; d'Andurain 2012: 72-74, 80-81)。

第二に、フランス軍は、これらの拠点の南に広く展開していたサモリ帝国と1886年に国境画定の条約を結び、サモリ帝国との交戦を一時的に回避していた(シュレ=カナール 1987: 218; d'Andurain 2012: 95-97)。

第三に、いわゆるアフリカ分割を定めたベルリン会議が1884年から1885年に行われた。ベルリン会議では、アフリカ内陸において、「沿岸部」の「後背地」に対して、先占(occupation)と保護条約によって「影響圏」(sphere of influence)を確立されることが合意された<sup>2</sup>。フランスはイギリスとドイツよりも先にできるだけ広範囲にわたる「影響圏」を獲得することを最大の目的となった。

つまり、トゥクロール帝国内の内陸進出のための拠点整備、サモリ帝国との交戦の配慮の除去がなされ、ベルリン会議以降に内陸にいち早く進出する必要性が生じていた<sup>3</sup>。こうしたなかで、ヴォルタ川流域についての情報収集と保護条約の締結を目的として、バンジェール、クローザ、モンテイユが派遣されたのである。

---

また見逃すことができない(Singaravélou 2011: chp1)。

<sup>2</sup> ベルリン会議と植民地主義との関係については、ベルリン会議以降の「後背地」概念の意義については d'Andurain 2012: 117-119; 「保護関係」、「先占」、「影響圏」の概念については許 2012: 63-86 を参照。

<sup>3</sup> このほかにも、フランス国内の政治事情があるが、この点についてはここでは論じない。

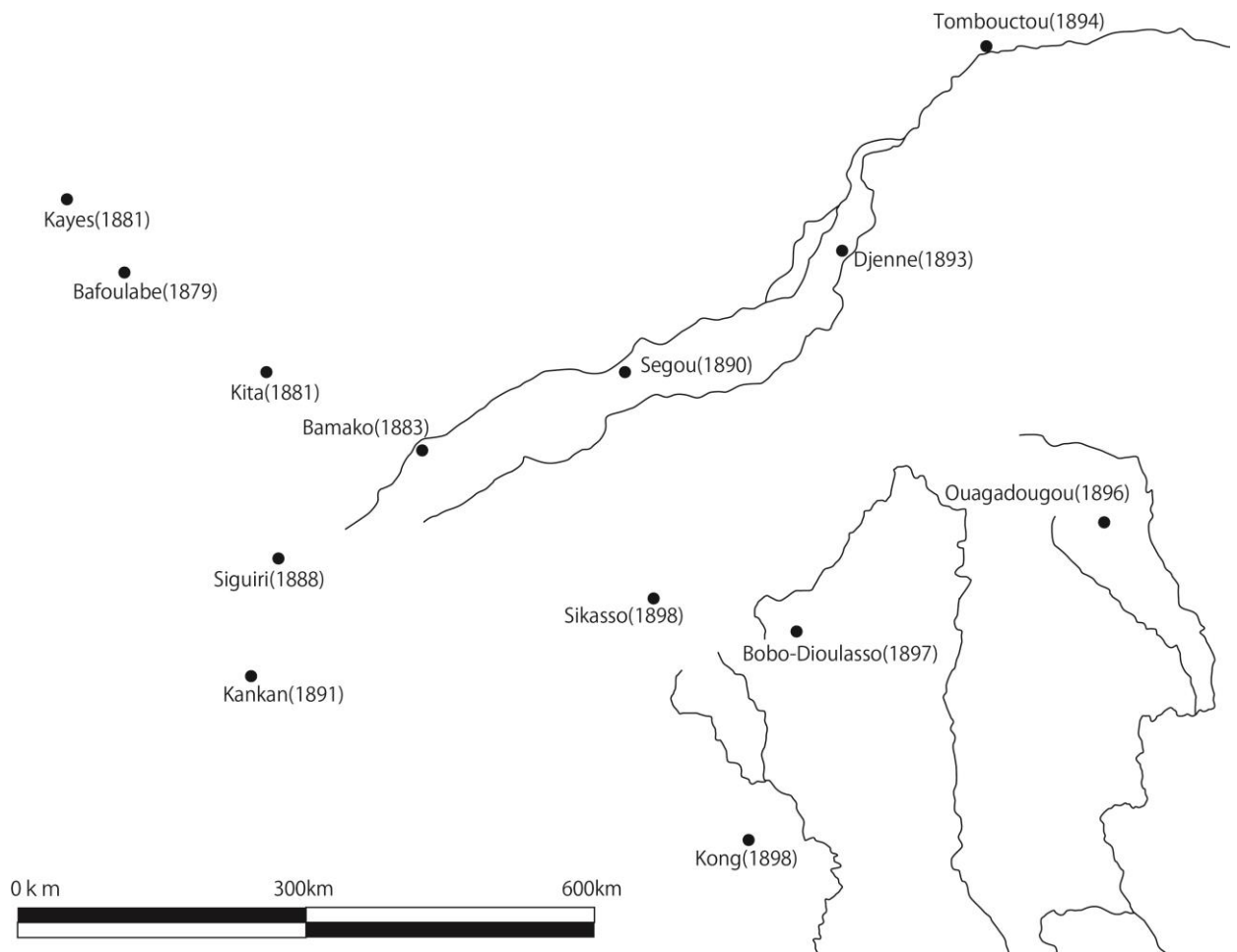


図 4-1. フランス軍の主要な駐在所とその設立年代

この当時、ムフン川湾曲部の周辺には、大小さまざまな国家が林立するようになっていた(図 4-2)。

まず、ティエバ・トラオレを国王とするシカソ王国が一定の影響力を有していた。シカソ王国は、19 世紀初頭にコンのトラオレがシカソに侵入したことに起源をもつ。このトラオレの王朝は内部に種々の勢力を抱え、基盤が脆弱であったため、ボボ・ジュラソのワタラ(いわゆるグイリコ(Gouiriko)王朝)の傀儡となりかけたが、ティエバ・トラオレが 1870 年代にトゥクロール帝国のアフマド王と同盟を結び、シカソ周辺を制圧し、ワタラの軍隊を排除することで、急速に勢力を拡大していた(Holmes 1977)。

つぎに、ムフン川湾曲部の北西部には、フルベのバラニ王国とドクイ王国が 19 世紀後半には成立していた。バラニ王国は 19 世紀以前からこの地に移住してきたフルベが水をめぐって先住者のブワと抗争後、国家を形成した。その後、王位の継承をめぐって、ディアン・

シディベ(Dian Sidibe)とウイディ・シディベ(Ouidi Sidibe)が対立し、ウイディはトゥクロール帝国と同盟を結び、バラニ王国の基盤を固めると、ディアンはドクイに逃げ、ドクイ王国をつくった(Diallo 1997)。

そして、ムフン川湾曲部の北部のブセ(Bousse)を中心に、アル・カリ(Al-Kari)ことアフマド・デメ(Ahmad Deme)がブセを中心に自らの支持者を集め、ジハードの準備を進めていた。彼はランフィエラのカラモコ・バ、ことママトゥ・サノゴから学んだ後に、1870年代にジェンネに遊学し、1880年代のマッカ巡礼を経て、ランフィエラのサノゴからは支持が得られなかったものの、ブセはランフィエラと並ぶ、この地におけるイスラームの中心地を形成しつつあった(Echenberg 1969)。

19世紀までには、現在のブルキナファソの領域に対応する地域では、大小さまざまな国家が成立していた。18世紀にボボ・ジュラソに侵攻してきたコンのワタラのグイリコ王国、カラントオのジハード国家であるワッハーブ、19世紀に現在のニジェールから移住し、征服・略奪を展開していたソンガイのザベルマ、モシの諸王国がひしめいていた(図4-2)。

こうした諸国が入り乱れるなかを、バンジェール、クローザ、モンティユはムフン川湾曲部を通過していった。

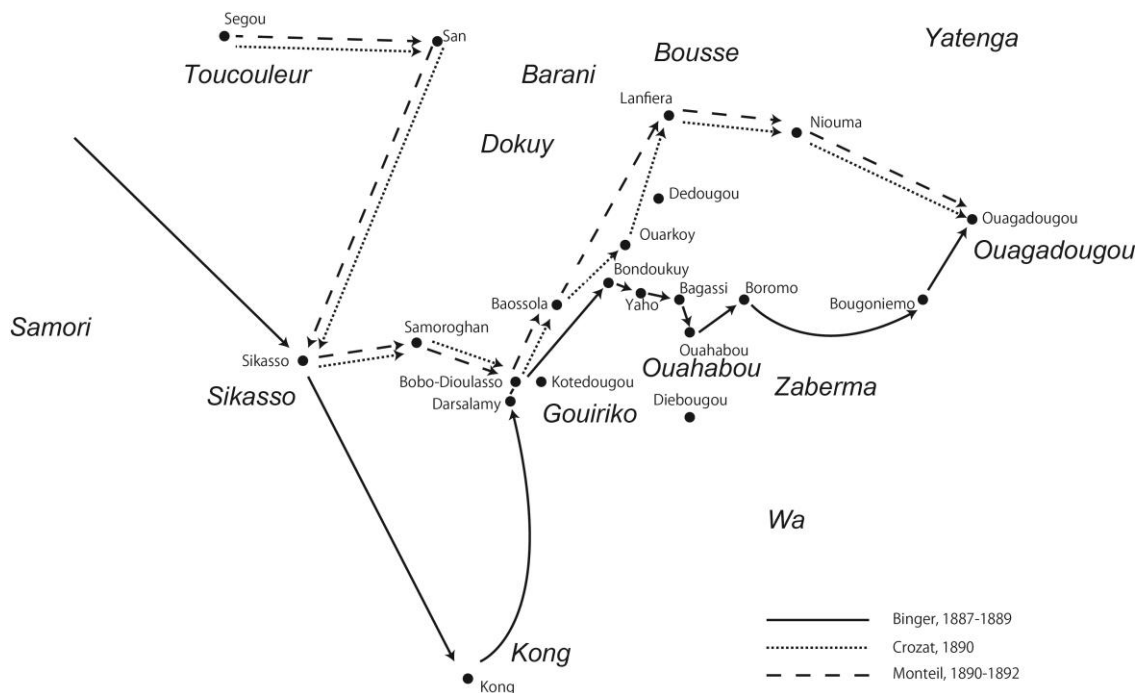


図 4-2. 探索期の各種の使節のワガドゥグまでの進路

バンジェールはサモリ帝国の領域を通して南下する必要があったため、フランス軍のサモリ宛の紹介状をもち、通行の許可を得ようとした(Binger 1892 t. I: 9, 25)。しかし、サモリからなかなか返事が得られず、一旦、バマコに帰還した後に、返事がもたらされ、シカソでバンジェールと会見することになり、バンジェールは、シカソを包囲していたサモリ軍の軍営のなかで通行許可を得た(ibid.: 43-44, 89)。その後、バンジェールはコンに向かい、コン王国の国王と謁見し、歓待を受ける(ibid.: 290-293)。

バンジェールによれば、コンの首長であるジャラワリ・ワタラ(Diarawary Ouattara)からは、以下のような説明を受けたという。「コンはすべての人に開かれた街であり、人びともまたそうである。だから、あなたがこの街をあなたの父の街だと考えることもできるし、望むだけ滞在することもできる…」(ibid.: 293)。しかし、バンジェールの到来以前にコンのマラブーたちのあいだではバンジェールを受け入れるかどうかについての議論があり(ibid.: 293)、コン国王のカラモコ・ウレ・ワタラ(Karamokho Oule Wattara)はバンジェールにサモリの密使ではないことを確認していた(ibid.: 292)。コン王国の有力者たちは迫りつつあるサモリ帝国との対抗手段の一つとしてフランス軍を把握し、バンジェールを好意的に迎え入れていたとも考えられるだろう。

ボボ・ジュラソでのバンジェールをめぐる対応は、より複雑なものであった。コンのムスリム商人たちとともに、バンジェールはボボ・ジュラソ付近のマラブーの村であるダール・サラミ<sup>4</sup>(Darsalamy)で歓迎を受けている(ibid.: 362)。ダールサラミからは、「カラモコ・ジャン(Kramokho-Dian)の兄弟」が「この地域で非常に高い評価を受けているという、首長の未亡人で、彼の姉であるギンビ(Guimbi)のところに私を連れて行く」ことになり、「彼女が、私の到着とともに、ボボの首長に私を必ずや紹介してくれる」ということになった(ibid.: 365)。後の到来者による記述では、バンジェールはギンビ・ワタラから歓待を

---

<sup>4</sup> ボボ・ジュラソ周辺の主要なマラブーの村の一つ。ダール・サラミの創設年代は諸説あるが 19 世紀半ばか後半ごろである(Werthmann 2008: 132)。1904 年の行政史料によれば、ダール・サラミは、ボボ・ジュラソにおけるイスラームの革新をおこしたとされるコン出身のジュラのサイード・サノゴ(Said Saganogho)の息子のカラモコ・サラバ・サノゴ(Karamokho Saraba Saganogho)によって、19 世紀半ばにつくられたとされる(Traoré 2012: 241)。ダール・サラミの創設の原因は、若干のニュアンスの差があるが、非ムスリムの祭礼に参加したサラバの子供が叩かれ、その顔に傷がつき、それをみた親が怒ってボボ・ジュラソから出てきた、というものである(Traoré 1984: 79-80; Werthmann 2008: 132; 2014/01/22 Darsalamy, al-Hadj Baforemori Sanogo(ダールサラミのモスクのイマームのオジ))。

うけたようであるが、バンジェールはギンビについてはそれ以降、ほとんど触れていない。実際のところ、ボボ・ジュラソに着いたバンジェールは、ボボ・ジュラソとその周辺の有力者との面会を拒絶された。こうした有力者には、ボボ・ジュラソの首長、グイリコ王朝のコテドゥグ<sup>5</sup>(Kotedougou)の王が含まれていた(ibid.: 376)。他方で、ボボ・ジュラソのイマームはバンジェールを見送り(ibid.: 378)、バンジェールはコロマ(Koroma)ではコロマの首長のセレル(Selelou)、ボソラ(Bossola)ではボソラの首長のマムル(Mamourou)から歓迎を受けている(ibid.: 395, 404)。

ギンビ・ワタラはコテドゥグを拠点としていたグイリコ王朝の先代の国王の娘で、正確には「首長の未亡人」ではなく、シデラドゥグ<sup>6</sup>(Sideradougou)のマラブーを夫とし、ボボ・ジュラソにおける独立したコンの代表者といった位置づけにあった人物であった(Hébert 1995)。ジュラの商人とマラブーの人脈に頼ったバンジェールがギンビを紹介されたことはある意味では当然の流れであったが、種々の有力者との面会を設定できなかったことはギンビの政治力の限界を示しているだろう。一方で、首長たちの対応の差異は、ボボ・ジュラソ周辺の政治的な立場の差異としても捉えることができる。バンジェールが面会を拒絶されたボボ・ジュラソの首長と、歓迎したセレルとマムルは、ボボ・ジュラソの始祖から

---

<sup>5</sup> コテドゥグはボボ・ジュラソに遠征に来たコンのジュラの軍隊が最初に駐屯した村であった。当初は、ボボ・ジュラソにはコンのジュラは住み着いていなかったが、後の時代にコテドゥグがボボ・ジュラソに移住し、ボボ・ジュラソ内のクンプグという街区を形成するようになった((2013/12/27 Kotedougou, Alfa Mousa Baafaga Diane(コテドゥグのモスクのイマーム).; 2013/12/16 Bobo-Dioulasso, al-Hadj Bakai Kassamba-Diabi(コーコ街区のカッサンバ・ジャビの第二モスクのイマーム); 2013/12/18 Bobo-Dioulasso, Bassourema Diane(コンブグ街区のワタラのモスクのイマーム))。

<sup>6</sup> ボボ・ジュラソ周辺の主要なマラブーの村の一つ。シデラドゥグはボボ・ジュラソの現在の大モスクの建設以前にモスクが建てられた数少ない村の一つであり、とくにワタラの軍隊が駐屯した村ではなかったが、先住者のティエフォとコンから来たジュラによって村が発展した(2014/01/23 Sideradougou, Baramousa Danyogo(シデラドゥグの土地の主); 2014/01/23 Sideradougou, Bagaoussou Traoré(シデラドゥグのトラオレのモスクのイマーム))。シデラドゥグには、コンからマラブーのトラオレが到来し、最初の小さなモスクを建て、その後、トンブクトゥからマラブーのトゥレをトラオレがトゥレのジャティギとして受け入れた(2014/01/23 Sideradougou, Bagaoussou Traoré(シデラドゥグのトラオレのモスクのイマーム); 2014/01/23 Sideradougou, Ahmad Toure (シデラドゥグのトゥレのモスクのイマーム))。シデラドゥグのトゥレによれば、トンブクトゥを出たあとに、ダールサラミに行ったのだが、ダールサラミにはすでにマラブーのサノゴとジャネがおり、別の村を探して、シデラドゥグにやってきた。ギンビ・ワタラの夫であったアル・ハジ・ムサ・トゥレの要請に応じて、植民地統治以前に、シデラドゥグに大モスクを建てたという(2014/01/23 Sideradougou, Ahmad Toure (シデラドゥグのトゥレのモスクのイマーム))。

分岐した、それぞれ異なるリネージを代表する存在であり(図 4-3)、内部に緊張関係を抱えていた(Saul 2011: 61-62)。

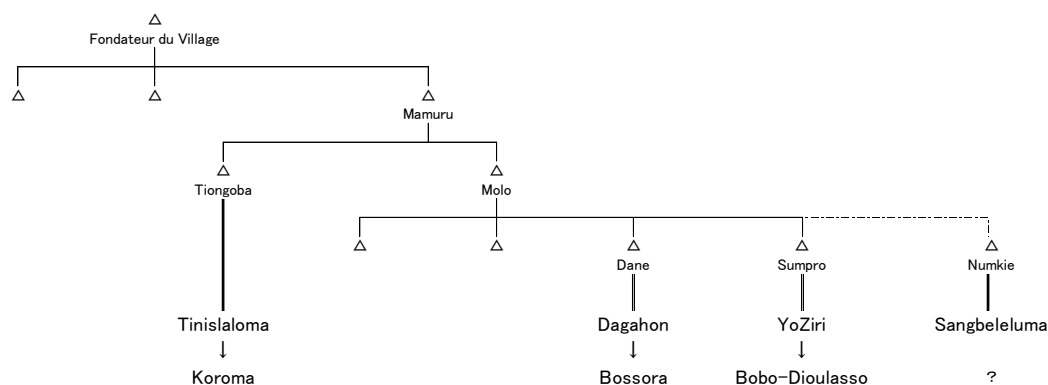


図 4-3. サヌ内部のリネージ分岐(Saul 2011: 51-53)

バンジェールはボッソラを発った後、ボンドゥクイに至る。ボンドゥクイでは、バンジェールの「宿主」(d'hôte)——おそらく、ボボ・ジュラソ、あるいはダールサラミのムスリム商人から紹介されたジャティギ<sup>7</sup>——であるドゥフィネ(Doufine)という人物に歓待を受ける(Binger 1892 t. I: 407)。バンジェールは「ボンドゥクイの連合の首長」(le chef de la confédération de Bondoukoi)と会見しているが、彼はドゥフィネが実際上の首長であるとしている(ibid.: 407)。バンジェールはドゥフィネの案内でワカラ(Ouakara)に到達し(ibid.: 409)、モシへと向かう進路を思案する。ワカラからモシへ至るには、四つのルートがあるという。すなわち、(1)バラニを通りマーシナへと至るルート<sup>8</sup>、(2)ブセを通りヤテンガに至るルート、(3)サファネあるいはトゥヌ(Tounou)を通るルート<sup>9</sup>、(4)ワッハブを通りワガドゥグへと至るルートである(ibid.: 410)。バンジェールは最後のルート以外のすべてを交通の安全上の点から退けている。(1)のルートはバラニ王国が征服の戦争をしているために、(2)のルートは途上にある村がバラニ王国の完全な支配に入っているかどうか不確かであるために、(3)のルートはサファネとトゥヌ<sup>10</sup>とのあいだの競合のために、危険であり、(4)のワ

<sup>7</sup> 他の町から来た親族や、知人、友人、あるいは未知の外来者に対して、保護と信用と安全を提供する慣習的な制度(坂井 2003: 132-133)。

<sup>8</sup> 正確には、マーシナに入った後に、トンブクトゥへと北上し、ワイグヤへと南下するルートである。

<sup>9</sup> 正確には、サファネを通り、ヤテンガを目指すルートである。

<sup>10</sup> このダフィンの村は特定できていない。



ッハーブを通ることに決めたのだという(ibid.: 384, 410)。これを聞いたジャティギのドゥフネは、彼自身がワッハーブの当時の王であったムフタール・カラントオをよく知っており、ワッハーブに行く案に賛同した(ibid.: 410)。そして、バンジェールはドゥフネの案内でヤホまでいき、ヤホの首長がバガシまでの道の安全を約束したところでわかれた(ibid.: 410)。バガシでは首長に会わず、そのまま、ワッハーブを目指し、ムフタールはバンジェールを歓迎し、ボロモまで送り(ibid.: 412, 418-419)、バンジェールはワガドゥグへと旅を続けていった。

興味深い点は、バンジェールの意向があったにせよ、ワッハーブとボボ・ジュラソを繋ぐ交易商人(あるいは、その仲介者の)ドゥフィネを頼って、そのルートをバンジェールが辿ったということである。本稿 3 章 4 節で述べたように、ヤホはムフタールと同盟関係にあり、バガシは敵対関係にあったが、前者ではバンジェールは首長と面会しているのに対して、後者では首長に会わず、ほとんど滞在しないまま、ワッハーブへと発っている。

1888 年のバンジェールのムフン川湾曲部の通過の 2 年後、1890 年、軍医のクローザが「仏領スーダンとモシとのあいだの友好関係を構築するために」(Crozat 1891a: 4797)、シカソを経由してモシのワガドゥグ王国に派遣された。シカソ王国は、バンジェールが通過した際に生じていたサモリ軍の包囲を退け、すでに 1888 年 6 月 18 日にフランスとのあいだの保護条約を締結し(de Card 1897: 142)、フランスと友好関係にあった。シカソ国王のティエバ・トラオレ(Tieba Traoré)は、シカソからサモハガン(Samohagan)までの通行を保障したほか、クローザの使節団のために案内人として、マッカ巡礼を果たし、バンジャガラにいた「アル・ハジ・ウスmana・クルバリ」(El-Hadj Ousmana Kourbari)を同行させることにした(Crozat 1891a: 4797)。シカソ国王のティエバ、「ウスmana」、ジュラ(の交易商人／マラブー)によって示唆された不安定な治安状況を踏まえて、クローザは、サモハガンからボボ・ジュラソ、ボボ・ジュラソからボッソラ、ワルコイ、ブセを通り、ワガドゥグに至る旅程を組んだ(ibid.: 4797)。特に、「ウスman」はブセのジハード勢力のアル・カリとマッカ巡礼の際に同行しており、友好的な関係を構築できることを保証していた(ibid.: 4797)。こうして、クローザはシカソを発って、ボボ・ジュラソに着いた。

ボボ・ジュラソでは、「バンジェールを迎え入れた」ギンビ・ワタラの邸宅に招かれ、歓待を受けた(ibid.: 4800)。ギンビはクローザにボボ・ジュラソを案内し、多くの人物に引き合せ、そのなかには、「村のイマームと首長」もいた(ibid.: 4800)。「イマームはコンから来たワタラに専属のマラブー」であり、「首長はサヌであり、ファマ[＝王]の実の兄弟」であ

るとしている(ibid.: 4800)。

バンジェールが会ったイマームと、クローザが会った「イマーム」は異なる人物であった可能性が高い。バンジェールは、ボボ・ジュラソを流れるウェ川の左岸に居住しているとしているが(Binger 1892 t. I: 366)、ここに住むイマームはボボ・ジュラソ出身でサノゴに学んだ後に、ジャに遊学し、アルファ・マーマ・カラベントに師事して帰還した、ボボ・ジュラのサキディ・サヌであった(中尾 2016a: 155, 159-160)。「コンから来たワタラに専属のマラブー」はウェ川の右岸のコンブグ街区に住む、ジュラのマラブーのジャネかサノゴであったと推測される<sup>11</sup>。

結論からいえば、クローザを迎え入れたギンビは自らの立場に近い人物を引き合わせていた可能性がある。実際のところ、ギンビはクローザをボッソラまで案内し、「ボボ・ジュラのすべての国の長である、ファマ・ママドゥ・サヌ(fama Mamadou Sanou)」に会い、「ファマ・ママドゥ・サヌ」は「ギンビの弟」であり、「ギンビはワタラではなく、彼女の母親がサヌであった」という(Crozat 1891a: 4800)。この「ママドゥ・サヌ」は、バンジェールがボッソラの首長として会った「マムル」(Binger 1892 t. I: 406)と同一人物であるが、「ファマ」(王)として紹介されている。また、ギンビの実際の母親はマコンゴ・ワタラであった(Hébert 1995: 509)。つまり、ギンビはボッソラのサヌの「ママドゥ」を「ボボ・ジュラの王」とし、自らをその後見役の地位におこうとしていた。クローザがこうしたギンビの操作をどこまで真実と受け止めていたのかは疑問があるが——そこまで影響力のある人物がバンジェールからまったく報告されていないことに疑念を抱いた可能性は十分にありえるが——、「影響圏」の確立のために、クローザもまた保護条約を結ぶ主体としての「ファマ」の存在を必要としており(Saul 2011: 62)、両者の利害が一致したものともみることができる。ともあれ、クローザは「ママドゥ」の案内で、頻繁に略奪がおこるとされる道を通して、ワルコイに達した(Crozat 1891a: 4800-4801)。

ワルコイは当時、バラニの影響下にあり、自主的な賦役がバラニに対して行われていた(Crozat 1891b: 4806)。クローザはワルコイで、ブセのアル・カリについての悪い噂を聞く(ibid.: 4807)。これまで彼が耳にしていたのは、高い見識をもち、歓待を好む、白人に対しても開かれた人物であったが、ワルコイでは野心を抱き、傲慢不遜の人物として語られて

---

<sup>11</sup> コンブグ街区には、植民地統治以前にコンのワタラのために建てられたモスクがあり、ワタラに専属のマラブーであるジャネとサノゴが交互にイマームとなっている(2013/12/18 Bobo-Dioulasso, Bassourema Diane(コンブグ街区のワタラのモスクのイマーム))。

いた(ibid.: 4807)。こうした噂にもかかわらず、クローザは当初の予定を変更せず、ブセを目指したが(ibid.: 4807)、その途上で、この地域で非常に影響力をもつとされるランフィエラに寄ることを人びとに進められ、ランフィエラとブセが非常に良い関係であるという話も聞いたため、クローザはランフィエラに立ち寄り、イマームの「マフマドゥ・サラモオ」(Mahmadou Saramoho)と会見する(Crozat 1891c: 4820)。彼は通称カラモコ・バ、ママドゥ・サノゴという高名なマラブーでジェンネに遊学後、ランフィエラに新たなモスクを建設した人物であった(Echenberg 1969: 538)。ブセのアル・カリもまた、彼の下で学んでいたため(ibid.: 538)、クローザが聞いた話もあながち虚偽であったわけではない。クローザもまた、ママドゥ・サノゴの見識の高さに感嘆している(Crozat 1891c: 4820)。クローザはランフィエラに泊まり、ブセのアル・カリに会見を請う書簡を出した(ibid.: 4820)。しかし、その返事は冷淡なものであった。アル・カリは会見を拒否した(ibid.: 4820)。クローザは何度か書簡を出したが、アル・カリの態度は変わらず、結局、ランフィエラのママドゥ・サノゴがワガドゥグまでの案内人を手配することになった(ibid.: 4821)。

「サラコロ[サノゴ]は一連の出来事の展開について残念そうであった。「これは、白人を受け入れ、白人の旅を世話した私への侮辱です」と彼は言った。実際のところ、ランフィエラとブセの二人のイマーム[ランフィエラのママドゥ・サノゴとブセのアル・カリ]のあいだにはひそかな敵意があった」(ibid.: 4821)。そもそも、ランフィエラのママドゥ・サノゴはアル・カリのジハードを批判し、それに参与していなかった(Echenberg 1969)。クローザはランフィエラに立ち寄らなければ、ブセでアル・カリに謁見することができたのではないかと考えたが、そのようなこともありえなかったと結論付けた(Crozat 1891c: 4821)。マッカ巡礼でアル・カリと同行したという「アル・ハジ・ウスマナ・クルバリ」が彼の書簡をアル・カリに手渡したものの拒絶され、「アル・ハジ・ウスマナ」は、アル・カリについてクルアーンを忘れ、非ムスリムとともにありふれたことをなしているに過ぎないと断罪していることをとりあげ、アル・カリの拒絶は「狂信」(un fanatisme)なのだとクローザは書いている(ibid.: 4821)。

まとめれば、クローザはランフィエラとブセのあいだにある敵対関係を事前に察知できず、その結果、当初から計画されていたブセのアル・カリとの会見という任務を達成できなかった。バラニの影響下にあったワルコイでのアル・カリに対する噂を流した人びと、ランフィエラに立ち寄ることを勧めた人びとに、ブセとフランスとの同盟を妨害しようとする意図があったのかどうか、あるいは、ランフィエラのママドゥ・サノゴがランフィエ

ラに立ち寄るように仕組ませていたのかどうか、数か月後にほとんど同じ経路を辿ったモンテユの報告によればランフィエラのママドゥ・サノゴはバラニ王国との同盟を結んでいたことを踏まえると、そうした策謀があった可能性は否定できない。ともあれ、ママドゥ・サノゴはクローザをランフィエラに引き止めさせ、結果的に、ランフィエラからアル・カリへの書簡を出させていることは動かない事実である。クローザ、ママドゥ・サノゴ、アル・カリの三者のなかで、交渉の主導権を常に握っていたのはママドゥ・サノゴであった。つまり、クローザは、結果的に、ボボ・ジュラソではギンビの、ランフィエラではママドゥ・サノゴの思惑通りに立ち回っていたのである。

モンテユはニジェール川中流域から、ヴォルタ川上流域を通過し、チャド湖からチュニスへと至る使節団として派遣された。その目的は、特にイギリスとの植民地における国境画定のための保護条約の締結にあり、バンジェール、クローザとは異なり、積極的に保護条約の締結を行なった。

モンテユは、クローザと同様に、シカソを通り、国王はケネドゥグ王国の国境までの案内人をつけさせた(Monteil 1895: 57)。この案内人とともに、ケネドゥグ王国の国境にあたるサモロガン(Samoroghan)に至る(ibid.: 73)。サモロガンでは「[ケネドゥグ国王の]ティエバの義理の兄弟」であるシタファ(Sitafa)に会い、バンソ(Banso)を通過し、「ジュフルマ(Dioufourma)」に到着し、「コンの長である、カラモコ・ウレ・ワタラの兄弟」であり、ジュフルマの首長である人物から歓迎を受ける(ibid.: 78)。そして、モンテユは、ボボ・ジュラソへと到達し、「ジュフルマ(Dioufourma)のファマ[王]の姉妹であるギンビ」の邸宅に滞在することになる(ibid.: 82)。

しかし、「ボボ・ジュラソでの滞在は、親切なギンビの歓迎のおかげで、すべての関係を回復させるものになるはずであったが、反対に様々なトラブルの連続によって特徴づけられることになった」(ibid.: 85)。まず、「村長」と面会したが、彼の態度は冷淡であった(ibid.: 85)。翌日、イマームがモンテユのもとに訪れた(ibid.: 85)。モンテユは、クローザからこの人物が保護条約の締結に横やりを入れてきた人物であるとし、警戒するように忠告を受けていたとしている(ibid.: 85-86)。このイマームはおそらくクローザが面会しなかったサキディ・サヌを指しているものと思われる。モンテユはイマームを「表面的に歓迎した」(ibid.: 86)。「ブスラで条約の準備をしていることはいわずに、マラブー(読み書きのできるムスリム)がいなかったので、私は贈物として紙を数枚渡した。彼[イマーム]は私に対する呪力のあるグリグリを準備するために使うに違いない」(ibid.: 86)とモンテユは書いてい

る。

モンテイユは、ギンビと「彼の夫」などの家族に見送られて、「ギンビの甥」を案内人として、ブスラに出発した(ibid.: 92)。ブスラの直前のDougou-Biramaで、「ファマ・マフマドゥ・サヌ」に到着を知らせる使節を送り、ここで「ファマの兄弟のセル(Selou)」と出会い、セルもまた、同行することになった。この人物は、バンジェールがボボ・ジュラソを脱した後に会った「コロマの首長のセレル」であり、ボボ・ジュラソの首長とは異なるリネージのサヌである(Saul 2011: 62, 図 4-3)。ここで「セル」はモンテイユにケネドゥグ王国の脅威を訴え、モンテイユはフランスとボボ・ジュラの「ファマ」が同盟を結ぶことでケネドゥグ王国から攻撃を受けることはないだろうと諭している(Monteil 1895: 93)。そして、ブスラに至り、保護条約が締結された(ibid.: 93, 97)。この保護条約では、ブスラの村長は、「ボボ・ジュラのファマ、ボボ・ジュラソとブスラの首長(le chef)」(Kambou-Ferrand 1993b: annex 3)となっている。ブスラの村長が「ボボ・ジュラのファマ」であるというギンビの主張をモンテイユがどこまで本気で信じていたのかは不明であるが、ブスラの村長が「ボボ・ジュラソの首長」であるということはモンテイユ自身の著作の記述と矛盾している。ここには、この保護条約によって、ボボ・ジュラソもまた「影響圏」に入れようとするモンテイユの思惑が率直に現れている。モンテイユの側からすれば、ブスラの村長が「ボボ・ジュラのファマ」ではないことを知ったうえで、保護条約を結んだのである。

モンテイユはブワとダフィンの村々を通り、ランフィエラに達し、イマームのママドゥ・サノゴと面会した。モンテイユは早朝にランフィエラに着いたのだが(Monteil 1895: 109)、午後には保護条約の作成に取り掛かっていた(ibid.: 113)。ただし、イマームは二つの点を要求した。一つはダクル(Dakourou)村の土地の主<sup>12</sup>を締結の主体にすること、二つ目は条約の効力の範囲をダクル村だけではなくすべてのダフィンにすることを要求したとされる(ibid.: 113)。そして、これらは実際の条約の訳文(Kambou-Ferrand 1993b: annex 4)に反映されている。イマームのママドゥ・サノゴは、1890年にフランス軍によって擁立させられたトゥクロール帝国のアフマドゥに対してあらゆるトゥクロールが離脱していることを述べたり、こうしたアフマドゥに対するモンテイユの見解を質したり、センガンビアのママドゥ・ラミンについて意見を述べていた(Monteil 1895: 114)。つまり、ママドゥ・サノゴは

---

<sup>12</sup> 条約の文章では、mansakie となっているが(Kambou-Ferrand 1993b: annex 4)、masakie の誤記である。この地域のダフィン語の masakie は土地の主を指す。

西アフリカ内陸の広域の情勢やフランス軍の進駐についての情報をかなり正確に把握していた。

他方で、モンテユは著作では言及していないのだが、ランフィエラからの書簡で、ランフィエラの北部のスルー盆地で展開していたトゥクロール帝国に対して、バラニ王国とダフィンの共同による排除の動きがあり、この動きの主導者がランフィエラのママドゥ・サノゴであると述べている(Kambou-Ferrand 1993b: 43)。モンテユとしては、ママドゥ・サノゴがランフィエラ周辺でママドゥ・サノゴが安定した権力基盤を確立しようとしていること、おそらくそのためにフランス軍を利用しようとしていることは承知したうえで、保護条約を結んだのであろう。しかし、モンテユの交渉時点ではすでにブセのアル・カリとは交渉の伝手はなく、そもそもクローザが到来した際に、フランス軍を味方につけようと画策したママドゥ・サノゴの思惑通りにすべてことが運んだともみることができるだろう。

以上のように、バンジェール、クローザ、モンテユは、それぞれローカルな政治状況に依存しつつ、旅を行ない、関係を構築していった。彼らの意志はあくまでも彼の依存した仲介者の政治的な立場の範囲内で反映され、ボボ・ジュラソの首長や大半の有力者、ブセのアル・カリとは関係を構築することができなかった。モンテユは通過した地域で保護条約を締結するという最低限度の目標を達成したが、特定の戦略のなかで交渉先を選択したというよりも、恣意的で偶発的な選択の結果として、さらにいえば、フランスの使節と仲介者双方の騙し合いの結果として、特定の勢力との友好関係を樹立したといえる。そして、このような恣意的で偶発的な選択の結果を前提として、征服が進行していったのである。

#### 4-2. 「空白地」における「平定」

モンテユによる「ボボ・ジュラ」、「ダフィン」とのそれぞれの保護条約によって、フランス軍のムフン川湾曲部における当面の目的は、一定程度、達成されていたと評価できるだろう。

端的にいえば、バンジェール、クローザ、モンテユにとって、あるいは、イギリス、ドイツにとっても、モシのワガドゥグ王国に比べれば、ムフン川湾曲部はそれほど重要性が高くなかった。すでに述べたとおり、ベルリン会議以降、沿岸部からの「後背地」を可能な限り拡張させることが最大の目的となり、英仏独の植民地の境界線となりうる地域は、

ムブン川湾曲部の南部と東部——現在のブルキナファソの南部と東部の国境線——にあった。具体的には、モシのワガドゥグ王国には、フランスからは、前節で検討した、1888年のバンジェール、1890年のクローザ、1891年のモンティユが訪れていたが、ドイツは1886年にクラウス(Krause)(Kambou-Ferrand 1993b: 25-27)、1888年にフォン・フランツ(von Francois)(ibid.: 27-29)、イギリスは1894年にファーガソン(Ferguson)(ibid.: 67)が探索と保護条約の締結を目的として来訪していた。したがって、ムブン川湾曲部におけるフランス軍の「平定」は、積極的なものというよりも、副次的なものであった。

「平定」の直接的な要因は、ブセのアル・カリのジハードに起因する。モンティユがランフィエラを去ってから約1年後の1892年5月末、アル・カリはジハードを敢行し、周辺のサモの村々に攻撃を行っていた(Echenberg 1969: 550-551)。しかし、他方で、このジハードにおいても、サモの村々の同盟関係が機能し、特に、カミナ(Kamina)、スールー(Sourou)、ガッサン(Gassan)が抵抗の拠点となり、ジハード勢力の襲撃を退けていた(ibid.: 551-552)。本稿3章でとりあげたカラントオのジハードと大きく異なる点は、アル・カリがジハードを起こした、スールー盆地(la vallée/bassin du Sourou)と呼ばれる地域では、他の国家の侵略を受け、すでに略奪が繰り返されていたことであった。このことが連鎖的にフランス軍の介入を招来させる要因となる。

19世紀後半には、トゥクロール帝国とバラニ王国は、一部に奴隷売買のためのエージェントとなる有力者のネットワークを構築していた(Hubbell 2001: 33-34)。19世紀半ば、バンジャガラ出身のクナジェ・ウォニ(Kunage Wonni)が、トゥクロール帝国の始祖のアル・ハジ・オマルの息子のティジャーニーの援助を受け、奴隷をバンジャガラへと送る集積地として、スールー盆地のディ(Di)村を用い、この村の村長となっていた<sup>13</sup>。バラニ王国のウイディは、スールー盆地とニジェール川中流域とのあいだの交易商人であったニョロ出身のベレ・ジボ(Bere Djibo)、あるいはベレ・シセ(Bere Cissé)はクニ(Koungny)に拠点を有し、ウイディと頻繁に面会していたとされる<sup>14</sup>。エシェンベルグが指摘するように、アル・カリのジハードは、こうして外部から「収益」をあげる周辺諸国への対抗という意味もあったのであろう(Echenberg 1969: 540)。

ジハードが生じると、ジハード勢力から攻撃を受けたスールー村の村長のリネージの出

<sup>13</sup> Hubbell 2001: 33-34; CNABF 27V10 Fiche du renseignement concernant le nomme Sule Drame, le 27 janvier 1918.

<sup>14</sup> Hubbell 2001: 34; CNABF 225 Fiche du renseignement concernant le nomme Mody Cissé.

身者であるクル・バンホロ(Kourou Banhoro)がアル・カリの軍隊を打ち負かすための援助を要請し、ウイディは軍を派遣した(Hubbell 2001: 34-35)。1893年4月、トゥクロール帝国のアフマドがフランス軍によって退位させられ、アギブ(Aguibou)が同年5月に後継者として擁立された(Saint-Martin 1968: 172)後に、アギブは1894年3月、軍隊とともにウスマン・オマル(Ousman Oumar)を派遣し<sup>15</sup>、バラニ王国の軍と協同して、サモへの略奪をおこない、ルタに拠点を築き、近隣の村の村長であったコニアン・ゾン(Konian Zon)をルタの村長と「管区長」に任命した<sup>16</sup>。そして、アル・カリの軍隊と対峙し、敗退を喫したアギブの軍隊は、フランス軍の支援を要請し、1894年5月にバンジャガラに駐屯していたフランス軍の小部隊が派遣された<sup>17</sup>。しかし、この部隊もアル・カリの軍隊に敗北した<sup>18</sup>。こうした事態を受けて、あるいは、すでに民政に移行していたバンジャガラでの統治のなかで出世のための手柄を欲した軍人の意図によって(Echenberg 1969: 554)、同年6月に大砲と騎兵隊を有するフランス軍の部隊が派遣され、7月にはブセの破壊とアル・カリのジハード

---

<sup>15</sup> エシェンベルグはウスマンのほかにダウダ・ングイロ(Dauda Nguiro)の名前を挙げているが(Echenberg 1969: 553)、典拠を明示していない。

<sup>16</sup> Hubbell 2001: 33; CNABF 27V11 Fiche du renseignement concernant le nomme Konian Zon, chef de caton de Louta, le 14 avril 1919. ; ANOM FM SOUD/V/3 Rapport du capitaine Bonaccorsi, 27 juillet 1894. フッベルは、1921年のデドゥグ管区の年次報告書、1950年代のトゥーガンのモノグラフ・電信を用いて、「コニア・ゾン(Konia Zon)とアギブのあいだの同盟(alliance)」があり、この「同盟」が「1890年代のスールー盆地のフランスの到来に先立っていたと可能性が非常に高い」としている(Hubbell 2001: 33)。なお、フッベルの用いた史料はデドゥグとトゥーガンの高等弁務官事務所の未整理史料である。筆者はデドゥグの高等弁務官事務所の史料室を調査したが、同じ史料を確認することはできず、トゥーガンの高等弁務官事務所では史料調査を拒否されたため、やはり確認することができなかった。そのため、フッベルのいうところの「同盟」が何を意味しているのか、不明であるが、ここで用いた史料で書かれている内容と重なるものと推測される。

なお、トゥクロール帝国がいつ頃、どのようにスールー盆地に拠点を形成したのかについてはやや情報が混乱しており、別の機会で整理が必要とされる。たとえば、トゥクロール帝国の成立と1893年のアフマド王の退位までを扱った研究では、ルタについての言及がないが(Oloruntimehin 1972)、カンブ＝フェランは「ルタの首長位(la chefferie)はマーシナのトゥクロールのヴォルタ地域での冒険の結果である。1865年に、ティジャーニ・タルがスールー地方への統治を拡張させたとき、トゥクロールのソファ[軍隊]のウスマン・ウマルを、スールー盆地のなかのダガレ(Dagale)にあるルタにおいて、サモとドゴンの住民を再編させた地域の統治者として任命した」(Kambou-Ferrand 1993b: 174)と典拠を示さずに書いている。あるいは、後のルタの王の養子であったハンパテ・バの自伝によれば、1864年のアル・ハジ・ウマルの死後、ルタの支配権はウスマン・ウマルに任されたとされており(Bâ 1991: 68)、アル・ハジ・ウマルの時代にはすでにルタに拠点があったとしている。

<sup>17</sup> ANOM FM SOUD/V/3 Rapport du capitaine Bonaccorsi, le 27 juillet 1894. ; Gatelet 1901: 353.

<sup>18</sup> ANOM FM SOUD/V/3 Rapport du capitaine Bonaccorsi, le 27 juillet 1894. ; Gatelet 1901: 353.



勢力の排除が完遂された<sup>19</sup>。

つまり、ブセのアル・カリに対するフランス軍の「平定」は、計画的に行われたわけではなく、諸国家の領域拡張、あるいは奴隷狩りの拠点敷設の運動に連動して生じたものであった。実際のところ、この「平定」によって、スールー盆地におけるバラニ王国とトゥクロール帝国の覇権が確立され、奴隷狩りがさらに横行するようになった。たとえば、前述のバラニ王国に援助を求めたスールー村のクル・バンホロは、この「平定」後に奴隷売買のブローカーとしてサモのあいだでは悪名を馳せ(Hubbell 2001: 35)、アギブの派遣した軍隊に所属していたセグー出身のサイドゥ・アマドゥ(Saydu Amadu)は、奴隷狩りの部隊を組織し、バンジャガラとヤテンガのあいだで奴隷の取引を行なった人物としてフッベルが調査を行った 1990 年当時でもその名が知られていた(ibid.: 34)。1886 年 1 月 1 日の仏領スーダンの月間報告では、「サモの国」(le pays des Samo)では、「北はアギブ、南はウイディ」という二つの権威が権限をもっているとされ、「アギブの代理人」であるウスマン・オマルは食料を徴収し、ウイディの勢力化にあったワルコイやボンドウクイの人びとによる略奪が相次いでいることが述べられている<sup>20</sup>。

このような状態のなかで、1896 年の乾季に、トゥクロールとバラニに対するサモの村々による蜂起が生じた。同年 9 月、トゥクロール帝国のウスマン・オマルはブセから 25km のマラ(Mara)村の住人からの攻撃を受け、アギブは軍隊を派遣し、この村を焼き払った<sup>21</sup>。11 月初めには、この年からワガドゥグへの侵攻を試み、ワイグヤに駐屯していたフランス軍のヴァレ(Valet)の部隊への補給を目的として行軍していたバラニのウイディとその一行はガッサン(Gassan)村の住民からの襲撃を受け、スールー村で包囲された(Gatelet 1901: 348; Kambou-Ferrand 1993b: 128, 177)。11 月 11 日、この連絡を受けたワイグヤに駐屯していたフランス軍の部隊がスールー村へ急行した(ibid.: 128)。この部隊は、行軍の途上で襲撃を受けたウレ(Oule)村、ボレ(Bore)村での戦闘を経て、16 日、ガッサン村を破壊し、その後、ウレ村、ボレ村も同様に破壊した(ibid.: 129-130)。そして、24 日、ヴァレはランフィエラに向かい、このサモの蜂起を扇動したことを理由とし、ランフィエラのカラモコ・

---

<sup>19</sup> ANOM FM SOUD/V/3 Rapport du capitaine Bonaccorsi, le 27 juillet 1894.: Gatelet 1901 : 353-354.

<sup>20</sup> ANOM FM SOUD/I/7 Rapport sur la situation politique du Soudan français au 1er janvier 1896.

<sup>21</sup> ANOM FM SOUD/I/10 Rapport sur la situation politique du Soudan français au 1er octobre 1896.

バこと、ママドゥ・サノゴを拘束し、処刑した<sup>22</sup>。

カラモコ・バの関与については、報告者の得ていた情報、立場、思惑の差異を丁寧に検証すべきであるが、詳細の検討は別の機会に譲ることにしよう。まばらな史料から明らかになっていることは、ウイディがスールー村で包囲される数日前の10月1日時点でフランス軍の一部にカラモコ・バによる扇動が原因であるという認識をもっており<sup>23</sup>、特に同年7月から展開していた、アミドゥ・コラド(Hamidou-Kolado)によるバンジャガラ(Dakol)のハベ(Habes)の蜂起と連動していた可能性も疑われていたということである<sup>24</sup>。さらに、ウイディから得た情報として、当時のフランス軍の最大の敵対国であったサモリとカラモコ・バのあいだに密約があったという報告もなされている(Kambou-Ferrand 1993b: 130)。こうした史料の情報については、このような広域の外交が存在した蓋然性が高いという解釈(Saul and Royer 2001: 66)や、フランス軍を利用しカラモコ・バを陥れ、覇権を確立しようとするウイディの戦略、あるいはカラモコ・バを保護し、利用しようとしていた、フランス軍のデステナーヴ(Destenave)とヴァレとのあいだの駆け引きや特殊の状況におかれていた軍人の偏執的な思考の結果という解釈も提示されている(Kambou-Ferrand 1993b: 130-131)。いずれにせよ、少なくともいえることは、バラニのウイディはカラモコ・バを擁護しなかったということである。両者は1896年時点では敵対的な関係にあったことは間違いないだろう。

もっとも、カラモコ・バの拘束は事態を急変させることはなかった。1897年1月1日の仏領スーダンの月間報告には、ウイディに対する扇動は「改善された」が、トゥクロールのウスマン・オマルに対する排撃の扇動は継続していると記されている<sup>25</sup>。このような事態を受けて、同年1月8日、バンジャガラのフランス軍の部隊が、「ダカ」(Daka)という人物の指揮下にあるカレマンゲル(Karemangel)村、スンバラ・ブンバ(Soumabara-Boumba)村、ヤバ(Yaba)村への遠征を開始し、2月10日にはいずれの村への攻撃を完了した(Gatelet 1901: 356-357)。しかし、2月20日付の文書では、ウイディのおかれた状況は非常に厳しく、反乱状態にあるスールー盆地のすべての勢力にとりかこまれており、バラニへの救出

<sup>22</sup> ANOM FM SOUD/III/3 Lettre du Lieutenant Voulet au gouverneur du Dahomey et dépendances, Billanga- Gourma, le 20 février 1897.

<sup>23</sup> ANOM FM SOUD/I/10 Rapport sur la situation politique du Soudan français au 1er novembre 1896.

<sup>24</sup> ANOM FM SOUD/III/3 Boucle du Niger. Occupation et organisation. Création de la région et Macina, 1897-1898. ; Gatelet 1901: 354; Kambou-Ferrand 1993b: 130.

<sup>25</sup> ANOM FM SOUD/I/10 Rapport sur la situation politique du Soudan français au 1er janvier 1897.

のための遠征を継続する旨が書かれている<sup>26</sup>。この遠征の詳細は不明であるが、1897 年以降も断続的にフランス軍によるサモへの遠征がなされていたと推測できる<sup>27</sup>。

このサモの蜂起で注目すべきは、サモの村々の同盟関係が機能したと推測される点である(Saul and Royer 2001: 65, 67)。スールー村の包囲を解きに向かったヴァレの部隊は複数の村々から攻撃を受け、さらに、ガッサン村への攻撃の際には、近隣の村からの参加者がいたことが報告されている(Kambou-Ferrand 1993b: 128-130)。また、年明けの二度目の遠征の際にも、「ダカ」という人物の下に複数の村が協働していたとされている(Gatelet 1901: 356-357)。

他方で、サモの村々も一枚岩ではなかった。アル・カリのジハードに対抗したスールー村とガッサン村は、それぞれ別の陣営に組し、戦うことになり、両者の敵対関係は後の時代にまで継続された(Saul and Royer 2001: 67)。また、バラニと同盟関係を構築したスールー村だけではなく、遠征の際にフランス軍の案内を務め、後に郡長(カントン長)となった村長もあった<sup>28</sup>。

こうした状況は、本稿 2 章、3 章で論じてきた、国家をもたない社会における戦争のあり方とほとんど変わらないものである。これまでの戦争の形態とは異なる点は、村の組織的な破壊を伴う懲罰・示威的な軍事行動である。ヴァレはウイディを救出しただけではなく、その過程で交戦した村々を懲罰的に破壊している。また、二度目の遠征は、「特に敵意を示していた」(Gatelet 1901: 356)村々への攻撃を目的として行われ、懲罰的、あるいは示威的なものであった。

1897 年 4 月に行われたムフン川湾曲部のマサラへの攻撃は、まさに懲罰・示威的な軍事行動であった。バラニのウイディの協力のもと、フランス軍のユゴーは 1897 年 4 月 19 日にスールー盆地のソノ(Sono)村を破壊し、この村に駐屯所を設置した(Hugot 1901a: 305)。さらに、ユゴーは南への交通路を確保し、ワルコイ、ワッハーブ、ボボ・ジュラソ、コフェラ<sup>29</sup>(Kofela)に駐屯所を建設することを構想した(ibid.: 306)。そして、同年 4 月 23 日、ユ

---

<sup>26</sup> ANOM FM SOUD/III/3 Lettre du Lieutenant Voulet au gouverneur du Dahomey et dépendances, Billanga- Gourma, le 20 février 1897.

<sup>27</sup> この時期のスールー盆地で活動していた軍人であるユゴー(Hugot)の 1897 年 4 月の書簡(Hugot 1901a: 305)には、ソノ(Sono)村への攻撃のほか、名前を挙げていないものの、複数の「反乱を起こした」村々への「破壊」がなされたことが書かれている。

<sup>28</sup> CNABF 27V10 Fiche du renseignement concernant le nomme Mory Dion Drabo, le 7 février 1925.

<sup>29</sup> 所在地不明。

ゴーは「我々の通行を阻害するために」、「少なくとも 11 の村々の戦士が集結した」ボボのマサラ村を攻撃した(ibid.: 306)。ユゴーの表現では、この戦闘は「教育的なもの」(le pédagogique)であり(Kambou-Ferrand 1993b: 218)、「盗賊・略奪者」である「ボボ」<sup>30</sup>に対して「課されたレッスン」であった(Hugot 1901b: 340)。つまり、ムブン川湾曲部の「平定」は、駐屯所の整備とともに、懲罰・示威的な軍事行動によって達成されるとフランス軍側は考え、その通りに実行された。しかし、実際には、この「レッスン」はそれほど「教育的なもの」とはならなかった。ムブン川湾曲部ではデドゥグがフランス側につくことを表明することに留まり<sup>31</sup>、1897 年の仏領スーダンの年次報告書では、ワッハーブに至るまでのあらゆる住民がフランス軍に対して敵意をもっていると報告されている(Kambou-Ferrand 1993b: 218)。

こうした懲罰・示威的な軍事行動に並行して、ワッハーブとの保護条約の締結が行なわれた。1897 年 4 月 11 日にランフィエラを発ったカゼマジユ(Cazemajou)は、バラニのウイディの軍の護衛と案内のもと、衝突を避け、慎重にワッハーブに到達し、マサラへの攻撃が開始される日の前日となった 4 月 22 日に、ワッハーブのマフムード・カラントオの後継者のムフタール・カラントオと保護条約を締結した(ibid.: 219)。

このスムーズな保護条約の締結の背景には、2 つの点でワッハーブにとって条件のよいものであったことがあるだろう。第一に、フランス軍との交戦の準備を進めていたマサラはまさにマフムードのジハードと敵対した代表的な中核村の一つであり、敵対勢力の弱体化はムフタールにとって好都合であったと考えられる。また、スールー盆地において、フランス軍と同盟を結び、勢力の拡張を成功させたバラニ王国の事情はすでにムフタールの知るところとなっていたであろう。フランス軍を勢力拡張のための有益な同盟相手としてムフタールが捉えたことは想像に難くない。実際のところ、ボロモに駐屯するようになったフランスの軍人による報告によれば、保護条約を結んだ 1897 年 11 月にはムフタールがバガシとポンポイに対してボロモに駐屯している軍隊で攻撃を行なうように執拗に何度も要請していた<sup>32</sup>。

---

<sup>30</sup> ここでは民族としてのブワを指している。

<sup>31</sup> このことと通行上の利便性から、デドゥグにはのちに管区(セルクル)の拠点が置かれることになる。

<sup>32</sup> ヌーナ・デドゥグ教会区資料室(Archives du diocèse de Nouna-Dedougou)に所蔵されている、ダカールのセネガル国立公文書館所蔵史料の写しによる。この文書の冒頭には "Archives de Dakar 15G204 n.572 du 19/11/97." とタイプされている。

第二に、1897年には、サモリの大規模な軍隊が、現在のコートディヴォワール北部からガーナ北部の一部にかけて大規模な征服＝移住を展開しており、サモリへの対抗手段としてフランス軍を確保しようとするのはごく自然な発想であったであろう。1897年5月13日、ユゴーはカゼマジュからの書簡を受け取る。この書簡には、「ディエブグとボボ・ジュラソのジュラたちが私[カゼマジュ]に、マルカ[ダフィン]、コン、ボボ・ジュラソ、サティ、コフェラ、ディエブグなどのすべての地域が多かれ少なかれ直接的にサモリの支配下に入るだろうと語っていた」ことが記されていた(Hugot 1901b: 340)。つまり、広域のネットワークを生かして、情報を入手し、情勢の変化を注視していたジュラの長距離交易商人たちは、サモリの脅威が身近に迫っており、サモリの軍隊に対しては勝ち目がないと認識していたのである。大国の脅威を前に、小国のワッハブがフランス軍を味方につけておこうとするのは当然のことであった。

ジュラの商人たちの情報網はかなり正確で迅速なものであったのだろう。サモリの軍隊がコンへの攻撃と破壊を行なったのは1897年5月18日であった(Person 1975: 1880)。そして、同年6月初めにはサモリの軍隊はボボ・ジュラソを標的として北上し、6月半ばにボボ・ジュラソから南に約30kmのシデラドゥグに戦闘をおこなわずに駐屯した(ibid.: 1881)。シデラドゥグの当時のイマームは、ギンビ・ワタラの夫であるアル・ハジ・ムサ・トゥレ(Al-Hadji Mousa Toure)であり<sup>33</sup>、一部の口頭伝承ではギンビは個人的にサモリに使者を送っていたとされており(Hébert 1958: 391)、サモリの到来以前にシデラドゥグではすでに無血開城が決していた可能性がある。

サモリは戦闘を行なわずシデラドゥグに一月ほど駐屯し、各地の自軍をシデラドゥグに集中させようとしていた(Person 1975: 1882-1884)。この時期にシデラドゥグのサモリにボボ・ジュラソの大モスクのイマームであるサキディ・サヌの息子が使者として送られ、相当量の金と若い女性とともに、ボボ・ジュラソへの侵攻を思いとどまるように書かれたイマームからの手紙が手渡された<sup>34</sup>。また、ボボ・ジュラソの首長のゼルロ・サヌの使者と

---

<sup>33</sup> 2014/01/23 Sideradougou, Ahmad Toure (シデラドゥグのトゥレのモスクのイマーム)。

<sup>34</sup> ペルソン(Person 1975: 1884)の表記では、サキディはSagediとなっており、その「息子」はMamuru-Gwena Traoréとなっている。サキディのクラン名はサヌであるため、使者の名称、あるいは「息子」という情報のいずれかが誤っている。なお、ボボ・ジュラソの大モスクのイマームの口頭伝承では、サキディ・サヌがモスクで礼拝している際にサモリが来訪し、モスクのなかでサキディの説得を受けて、サモリが軍隊を引き揚げたとされ(2013/12/10 Bobo-Dioulasso, Siaka Sanou(ボボ・ジュラソの大モスクのイマーム))、あるいは、サモリとサキディが修学先のジャでともに学んだためにサモリがボボ・ジュラソに

してギンビもまたシデラドゥグを訪れ、15頭のウマを贈り、抵抗の意志がないことを伝えている(ibid.: 1884)。

他方で、ボボ・ジュラソから南に 20km ほどのヌムンダラでは、この地域の先住者であるティエフォのアモロ(Amoro)だけがサモリへの抗戦を主張していたため(Hébert 1958: 396)、一部の口頭伝承では、ギンビはボボ・ジュラソの意向に背いたアモロを攻撃するようにサモリに提言したともいわれている(Person 1975: 1884)。このことが事実かどうかは別として、ヌムンダラで大規模な戦闘があったことは確かなことである。1897年7月半ば、サモリはヌムンダラに侵攻し、戦闘の後に「伝説的な」大虐殺が行われた(ibid.: 1884-1885)。

ヌムンダラの戦いに勝利し、すでにイマームのサキディとギンビによってサモリの軍隊のための駐屯地もボボ・ジュラソに用意されていたが、サモリはボボ・ジュラソに入ることはなかった(ibid.: 1885)。これ以上フランス軍を刺激することは適切ではないとサモリは判断し、大量の軍勢を引き連れて現在のコートディヴォワール北部のブナ(Bouna)へと向かった(ibid.: 1885)。

フランス軍によるボボ・ジュラソの「平定」は意外なかたちで生じることとなった。コテドゥグのコンのジュラの長であったピンティエバ・ワタラ(Pintyeba Watara)が、「ワタラ帝国の長」として、ロルホソ(Lorhoso)に駐屯していたフランス軍のコドレリエール(Caudrelier)に面会し、ボボ・ジュラソがサモリによって占領されたため、救援を求めに来たのである<sup>35</sup>。1897年9月17日、コドレリエールは部隊とともにロルホソを発ち、9月25日、ボボ・ジュラソでの戦闘が生じた(Person 1975: 1914; Kambou-Ferrand 1993b: 238-239)。戦闘の発端については諸説あるが、ギンビなどのコンのワタラを含む一部の住民はフランス軍を迎え入れ、一部の住民は防衛の構えをすでにみせ、戦闘があり、大モスクのイマームであったサキディ・サヌを含む多くの住民の死者が出た、ということは確かなことである。そして、この2か月後、ボボ・ジュラソにフランス軍の駐在所が設置されることとなった。

---

来訪したとされるが(2013/12/14 Bobo-Dioulasso, al-Haji Banourou Sanogo(コンブグ街区のサノゴのモスクのイマームの弟))、これらは明白にサモリの名声・威信をサキディに付与させようとするものである。

<sup>35</sup> Person 1975: 1914に基づく。ペルソンによれば、ピンティエバは彼の父であるコトコ(Kotoko)の使者であったとされる(ibid.: 1914)。なお、カンブ＝フェランは、この人物をティエバ・ニャンダレ(Tieba Niandare)としているが(Kambou-Ferrand 1993b: 238)、ティエバ・ニャンダレはピンティエバの後継者の人名である(Saul and Royer 2001: 81)。ただし、ディエググに向かったとされる人物はピンティエバ以外にも異伝があり(たとえば、Sidibe 1927: 56)、詳細な検討を要するが、これは別の機会としたい。

ボボ・ジュラソの「平定」は、それ以前にまったく表舞台に現われることがなかったピンティエバという人物の策略によって特徴づけられる。ピエンティエバが一体何者であったのかはよくわかっていない。ボボ・ジュラソ周辺のコンのワタラの重要な居住地の一つであったコテドゥグ<sup>36</sup>の首長(Kambou-Ferrand 1993b: 238)、あるいはその息子(Person 1975: 1914)とされるが、ピエンティバ、あるいはその父とされるコトコという名は、1888年のバンジェールの記述にあるコテドゥグの首長の人名(Binger 1892 t. I: 326)とは異なっている。初期の探索期やサモリの到来時の出来事にも、ピンティエバは登場しないことから、コンのジュラの有力者の一人ではあったものの、ボボ・ジュラソの政治の中心から外れていたことが推測される。実際のところ、ピンティエバが、フランス軍を利用し、混乱に乗じて自らの勢力を拡張させようとした意図があったことは明らかである。1897年12月23日にこの地域を訪れた軍人の報告によれば、ボボ・ジュラソの「平定」後の3か月間に、ピンティエバはボボ・ジュラソ周辺で軍事遠征をおこない、拠点をバランケレンダガに移していた(Person 1975: 1919)。

征服期に生じたことがどのようなものであったのか。全体としての特徴は4つある。第一に、「平定」は戦略的・計画的に行われたものではなかった。すでに述べたように、「平定」には重要となった地域とそうではなかった地域があった。重要な地域は、植民地の国境が不確定となりうる地域であり、現在のブルキナファソの東部から南部にかけての国境付近である。特に、ワガドゥグ王国とその周辺は、ちょうど英仏独の植民地の境界線となる地域であり、フランス軍の関心はそこに集中していた。そのため、ムフン川湾曲部は計画的な「平定」がなされなかった。

第二に、「平定」の完了が不明確なものであった。このことにはいくつかの要因が指摘できるだろう。まず、村々の同盟やイマームといった国家以外の主体がローカルな影響力をもち、意思決定の主体がフランス軍側には明確に把握されていなかった。探索期において締結した保護条約は「平定」の過程ではほとんどまったく意味をなさなかったことは、このことの例証となっているだろう。つまり、探索期に「発見」された特定地域内の意思決定の主体としての条約の締結相手は、「平定」の過程で特定の地域全体に実効的な影響力を発揮する人物とはなっていなかった。そのため、結果的にボボ・ジュラソ周辺やランフィ

---

<sup>36</sup> 2013/12/18 Bobo-Dioulasso, Bassourema Diane(コンブグ街区のワタラのモスクのイマーム); 2013/12/27 Kotedougou, Alfa Mousa Baafaga Diane(コテドゥグのモスクのイマーム).

エラ周辺で締結した保護条約は何ら実効的な影響力をもたなかった。

つぎに、サモの蜂起後に一定程度、フランス軍内部で意識化された懲罰・示威的な軍事行動にみられたように、国家という主体に比して、村々の同盟は特定の指導者の殺害や特定の村の破壊では消滅しなかった。可変的で、ゆるやかな中心性を持った同盟関係は、一度、いくつかの村々が破壊されただけでは、またすぐに再構成された。国王や王都といった特定の中心がない場合、懲罰・示威的な軍事行動をとらざるを得なくなったが、こうした懲罰・示威的な軍事行動によって劇的に事態が変化することもなかった。

言い換えれば、「平定」の完了が不明確なものとなったことは、国家をもたない社会であるがゆえの事態であった。そして、結果的には、そのことは「国家に抗するシステム」として機能したといえる。

第三に、「平定」の過程やその状況は非常に複雑なものであった。本章のこれまでの記述には、重要性の違いをもった村名や人名が多数登場し、即座に状況を理解することは困難なものとなっている。このことは、程度の差はあれ、フランス軍にとっても同様であったと考えられる。誰がキーマンであるのか、どこの村が中心的な存在であるのか、こうしたことを特定の状況下で思考しつつ、あるいはその思考を放棄しつつ、「平定」は進行していた。実際のところ、フランス軍にとって、首尾一貫した主体として理解できたのは、トゥクロールやバラニ、ワッハーブ、アル・カリといった国家的な主体をもつ勢力であったと想定される。

こうした理解の形式は、これまで引用してきた史料のなかから看取することができるだろう。これまで用いてきた各種の報告書は、特定地域の情報を蓄積・集約するものとして利用されてきた。こうした報告書では、「バラニのウイディ」、「トゥクロールのアギブ」あるいは「トゥクロールのウスマン・オマル」、「ワッハーブのムフタール」、「アル・カリ」といった固有名が一貫した主体として記述されている一方で、蜂起を生じさせた集団は「ボボ」（正確にはブワ）、「サモ」という民族名に、特定の村々の名前が言及されている<sup>37</sup>。これらの記述では、国家としての固有名、あるいは国家の代表＝表象(representation)としての個人の固有名の主体に関する知識はタグ付けされ、その態度を一貫した情報として認識・把握可能なものとなる。そして、こうした主体の行動は比較的わかりやすいものとなって

---

<sup>37</sup> たとえば、ANOM FM SOUD/I/10 Rapport sur la situation politique du Soudan français au 1er novembre 1896.; ANOM FM SOUD/III/3 Boucle du Niger. Occupation et organisation. Création de la région et Macina, 1897-1898. ; Gatelet 1901: 354; Hugot 1901a: 305 を参照。



いる。たとえば、バラニは一貫してフランス軍に協力的であり、アル・カリは一貫して敵対していた。これらに対するフランス軍の対応も一貫したものとなり、またこれらの主体のフランス軍に対する態度も一貫したものであった。

しかし、政治的な立場も異なり、場合によってはその立場が変更される数多くの村々は、民族名か、特定の村の名前でしか言及されず、村々の同盟という単位で記述、理解されることはなかった。また、こうした村々の集合的な運動は、一人の特定個人の意思の反映として理解される傾向にあった。たとえば、サモの蜂起の際のカラモコ・バの処刑では——実際にカラモコ・バが関与したかどうかは別として——カラモコ・バという一人の個人が運動を扇動した主体として把握されており、その後のサモの蜂起においては、「ダカ」という特定の一人の個人が蜂起の主体として把握されている。そして、そのような理解は——部分的に正しかったことはありうるにせよ——あまり妥当なものとはいえなかった。こうした特定の個人の殺害をもって、事態が沈静化することはなかったからである。

第四に、「平定」の過程は、基本的には、国家である主体との友・敵関係の連鎖によって進んでいくことになった。スールー盆地におけるアル・カリの「平定」、サモの蜂起の「平定」、ボボ・ジュラソの「平定」は、こうした連鎖が生じたものであった。アル・カリに対する「平定」は、すでにフランス軍と(少なくとも、スールー盆地における軍事的な意味においては)友好的な関係にあったトゥクロールとバラニに対するアル・カリの攻撃に端を発している。つまり、アル・カリは「友」の敵となった。サモの蜂起の「平定」もまた、「友」である——この場合は、補給線が寸断されたという軍事上の緊急事態であったが——バラニのウイディが包囲されたことに起因している。ボボ・ジュラソの事例は、「サモリに占領されたボボ・ジュラソの救援」という名目でボボ・ジュラソに部隊が進軍することになったため、サモリという敵ないしは仮想敵に対する攻撃が「平定」の直接的な要因であったということができるだろう。言い換えれば、フランス軍の能動的な選択というよりも、既存のフランス軍との友・敵関係のネットワークを前提として、ローカルな主体の能動的な動きに対して、フランス軍は受動的に振る舞っていった結果として「平定」が行なわれたのである。

そして、この「平定」(pacification)は、決して「平和にする」(pacifier)ものではなかった。次節でみるように、村々の蜂起は継続してなされ、国家による奴隷狩りや略奪も並行して行われていた。「平定」の過程がそうであったように、ムブン川湾曲部が第二軍管区に編成された 1898 年段階においても、ムブン川湾曲部には、いくつかの駐屯所が点在し、フ

ランス軍の部隊が配置されているという状況は変わらず、友好的な関係にあった諸国家といくつかの村々とフランス軍との同盟関係が成立しているという状況におかれていた。言い換えれば、フランス植民地と宣言された地域は、実際には、同盟者との共同統治ないしは二重統治の状態にあった。あるいは、フランス軍が卓越した軍事力をもっていたわけではなく——装備という点では圧倒的に優越していたが、その全体的な規模や展開のための能力という点では卓越しておらず——ローカルな同盟国の軍事力に大きく依存していた<sup>38</sup>。そのような意味において、植民地統治の成立はどこかの時点に特定できるものではなく、征服開始からの連続体となっていたといえるだろう。

次節では、このような二重統治の状態から、植民地行政が 1915 年から 1916 年まで起こされたヴォルタ・バニ戦争を経て暴力の独占を確立するまでの過程を概観する。

#### 4-3. ヴォルタ・バニ戦争と暴力の独占

1899 年から 1915 年にかけてのムフン川湾曲部に関する史料は非常に限定的なものとなっている。このことには 2 つの要因がある。第一に、「平定」の過程では、各部隊が遠征の際に報告を発しており、これがそれ以降と比較して整理・保存されていたが、それ以降はこうした報告がほとんどなされなくなった。このことは、「平定」の過程のなかで、個別地域と広域の情報が軍事的に重要視されていたことに拠るだろう。しかし、おおまかな「平定」が完了したとみなされたのち、あるいは、サモリ・トゥレの捕縛によって英仏独の植民地の国境線がおおまかに確定した(と考えられた)1899 年以降、こうした各部隊の遠征の報告がなされなくなった。第二に、ムフン川湾曲部が 1899 年に第二軍管区に移行されると、月間／年間報告のなかでの言及、あるいは保存されている軍管区の月間／年間報告そのものが減少することになった。

---

<sup>38</sup> 詳細な検討は別稿に譲るが、たとえば、ムフン川湾曲部でのフランス軍の軍事行動は、ボボ・ジュラソに対するものを除けば、基本的に、バラニのウイディの軍隊とともに行っている。また、ワガドゥグへの遠征の兵站を支えていたのは、トゥクロールのアギブとバラニのウイディの軍隊であった。次節でとりあげるヴォルタ・バニ戦争においても、バラニのウイディやワガドゥグのモシ王国の軍隊はフランス軍と軍事行動を共にしている。また、フランス軍側についた村々はヴォルタ・バニ戦争のフランス軍の反撃の拠点を提供することになり、ボロモやワッハーブの住民の一部は戦争に直接参加するか、後方支援に参加している。こうした同盟、ないしは支援がなければ、フランス軍は十分に軍隊を展開することはできなかったであろう。さらにいえば、そもそもフランス軍の主力は元奴隷などの西アフリカ内陸出身者によって構成されており、ほとんど西アフリカ内陸の諸力に依存して行動を行っていたといえる。

やや煩雑になるため、行政区分の変遷の詳細とその検討は別の機会に譲るが<sup>39</sup>、1899 年 10 月に仏領スーダン植民地はいくつかの管区を周辺植民地に割譲し、そのうえで残った領域をモヤン・ニジェール(le Moyen-Niger)植民地とオー・セネガル(l'Haut-Sénégal)植民地に分割したのちに、1902 年にセネガンビア・ニジェール(la Ségambie et Niger)植民地に統合され、1904 年にオー・セネガル・ニジェール植民地に改称された。1899 年 10 月の仏領スーダン植民地の分割の際に、第一軍管区(le premier territoire militaire)と第二軍管区(le second territoire militaire)が構成された。第二軍管区はサン、ワガドゥグ、レオ、クリ、シカソ、ボボ・ジュラソ、ディエブグといった、いわゆるヴォルタ地域(la région Volta)を含んでいたが、1904 年にオー・セネガル・ニジェール植民地に再編された。

植民地、あるいは軍管区といった上位の行政区分だけではなく、それよりも下位の行政区分もまた、細かな変遷をたどっているが、ここでは 1899 年以降の変遷について簡潔にまとめておこう。1899 年 9 月までの仏領スーダン植民地では、ムフン川湾曲部はさきに言及した「ヴォルタ地域」という単位で把握され<sup>40</sup>、1899 年 10 月以降の第二軍管区では、クリ、ボボ・ジュラソなどといった——民政の仏領西アフリカ植民地における管区(le cercle)に相当する——単位で把握された<sup>41</sup>。1904 年に第二軍管区がオー・セネガル・ニジェール植民

---

<sup>39</sup> この段落の以下の記述は、Gouvernement général de l'Afrique occidentale française 1904: 1-2, 8, 9, 15-16 に基づく。ただし、記述の内容がやや曖昧であり、他の史料との照合が必要とされる。

<sup>40</sup> たとえば、ANOM FM AOF/I/6 Rapport politique au 1er février 1899 de Soudan français.; ANOM FM SOUD/I/10 Rapport sur la situation politique du Soudan français au 1er mai 1899.

<sup>41</sup> ただし、クリやボボ・ジュラソ以外の単位の呼称には変遷がみられるようである。たとえば、のちにガワ(Gaoua)管区となる地域は、第二軍管区の 1900 年 2 月の月間報告では、「ロビ」(Lobi)という民族呼称——正確には、複数のエスニック・グループをおおまかに一括した集合的な呼称——で言及されている(ANOM 14miom/1618 Rapport politique de 2eme territoire militaire, février 1900)。このように、のちに管区となる地域は、この「ロビ」のような民族呼称が採用される場合もあれば、クリやボボ・ジュラソといった主要な駐在所の位置する町の呼称が採用される場合もあった。つまり、こうした地域の呼称と分類法は、必ずしも、ラース(une race、種族／民族／人種)という統一的な基準でおこなわれているわけではなかった。このような植民地行政の認知地図、あるいは統治における集合的な認知については、「民族」の歴史的な構築という側面だけではなかったことは確かである。たとえば、「ロビ」は当該地域の住人全体を指すことで当該地域を指示しているが、「クリ」や「ボボ・ジュラソ」は当該地域の一つの町をインデックスとすることによって当該地域を指示している。こうしたことは、それぞれの地域の民族の同質性というよりも、地域内部の国家、あるいは国家に準ずると考えられる勢力が複数存在することによって説明されるように思われる。「ロビ」には、国家に相当する勢力がなく、「クリ」にはワッハーブやバラニ、トゥクロールといった国家が複数存在していたからである。このことは、「ワイグヤ」や「ワガドゥグ」といった地域の単位と比較すると明瞭である。「ワ

地に編入されると、スールー盆地の一部およびデドゥグ周辺、ワッハーブ周辺はクリ管区、ボボ・ジュラソ周辺はボボ・ジュラソ管区として構成されるようになった(図 4-5)<sup>42</sup>。その後、1910年にクリ管区は管区の拠点をデドゥグに移し、デドゥグ管区と改称された<sup>43</sup>。

---

イグヤ」や「ワガドゥグ」もまた、一つの町をインデックスとして地域全体を指示しているともいいうるが、これらは一つの国家でもあり、「ワイグヤ」や「ワガドゥグ」は国家の呼称としてもフランス軍に用いられており、国家ごとに地域が設定されていえる。つまり、国家という単位が、植民地行政の認知地図、統治における集合的な認知を構成する原理となっていた。統治における集合的な認知に関する研究はこれまで主として「民族」の歴史的・政治的な構築として論じられてきたが(たとえば、Amselle et M'Bokolo 1985)、おそらく「民族」、「国家」、「地名」などといった位階の異なるカテゴリーを、独自の形で行政の階層的な単位に変換し、集合的な主体を構成し、情報を整理し、介入をおこなっていったこととして論じうるように思われる。このことも重要な論点ではあるが、詳細な検討は別の機会に譲る。

<sup>42</sup> ANOM 14miom/1050 Lettre du commandant le Cercle de Bobo-Dioulasso au Lieutenant-gouverneur du Haut-Sénégal et Niger, le 13 juin 1905.; ANOM 14miom/1049 Analyse : Instructions générales, Kayes, le 21 janvier 1905.ワッハーブ、あるいはボロモ周辺の位置づけ、スールー盆地北部のルタ、ボボ・ジュラソ管区とクリ管区の境界領域の位置づけは細かな変遷をたどっているが、この点については煩雑になるため、ここでは検討しない。

<sup>43</sup> AHCD s.c. Projet de transfer du centre administratif du Cercle de Koury à Dedougou, le 24 décembre 1909.



図 4-5. 1904 年から 1918 年までのオー・セネガル・ニジェール植民地の行政区分 (Meunier-Nikiema 2008 : figure 3)

前節で述べたように、西アフリカ内陸地域への「平定」は主として、仏領スーダン植民地からの領土拡張として展開した。したがって、その仏領スーダン植民地の解体と植民地行政体系の再編は、フランス側にとっては「平定」期が終わり、「平定」した領域に植民地の行政機構を導入することを意味するものであった<sup>44</sup>。すでにたびたび指摘しているが、こ

<sup>44</sup> もちろん、この点についても精査が必要であるが、別の主題となるため、ここでは論じない。

れはフランス側が一方的にそのように認識し、一方的に行政機構を導入したということであり、実際のところ、「平定」は完了していなかった。依然として、フランス軍は在地の勢力に依存し、いくつかの点在する駐在所をもち、それぞれの駐在所に小隊を配置させている存在に過ぎなかった。結論からいえば、「平定」の完了とは、現実的には、植民地の行政機構の導入を意味し、その導入の結果、フランス側の認識と行動が変化し、その変化によって、「平定」から統治へと移行することになった。

植民地の行政機構は、空間のヒエラルキカルな分割を前提として、構成されている。仏領西アフリカ連合のなかに、複数の植民地があり、その植民地の内部は複数の管区によって分割され——場合によっては管区内に州(*une province*)、準管区(*une subdivision*)という単位が設定され——、管区の下での最小の行政単位が村として設定される。つまり、植民地の行政機構の導入とは、植民地>管区(>州/準管区)>郡>村というヒエラルキーをもった行政区分を実体として具現化させることにあった<sup>45</sup>。

これはそれぞれの長の空間と人間集団に対する権限の範囲を規定する法的な枠組みであると同時に、指揮命令の伝達経路であり、空間と人間集団に対する植民地行政側の統治の認知的枠組みであった。モロ・ナーバなどの郡の範囲を超えた「王」を例外として、管区・準管区にはフランス人の行政官が司令官(*un commandant*)として任命され、郡・村には「原住民」から郡長・村長が任命された。ただし、この「原住民」は在来の居住者を必ずしも意味していたわけではなかった<sup>46</sup>。また、郡長には必ずしも中核村が選ばれたわけではなく、植民地行政と親密な関係をもった——前節の用語でいえば、友とされる——村から選出された<sup>47</sup>。

---

<sup>45</sup> 正確に言えば、植民地の行政機構の導入には、もう一つ、植民地の庁舎が置かれた都市に小規模の官僚機構とそれを補完する商社の移入がある。仏領西アフリカにおける植民地行政とは、中央の小規模の官僚機構と地方の官吏によって構成されており、前者は植民地都市を生みだした。この点については次章で、地方の統治については本章で以下に述べる。

<sup>46</sup> このことは、「平定」の直前、あるいは「平定」と並行して、隣接する地域のトゥクロールやバラニによって「平定」されたスールー盆地において顕著である。たとえば、前節で取り上げた、スールー盆地にアギブから派遣されたサイドゥ・アマドゥは、スールー盆地ではなく、セグー出身者であったが、アギブの推薦を受けて、郡長に任命されている (Hubbell 2001: 34)。あるいは、スールー盆地とニジェール川中流域とのあいだの交易商人であったニョロ出身のベレ・ジボ(Bere Djibo)は同盟関係にあったバラニのウイディの推薦を受けて郡長に任命されている (Hubbell 2001: 34; CNABF 27V86 Fiche du renseignement concernant le nomme Yacouba Djibo, le 7 février 1925.)

<sup>47</sup> たとえば、カッサム郡の郡長はスールー盆地の「平定」の際に、フランス軍の案内人を務めたことから、のちに郡長として任命されることになった人物である (CNABF 27V10

郡長・村長は行政による給与を受ける代わりに、郡長・村長による徴税・労働力徴集の代行の任務を受けるという互惠関係を基盤とし、郡長はしばしばその権限を「濫用」し、郡内の村長に独自の指令をおこなうことがあった。また、植民地内の法は、いわゆる「原住民法」が適用されたが、この「原住民法」とは連合政府と植民地の総督が発したデクレ(政令)、アレテ(命令)の蓄積によって構成されており<sup>48</sup>、管区司令官は植民地の総督の指揮下にあったが、重大な案件を除けば、管区司令官ごとに管区の統治のための全権が与えられていた<sup>49</sup>。これらの意味において、行政区分は権限の範囲を確定させるものであった。

同時にこうした行政区分は統治の認知的枠組みとしても機能した。統治に利用される情報の基礎となっていたのが、月間・年間報告である。これらは植民地・管区ごとに作成され、月間・年間報告を通じて在地の情報が収集・集約されることになった。管区内の諸勢力は、「国家」によって、あるいは「国家をもたない社会」に対しては「民族」によって、把握・説明された<sup>50</sup>。いわゆる「民族」は植民地・管区を横断して分布していたため、管区ごとに諸「民族」の推定人口が記述され、管区は諸「民族」ごとではなく、諸「民族」の密度の濃淡として把握された<sup>51</sup>。

---

Fiche du renseignement concernant le nomme Mory Dion Drabo, le 2 mai 1933.). あるいは、デドゥグの村長もまた、いち早くフランス軍に服従の意を示した村であったため(4・2の記述を参照)、郡長に任命された。

<sup>48</sup> この点も詳細な検討が必要とされている。フランスの植民地全体についての一般論は、松沼が以下のように説明している。「植民地では原則として、行政府が発するデクレ等による統治が行われ、フランス議会で制定される法律は適用されない。歴史的経緯を一瞥すれば、第二帝政期の1854年と1866年の元老院決議(senatus-consulte)により、マルティニク、グアドルプ、レユニオンは元老院決議、それ以外の領土は皇帝のデクレにより統治されること、本国の法律は植民地に自動的に適用されず大統領と各地の総督による施行の承認を別途必要とすることが定められた。本国法の植民地不適用と行政府の裁量というこの体制が、第三共和制以降の植民地拡大を通じて維持ないしは意図的に放置されたものと、法律家や歴史家は考えてきた」(松沼 2012: 13)。なお、植民地内の法の整備と運用、適用範囲の理念と実践の具体的な検討が必要とされている。仏領植民地の法制史研究(たとえば、Saada 2003; Merle 2004)は、マクロなレベルで論じられており、かつ実際にどのように運用されたのかという実践レベルの問題がほとんど論じられていない。言い換えれば、これらは「フランスの植民地」の研究であって、植民地となったそれぞれの地域のローカルなコンテクストに焦点のあてられた研究ではなかった。他方で、仏領西アフリカの地域のローカルな歴史に焦点をあてる研究は法制度をほとんど考慮に入れてこなかった。

<sup>49</sup> 一般論としては、コーエン(Cohen 1971)を参照。

<sup>50</sup> たとえば、ANOM 14miom/688 Monographie de Koury, avril 1903.

<sup>51</sup> こうした認識は、フランスの西アフリカにおける民族学的研究の金字塔で、オー・セネガル・ニジェール植民地を概観したドラフォスの著作に顕著に反映されているが(Delafose 1912a: 157-174)、その著作の素材となった各管区の報告書(たとえば、ANOM 14miom/688 Monographie de Koury, avril 1903.)、あるいはそれ以降のオート・ヴォルタ

このような行政機構の導入が「平定」の完了を意味していた。在地における権力関係の変更が生じていたというよりも、行政機構の導入がフランス側の認識と対応を変更させ、そのことによって、在地における権力関係の変更を生じさせたといえる。つまり、1899年の行政機構の導入の前後では、ムブン川湾曲部におけるフランス軍の位置づけはそれ以前と変わっていなかった。変化したのは、ウイディのバラニやムフタールのワッハーブ、ヌムンダラのピンティエバといった国家に対するフランス側の認識であった。

認識の変化は、1899年前後で生じていた。ムブン川湾曲部に駐在していたコドリエールの1897年12年の私信では、ウイディがムブン川湾曲部のブワに対して略奪を行なっていることが擁護され、「私は、独立した領土の数が増えようとも、アナーキー(l'anarchie)をわれわれが受け入れることに何ら利点があるとは思えない」(Person 1975: 1964)と書き送っている。同様に1898年1月の私信においても、ピンティエバの「不当徴収」(l'exaction)についても以下のように述べている。「彼らの不当徴収に対して寛容であるべきではないが、アナーキーを避けるために、これらの長たちを指示する必要がある」(ibid.: 1964)。ここでは、「国家」による「不当徴収」と国家をもたない社会における「アナーキー」とが対立的に捉えられていることがわかる。

実際のところ、1897年ごろから、バラニなどの諸国家がサモやブワを「搾取し」、「不当徴収」を行なうことを問題視する見解が報告のなかでしばしば示されるようになっていた<sup>52</sup>。他方で、「不当徴収」を問題視する見解は、植民地行政による人頭税の徴収の開始とほとんど期を同じくしている。ボボ・ジュラソ管区、クリ管区では、1899年から人頭税を徴収しており、クリ管区では人頭税の3分の1をバラニやワッハーブの国家に受領させることを

---

植民地の報告書(たとえば、CNABF 234 Rapport politique annuel, Haute-Volta, 1925.)、各管区の報告書(たとえば、ANCI 5EE5(2) Rapport annuel, Cercle de Bobo-Dioulasso, 1924.)においても確認することができる。

他方で、「民族」の認識は行政官ごとに異なっており、検討課題である。たとえば、ドラフォスはラース(une race, 種族)を上位カテゴリーとして、ファミリーユ(une famille, 語族)をラースの下位カテゴリー、ファミリーユの下位カテゴリーにグループ(un groupe, 語派)をおき、グループのなかで移住などの歴史を共有する集団を民族(un peuple)、もしくはエスニック・グループ(un groupement ethnique)として認識し(Delafosse 1912a: 112)、「ボボ」はグループもしくは民族であるとされているが(ibid.: 317)、1900年のクリの報告では、フルベ、マルカ、サモはファミリーユとされている(ANOM 14miom/1618 Rapport politique de 2eme territoire militaire, février 1900.)。

<sup>52</sup> たとえば、ANOM FM SOUD/I/10 Rapport sur la situation politique du Soudan français au 1er mai 1898.; ANOM FM AOF/I/6 Rapport politique au 1er février 1899 de Soudan français.



容認していた<sup>53</sup>。つまり、植民地行政側は、徴税を行政のものと一元的な管理のために、「不当徴収」を問題視し、植民地内にある国家の解体を進めようとする一方で<sup>54</sup>、統治を行なうための有力なエージェントとして容易に手放すことができないというジレンマに着目していた。もっとも、すでに述べたように、こうしたジレンマは、諸国家の態度が変節したのではなく、フランス側が行政機構を導入し、一元的な徴税を行なおうとした結果であった。

他方で、「アナーキー」である、国家をもたないサモやブワについては、統治が「困難」として植民地行政は認識していた。1904年のオー・セネガル・ニジェール植民地を概観した植民地政府の報告書では、以下のように書かれている。

「ニジェール川湾曲部とニジェール河谷の住民の平定の成果で直面した困難は、第二軍管区において課せられた困難に比べれば、あまりにも容易なものであった。一方では[ニジェール川湾曲部では]、組織された部族(*des tribus organisées*)の問題を抱えていたが、彼らの首長たちのトップと条約を結ぶ、あるいは、彼らが従属している権力の座にある「ファマ」の権威をわれわれに取り換えるという問題にすぎなかった。しかし、第二軍管区で…われわれが直面したのは、いかなる政治的・社会的なつながりをもたず、強力で独立しており、好戦的(*belliqueuses*)であると同時に猛々しい未開の住人であり、関係を取り結ぶことが非常にデリケートで難しいものであった」(*Gouvernement général de l'Afrique occidentale française 1904*: 16)。同様に、1903年のクリ管区の報告書においても、サモとブワが「戦闘的(*batailleurs*)」で「未開」であり、統治が「困難」であることが指摘されている<sup>55</sup>。

これらにおいては、「未開」であることは、国家的な組織を欠いており、「好戦的」であることであり、それであるがゆえに、関係の構築が困難であったということを述べられている。ここで指摘したいことは、「未開」に対するオリエンタリズムではない。そうではなく、国家がないという点が、「平定」と統治を現実的に困難にしていたということである。

<sup>53</sup> ANOM 14miom/1050 Rapport politique, Cercle de Bobo-Dioulasso, le 23 septembre 1899. ; ANOM 14miom/688 Monographie de Koury, avril 1903.

<sup>54</sup> ボボ・ジュラソ管区では、1902年から1905年にかけて、ボボ・ジュラソ侵攻後に生じた、いくつかのワタラの「国家」の解体を行なおうとしたが、結果的に失敗に終わっていた(Saul and Royer 2001: 82-84)。クリ管区では、1905年に、「平定」以後、スールー盆地で大きな影響力をもつようになっていたサイドウ・アマドゥを更迭し、それによりいくつかの郡を設置し、郡長を新たに任命するという再編を行なっている(Hubbell 2001: 34-35; CNABF 27V10 Fiche du renseignement concernant le nomme Sule Drame, le 27 janvier 1918.; CNABF 27V11 Fiche du renseignement concernant le nomme Faugoule Zerbo, le 20 janvier 1918.)。

<sup>55</sup> ANOM 14miom/688 Monographie de Koury, avril 1903.

より具体的にいえば、統治とは人頭税の徴収や労働力の徴用のことを指している。つまり、国家のない社会においては、村を越えた範囲で影響力をもつ強固なヒエラルキーが不在であったために、人頭税の徴収や労働力の徴用が困難であった。そして、人頭税の徴収や労働力の徴用に反発した運動がしばしばあったために<sup>56</sup>、「好戦的」と認識されていたと考えられる。

一方で、統治を行なっていると植民地行政は捉えていたが、現実的には軍人や行政官がいくつかの拠点に駐在しているだけであったため、住民はそもそもフランスの植民地に編入されていたことを認識していなかった。前述の 1903 年のクリ管区の報告書には、こう書かれている。「実際のところ、サモとボボ[ブワ]はわれわれのことを認識していない。彼らはわれわれをフルベ[バラニ]、フータンケ[トゥクロール]、マルカ[ワッハーブ]との単純な同盟としてしか捉えていない。」<sup>57</sup>

住民のこうした認識がいつ頃、どのように変容したのかは、よくわかっていない。しかし、1915 年に勃発したヴォルタ・バニ戦争では、明確に植民地行政の排除が目的とされており、1915 年までには植民地行政によって形作られた秩序が住民にも実感されていたと思われる。人頭税の徴収や労働力の徴用が毎年繰り返し行われ、それを遂行するために、「原住民」の通訳や衛兵がローカルな権力を握り、独自の秩序を構成するようになっていた(Saul and Royer 2001: 99-100)。あるいは、ボボ・ジュラソでは 1900 年ごろからフランスの商社の支店が設立され、奴隷の売買の禁止がより徹底され、植民地経済があらたに形成されるようになっていた(本稿 5 章)。こうした植民地行政の新秩序が成立しつつあった 1915 年にヴォルタ・バニ戦争が勃発したのである。なお、ヴォルタ・バニ戦争については詳細なモノグラフ(Saul and Royer 2001)において、すでに十分に検討されているため、その概観することにとどめたい。

1915 年 11 月半ば、デドゥグ管区で生じた一部のダフィンの村々による植民地行政官襲撃を皮切りに、同年 11 月から 12 月半ばにかけて、ダフィンとブワの村々によって、デドゥグ管区およびボボ・ジュラソ管区における植民地行政のいくつかの拠点が陥落、あるいは

---

<sup>56</sup> 本節の冒頭で述べたように、この時期の史料は限定的であり、具体的にどのような事件があったのかはよくわかっていない。少なくとも、クリ管区で 1900 年初頭にサモの村々の「不服従」(des insoumissions)があったこと(ANOM 14miom/1618 Rapport politique de 2eme territoire militaire, mars 1900.)、1903 年初頭にボボ・ジュラソ管区で人頭税の未払いを理由として懲罰的な軍事行動がとられたこと(Saul and Royer 2001: 87-88)は確かなことである。

<sup>57</sup> ANOM 14miom/688 Monographie de Koury, avril 1903.

は包囲され、両管区では植民地行政の通常の活動が停止した(ibid.: chp. 5)。同年 12 月末ごろには、660 名の狙撃兵、100 名の騎兵、80mm 砲 4 門を含む大隊が到着し、サファネ周辺のヤンカソ(Yankaso)で交戦するも、この部隊は敗退し、デドゥグに撤退する(ibid.: 163-168)。翌年 1916 年 2 月に、ウイディの軍隊を加え、3500 人規模の植民地軍がデドゥグに集結し、同年 2 月から 3 月、4 月から 6 月にかけて、デドゥグ管区で合計 59 の村々で戦闘が行われ、村の破壊がなされた(ibid.: chp. 7)。一方で、住民の襲撃と植民地軍による懲罰的な軍事行動という応酬は、ボボ・ジュラソ管区では 1917 年 1 月まで継続し(ibid.: chp. 8)、隣接する管区にも波及し、1915 年 12 月からはワガドゥグ管区(ibid.: chp. 10)、1916 年 2 月からはバンジャガラ管区、1917 年 2 月ごろからサン管区とクチャラ管区でもみられ(ibid.: chp. 9)、およそ 1917 年ごろに主要な懲罰的な軍事行動が終結した(ibid.: 301)。これがヴォルタ-バニ戦争である。

発端となった植民地行政官襲撃は、デドゥグ管区では 1915 年 5 月から開始された、第一次世界大戦のための徴兵に対する拒否が直接的な引き金となった。しかし、度重なる懲罰などの混乱した統治による複数の要因がヴォルタ-バニ戦争の間接的な原因となっていた。

まず、人頭税の徴税や労働力徴用に対する不満が住民たちのあいだで蓄積されていたことは間違いないだろう。さらに、ボボ・ジュラソ管区では、1914 年から納税拒否に対する懲罰的な軍事行動が断続的になされていた(ibid.: 110-111)。

つぎに、1914 年末から 1915 年 2 月までに、マラブーの大量検挙と拷問がなされた。これはアラビア語で書かれた文書が——後に、この文書は特に反乱を呼びかけるものではないことが判明したのだが——流通していることを問題視した植民地行政官がデドゥグ管区においてサファネ、ワッハーブ、ジナコンゴ、ダートモなどのマラブー・郡長を検挙し、執拗な拷問を行ない——マラブーの一部はこの拷問によって殺害された——、強要された「自白」によって、ワッハーブにあった武器・弾薬が押収された(ibid.: 91-98)。

また、1915 年 7 月から 9 月にかけて、デドゥグ管区において、植民地行政の衛兵と一部の郡長・村長・有力者が不正を行ったとして、検挙、拷問が行なわれ——やはり、ここでも拷問による死者が出ている——、10 数名の衛兵の処刑がなされていた(ibid.: 98-103)。

こうしたことは、植民地行政に対する怨念を増幅させただけでなく、第一次世界大戦の影響による植民地軍の配置換え——この時期には、ドイツ領トーゴ植民地へ部隊が派遣されていた——と結びついて、植民地行政内部の動揺や弱体化として住民たちに受け止められるようになった(ibid.: 107-108)。

こうした状況下で、サファネ周辺のボナ、ダートモ、バヌといったカラントオのジハードに対抗したダフィンの同盟の盟主を中心として、植民地行政官の襲撃とデドゥグ管区の庁舎に対する攻撃が企図された(ibid.: 123-126)。1915年11月から12月にかけての反植民地側の勝利を受けて、蜂起はボナ、ダートモ、バヌの同盟関係を越えて拡散し、連鎖的に戦争の範囲が拡大していった(ibid.: chp. 6)。

ヴォルタ・バニ戦争の特徴は以下の3点にまとめられるだろう。

第一に、戦争の生じた範囲が非常に広域であった。デドゥグ管区を中心に、隣接するボボ・ジュラソ管区、ワガドゥグ管区、バンジャガラ管区、サン管区に広く波及した。サモリ帝国との戦争を除けば、仏領西アフリカでこれほどまでに広域に展開し、3,000人余りの軍人を投入した戦争は、ヴォルタ・バニ戦争のみである(ibid.: 4-5)。

第二に、反植民地側の勢力が単独の指導者や国家によって率いられたものではなかった。このことは広域に戦争が展開したと結びついているが、それぞれの地域において、植民地行政に反感をもつ集団が連鎖的に襲撃をおこしていた(ibid.: 6-9)。この点はカラントオのジハードで生じた事態(本稿3章4節)と類似している。カラントオのジハードでは、ジハード勢力という共通の敵に対して、相互に直接的な関係をもたない複数の同盟関係が連鎖的に抵抗をおこし、結果的に、国家の形成を阻んでいた。複数の同盟関係の連鎖的な抵抗という点では、ヴォルタ・バニ戦争においても、「国家に抗するシステム」が機能したとみなすことができるだろう。

国家や単独の指導者という明確な主体をもたない戦争であったため、国家をもたない社会における「平定」の過程と同様に、第三に、この戦争には戦争の明確な終結がなく、あくまでも懲罰的な軍事行動が徹底して繰り返されることになった。苛烈な戦闘が行われたデドゥグ管区では、102の村々が破壊され<sup>58</sup>、特に反植民地側の主要な同盟の盟主があったサファネ周辺では、少なく見積もっても3分の1以上の村々が攻撃を受けた。こうした村々では、フランス軍による砲撃によって、村がことごとく破壊されたことは現在でも語られている<sup>59</sup>。

---

<sup>58</sup> ANOM 1affpol/3048 Rapport sur le service de l'administration du Cercle de Dedougou par l'inspecteur M. Merly, le 1 mars 1919.

<sup>59</sup> 2013/8/18 Nounou, al-Hadj Mousa Sako(ヌーヌーのイマーム); 2013/8/18 Nounou, Brai Nieme(ヌーヌーの土地の主); 2013/8/19 Makongo, Tantie Nieme(マーコンゴの土地の主); 2013/8/13 Yankosso, Dauda Iye(ヤンコソのイマーム); 2013/7/5 Da, Adama Ira(ダーの有力者); 2013/7/3 Bara, Foadin Kote(ボナの土地の主); 2013/7/3 Bona, Noumankie Kote(バナの土地の主)。

ヴォルタ・バニ戦争によって、デドゥグ管区とボボ・ジュラソ管区の村々は徹底的に破壊され、村々の同盟関係は壊滅的な打撃を受けたことは間違いないだろう。さらに、戦争後に、武器徴用のキャンペーンが行われ、1922 年 12 月までに、ボボ・ジュラソ管区とデドゥグ管区で、銃・刀剣・弓などの武器類、約 56,000 点が接収された<sup>60</sup>。戦争と戦争後の武器徴用で行われたことは、村々の軍事力の破壊であり、植民地行政による文字通りの暴力の独占であった。これらによって、ヴォルタ・バニ戦争以降、大規模な蜂起は行われなくなった。

たしかに小規模で散発的な不服従は断続的に生じていた。記録が残されているだけでも、1919 年のデドゥグ管区での武器徴用への反発<sup>61</sup>、1920 年のデドゥグ管区での植民地行政による召還を強要しようとした村長が殺害された事件<sup>62</sup>、1925 年のスルー盆地のサモの村々で強制労働に反発したママドゥ・サンガレによる蜂起<sup>63</sup>、1927 年のデドゥグ管区のドホン(Dohoun)村の村長位の植民地行政による変更に対する村民の反発<sup>64</sup>がおこっていた。しかし、これらが広域に軍事的に展開されることはなくなった。直接的には、武器徴用によって抵抗のための軍事的な手段を欠いたことが要因であるが、ヴォルタ・バニ戦争による荒廃、その後の初期オート・ヴォルタ植民地期の圧政による人口流出と疲弊、郡長・村長がヒエラルキーをもつ行政機構に編入されることによる旧来の同盟関係の形骸化もまた、挙げられるだろう。中核村と小規模な村々が点在し、複数の同盟関係の網目と軍事力の遍在によって、村を越えた権力の集中と固定化を回避させてきた「国家に抗するシステム」は完全に破壊された。ヴォルタ・バニ戦争を経て、国家をもたない社会の政治的な秩序は、不可逆的な変化を被ったのである。

他方で、植民地行政は「反乱」が減少したという点において、ヴォルタ・バニ戦争によって、デドゥグ管区における「アナキー」な状況が消滅したと認識していた。1919 年の監

---

<sup>60</sup> 1922 年 10 月から 12 月にかけて、ボボ・ジュラソ管区では、火打ち銃 2,205 挺、拳銃 1 挺、弓 225 張、矢筒 865 具、刀剣類 500 本が召し上げられ、武器徴用を開始してからの累計で 36,460 点もの武器類が接収され、デドゥグ管区では、火打ち銃 36 挺、弓 10 張、矢筒 325 具、刀剣類 16 本、武器徴用開始時点からの累計で 20,118 点の武器類が接収されている(CNABF 230 Rapport de la Haute-Volta du 4ème trimestre 1922.)。

<sup>61</sup> CNABF 219 Lettre du commandant le Cercle de Dedougou au gouverneur de la Haute-Volta, le 8 octobre 1919.

<sup>62</sup> CNABF 107 Rapport de l'administrateur du Cercle de Dedougou sur l'assassinat de Biassoum Sanou, chef du village de Balave, le 16 août 1920.

<sup>63</sup> CNABF 235 Sur les incidents en pays Samo.

<sup>64</sup> ANOM 14mim/2123 Rapport sur la situation politique du canton de Bereba et la répression du village de Dohoun.

察官によるデドゥグ管区についての報告書の言葉では、次のように表現されている。すなわち、「彼らの反乱[ヴォルタ・バニ戦争]の鎮圧は、彼らのアナーキーな夢想(leur reve anarchique)が実現不可能なものであることを彼らに知らしめたのである<sup>65</sup>。」前述の、「平定」が完了した 1897 年 12 月のコドリエールの私信(Person 1975: 1964)では「アナーキー」な状態がいまだ存在していると認識されていたが、ヴォルタ・バニ戦争を経て、それは「夢想」に過ぎなくなると評価されるようになっていく。こうした国家をもたない社会は軍事・政治的な側面において植民地行政の管轄下に入り、厳密な意味で独立した国家をもたない社会は消滅したのである。

#### 4-4. 「平定」と国家をもたない社会の消滅

本章では、1888 年からの探索期から、1894 年以降の「平定」期を経て、1917 年のヴォルタ・バニ戦争の終結までを検討し、植民地統治がいかにして確立されたのかを論じてきた。本章全体を通じて明らかになった点は 3 点ある。

第一に、「平定」は計画的なものではなく、偶発的に進行した。本章 1 節で明らかにしたように、「平定」の前提となるローカルな勢力とフランス軍との友・敵関係は、ムブン川湾曲部全体に影響を与えるような単一の国家が不在であったため、探索期のフランスの使節と仲介者双方の騙し合いの結果として、恣意的で偶発的に構築された。こうした友・敵関係を基礎として、「友」の関係にあったバラニの要請を受けて、アル・カリの討伐がおこり、その後は基本的には連鎖的に「平定」が進行していった。

第二に、「平定」から植民地統治の確立までは不確定な連続体となっており、いつ植民地統治が確立したのかを特定することは困難であった。前節で論じたように、1898 年の仏領西アフリカの行政機構の再編成を通じて、一元的な徴税を行なおうとした結果、植民地行政による在地の勢力に対する認識が変化し、「友」であった諸国家は「不当徴収」をおこなう統治の障壁として、サモやブワといった国家をもたない諸民族は徴税や労働徴用に反発する「アナーキー」な状態にある存在として認識されるようになった。しかし、前節で再三指摘したように、これは植民地行政側の認識と態度の変化であり、在地の軍事・政治状況は、行政官と軍人が点在する拠点に配置され、「友」であった諸国家や郡長との同盟関係に依存しているという点では 1898 年以前と何ら変化はなかった。

---

<sup>65</sup> ANOM 1affpol/3048 Rapport sur le service de l'administration de cercle de Dedougou par l'inspecteur M. Merly, le 1 mars 1919.

第三に、「平定」から植民地統治の確立に至るまでの過程で、国家と国家をもたない社会は著しい好対照をみせていた。すなわち、ヒエラルキーをもち、意思決定の主体が明確である国家に対しては、同盟関係の構築や征服が比較的容易であったのに対し、明確なヒエラルキーをもたず、意思決定の主体を見出すことのできなかつた国家をもたない社会では、「平定」の完了が困難であった。アル・カリに対する討伐では、拠点となるブセを破壊し、アル・カリを殺害することで一定の決着をみたが、国家をもたない社会では蜂起がおこるたびに、蜂起をおこした村々を破壊するほかなく、唯一の中心が存在しないために、蜂起と懲罰的な軍事行動の反復が繰り返されることになった。

ここで注目すべきことは、国家と国家をもたない「アナーキー」な社会が、フランス軍・植民地行政官にとって、対比的に認識され、現実的・実践的に意味のあるものとして把握されたことである。実際問題として、国家の「平定」は容易であり、国家をもたない社会の「平定」は困難であったのである。

このことは、明確なヒエラルキーをもたず、意思決定の主体が不確定的であることとともに、国家をもたない社会に対する知識と有効な認識枠組をフランス軍・植民地行政官が有していなかったことにも起因するだろう。たとえば、フランス軍・植民地行政官はローカルな村々の同盟関係をほとんど把握していなかった。ヴォルタ・バニ戦争についての膨大な報告書・尋問調書、各管区の月間・年次報告書では、こうした同盟関係については触れられることはなかった。唯一言及が見られるのは、ヴォルタ・バニ戦争後に出版されたクレメールの民族誌であるが、それもまた断片的なものであった (Cremer 1924: 134-136, 144-145)。

他方で、このことは同時に、国家概念が部分的には通訳可能なものであったことを裏打ちしている。たしかに川田が指摘するように、西アフリカ内陸の国家・王国の政治組織のあり方は多様なものであり、ヨーロッパ近代で想定された国家概念を当てはめて理解することは分析的には妥当なものとはいえない (川田 2001: 145-146, 159-162)。ここで強調したいことは、このように細部を検討すれば、明らかな差異や相違が認識されるにもかかわらず、「平定」の過程にあつては、部分的に国家と国家をもたない社会を分別する認識が、現実的に要請され、その認識がある意味では機能してしまっていたということである。

たしかに、たとえば、ボボ・ジュラソ管区の郡長に任命されたワタラのように、実際には、村々を束ねるような権力を有しておらず、フランス軍・植民地行政が想定していた国家の機能を果たせなかつたため、ワタラの郡長を解任させようとするが生じていた

(Saul and Royer 2001: 83)。こうした点では、ボボ・ジュラソ周辺のワタラの勢力を国家として認識したことの齟齬が生じているといえる。しかし、本章 2 節でみたように、「平定」の過程は、基本的には、国家である主体とフランス軍との友・敵関係の連鎖によって進行し、植民地統治の確立にあたっては、国家をもたない社会の「アナーキー」な状態こそが統治の困難さをもたらしていたこともまた、確かなことであった。「平定」から植民地統治の確立にまで至る過程において、顕著にみられたことは、こうした国家をもたない社会の「アナーキー」な側面であったともいいうるだろう。



## 5 章 内陸における植民地経済

4 章では、征服時にフランス軍に対する友-敵関係の網目が構成され、「敵」の殲滅が図られ、その帰結として植民地行政による暴力の独占が生じたことを指摘した。この一連の流れは、村落間の政治から軍事を排除する経過としても言い換えることができる。他方で、フランス軍の「友」となった「保護国」の国王や村長ら(仏領西アフリカの行政用語では「伝統的首長」ないしは「原住民首長」、以下では「伝統的首長」と記す)は、植民地行政に組み込まれることになった。5 章では、植民地行政とはどのようなものであったのかを経済の側面から論じる。

これまで、植民地統治期のオート・ヴォルタの経済史研究はおよそ 3 つの領域で研究が進められてきた。最も成果を上げてきたのは、移民研究である。ブルキナファソのコート・ディヴォワールへの移民は植民地期より大規模に生じており、1980 年代以降、アフリカの歴史人口学研究を牽引した研究者たちが植民地行政の史料を批判的に読み解きながら精度の高い研究を生み出してきた(たとえば、Cordell and Greogry 1980, 1982; Gervais 1983, 1993b; Gervais and Marcoux 1993)。また、植民地統治以前のタカラガイを用いた交易や植民地統治初期のタカラガイとフランの併存状況について報告がなされている(Skinner 1962; Izard 1971; Somda 1972, 1993; Saul 2004a, 2004b)。ただし、これらの研究は数量については断片的報告に留まり、相互の比較検討がほとんど行われていない。最後に、植民地統治期に重点的に生産された綿花について若干の報告がなされている(Schwartz 1993; Gervais 1994)。しかし、これらの研究はいまだ断片的なものとなっており、全体としてオート・ヴォルタ植民地の経済がどのようなものであったのかを示すものは皆無である。

他方で、1960-1970 年代にかけて、西アフリカの歴史人類学・歴史学では政治経済を主題とする研究(たとえば、Meillassoux 1971, 1975)が多くなされた。そのなかで、史料・口頭伝承の収集によって新たな事実が掘り起こされる一方で、理論面においても、マルクス主義に依拠した「従属理論」(メイヤスー1977)、自由主義的な進歩史観に立ったイギリス帝国史研究による「近代化論」(Hopkins 1973)が提示された。これらの一部は定式化され、後の研究の前提となっていたが、1980 年代以降、経済史研究は一部の研究を除いて急速に低迷にする<sup>1</sup>。これは、「従属理論」におけるアフリカ側の主体性・多様性が軽視されることが批判され、さらに比較優位の理論によって輸出用農作物生産への特化を経済合理

---

<sup>1</sup> なお、このような認識は、たとえば、西アフリカ経済史学のホプキンスによるレビュー論文でも示されている(Hopkins 2009: 1)。

的な行動として捉えることが開発経済学、経済史学の主流の見解となったことに起因すると考えられる<sup>2</sup>。

1980年代以降、歴史人類学・歴史学においてはポストコロニアル理論に依拠した研究が主流となったことで、経済は主たる分析の対象とはならなかった。こうした変化と並行して、同時期に開発経済学では「新自由主義革命」の影響を受け、先進国と同様に市場機能を分析の中心に据えた研究が主流となっていた<sup>3</sup>。主たる研究は、ゲーム理論を下敷きにし、ミクロ経済学では世帯(household)内部の合理的選択、政治経済学では資源配分をめぐる政治エリート・農民などの諸アクターの合理的選択を論じてきた<sup>4</sup>。特に後者は、同時期のアフリカ政治学における国家論の隆盛の一角を担ってきた<sup>5</sup>。

このような開発経済学の進展を前提として、2000年代以降、広域の長期的な数量データを用い、経済活動とその経済活動を条件づける諸制度の特徴を明らかにしようとする新制度派経済(史)学の研究が席卷するようになった<sup>6</sup>。これらの研究では、サハラ以南アフリカ諸国の経済発展とその阻害要因について数世紀にわたる広域の比較が行われ、論文が量産

---

<sup>2</sup> さきのホプキンスの論文では、歴史学から経済学が切り離されるという制度上の変化による経済史学の相対的な地位の低下とポストコロニアル理論の流行を要因として説明している(Hopkins 2009: 2)。

<sup>3</sup> アフリカの開発経済学における「新自由主義革命」の意味と位置づけについては、平野(2003: 10-11)を参照。

<sup>4</sup> 前者については、代表的な研究がブルキナファソを対象としてなされている(たとえば、Fafchamps et al. 1998; Reardon et al. 1992; Savadogo et al. 1994)。ブルキナファソを対象とした類似する日本語の研究(たとえば、櫻井 1997, 2006; 櫻井・井上 2014 など)がある。サハラ以南アフリカのミクロ経済学の研究を概観したものとしては、福西(2003)を参照。後者の研究は、ベイツ(Bates 1979, 1983)が代表的な論者の一人であり、その解説や他の政治経済学の議論については、高橋(2010)を参照。たとえば、これらの議論のなかで論じられたレント・シーキングなどの枠組みは、1990年代のいくつかの西アフリカの経済史研究に応用されていた(たとえば、Alence 1990; Evans and Richardson 1995)。

<sup>5</sup> 1980年代以降のアフリカ国家論については、川端・落合(2006)にレビューがある。なお、このなかでも、ポストコロニアル理論・アフリカ諸国の豊富な事例を自在に展開することで、他の論者を圧倒し、「アフリカ市民社会論」の一つの源流となったバヤールは特に重要である。バヤールの議論はコマロフ夫妻による「モダニティ論」を媒介として、アフリカの宗教研究に輸入され、1990年代後半以降のイスラーム改革主義運動研究を方向付けた。この点については、本稿序章1節5項を参照。

<sup>6</sup> 最も著名なものは発展途上国のうち、経済発展が遅れている諸国では、16世紀以降の植民活動において、伝染病などによってヨーロッパ人の死亡率が高く、ヨーロッパ人の入植者が少なかったがゆえに、ヨーロッパ近代の諸制度の導入が遅れた結果であると主張するアセモグルらの論文(Acemoglu et al. 2001, 2002)である。より個別的な論点では、たとえば、大西洋奴隷貿易がアフリカ大陸に与えた影響を広範なデータと推論をもとに論じたナン(Nunn 2007, 2008)などがある。

されている<sup>7</sup>。そのなかで、西アフリカに特化している代表的な研究としては、農産物輸出量(Austin 2009)、賃金(Frankema and van Waijenburg 2012)、植民地政府の財政と税制(Frankema 2010; Frankema and van Waijenburg 2011; Huillery 2009, 2014)に着目したものがある。対象を広域に設定し、長期的な数量データを用いる研究は、同様に 2000 年代以降に出現したグローバル・ヒストリーと親和性が高く、新制度派の経済史研究とグローバル・ヒストリー研究は部分的に重なり合っており、こうした研究は増加傾向にある。

対象地域の問題としていえば、開発経済学そのものが英語圏で進展したため、英語圏のアフリカ諸国を中心として研究がなされており、少数の例外を除いて<sup>8</sup>、仏語圏のブルキナファソは研究の埒外にあった。また、上述のように、これらの研究は、アフリカ大陸、西アフリカという地域、あるいは現在の国家を単位とした広域の分析に終始し、これらの研究は現在の国家よりも小さな単位で研究を進めてきた歴史学・歴史人類学の研究と相容れることはなかった。

つまり、1980 年代以降、歴史学・歴史人類学においてはポストコロニアル理論の隆盛によって、経済を主たる対象とした研究はほとんどみられなくなる一方で、経済史学では開発経済学の展開とともに方法論を大きく転換させて、広域で長期的なタイムスパンの研究を独自に進展させ、歴史学・歴史人類学とは疎遠になっている。

こうしたことを踏まえて、歴史学・歴史人類学では積極的に分析対象とされなかった数量的なデータを用いることで、経済史研究とローカルな歴史研究の統合を試みる。これまで歴史人口学・経済史学で対象とされてこなかった植民地内の人頭税と予算配分、家畜の輸出量などを用いることで、植民地統治期に政治経済の新たな複合がどのように生じたのかを明らかにする。

本章で論じるように、ムブン川湾曲部を含むオート・ヴォルタ植民地において、植民地統治はフランによる人頭税によって運営が可能となり、人頭税を通して植民地から経済的な価値を生み出し、人頭税を手段として、「伝統的首長」を植民地行政に組み込んでいくことになった。これらを踏まえて、1 節では、フランを介した人頭税の徴集の意義について論じ、2 節では、人頭税と植民地統治との関係を植民地行政の財政から明らかにする。3 節では、植民統治によって、農村において何が生じていたのかをマクロな数字から概観する。4

---

<sup>7</sup> たとえば、Arcand et al. 2000; Englebert 2000; Inikori 2007、西アフリカ史研究者によるものでは Austin 2008 など。

<sup>8</sup> Huillery 2009, 2014 は仏領西アフリカ全体を対象とし、Frankema and van Waijenburg 2011 の一部では仏領西アフリカのデータが用いられている。

節では、植民地統治の意図せざる結果として、家畜の交易が急速に発展し、ジュラ、フルベ、ハウサの商人が資本を形成していったことを明らかにする。

これらによって、植民地統治がいかに新たな政治経済の秩序を構成していったかを明らかにする。

### 5-1. フランと人頭税

西アフリカ内陸では、インド洋産のタカラガイ(*Cypraea moneta*、キイロタカラガイ)が通貨として利用されてきたことは広く知られている。一般的には、13 世紀頃からサハラ越え交易を通じて流入し、16 世紀以降、大西洋岸の奴隷貿易に従事したヨーロッパ諸国が類似したザンジバル産のタカラガイ(*Cypraea annulus*、ハナビラタカラガイ)を導入したとされる(Hogendorn and Johnson 1986: 130, 138-147)。

19 世紀初頭のボウディシュ(Bowdich)は、コモエ川中流域、ヴォルタ川中流域のコンやダゴンバにおいてはタカラガイが用いられ、それより南のアシャンティにおいては砂金がいわれていることを報告している(Johnson 1968 v. I: acc. no. SAL/70/1)。また、1888 年にムフン川湾曲部を旅したバンジェールによれば、各地でタカラガイが通貨として用いられていた(たとえば、Binger 1892 t. I: 309, 407, 421-424)。つまり、19 世紀にはヴォルタ川中流域から上流域の商業の拠点においてはタカラガイが用いられていたと考えられる。

ただし、奴隷、家畜、金などの高額の商品のやり取りは、それぞれの商品を介して、つまり、奴隷、家畜、金によって取引が行われた。また、農村部において、タカラガイが通貨としてどこまで普及していたのかはよくわかっていない。少なくともいえることは、通貨としてのタカラガイの広がり、均質な面の広がりではなく、一部の都市や一部の集団が飛び地のように広がるパッチワークに展開していったものと想定される(Saul 2004a; 坂井 2005b)。

ヨーロッパの商社が早くから進出していた海岸部とは異なり、内陸では 19 世紀末のフランスの侵略寸前においても、ほとんどヨーロッパの貨幣は流通しなかった。こうしたことから植民地統治初期には、人頭税の徴集とあいまって、特殊な経済現象が生じることになった。フランス軍による占領からおおよそ 10 年の 1907 年 4 月にワガドゥグで活動を開始したカトリック宣教団の報告は、このことをありありと伝えている。

「われわれはコメとトウジンビエを買い求めようと試みた。しかし、タカラガイなし

に食料を手に入れることは不可能であった。われわれの 5 フラン硬貨は頑なに拒否された。5 フラン硬貨はほとんどまったく流通しておらず、トゥジンビエを扱う商人で 5 フラン硬貨をもっている者は稀であった。われわれは 5 フラン硬貨とタカラガイを交換しようとしたが、誰もタカラガイを売ろうとしなかった。

...

しかし、午後になると、ブカリ[案内人]がわれわれのところに自慢げに戻ってきた。

「タカラガイを手に入れました！」

「おー！ついに！それでいくらになった？」

「3,500 個」

公定交換レートは、5 フラン硬貨に対して、5,000 個のタカラガイであった。したがって、1,500 個のタカラガイ、1 フラン 50 サンチーム分[1.5 フラン分]、損をしたことになる。何と高いことか。特に、納税期に、5 フラン硬貨が 6,000、7,000、8,000、場合によっては 10,000 や 15,000 個のタカラガイになることを考えれば、なおのことである」(Mangin 1908: 342-343)

ここから理解できることは、市場ではフランが流通しておらず、小売商人はフランでの取引を好まず、タカラガイを選好していたこと、納税期にフランスの価格が上昇し、通常時には下落していたことである。特に、後者の点がタカラガイの入手を困難にさせたと推測される。のちに述べるように、人頭税は農作物の収穫が終わる 12 月から 1 月に徴集されていた。引用した出来事は 4 月のちょうど、フランの価格が下落した時期にあたるからである。

人頭税の徴集は 1899 年から開始され<sup>9</sup>、当初は現物(農産物、家畜)、タカラガイによって支払いがなされていた。たとえば、1899 年のボボ・ジュラソ管区の人頭税の徴集では、少なくとも 21 の村が家畜によって支払いをおこない、合計で 300 頭あまりの家畜が集められている(表 5-1)。また、クリ管区では 1903 年においても、トゥジンビエで人頭税の支払いがなされたことが報告されている<sup>10</sup>。

---

<sup>9</sup> ANOM 14miom/1050 Rapport, Cercle de Bobo-Dioulasso, le 23 septembre 1899, Copie du registre n. 2 mois de juillet. Cercle de Bobo-Dioulasso, le 3 septembre 1899.; ANOM 14miom/688 Monographie de cercle de Koury, 1903.

<sup>10</sup> ANOM 14miom/688 Monographie du cercle de Koury, 1903.

村名	ウシ	ヒツジ	ウマ	価格換算(フラン)
Boho	7			210.00
Kousou	1			30.00
Kindeni		2		20.00
Ouakuy	2	3	1	132.00
Demikuy	3		1	240.00
Diohoeukuy		7	1	88.00
Kassao	3			90.00
Niondekuy	7			210.00
Bankoni	3			90.00
Die et Daumie	4	4		136.00
Loufikao		3		12.00
Biasuama	1			30.00
Bokuy	2			60.00
Bikombiho	2			60.00
Bounou	25	6		774.00
Karba	16	13	1	683.00
Dohouer	20	1		603.50
Dossi	10	3		312.00
Kumde	34	75		1440.00
Koho	6	12		228.00
Boucre	9	5		290.00
合計	155	134	4	5738.50

表 5-1. 1899 年のボボ・ジュラソ管区における人頭税の支払い状況<sup>11</sup>

実際のところ、クリ管区の 1902 年の徴税ではタカラガイと現物がそれぞれ総額の 5 割を占め、1905 年においても、タカラガイと現物をあわせて 8 割が人頭税の支払い手段となっていた(表 5-2)。しかし、もともと小口での商品の取引に用いられたタカラガイが、こうして一括して納税されると物理的・経済的な困難を呼び起こした。

たとえば、クリ管区の 1902 年において、約 65,000 フラン相当分がタカラガイによって支払われている。1902 年までのタカラガイとフランの公定レートは 1 フラン当たり 800 個のタカラガイであったため<sup>12</sup>、単純計算で約 50,000,000 個のタカラガイが納税された。タカラガイ 1 個あたりおよそ 1 グラム程度であることから(坂井 2005b: 230)、約 50 トンものタカラガイがクリ管区だけで収集されたことになる。1903 年のクリ管区の報告は、約 20,000,000 個のタカラガイのストックができたこと、タカラガイの価値が低下し、1903 年には 1 フランあたり 1,000 個のタカラガイにレートの変動があったことを伝えている<sup>13</sup>。つ

<sup>11</sup> ANOM 14miom/1050 Rapport, Cercle de Bobo-Dioulasso, le 23 septembre 1899.から筆者作成。

<sup>12</sup> ANOM 14miom/688 Monographie du cercle de Koury, 1903.

<sup>13</sup> ANOM 14miom/688 Monographie du cercle de Koury, 1903.なお、タカラガイのレートについては、この史料では 1 フラン当たり 1000 個となっているが、デュプレイの用いた史

まり、50,000,000 個のタカラガイのうち、30,000,000 個は何らかのかたちで市場に還流してきたものの、20,000,000 個はストックにせざるを得ず、市場に大量のタカラガイが還流することでタカラガイの価値が低下したことがわかる。こうしたことから、1903 年には、クリ管区ではフランでの支払いを推奨(おそらく実際には強制)しており<sup>14</sup>、1905 年にはフランでの納税割合が増え、1906 年以降、ほとんどフランで支払われることになった(表 5-2)。1910 年ごろには、オー・セネガル・ニジェール植民地において、フランでの支払いが一般化したものと考えられる<sup>15</sup>。

年度	人頭税総額	フラン		タカラガイ		他の現物	
		フラン表記	割合	フラン表記	割合	フラン表記	割合
1902年	131072.55	3731.00	2.8%	65332.65	49.8%	62008.90	47.3%
1905年	103768.45	20209.00	19.5%	45164.50	43.5%	38394.95	37.0%
1906年	119645.95	109935.15	91.9%	1688.80	1.4%	8022.00	6.7%
1907年	124584.95	121533.70	97.6%	1087.00	0.9%	2044.25	1.6%

表 5-2. 1900 年代のクリ管区における人頭税の支払い手段<sup>16</sup>

すでに述べた通り、フランは市場には流通していなかったため、人頭税の納税手段がフランに限定されると、納税期にフランが高騰し、タカラガイが暴落するという事態が生じるようになった。比較可能なデータは少ないが、断片的な報告を組み合わせると、表 5-3 のようになる。1903 年のクリ管区では、納税期になるとフランの価格が最大で 6 倍に高騰している。このようなフランの高騰とタカラガイの暴落は他の事例ではみられないが、1.5 倍から 2 倍ほどの価格の変化は、1907 年のワガドゥグ管区、1910 年代のワイグヤ管区、さらに農村部のガワ管区では 1920 年、1930 年代にもみられていた。表 5-3 をみると、お

料では 800 個となっている(Duperray 1987 : 162)。

<sup>14</sup> ANOM 14miom/688 Monographie du cercle de Koury, 1903.

<sup>15</sup> クリ管区以外でいつ頃からフランでの支払いが一般化したのか、詳細についてはわかっていない。たとえば、1904 年のオー・セネガル・ニジェール植民地の概観では、「民政管区」(les territoires civils)の「大半」ではフランでの支払いが行なわれていることが述べられている(Gouvernement général de l'Afrique occidentale française 1904: 16)。実際のところ、1901 年のセグー管区の人頭税は約 9 割がフランでなされている(ANOM 14miom/1616 Rapport politique, avril 1901, Haut-Sénégal et Niger.)。他方で、第一軍管区に組み込まれていたヤテンガ管区(のちのワイグヤ管区)では、1903 年の人頭税はすべて現物、もしくはタカラガイで支払われていた(ANOM 14miom/1630 Rapport politique de la résidence du Yatenga pendant le mois de janvier 1903.)。1909 年のオー・セネガル・ニジェール植民地の年次報告では、一部の領域でいまだフランでの納税がなされていないことが指摘されている(ANOM 14miom/1650 Rapport d'ensemble Haut-Sénégal-Niger, 1909.)。

<sup>16</sup> Duperray 1984: annex XVII から筆者作成。

おまかにいえば、納税時と通常時との価格差は、1910 年代以降は落ち着いていったものと考えられるだろう。

5フランあたりのタカラガイ			
クリ管区			
1903年(通常)	4000 c.		
1903年(納税期)	20000-25000 c.		
ワガドゥグ管区			
1907年(通常)	3500 c.		
1907年(納税期)	6000-15000 c.		
ワイグヤ管区			
1909年12月-1910年2月	12000-14000 c.		
1911-1916年(通常)	3000-3500 c.		
1911-1916年(納税期)	4500-5000 c.		
ガワ管区		通常時との価格差	
1919年10月	600 c.	クリ管区(1903年)	5-6.3倍
1919年11月	800 c.	ワガドゥグ管区(1907年)	1.7-4.3倍
1920年1月-2月	2000 c.	ワイグヤ管区(1909-1910年)	2.4倍から2.8倍
1934年10月まで	1200 c.	ワイグヤ管区(1911-1916年)	1.5倍から1.6倍
1934年11-12月	1500-1800 c.	ガワ管区(1919-1920年)	3.3倍
1935年1-2月	2000-2400 c.	ガワ管区(1934-35年)	1.6-2倍

表 5-3. オート・ヴォルタ領内のフランと宝貝の交換レート of 納税期における変動<sup>17</sup>

実際のところ、ワイグヤ管区の年次報告(Marshal 1980)では、1910 年ごろより人頭税の徴税の際の混乱についての記載が激減するようになっていた。しかし、これはフランの浸透を意味しない。たとえば、1926 年のワイグヤ管区の年次報告では、タカラガイが植民地行政発行の通貨よりも流通している(ibid.: 120)。1935 年のガワ管区のロビについての報告においても、一般的にローカルな市場ではタカラガイがもっぱら用いられているとされ(Dolor 1936: 5)、聞き取りでは、1940 年代のボゴ・ジュラソでも市場ではタカラガイが使用されていたとされる(Saul 2004a: 79)。さらに、1958 年のワイグヤの市場の報告では、年代は不明だが、穀物の小規模取引の価格がタカラガイで表記されており(Zahan 1958)、地域差はあったとおもわれるが、1940 年代頃まで農民にとっての日常的な小規模の取引はタカラガイによってなされていたと考えられる。

貨幣のなかでも 5 フラン硬貨が一般的に流通するようになっていたが<sup>18</sup>、少なくとも、

<sup>17</sup> クリ(1903 年)(Duperray 1987: 162)、ワガドゥグ(1907 年)(Mangin 1908: 343)、ワイグヤ(1909-1910 年)(Marshal 1980: 42)、(1911-1916 年)(Tauxier 1917: 326)、ガワ(1919-1920 年)(Somda 1993: 245)、(1934-1935 年)(Dolor 1935: 6)から筆者作成。



1920 年代頃までは、5 フラン硬貨は日常的な小口の取引に用いるには、あまりにも高価であった(表 5-4)。1940 年代頃まで、市場でタカラガイが用いられてきたことを踏まえると、人頭税の納税や大口の取引においては 5 フラン硬貨が用いられるようになり、市場における市場における小規模の取引ではタカラガイが用いられるといった棲み分けが生じていたものと考えられる。

	品目	価格	単位
ロビ(1904-1905年)			
	ウシ	50	1頭
	ヒツジ	5	1頭
	ヤギ	2-3	1頭
	ニワトリ	0.2-0.3	1頭
	トウジンビエ	0.5	1キロ
	コメ	0.5	1キロ
ロビ(1914-1924年)			
	ウシ	100	1頭
	ヒツジ	12.5	1頭
	ヤギ	5	1頭
	ニワトリ	1	1頭
	トウジンビエ	0.25	1キロ
ワイグヤ(1924年)			
	ウシ	175	1頭
	ヒツジ	40	1頭
	ウマ	500	1頭
	ロバ	150	1頭
	トウジンビエ	0.1	1キロ
	コメ	1	1キロ
ボボ・ジュラソ(1924年)			
	ウシ	300	1頭
	ヒツジ	60	1頭
	ヤギ	50	1頭
	トウジンビエ	0.4	1キロ
	コメ	1.25	1キロ

(価格はフラン)

表 5-4. 物価目安<sup>19</sup>

他方で、農村部ではフランが浸透していなかったにもかかわらず、なぜフランで納税が

<sup>18</sup> たとえば、1908 年第 4 四半期のボボ・ジュラソ管区における財政報告では、「5 フラン貨は徐々に受け入れられている。反対に、2 フラン貨は求められていない。原住民はいつも 2 フラン貨を受け入れる時に不快感を示す。1 フラン貨では彼らは騙されていると感じている。…スー貨[5 サンチーム貨=0.05 フラン]は難なく受け入れられた。しかし、毎回、原住民たちはわれわれへの支払いにスー貨を用いて、すぐにそれらは戻ってきてしまう」(Saul 2004b: 121 からの引用)とある。一部の論者は、現在、ジュラ語やヴォルタ諸語において価格の換算が 5 倍でおこなわれるようになったことの起源が 5 フラン貨幣の流通に起源をみている(Saul 2004a: 78)。

<sup>19</sup> ロビ(1905-1906 年; Somda 1993: 240-241, 1914-1924 年; Labouret 1931: 357-361)、ワイグヤ(Marshall 1980: 102)、ボボ・ジュラソ(ANCI 5EE5(1/2) Rapport politique du cercle de Bobo-Dioulasso 1924.)から筆者作成。

できるようになっていたのだろうか。人頭税の支払いの実態については、史料の不足からほとんどわかっていない。例外的に、マーシャルによって編纂されたワイグヤ管区の月間報告の集成(Marshall 1980)の一部に人頭税の支払いの実態についての記述がみられる。

フランでの支払いが義務づけられた 1908 年 8 月のワイグヤ管区の月間報告では、ワイグヤ管区内の農民が隣接する管区で、家畜、トウジンビエ、タカラガイを売却し、フランを入手していたことが報告されている(ibid.: 27)。1910 年 2 月の月間報告では、一部の農村では、売却するための家畜が底を突き、トウジンビエの売却では、人頭税が確保できなくなっていることが記されている(ibid.: 41-42)。これ以降、人頭税に関する記述はほとんどあらわれなくなった。

1910 年代頃から、ゴムの木や綿花などの換金作物の生産と売却によってフランを入手することが一般的になっていったものと考えられる。1928 年 4 月の月間報告は、商人たちが農村をまわり、換金作物を買いつけていった様子が書かれている。「14 名の商人たちが、州、管区、村ごとに集められた綿花を買いつけにやってくる。その仕事は簡素化されていた。すなわち、商人たちが来る前に、綿花の総重量が計られる。重量計は、商人たちを代表する店舗の協力によって調べられたものが用いられ、時折、行政によって検査されているという次第である」(ibid.: 128-129)。つまり、図式的に言えば、1910 年代頃から、商人・商社への換金作物の売却によってフランを入手するようになり、1928 年にはこのことがすでに慣習化・簡素化するようになっていた。

仏領西アフリカ史研究においては、大部分が行政史料に依存しており、こうした商人・商社の活動についてはほとんど明らかになっていない。しかし、同様の慣行があったことは、初期の民族誌の断片的な記述から垣間見ることができる。たとえば、1914 年から 1924 年までガワ管区で勤務し(Kambou-Ferrand 1993a: 78)、その時期に収集したデータをまとめたラブレの民族誌には、英領ゴールド・コーストから来る「マンデもしくはモシの起源の 6 名の商人」が納税期のフランの高騰に目をつけ、フランとタカラガイの両替を営んでいたこと、ヨーロッパの商社 6 社が管区内の主要な市場に定期的に来訪し、換金作物を買い付けていたことがわずかに記述されている(Labouret 1931: 362-363)。あるいは、1908 年から 1910 年までワガドゥグ管区で勤務していた(Bonnet 1984: 107)、トクシエによる民族誌においても、1908 年から長距離交易を担っていたヤルセが落花生や綿花といった換金作物の買い取りを行なうようになり、1909 年以降、人頭税支払いのために、農民がこうした換金作物の売却を行なうようになったとしている(Tauxier 1924: 152)。

換金作物と人頭税との関係については後述するが、少なくとも、農村部においては、5 フラン硬貨はほとんど蓄積されず、人頭税として支払われたと思われる。すでに述べたように、5 フラン硬貨は小口の取引には有用ではなく、ローカルな市場ではタカラガイが用いられていた。つまり、大口の取引を行なう商人を除けば、5 フラン硬貨は第一義的には人頭税の支払い手段としての機能を果たしていた。

当初、市場に流通していなかったフランは在地の商人との取引に用いることができなかったため、ヨーロッパの商社すらタカラガイを用いていた<sup>20</sup>。しかし、フランでの納税が制度化されると、商人・商社はフラン保有の強いインセンティブをもつようになったと考えられる。納税期にフランが高騰したため、フランとタカラガイの両替をおこなうことで利ざやを稼ぐことができたからである<sup>21</sup>。フランでの納税は、植民地行政と両替商の双方に利益をもたらした。植民地行政にとっては、5 フラン硬貨で受けとれば、両替の手間を省くことができ、両替商にとっては、納税期のフランの高騰による利得があった。その点で、農民は不利な立場におかれたのである。

## 5-2. 人頭税と植民地統治

基本的な点であるが、強調しなければならないことは、植民地行政はそれ以前には西アフリカ内陸には存在しなかった未曾有の経済主体であったことである。経済規模、影響を及ぼす範囲は、植民地統治以前にはまったく比較できる対象のないものであった。その意味において、植民地行政は、西アフリカ内陸の経済に決定的で不可逆的な変化をもたらした。

ムブン川湾曲部にとって、決定的であったことは、オート・ヴォルタ植民地が港湾をもたない内陸の植民地にあったことにある。前章でふれたように、ムブン川湾曲部は第二軍管区の領域に組み込まれた後に、オー・セネガル・ニジェール植民地に編入され、オート・ヴォルタ植民地の成立時にその一部となった。仏領西アフリカは 1899 年に構成され、その

---

<sup>20</sup> たとえば、1908 年第 4 四半期のボボ・ジュラソ管区における財政報告では、「(フランス人の) 商人たちはタカラガイのシステムよりも、この(植民地の) 通貨を選択する必要がある。しかし、不幸なことに、彼らの善意は、サンチーム貨よりも、タカラガイを望む原住民たちの拒絶という困難に直面している」(Saul 2004b: 118 からの引用)という記述がなされている。

<sup>21</sup> 先に引用したラブレの民族誌に現われる両替商だけではなく、1903 年のクリ管区の報告書では、取引を担っていた「一部のマルカ[ダフィン]やジュラのあいだでは[5 フラン]硬貨で支払うアドバンテージを理解し、硬貨で支払っていた」とある(ANOM 14miom/688 Monographie du cercle de Koury, 1903.)。

領域内の各植民地(セネガル植民地、コートディヴォワール植民地など)を有する連合として成り立っていた。仏領植民地では、各植民地ごとに自立した独立採算制となっており、各植民地ごとに予算が編成された。仏領西アフリカとしての予算も組まれたが、これは植民地を横断する鉄道建設や港湾整備に特化したものであった。このように、フランスからの融資、他地域の税収に基づく公共事業がなく、オート・ヴォルタ植民地の財政は植民地内部からの収入に限定されていた。つまり、オート・ヴォルタ植民地を越えた範囲での富の流入は基本的になかった。

他方で、オー・セネガル・ニジェール植民地、オート・ヴォルタ植民地の財政は人頭税に大きく依存しており、農村から得られた富を中央に移転させるように機能していた。オー・セネガル・ニジェール植民地は港湾がないことに加え、特にオート・ヴォルタ植民地は本稿 3 章 5 節でみたように植民地統治以前の交易都市も発展していなかった。したがって、関税による収入がほとんどなく、人頭税に大きく依存することになった。表 5-5 は 1903 年から 1918 年までのオー・セネガル・ニジェール植民地の歳入と人頭税、その割合の変遷を示したものである。歳入の約 7 割を人頭税に依存していたことがわかる。

	人頭税	歳入全体	割合
1903	6,657,072.00	10,650,830.00	62.5%
1904	7,547,099.00	12,809,500.00	58.9%
1905	3,638,000.00	5,987,479.80	60.8%
1906	3,880,000.00	5,419,752.83	71.6%
1907	4,615,960.30	7,110,505.11	64.9%
1908	5,126,195.49	6,786,953.14	75.5%
1909	5,515,448.22	7,363,838.89	74.9%
1910	5,980,476.58	8,029,835.67	74.5%
1911	6,380,055.39	8,963,342.41	71.2%
1912	6,594,646.33	8,887,977.83	74.2%
1913	6,995,639.05	9,679,584.27	72.3%
1914	7,314,994.99	10,094,630.16	72.5%
1915	7,630,171.73	11,855,869.88	64.4%
1916	7,887,451.55	12,418,778.95	63.5%
1917	7,756,000.00	9,977,000.00	77.7%
1918	11,160,000.00	14,859,000.00	75.1%
平均			69.7%

表 5-5. オー・セネガル・ニジェール植民地の歳入と人頭税<sup>22</sup>

<sup>22</sup> Haut-Sénégal-Niger 1903: 22, 23; 1904: 52, 55; 1905: 42; 1906: 14; 1909: 20, 22; 1910: 20, 22; 1911: 26, 28; 1914: 48, 50; 1915: 9, 11; 1916: 2, 4; 1917: 2-5; 1918: 2, 4; 1918: 3, 5 から筆者作成。なお、網掛けは原資料に記載されている推測値。

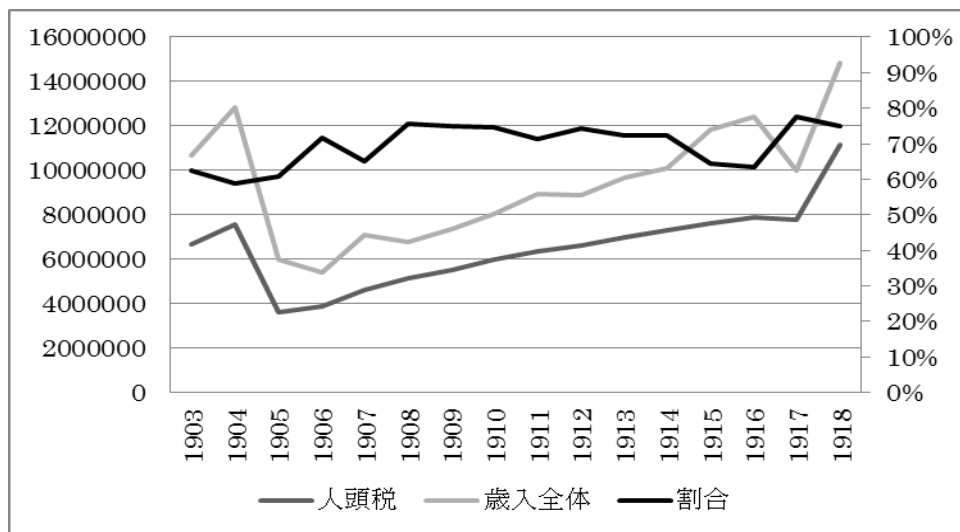


図 5-1. オー・セネガル・ニジェール植民地の歳入と人頭税<sup>23</sup>

1919年に成立したオート・ヴォルタ植民地は、仏領西アフリカのなかでも財政上の特徴を有していた。端的に言えば、他の植民地と比較すると予算規模が少なく、人頭税に大きく依存していた。表 5-6 および図 5-2 では 1922-1930 年までの仏領西アフリカの主要な植民地の歳入をまとめた。港湾をもつセネガル、コートディヴォワール、植民地統治以前からの商業の中心地を有した仏領スーダンが予算規模を大きくしていたこと、内陸のニジェール植民地、オート・ヴォルタ植民地が低い経済水準であったことがわかる。オート・ヴォルタ植民地とセネガル植民地の 1922 年から 1929 年までの歳入を比較すると、オート・ヴォルタ植民地は平均してセネガル植民地の約 5 分の 1 の規模であった。

	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930
Niger		5,981,292.84	5,730,626.08	6,377,137.19	9,238,574.69	16,863,860.11	20,751,569.32	23,979,232.13	25,172,916.23
Senegal	31,368,019.58	53,900,133.22	41,253,369.48	70,280,188.82	126,101,599.46	124,443,974.79	126,996,220.71	136,464,178.04	
Soudan Français	19,656,838.80	21,803,946.82	20,623,360.30	26,051,558.17	40,926,215.87	50,309,298.51	58,988,033.23	62,971,841.34	74,607,695.28
Cote d'Ivoire	16,811,559.43	16,547,699.90	6,083,209.82	29,434,091.13	55,322,509.76	69,101,391.58	74,673,840.16	83,701,489.68	
Haute-Volta	9,091,321.00	10,419,140.00	10,536,164.00	12,158,164.00	18,348,000.00	23,839,521.00	27,519,150.00	33,412,824.00	36,853,418.00

表 5-6. 1922-1930 年までの仏領西アフリカの主要な植民地の歳入<sup>24</sup>

<sup>23</sup> 同上。

<sup>24</sup> ANOM agefm//931 Tableau sur la nature des recettes. Colonie de la Haute-Volta, Niger, Sénégal, Soudan française, Côte d'Ivoire.から筆者作成。

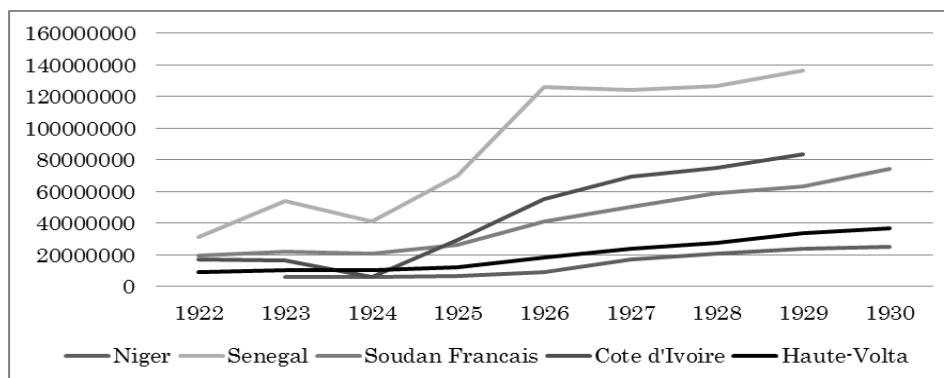


図 5-2. 1922-1930 年までの仏領西アフリカの主要な植民地の歳入<sup>25</sup>

歳入における人頭税の割合を比較すると、オート・ヴォルタ植民地の特異性がさらに顕著にみられる(表 5-7, 図 5-3)。1922 年から 1930 年までの期間、オート・ヴォルタ植民地の歳入は約 7 割を人頭税に依存しており、1926 年にはほぼ 8 割となっていた。他の植民地では人頭税の割合は平均して 5 割以下であることをみると、かなり特殊なものであったといえる。

	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930
Niger		56.2%	58.6%	55.1%	46.9%	42.6%	42.3%	38.8%	40.7%
Senegal	42.7%	27.2%	37.0%	22.6%	13.3%	15.0%	14.7%	14.3%	
Soudan Francais	63.8%	57.6%	62.0%	53.3%	52.3%	49.5%	49.0%	48.3%	49.1%
Cote d'Ivoire	13.9%	61.5%	12.6%	44.0%	30.2%	32.2%	34.8%	32.4%	
Haute-Volta	79.4%	70.1%	78.9%	78.3%	79.9%	75.9%	73.5%	74.3%	72.9%

表 5-7. 1922-1930 年までの仏領西アフリカの主要な植民地の歳入における人頭税の割合<sup>26</sup>

<sup>25</sup> 同上。

<sup>26</sup> 同上。

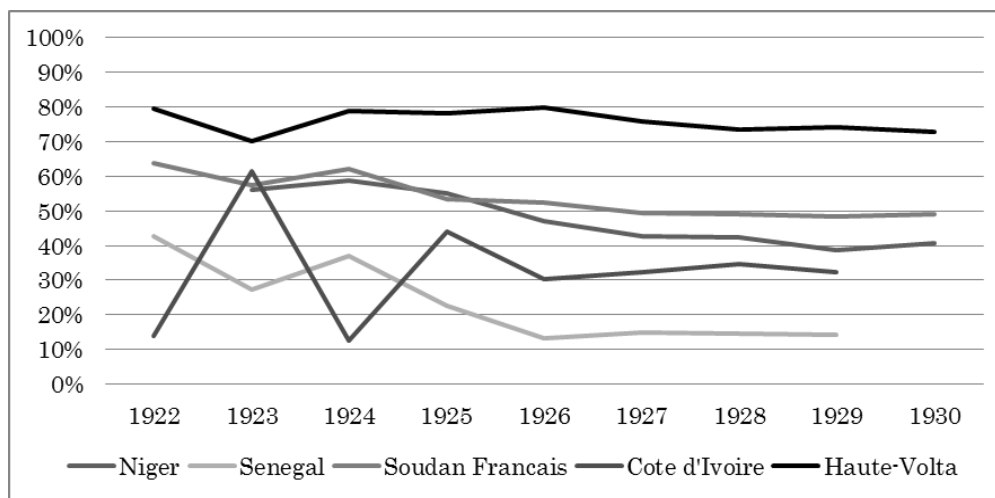


図 5-3. 1922-1930 年までの仏領西アフリカの主要な植民地の歳入における人頭税の割合<sup>27</sup>

このように、オー・セネガル・ニジェール植民地、オート・ヴォルタ植民地においては、人頭税は決定的に重要なものであった。同時に、人頭税は「伝統的首長」を懐柔し、植民地行政に帰属させる手段でもあった。遅くとも、1903 年から「(人頭税徴集における)首長への手数料」(les remises aux chefs)が存在し、これは少なくとも 1959 年まで継続された<sup>28</sup>。さらに、1913 年からは準管区長に対して「首長への配当金」(les allocations aux chefs)が設定され、1919 年にオート・ヴォルタ植民地が成立すると「原住民政」(l'administration indigène)に郡長、村長が組み込まれ、それぞれに給与が支払われるようになった<sup>29</sup>。

こうした「手数料」、「配当金」、「原住民政人件費」をまとめたものが、表 5-8、図 5-4 である。「手数料」は基本的には人頭税の 1%と定められており、1903 年から 1904 年を除いて、予算規模に応じてほぼ一定し、予算全体の 1%から 2%に推移している。他方で、表 5-8、図 5-4 から明らかなように、オー・セネガル・ニジェール植民地時代の「配当金」からオート・ヴォルタ植民地の「原住民政人件費」への変化は非常に大きなものであった。「配当金」は予算の 0.5%ほどであったのが、「原住民政人件費」は 3%から 2.5%を占

<sup>27</sup> 同上。

<sup>28</sup> 厳密には、項目の名称は微細な変化を辿っている。たとえば、「人頭税徴集料と首長への手数料」(Remises aux chefs et frais de la perception de l'impôt)に加え、1909 年から 1913 年までのあいだには、「人頭税徴集料と村長への手数料」(Remises aux chefs de village et frais de la perception de l'impôt)が別の項目として立てられていた。これらはあまりに煩雑であるため、ここではすべて言及しない。

<sup>29</sup> なお、厳密には、1913 年以前においても、アギブ王などといった王に対する「首長への贈物」、「首長の年金」といった細々とした支出が計上されているが、ここではこれらは除外した。

めるようになった。つまり、少なくとも公的には、1903 年以降、「伝統的首長」には「手数料」が支払われ、1913 年から一部の「伝統的首長」に「配当金」、オート・ヴォルタ植民地が構成された 1919 年以降、村長・郡長も含む「伝統的首長」に「人件費」があてがわれ、この給与が「手数料」を上回ることになった。軍事-政治的な意味での植民地統治の確立が連続的なものであることは 4 章で指摘したが、行政-財政的な意味での植民地統治の確立は「人頭税手数料」、「配当金」、「人件費」と段階的に確立されていったといえる。1919 年にオート・ヴォルタ植民地ができると、あらゆる「伝統的首長」に植民地行政から給与が支払われ、「伝統的首長」は「原住民行政」の一角を担う植民地行政の一部となったのである。

	人頭税手数料	配当金／「原住民行政」人件費
1903	721,000	
1904	699,300	
1905	145,000	
1906	138,000	
1907	172,000	
1908	135,700	
1909	115,280	
1910	120,850	
1911	122,425	
1912	126,600	
1913	159,200	53,800
1914	132,800	51,600
1915	130,960	51,800
1916	130,000	49,900
1917	160,940	40,900
1918	386,000	54,600
1919		
1920	103,470	221,380
1921	132,200	278,285
1922	167,780	325,795
1923	191,700	323,360
1924	207,660	356,480
1925	232,224	376,480
1926	330,518	527,031
1927		605,607
1928	447,000	636,131
1929		
1930	662,000	949,755
1931	640,000	997,676
1932	583,750	955,518

表 5-8. 「伝統的首長」への給付<sup>30</sup>

<sup>30</sup> Haut-Sénégal-Niger 1903: 37; 1904: 70; 1905: 22; 1906: 19; 1907: 20; 1908: 28; 1909: 16, 32; 1910: 18, 32; 1911: 18, 40; 1912: 20, 42; 1913: 40, 66, 190; 1914: 110, 190; 1915: 118, 198; 1916: 64, 142; 1917: 64, 152; 1918: 66, 160; Haute-Volta 1920: 36, 46; 1921: 36, 44; 1922: 54, 62; 1923: xviii, 42; 1924: 32, 42; 1925 32, 42; 1926: 34, 44; 1928: xxv, 48;



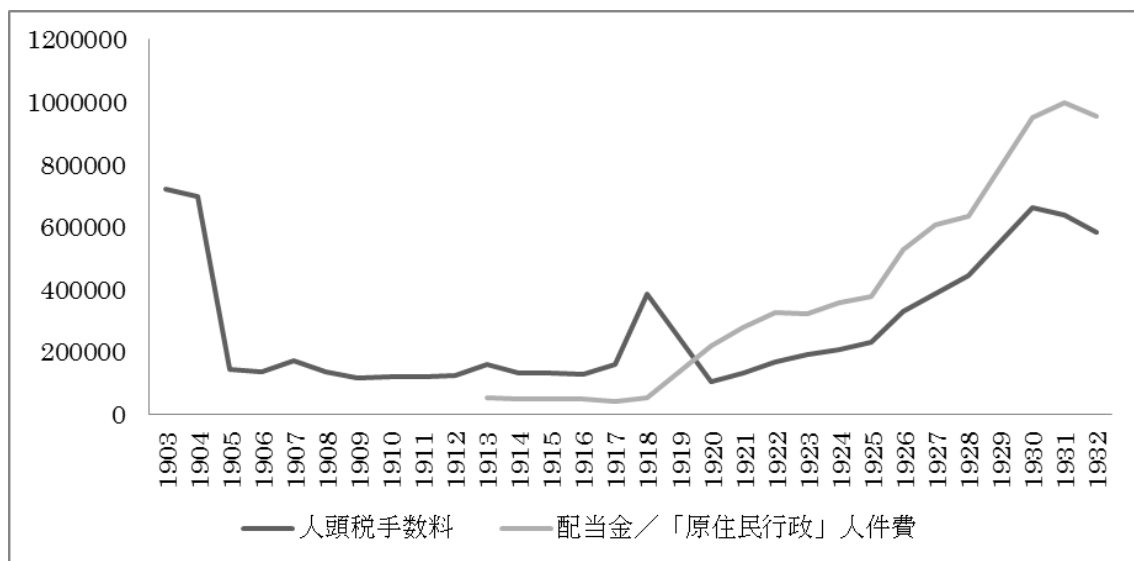


図 5-4. 「伝統的首長」への給付<sup>31</sup>

オート・ヴォルタ植民地成立以降、「伝統的首長」に対する給与は基本的には植民地行政のヒエラルキーに準じたものとなっていた。1920 年の総督決定によって、図 5-5 のように、州長、郡長、村長という植民地行政の行政単位の階層制を基本的に反映された給与体系が施行されることになった。ただし、図 5-5 をみれば、理解されるように、大まかには、階層的な構成をとっているが、この時点では、管区ごとに管区内の州長・郡長の給与が設定されていたため、異なる管区で比較すると、郡長が州長よりも給与が高いといったズレがあった。言い換えれば、階層制を導入させた一方で、管区ごとに異なる観点で給与が与えられていた。

職位(給与)		人員
モロ・ナバ(Moro-Naba, 20000 fr)		1名
ヤテンガ・ナバ(Yatenga-Naba, 4000 fr)		1名
アベラマン・郡長(chef de canton, 4000 fr)		1名
州長(chef de province, 2000-300 fr)		22名
郡長(chef de canton, 1200-120 fr)		172名
村長(chef de village, 120 fr-)		-

図 5-5. 1920 年の「伝統的首長」の給与体系<sup>32</sup>

1931: 42, 50; 1932: 42, 50 をもとに筆者作成。なお、1927 年、1930 年の数値は、それぞれ Haute-Volta 1928: xxv; 1931: 42, 50 を参照した。

<sup>31</sup> 同上。

<sup>32</sup> CNABF 229 Décision n. 183 portant fixation de la solde des chefs indigènes, chefs de province de canton et exceptionnellement chefs de village dans la colonie de la Haute-Volta, Ouagadougou, le 16 avril 1920. をもとに筆者作成。

1920年代を通して給与体系は公文書を介さない微調整が施され、その過程のなかで、「州長」の削減、ヤテンガ・ナバの給与の大幅増額、モロ・ナバの宮廷の「大臣」も「原住民行政」への組み込み、給与の職位別の一定程度の平準化がなされ、1929年の総督決定によって、これらの追認と一部の増額がなされた<sup>33</sup>。オート・ヴォルタ植民地が解消され、コートディヴォワール植民地に併合された後に、「原住民行政」は他の植民地行政の職位と同様に完全に階層化される。すなわち1934年のアレテ(命令)によって、モロ・ナバ、ヤテンガ・ナバ、関連する職位を例外として、郡長の給与が、管区の主要拠点に位置する「主要郡長」と郡の重要度に応じて等級別に構成されることになったのである(図5-6)。

職位	給与
一級主要郡長(chef de canton principal de 1ere classe)	18000 fr
二級主要郡長(chef de canton principal de 2eme classe)	15000 fr
一級郡長(chef de canton de 1ere classe)	12000 fr
二級郡長(chef de canton de 2eme classe)	10000 fr
三級郡長(chef de canton de 3eme classe)	8000 fr
四級郡長(chef de canton de 4eme classe)	6000 fr
五級郡長(chef de canton de 5eme classe)	4000 fr
六級郡長(chef de canton de 6eme classe)	2000 fr
七級郡長(chef de canton de 7eme classe)	1200 fr
八級郡長(chef de canton de 8eme classe)	600 fr

図5-6. 1934年の「伝統的首長」の給与体系<sup>34</sup>

一方で、植民地行政は、「伝統的首長」の地位や給与を「伝統的首長」に対する懲罰の手段として利用していた。たとえば、1923年8月デドゥグ管区、「教示したにもかかわらず、[植民地行政によって]トラックで運ばれてきた綿花の[外来の]種を受けとらなかった」かどで2名の郡長が減俸<sup>35</sup>、同年12月デドゥグ管区、労働力徴用に対して「多大なる悪意を示した」かどでバラニの首長ほか2名の村長が減俸<sup>36</sup>、1926年デドゥグ管区、郡長が「彼の怠慢によって…道路整備のための労働力を供給しなかった」かどで減俸<sup>37</sup>、1932年デドゥ

<sup>33</sup> CNABF 27V10 Décision n. 562 portant augmentations de solde et attribution de soldes de début a des chefs indigènes de la colonie de la Haute-Volta, Ouagadougou, le 3 juillet 1929.を参照。

<sup>34</sup> CNABF 42V408 Arrête n. 3206 B.P. portant constitution de l'administration indigène en Côte d'Ivoire, Abidjan, le 10 octobre 1934.をもとに筆者作成。

<sup>35</sup> CNABF 27V86 Lettre du commandant du cercle de Dedougou au gouverneur de la Haute-Volta, Dedougou, le 3 août 1928.

<sup>36</sup> CNABF 27V10 Lettre de l'administrateur commandant le cercle de Dedougou au gouverneur de la Haute-Volta, Dedougou, le 16 décembre 1923.

<sup>37</sup> CNABF 42V474 Lettre de l'administrateur commandant de cercle de Dedougou au gouverneur de la Haute-Volta, Dedougou, le 6 janvier 1926.

グ管区、「職務遂行の度重なる怠慢」によって郡長の解任<sup>38</sup>、1937 年トゥーガン管区、「共同利用の穀倉設置のために必要な労働力を集めなかった」かどで郡長が減俸されている<sup>39</sup>。

植民地行政による暴力の独占以降も、散発的な暴力事件は生じていたが、消極的な抵抗とそれに対する減俸・解任という断続的な応酬へと移行していったことは、軍事・政治的な植民地統治の確立だけではなく、1920 年代以降は行政・政治的な意味においても植民地行政が確立されていったことを表している。

他方で、すでに述べたとおり、人頭税に大きく依存する植民地行政の財政は、農村から中央へと富を移転させるように機能した。たとえば、1928 年のオート・ヴォルタ植民地の予算をみると(Haute-Volta 1928)、人頭税に約 7 割を依存したオート・ヴォルタ植民地の予算の約 5 割は、植民地行政の人件費となっていた。具体的には、1928 年の領域予算では歳出の約 49%が人件費に充てられている<sup>40</sup>。このとき、植民地行政で働いていたヨーロッパ人は 458 名、(一時的な雇用も含む)「原住民」は 1,636 名<sup>41</sup>であった。1928 年ではオート・ヴォルタ植民地の総人口は 3,091,804 人であるが、大雑把に言えば、人口の 0.1%の給与のために歳出の半分は消えていたことになる。詳細は別稿に譲るが、各管区の拠点に、管区司令官、補佐官、事務員、通訳、衛兵、軍人などが配備された。そして、こうした行政機能は、オート・ヴォルタ植民地の政庁のおかれたワガドゥグ、商業拠点としての位置づけが与えられたボボ・ジュラソに集中していた。したがって、歳出の約 5 割の人件費は、植民地行政のヒエラルキカルな行政区分とそれに対応した行政組織という回路を経て、農村から中央へと配分された。あるいは、ヨーロッパ人の行政官は通常、数年で配置換えとなったため、富は国外へと流出したと想定される。

1928 年の予算を事業別にみると、植民地行政そのものを維持・拡張するための予算を除けば、重点的な事業は、道路整備(公共事業)、輸出入商品の輸送の実施(輸送事業)、農業畜産業の調査研究(農牧業)であり、換金作物とその輸出にほぼ特化していたことが理解できる(表 5-9)。他方で、医療、教育は、ワガドゥグ、ボボ・ジュラソといった都市における病院、診療所、学校の維持・整備にあてられている。植民地行政関連施設の整備・維持、工場の

---

<sup>38</sup> CNABF 27V10 Décision n. 867 portant révocation du chef de canton de Diankassoun et nommant son successeur, Ouagadougou, le 5 décembre 1932.

<sup>39</sup> CNABF 27V85 Rapport de l'administrateur adjoint de cercle de Tougan au gouverneur du Soudan français, Tougan, le 13 février 1937.

<sup>40</sup> 1928 年の予算の各項目の人件費の総額は 12,410,201.00 フランであり、歳出の総額は 25,347,323.00 フランである。

<sup>41</sup> ただし、これには「伝統的首長」、賦役者は数え上げられていない。

設置などを通して、このように、予算の大半は政庁のおかれたワガドゥグと商社の支店が集中したボボ・ジュラソで消費されたため、ワガドゥグとボボ・ジュラソは植民地統治以後、都市化が進展した(表 5-10)。

事業別予算	(f.)	割合
行政関連*	8,539,261.00	33.7%
公共事業(道路建設、行政施設整備)	3,276,403.00	12.9%
運送事業	2,865,678.00	11.3%
農牧業	2,096,264.00	8.3%
医療事業	1,791,655.00	7.1%
教育事業	1,568,396.00	6.2%
電信事業	1,374,893.00	5.4%
その他諸経費・各種予備費	3,834,773.00	15.1%
合計	25,347,323.00	

\*行政官、「伝統的首長」、通訳、警察、刑務所、財務、政府刊行物印刷事業などの人件費・設備費

表 5-9. 1928 年、オート・ヴォルタ植民地予算配分<sup>42</sup>

	1888	1907	1909	1914	1919	1926	1931	1945	1951	1958	1962
Ouagadougou	5,000			19,332		12,238	10,768	18,000	37,678		59,126
Bobo-Dioulasso	5,500	7,788	8,352		5,000	6,500	11,155	28,000	36,967	42,195	50,000

表 5-10. ワガドゥグとボボ・ジュラソの都市人口推移<sup>43</sup>

本節で述べたことをまとめると以下のようなになるだろう。まず、植民地統治以後、西アフリカ内陸において最大の経済主体は植民地行政であったということである。これ以前に、このように資本を広域かつ大規模に移転させる経済主体は存在しなかった。そのため、植民地行政とその経済活動である財政に焦点をあてる必要がある。

オート・ヴォルタ植民地は独立採算であったため、国外から植民地行政を通じて資本が流入することは一切なく、港湾・大規模都市の欠如から人頭税に大きく依存することにな

<sup>42</sup> Haute-Volta 1928 から筆者作成。

<sup>43</sup> ボボ・ジュラソ (1888 年: Binger 1892 t. I: 378)、(1909 年, 1919 年, 1926 年, 1945 年, 1951 年: CNABF 22V280 Rapport général sur les opérations de recensement de la ville de Bobo-Dioulasso. 1951.)、(1921 年: Fourchard 2001: 50)、(1931 年: AHCH s.c. Lettre du Maire de la Commune de Bobo-Dioulasso à l'Administrateur en Chef Commandant le Cercle de Bobo-Dioulasso. Bobo-Dioulasso, le 26 février 1958.)、(1958 年, 1962 年: CNABF 36V140 Projection démographique de la Haute-Volta. 1962.)、ワガドゥグ(1888 年: Binger 1892 t. I: 459) (1914 年, 1926 年, 1931 年, 1945 年, 1951 年, 1959 年: CNABF 36V148 Recensement démographique de la ville de Ouagadougou. Résultats provisoire. juin 1962.)、(1962 年: CNABF 36V140 Projection démographique de la Haute-Volta. 1962.) から筆者作成。

った。また、人頭税徴収は「伝統的首長」によって代行させ、「伝統的首長」に人頭税徴集の手数料と給与を支払うという互惠関係を構築し、広範囲での人頭税の徴収を可能にした。

植民地行政の財政は、基本的に、農村から(のちに都市となる)中心へ、部分的には国外への富の移転をおこなっていた。歳出の約 5 割を占める人件費の対象となる役人・軍人・警察などは、ワガドゥグ、ボボ・ジュラソを中心として、各管区の拠点に、傾斜的に配置されていた。これらの人件費が、仮にすべてオート・ヴォルタ植民地内に還流されることがあったとしても、植民地行政の階層的な行政単位を基礎として、管区や郡の拠点のある中心に投下された。また、農民には直接的にあまり恩恵のなかった換金作物への投資を除けば、他の植民地行政の事業(医療、教育)は、ワガドゥグ、ボボ・ジュラソ、各管区の拠点に限定されていた。つまり、農村から集められた富は、植民地行政のヒエラルキカルな行政組織にそって、中心から傾斜的に配分されていった。その結果として、ワガドゥグ、ボボ・ジュラソ、各管区の拠点では、一定程度の経済発展により、人口増加が生じた。植民地行政の財政は、行政組織にそった中心からの傾斜的な富の配分によって、各拠点の人口・経済規模において、行政組織のヒエラルキーを実体化させたのである。

次に次節では農村においてどのようなことが生じていたのかをマクロな数字から概観する。

### 5-3. 換金作物の経済

おおまかにいえば、1890 年代末から 1910 年代初頭にかけては、ボボ・ジュラソとその周辺での天然ゴムが主要な換金作物となり、1920 年代以降、ムフン川湾曲部を含むオート・ヴォルタ植民地における主要な換金作物は、綿花、カリテ、カポックとなり、特に綿花が重要視された。

天然ゴムについては、1880 年代より仏領ギニアでは天然ゴムのブームが生じており(たとえば、Osborn 2004)、1906 年の仏領西アフリカにおけるゴム輸出の報告によれば、クティアラ、ブグニ、シカソ、フータ・ジャロン、カンカンなどとともにボボ・ジュラソでもゴムの輸出量が 1903 年から 2 倍から 3 倍に増加している(Henry 1906: 4)。1904 年にはシカソ、カイなどと並行して、ボボ・ジュラソにも農業試験場が設置され、ゴムの商業化のための研究がなされている(Haut-Sénégal et Niger 1904: 81)。こうしたこともあって、1904 年の仏領西アフリカのオー・セネガル・ニジェールの報告書では、ボボ・ジュラソでのゴムの商業化が成功しているものとみなしている(Gouvernement général de l'Afrique

occidentale française 1904: 19)。

植民地行政は、ボボ・ジュラソに、1904 年に診療所、1905 年に小学校、1908 年に地方財務局(des receveurs locaux du trésor)の設置をおこなっている(Haut-Sénégal et Niger 1904: 81; Haut-Sénégal et Niger 1905: 7; Haut-Sénégal et Niger 1907: 9)。小学校では「近代的な」ゴムの栽培と採集を学ばせようという意図があり(Anonyme 1905: 357)、行政の一連の整備は植民地経済の整備とほぼ同義のものであったといえよう。

こうした植民地行政の施設整備と並行して、1904 年から 1911 年のあいだに、ボルドーの商社(Maurel et Prom、Dèves et Chaumet、Peyrissac など)の支店がボボ・ジュラソに設立された(Fourcand 2001: 49)。のちに仏領スーダンの首都となったバマコでは、これらの商社の支店は 1894 年から 1902 年に開設させており(Doumbo et Traoré 2004: 193)、おおまかにいえば、10 年遅れて植民地経済の萌芽がみられるといえる(表 5-11)。

バマコ		ボボ・ジュラソ	
設立年代	商社名	設立年代	商社名
1894	La maison chavanel	1898	Le Niger-Soudan
1897	Perrissac	1906	Buchan et Teissère
1899	Dèves et Chaumet	1908	Maurel et Prom
1900	Buchan et Teissère	1904-1911	Perrissac, Dèves et Chaumet
1902	Maurel et Prom		

表 5-11. バマコとボボ・ジュラソのフランス商社の支店開設年代<sup>44</sup>

しかし、ゴムの商業化はすぐに立ち消えてしまう。これは 1913 年にゴムの国際価格が下落していったことに起因する(Fourchard 2001: 49)。これをうけて、仏領西アフリカ総督は 1913 年 9 月 11 日付のアレテによって、クチャラ管区の 3 つの郡とボボ・ジュラソ管区全域で天然ゴムの生産と販売は 3 年間の禁止されることになった(Gouvernement général de l'Afrique occidentale française 1913: 9)。

第一次世界大戦、ヴォルタ・バニ戦争を経て、1919 年にオー・セネガル・ニジェール植民地から分離して、オート・ヴォルタ植民地が成立した。しかし、20 年もたたず、1933 年にオート・ヴォルタ植民地は解消され、近隣の領土に併合されることになる。これは直接的には、オート・ヴォルタ植民地総督が強引に推し進めた綿花の大々的な「商業化」とその失敗が原因であった(Schwartz 2003)。そして、この綿花の「商業化」がこの時代を特徴づ

<sup>44</sup> Doumbo et Traoré 2004: 193; Fourchard 2001: 49; 2003: 453 にもとづいて筆者作成。

けることとなる。

綿花の「商業化」の直接的な歴史は、1903 年の植民地綿花協会(*l'Association cotonnière coloniale*)の設立に遡る。この団体は仏領西アフリカの綿花取引にかかわる民間組織が植民地での産業化の推進を目的として設立された(Schwartz 1999: 268)。前年の 1902 年にクリコロで綿花栽培の農地を設立し、当初はニジェール川流域を主たる対象として捉えていた。仏領オート・ヴォルタ成立以前の 1911 年にも、植民地綿花協会のメンバーが派遣されて、ボボ・ジュラソとデドゥグを調査し、潜在的な生産性を示唆している(Bloud 1925: 67)。しかし、大々的なキャンペーンが行われるようになるのは、第一次世界大戦後のことである。

大局的には、第一次世界大戦後のフランス本国での経済の低迷を打破するために、植民地の活用が重要視されたことが、仏領オート・ヴォルタにおける綿花の「商業化」につながったといえる。コンクリンによれば、第一次世界大戦後に仏領西アフリカ総督の方針とイデオロギーが転換したとされる(Conklin 1997)。第一次世界大戦後に、それ以前の中心的な主題であった鉄道建設などのインフラ整備から病院の整備や換金作物の生産に比重がおかれるようになった(ibid.: chp. 7)。綿花の「商業化」の重要な転換を促した人物がサローである。1920 年に植民地省の大臣となったサローは、1921 年に植民地における労働に関する法案を提出し、そこで植民地での大規模な綿花の生産を謳っている(Schwartz 1999: 264)。この法案そのものは議会で廃案となったが、仏領西アフリカでの換金作物の生産に植民地行政が介入するという方針は継続された。

まず、1923 年に仏領オート・ヴォルタに農業局(*le Service de l'agriculture*)が設置され、クドゥグ管区にパイロット・ファームが開設される(Schwartz 1995: 267)。1923 年末から 1924 年初頭にかけて、植民地綿花協会による調査が仏領オート・ヴォルタで実施される(Schwartz 1993: 211)、1924 年から綿花生産の強化のキャンペーンが植民地内全域でなされるようになる(Gervais 1994: 31)。また、これ以降、「共同農地」(*un champ collectif*)と呼ばれる行政官、郡長、村長の農地での無償労働が義務づけられる(ibid.: 31)。さらに、これらの行政官たちの監視の元に綿花の栽培が強制された(Schwartz 1993: 211)。強制の実態については、先行研究においても具体的には言及されておらず、さらなる調査が必要とされるが、綿花生産の強化のキャンペーンは相当苛烈なものであったと想定される。キャンペーン開始初年度(1924-1925 年)の収穫量は前年度の約 10 倍の 3,528 トンとなっているからである(図 5-6, 表 5-12)。後年の 1951 年から 1956 年までの仏領オート・ヴォルタの各年の収穫量は 900 トン以下であり、3,000 トンに到達するのは農業機械の一部導入後の 1958 年

度のことである(ibid.: 214)。

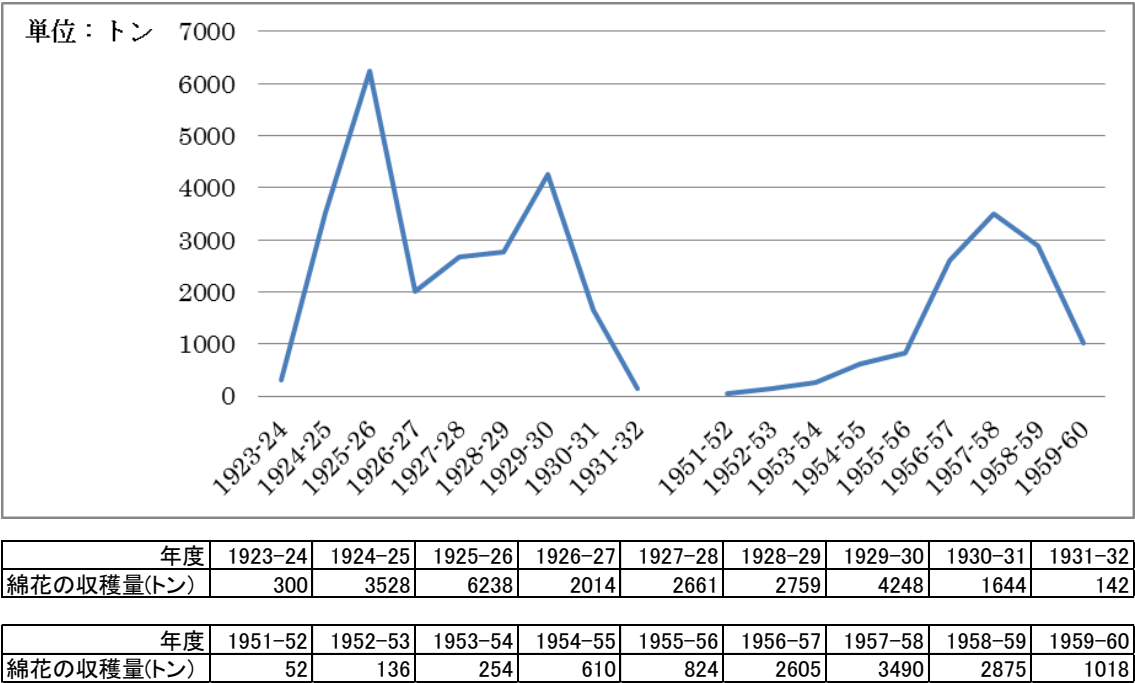


図 5-6, 表 5-12. 仏領オート・ヴォルタにおける綿花の収穫量<sup>45</sup>

このような綿花政策は一部の企業の進出を呼び込んだ。1924 年段階で、仏領西アフリカを代表する大企業である SCOA(le Compagnie Française de l'Afrique Occidentale)と CFAO(le Compagnie française de l'Afrique occidentale)の前者はワガドゥグに、後者はボボ・ジュラソに支店をもつようになっていた(Coquery-Vidrovitch 1975: 602)。1925 年時点で、ボボ・ジュラソには、換金作物の買取と輸出入を行う、上述の 2 社を含む 9 つのヨーロッパの商社の支店があった<sup>46</sup>。1926 年には植民地綿花協会によるパイロット・ファームがボボ・ジュラソ近郊に設置され(Schwartz 1993: 212)、1925 年から植民地綿花協会の工場の建設がワガドゥグとボボ・ジュラソで着工された(Bloud 1925: 66)。1927 年にはオート・ヴォルタ植民地では 4 つの企業の 12 の工場が存在していた(表 5-13)。

<sup>45</sup> Schwartz 1993: 214 にもとづき筆者作成。

<sup>46</sup> このほかに店舗をもたず、他の商社の支店を間借りしたセネガル人の商人がいたことも報告されている。ANCI 5EE5(5) Rapport politique annuel, Bobo-Dioulasso, 1925.



	Ouagadougou	Bobo-Dioulasso	Koudougou	Dedougou	Tougan	Fada N'Gourma	Tenkodogo
ACC	○	○					
CITEC	○	○	○	○	○	○	○
SCOA	○		○				
M. Brunel	○						

ACC(l'Association cotonnière coloniale)

○工場が存在する都市

CITEC(le Comptoir des industries textiles et cotonnières)\*

SCOA(la Société commerciale de l'Ouest africain)

\*原文ではle Comptoir de l'industrie cotonnière

表 5-13. 1927 年、オート・ヴォルタ植民地の綿花加工工場の分布<sup>47</sup>

実際に、どれほどの量の綿花が工場で一次加工を経たかはわかっていないが、一次加工を施すだけで相当の収益をあげていた。植民地行政の報告によれば、1924 年の収穫の終えた 2 月の段階で、綿花の一次加工後の操綿(un coton engrené)の価格は 1 トンあたり 4,500 フランから 5,000 フランであった<sup>48</sup>。綿花の価格は最大でも 1 トンあたり 1,800 フランであったことから、工場での人件費の安いオート・ヴォルタ植民地で一次加工をおこなうことでかなりの規模の利益をあげたものと考えられる。

綿花の取引の詳細はいまだ十分に研究されていないが、少なくとも 1925 年以降は一定の規則と公定価格が存在していた<sup>49</sup>。これによれば、綿花を直接市場で売るとは禁止され、買い付けをおこなう商人は行政官、農業局、警察のいずれかに届け出をだし承認を得なければならなかった。さらに、加工以前の綿花(un coton brut)は辺境地では 1kg あたり 0.75 フラン、その他のすべての地域では 0.90 フランを底値としている。こうした公定価格は微細に変更がなされていたようである。たとえば、1929 年の報告では、ドリ管区では綿花 1kg あたり 0.50 フランとなっている(表 5-14)。

<sup>47</sup> Lalande 1927: 83 にもとづき筆者作成。

<sup>48</sup> CNABF 233 Renseignements pour le Bulletin politique et économique, Haute-Volta, février 1924.

<sup>49</sup> 1925 年 5 月 23 日付の仏領オート・ヴォルタの領土内のアレテで決定され、その後、同年 9 月 10 日付の仏領西アフリカ総督によるアレテによって、綿花の取引について、いくつかの規定がなされている(CNABF 235 Rapport annuel politique et administratif. Colonie de la Haute-Volta. 1925.)。

管区名	価格(フラン)
Bobo-Dioulasso	1.5-1.8
Dedougou	1-1.4
Ouagadougou	0.95-1
Koudougou	0.8-1.8
Kaya	0.8
Ouahigouya	0.8
Tenkodogo	1-1.75
Gaoua	0.8-0.9
Fada	0.9
Dori	0.5

表 5-14. 1929 年、オート・ヴォルタ植民地内の綿花の価格<sup>50</sup>

もっとも、現実の取引では、公定価格よりも安値となっていた可能性が高い。すでに述べたように、綿花の買い取り業者は植民地行政の認可を受けた商人・商社によって独占されており、農村では人頭税の支払い手段としてフランを必要としていたからである。前者については、公定価格の設定、綿花取引業者の参入制限といった施策が、綿花取引の自由市場の形成を大きく阻害したといえるだろう。後者について、さらに検討していこう。綿花の売上によって人頭税をどれほどまかなえたのであろうか。

まず、例外的に詳細が記録されている 1927 年から 1929 年までの期間をとりあげよう。この史料では、生産量とともに、さきの表 5-14 にまとめた管区ごとの綿花の価格が記載されていた。これをもとに各管区の綿花の最高価格を生産量にかけ、綿花の売上総額をまとめたものが表 5-15 である。そして、表 5-16 において、この綿花の売上総額と人頭税を比較した。綿花の総売上は人頭税の 2 割以下であり、綿花の売却だけでは人頭税の支払いをほとんどまかなえなかったといえる。

<sup>50</sup> ANOM 14mim/1727 Rapport économique, Haute-Volta, 2e trim. 1929.にもとづいて筆者作成。

	生産量(キロ)		売上総額(フラン)	
	1927-1928	1928-1929	1927-1928	1928-1929
Bobo-Dioulasso	99,369	158,113	178,864.20	284,603.40
Dedougou	834,634	474,133	1,168,487.60	663,786.20
Ouagadougou	526,000	875,000	526,000.00	875,000.00
Koudougou	698,000	290,660	1,256,400.00	523,188.00
Kaya	134,360	238,430	107,488.00	190,744.00
Ouahigouya	231,202	507,705	184,961.60	406,164.00
Tenkodogo	60,563	130,491	105,985.25	228,359.25
Gaoua	35,549	49,899	31,994.10	44,909.10
Fada	38,607	31,350	34,746.30	28,215.00
Dori	2,800	3,017	1,400.00	1,508.50
合計	2,661,084	2,758,798	3,596,327.05	3,246,477.45

表 5-15. 1927 年から 1929 年までのオート・ヴォルタ植民地内の管区別の綿花生産量と売上総額<sup>51</sup>

	1928年	1929年
人頭税	20,231,244.00	24,839,656.75
綿花総売上	3,596,327.05	3,246,477.45
人頭税に占める綿花総売上の割合	17.8%	13.1%

表 5-16. 1928-1929 年度の人頭税と綿花総売上の比較<sup>52</sup>

この傾向は必ずしも 1928 年度と 1929 年度に限定されない。他の年度については、管区ごとの生産量や取引価格のデータを欠いているため、概算で綿花の売り上げと人頭税の比較をおこなう。表 5-17 は、オート・ヴォルタ植民地全体の綿花生産量に対して、取引価格を 1 トンあたり 1.80 フランと最高値に設定して売上総額をもとめ、綿花の売り上げが人頭税をどれほどまかなえたのかを示したものである。驚異的な生産量を示した 1926 年度を除いて、取引価格を現実よりも高く想定したとしても、綿花の売り上げは人頭税の総額に達していなかった。綿花だけでは、人頭税を支払いきれなかったのである。

	1924年	1925年	1926年	1927年	1928年	1929年	1930年	1931年
綿花総売上	540,000.00	6,350,400.00	11,228,400.00	3,625,200.00	4,789,800.00	4,966,200.00	7,646,400.00	2,959,200.00
人頭税	7,306,959.00	8,317,401.50	9,515,763.75	14,653,242.50	18,083,734.00	20,231,244.00	24,839,656.75	26,872,061.00
割合	7.4%	76.4%	118.0%	24.7%	26.5%	24.5%	30.8%	11.0%

表 5-17. 1924-1931 年度の人頭税と綿花総売上の比較<sup>53</sup>

<sup>51</sup> ANOM 14miom/1727 Rapport économique, Haute-Volta, 2e trim. 1929.にもとづいて筆者作成。

<sup>52</sup> 人頭税は ANOM agefm//931 Tableau sur la nature des recettes. Colonie de la Haute-Volta にもとづいた。

<sup>53</sup> 人頭税については ANOM agefm//931 Tableau sur la nature des recettes. Colonie de la Haute-Volta、綿花の生産量については Schwartz 1993: 214 にもとづき筆者作成。

植民地行政はこの事実を部分的には認識していたようである。オート・ヴォルタ植民地解体の直接的な要因となった 1932 年の監査官による要請を受けて作成された報告書<sup>54</sup>において、綿花、カリテ、カボックといった主要な換金作物による売り上げではまかないきれないことを暗に認めている。報告書では、換金作物の売上総額の推計値が示されているが、綿花の売上総額を大幅に水増しした推計値でさえ、人頭税の総額に達していない(表 5-18)。この報告書を書いた行政官は、トウジンビエなどの農産物の総生産量の推計、英領ゴールド・コーストへの出稼ぎから得られる外貨収入の推計、公共事業から得られる現金収入の推計をあげて、人頭税の規模の妥当性を主張している。この点については、後に検討するが、ここでは、換金作物だけでは人頭税がまかないきれないものであったことを確認しておこう。

人頭税	18,083,734
換金作物総額	8,609,750
カリテ・カボック売上	2,609,750
綿花売上	6,000,000

表 5-18. 植民地行政官による 1927 年度の換金作物の推計値と人頭税<sup>55</sup>

これらに加え、植民地行政による徴兵、植民地行政と私企業などによる強制労働がなされた。包括的な数値はまとめられていないが、オート・ヴォルタ植民地では、1922 年に 2,820 名、1926 年に 3,600 名、1928 年に 3,337 名が徴兵されている(Echenberg 1975 : 184; 1991 : 59, 109)。強制労働は、おおまかにいえば、オート・ヴォルタ植民地内での数か月の賦役と植民地外への長期的な賦役があった。

領域内の賦役は、年間 1 万人以上が徴集され、1926-1927 年のあいだでは年間約 4 万人あまりが強制労働に従事した(表 5-19)。植民地行政だけではなく、私企業もまた労働力を必要としていた。記録に残っている限りでは、1924 年から私企業による労働力の徴用が行なわれ、1926 年から 1928 年までの期間では植民地行政よりも多くの労働力を集めていた。つまり、労働力をめぐる拮抗関係が両者にはあったのである<sup>56</sup>。

<sup>54</sup> ANOM 1affpol/3068 Politique des produits industriels en Haute-Volta, 1932.

<sup>55</sup> ANOM 1affpol/3068 Politique des produits industriels en Haute-Volta, 1932.にもとづき筆者作成。

<sup>56</sup> このことはすでに先行研究でも指摘されている。たとえば、クドゥグ管区では、1920 年代後半から 1930 年代前半に、コートディヴォワールから林業会社が非常に活動的であっ

領域外への長期の強制労働では、1920年から1931年までの年平均で約8,000人が徴集され、合計約10万人が鉄道建設やプランテーションでの労働に従事した(表5-20)。特定の年代については死亡者や逃亡者についての記録があり、合計で2,611名が逃亡し、2,051名が死亡している<sup>57</sup>。労働者数から逃亡率、死亡率を計算し、死亡者、逃亡者が不明の年代にあてはめると、推計で約4,300人が逃亡し、約3,400人が死亡したことになる。

	領域内	
	植民地行政	私企業
1920	12,540	
1921	12,400	
1922	9,170	
1923	14,604	
1924	10,142	1,363
1925	10,784	7,000
1926	8,550	18,790
1927	15,032	24,890
1928	18,810	19,647
1929	10,201	7,879
1930	15,735	4,583
1931	17,903	2,286

表 5-19. 1920-1931 年、オート・ヴォルタ植民地内における強制労働従事者数<sup>58</sup>

	領域外	
	植民地行政	私企業
1920	4,681	2,172
1921	11,234	1,297
1922	14,455	307
1923	11,300	154
1924	2,650	2,316
1925	4,200	1,060
1926	5,385	1,792
1927	5,560	3,363
1928	6,457	777
1929	5,161	1,458
1930	6,600	1,018
1931	6,500	0

表 5-20. 1920-1931 年、オート・ヴォルタ植民地内における強制労働従事者数<sup>59</sup>

た。1925年に、Holschere de Côte d'Ivoire という林業会社はクドゥグで地方行政の援助なしに180名の労働者をリクルートし、同年、コートディヴォワールでの林業の拡大による労働需要の成長に直面し、ローカルの行政官は多くの労働者を引き抜かれることについて愚痴をこぼしている(Cordell and Gregory 1982: 215)。

<sup>57</sup> ANOM 1affpol/1248 Rapport politique et administratif annuel 1931, Haute-Volta. から筆者作成。

<sup>58</sup> ANOM 1affpol/1248 Rapport politique et administratif annuel 1931, Haute-Volta. から筆者作成。

<sup>59</sup> ANOM 1affpol/1248 Rapport politique et administratif annuel 1931, Haute-Volta. から筆者作成。

領域外への私企業による強制労働は、隣接する植民地におけるプランテーションの労働力を確保するために行われていた。たとえば、仏領スーダンのカイでサイザル麻を中心としたプランテーションを経営していたジャカンドペ耕作株式会社(*la Société anonyme des cultures de Diakandape, SACD*)は、カイではラッカセイ耕作のために労働力を確保できなかったため、1927年から、植民地行政からの合意を得て、仏領スーダンのシカソ管区・クチャラ管区、オート・ヴォルタ植民地から労働者をリクルートし、SACDのカイのプランテーションのために移送させ、少なくとも1942年まで継続させていた(Fall 1993: 229, 240)。表5-21は1929年の労働者の徴用の概要を示したものである。徴用された労働者の約2割が死亡、送還、脱走のいずれかの理由で脱落していたことがわかる。このことは公然の事実であったようで、ブグニ、シカソ、ボボ・ジュラソ、ワイグヤといった一部の管区司令官は逃亡者がでていること、SACDの労働力徴用に恒常的な法違反があったことを認識していた(ibid.: 247)。

植民地	管区	徴用時期	徴用人数	死亡者	送還者	脱走者	残存者
<u>オート・ヴォルタ</u>							
	ボボ・ジュラソ	2月	230	37	38	25	130
	ワイグヤ	4月	300	7	5	9	279
	デドゥグ	4月	105	5	6	8	86
	ヤコ	6月	64	2	1	1	60
<u>仏領スーダン</u>							
	シカソ	2月	300	33	46	8	213
	クチャラ	1月	150	13	13	4	120
	ブグニ	3月	350	29	41	3	277
合計			1499	126	150	58	1165
割合				8.4%	10.0%	3.9%	77.7%

表5-21. 1929年、SACDによる労働者徴用の概要<sup>60</sup>

植民地統治以前の奴隷狩りと植民地統治以降の労働者徴用は、連続的なものであったといえる。奴隷狩りにおける戦争が、強制労働では植民地行政ないしは私企業による半ば強制的な徴用に置き換わっただけであった。この点では、変化は連続的なものであった。

一方で、奴隷狩りと労働者徴用は、制度上の大きな差異をもっている。奴隷狩りにおいては、労働者そのものが商品であったのに対して、強制労働では、労働力が商品となっていた。つまり、前者では奴隷の所有権の移行として他の財との交換がなされたのに対して、後者では労働力と賃金という交換がなされるようになった。結論からいえば、この変化は

<sup>60</sup> Fall 1993: 241 を一部修正。

奴隷売買を通じたローカルな資本形成を阻害するものとなった。

奴隷狩りにおいては労働者そのものが商品となったため、戦争国家、奴隷商人、子どもを売った村長などの奴隷を売却した主体は利益をあげていた。したがって、地域全体としては、労働力の損失はタカラガイなどの富との交換によって補填され、奴隷を収奪した主体や中間取引をおこなった商人などに資本が形成されるようになっていた(本稿 1 章 6 節)。強制労働では労働者に公定賃金が支払われる形態をとったため、労働力の損失への補填はなされず、一方的に、労働力が流出することとなった。

公定賃金は、決して高いものではなかった。したがって、1920 年代から隣接するコートディヴォワール植民地や英領ゴールド・コースト植民地への労働移民がかなりの規模で生じた。史料ごとに数値に差異があるが、1924 年には季節ごとに 10 万、もしくは 15 万人が英領ゴールド・コーストに労働移民として越境し、1931 年までに英領ゴールド・コーストに居住するオート・ヴォルタ出身者は 16 万人、あるいは 22 万人とも報告されている(Gervais and Mande 2000: 64-65)。コートディヴォワールへの労働移民は 1919 年に 300 人から 2,000 人ほどとされていたが、1922 年以降、毎年数千人規模となっていたとされているが、これは過小評価の可能性があり、実際には 1 万人以上の労働移民がいたものと想定される(ibid. : 68-71)。

植民地行政は経済的には農村に対して収奪的に機能し、利益のほとんどない換金作物の耕作、過重な人頭税、強制労働によって、労働移民が生じたとまとめられるだろう。

#### 5-4. フランによる植民地経済

前節では、1900 年代から 1910 年代のオー・セネガル・ニジェール植民地、1920 年代のオート・ヴォルタ植民地において、人頭税が植民地予算の歳入の 7 割以上を占めていたこと、換金作物の売上では農民は人頭税を支払いきれていなかったことを指摘した。本節では、特に後者に着目しつつ、検討を行う。

まず、前節でとりあげた、1932 年の報告書<sup>61</sup>を再度ここで検討したい。この報告書では、1927 年のオート・ヴォルタ植民地の農民のいわば総生産の推計が行なわれている。農民の総生産は、(a)食糧農産物、(b)換金作物、(c)ゴールド・コーストの出稼ぎ送金、(d)植民地行政・私企業による賃金の 4 つから構成されているとし、その総額を表 5-22 のように見積もっている。この推計には、単純な計算ミスが多く含まれているため、すでに言及した(b)換

---

<sup>61</sup> ANOM 1affpol/3068 Politique des produits industriels en Haute-Volta, 1932.

金作物を除く、細目を確認する。

(a)食糧農産物	645,532,245
(b)換金作物	8,609,750
(c)出稼ぎ	3,500,000
(d)賃金収入	10,000,000
合計	667,641,995
<hr/>	
人頭税	18,083,734

表 5-22. 1927 年、オート・ヴォルタ植民地、農民の総生産推計<sup>62</sup>

(a)食糧農産物の細目は表 5-23 にまとめた。生産量と価格から導かれる総額に史料では明白な誤りがあり、生産量と価格からもとめた値を計算値とし、史料に書かれているものを総額とし、誤りがある項目については網掛けを付した。なお、この計算ミスはすべて過大評価となっており、意図的であった可能性がある。

まず、生産量の推計は、少数の植民地行政官が植民地内全体の生産量を正確に把握できたとは考えられず、あくまでも、植民地行政官の認識を反映したものであることを確認しておこう。そのうえで、総量・価格の双方において、トウジンビエが他の生産物を圧倒していると認識していたことが理解できる。

さらに、換金作物の生産総額を考慮すると、農業生産物全体のなかで、換金作物はわずか 1%ほどしか占めていないことがわかる。少なくとも、植民地行政官の認識としては、農業生産全体からすると、換金作物生産はごくわずかな地位しか占めていなかった。前節で述べたように、換金作物の売上総額は過大評価の可能性が高いことを考えると、換金作物の生産は生産物全体からするとマイナーな位置に留まっていたといえるだろう。

---

<sup>62</sup> ANOM 1affpol/3068 Politique des produits industriels en Haute-Volta, 1932.にもとづいて筆者作成。



生産物	生産量(トン)	価格(フラン/トン)	計算値	総額
トウジンビエ	1,020,500.0	300	306,150,000	510,250,000
モロコシ	98,663.0	500	49,331,500	49,331,500
コメ	2,029.0	2,000	4,058,000	10,058,000
インゲンマメ	31,995.0	800	25,596,000	24,997,500
ムギ	18.5	1,800	33,300	33,300
ワックス	10.0	9,000	90,000	90,000
ラッカセイ	92,010.0	400	36,804,000	36,804,000
イモ類	8,330.0	400	3,332,000	3,332,000
フォニオ	19,120.0	500	9,560,000	9,560,000
ゴマ	673.0	1,100	740,300	776,250
総額			435,695,100	645,532,245

表 5-23. 食糧農産物の生産量と総額<sup>63</sup>

つぎに、(c)出稼ぎは、表 5-24 のように算出されている。この算出方法から理解できるように、当局はほとんどまったく実態を把握していなかった。前節でとりあげた、英領ゴールド・コースト側の史料に基づく研究によれば、少なく見積もっても、1 万人以上の労働移民があった(Gervais and Mande 2000: 64-65)。こうした出稼ぎが、どこまで農村に収益をもたらしたのかは判然としない。1950 年代のモシの英領ゴールド・コーストへの出稼ぎの研究では、一般論としていえば、出稼ぎで得た収入は可能な限り現物で持ち帰られたこと(Rouch 1956)、出稼ぎ後は農村よりも都市の居住を好んだこと(Skinner 1960)が報告されている。

#### 英領ゴールド・コーストへの出稼ぎ

3,500 人 × 100 フラン = 3,500,000

\*このように表記されているが、総額は明らかに計算ミス

ただし、3,500 人 × 1,000 フラン = 3,500,000

表 5-24. 出稼ぎによる収入総額<sup>64</sup>

(d)賃金収入については、内訳は示されず、1 千万フランとされているが、明らかに過大評価である。前節の表 5-19 をみると、1927 年の植民地内の強制労働の従事者は、植民地行政では 24,890 人、私企業では 15,032 人であり、それぞれ 15 日間、勤務したとされる。植民地行政による公定賃金は管区ごとに異なり、表 5-25 のようになっている。なお、デドゥグ管区、ガワ管区では、日給に加え、1 日あたり、トウジンビエ 1kg、肉 200g、塩 20g、

<sup>63</sup> ANOM 1affpol/3068 Politique des produits industriels en Haute-Volta, 1932.にもとづいて筆者作成。

<sup>64</sup> ANOM 1affpol/3068 Politique des produits industriels en Haute-Volta, 1932.にもとづいて筆者作成。

カリテ・バター50g の計 1.5 フランの食事給付が付加されていた<sup>65</sup>。

日給を最高賃金である 2.5 フランに設定し、39,922 人の 15 日分の給与の総額は 1,497,075 フランとなる。さきの報告書の植民地行政官による推計では、賃金収入の合計は 1 千万フランとされているが、実際には高く見積もっても、約 150 万フランとなり、実態はおおよそ 10 分の 1 ほどであった。

また、個々人の収入でみると、少なく見積もっても、約 6 割は食費で失われ、交通費、滞在費は支給されなかったため、ほとんど手元にはフランは残らなかったと考えられる。つまり、強制労働の賃金は、実質的には、労働者の食糧分のフランを農村の食糧農産物と交換させるように機能した。

管区	日給(フラン)	食事給付
ワガドゥグ	2.5	×
ボボ・ジュラソ	2.5	×
デドゥグ	1.5	○
クドゥグ	1.5	×
ファダ・ングルマ	1.75	×
ドリ	1.75	×
カヤ	2	×
テンコドゴ	2	×
ワイグヤ	2-2.5	×
ガワ	1.5	○
	2	×
パティエ	1	×

表 5-25. 強制労働における日給<sup>66</sup>

こうした検討を踏まえて、あらためて、農村の総生産の推計をまとめたものが、表 5-26 である。表 5-22 では、(b)換金作物と(d)賃金収入によって人頭税を上回っていたが、表 5-26 では、(b)換金作物と(d)賃金収入を足しても、人頭税のおよそ半分にしか達していないことがわかる。それでは、農民は人頭税を支払うための人頭税のおよそ半分のフランをどのように獲得していたのであろうか。

<sup>65</sup> ANOM 1affpol/1248 Rapport politique et administratif annuel 1931, Haute-Volta

<sup>66</sup> ANOM 1affpol/1248 Rapport politique et administratif annuel 1931, Haute-Volta. から筆者作成。

(a)食糧農産物	435,695,100
(b)換金作物	8,609,750
(c)出稼ぎ	?
(d)賃金収入	1,497,075
合計	445,801,925
人頭税	18,083,734

表 5-26. 1927 年、オート・ヴォルタ植民地、農民の総生産推計

想定しうるフランの入手方法は、(1)出稼ぎによる収入、(2)非公式の換金作物の売却、(3)食糧農産物の売却、(4)家畜の売却の 4 つである。あらかじめ、結論を述べておくと、いずれの場合においても、出稼ぎによる収入以外は、介在する商人が中間利益を得る仕組みとなっている。

前述のように、(1)出稼ぎによる収入がどれほどのものであったのか、具体的に評価することはできないが、可能性としては想定できる。つぎに、(2)非公式の換金作物の売却も一定程度想定することができる。前節で述べたように、公式には公認の商社・商人によって、低く設定された公定価格による買取が行なわれていた。このような状況下では、ローカルな土地勘のある商人が公定価格よりも若干高く設定すれば、容易に一定量の綿花を買いとることができたことは想像に難くない。

また、(3)食糧農産物の売却は、2 つの経路で考えることができる。第一に、都市住民、植民地行政の公務員、労働者への食糧供給が存在した。とはいえ、「原住民」の植民地行政関係者は 1928 年段階で 1,636 人<sup>67</sup>、各種の居住外国人は 544 人であり<sup>68</sup>、その需要は微々たるものであった。

第二に、隣接する植民地へのトウジンビエなどの輸出があった。貿易輸出の細目は断片的な記録しか残されていないが、たとえば、1930 年第 1 四半期には、英領ゴールド・コーストと他の仏領植民地へのトウジンビエの輸出額は約 3 万フラン、スンバラは約 2 万フラン、ラッカセイが約 7 万フランに達している<sup>69</sup>。これも総額としては微々たるものであるが、公式の記録に残らない取引があったと考えると一定の収入になったのであろう。

最も有力なものは、(4)家畜の売却である。家畜はそれ自体として単価が高く、まとまった収入を得るのに適していた。後に詳しく述べるように、家畜はコートディヴォワールと

<sup>67</sup> Haute-Volta 1928 の記述から数え上げた。

<sup>68</sup> ANOM 1affpol/1248 Rapport annuel politique et administratif, 1928, Haute-Volta.

<sup>69</sup> ANOM 14mion/1734 Rapport économique de Haute-Volta, 1<sup>er</sup> trimestre 1930.

英領ゴールド・コーストの都市部での食肉需要の高まりによって、主要な輸出産品となっていた。たとえば、1931年のオート・ヴォルタ植民地産の家畜の輸出総額は、約1,100万フランとなっていた(表5-27)。もっとも、この輸出額ではウシの割合が高く、農民の現金収入分がどれほどであったのかは明らかではないが、高額の人頭税の支払いを可能にする収入源は家畜であったと想定するのが最も適切であろう。

実際のところ、規模と担い手において、植民地期を通じて、オート・ヴォルタ植民地の経済を支えたものは家畜であった。このことを次節でみていく。

	通過(頭数)	輸出(頭数)	通過総額(フラン)	輸出総額(フラン)
ウシ	30,894	21,790	12,559,422.6	8,858,348.5
ヒツジ・ヤギ	8,156	43,955	407,800.0	2,197,750.0
ウマ	7	190	4,200.0	114,000.0
ロバ	211	968	42,200.0	193,600.0
合計			13,013,622.6	11,363,698.5

表 5-27. 1931 年、オート・ヴォルタ植民地、家畜輸出頭数及び総額<sup>70</sup>

## 5-5. 家畜による資本形成

植民地統治以前の西アフリカ内陸における家畜の交易がどれほどの規模であったのかを明らかにする史料は残されていない。しかし、北の現在のマリ、ブルキナファソから南のコートディヴォワール、ガーナへの輸出は一定量行なわれていたものと考えられる。

たとえば、19世紀後半のサラガでは、奴隷とともに、ウシとヒツジが大量に北部から輸入されているとされ(Johnson 1961 v. 1: acc. no. SAL/34/1)、1877年にサラガを訪れたドイツ人の報告では定期市の日には40頭から50頭のウシが食肉用に屠殺されているとしている(ibid.: acc. no. SAL/3/1)。あるいは、1888年に同じくサラガを訪問したフォン・フランソワによれば、毎朝20頭のウシと40頭のヒツジがやはり食肉用に屠殺されている(ibid.: acc. no. SAL/18/1)。単純計算では、サラガの市場で消費される分だけでも、年間約7,000頭ものウシが輸入されていた。植民地統治以降、南部のさらなる都市化による食肉需要の増加、

<sup>70</sup> ANOM agefom//139 Rapport annuel du service zootechnique, Haute-Volta, 1931.にもとづき筆者作成。なお、「通過」(transit)は仏領スーダンからオート・ヴォルタを経由し、コートディヴォワールもしくは英領ゴールド・コーストへ輸出された家畜を指し、「輸出」はオート・ヴォルタ植民地領内から輸出された家畜を指している。また、総額は1930年第1四半期の経済報告書(ANOM 14miom/1734 Rapport économique de Haute-Volta, 1<sup>er</sup> trimestre 1930.)における輸出額の各家畜の評価価格にもとづいて算出した。

交通路や治安の改善によって、それ以前よりも圧倒的に輸出量が増えたことは想像に難くないが、植民地統治以前も相当量の家畜が北部から南部へと流れていったことも間違いないものと思われる。従来からあった傾向を植民地統治が増幅させたと考えられる。

1911 年から 1957 年までの、現在のマリ、ブルキナファソを通過し、南のコートディヴォワール、ガーナへと輸出された家畜の総量をまとめたものが、表 5-28、図 5-7 である。コートディヴォワール、英領ゴールド・コーストへの家畜の輸出は、ウシは 1940 年代まで年間 4 万頭から 5 万頭、それ以降は 10 万頭ほどに増加し、ヤギ・ヒツジも同様に 1940 年代まで年間 4 万頭から 5 万頭、それ以降は 20 万頭から 30 万頭ほどに増加している。

もっとも、この数値はオート・ヴォルタ植民地の国境に設置された税関を通過した家畜の総量であり、現実にはさらに多かったものと考えられる。実際のところ、牛疫の対策を 1910 年代頃から国境沿いの北部地域で行ってきた(Patterson 1980)、英領ゴールド・コースト側の史料ではより多くの家畜の輸出が算出されている(表 5-29、図 5-8)。1920 年代には、英領ゴールド・コーストの輸入総数が約 4 万頭から 5 万頭のあいだを推移しており、オート・ヴォルタ植民地からコートディヴォワールへの家畜輸出量を考慮すると、家畜の輸出総量は約 6 万頭から約 8 万頭にのぼると考えられる。

	ウシ	ヒツジ・ヤギ
1911	39,595	68,687
1913	76,875	71,958
1927	10,295	35,637
1930	24,375	30,924
1931	52,684	52,111
1932	77,826	51,007
1933	51,572	17,621
1935	41,432	20,371
1938	29,311	32,122
1939	27,595	32,691
1944	38,557	155,756
1945	28,361	61,075
1946	13,572	87,591
1947	16,725	90,688
1948	76,034	185,564
1949	89,250	228,806
1950	75,066	211,601
1951	74,181	248,412
1952	73,831	237,185
1953	78,870	353,970
1954	101,000	148,000
1955	97,000	284,000
1956	104,513	249,915
1957	123,109	324,713

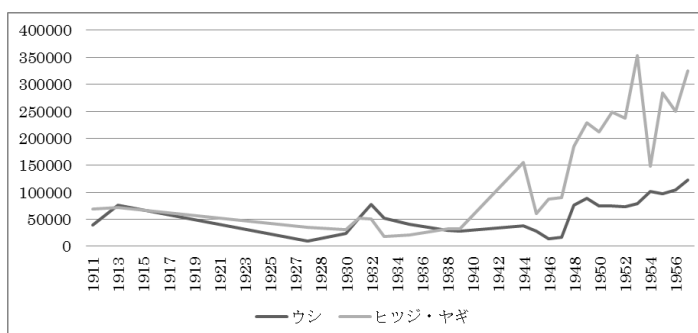


表 5-28、図 5-7. オー・セネガル・ニージェル植民地、オート・ヴォルタ植民地から南部への家畜の輸出量(1911-1957)<sup>71</sup>

<sup>71</sup> ANOM 14miom/1660 Rapport sur la situation économique du Haut-Sénégal et Niger pendant l'année 1911.; ANOM 14miom/1670 Rapport sur la situation économique du Haut-Sénégal et Niger pendant l'année 1913.; ANOM 14miom/2627 Rapport économique de Haute-Volta, 1er-4e trimestre 1927.; ANOM 14miom/1734 Rapport économique de Haute-Volta, 1er-4e trimestre 1930.; ANOM agefom//139 Rapport annuel du Service Zootechnique, Haute-Volta, 1931.; ANOM 14miom/1755 Rapport économique, Côte d'Ivoire, 1933.; ANOM 14miom/1765 Rapport économique, Côte d'Ivoire, 1935.; ANOM 14miom/1797 Rapport économique, Côte d'Ivoire, 1938. ; ANOM 14miom/1809 Rapport économique, Côte d'Ivoire, 1939. ; ANOM 14miom/1855 Rapport de la service de l'élevage et du industriel animaux, Côte d'Ivoire, 1944. ; ANOM 14miom/1865 Rapport de la service de l'élevage et du industriel animaux, Côte d'Ivoire, 1945. ; ANOM 14miom/1874 Rapport de la service de l'élevage et du industriel animaux, Côte d'Ivoire, 1946. ; ANOM 14miom/2730 Rapport économique, Haute-Volta, 1947. ; ANOM 14miom/2719 Rapport économique, Haute-Volta 1949. ; ANOM 14miom/1941 Rapport économique, Haute-Volta, 1951. ; ANOM 14miom/1962 Rapport économique, Haute-Volta, 1952. ; ANOM 14miom/1967 Rapport économique, Haute-Volta, 1953. ; ANOM 14miom/2055 Rapport économique, Haute-Volta, 1957.にもとづき、筆者作成。なお、1930-1933 年は史料では価格のみが表記され、頭数は 1930 年の価格(ANOM 14miom/1734 Rapport économique de Haute-Volta, 1er trimestre 1930.)から逆算し、小数点は切り上げた。また、1933 年、1935 年は、英領ゴールド・コーストへの輸出のみが記載され、1938-1939 年はコートディヴォワール植民地領内での内部取引も含まれている。1946-1947 年は英領ゴールド・コーストへの輸出はないものとして扱われており、1952-1957 年はトーゴへの年間数百頭の輸出は加味していない。

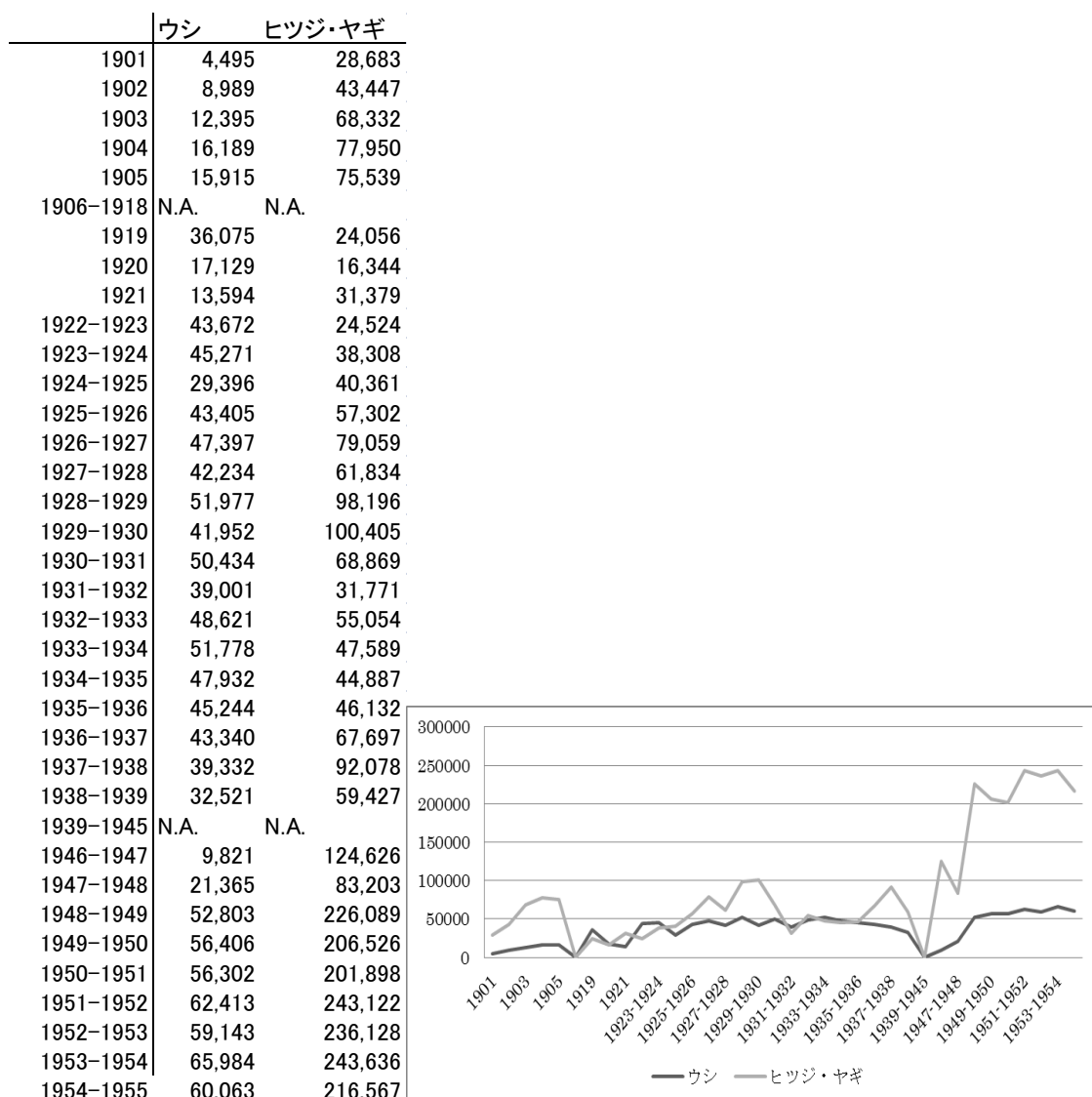


表 5-29、図 5-8. 英領ゴールド・コースト植民地の家畜輸入総数<sup>72</sup>

いずれにせよ、西アフリカの大陸間の家畜交易が数万頭の規模であったことは確実なことである。輸出入の総額の記録は必ずしも充実していないが、少なく見積もっても、およそ 6 割以上は家畜の輸出が占めていた。たとえば、1911 年のオー・セネガル・ニジェール植民地の南部方面(コートディヴォワールと英領ゴールド・コースト)への輸出総額の約 6 割

<sup>72</sup> Patterson 1980: 487 にもとづき筆者作成。1906 年から 1918 年まではデータがなく、1939 年から 1945 年までの期間は第二次世界大戦中、ヴィシー政権が成立したため、英仏植民地間の国境封鎖によって、英領側には輸入量のデータがない。

73、1930 年のオート・ヴォルタ植民地の輸出総額の約 9 割を家畜が占め<sup>74</sup>、1949 年、1957 年においても、家畜が輸出総額の約 6 割を占めている<sup>75</sup>。

数値が不揃いではあるが、換金作物と比較すると、圧倒的に家畜の経済規模が大きいことが指摘できる。たとえば、家畜の輸出額は、1930 年では、ラッカセイ、天然ゴム、綿花、カポックといった換金作物の総輸出額の約 13 倍、1949 年では、「農産物」の総輸出の 2.5 倍、1957 年では、綿花、カリテ、カポック、ラッカセイの総輸出額の約 8.3 倍の規模を誇っている。つまり、植民地統治期の経済上の変化では、オート・ヴォルタ植民地全体でみると、換金作物の生産開始よりも、家畜輸出の増大の方が、大きな影響を及ぼしたと考えられる。

商取引の実態についての史料は乏しいが、こうした家畜の交易の大部分は「アフリカ人」によって担われていたようである。たとえば、1923 年度のゴールド・コースト植民地の年次報告では、家畜の交易が主として「ネイティブ」の手にあり、フランス人、シリア人が少数関わっていることが述べられている(Gold Coast 1923: 27)。このシリア人については、仏領側の史料においても言及されている。すなわち、モプティに拠点をおくシリア人がゴールド・コーストへのウシの輸出をおこない、1924 年 1 月に 920 頭がボボ・ジュラソを通じたことが報告されている<sup>76</sup>。ゴールド・コースト側では、1928 年度の報告(Gold Coast 1928: 16)を最後に、このシリア人についての言及が、少なくとも 1937 年度までみられないため、おそらくはこの事業から撤退したものと推測される。

時代はさらに下るが、1941 年に南部へのウシ輸出の改善のための行政主導の会合がボボ・ジュラソで開かれた際に、4 名の主要な代表者が参加したことが記されている<sup>77</sup>。C.F.C.I.

---

<sup>73</sup> 1911 年のオー・セネガル・ニジェール植民地における南部方面への輸出総額は 7,432,951 フラン、そのうち家畜は 4,308,272 フランであり、家畜は輸出総額の 58%を占めている(ANOM 14miom/1660 Rapport sur la situation économique du Haut-Sénégal et Niger pendant l'année 1911.)。

<sup>74</sup> 1930 年のオート・ヴォルタ植民地の輸出総額は 13,228,738 フラン、そのうち家畜は 12,068,790 フランであり、家畜は輸出総額全体の 91.2%を占めている(ANOM 14miom/1734 Rapport économique de Haute-Volta, 1er-4e trimestre 1930.)。

<sup>75</sup> 1949 年のオート・ヴォルタ植民地の輸出総額は 543,362,009 フラン、そのうち家畜は 357,083,700 フランであり、家畜は輸出総額の 65.7%を占めている(ANOM 14miom/2719 Rapport économique, Haute-Volta, 1949.)。1957 年のオート・ヴォルタ植民地の輸出総額は 896,563,000 フラン、そのうち家畜は 541,017,000 フランであり、家畜は輸出総額の 60.3%を占めている(ANOM 14miom/2055 Rapport économique, Haute-Volta, 1957.)。

<sup>76</sup> ANCI 5EE5(19) Telegramme-lettre du commandant du cercle Bobo-Dioulasso à gouverneur Volta, le 2 février 1924.

<sup>77</sup> ANOM 14miom/1830 Rapport premier trimestre 1941, Service zootechnique et des



の代理人が1名のほかには、サーダ・シセ(Sada Cissé)、アル・ハジ・ボクン(El-Hadj Bokoun)、ティエンバレ・ジャロ(Tiembale Diallo)の名前が挙げられている。サーダ・シセは1920年代のボボ・ジュラソの区画整理の際に行政から土地を購入したセネガル人の豪商であり、のちに反RDAの政党のパトロンとなった人物である(Fourcard 2001: 153, 323)。やはり、1920年代のボボ・ジュラソの区画整理の際に、土地購入を行なった人物にバカリ・ボクン(Bakari Bokoun)という人物がいる<sup>78</sup>。おそらくこの人物は、ボボ・ジュラソのハムダライ街区の有力者でRDAを支持し、ムスリム文化連合の活動に参加したアルハジ・バカリ・ボクン(al-Hadj Bakary Bokoum)(本稿8章3節1項)と同一人物である。あるいは、同時期に、ボボ・ジュラソの土地購入を行なった仏領スーダン出身の豪商ムフタール・バ(Moctar Bâ)(ibid.: 153)の「親族」にあたり、1940年代初頭にボボ・ジュラソに居住していたバンジャガラ出身の人物もまた、「家畜商」であった<sup>79</sup>。ボボ・ジュラソでは、1910年代頃からセネガル、ギニア、仏領スーダン出身のムスリム商人が居住するようになっており(Fourcard 2003)、こうした人物たちのなかに家畜商を営む者たちが一定程度、存在していたことが推測される。

こうした家畜交易の重要性については、かつて嶋田(1995)が指摘したように、土地の生産性が低く、土地が資本となりにくい西アフリカにおいて、家畜は都市化による食肉需要が高まると高価な商品となり、資本となることを如実に示している。一方で、植民地行政は牧畜については小規模の牧場経営と小規模の感染症対策をおこなっていたが<sup>80</sup>、本格的な介入は行ってこなかった。こうした隙間を縫って、商人や「伝統的首長」たちがウシ輸出に事業を展開し、資本を形成していったと考えられる。たとえば、現在のブルキナファソ南部のテンコドゴのティグレ王は植民地統治期に行政による給与を資本として大型トラックを用いたウシの交易を大々的に展開していた(川田 1992: 16)。あるいは、現在のマリのジャの商人であったアルハジ・オマル・トモタは1935年に彼の奴隷と二人で114頭のウシをジャから現在のガーナ中部のクマシまでおよそ2カ月かけて歩いて売りに行くという交易をおこなっていた(竹沢 2008: 126)。さらに小規模の家畜商もいたようである。1955年からボ

---

épizooties, Côte d'Ivoire.

<sup>78</sup> ANCI X/16/374 の史料群を参照。

<sup>79</sup> ANOM 14Miom/2123 Procès-verbal d'audition de témoin, Bobo-Dioulasso le 12 août 1941.

<sup>80</sup> たとえば、以下の史料に、その詳細が記述されている。ANOM agefom//139 Rapport annuel du service zootechnique, Haute-Volta, 1931.; ANOM 14miom/1755 Rapport économique, Côte d'Ivoire, 1933.

ボ・ジュラソに移住し、家畜商をはじめたハウサのバルソ・ブワは、20 数頭のウシを年に何度もボボ・ジュラソから汽車でコートディヴォワールに運ぶという交易を営んでいたという<sup>81</sup>。こうした史料に残されない在地の経済活動についてはさらなる調査が必要とされるが、オート・ヴォルタ植民地では、家畜の交易が換金作物よりも格段に大きな規模をもち、その交易が植民地行政やヨーロッパの商社の手からはほとんど離れて成立していたことは確実である。

## 5-6. 植民地経済とは何か

本節では、本章のこれまでの検討をまとめ、植民地統治以降に生じた経済的な秩序とは何であったのかを明らかにしよう。

1 節で論じたように、植民地統治によってもたらされた最も大きな経済上の変化は、フランによる人頭税と人道税によって駆動する植民地経済の出現であった。人頭税の徴収をフランでおこなうことによって、農民と商人・商社との取引はつねに不均衡なものとなった。農村ではフランが流通しておらず、納税期になるとフランが必要とされるため、フランをほとんど有しない農民は、フランを占有している状態にあった商人・商社から必然的に買い叩かれることになった。言い換えれば、フランによる徴税を導入することで、生産物の需給によってではなく、圧倒的に偏在しているフランの需給によって、フランをすでに有している集団に対して有利に取引を行なえるようにさせた。

農村においては、フランは実質的に人頭税支払いのためのクーポンとなっていた。人頭税という債務を領域内のあらゆる村に割り当て、その債務の支払い手段をフランとすることで、植民地行政はフランの需要を強制的に発生させた。フランを用いた経済とは、その意味では、人頭税支払いのための債務を基礎とした市場であるといえる<sup>82</sup>。

---

<sup>81</sup> 2014/01/02 Bobo-Dioulasso, Barso Bwa(ボボ・ジュラソのハウサ人コミュニティの元会長)。

<sup>82</sup> このような見方は、ポスト・ケインズ派の新表券主義(neo-chartalism)と共有するものである。たとえば、新表券主義は以下のようにまとめられている。「1. 近代通貨は、一定の国家権力のコンテクストのなかにおいてに存在している。(a)国民(subjects)に税を課す権力、(b)納税の際に何を受け取るかを布告する権力という 2 つの権力が本質的である。2. したがって、国家は貨幣の境界を、国家に対する債務の償還のために政府の税務局において受けとれるという点において定めている。3. 課税の目的は、政府支出の財政ではなく、通貨の需要の創出である。したがって、「税駆動貨幣」(‘tax-driven money’)という用語が用いられる。4. 論理的にも、実践的にも、政府支出は、税を払うために必要なものを供給するために、課税に先行する。…」(Tcherneva 2006: 70)。ポスト・ケインズ学派の新表券

やや図式的に言えば、農民は、労働力もしくは生産物をフランと交換し、そのフランをほぼすべて人頭税として納税していた。労働力もしくは生産物とフランとの交換は、すでに述べたように、農村においてフランが稀少であるために、農民にとっては不利な交換となった。さらに、この不利な交換によって入手したフランでさえ、3 節の検討でみたように、換金作物の生産・賃金労働では人頭税をまかないきれなかったため、ほぼすべて人頭税として植民地行政によって吸い上げられていった。

農民は、人頭税に相当する労働力ないしは生産物をフランの市場へと供出しなければならなかった。したがって、オート・ヴォルタ植民地のフラン換算での——付加価値と自家消費分の市場化されない生産物を差し引いた——純生産は、おおまかに言えば、人頭税の総額と対応している。つまり、人頭税は労働力と生産物を、フランを用いた商取引の市場へと流すように機能し、その売上分をほぼすべて植民地行政が人頭税として徴収していた。

2 節で述べたように、徴集された人頭税は、植民地行政の組織体系にそって、中心から傾斜的に分配された。人頭税の徴収と給与という互惠関係のなかで、「伝統的首長」は「原住民行政」を担当する植民地行政の一部として構成されていった。つまり、人頭税を通じた植民地行政と「伝統的首長」の政治・経済の新しい複合が生じていた。

他方で、2 節で明らかにしたように、オート・ヴォルタ植民地は内陸に位置し、財政における人頭税の割合が圧倒的に大きくなっていた。言い換えれば、3 節、4 節でみたように、フランスへの輸出用の換金作物の生産・輸出規模がそれほど大きくなかったことを意味している。細部の検証は別の機会に行うが、オート・ヴォルタ植民地において、ヨーロッパの商社にとっては、換金作物の輸出はそれほど経済的な重要性が高いものではなかった可

---

主義の論旨と歴史的位置づけについては、内藤(2007)を参照。あるいは、税によって貨幣が生じていることは、ドゥルーズ＝ガタリによっても主張されてきた。たとえば、次のような一節は、フランの果たした歴史的役割の一部を的確に説明している。「一般的な法則として、税が経済の貨幣化をもたらすのであり、税が貨幣を作り出す。税が、必然的に運動、流通、循環の中にある貨幣を作るのであり、循環する流れの中で、必然的に役務と財に対応するものとして貨幣を作るのである。国家は税に、対外貿易の手段を見出す、つまり対外貿易を所有する手段を見出すだろう。しかし貨幣形態が生まれるのは、交易からではなく、税からなのである。そして税から発生する貨幣形態によって、国家が外部との交換を独占すること(貨幣による交換)が可能になる」(ドゥルーズ＝ガタリ 2010[1980]: 190)。サブプライム問題以降の経済状況を踏まえて、こうしたドゥルーズ＝ガタリの理論を展開したものとしては、ラッツァラート(2012[2011])、市田ほか(2013)がある。このほかに、貨幣を税、あるいは債権・債務関係として把握する見方は、レギュラシオン学派(アグリエッタ・オルレアン 2012[1998])、人類学者によるそれらの部分的な複合(Graeber 2011)においてもみられる。

能性がある。むしろ、植民地行政の事業の請負が主たる経済活動であったように思われる。たとえば、1930 年の換金作物(ラッカセイ、綿花、カポック、カリテ、天然ゴム)の輸出総額は 875,723 フランであるが<sup>83</sup>、1930 年のオート・ヴォルタ植民地一般会計の「第 10 項 工業開発費(物品費)」の「第 4 目 自動車輸送サービス」——具体的には、「自動車の購入と更新」、「オイル、ガソリンなどの消耗品」、「整備交換」など諸経費——の予算だけで 1,186,400 フランが執行されている(Haute-Volta 1931: 76)。換金作物の輸出よりも、植民地行政の財政から支出される行政の維持のための物品の輸送・販売のほうがはるかに大きな市場であるように思われる。

こうした諸経費は入札を通じて、ヨーロッパの商社に割り当てられていた。こうした入札についてはほとんど残されていない。しかし、たとえば、ある報告では、1925 年 10 月 19 日の入札によって、ボボ・ジュラソの「運輸貿易商会」(la Société d'entreprise de transport et de commerce)が植民地行政の「公共事業サービス」<sup>84</sup>の種々の物資供給を行なうことになり、その合計が 298,450 フランであるとしている<sup>85</sup>。つまり、植民地行政の事業を維持するための物資の提供によって、ヨーロッパの商社は利益をあげていた。人頭税を通じて徴集されたフランは、植民地行政そのものの維持活動によって、ヨーロッパの商社にわたり、国外へと流出していったのである。

しかし、「土着」——必ずしも在地の生産者とはいえないが——の勢力も、経済の新秩序の形成を傍観していたわけではなかった。前節でみたように、植民地統治以降、家畜の内陸間交易が隆盛し、植民地統治以前の長距離交易の担い手であった一部のムスリム商人たちは人頭税を基盤としたこの新たな政治・経済の複合に適応し、家畜の交易や辺境の農村部での換金作物の買い取りといった新たな経済活動に従事するようになり、資本を形成していった。あるいは、前節で言及したテンコドゴのティグレ王のように、ウシの交易に乗り出した「伝統的首長」もある程度、存在していたと推測される。

最後に、西アフリカ経済史研究と人類学の理論上の含意を述べておこう。

西アフリカの植民地史研究では、本章冒頭で述べたように、マクロな数値を用いた研究が主としてイギリス植民地史研究でなされるようになっている。そのなかでも、換金作物の輸出量の急増に着目した、オースティンによる「余剰(生産力)はけ口理論」(vent for

<sup>83</sup> ANOM 14mim/1734 Rapport économique de Haute-Volta, 1er-4e trimestre 1930.

<sup>84</sup> 植民地の予算には、「公共事業サービス」という予算項目がある。

<sup>85</sup> ANOM 1affpol/161 Rapport sur les affaires sont soumises a l'approbation des membres de la commission permanente du conseil d'administration, le 10 février 1927.

surplus)の再検討(Austin 2005, 2009, 2014a, 2014b)が代表的なものといえよう。19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて、ゴールド・コースト、セネガル、ギニア、コートディヴォワールにおいて、換金作物の輸出量が急激に増加しており、なぜ、このことが可能となったのかについて、オースティンは新たな説明を加えている。古典的には、農村の余剰生産力が換金作物へと割り当てられることで可能となったとされていたが、オースティンは、内陸間の奴隷交易によって労働力を調達するネットワークがすでに 19 世紀には構築され、さらに、換金作物の生産による利潤獲得への強いインセンティブが働き、高いリスクを見返りとして換金作物の輸出の急増が可能となったと指摘している。

しかし、本章のこれまでの検討を踏まえると、オースティンの立論が大きな問題点を抱えていることは明白であろう。端的に言えば、オースティンが事例として挙げる地域に大きな偏りがあった。必ずしもすべての西アフリカの植民地において換金作物の生産が主要な産業となったわけではなく、少なくとも、オート・ヴォルタ植民地では、換金作物の生産が利潤獲得のための強いインセンティブになったとは想定できない。ありていに言えば、オースティンは経済的に「成功」した中心的な生産地を事例としてとりあげているが、周縁的な生産地である内陸のサヘル地域は検討の対象となっていない。

本章で論じてきたことは、こうした地域における最大の特徴は市場そのものを構成する通貨の不均衡な偏在にあり、そのような不均衡を成立させている制度にあるという点である。こうした通貨の不均衡を踏まえると、かつて「経済人類学の黄金期」(Hann and Hart 2011: 55-56)の 1960 年代に提起された「原始貨幣」をめぐる議論にふたたび別様な光をあてることができるだろう。たとえば、ボハナンによれば、植民地統治以前のナイジェリア中部のティヴには、「道徳的な価値」によってランク付けされた 3 つのカテゴリーに交換可能な財が割り当てられている<sup>86</sup>(Bohannon 1955)。ここでは、すべての財に対して一般等価値を有する貨幣がなかったとされていた。つまり、近代貨幣とは一般目的貨幣(*general purpose money*)であるのに対し、「原始貨幣」とは限定目的貨幣(*special purpose money*)である(Dalton 1965: 61)とされた<sup>87</sup>。しかし、本章でみたように、フランはあらゆるものを

---

<sup>86</sup> 現在では、ボハナンの立論は植民地統治以前のティヴの交易が考慮に入れられておらず、この 3 つのカテゴリーは隣接する民族との交易によって構成され、価値づけされたものとして捉えられている(Guyer 2004: 28-30)。

<sup>87</sup> ボハナンによれば、ボハナンが調査した 1950 年代初頭までには、植民地行政によって発行された通貨が、課税と換金作物の売却、ヨーロッパからの輸入品の購入を通じて広く流通するようになり、一般的に用いられるようになっていたとされる(Bohannon 1955: 67-68; 1959: 499-501)。

交換可能な一般目的貨幣であるというよりも、農民にとっては納税の目的に特化した限定目的貨幣であった。また、フランは、少なくとも、初期においては、その流入経路は限定されており、特定の集団のあいだにフランが流通することになった。すなわち、フランで賃金を得ていた「伝統的首長」、通訳や衛兵などといった官吏、軍人、教師、商社勤めやフランで商取引をおこなった商人などといった少数の集団であった。また、「原始貨幣」は流通する範囲と「原始貨幣」を保持する集団が限定されるため、既存の社会秩序の維持・強化として機能すると指摘されているが(Douglas 1967: 133)、こうしたこともまた、フランに該当するだろう。フランが稀少な状況下では、フランを有する集団にとって取引の状況が有利に働くことは再三指摘してきたとおりである。そして、フランを保有する集団は第二次世界大戦後の政党政治のなかで主要なアクターとなっていくだろう。このように、フランを介した人頭税の導入は、ムブン川湾曲部を含むオート・ヴォルタ植民地に不可逆的な政治・経済の新秩序をもたらしたのである。

## 6 章 宗教-政治の出現：植民地行政、カトリック宣教団、イスラームの接触領域

6 章では、植民地統治の確立が宗教の領域においてどのような意味をもったのかについて、カトリック宣教団の活動を中心に明らかにする。結論からいえば、1900 年代から 1940 年代までに、現在のブルキナファソの特定の地域や集団のなかに、植民地行政、カトリック宣教団、イスラームの三者が抗争する、宗教-政治とも呼ぶべき、あらたな政治の場が生まれた。こうした宗教-政治は、1940 年代から独立以後にいたるまでの宗教を条件づけるものとなっていった。

本章で述べるように、植民地統治期においては、オート・ヴォルタ植民地は「アニミスト」の土地として捉えられており、1940 年代ごろまでセネガルや仏領スーダンにみられたような、いわゆるイスラーム政策がまったくとられなかった(Kobo 2012a)。その意味では、1940 年代ごろまでは、植民地行政とムスリムとのあいだには、直接的な影響関係はほとんどなかったといってよい。しかし、本章の記述と分析から明らかになるように、植民地行政とカトリック宣教団とのコンフリクトのなかで、宗教をめぐる条件が規定され、イスラームに間接的に影響を与えるようになっていった。

他方で、近年の西アフリカ内陸のイスラーム史研究は、イスラームが歴史的に他の宗教とどのような関係を構築してきたのかが論じられておらず、イスラームと他の宗教との関係の歴史を論じる必要性が指摘されている(Soares 2014)。この指摘はあくまで試論として提示されており、対象の具体的な検討はなされていないが、本章でとりあげる事例は、こうした宗教間関係の歴史でもあるといえるだろう。

本章で論じるカトリック宣教団の歴史についての研究は一定程度なされてきている。現在のブルキナファソの領域をカバーするカトリック宣教団の研究では、Baudu 1957; de Benoit 1987; Pauliat 1995; Porret et Gauthier 1995; Boinot 1995; Kouanda 1997; Some 2007 が通時的な叙述としては代表的なものであろう。いずれの研究も宣教団の残した日誌や報告書を主として用いており、それらの記述を時系列上に並べた冗長さをもっているが、特にベノワの研究(de Benoit 1987)は植民地行政とカトリック宣教団との関係の変化を詳細に叙述しており、西アフリカ内陸におけるカトリック宣教団の歴史研究の代表的なものとなっている。

また、モシのイスラーム史研究をおこなってきたクアンダによるカトリック宣教団の通史(Kouanda 1997)は、カトリック宣教団とムスリムとの歴史的関係を叙述しようとした試

みとして先駆的なものとして評価できるが、カトリック宣教団とムスリムとの具体的なコンフリクトについてはハマウィーヤとのあいだのわずかな抗争の記述にとどまっている。

植民地統治期から大きな事件として把握されていた、いわゆる「神父の子どもたちの反乱」(*la révolte des enfants des pères*)(Hébert et Bicaba 1977)、ダガリの大改宗(Some 1995, 1998)についてはそれぞれ個別の研究がなされてきた。近年では、ブロンが 1940 年代以降のオート・ヴォルタ植民地におけるカトリック宣教団と(狭義と広義の双方の)政治との関係を精力的に論じてきている(たとえば、Bouron 2010a, 2010b, 2011, 2012)。具体的には、オート・ヴォルタ植民地の再構成においてカトリック宣教団が積極的な役割を果たしたこと(Bouron 2010a, b)、独立直前の政治エリートがカトリック宣教団と近い関係にあったこと(Bouron 2010c, 2011)、カトリック宣教団がフランスのナショナリズムを盾としてプロテスタントに批判的であったこと(Bouron 2012)を明らかにしてきた。ブロンの一連の研究は、従来の研究にはほとんどみられなかった、カトリック宣教団の活動に対する批判的な視座をもって、宣教団の史料と行政史料の双方の史料を駆使することで、西アフリカ内陸のカトリック宣教団研究を刷新しつつある。あえて、これらの研究の問題点を指摘するのであれば、(1)1940 年代以降のモシの事例に特化していること、(2)イスラームとの関係が論じられていないこと、(3)理論的な展望が示されていないことが挙げられる。

これらの研究を踏まえて、本章では、オート・ヴォルタ植民地、特にムブン川湾曲部におけるカトリック宣教団の活動に焦点をあてて、植民地統治期の宗教をめぐる条件がどのように構成されたのかを明らかにする。後に述べるように、カトリック宣教団が改宗させた人口は圧倒的に小規模であり、ムブン川湾曲部においても大方の住民は直接的な影響を受けることはなかった。しかし、植民地行政とカトリック宣教団の活動は、外在的に、宗教をめぐる社会的な条件を設定することになり、その意味において、住民に間接的に影響を与えることになったといえるだろう。結論からいえば、ムスリムが少数派であったオート・ヴォルタ植民地においては、植民地行政とカトリック宣教団の活動によって、宗教-政治と呼ぶべき、新たな政治の場が構成された。ムスリムは宗教-政治の場に巻き込まれることによって(本章)、あるいは積極的に参与することによって(本稿 8 章 3 節)、植民地行政、カトリック宣教団、ムスリムの三者によって構成される宗教-政治の場での陣地戦を繰り広げるようになった。このように、カトリック宣教団は、宗教-政治の場そのものを構成させる駆動因となっていたが、先行研究では、ムスリムが少数派であった植民地におけるカトリック宣教団の活動によって、いかにイスラームの社会的・政治的な位置づけが条件付け



されているかが十分に論じられてこなかった。

したがって、本章では、1 節ではカトリック宣教団に焦点をあて 1920 年代までの宣教団の活動と植民地行政との関係を論じ、2 節と 3 節では 1920 年代から 1930 年代までのムブン川湾曲部で生じたカトリック宣教団と植民地行政の緊張関係を論じ、4 節では 1940 年代までのムブン川湾曲部において、宗教を取り巻く社会的な条件がどのように変化したのかを明らかにする。

### 6-1. 教育とライシテ：植民地行政とカトリック宣教団の宗教-政治

現在のブルキナファソにまたがる範囲のカトリックによる宣教は、白衣宣教団(*les Pères blancs*)と呼ばれる宣教団によって独占的になされた。白衣宣教団は、のちにアルジェリアの大司教(*l'archevêque*)となるラヴィジェリエ(*Mgr Lavigerie*)によって 1868 年にアルジェリアに設立された修練所(*le noviciat*)に直接的な起源をもつ(*de Benoit 1987: 34*)。当初は、アルジェリアのムスリムへの宣教を目的としていたが、アフリカ大陸全体を対象とするようになり、アフリカ宣教会(*la Société des missionnaires d'Afrique*)という組織へと改変され、1878 年から 1887 年の 10 年間に西アフリカに 51 の宣教団が派遣された(*ibid.: 34*)。なお、白衣宣教団は通称であるが、これはメンバーが白色のローブとコートを正装としたことに由来している(*ibid.: 34*)。

セネガルから西アフリカ内陸へのフランス軍の征服にともなって、すでにセネガルで宣教を行なってきた聖霊修道会(*la Congrégation du Saint-Esprit*)と白衣宣教団とが競合しつつ、内陸の駐在所の整備を行なっていた。内陸での宣教の主導権をめぐって、聖霊修道会と白衣宣教団のあいだには、現地とバチカンの双方で政治的なやりとりがあったが、1894 年、セネガル代理管区(*le vicariat apostolique*)とサハラ・スーダン代理管区の領域が設定され、前者を聖霊修道会、後者を白衣宣教団にそれぞれ任じられることになった(*ibid.: 57*)。こうして、1895 年、白衣宣教団は仏領スーダンでの活動を本格的に開始するようになった(*ibid.: 70*)。

現在のブルキナファソへの宣教団の活動は、フランス軍による軍事的な征服の直後に行われた。1899 年、フランス軍がワガドゥグを占領すると、1900 年には白衣宣教団はモシの地方の町のクーペラ(*Koupela*)に駐在所を設立し(*Hacquard 1902: 340*)、ワガドゥグの管轄を任されていたルエフ(*Ruef*)大尉の「特別な歓迎と寛大さ」によって、翌年の 1901 年にワガドゥグにも駐在所をもつようになった(*Templier 1902: 345*)。

宣教団がまっさきに行ったことは、(元)奴隷／孤児の引き取り(ibid.: 349-350)、そして、学校教育であった。早期の学校開設を要請し、支援したルエフ大尉の働きもあり、ワガドゥグでは駐在所の設立の8日後には学校が開設され(Templier 1902: 348; Badou 1957: 17)、1902年末には、173人の生徒が集まり、58名がカテキスムに出席した(Badou 1957: 18)。クーペラにおいても、少なくとも1年以内に学校が設置され、1901年には120名の生徒が登録されていた(Anonyme 1901: 53)。設立して間もない宣教団によって、このような多数の生徒が集められたわけではなかった。実際には、フランス軍による積極的な関与があった。少なくとも、ワガドゥグでは、ルエフ大尉がモシのナーバ(王、首長)たちに彼らの子どもを学校にいかせるように命じていた(Badou 1957: 18)。

セネガルでは、すでに19世紀半ばから、植民地行政の支援を受けて、カトリックの修道会が教育活動を行っており<sup>1</sup>、こうしたフランス軍とカトリック宣教団の互惠関係は、征服の過程のなかでは、ひろくみられていた。たとえば、1899年にバマコに設立された病院もまた、カトリック宣教団によって運営され(de Benoit 1987: 67)、カトリック宣教団によるキタ(Kita)の学校、カイ(Kayes)の病院の設立に積極的に援助をおこない、カトリック宣教団の各地への移動についてフランス軍がしばしば便宜を図っていた(ibid.: 71-72)。あるいは、1903年度のオー・セネガル・ニジェール植民地予算では、合計26,600フランがカトリック宣教団への支出として計上されている(Haut-Sénégal et Niger 1904: 40)。

このように、カトリック宣教団は孤児院と学校の活動を通して、宣教を行っていた。1900年代前半にカイの学校に通っていた、ワングラン(Wangrin)こと、サンバ・トラオレ(Samba Traoré)のハンパテ・バによる伝記<sup>2</sup>に、こうした活動についての記述がみられる。

「当時、人質学校と混血児孤児院の児童生徒たちは日曜ごとにミサに出席していた。

---

<sup>1</sup> プロエルメル修道会(Les frères de de Ploërmel)が1841年にサンルイ、1843年にゴレ島(Bouche 1975, t. I: 102)、1869年にダカル、1888年にリュフィスクにそれぞれ学校を開設している(ibid.: 119)

<sup>2</sup> 近年の研究によって、ワングランに関する記述が行政文書においても確認されていることが確かめられている(Austen 2015)。ただし、その記述の細部がどこまで事実であったのかについては研究が十分に進んでおらず、今後の検討課題である。なお、行政文書では、サンバ・トラオレの行政名である「サマコ・ニャンベレ」(Samako Niembélé)の名前で、1906年にバンフォラからバンジャガラへの転任の記録が残されている(Austen 2008: appendix)。1906年にすでにバンフォラで勤務していたこと、カイの学校では神父が授業を行っていたこと(Bâ 1992: 30-31)、「最短期間で原住民初等教育修了証書を取得」していたこと(ibid.: 19)から、ワングランは1903年以前、おそらくは1900年から1903年のあいだにカイの学校に通学していたものと推測される。

学校の生徒たちは、司祭たちが洗礼志願者に時々くばるキャンディーや菓子類をもらおうとして、孤児院の児童たちは出席が義務づけられているという事情で。…人質学校の生徒全員がそうであるように、ワングランも教会に入って、へんないくら罰当りの文句を口にして十字を切る習慣があった。

秘蹟のことば——

父なる神／子なる神と／聖霊なる神の御名において／アーメン

この正しいバンバラ語訳はこうなるはずだった。

ファー／ニ デン／ニ ハキリ・セヌ／イ トゴ ラ／アメン

しかし、全員がアニミストかムスリムの子弟であった生徒たちは、以下の文句をふざけて考えだし、十字を切りながらつぶやくのだった。

ナー ケーラ ミン イェ／ンネ／ニン／ター・ラ

すなわち、

それが何でろうと／ぼく／ぼくの加わるのは／それじゃないよ」(バア 1984: 35-37)。

この逸話がそのまま現実にあったものであるのかは定かではない。しかし、「全員がアニミストかムスリムの子弟であった」ことは確かであり、こうした事態もまた、十分にありえたものであっただろう。フランス軍の支援を受けたとしても、むろん、すぐに改宗者が現われるわけではなかった。

フランス軍とカトリック宣教団の互惠関係は、学校や病院の維持管理のための人員不足という実際的な問題の解消という側面が大きかったと考えられるが(Klein 1998:117-118)、一部のフランス軍人がもっていた西アフリカ内陸の宗教認識にも支えられていたものであった。たとえば、仏領スーダン(現在のマリ)の征服を主導した軍人のアーシナルは、彼の家が熱狂的なプロテスタントでかつて迫害を逃れてスイスに移住していた経緯から、カトリック教会そのものを支持していなかったが、カトリック宣教団による学校・病院の設立に積極的に援助を行っていた(de Benoit 1987: 71)。アーシナルは、このことを以下のように説明している。「われわれのどの植民地よりも、スーダンにこそ、宗教的なプロパガンダが必要とされている。なぜなら、そうした宗教的なプロパガンダはわれわれに幾分か共感をもつフランスのプロパガンダであり、それしか選択肢がないからである。他のものといえば、アフリカにおいて、ライバルであり、敵であるイスラームと、イギリス臣民によるプロテスタントがあるだけである」(ibid.: 71)。「敵の」イスラームと「他国の」プロテスタ

ントに対抗する、「フランスの」宗教として、カトリック宣教団を支援していた、あるいは、そのような論理で支援を正当化していたといえるだろう。

カトリック宣教団も「敵」としてのイスラームという宗教認識を共有していたが、そこではつねにイスラームと在来宗教が対置されていた。おそらく 1903 年に書かれ、翌年に白衣宣教団の会報に掲載された、サハラ・スーダン代理管区の大司教バザン(Mgr Bazin)の「スーダンにおける宗教問題」という記事をみてみよう。

「われわれの原住民は非常に宗教的でもある。すべての者たちが神を信じている。たとえば、われわれのバンバラ<sup>3</sup>は特に、創造者と報酬者<sup>4</sup>(le remunerateur)という非常に明瞭な概念を有している。こうしたことから、イスラーム主義(l'islamisme)によって、彼らの有している、神聖さについての未開な概念が純粋なものとなる余地を残している。バンバラは、非常に数多くの宗教的な慣行(des pratiques)をもっている。正確に言えば、彼らのあいだに[カトリックの]信仰を拡張する際にわれわれが直面する非常に大きな障壁の一つは、こうした慣行が民族的な宗教(un culte national)と呼びうるものと結びついていることである。バンバラやモシのところでは、こうした迷信が祖先から受け継いだ財産のようなものであり、宗教を変えることはその民族性(leur nationalité)を放棄することになってしまう。

「お前はムスリムかと彼らは何度か尋ねられた。」——彼らはこう言う。「違う、俺はモシだ」、と。このように、二つの物事は両立しないのである。

彼らのところでは、最近になるまで、ムスリムは軽蔑された存在であった。マラブーは、彼らの命を危険に曝さずには、モシの土地に入ることはできなかった。フランスの占領以来、そのようなことはなくなった。われわれが残念ながらマラブーに与えてしまった威信のおかげで、マラブーは容易に黒人たちに容認されるようになった。彼らは、人頭税の徴収の際にときおり、多大な貢物を強奪しており、彼らは恐れられると同時に嫌悪されている。

イスラーム主義はスーダンすべてを侵略してしまったといえるのだろうか。こうしたことは語られ、記述され、私自身、仏領西アフリカ総督のバレ(N. Ballay)<sup>5</sup>氏からも未練とともに、しばしばつぎのような意見を聞くことになった。数年のうちに、われわれの努力にもかかわらず、国中の住民がムスリムとなるであろう。

---

<sup>3</sup> 現在のマリの主要な民族の一つ、植民地統治以前は在来宗教の信奉者が多かった。

<sup>4</sup> ここでは報いに応える存在という意味で用いているのであろう。

<sup>5</sup> 1897 年から 1902 年まで務めた仏領西アフリカの第二代連合総督。

未来がわれわれの不運な黒人たちに残されているが、イスラーム主義の実際の進歩は、予想されているよりも、ほど遠いところにあることしか私は知らない。」(Bazin 1904: 238-239)。フルベ、マルカ、ジュラといった「外来の」民族にイスラームを見出すことができるが、「土着の」バンバラやモシには、ほとんどイスラームは浸透していないが、「こうした諸民族にいち早く福音をもたらす必要がある。なぜなら、すべての地域にマラブーが雨のように降り注ぐからである。…その[イスラームの]狂信主義(leur fanatisme)は一般的に魅惑的なものだが、マラブーであろうがなかろうが、ありきたりの狂信者を生き延びさせる。こうしたことが、ある部族にイスラームがわずかに手をつけるだけで、部族全体を蜂起させ、武器をもたせることに十分なものとなってしまう。モシに隣接する小部族(une peuplade)のサモは、白人に対する彼らの愛国心を刺激した一部のマラブーの布教の後に、我々に対して、何度も反乱を引き起こしている。しかし、サモはムスリムではない。したがって、スーダンにおいて懸念されているものは、マラブーや教団の長といった狂信者(des fanatiques)だけである。…」(ibid. : 239-240)。

バンバラやモシといった非ムスリムが多数派の民族では、イスラームやキリスト教を容する宗教的諸概念をもっているが、宣教にあたっては 2 つの困難をもっているとバザンは認識している。一方では在来宗教が「民族性」と結びついているとされ、他方では「マラブーが雨のように降り注いで」「魅惑的な」「狂信主義」が在来宗教の諸民族を改宗させてしまうとされる。さらに、イスラームは「わずかに手をつけるだけで」、反乱を引き起こすという<sup>6</sup>。

重要な点は 2 つある。第一に、カトリック宣教団はイスラームと在来宗教を対置し、後者からの改宗を重視していたことである。モシの土地に真っ先に駐在所をおいたことも、こうしたことから説明されるだろう。第二に、カトリック宣教団は、植民地行政の宗教認識とは異なる宗教認識を有していると意識していた。植民地行政が「数年のうちに、われわれの努力にもかかわらず、国中の住民がムスリムとなる」と想定していると、バザンは

---

<sup>6</sup> ここで念頭におかれているのは、4 章でとりあげた征服過程におけるサモの村々によるフランス軍への襲撃であろう。4 章でみたように、この一連の襲撃は同盟関係の連鎖によるものであり、むしろ、「狂信主義」によるものでも、「マラブーの布教」によるものでもなかった。ランフィエラのカラモコ・バに扇動の嫌疑がかけられ、処刑されたことから敷衍して、こうした認識が構成されている。なお、イスラームの狂信主義が在来宗教の信者を急激に引きつけ、反乱を起こさせるという言説、多くの場合、感染の喩を伴ってなされるこの言説は、8 章で扱うボボ・ジュラソ事件においても流布している。この言説は植民地統治期を通してみられ、現在まで継続しているように思われる。

認識している。こうした認識が、数年後には、植民地行政はイスラームの拡張を黙認しているという認識としてカトリック宣教団に現われることになるだろう。

植民地行政とカトリック宣教団の蜜月の関係はすぐに劇的な変化を迎えた。フランス本国では1882年に成立していたジュール・フェリー法——教育から教会勢力を排除する法が、1903年末に仏領西アフリカ植民地に適用されることになった。このことの直接的な背景は、本国でのライシテへの機運の高まりであろう。1901年のライシザシオン法の制定以来、本国ではライシテの徹底の機運が高まり、1903年には1万を超える学校が閉鎖されている(ボベロ 2009[2000]: 104-107)。こうしたなか、1903年1月、フランス下院が植民地大臣に管轄下にあるあらゆる機関におけるライシザシオンを求める勸告決議を行なっていた(Bouche 1975, t. II: 479)。こうしたフランス本国内でのライシザシオンの機運と期を同じくして、仏領西アフリカでは、1902年3月から着任した連合総督のルーム7(E. Roume)による仏領西アフリカ全体の再編成が進行していた(Conklin 1998: 47-51)。征服期の軍政から民政への移管がほぼ完了するなかで、ムールは鉄道建設、医療衛生事業を仏領西アフリカ連合全体として推し進めおり、そうした連合全体としての再編成の一つとして、教育制度改革も実施された(ibid.: 47)。

つまり、1903年12月24日の仏領西アフリカの教育の編成に関するアレテ(命令)<sup>8</sup>は、仏領西アフリカ連合全体の教育制度再編成と本国でのライシザシオンの強化が結節したものであった。このアレテを起草したギ(C. Guy)は、アレテの公布の約2か月に、仏領西アフリカの教育の編成についての報告書<sup>9</sup>を連合総督のルームに上程している。この報告書からは、仏領西アフリカにおける教育のライシザシオンに強い関心があったことが容易に読みとることができる。

報告書の冒頭では、現状の概要が語られている。曰く、仏領西アフリカにおける教育が「単一の方向性に欠け」、「中途半端な結果しかもたっていない」(Conseil de gouvernement de l'A.O.F. 1903: 1)。各植民地ごとに宣教団／修道会の学校、ライクの学

---

<sup>7</sup> 1902年から1907年まで在任。

<sup>8</sup> N. 806.—Arrête organisant le service de l'enseignement dans les colonies et territoires de l'Afrique occidentale française, le 24 novembre 1903. この文書は、Conseil de gouvernement de l'A.O.F. 1903: 8-18に再録されている。

<sup>9</sup> Rapport présenté par M. le Lieutenant-gouverneur du Sénégal a M. le Gouverneur général en Conseil de Gouvernement, sur l'organisation de l'enseignement en Afrique occidentale française, Saint-Louis, le 15 octobre 1903. なお、この文書は Conseil de gouvernement de l'A.O.F. 1903: 1-8に再録されており、これに拠った。

校、両者の混合の学校がそれぞれ別様に展開しており、ライICKの学校においても本国の教育の枠組みでなされておらず、適切な教員が配置されておらず、宣教団／修道会の学校では教員は修道会のトップによって一般的に任命されているため、初等教育修了免状すらもっていないものが雇われていることもしばしばある(ibid.: 1-2)。教育プログラムも一貫性に欠け、しっかりとした教育プログラムをもたない宣教団／修道会の学校に多大な補助金が支払われている(ibid.: 2-3)。さらに、既存の「マラブーの教育が危険であること」もまた忘れてはならない(ibid.: 3)。そして、この全体の概要は以下のように結ばれる。すなわち、「われわれは、すべての原住民にアクセス可能な教育を与える努力をしてきた。また同時に、われわれは、こうした教育がライICKになされることを望んできた。こうしたライICKな教育は、明瞭に現実的な目的を有し、定期的に学校に通うすべてのものに、彼の人生を名誉あるものとするための手段となることを保障するものであった」(ibid.: 3)。

そして、「ライICK」と題された項目が続く。「最近おこなわれた調査によれば、宗教的教育は…本質的にドグマティックで…その時代遅れの方法論は、利益を得られると呼ばれてきた子どもたちの知的な素質にほとんどつねに逆らうものとなっていた。他方で、厳密に中立的にみて、修道会は彼らの存在だけで、…[イスラームという]他の宗教に大半が帰属している住民のなかである種の対立を引き起こさざるをえない」(ibid.: 3)。

つまり、教育はライICKの原則のもとになされるべきであるという主張が一貫してなされている。宣教団／修道会の学校は、教育の十分なプログラムを有しておらず、ムスリムが多数派の植民地にあっては宗教上の対立を招くとしている。

その結果、1903 年末から、学校への補助金は一切なくなり、植民地行政による生徒のリクルート、解放奴隷の子どもたちを神父たちに預けることも停止されるようになった(Badou 1957: 27)。このことは行政文書からも確認できる。1905 年のオー・セネガル・ニジェール植民地についての覚書では、カトリック宣教団は「[入信への]勧誘のみに専念」していたため、1903 年までの「軍政時代に支給されていた補助金」を全廃したと書かれている<sup>10</sup>。実際のところ、1904 年以降、ワガドゥグとクーペラの宣教団の学校の生徒は激減し、両行とも一時的な閉鎖に追い込まれている(図 6-1, 6-2)。

---

<sup>10</sup> ANOM FM SOUD/I/7 Note sur la colonie du Haut-Sénégal et Niger, 1905.

年代	生徒数	生徒の概数 男児	生徒の概数 女児	備考
1902年1月				開設
1902年6月	93			
1902年11月	163			
1902年12月	173			
1903年9月	167			
1903-1904年度	132			
1904-1905年度年始	64			
1904-1905年度年末	50			
1905年10月	26			
1906年5月1日	25			閉鎖*
1906-1907年度		16	14	
1907-1908年度		19	12	
1908-1909年度		25	13	
1909-1910年度		15		
1910年1月				閉鎖**
1910年11月				フランス語学校開設***
1910-1911年度		17		
1911-1912年度		30		
1912-1913年度		18		
1915-1916年度		8	11	
1916-1917年度		17		
1917-1918年度		15		
1918-1919年度		18		
1920-1921年度	23			
1921-1922年度	104			

年代	生徒数	生徒の概数 男児	生徒の概数 女児	備考
1900年				開設
1900年10月			>120	
1902年	40			
1902-1903年度	70			
1903-1904年度	140			
1904年10-11月	115			
1904-1905年度		32		
1905-1906年度		65		
1906年1月	30			
1906年2月	64			
1906-1907年度		30		
1907年	30			
1907-1908年度		50		
1907-1908年度年始	30			
1907-1908年度年末	<30			
1908-1909年度	25	50		
1909-1910年度		22		
1909年11月				閉鎖: 現地語学校に再編
1910年2月				完全な閉鎖
1911-1912年度		26	27	フランス語学校開設
1912-1913年度	33	33		
1913-1914年度		30	25	
1914-1915年度		20	32	
1915-1916年度		31	23	
1916-1917年度		25	30	
1917-1918年度		29	33	
1918-1919年度		80		
1920-1921年度		60		

図 6-1, 6-2 ワガドゥグ(左)とクーペラ(右)の白衣宣教団による学校の生徒数の変遷<sup>11</sup>

宣教団の新たな駐在所の設置もまた、認められなくなった。1904 年、白衣宣教団は現在のブルキナファソの中央部のグルンシの土地に新たな駐在所を設立することの認可を植民地行政にもとめたが、新規の設置は容認されなかった(Badou 1957: 30)。こうしたなかで、1906 年、白衣宣教団は国境を越えて英領ゴールド・コースト側のナヴァロ(Navarro)に駐在所を新設している(Anonyme 1907: 10)。

1908 年に白衣宣教団の会報に掲載されたスーダン代理管区の報告では、1903 年以前とは異なる宣教の困難さが吐露されている。「福音伝道の成果は、正確にいて、ある種の難しさを有していた。すなわち、不信仰者の改宗という固有の難しさがあり、一方で不信仰者は多かれ少なかれムスリム化され、他方は深くフェティシストの迷信に結びついていた。困難さは、宣教団に対して不評を投げかけ、宣教団を孤立させようとする一部のヨーロッパ人の態度の結果でもある」(Anonyme 1908: 215)。明示的に批判していないが、「宣教団に対して不評を投げかけ、宣教団を孤立させようとする一部のヨーロッパ人の態度」とは、当時の植民地行政であろう。1903 年ごろに書かれたサハラ・スーダン代理管区の犬司教であったバザンが述べていた宣教の困難さとほとんど変わっていないが、植民地行政との認

<sup>11</sup> 出典は Harding 1971: 112, 116。なお、一部、簡略化した。「生徒数」は行政文書、「生徒の概数」は宣教団の史料の記述に基づいている。



識のズレは、植民地行政との明確な敵対関係へと変容している。こうした状況のなかで、1906年から1911年までの期間、白衣宣教団の拡張的な活動は抑制されており、駐在所の新設はまったく行われなかった。

変化は1911年に生じた。この年に、ワガドゥグ管区の司令官として、ダルブシエル(H. d'Arboussier)が着任したのである(Badou 1957: 55)。着任後、彼はすぐに神父たちと会談し、協調的な態度を示したという(ibid.: 55)。実際のところ、ダルブシエルは在任中——在任期間を正確に知ることはできないが、少なくとも、1911年から1920年代まで<sup>12</sup>——白衣宣教団の活動を一貫して擁護することになる。のちに、1920年代にオート・ヴォルタ植民地で同僚として勤務していたドゥラヴィネット(R. Delavignette)のやや戯画化された回想によれば、ダルブシエルは連合総督や各植民地の総督からの「通達を読まずに、ズボンのポケットにそのまま突っ込む」ような人物であったとされる(Delavignette 1946: 25)。

このことを最も象徴的に表したのが、1912年の白衣宣教団による駐在所の新設の問題であった。白衣宣教団は、1912年3月、クドゥグから北西14kmのグルンシの居住域のレオ(Reo)に白衣宣教団の新たな駐在所を設置したが(Lemaitre 1914: 278)、白衣宣教団の残した史料からはこの設置をめぐる白衣宣教団と植民地行政とのあいだに錯綜したやりとりがあったとされている(de Benoit 1987: 192)。それは以下のようなものであった。

レオの駐在所を新設したのちに、神父がワガドゥグのダルブシエルを訪問すると、ダルブシエルは設置に反対せず、宣教団の安全を確約した。このことが連合総督に報告されると、総督は新設するのが学校であるのか、農業施設であるのかを質した。当時、ワガドゥグの司教となっていたテヴェヌ(J. Thévenoud)は宣教だけが目的であるとダルブシエルの質問に答え、これが連合総督に送られた。数日後、ダルブシエルは、公文書保管庫で、先述の1904年に植民地行政が白衣宣教団に対して駐在所の新設を禁止した電信を発見する。

---

<sup>12</sup> ダルブシエルは1916年から1917年までのヴォルタ・バニ戦争(本稿4章参照)の期間、ワガドゥグ管区の司令官として在任しており(たとえば, Saul and Mayor 2001: 91, 274, 294)、ワガドゥグの白衣宣教団の日誌には最も時代が下ったものでは1918年に言及がみられる(de Benoit 1987: 251)。また、典拠が示されていないが、彼の在任期間を11年とするもの(Balima 1996b)や1921-1923年、1925-1928年にも在任していたとするもの(Cornevin 1988: 22)がある。ワガドゥグ管区司令官の任期を1911-1918年、1921-1923年、1925-1928年であれば、在任期間の合計はおよそ11年となり、整合性をもたせることができる。後に述べるように、ドゥラヴィネット(R. Delavignette)はダルブシエルの勤務実態について言及しており、ドゥラヴィネットがオート・ヴォルタ植民地で勤務していた1922-1930年までの期間(Mouralis et Piriou 2003: 331)、ダルブシエルもまた在任していたことはほぼ確実であろう。

その文書では、「行政官は、総督の事前の承認なしに、宣教団のあらゆる施設設置の認可を与える責任を有する」と書かれていた。神父はダルブシエルに新設の届出で良いことを確認したが、連合総督に認可が必要であるのか、届出が必要であるのかを確かめる電信が送られた。当時の連合総督であったポンティ(W. Ponty)は不在であり、クローゼル(F. Clozel)が代理を務めていた。クローゼルは、この問題は連合総督の権限であるとし、バマコに出張中であったクローゼルに代わって、事務総長のアンリがこの問題に応えることになった。アンリは、すでに行われている決定が適用されること、必要事項を記入するいかなる書類も存在しないことを返答した。つまり、単なる届出で十分であるということであった。

結局のところ、1904年の駐在所新設の不許可は管区司令官の権限で行われたものであり、管区司令官の権限であることを文書に明記していたため、管区司令官が許可を下せば、駐在所の新設には何ら問題がなかったことが、1912年に判明したのである。翌年1913年4月には、ブワの居住域のボンドクイ(Bondokuy)とサモの居住域のトマ(Toma)にそれぞれ駐在所が新設されていた(Lemaitre 1914: 278)。

宣教団自身によって書かれた教会史では、1913年の状態をこう記している。「地平線は非常に明るくなった。行政の側での排斥運動は終わりをむかえたのだ」(Badou 1957: 61)。「しかし、このことが個人的な歓迎や共感であって、公的なラインでの修正ではなかったことには注意を払わなくてはならない」(ibid.: 61)。宣教団は「つねに脅かされた状況」にあった(ibid.: 61)。1914年の連邦総督の通達<sup>13</sup>では、私学教育についてのさらに厳しい制約がなされ、新しい学校の設立は一切認められず、「進歩は早いリズムに従っていたわけではなかった」(ibid.: 61)のである。

カトリック宣教団に対する仏領西アフリカ全体の状況が変化したのは、第一次世界大戦のことであった。宣教団は全面的に協力し、ドイツ領トーゴへの出兵の後方支援(de Benoit 1987: 205)、物資調達の支援(ibid.: 239)に加え、住民の徴兵に協力した(ibid.: 239-241)。特に徴兵はフランス本国と植民地行政にとって重大な関心事であり、この点でカトリック宣教団に対する評価が向上することになる。

1917年には、仏領スーダンの代理管区・大司教のルメートル(Mgr Lemaitre)と当時のフランス首相のクレマンソー(G. Clemenceau)が会談し、「祖国防衛のために」、カトリック宣教団と植民地行政が強調すること、「住民たちを離反させることなく、黒人の軍隊をより強

---

<sup>13</sup> Circulaire du gouverneur général W. Ponty au sujet de l'enseignement prive, le 1er juillet 1914. Turcotte et Aube 1983: 68 の抄録を参照。

固にリクルートさせるために協力することが確定」された(Anonyme 1918: 364-365; 1919: 131)。また、当時のセネガル 4 都市選出の国会議員ジャーニュ(B. Diagne)は 1918 年にワガドゥグを訪問し、神父が徴兵を積極的に呼びかけ、改宗した信徒を兵士として派遣していることに強い好感を抱かせていた(Badou 1957: 76; de Benoit 1987: 240-241)。

そして、第一次世界大戦後の 1919 年、「仏領西アフリカにおける教育」と題された報告書において、「ライックの擁護」(“la défense laïque”)は仏領西アフリカではまったく必要ではない」と明示された(de Benoit 1987: 256)。このことには、カトリック宣教団の戦時中の貢献に加えて、2 つの時代背景があった。すなわち、一方では仏領西アフリカにおける「開発」(la mise en valeur)<sup>14</sup>が重要視され、宣教団によるものであれば、学校の建設が求められ、他方では植民地における諸外国の宣教の自由が認められ、アメリカのプロテスタントに対抗するためにカトリック宣教団の活動が容認されるべきであるという考えが植民地行政のなかで一般化したことによる(ibid.: 256, 281)。

1919 年に成立したオート・ヴォルタ植民地の初代総督のエスラン(E. Hesling)もまた、カトリック宣教団に好意的な人物であった。1920 年 4 月、カトリック宣教団のトップ——この翌年に代理管区の司教に任命されることになるワガドゥグのテヴェヌは植民地行政評議員(le Conseil d'administration de la colonie)に任命され、その直後に、植民地行政からカトリック宣教団の無料診療所に医薬品の提供がなされること、さらに、敷物生産を行なう共同作業場の建設費用として 2,000 フランを拠出することが決定された(Badou 1957: 81-82)。

---

<sup>14</sup> la mise en valeur は直訳すると「価値のあるものにすること」となるが、1890 年末から 1930 年代までのフランスとその植民地において植民地政策に用いられる特定のニュアンスをもつ語であった。この語の最も知られている用例は、植民地における人的資源の活用と換金作物生産などの開発を論じた、植民地大臣であったサロー(A. Sarraut)の 1923 年の著作『フランス植民地の開発』(*La mise en valeur des colonies française*)である(Conklin 1997: 41)。1895 年から 1930 年までの仏領西アフリカにおける植民地統治と「文明化の使命」の言説を研究したコンクリンによる英語の著作では、mise en valeur を強いて英訳すると“rational economic development”が適訳であるとしている(ibid.: 23)。第二次世界大戦後の国際秩序のなかで、英語の development の直訳が développement として現在まで用いられており、mise en valeur と développement はその思想的背景が微妙に異なり、両者を対比する場合には、「開発」という訳語は適切ではない。しかし、mise en valeur と développement の意味内容においては、サローの mise en valeur であれ、マーシャル・プランに直接的な起源のある développement であれ、植民地主義と人道主義に多かれ少なかれ依拠した経済開発を指している点では、ほとんど両者に差異はない。また、日本語の「開発」の意味内容も、少なくとも、サハラ以南アフリカについて「開発」という語が用いられる場合、ほぼ変わらないことから、ここでは「開発」の訳語をあてた。

カトリック宣教団の学校に対する公的な承認もこの時代に整備される。1921年にテヴェヌが同僚に宛てた手紙では、エスランがテヴェヌに対して、私学への助成金の公的な認可や宗教教育の自由が公的に認められるようになることを伝えている(de Benoit 1987: 256-257)。実際に、翌年1922年2月14日のデクレ<sup>15</sup>で、「フランス語教育を施し、フランスに対する忠誠の念、しっかりとした人格、一般的な素養という基礎的な要素を生徒に与える」という「私学教育は公教育と同様の目的を有し、同じ方法の教育」を施すという条件によって、私学教育の門戸がカトリック宣教団にも開かれるようになった(ibid.: 281)。こうして、カトリック宣教団の学校が公認され、1923年には、オート・ヴォルタ植民地の年次報告にもとりあげられるようになった<sup>16</sup>。やや多めに見積もられている可能性はあるが、ワガドゥグの白衣宣教団による学校は、1920-1921年度には23名であったのが、翌年度には104名にまで急増している(Harding 1971: 112)。

他方で、エスランが確約した私学への補助金はこの時代には達成されなかったが、フランス本国、仏領西アフリカの植民地行政がともに保守化した1940年代のヴィシー政権期において実現されることになる(Badou 1957: 221-222)。宣教団による私学への補助金は独立後も続き、財政を圧迫させていることを理由に1969年に撤廃されるまで継続された(Coukibaly 1997: 193-196)。このことは、本章4節で論じるように、就学者の宗教分布に大きな不均衡を生み出すことになる。

さて、本節では、1900年代から1920年代までのカトリック宣教団の活動と植民地行政との関係を論述してきた。重要な点は以下の3点にあるだろう。

第一に、カトリック宣教団と植民地行政の関係は固定的なものではなかった。1903年まではフランス軍と宣教団は互惠関係にあったが、1903年末の教育制度改革を中心にライシテの原則が徹底されると両者の関係は冷え切ったものとなった。のちにオート・ヴォルタ植民地となる地域に限定すれば、1911年以降、ワガドゥグ管区司令官の個人的な志向や資質と相まって、宣教団の駐在所新設がなし崩しに許可されるようになり、ローカルには植民地行政と宣教団の関係が回復するようになった。第一次世界大戦の終結後、情勢の変化によって、カトリック宣教団による私学が公認され、オート・ヴォルタ植民地の初代総督が宣教団を積極的に支援したことから、宣教団の活動は1920年代以降、さらに活発なもの

---

<sup>15</sup> Arrête réglementant l'enseignement prive en Afrique occidentale française, le 26 mars 1922. Turcotte et Aube 1983: 68 の抄録を参照。

<sup>16</sup> ANOM 1affpol/1249 Rapport politique, Haute-Volta, 1923.

となっていた。

第二に、こうしたことから、オート・ヴォルタ植民地のカトリック宣教団は、植民地行政のライシテに対抗し、これを克服してきたという歴史をもっており、宣教団自身の歴史観もまた、そのように構成されていた。すなわち、宣教の歴史とは、植民地行政との関係でいえば、「宣教団に対して不評を投げかけ、宣教団を孤立させようとする一部のヨーロッパ人」(Anonyme 1908: 215)との闘いであり、「つねに脅かされた状況」(Badou 1957: 61)からの脱却であった。

第三に、学校教育をめぐる問題が、カトリック宣教団と植民地行政との関係の根幹にあった。宣教団にとって、教育活動は宣教の手段であり、その活動の中心となるものであった。他方で、植民地行政にとって、その行政の構成員を確保するためにフランス語の読み書き能力が必要とされるだけではなく、文明の恩恵を与える手段としての教育啓蒙は、文明化の使命のイデオロギーを支える根本的な活動の一つであった(たとえば、Conklin 1997: 74-76, 130-134)。その意味において、カトリック宣教団と植民地行政との学校教育をめぐる闘争は、植民地における文明(化)の主導権をめぐるものであったともいえる。

こうしたことを踏まえつつ、2 節では、特にムブン川湾曲部の北部に駐在所がおかれたトマの白衣宣教団の活動を中心に、1920 年代から 1930 年代に生じたカトリック宣教団と植民地行政の緊張関係を論じていく。

## 6-2. フロンティアの変貌

2 節では、ムブン川湾曲部北部のトマに焦点をあてて、カトリック宣教団の定着以後、何が生じたのかを論じていく。論点を先取りしていえば、植民地行政官、郡長、宣教団、住民の 4 者による絡み合う政治が展開され、特に植民地行政官と宣教団によって宗教の帰属が友・敵関係を構成する原理として出現することを明らかにする。このように、宗教の帰属によって、友・敵関係が構成される場を宗教・政治とここでは呼ぶ。

本稿 1 部で論じたように、19 世紀にはムブン川湾曲部は諸国家の後背地であり、非ムスリムが多数派であるという点において奴隷狩りのフロンティアとなっていた。植民地統治以後、このムスリムにとってのフロンティアは宣教団にとってのフロンティアという意味をもつようになった。

前節で触れたように、ブワの居住域のボンドゥクイとともに、サモの居住域のトマに白衣宣教団の駐在所が設置されたのは、1913 年 4 月のことである(Lemaitre 1914: 278)。こ

の宣教の地域の選択には、カトリック宣教団の独特の宗教認識が反映されていた。前年の1912年の仏領スーダン代理管区の報告書には、こう書かれている。「ムスリムのプロパガンダに抗する戦いのために、すぐにも、3つか4つの宣教団の駐在所を設立することがよい戦略となるだろう。同時に、ボボ[ブワ]などの、マラブーの影響のある、モシに至るまでの反乱をおこす一部の住民のところに、拠点を築かなければ、意のままにさせてしまうことになる」(Anonyme 1912: 267)。つまり、在来宗教の信奉者が多数派の地域にいち早く宣教しなければ、イスラームに改宗してしまうという独特の宗教認識から、ブワとサモへの宣教が決定されていた。奴隷狩りのフロンティアはカトリックの宣教のフロンティアと化したのである。

アルフレッド・キ・ゼルボ(Alfred Ki-Zerbo)——オート・ヴォルタ出身者で初めてパリ大学で歴史学の博士号を取得し、歴史家・政治家として名を馳せたジョセフ・キ・ゼルボ(Joseph Ki-Zerbo)の父——は、まさにこのフロンティアの変化を体現した人物であった。彼は1875年頃に、ムブン川湾曲部北部、のちのトゥーガン管区<sup>17</sup>のサモのダ(Da)村に生まれた(Ki-Zerbo 1999: 15)。1900年頃<sup>18</sup>、別の村の兄の畑から両親の畑へと移動している最中に、彼は茂みから現れた集団に捕まり、奴隷となった(ibid.: 20-21)。ソファラ(Sofara)、トンブクトゥを経て、トンブクトゥの南のカバラ(Kabara)で彼は売却された(ibid.: 21)。その後、奴隷主人の下から脱走し、モプティで白衣宣教団に引き取られ改宗し、ワガドゥグ、ナヴァロ、レオの駐在所で働いた後に、1913年、アルフレッドは故郷のサモの居住域のトマの駐在所に赴任した(ibid.: 30-40)。小規模の奴隷狩りの対象となり、トンブクトゥまで連れ出されたアルフレッドは、宣教団によって救い出され、宣教団の一員として故郷のサモの土地にもどってきた。奴隷狩りのフロンティアは今や、宣教のフロンティアと変化したのである。

トマはドゥルラから北東に約40kmのところにある村である。19世紀末のアル・カリのジハードでは、トマは直接的な攻撃を免れたが、他の周辺のサモの村々と同様に、アル・カリに対して貢納をおこなったとされる(Echenberg 1969: 550-551)。少なくとも、植民地統治以前では、同盟の盟主となるような中核村ではなかったのだろう。

---

<sup>17</sup> トゥーガンはデドゥグ管区内の準管区とされた時期もあるが、やや混乱するため、ここでは一貫してトゥーガン管区としている。

<sup>18</sup> ジョセフ・キ・ゼルボによるアルフレッド・キ・ゼルボの聞き書きでは、フランス軍に対する最初期のサモの襲撃(1895-1896年)以降の出来事とされており(Ki-Zerbo 1999: 18)、1900年前後のことではないかと考えられる。

この村に白衣宣教団がトマに駐在所を建てた当時、村長はイサ・パレ(Issa Pare)という人物であった。イサは、トマから西に 20km ほどのクニ(Koungny)に拠点をおいていたベレ・ジボ(Bere Djibo)、あるいはベレ・シセ(Bere Cissé)と旧知の仲であったとされる(Saul and Mayor 2001: 340)。本稿 4 章 2 節で言及したように、このベレは、バラニ王国のウイディと提携して、スールー盆地とニジェール川中流域とのあいだの交易、特に奴隷交易をおこなっていたニョロ出身の商人であった<sup>19</sup>。イサ・パレの父はイダ・パレ(Ida Pare)といい、トマへの宣教以前からバンジャガラで白衣宣教団とすでに長い間の知り合いであったことから(Ki-Zerbo 1999: 43)、イダ・パレもまた、スールー盆地とニジェール川中流域とのあいだの小規模な交易に従事していたのであろう。

スールー盆地のフランス軍による征服の過程で、バラニがフランス軍と同盟を結んでいたことから(本稿 4 章)、ベレ・ジボはバラニのウイディの推薦でクニ郡長に就任したが、1905 年に「権力乱用」のかどで 1905 年に解任され(Hubbell 2001: 34)、1909 年に亡くなった<sup>20</sup>。その翌年 1910 年、トゥーガン、デドゥグ、サファネなどを含む地域の管区長所在地がクリからデドゥグに移転された<sup>21</sup>。管区長所在地では、換金作物の売買があり、フランでの賃金を受けとる各種行政官が居住していたため、植民地経済のなかで利益をあげていたムスリム商人たちが管区長所在地となったデドゥグに入植するようになっていた。言い換えれば、ムスリム商人たちにとっても、この地はフロンティアであった。そして、19 世紀後半からスールー盆地で長距離交易に従事していたベレ・ジボの息子のモディ・シセが、こうしたムスリムたちをまとめ、1911 年にデドゥグに最初のモスクを建てた。その地位は世襲されることはなかったが<sup>22</sup>、少なくとも 1926 年のモスク再建後の数年間は影響力を保持していたものと考えられる。

トマの村長であったイサ・パレもまた征服の過程のなかで郡長に任命されたが、1905 年に権力の濫用を理由として郡長を解任された(Saul and Mayor 2001: 340)。イサは 1915 年にトマ郡長に再任されたという説と、ヴォルタ・バニ戦争での功績から 1916 年に再任され

---

<sup>19</sup> Hubbell 2001: 34; CNABF 225 Fiche du renseignement concernant le nomme Mody Cissé.

<sup>20</sup> CANBF 27V86 Fiche du renseignement et notes concernant le nomme Yacouba Djibo, le 31 octobre 1937.

<sup>21</sup> AHCD s.c. Projet de tranfer du centre administratif du cercle de Koury à Dedougou, le 24 décembre 1909.

<sup>22</sup> 2013/8/26 Dedougou, Mamadou Bâ, Sidibe Isa(デドゥグの大モスクのイマームから紹介を受けたマラブー).

たという説があるが(ibid.: 340)、いずれにせよ、1915年には、イサがトマ村長であったことは確かなことである。

やや年代は前後するが、1913年にトマが白衣宣教団の駐在所の新設を認めた2年後にヴォルタ・バニ戦争(本稿4章3節)が勃発し、白人を受け入れていたトマは1916年5月に反植民地側の村々の軍隊から攻撃をうけ、これを撃退している(Saul and Mayor 2001: 200-201)。さらに、イサ・パレは植民地軍に従軍し、同時期に展開していた、隣接する地域のレオのグルンシの反植民地軍との戦いに参加し、負傷している(Larregain n.d.: 20)<sup>23</sup>。

1918年のデュベルネ神父(P. Dubernet)による報告では、「2年前まで、トマは小さな郡長所在地でしかなく、6つの村にある種の権威を行使するだけであった」が、行政の再編にあたってトマ郡は拡張され、イサ・パレは周囲の35の村々への宣教を許可したとされる(Dubernet 1918: 250-251)。トマの駐在所の創設者であるドゥベルネ神父は、イサを「信頼できる司令官」と評し(ibid.: 251)、彼を信頼し、彼の手腕と地位を活用してトマの宣教団の活動を拡張させていった。

しかし、トマ郡の拡張は隣接するクニ村との権力闘争の結果でもあった。クニ村の村長位はベレ・ジボの息子——デドゥグのイマームとなったモディ・シセの兄弟——のヤクバ・ジボ(Yacouba Djibo)が継ぎ<sup>24</sup>、1915年までにはクニ郡長の地位を回復していたようである。ヤクバ・ジボは、ヴォルタ・バニ戦争の際に、植民地軍側につき、デドゥグの管区司令官とトマの宣教団とのあいだをつなぐエージェントとして積極的に活動した<sup>25</sup>。しかし、こうした働きにもかかわらず、戦争後の1917年、ヤクバ・ジボは郡長を罷免された<sup>26</sup>。後年の史料では、「トマの宣教団の庇護のもとにあったイサの謀略にかかった」がゆえの罷免であ

---

<sup>23</sup> Larregain n.d.は筆者がデドゥグのOCADES(l'Organisation Catholique Africaine pour Développement et Sante)においてコピーをとった書籍である。序文によれば、同書は、以下のような経緯で書かれた。1992年12月に、ジュネヴィエヴ・デュプレ(Genevieve Duprez)が、ブルキナファソでラルガン神父(le Père Marcel Larregain)に会い、クッシリ(Koussiri)での宣教活動の時代の話聞き、デュプレがこのことを書くように申し出たことが執筆のきっかけである。ただ、すでにラルガン神父は自ら書くことがかなわず、自らの口述を録音したカセット・テープを23個、18ヶ月後に(1994年6月に)、デュプレのもとに送った。これを書き落としたものが同書である。

<sup>24</sup> CANBF 27V86 Fiche du renseignement et notes concernant le nomme Yacouba Djibo, le 31 octobre 1937.

<sup>25</sup> CNABF 27V86 Lettre sur remise de la peine Yacouba Djibo, le 20 octobre 1932.

<sup>26</sup> CANBF 27V86 Fiche du renseignement et notes concernant le nomme Yacouba Djibo, le 31 octobre 1937. ; CNABF 27V86 Lettre sur remise de la peine Yacouba Djibo, le 20 octobre 1932.



ったとされる<sup>27</sup>。1919年にヤクバ・ジボはクニの村長に復帰したが<sup>28</sup>、トマ郡内の一村長に留まることになった。

カトリック宣教団と植民地行政それぞれの断片的な記述を総合すると、1917年ごろのトマ郡の拡張とクニ郡の廃止は、宣教団とイサ・パレの両者の思惑が合致して進行したものと思われる。宣教団としては、周辺のムスリムに影響力のあったヤクバ・ジボ<sup>29</sup>を隣接する郡長の座から降ろし、自らの拠点のあるトマを主要な郡長に昇格させることで、宣教可能な領域を広げようという意図があったことが容易に想定される。他方で、イサ・パレはこうした宣教団の思惑を利用して、ライバルであったヤクバ・ジボを追い落とし、より広い範囲の郡長の地位を手に入れようとしたのであろう。後に述べるように、郡長の地位は富と権力の源泉であった。ヤクバ・ジボとイサ・パレの抗争は、この後、1930年代まで継続されることになる。

---

<sup>27</sup> CNABF 27V86 Lettre sur remise de la peine Yacouba Djibo, le 20 octobre 1932.

<sup>28</sup> CNABF 27V86 Audience publique sur affaire Yakouba Djibo, tenue le 16 septembre 1926.

<sup>29</sup> CANBF 27V86 Fiche du renseignement et notes concernant le nomme Yacouba Djibo, le 31 octobre 1937.



図 6-3. トマ郡長のイサ、公教要理受講者／洗礼志願者(des catechumenes)である彼の息子と娘(Dubernet 1918: 250)

しかし、後にイサに対する宣教団の評価は真逆なものとなった。1930年代にトマに赴任したラルガン神父はイサ・パレについてこう述べている。「彼はサヘルの多くのアフリカ人と同様に、多少、折衷的な傾向があった。フェティシスト、アニミスト、根本的にアニミストであると同時に、行政に気に入られるためにムスリムでもあった。[最初に宣教を行なった] デュベルネ神父の転任後、彼は宣教団に激しく反対するようになった」(Larregain n.d.: 20)。

このイサに対する評価は、植民地行政がイスラームを選好しているという認識によって構成されている。このことが事実かどうかはおくとして、イサとの関係の悪化は、「デュベルネ神父の転任」がきっかけではなく、1919年からトゥーガン管区司令官に着任したラズ

ース(M. Lasousse)とカトリック宣教団の対立に起因するものであった。

1922 年 11 月、オート・ヴォルタ植民地総督は戸籍管理を確立するために、婚姻の記録をおこなうことを決定した(de Benoit 1987: 345)。これをうけて、翌年の 1923 年から、トゥーガン管区司令官のラズースは、結婚の届出だけではなく、すべての婚約者に婚姻前に届出を提出させることを決定した(de Benoit 1987: 316)。宣教団はこの決定に猛抗議を開始する。宣教団にとっては、婚約は本人の自由意思に基づかない場合が多々あり、また婚約は実際の婚姻の数年前になされるため、その期間にキリスト教に改宗した者は他宗教の婚約者との婚約を破棄できないことが問題視された(ibid.: 316, 345)。結局のところ——ワガドゥグ代理管区・大司教のテヴェヌの抗議もあって——同年にキリスト教徒となった娘がサモの慣習に則って婚約を解消できることは受け入れられた(ibid.: 344-345)。

トマに駐在していた神父が 1923 年 6 月に大司教のテヴェヌへと宛てた手紙では、管区司令官のこの行動には宣教団に対するある種の敵意があると述べている。曰く、神父たちが村長や長老たちに彼らの娘たちをキリスト教徒にするように圧力をかけていると管区司令官は確信しており、この宣教団の多大な影響力に対して均衡を保つための手段として管区司令官はイスラームを好んでいる(ibid.: 346)。さらに、管区司令官はイサ・パレに対してトマにモスクを建てるようにそそのかし、8 月 2 日にはモスクが完成するだろうと述べている(ibid.: 346)。この手紙を受け取った大司教テヴェヌは植民地総督に抗議をするとともに、自らトマに赴き、キリスト教徒のチェックを行い、キリスト教徒の名前をもつイスラームへの改宗者の登録を拒否したうえで、全員の前で、完成しかかったモスクの基礎に穴をあけたとされる(ibid.: 346)。その後、モスクがどうなったのかは書かれていないが、おそらくそのまま建てられたのであろう。

司令官のラズースがどのような意図から、宣教団と対立したかは不明であり、果たしてラズースがモスク建設をそそのかしたのかも真偽がわからない。しかし、イサ・パレは郡長所在地としてのトマにモスクを建設し、ムスリム商人たちとも一定の関係を構築しておこうと考えたことは十分ありうることである。イサは郡内での影響力を維持・強化しようとしていたからである。

1926 年 9 月、クニの村長であったヤクバ・ジボは逮捕され、イサ・パレの告発によって、他地域への強制移住となる<sup>30</sup>。ヤクバの罪状は横領であったが、横領した金をつかって、ク

---

<sup>30</sup> CNABF 27V86 Audience publique sur affaire Yakouba Djibo, tenue le 16 septembre 1926. 以下の証言もこの史料に基づく。

ニ郡を復活させ、ヤクバが郡長となろうと画策したことが公開証言のなかで語られた。証言でイサは以下のように語った。

「2年ほど前から、ヤクバ・ジボは私に対するキャンペーンを行ってきました。彼はそのことを秘密裏に行っていたのですが、2年前から、[郡内の]ナリ、キビリ、ケメ、グワン、ニミニといった村々を精力的に訪れていました。彼は有力者を集めて、彼に語ったのです。「私は真のムスリムであり、4つのモスクのある大きな村の村長です。クニは大きな中心地とならなければなりません。昔のクニ郡の再構成のためにみなさんの援助が必要です。そのためには、イサ・パレのいることは一切聞いてはいけません。こうして、トゥーガンの司令官は、この[トマ]郡がうまくいかなくなったと思い、イサ・パレが高齢であることが重大なことであることに気付くでしょう。そこで、私が司令官にこの郡を二つに分割することを提案するのです。」ヤクバの行動によって、私はさきにあげた村々では歓迎を受けなくなり、私の命令は規則的に行使されなくなりました…。」

そのうえで、ヤクバが綿花の売却から得た1万フラン、クニの村民によって蓄えられた穀倉を横領し、これらを有力者に分配していることを告発し、最後にこのように締めくくっている。「この男は私の郡において多くの悪事をなしました。彼がトップとなれば、サモのムスリムとサモのフェティシストとのあいだに大きな困難が生じるでしょう。」

金額の細部に微妙な差異はあるものの、イサのほかに13名が、(1)ヤクバがイサに対抗し、郡を分割するためのキャンペーンを行なったこと、(2)ヤクバが横領を行ない、その横領したものを分配していたことを共通して証言し、場合によっては、(3)ヤクバがムスリムたちに対して影響力を持っていたことに言及している。

端的に言って、この事件は、イサとヤクバとのあいだの権力闘争である。しかし、注目すべきは、イサがこの権力闘争に宗教を持ち込んでいることである。イサは証言において、ヤクバが「真のムスリムであり、4つのモスクのある大きな村の村長」であることを強調しているとし、ムスリムと「フェティシスト」とのあいだの対立を引き起こすことが問題であると述べている。着目すべきは、イサはヤクバがムスリムであるから問題であると主張しているわけではなく、ムスリムと「フェティシスト」との対立が生じることが、植民地行政官にとって、問題であると受け取られるであろうことを先取りして、その懸念を証言として述べている点である。つまり、イサは、宗教の帰属が潜在的に政治的対立になりうるということを前提として、単なる横領の告発だけではなく、政治的対立が宗教の帰属の対立になる可能性があることを問題化しているのである。

ここでは、個別の政治的対立に宗教の帰属が持ち込まれる、あるいは政治的対立が宗教上の対立に重ねあわされる事態が生じている。この点において、この事件は、先の植民地行政官と宣教団との対立と同等のものであるといえる。婚約者の届出の義務化は宣教団の宗教実践上の障壁となったことが事の発端であったが、宣教団は——実際にそのような意図が行政の側にあったかどうかは別として——ムスリムに対して宣教団の影響力を拮抗させるためにあえて行政官は妨害をおこなったと読み解き、トマのモスク建設においてもイスラームを優遇する措置として理解し、そのために抗議を行っていた。こうした一連の行動では、宗教の帰属が友と敵を潜在的に分けうるものであり、特定の政治的な対立において、その対立が宗教の帰属の差異として理解され、行動に移されている。このように、宗教の帰属を潜在的に敵・友関係を構成するものとして理解し、行動してなされる政治を宗教・政治と呼んでおきたい。ヤクバの横領事件におけるイサの証言は、単なる横領事件の告発ではなく、こうした宗教・政治を持ち込んで、自らの郡長としての地位を確保しようとした高度に政治的な振る舞いであったといえるだろう<sup>31</sup>。

こうした宗教・政治は植民地行政内部においても展開されていた。このことの一例を 1929 年から 1931 年までトゥーガン管区に下級官吏として赴任したハンパテ・バ<sup>32</sup>(Hampate Bâ) が自伝のなかで記している。

1929 年 2 月に、トゥーガンに赴任したハンパテ・バは通訳のネティモ・ナクロ(Nétimo Nakro)と親交を深める(Bâ 1994: 322-323)。ある日のこと、ナクロはバに打ち明け話をする。自分は嫉妬深い人間だ、通訳になってからというもの同僚に多くの敵を作り、陥れてきた(ibid.: 325)。君と学校で同期だったワガドゥグの教師が、君と僕が仲良くなるだろうと手紙を寄越してきていた、実際、君は僕の敵ではなかった(ibid.: 325)。「僕は探していた友によく出会えたんだと感じたんだ。僕は君を陥れたりしない。この 5 ヶ月の間、君は気づかなかったけど、僕はすごく変わったんだ。それで、ムスリムになろうと決めたんだ。僕の両親がそうであったようにね。僕がまだうんと小さかった時に、ワガドゥグにできた白

<sup>31</sup> 他方で、イサは、宗教の帰属が政治的な対立になることを現実の問題としても捉えていたものと推測される。イサが主導したとされる、トマのモスク建設は、宣教団のみを支持しているわけではないというイサの政治的な振る舞いでもあったのだろう。先のヤクバの告発に証言した、イサの他の 13 名の証言者——すべてイサに対して有利な、ヤクバに対して不利な証言をした証言者はクニ村の有力者、周辺村の村長であったが、そのなかにクニ村のイマームも含まれていた。このことは、イサがムスリムとのコネクションを有していた、あるいはムスリムのなかに心情的な賛同者を有していたことの証左である。

<sup>32</sup> ハンパテ・バとその一族、その師であるチェルノ・ボカールについては坂井(2009b)を参照。

衣宣教団の学校に無理やり連れていかれたんだ。そして、僕はカトリックのクリスチャンにされた。自分の考えがいえるようになるまで僕が大きくなるのを待つはくれなかったんだ」(ibid.: 325-326)。こうしてナクロはある金曜日にムスリムとなり、バはジブリールというイスラーム名を彼に贈り、トゥーガンのすべてのムスリムがこのことを祝った(ibid.: 326)。すると、この事を知ったトマの宣教団の神父はナクロを説得しようとし、らちが明かないので、ワガドゥグの大司教のテヴェヌにこのことを知らせた(ibid.: 326-327)。大司教のテヴェヌはオート・ヴォルタ植民地総督に抗議し、総督はこの改宗の問題について調査するようにトゥーガン管区司令官に命じた(ibid.: 328)。この調査は当時の管区司令官によって毅然とはねのけられたが、この改宗問題とテヴェヌの働きかけによって、1931年にはハンプテ・バはワイグヤ管区へと転任を命じられることになった(ibid.: 329, 377-378, 391-392)。

実のところ、テヴェヌとの対立は、この改宗事件だけではなかった。「[改宗事件の]数年前に、役人の友人のデンバ・サディオ(Demba Sadio)と私はすでに「指輪をつけた鳥」[テヴェヌの綽名]の激怒を買ったことがあった。ワガドゥグの他のネイティヴの役人たちとともに、われわれはフランスの主要な商社によって設定された価格を回避するために購買協同組合を設立していた。こうした商社のパトロンによって、このことが把握されると、大司教テヴェヌはすぐにわれわれの試みを「ムスリムによる体制転覆」であると捉え、協同組合と自称する罫を使って、サタンの手先が人びとを勧誘しようとしているという教会の説教がなされた。政治的な調査が行われ、デンバ・サディオ、ディム・デロブソム(Dim Delobsom)や私よりも弱い立場にあった者たちは被害を受けなければならなかった。こうして、われわれの役人の小さな組合はすぐにその扉を閉めなくてはならなかった」(ibid.: 327)。

ここで言及されているデンバ・サディオとは、1942年セネガル生まれのアーティストのジャリバ・コナテ(Dialiba Konaté)の母方の祖父である(Leguy 2010: 204)。アルハジ・オマルのジハードの研究を成したロビンソンもまたデンバ・サディオに言及している。ロビンソンはコニャカリ(Koniakary)でデンバ・サディオという人物に1976年にインタビューを行っており、ロビンソンによれば、彼はカッソ(Khasso)のジュカ・サンバラ(Juka Sambala)の孫であるとされる(Leguy 2010: 221; Robinson 1988: 47)。バの記述では、デンバ・サディオはカッソのフルベのセンバラ・ジャロ(Semballa Diallo)王家の一族で、彼の父はコニャカリ州知事(le chef de la province)のサディオ・センバラ・ジャロ(Sadio Semballa Diallo)であるとされており(Bâ 1994: 112)、同一人物であることはほぼ間違いな

いだろう。

デンバはフェデルブ職業学校を卒業し、オート・ヴォルタ植民地総督の最初の「原住民秘書官」となっていた(ibid.: 112, 228)。バがデンバと最初に出会ったのは、バがワガドゥグに赴任した 1922 年のことであった(ibid.: 109, 112)。そして、バをデンバに紹介した人物が、アルハジ・オマルの子孫で、1913 年から 1915 年にジェンネの学校でバと同期であった、ティジャーニー・タル(Tidjani Tall)である(ibid.: 110, 112)。アルハジ・オマルの一族のなかで、ニョロに移った一族はその子どもたちをほとんどまったく植民地学校に通わせなかったのに対して、バンジャガラ一族は植民地学校に多くの子どもたちを送り、彼らは植民地官吏となっていた(Jézéquel 2003: 423-424)。ティジャーニー・タルもまた、そうしたバンジャガラのタルの一人であったのだろう。

ハンパテ・バがその自伝のなかで描き出した植民地行政内部の「原住民行政官」の人物たちの人間関係は、植民地統治以後の植民地学校を出た——1920 年代では、学校を出ずに征服期の従軍経験後に植民地官吏となった旧世代の「原住民行政官」も少なくなかったが——人物たちによって構成されていた。改宗事件の通訳のネティモ・ナクロも植民地学校出身者であり、デンバ・サディオもディム・デロブソム——この人物については後述する——もまた、そうした人物であった。

こうしたことを前提としたうえで、改宗事件は植民地行政内部での宗教の帰属をめぐる陣地戦の一つとしてカトリック宣教団によって捉えられたと(バが叙述していると)みなすことができるだろう。ワガドゥグの大司教テヴェヌがとった行動は、植民地行政内部の構成員を宗教の帰属によって敵と友に分け、寝返った友(ネティモ・ナクロ)を取り戻そうとし、寝返りをさせた敵(ハンパテ・バ)を排除しようとするものであった。購買協同組合の閉鎖もまた同様であろう。フランスの商社への対抗措置は「ムスリムによる体制転覆」であるとされ、その宗教の帰属が問題とされている。そのような意味において、これらの事件は、個別の信仰の変化や植民地経済内部でのミクロな闘争だけではなく、宗教・政治の闘争の問題となっていた。

もっとも、ハンパテ・バによる自伝やワングランの伝記がどの程度、歴史的事実に基づいたものであるのかについては批判的な検証が必要であろう<sup>33</sup>。筆者の入手しえた断片的な

---

<sup>33</sup> たとえば、西アフリカ歴史学の代表的な研究者の一人であるオースティンによるワングランの研究では、ワングランの伝記に描かれているバンジャガラにおけるウシ事件——第一次世界大戦期に徴集されたウシをワングランが横領し、英領ゴールド・コーストに密輸

行政文書や宣教団についての先行研究のなかでは、改宗事件や購買協同組合事件についての証拠を見出すことはできなかった。しかし、このことから一連の事件がハンパテ・バの創作と断定することもできないだろう。行政文書は植民地統治期全体を通してまばらにしか残されておらず、特に 1940 年代以前のものはほとんど残されていない。また、これらの事件は宣教団にとってもあからさまな政治介入であり、このような政治的な内容を後世に残したかどうかは疑問である。そして、ハンパテ・バの自伝やワングランの伝記は、こうした植民地行政内部の「原住民行政官」たちの暗躍を主題としているため、そのほとんどが史料に残りにくいものとなっている<sup>34</sup>。こうしたことから、これらのテキストは、おそらくハンパテ・バの思惑通り<sup>35</sup>、歴史的事実と断定しがたいが、完全に創作とは言い難い、実際にあってもおかしくはないものとなっている<sup>36</sup>。

しかし、ハンパテ・バの自伝に書かれたトゥーガン管区での逸話のなかで、行政文書と明確に対応しているものがある。それは、ランフィエラの郡長をめぐる逸話である。ランフィエラは、スールー盆地の征服の過程で、サモの村々によるフランス軍への襲撃の黒幕

---

し、その後、裁判沙汰になった事件——が、マリとセネガルの国立公文書館、フランス、エクサンプロヴァンスの国立海外公文書館の史料調査の範囲では、まったく公文書での言及を見出すことができなかったことを報告している(Austen 2008)。他方で、1920 年代にオート・ヴォルタ植民地で勤務した文筆家のロベル・アルノー(Robert Arnaud)の史料とハンパテ・バの著作を比較したポンドプロは、ドリ管区についての記述において類似した事件を発見しており、どこまで創作であったのかがいまだ十分に検証されていないことを指摘している(Pondopoulo 2010)。ハンパテ・バの自伝とワングランの伝記の歴史史料としての史料批判はまだ端緒についたばかりである。

<sup>34</sup> 一方で、文学としてみれば、このことはハンパテ・バの仕掛けた特有のテキストの構造として理解できるだろう。ワングランの伝記とハンパテ・バの自伝は、書かれた内容と、書く形式とを交錯させるというテキストの構造を有している。つまり、序文や注記では書かれた内容が歴史的事実であることを強調し、おびただしい量の固有名詞を登場させるという形式によって、歴史的事実との照合を志向させるというベクトルをもたせつつ、行政文書には登場しにくい「原住民行政官」を主たる登場人物とし、彼らの裏舞台での活躍に焦点をあてる内容によって、歴史的事実との照合をあえて困難にさせるというベクトルも内在させている。この 2 つの相反するベクトルによって、これらのテキストは、一方では歴史的事実に接近し、他方では創作へと乖離させるという緊張関係のなかで、歴史的事実と創作の中間に位置するようになっている。

<sup>35</sup> 学術の形式を知っており、行政史料にアクセスできたハンパテ・バであれば、典拠となる史料を一定程度示すことも十分に可能であったであろう。

<sup>36</sup> ハンパテ・バの叙述を史資料の一つとして、ここで提示したことについて疑念をもつ向きもあるかもしれない。しかし、ここで提示したハンパテ・バの叙述の内容が、もし仮に 1929 年から 1931 年までトゥーガン管区で勤務していた博識な人物から対面の調査において口頭で語られたものであったらどうであろうか。その取扱い「歴史的事実と断定しがたいが、完全に創作とは言い難い、実際にあってもおかしくはないもの」という判断に落ち着くであろうし、その内容を提示しないわけにはいかないだろう。



という嫌疑をかけられ、1886年に処刑されたカラモコ・バこと、ママドゥ・サノゴ(本稿4章2節)の居住地である。1902年、ママドゥ・サノゴの兄弟がランフィエラの村長となり、1921年にママドゥ・サノゴの息子のンパ・サノゴ(M'Pa Sanogo)が村長位を継承するとともに、ランフィエラ郡長に任命されていた<sup>37</sup>。

ハンパテ・バが叙述しているのは、ランフィエラ郡長のサモの住民への徴税の場面である(Bâ 1994: 336-339)。ランフィエラ郡では人頭税の支払いが滞っており、トゥーガンの司令官が直接巡回することになった。ランフィエラの郡長が言うところでは、ランフィエラ郡に含まれるようになっていたサモの以前の郡のディン(Din)、ウエ(Oue)、プロ(Pro)といった村々で滞納が続いているとされた。司令官はこれらの村々の有力者を集め、尋問がおこなわれることになった。サモの代表者たちは不作、家畜の流行病からもう支払えるものはなにもないと述べたが、ダフィンのランフィエラの郡長はこれを虚偽だとし、代表者の一人であるサングレ(Sangoule)という男に「真実」をいうまで鞭打ちにさせた。ハンパテ・バはこれをやめさせるように司令官に進言したが、司令官は郡内の強制力は郡長に委ねられているとして応じなかった。そして、惨い鞭打ちを受けたサングレは、ついに家のなかにある100フランを差し出すことになった…。

この出来事は、1929年12月か、1930年12月のことであるとされている(ibid.: 497)。オート・ヴォルタ植民地の解消を受けて行われた1932年のトゥーガン管区の監査官の報告書の抜粋では、1928年にすでにランフィエラ郡長が数々の「権力乱用」(l'abus)を働いていることが知られており、そのことが一部の住民たちから公然と批判されていたことが記述されている<sup>38</sup>。さらに、この報告書は、ウエやディ(Di)といった郡を1926年にランフィエラ郡に併合したのちにこれらの村々にランフィエラから代表者を配置し、「支配」していたことを明らかにし、こうした代表者を削減するように命じたとしている。後の文書では、植民地行政によって、こうした代表者をおく慣行は廃止された<sup>39</sup>。ハンパテ・バが目撃したのは、ランフィエラ郡長のこうした「権力乱用」の一コマであったのである。

この1932年の監査官報告は、トマ郡長のイサ・パレの「権力乱用」も厳しく批判していた(Saul and Mayor 2001: 340)。この報告書ではイサは「専制君主」のように描写され、税

---

<sup>37</sup> CNABF 27V11 Fiche des renseignements concernant le nomme M'Pa Sanogo, le 8 juillet 1921.

<sup>38</sup> CNABF 27V86 Extrait du rapport de tournée de l'inspecteur des affaires administratives dans le cercle de Dedougou (octobre 1932).

<sup>39</sup> CNABF 27V11 Origine de la chefferie, canton de Lanfiera, le 3 mai 1949.

の不当徴収に加えて、郡内の住民をコートディヴォワールのプランテーションに労働者として派遣する斡旋をして利益をあげていたことが告発されていた<sup>40</sup>。1932年10月、イサは罷免され、彼と彼の長男のバヨ・パレ(Bayo Pare)はワガドゥグへの10年の強制移住が命じられた<sup>41</sup>。これを受けて、トマ郡はクニ郡になり、ヤクバ・ジボがクニ郡長に任命され<sup>42</sup>、イサ・パレとヤクバ・ジボの郡長の座をめぐる闘争は、ここで一つの終着点を迎えることになった。

1932年にはトマ郡だけではなく、デドゥグ管区では、サファネ、サナバ(Sanaba)、ジョコンゴ(Diokongo)の郡長が税の不当徴収を告発され、減俸を受けている<sup>43</sup>。しかし、郡長の横暴がこれによって一掃されることはなかった。翌年の1933年から1934年にかけて、ムブン川湾曲部では、「伝統的首長」と一部の住民との対立が激化し、そして宣教団、行政を巻き込んだ闘争へと展開される。舞台の中心となったのは、1929年に白衣宣教団によって駐在所が設立されたマサラである(Hébert et Bikaba 1977: 29)。

次節では、1933年から1934年にかけて展開したマサラとその周辺におけるカトリック教徒の抵抗と、この抵抗が監査官によって事件化された騒動をとりあげ、同一事件内での植民地行政官と宣教団の異なる宗教・政治の展開をみていく。

### 6-3. マサラにおける抵抗運動と監査官による事件化

マサラは管区長所在地であるデドゥグから約10kmのところに位置し、植民地統治以前はブワバの村々の同盟の盟主の一つであり(本稿2章7節)、カラントオのジハードに抗して戦争を行ない(本稿3章4節)、フランス軍による征服の際には見せしめのためにフランス軍からの攻撃を受け(本稿4章2節)、ヴォルタ・バニ戦争(本稿4章3節)においても、反植民地側に組し、隣接するブワバの村であるパサコンゴと同様にフランス軍による破壊を受けている(Saul and Royer 2001: 185)。

---

<sup>40</sup> Saul and Mayor 2001: 340; CNABF 247 Rapport de tournée de l'inspecteur des affaires administratives dans le cercle de Dedougou. Réglementation sur la suppression de la colonie de Haute Volta. 1932.

<sup>41</sup> CNABF 27V86 Lettre sur le canton de Toma au gouverneur du Soudan Français, le 31 décembre 1932.

<sup>42</sup> CNABF 27V86 Lettre sur le canton de Toma au gouverneur du Soudan Français, le 31 décembre 1932.

<sup>43</sup> CNABF 247 Rapport de tournée de l'inspecteur des affaires administratives dans le cercle de Dedougou. Réglementation sur la suppression de la colonie de Haute Volta. 1932.

このように、植民地統治以前は中核村の一つであったが、隣接するデドゥグが征服の過程でいち早くフランス軍に味方したため(本稿 4 章 2 節)、デドゥグは管区長となった一方で、マサラはデドゥグ郡内の一つの村にとどまることになった。宣教団がこの村を選んだのは、行政の中心であるデドゥグから距離をおいたところに駐在所をおこうという意図があったとされるが(Hébert et Bikaba 1977: 29)、こうした歴史的背景をどこまで感知していたのかは——ヴォルタ・バニ戦争によって破壊されたことは知っていたが(ibid.: 29)——不明である。1932 年までには数多くのカテキスムの受講者がおり(ibid.: 29)、1933 年 10 月に学校ができ、50 名ほどの生徒が通っていた(de Benoit 1987: 402)。宣教は順調に進んでいたといえよう。こうしたなかで、1933 年に、「伝統的首長」・衛兵と住民とのコンフリクトが生じることとなった。

このコンフリクトについては、のちに神父たちが、宣教団の日誌、一部の行政史料・書簡を採録した報告(Hébert et Bikaba 1977)を書いている。ここに採録された宣教団の日誌によれば、コンフリクトの直接的な要因は些細な諍いが原因であった。1933 年の聖霊降臨祭(la Pentecote)の折、ミレット・ビールの飲み過ぎによる喧嘩が、パサコンゴで生じた(ibid.: 29)。これをうけて、同年 6 月 10 日、デドゥグの衛兵がカテキスムをうけたことのある住民を集め、8 名が逮捕され、デドゥグに送られた(ibid.: 29)。これは、パサコンゴの村長の息子が、パサコンゴの人びとが宣教団に足しげく通うことを望んでおらず、彼がマサラのドフィニ何某という人物に殴られたと主張し、デドゥグ管区司令官のスト(Staup)と衛兵を動かしたことが原因であった(ibid.: 30)。これ以降の日誌の抜粋には、「伝統的首長」と住民との対立が記されるようになっている。

「[同年]9 月 27 日、行政にとっては、住民は熱狂にあり、彼らは賦役の仕事から逃げ、村々で暴力をふるい、村長たちを罵った云々。多少の事実はあるが、誇張する必要はない。…1933 年 11 月 15 日、村で大騒動。他の村と同様に、マサラでも人頭税の支払の遅れが問題となっていた。郡長と衛兵が村にやってきて、人頭税が支払われるまで居座ることになった！さらに、奴らはテーブルのラッカセイにも満足していない！12 月 2 日、デドゥグでカテキスム受講者に対する嫌がらせ！ヨンクイ(Yonkuy)では首長と信者とのあいだに騒乱！」(ibid.: 30)。

マサラの神父たちは、村長、郡長、衛兵による「権力乱用」——実際には賃金の支払いのない強制労働である賦役(la présentation)と過重な人頭税(本稿 5 章 2 節)、恣意的な逮捕——に対して批判的であり、こうした「権力乱用」を黙認、ないしは追認している植民地

行政に対しても批判的であったことは明白である。

また、1929 年末に設立されたばかりのマサラの宣教団のある種の熱気があったであろうことも感じとることができるだろう。1930 年代後半にトマの宣教団に赴任し、クイ(Kouy)の新たな駐在所の解説に携わったラルガン神父は、「トマの宣教団は墮落していたということとはできないが、沈滞(anémie)していた」(Larregain n.d.: 20)と語っている。さらに、彼によれば、トマとマンジャクイ(Mandiakuy)の宣教団は植民地行政から積極的な援助を受けていたが、ボボとブワバでの宣教を行っていた神父は宣教のためにも植民地行政の指揮命令を拒否していた(ibid.: 48)。マサラの宣教団の政治的な立ち位置がどの程度、戦略的、あるいは意図的なものであったのかを確かめるすべはない。しかし、トマの宣教団の状況——宣教団の入植直後から頼りにしていたトマ郡長のイサ・パレから距離をもたれ、意図せざるかたちでイサの解任にあい、カトリック宣教団を敵視していたヤクバ・ジボ(ibid.: 52)が郡長となったクニ郡に併合されたという状況——に比べれば、マサラの宣教団が新天地での熱意のなかにあって、植民地行政や「伝統的首長」との対立も辞さないという態度を形成していったとはいえるだろう。

1934 年以降、村長、郡長、衛兵と一部の住民との対立は激化していく。1934 年 1 月 18 日、カリ(Kari)のカトリック信徒が襲撃され、2 月 16 日、被害者が 50 フランの賠償金を受け取り、2 名の襲撃者は懲役 15 日となる(Hébert et Bikaba 1977: 31)。2 月から 3 月にかけて、ブワバの村々で賦役の拒否、税の滞納が相次ぐ(ibid.: 32)。また、3 月には、デドゥグの道路建設作業中に作業者が 4 名、衛兵によって殺害された(ibid.: 27)。3 月 22 日、ワッハープ周辺のヤホ(Yaho)出身でマサラの教理教師(un catéchiste)のマルタン・ビカバ(Martin Bicaba)が逮捕(Hébert et Bikaba 1977: 32, 46; de Benoit 1987: 435)、懲役 10 ヶ月で、賦役の拒否や税の滞納の扇動が理由とされた(de Benoit 1987: 435)。同日、ボロモ周辺の村で乱闘があり、カトリック教徒を含む死傷者が出た(ibid.: 33)。4 月 3 日、一連の混乱を理由として、デドゥグ管区司令官のストが退任(ibid.: 33)。同月 10 日、デドゥグの聖霊降臨祭に、各地のカトリック教徒が参集した一方で、カリ(Kari)とワルコイ(Ouarkoye)の郡長に派遣された男たちが教会を取り囲み、武装した衛兵が巡回するなか、式典が挙行(ibid.: 33)。式典そのもので事件はなかったが、カリ郡の 2 名のメダル受取者(des médailles)が帰宅途上、衣服とメダルを強奪され、マサラに逃げ込む(ibid.: 33)。

翌 11 日、新しいデドゥグ管区司令官が着任(ibid.: 34)。5 月 5 日、(マサラでの?)「祈りの小屋」(les “cases de prières”)の破壊とカトリック教徒の指導者たちの逮捕、寒さと飢え

による 3 名の拘留者の死亡(ibid.: 34)、翌 6 日、監査官・行政官・衛兵の一行がクリからデドッグにむけて移動し、その途上の一部の村々で、「祈りの小屋」の破壊、メダル受理者のメダル破棄と暴行がなされる(ibid.: 34)。8 日、デドッグで監査官による大集会が開かれ、監査官がマサラとその周辺村のカトリック教徒たちに対して演説を行い、その後、コートディヴォワール総督レスト(Reste)が来訪し、事情聴取を行い、一連の騒動の公文書が作成される(ibid.: 35)。

この公文書の作成をもって、公的には一連の騒動の終結がなされたことになる。経過を見ると、植民地行政は、デドッグ管区司令官の解任、カトリック教徒への懲罰によって、決着をつけたことがわかる。もっとも 1934 年 5 月以降も、より小規模の騒動は継続された。少なくとも、同年 12 月にも、カトリック教徒への懲罰や税の滞納が生じており(ibid.: 36)、1945 年から数年間、トゥーガン管区のヌーナ(Nouna)郡においても、カトリック教徒の集団的な賦役拒否や投獄がなされていた(Larregain n.d.: 58-60)。

このことから 2 つの点を指摘しておく必要がある。第一に、この一連の騒動はフランス軍の征服期からの植民地行政への断続的な抵抗とそれに対する懲罰の応酬の一つであり、これ以降も断続的に継続された。第二に、それ以前の抵抗と異なる特徴は、「伝統的首長」と(一部の)住民という明確な対立軸が形成されたことと、1916 年のヴォルタ・バニ戦争以後の武器の接収によって(本稿 4 章 3 節)、軍事力を奪われ、「反乱」を形成するには至らなかったことである。そして、これらの特徴もまた、1930 年代以降も引きつがれることになるだろう。

そのうえで、この事件が植民地行政官と宣教団にどのように把握されたのかを検討する<sup>44</sup>。まず、現場の植民地行政官と神父の認識をみておこう。デドッグ管区司令官のストは教理教師のマルタン・ビカバの逮捕の数日前にマサラの神父と会談している。宣教団の日誌に記されたこの出来事は現場の植民地行政官と神父との認識の差異が際立って書かれている。

「彼[スト]が内密にこう言った。公然たる噂(誰による？衛兵なのか、首長なのか)によれば、マルタンに責任があり、首謀者であるという。神父はマルタンとは信頼関係があること…を述べた。スト氏は調査を実施すると言う(しかし、誰によって？)。行政官によれば、宗教運動とは以下のようなものを含んでいるという。すなわち、「キリスト教徒」と呼ばれる人たちがおり、彼らは[「伝統的首長」によって要請される]雑務をなさないうえに、賦役

---

<sup>44</sup> 本来であれば、検討の対象に住民を含めるべきであるが、史資料の限界から、これは叶わなかった。

すらしない。人頭税すら払わない…。[しかし]これらは権力乱用(l'abus)に対する健全な反応ではないだろうか」(Hébert et Bikaba 1977: 32、()内は原文、[]は引用者による補足)。

つまり、デドゥグ管区司令官は、税の滞納、賦役の拒否を「宗教運動」とし、神父は「権力乱用に対する健全な反応」として捉えている。若干ニュアンスは異なるが、ボボ・ジュラソのカトリック宣教団の代理院長(le supérieur intérimaire)もまた、同様の見解をデドゥグ管区司令官に伝えている。彼によれば、この運動は「宗教を口実とした、首長と衛兵の権力乱用に対する抵抗」であった(ibid.: 33)。

ここでは、デドゥグ管区司令官は「カトリック教徒」か否かという対立軸による宗教-政治の場を構成している。実際、現場レベルでは、「カトリック教徒」の「首謀者」が逮捕され、「カトリック教徒」への懲罰が実施されており、宗教-政治が展開されることになった。これに対して、現場の神父たちは、植民地行政官に対しては、「権力乱用」を問題とし、宗教-政治として構成されることに抵抗しているように振る舞っている。

もっとも、神父たちは植民地行政内部に別の対立軸をもとにした宗教-政治をみていた可能性がある。1934年5月8日のデドゥグでの大集会の後に、神父たちはヌーナの行政官を訪問している。この行政官は不在であったのだが、その妻が神父に応対した。その場で彼女は「私の夫はフリーメイソンではありませんから、神父様たちはご友人でいらっしゃいます」と語っている(ibid.: 35)。ここで仏領西アフリカにおけるフリーメイソンの概略を述べるいとまはないが、フリーメイソンのアルシーヴに基づく研究によれば、1899年にダカール、1908年にカイにロッジが形成され(White 2005: 95-96)、仏領西アフリカの連合総督のポンティが熱心なフリーメイソンであったこと(ibid.: 99-102)や前節で述べた1903年の仏領西アフリカの教育編成においてフリーメイソンがライシザシオンを強化するように積極的に働きかけていたこと(ibid.: 105-107)が明らかになっている。

実際のところ、植民地行政官のフリーメイソンはそう珍しいものではなかった。たとえば、1920年代にオート・ヴォルタ植民地で勤務していた民族誌家・行政官のアルノー(R. Arnaud)がフリーメイソンに加入しており(ibid.: 97)、1934年のコートディヴォワール植民地総督のレストもまたフリーメイソンであった、あるいは、少なくとも、カトリック宣教団からはそのようにみなされていた(Hébert et Bikaba 1977: 25; de Benoit 1987: 436)。フリーメイソンとカトリックという対立軸をもった宗教-政治は、この騒動に対するワガドゥグの大司教テヴェヌやその後の宣教史家たちの認識を捉えるうえで重要な点となるだろう。ともあれ、まず、現場の植民地行政官に対して、高位の植民地行政官がこの騒動をどのよ

うに認識していったのかをみていこう。

1943 年 4 月 3 日にデドゥグ管区司令官のストは解任され、監査官のコルネ(Cornet)がこの問題の調査を行うことになった。同年 7 月 27 日の監査官コルネによる電信では、この騒動は「原住民の権威に対する扇動的な行動の現れであり、いかなる宗教的性格も有さない」(Hébert et Bikaba 1977: 50)としている。3 日後の 7 月 30 日の通信においては、この騒動の原因についての考察がなされ、管区司令官であったストと宣教団の責任に言及するようになる。「首長たちの権威は一方では妨害をうけ、他方では中断されるものとなっており、われわれ[の行政]は失敗した状態のままとなっている。これは無秩序と混乱であり、まさにアナキーの状態(l'état d'anarchie)である。この想定外の態度はただ単に正当化されえないものであるだけではなく、首長たちが行なったのかもしれない権力乱用によって許容されるものではない。これは、ローカルな行政の部分的な無理解、軽率、寛大、臆病、宣教団の軽率と誤った精神が長期間継続されたことによって起こったものである」(ibid.: 43)。そのうえで、「攪乱者」は「キリスト教徒を自称し、宣教団によって彼らの行動が支持されると信じた、頑固なフェティシストでしかない」と断じている(ibid.: 43)。

ここでの「アナキー」の用語法は、徴税の十全な執行がなれない状態を指した 1890 年代後半以降のそれ(本稿 4 章 3 節)と同じものである。国家のない状態としての「アナキー」は行政機構の機能不全と同義語になっている。そして、「アナキー」な状態は、この段階では、宣教団の活動を積極的に抑制しなかった管区司令官のストの「無理解、軽率、寛大、臆病」、抵抗を許容した宣教団の「軽率と誤った精神」によってもたらされたものとされた。つまり、消極的に扇動を是認した責任が管区司令官と神父にあるとしている。

しかし、8 月 6 日の監査官コルネの電信では、より積極的な責任に言及されるようになった。曰く、「アナキーと謀略」は宣教団と管区司令官による共謀のものであり、計画的なもので、現状の「伝統的首長」たちの変更を企図したものであった(ibid.: 51)。以後、この見解が植民地行政の公式見解として固定されることになった(ibid.: 51)。先に示した宣教団の日誌の内容を踏まえれば、宣教団と管区司令官の共謀と計画、「伝統的首長」たちの変更の意図といったことは事実と異なるものであったことはほぼ間違いない。この恣意的な見解の変更には政治的な意図があったと推測されている(de Benoit 1987: 437-441)。

注目すべきことに、ワガドゥグで調査を行っていた監査官カルブ(Carbou)が、ほぼ並行して、ワガドゥグ管区においても、相似した論法で宣教団の活動を問題化していた(ibid.: 437-441)。1934 年 8 月 11 日、監査官カルブはコートディヴォワール総督に宛てた電信の

なかで、「オート・ヴォルタ植民地の成立していた 13 年のあいだに、彼ら[カトリック宣教団]は政府に対する多大な影響力の恩恵をえており、利益をあげてきている。大半の行政官は彼らの為すがままにしている」(ibid.: 439)と書き送っている。さらに、9 月 1 日の報告では、宣教団の「権力乱用」として、伝統的首長位と植民地行政に対する影響力、信者の獲得のための抑圧、伝統を無視した多数の少女と女性の「誘拐」をあげて、危機的状况であるという主張がなされた(ibid.: 440-441)。これをうけて、1935 年まで多数の調査が実施されることになった(ibid.: 441-456)。

1920 年代半ばにトマ郡において婚約の届出をめぐる騒動で問題になったように、「伝統的な悪習」からの女性の「解放」は宣教団の主要な関心事の一つであり、この問題はつねに植民地行政と宣教団の関係の火種となっていた。また、この時期には、複数の管区でモシのナーバ(王、首長)の継承問題が生じており、宣教団は継承問題に関与する複数のアクターの一つでもあった。つまり、監査官カルブは、旧オート・ヴォルタ植民地内での植民地行政、宣教団、「伝統的首長」の三者が対立する論点に焦点をあてて、これらの論点において、宣教団の「権力乱用」があるとして問題化したのである。

マサラの宣教団を告発した監査官コルネとワガドゥグの宣教団を告発した監査官カルブの論理構成が相似したものであることは指摘されるべきだろう。両者はまったく性質の異なる問題を取りあげているが、一部の行政官と宣教団のある種の癒着、現状の「伝統的首長」位の変更への意図を見出すという点では共通している。特に、マサラの宣教団ではこのような癒着や意図を見出すことは困難であるため、コルネとカルブが宣教団の影響力の低下を意図して足並みを揃えたという推測も否定しがたいものとなっている。宣教団に対する対応をめぐる植民地行政内部の政治闘争でもあったことはほぼ間違いないだろう。

コルネとカルブによる一連の捜査、さらにはコルネとカルブに対する捜査は、コートデヴィヴォワール総督と仏領西アフリカ連合総督との対立、旧オート・ヴォルタ植民地内部での行政官内部での対立、ワイグヤ管区、ワガドゥグ管区におけるローカルな政治的対立が混線した非常に複雑な経過をたどることになるが(ibid.: 441-456)、その詳細と検討は別稿に譲るとしよう。結果だけを述べれば、宣教団とこれを排除しようとした監査官のコルネとカルブの両者の痛み分けとなったといえるだろう。1935 年の監査官バゴ(Bagot)の報告書では、カルブによる宣教団の「権力乱用」は誇張であると結論付けられた一方で(de Benoit 1987: 450; Kevane 2006: 16)、宣教団は評判を落とし、モシの管区ではカテキスム受講者は減少し、この傾向は第二次世界大戦まで——保守化し、宣教団に恩恵をもたらしたヴィシ



一政権期まで——継続することになった(de Benoit 1987: 453)。

1934年8月にコートディヴォワール総督のレストへとワガドゥグの大司教テヴェヌが宛てた書簡では、「確立された権威や共通の義務への帰順は、われわれが教育するカトリックの道徳の教え」と述べており(Badou 1957: appendice 5)、テヴェヌはこの点において争う意図はなかったことは確かであろう。しかし、1934年のテヴェヌが同僚に宛てた私信からは、テヴェヌがフリーメイソンとカトリック宣教団の対立軸をおく宗教・政治として、一連の捜査を認識していたことが窺える。それによれば、コートディヴォワール総督のレストがフリーメイソンであるだけではなく、追加の捜査に加わった監査官アダム(Adam)はフリーメイソンの連帯によって問題化した監査官カルブと結びついており、一連の捜査はフリーメイソンによるものとして捉えうるものとなっている(de Benoit 1987: 452, 455)。ケヴァヌ(Kevane 2006)が指摘するように、このことは、カルブと親交を深くし、カルブの捜査に通訳として参与した「原住民行政官」のディム・デロブソム——購買協同組合事件において、大司教テヴェヌによる政治的介入から逃れ得た者として、デンバ・サディオとともにハンパテ・バが言及した人物——に対する宣教団の認識において顕著にみられる。

ディム・デロブソムはワガドゥグの北西のサオ(Sao)郡のナーバの息子として、1897年に生まれた(ibid.: 13)。父はムスリムであったが、息子にはカトリックの洗礼を受けさせ——当人は世俗主義者となったが——植民地学校で学び、カイでの修学を終えて、1920年代にオート・ヴォルタ植民地の「原住民行政官」となった(ibid.: 13)。ディム・デロブソムはモシの最初の叙述家として一般に知られており、1930年代初頭に『モロ・ナーバの帝国』、『黒妖術の秘密』という歴史書と民族誌を出版している。先に言及した、フリーメイソンの行政官・民族誌家であるアルノーとは親交があり——この親交がフリーメイソンと関係したものであるのかは不明であるが——アルノーは『モロ・ナーバの帝国』(Delobsom 1932)の序文を書いている<sup>45</sup>。1934年の監査官カルブによる捜査に通訳として関わっていたが、同時期にデロブソムの父が死去し、サオ・ナーバの継承を試みるも、1937年に白衣宣教団の働きかけによって旧オート・ヴォルタ植民地から追放され、1940年に死去している(ibid.: 14)。

1948年のワガドゥグの大司教テヴェヌが同僚に宛てた手紙では、マサラでの騒動後の捜査について触れて、デロブソムを監査官と「共謀した」フリーメイソンであると述べてい

---

<sup>45</sup> なお、ここでは、アルノーのペンネームである、ロベル・ランド(Robert Randau)で記名されている。

る(ibid.: 16)。このことはワガドゥグの宣教団のなかでの共通認識となっていたようである。宣教史家のブドウもまた、典拠を示さず、彼が「フリーメイソンとつながって」おり、それゆえに、宣教団に対して敵対したと記している(Baudu 1957: 166-167)。1930年代の旧オート・ヴォルタ植民地において、実体としてフリーメイソンの活動がいかなるものであったのかは別途検証する必要があるだろう。しかし、大司教のレヴェヌたちが、宣教団と敵対する植民地行政内部の人物たちをフリーメイソンと認識し、彼らとの闘争としても、一連の騒動を把握していたことは確かなことである。

実際のところ、状況が変化すれば、フリーメイソンと名指されることは、重大な政治的意味をもつようになった。ヴィシー政権期の仏領西アフリカでは、「ドゴール派」、「共産主義者」、「ユダヤ人」と並んで、「フリーメイソン」の行政からの追放が行なわれ(Ramognino 2006: 113-122, 149-157)、この時期の仏領西アフリカの行政官 400 名のうち、21 名が「政治的理由」、10 名が「フリーメイソンであること」を理由に解任されている(Cohen 1971: 158)。

仏領西アフリカにおけるライシザシオンが頂点をむかえた 1900 年代においてフリーメイソンがライシザシオンを熱烈に支持し、ロビー活動も行っていたこと(White 2005)、このことが宣教団にとって一定程度、現実的な脅威であったことも確認しておく必要があるだろう。たとえば、こうした状況にあった 1902 年に、当時のサハラ・スーダン管区代理司教のバザンは私信において、宣教団の私信のすべてがフリーメイソンによって閲覧されていることを批判している(ibid.: 105)。本章 1 節で、オート・ヴォルタ植民地のカトリック宣教団が、植民地行政のライシテに対抗し、これを克服してきたという歴史と歴史観をもってきたことを指摘したが、こうした歴史は部分的にはフリーメイソンとの闘争の歴史でもあったといえるだろう。

本節でとりあげた、マサラとその周辺におけるカトリック教徒の抵抗と、この抵抗が監査官によって事件化された騒動と、前節のトマでの宣教団、植民地行政官、「伝統的首長」の権力闘争は、様々な点での差異を含んでいるが、宣教団を中心とした宗教-政治の展開という点では共通している。次節では、この点を論じつつ、植民地統治以降の宗教をとりまく条件がいかなるものであったのかを明らかにしておこう。

#### 6-4. 植民地統治以降の宗教をとりまく条件

まず、前提として、ムブン川湾曲部が植民地統治以降、カトリック宣教団の宣教のプロ

ンティアという位置づけを与えられたことに言及しなければならないだろう。モシの居住域の次の宣教の地として、ムフン川湾曲部が選ばれたのは、イスラームがいまだ十分に浸透していない土地であったからである。

そのうえで、本章 2 節と 3 節でとりあげた 2 つの事件群の共通点は以下の 3 点にまとめられるだろう。第一に、トマとマサラの双方の事件群はともに、基本的には「伝統的首長」の「権力乱用」をめぐる政治闘争であったが、宗教の帰属が敵・友を規定するという点において、宗教・政治を構成していたといえる。言い換えれば、本稿 4 章で論じた、政治・軍事における植民地統治の確立を前提として、「伝統的首長」の富と権力の争奪や反発が生じており、ここに宣教団が入植することによって、政治闘争に宗教の帰属が持ち込まれることになった。

第二に、この政治闘争の主たるアクターは、何らかのかたちで植民地行政の構成員、ないしは準構成員でなければならなかった。トマでの政治闘争のアクターは、植民地行政官、「原住民行政官」、「伝統的首長」という植民地行政の構成員であり、教育活動を展開していた宣教団という準構成員であり、トマと比して圧倒的に人数が増加しているものの、マサラでの政治闘争のアクターもまた、基本的には同様である。宣教団を植民地行政の準構成員として把握することに違和感をもつ向きもあるかもしれないが、本章 1 節で述べてきたように、カトリック宣教団は、主として教育を通じて、植民地行政に参画していくことを志向しており、その意味では、宣教団はまったきに植民地行政の準構成員であった。ローカルな「伝統的首長」や「原住民行政官」などをめぐるミクロな問題と、(旧)オート・ヴォルタ植民地全体の宣教団と植民地行政の関係をめぐるマクロ問題という差異はあるものの、宣教団と植民地行政の対立は、植民地行政の特定の施策——具体的には、女性の地位問題、教育問題、ローカルな行政の「権力乱用」の問題への対処の主導権をめぐる政治的対立である。つまり、究極的には、宣教団によって構成された宗教・政治とは、植民地行政の施策の主導権をめぐる抗争であった。

そうであるがゆえに、第三に、宣教団によって構成された宗教・政治は、植民地行政全体の体制変更をもとめるのではなく、植民地行政内部での敵を排除し、友を増加させていく陣地戦として展開されることになった。ワガドゥグの大司教テヴェヌによる、トマに勤務していたハンパテ・バの転任騒動やディム・デロブソムなどの追放は、こうした植民地行政内部での陣地戦の結果である。そして、植民地行政内部での陣地戦は、教育をめぐる闘争においても展開されていた。宣教団の学校教育を通じて、植民地行政にカトリック教徒

を送り込むことも同様に、植民地行政内部での陣地戦として理解できるだろう。

さらに付け加えれば、カトリック宣教団は、結果として、教育を通じた陣地戦において、かなりの成果をあげることになった。すなわち、カトリック宣教団はオート・ヴォルタ全体のカトリック教徒の割合を劇的に増やすことができなかったが、エリート内部での割合を圧倒することができていたのである。

植民地統治以降、ムブン川湾曲部を含むオート・ヴォルタ植民地における宗教の状況は、それほど劇的に変化したとはいえない。あくまでも植民地行政官の心象を反映させた推計であるが、オート・ヴォルタ植民地では 1923 年から 1961 年のあいだに、「アニミスト」が全人口の 78%から 68.7%に減少、ムスリムが 22%から 27.5%、カトリックが 0.05%から 3.7%、プロテスタントが 0 から 0.1%とそれぞれ微増にとどまっている(表 6-1)。

	1923		1925		1930		1947		1956		1961	
アニミスト	2,350,871	78.0%	2,600,790	84.7%	2,574,345	84.5%	2,480,550	80.8%	2,560,847	75.2%		68.7%
ムスリム	662,759	22.0%	461,987	15.0%	460,240	15.1%	523,200	17.0%	703,600	20.7%		27.5%
カトリック	1,427	0.0%	7,696	0.3%	10,913	0.4%	63,600	2.1%	136,461	4.0%		3.7%
プロテスタント							2,150	0.1%	5,934	0.2%		0.1%
合計	3,015,057		3,070,473		3,045,498		3,069,500		3,406,842			

表 6-1. オート・ヴォルタにおける宗教分布<sup>46</sup>

オート・ヴォルタ植民地において重要であったことは、カトリック宣教団の教育活動によって、同植民地内の全人口の宗教構成とは異なって、就学者のなかのカトリック教徒の割合が高くなったということであった。植民地期を通じて、教育をうけた人口はごくわずかであったが(表 6-2)、そのなかでのカトリック教徒の割合が高くなっていた。たとえば、1919 年のワガドゥグの公立学校における生徒の宗教構成では、全体で約 5 割がカトリック教徒となっている(表 6-3)。もっとも、この数値はカトリック宣教団がもっとも早くから活

<sup>46</sup> 出典は以下。ANOM 1Affpol/1248 Rapport politique et administratif annuel, 1923.; ANOM 1Affpol/1248 Rapport politique et administratif annuel, 1925. ; ANOM 1Affpol/1248 Rapport politique et administratif annuel, 1930. ;ANOM 14Miom/2200 Rapport politique de Haute-Volta 1947. ; CNABF 2G56 Rapport général année 1956, Haute-Volta. ; Service de Statistique et de la Mécanographie 1961 Enquête Démographique par Sondage en République de Haute-Volta 1960-1961. t. 1. Ouagadougou: Secrétariat d'État aux Affaires Étrangères. ; ANCI 5EE69 Fiches des renseignements sur marabouts du cercle de B. D., 1917-1932., CNABF 225 Haute-Volta. Correspondance sur le sujet des marabouts; fiches biographiques des marabouts influents, 1922-1923. ; ANOM 14miom/1084 Lettre du Gouverneur général de l'A.O.F. a Gouverneur du Sénégal, du Haut-Sénégal et Niger, et a Procureur général, chef du service judiciaire de l'A.O.F., Dakar, le 1er septembre 1911.

動していたワガドゥグを対象としたもので、オート・ヴォルタ植民地全体としてはもう少し割合は下がっている。1931 年度のオート・ヴォルタ植民地全体における私立学校を含む全生徒の宗教構成では、カトリック教徒は約 3 割ほどになっている(表 6-4)。とはいえ、1930 年段階においても、オート・ヴォルタ植民地の全人口のなかでカトリック教徒の割合は 0.4% であったことを踏まえれば(表 6-1)、就学者のうちの約 3 割がカトリック教徒によって占められていることはかなり特異な状態であったといえよう。つまり、教育をうけることのできた少数のエリートの中でカトリック教徒の割合が高くなっていた。このように、植民地行政との教育を舞台とした宗教・政治の陣地戦において、カトリック宣教団は着実な勝利を重ねていたのである。そして、このことは本稿 8 章で論じるイスラーム改革主義運動の間接的な要因となっていたのである。

年度	1911年	1914年	1920年	1925年	1947年	1956年	1960年
就学率	0.16%	0.18%	0.36%	0.72%	3.33%	7.06%	8.94%

表 6-2. 1911 年から 1960 年までの初等教育就学率<sup>47</sup>

宗教	予科		初等科		中等科		合計	
	児童数	割合	児童数	割合	生徒数	割合	生徒数	割合
カトリック	18	34.6%	39	48.8%	30	56.6%	87	47.0%
ムスリム	3	5.8%	27	33.8%	10	18.9%	40	21.6%
在来宗教	31	59.6%	14	17.5%	13	24.5%	58	31.4%
合計	52		80		53		185	

表 6-3. 1919 年のワガドゥグの公立学校における生徒の宗教構成<sup>48</sup>

宗教	生徒数	割合
在来宗教	1786	49.4%
キリスト教徒	1031	28.5%
ムスリム	795	22.0%
合計	3612	

表 6-4. 1931-1932 年のオート・ヴォルタ植民地における私立学校を含む生徒の宗教構成<sup>49</sup>

<sup>47</sup> 出典は以下。Gouvernement général de l'Afrique occidentale française 1912: 262; Haut-Sénégal et Niger 1914: 129; Haute-Volta 1920: 69; ANOM 1Affpol/1248 Rapport politique et administratif en Haute-Volta, 1926.; ANOM 14Miom/2200 Rapport politique de Haute-Volta 1947.; ONUESC (l'Organisation des Nations Unies pour l'Éducation, la Science et la Culture) 1961; なお、1956 年以前の就学可能児童数は、1961 年統計の 7 - 14 歳の児童数の人口全体の割合を、1956 年以前の人口(Gervais 1998: 73-76) に当てはめて算出した。

<sup>48</sup> 出典は ANOM 1affpol/3049 Rapport sur le service de l'enseignement par M. Demaret, Inspecteur, 1919.なお、侮蔑的表現は改めた。

---

<sup>49</sup> 出典は ANOM 14miom/2644 Rapport Statistique, Haute-Volta, annee scolaire 1931-1932.なお、侮蔑的表現は改めた。

### 第3部 ブラザヴィル会議以降の政治とイスラーム：ムブン川湾曲部における新たな政治-経済-イスラームの複合

第3部では、主として、1940年代から1960年までのムブン川湾曲部における政治とイスラームの展開を論じる。7章では、1945年から1960年までのオート・ヴォルタ植民地の独立に至る政党政治の展開を論じ、8章では、1940年代後半から顕在化したイスラーム改革主義運動を、この運動の展開したボボ・ジュラソの植民地統治以前からの長期の歴史のなかで位置づける。そのうえで、9章において、これまで論じてきた内容を統合させ、ムブン川湾曲部の19世紀から1960年に至るまでの通史をまとめ、西アフリカ内陸における近代とは何を意味するのかを明らかにし、これらを踏まえて、本稿のいう歴史人類学が人類学の理論のなかでどのように位置づけられ、いかなる地平を示しているのかを述べる。

#### 7章 オート・ヴォルタ植民地における政党政治

7章では、1945年から1960年までのオート・ヴォルタ植民地の独立に至る政治史を、ムブン川湾曲部における政党政治の導入がローカルな政治状況をどのように変えたのか、あるいは変えなかったのかという点から明らかにする。これまでのブルキナファソの政治史研究は、主としてRDAとUVの主要な政治家に焦点をあてて、彼らの政治闘争の出来事を中心に研究、叙述されてきた。この分野は十分な研究蓄積があるとはいえず、こうした基礎的な研究は、貴重なものとなっている。しかし、これらの研究は代表的な政治家の政治闘争の事実の記述にとどまっており、ブラザヴィル会議以降の政党政治とは何であったのか、それ以前のローカルな政治とは何が異なり、何が継続したのかという視角を欠いている。

したがって、本章では、ローカルなコンフリクトに着目しつつ、植民地統治以前からの歴史と政党政治がどのように結びついたのか、また、排除された他の政党の運動から一党体制の確立への過程をどのように捉えうるかという点に着目しつつ、議論を展開する。

具体的には、オート・ヴォルタ政治史の大局的な変化に対応して、1節では1945年から1947年にかけてのオート・ヴォルタ植民地再構成までの初期の二大政党期、2節では1948年から1957年までの断続的な暴力事件が発生した多政党期、3節では1957年から1960年までの一党体制の確立期を概観し、投票率や議員の社会的属性などの定量的なデータから全体の特徴をまとめる。4節では、それまでの記述の内容をまとめたうえで、ムブン川湾曲部における政党政治の導入とは何を意味したのか、植民地統治以前の国家と国家をもた

ない社会の特徴がどのような影響を与えたのかを論じる。

## **7-1. ブラザヴィル会議からオート・ヴォルタ植民地再構成まで：ボボ・ジュラソ／ワガドゥグ、RDA／UV**

### **7-1-1. ブラザヴィル会議**

第二次世界大戦後、1944年1月30日から2月8日まで、現在のコンゴ共和国の首都、当時の仏領赤道アフリカ連合の政庁のおかれたブラザヴィルで、戦後のフランスの植民地への対応が協議された。この会議をブラザヴィル会議という。会議はサハラ以南アフリカの各植民地の総督21名、自由フランス諮問議会9名、北アフリカからのオブザーバー6名などで構成された(平野 2014: 37)。この会議で採択された勧告は、植民地住民の選挙権拡大、本国の議会への植民地議員枠の拡大などに加えて、教育・医療・生活水準の改善、強制労働の廃止が構想された一方で、この勧告の冒頭において、植民地の自治は遠い将来においても認めないとも書かれていた(ibid.: 38)。

ブラザヴィル会議には、フランス史、あるいは国際政治史上の位置づけがそれぞれ与えられている。たとえば、仏領赤道アフリカ総督がいち早く「自由フランス」の支持を掲げたことの重要性、あるいは、この時期のフランスにとって植民地の保持が帝国としての自己意識を堅持・鼓舞するために重要であったこと、あるいは、すでに第二次世界大戦後の国際秩序をめぐるアメリカ合衆国が反植民地主義の立場を打ち出しており、フランスがこれに対して対抗する必要があったこと、また、教育・医療・生活水準の改善は戦間期の人民戦線内閣ですでに方針が打ち出されており、その内容を踏襲していたものであることなどである。

しかし、オート・ヴォルタの政治史からみたとき、最も重要な点は、ブラザヴィル会議の勧告が第二次世界大戦後になされたこと、すなわち、フランスの敗戦、ヴィシー政権期とその末期における混乱を目の当たりにした後になされたことにあったと思われる。

4章で触れたように、第一次世界大戦の状況下で生じたヴォルタ・バニ戦争では、戦時の物資の徴発、徴兵強化によって、フランス劣勢の観測がムブン川湾曲部のなかでローカルに生じたこともまた、戦争の開始の一つの条件であった(Saul and Royer 2001: 102, 106-108, 123)。国際情勢の変化はローカルに解釈され、植民地行政に対する態度決定の一つの要素となっていた。

フランスの敗戦は、ムブン川湾曲部の少なくとも一部の住民には知られていたことであ



った。たとえば、次章で扱う 1941 年のボボ・ジュラソ事件の主犯格の一人は第二次世界大戦のために徴兵され、ヨーロッパの戦線に送られた後に、フランスの敗戦後、故郷のトゥーガン管区に帰還している。また、ヴィシー政権期の仏領西アフリカでは、英領植民地との国境が封鎖され、「ドゴール派」への警戒から監視や不当な密告が横行し、英領植民地との往来を行っていた住民もまたしばしば、こうした監視や不当逮捕の対象となっていた (Conombo 2003: 79-82)。こうしたことから、第二次世界大戦によって植民地行政が混乱していたことは、一部の住民にはよく知られていたと思われる。

まして、ヨーロッパの商社と取引をおこなっていた都市部の商人、植民地行政の官吏、教師、退役軍人といったフランス語の読み書き能力をもつ人びと、あるいはそうした人びとと深いつながりをもつ人びとが、第二次世界大戦の終結やそれがもたらす仏領西アフリカにおける変化に相当の関心をもっていたことは想像に難くない。ヴィシー政権期の混乱した状況からどのような状況に変化するのか、そうした関心のなかで、ブラザヴィル会議についての報に触れたのであろう。

ここで強調しておきたいことは、ブラザヴィル会議の勧告に含まれている「植民地に有益な政策」(平野 2014: 59)が反映されるかたちで、第二次世界大戦以後の旧オート・ヴォルタ植民地において、これまでと異なる政治運動が展開されたわけではないという点である。勧告に書かれている具体的な内容よりも、そうした勧告がなされたということによって、ヴィシー政権期の状況からは大きく変化するであろうという観測、あるいは展開せざるを得ない状況になるであろうという予測が生じたという点で、ブラザヴィル会議は意味をもっていたと捉える必要がある。端的に言えば、これ以降の政治運動は、ブラザヴィル会議がそれらを容認／公認した結果ではなく、ブラザヴィル会議の意義が仏領西アフリカの種々の住民によって解釈された結果として捉えなければならない。

実際のところ、旧オート・ヴォルタ植民地の領内においては、ブラザヴィル会議以降、明確に植民地秩序に異を唱える政治運動と、植民地秩序をあからさまに支持する政治運動が同時並行して展開することになる。この 2 つの政治運動は、その政治的立場においてはまったく対照的なものであったが、ブラザヴィル会議に間接的に影響されて生じたという点においては共通している。まずは、反植民地主義を掲げた、ボボ・ジュラソにおける政治運動をみていこう。

### 7-1-2. ボボ・ジュラソにおける政党政治の起源

オート・ヴォルタにおいて、最初に結成された政治結社は、フランコ・アフリカ研究委員会(le Comite d'étude Franco-africain、以後、CEFA と略記)である。CEFA のボボ・ジュラソ地方支部が設立されたのは、1945 年 8 月 23 日のことである<sup>1</sup>。CEFA はセネガルのダカールに本部があり、この本部は 1945 年 3 月に設立され、同年 7 月に当局の認可を取得している(Suret-Canale 1977: 21-22)。当初の目的は文化的なものであり、アフリカの諸言語の発展を企図していたが、当局によって、フランス語の発展が第一の目的であるという文言が規約に追加された(ibid.: 21)。政治的には、サンディカリズムやコーペラティズムを志向し、土地利用の独占や植民地大企業への反対、ヨーロッパ人とアフリカ人の平等を求めているとされる(ibid.: 21-22)。表 7-1 にまとめた CEFA ダカール本部の主要な構成員をみると、フランス社会党系の政治家が名を連ねていることがわかる<sup>2</sup>。

役職	人名	出身地	経歴など
会長	Armand-Pierre Angrand	セネガル	政治家。1919年にB. ジャーニュの支持を得てゴレ島の地方選挙で当選。1934年に設立されたセネガル社会党(Parti socialiste sénégalais、フランス社会党(SFIO)セネガル支部の前身)の創設者の一人。第二次世界大戦後も、社会党の秘書として勤務。
事務総長	Joseph Corréa	セネガル	ウィリアム・ボンティ師範学校の元学生、商店経営。
不明	Guillaume Couteau	不明	混血の技師、ウフエボワニの「精神的父」／「チューター」。
不明	Sadji Abdoulaye	セネガル	リセ・フェデルブの卒業生、教師、文筆家。
不明	Jean Senghor	セネガル	不明。
不明	Lamine Gueye	セネガル	政治家、フラン社会党セネガル支部に所属。1946年末にCEFAを脱退。

表 7-1. CEFA ダカール本部主要構成員<sup>3</sup>

CEFA のボボ・ジュラソ地方支部は、1945 年 7 月 20 日に、ボボ・ジュラソに転入してきた、セネガルのウォロフのアブドゥカン・ジョップ(Abdoukane Diop)が代表となって設立された<sup>4</sup>。彼は、仏領西アフリカのフランスの大手商社(SCOA)に勤務したが、わずか 2 カ月で退職し、CEFA の専従活動家となっていた<sup>5</sup>。彼のボボ・ジュラソへの移住は CEFA

<sup>1</sup> ANOM 14miom/2515 Rapport du commissaire de police de Bobo, le 3 décembre 1945.

<sup>2</sup> 19 世紀半ば以降に、フランス本国と同じ市町村制が施行されたセネガル四都市——サン・ルイ、ゴレ、リュフィスク、ダカール——では、その「住民」には参政権が付与されていた(松沼 2012: 83)。

<sup>3</sup> Suret-Canale 1977: 22; Garvey 1983: 557 の記述をもとに筆者作成。

<sup>4</sup> ANOM 14miom/2515 Rapport du commissaire de police de Bobo, le 3 décembre 1945.

<sup>5</sup> ANOM 14miom/2515 Rapport du commissaire de police de Bobo, le 3 décembre 1945.

の組織拡張のためであり<sup>6</sup>、このアブドゥカン・ジョップに加えて、ダカール本部の会長の  
アングラン(A.-P. Angrand)と事務総長のコレア(J. Corr  a)がボボ・ジュラソ地方支部の創設、  
あるいは組織化のために現地を訪れていたようである<sup>7</sup>。

1945 年 12 月時点での CEFA ボボ・ジュラソ地方支部の幹部をまとめたものが表 7-2 で  
ある。幹部たちの大きな特徴はボボ・ジュラソに植民地統治以前に居住していた民族の出  
身者がいないことである。幹部のほとんどはフランスの商社勤めか商人であり、植民地統  
治以後に仏領西アフリカの各都市で広域に活動していた人物たちであった。そして、そう  
した人物たちの多くがムスリムであったため、CEFA のボボ・ジュラソ地方支部の幹部た  
ちもまたムスリムが多くなっている。

他方で、判明している範囲では、名誉会長のラッサナ・ジャキテ——ハンパテ・バによ  
る伝記の主人公のワングランこと、サンバ・ニャンベレがボボ・ジュラソで所有していた  
商店を、ワングランの没落後に買い上げたギニア人の商人(Fourchard 2001: 152)——を除  
いた主要幹部がボボ・ジュラソにわずか数年しか居住していなかったことも注目すべき点  
である。代表のジョップは設立の数か月前に転入した人物であり、副代表も 6 年前に転入  
してきた新参者であった。つまり、CEFA の幹部の大半はボボ・ジュラソにそれほど多く  
のネットワークをもっていたとは考えにくい。

---

<sup>6</sup> ANOM 14miom/2515 Extrait du rapport politique mensuel, C  te d'ivoire, octobre 1945.

<sup>7</sup> ANOM 14miom/2515 Note de renseignements sur la comite d'  tude Franco-africaines, Dakar, le 26 janvier 1950.

役職	氏名	生年	出生地	民族	転入年	経歴など
代表	Abdoukane Diop	1914年	サン・ルイ(セネガル)	ウォロフ	1945年7月	元大手商社(SCOA)勤務。
副代表	Albert Larbat Joseph	1900年	ファダ・ングルマ(オート・ヴォルタ)	混血	1939年	大手商社(FAO)勤務、1945年12月時点ですでに副会長を辞任し、離脱。
会計	Tiemoko Keita	1906年	カンカン(ギニア)	*ジュラ	不明	商人-運送業者。
会計補助	Mamady Kaba	1912年	カンカン(ギニア)	*ジュラ	1940年	不明
宣伝員	Boubacar N'Daw	1909年	バマコ(仏領スーダン)	ウォロフ	1944年	木工職人。
宣伝員	Ibrahima Koume	1900年	セグー(仏領スーダン)	トゥクロール	不明	農産物取引商人。
監査	Joachim N'Daiye	不明	不明	*ウォロフ	不明	不明
名誉会長	El-Hadj Lassana Diakite	***1880年	***カンカン(ギニア)	**ジュラ	***1926年	商人-運送業者。CEFAでは目立った活動をしていない。
名誉会長	Bounafou Diakite	不明	カンカン(ギニア)	**ジュラ	不明	織物、農産物取引商人。以前は運送業も展開。
事務	Mamadou Sissoko	不明	不明	*ジュラ?	不明	大手商社(CFCI)勤務。

表 7-2. CEFA ボボ・ジュラソ地方支部の幹部<sup>8</sup>

しかし、それにもかかわらず、ボボ・ジュラソ地方支部は数か月のあいだに急速に構成員を増やし、ダカールも含む他の CEFA を凌駕する規模を誇るようになる。1945 年 12 月には、ボボ・ジュラソ管区内の 15 郡のうち、10 郡において、何らかのかたちで CEFA との接触が図られており、警察による調査では、1945 年 11 月 29 日段階で構成員は 6,250 人、同年 12 月 12 日には 6,788 人となっており、約 2 週間のあいだにおよそ 500 名が新規に加入している<sup>9</sup>。入会金 80 フラン、会費が月額 25 フランとなっており、入会金はダカール本部に送金され、残りはボボ・ジュラソの銀行に CEFA 名義で預金され、1945 年 12 月 11 日時点で 89 万フランにも達していた<sup>10</sup>。さらに、翌年 5 月には、13,000 人あまりの構成員がいたとされており、わずか半年で 2 倍に膨れ上がっている<sup>11</sup>。後の報告によれば、やや数値にブレがあるが、1946 年段階で、CEFA の構成員はダカールで約 2,000 名、コートディヴォワールのブアケで約 3,000 名に対して、ボボ・ジュラソ管区では構成員が約 12,000 名

<sup>8</sup> ANOM 14miom/2515 Rapport du commissaire de police de Bobo, le 3 décembre 1945. に基づき、\*は氏名からの推測、\*\*を付した情報は Fourchard 2001: 152, 344、\*\*\*を付した情報は Fourchard 2003: 21 を参照し、筆者作成。

<sup>9</sup> ANOM 14miom/2515 Rapport de l'inspecteur de police au chef du service de la sûreté, le 15 décembre 1945.なお、のちの文書では、1945 年 12 月 29 日段階で 6,250 名の参加者がいたとされている(ANOM 14miom/2515 Lettre du gouverneur de la Côte d'Ivoire au haut commissaire de la république, le 27 août 1946.)。

<sup>10</sup> ANOM 14miom/2515 Rapport de l'inspecteur de police au chef du service de la sûreté, le 15 décembre 1945.

<sup>11</sup> ANOM 14miom/2515 Lettre du chef de la brigade mobile Bobo au chef de la sûreté Abidjan, le 4 juillet 1946.

にものぼっているとされる<sup>12</sup>。

もちろん、このような構成員の概算を鵜呑みにすることはできないが、銀行の預金額の数値は信憑性が高く<sup>13</sup>、少なく見積もっても、あえて入会金と会費を支払う数千人規模の加入者がいたことは確実である。こうしたことからボボ・ジュラソ地方支部の活動についていくつかの点が指摘できるだろう。

まず、こうした構成員の規模から、参加者たちはボボ・ジュラソ市の移住民に限定されず、先住の都市住民や周辺の村落の住民にまで広がっていたことが推測される。前述のように、発起人や主要な幹部はボボ・ジュラソに数年居住しただけの新参者で構成されていたが、彼らの呼び掛けは植民地統治以前の先住者たちにも届いていた。

また、すでに述べたように、CEFA のボボ・ジュラソ地方支部は数か月で本部を凌駕していた。1945 年 8 月末に結成されたボボ・ジュラソ地方支部は、遅くとも、5 ヶ月後の 11 月末にはダカール本部を含む、その他の支部よりも規模が大きいものとなっていた。このことは、本部からの派遣や指示だけではない、ローカルな活動が積極的になされたことを示唆している。

実際にはどのような活動がなされていたのか。行政文書によれば、白人との平等を目的とすることが大いにアピールされ<sup>14</sup>、村々では「フランスはもはや力をもっていない。彼らは何もできない。人頭税を払う必要もなければ、[賦役のために]働くことも、トウジンビエを与える必要もない」といった内容のプロパガンダがなされていた<sup>15</sup>。こうしたプロパガンダが本部や地方支部の幹部の指示によるものなのか、末端の構成員の独断によるものであるのかは不明である。しかし、白人との平等を謳うスローガンが、ローカルなコンテキストに置き換えられ、人頭税や賦役の拒否と解釈されたことはごく自然なことであったと考えられる。人頭税や賦役の拒否といった主張は、6 章でみた 1930 年代のマサラ周辺での「カトリック教徒」たちの抵抗運動と重なり、こうした主張が受け入れやすかったことは想像に難くない。また、ボボ・ジュラソに隣接するバンフォラ管区の一部では、既存の郡長に

---

<sup>12</sup> ANOM 14miom/2515 Rapport au sujet réunion M. Houphouët, Bobo-Dioulasso, le 16 novembre 1946.

<sup>13</sup> 後述するように、植民地行政は CEFA ボボ・ジュラソ地方支部の銀行口座を凍結しており (ANOM 14miom/2515 Lettre du gouverneur de la Côte d'Ivoire au haut commissaire de la république, le 27 août 1946.)、この点に関しては銀行から正確な数値を入手できていた可能性が高い。

<sup>14</sup> ANOM 14miom/2515 Rapport du commissaire de police de Bobo, le 3 décembre 1945.

<sup>15</sup> ANOM 14miom/2515 Rapport politique mensuel, Bobo-Dioulasso, octobre 1945.

反感をもつ集団に CEFA が接触し、郡長更迭の運動を展開していた<sup>16</sup>。6 章でみた郡長位をめぐるローカルな政治にも、CEFA の活動は接続していた。特に、この点は、後述する RDA の地方への展開においてもみられるようになる。このように、CEFA のスローガンのローカルなコンテキストへの置き換え、あるいは接合がなれることで、ごく短期間のうちに CEFA の構成員が急増したのであろう。

また、フランスの弱体化が体制変更の好機とみなす考え方も、第一次世界大戦中に生じたヴォルタ・バニ戦争の際に流布したものと酷似している。CEFA の活動はもともと、ダカールにおいてはブラザヴィル会議以降の文化政治運動として展開することを企図されたものであったが、ローカルなコンテキストでは、フランスの敗戦とヴィシー政権期の終焉がフランスの弱体化の兆候として捉えられたともみることができる。治安維持というやや異なる観点ではあるが、植民地行政官たちもまた、こうした CEFA ボボ・ジュラソ地方支部の活動やプロパガンダから、ヴォルタ・バニ戦争を想起し、反乱がおこる予兆として把握していた<sup>17</sup>。その意味では、フランス軍による征服以降の種々の抵抗と地続きの運動であった。

このように、CEFA の構成員の急増はそれ以前の植民地統治期のローカルな政治闘争と地続きのものであったが、ブラザヴィル会議以降の新たな政治的な意味をもったものでもあった。1945 年 10 月 21 日には、コートディヴォワール植民地では、SAA を代表したウフエ＝ボワニとモシのモロ・ナーバからの推挙を受けたバルム・ナバこと、テンガ・ウエドラオゴ(Tenga Ouedraogo)を中心とした数名が立候補した憲法制定議会の 1 議席をめぐる選挙がおこなわれ、この選挙では勝敗が決しなかったため、同年 11 月 4 日にウフエとウエドラオゴの決選投票がなされた(Kabore 2004: 24-25; Conombo 2003: 104)。CEFA ボボ・ジュラソ地方支部は人頭税と強制労働の廃止を主要なスローガンとして選挙運動を展開していたウフエを支持し(Fourchard 2001: 321-322)、僅差でウフエが勝利している(表 7-3)。

---

<sup>16</sup> ANOM 14miom/2515 Lettre de l'administrateur des colonies au commandant cercle Bobo-Dioulasso, Banfora, le 1er novembre 1945.

<sup>17</sup> ANOM 14miom/2515 Rapport politique mensuel, Bobo-Dioulasso, octobre 1945., Note de renseignements sur la comite d'étude Franco-africaine, Dakar, le 26 janvier 1950.

選挙名(実施日)	当選者・政党	獲得議席／定数	得票率
憲法制定議会(1945.10.21)	ウフエ＝ボワニ	勝敗決せず	49.1%
	ウエドラオゴ		37.6%
	その他		11.7%
憲法制定議会(1945.11.4)	ウフエ＝ボワニ	1/1	50.7%
	ウエドラオゴ		45.4%
	その他		3.9%

表 7-3. 第一回憲法制定議会選挙の結果<sup>18</sup>

CEFA は構成員獲得だけではなく、選挙運動も展開していた。1945 年 11 月選挙後の 12 月の報告であるが、ボボ・ジュラソの村落部では、村内の有権者に CEFA の会長が頻繁に接触を図っており、「郡長の許可なく村落に出入りすること」が問題であるとボボ・ジュラソ郡長のアリ・サヌ(Aly Sanou)が「原住民裁判所」に訴えている<sup>19</sup>。あるいは、ボボ・ジュラソ有数の豪商の一人であったアルハジ・カンカン・ムーサ・ジャキテ(El-Hadj Kankan Moussa Diakite)——彼は 1890 年代末から 1900 年代にボボ・ジュラソに到来したギニア出身の最初の商人であったとされる(Fourchard 2003: 11)——がボボ・ジュラソ管区司令官に宛てた手紙は CEFA の活動や選挙運動の一端を、そうした運動からは距離をおいた立場から明らかにしている<sup>20</sup>。その内容は以下のようなものであった。

「1945 年 9 月のある日、ケモコ・ケイタ(Kemoko Keita)という人物——おそらく、CEFA の会計を務めたチエモコ・ケイタ(Tiemoko Keita)と同一人物(表 7-2)——がボボ・ジュラソのシカソ・シラ街区に住む商人と私の自宅で会うことになった。彼は CEFA の規約をみせ、その組織構成について説明していた。私はこの団体の活動が文化的な目的をもったものだとして理解した。私には 11 人の子どもがおり、青少年の教育について関心がないわけでもなかったことから、参加することにした。数日後、ケイタに会うと、CEFA の事務所に来て行かれ、彼の頼みで会費の 180 フランの支払いをすることになった。

私はすぐに CEFA に失望することになった。私の理解した規約とは異なって、ボボ・ジュラソ管区ではアジテーションがなされるようになった。こうしたことに関わりたくなかったため、私は CEFA からは距離をもつようになった。

<sup>18</sup> Sternberger et al. 1978: 651, 677 をもとに筆者作成。

<sup>19</sup> ANOM 14mim/2515 Lettre du président de la section de Bobo-Dioulasso, CEFA au juge de paix, le 17 décembre 1945.

<sup>20</sup> ANOM 14mim/2515 Lettre de El-Hadj Kankan Moussa Diakite au administrateur commandant le Cercle Bobo-Dioulasso, le 23 janvier 1946.

ある日、ボボ・ジュラソの市場で、スレイマン・シセ(Souleymane Cissé)という——退役軍人会の会長で RDA 支部の幹部となる——人物から、CEFA の会合に参加しなかったことを非難された。憲法制定議会の選挙が迫っていたのだ。私はコロゴ(Korhogo)——現在のコートディヴォワール北部の都市——の候補者のティジャーニー・デメ(Tidiani Deme)の訪問を受け、アルハジ・ラッサナ・ジャキテからは手紙を受け取った。私は返事を書き、別の候補者のバルム・ナバに投票することにしたと伝えた。ラッサナは「バルム・ナバはフランスに植民地の権力を与えることで満足しているのに、なぜ黒人の完全な自由を約束しているウフエに投票しないのか？」と言ってきた。こうした言葉に驚いて、私はフランス以外の権力を知らないとだけ答えて、私の選んだ候補者に投票した。

1945 年 11 月 18 日の二度目の選挙の際、ラッサナ・ジャキテは彼の邸宅にボボ・ジュラソ在住のすべてのギニア植民地出身者であるマンデのムスリム(Maninkas-mori)を集めて会合を開いた。その後、3 人の代表者が私の家に来て、この集会で次のことが決定されたと伝えた。一つ、集会に参加したすべてのマンデのムスリムは祭り・誕生式・命名式・結婚式などから私を除外すること。二つ、集会に参加したすべての者は私と私の家族を道徳的にも物質的にも拒絶すること。三つ、私は彼ら全員にとって全く存在しないものとする。私は、口頭でも、手紙でも、何も答えなかった…。」

つまり、植民地統治との闘争を支持せず、バルム・ナバに投票したカンカン・ムーサ・ジャキテはギニア出身者から村八分にされたということである。なお、この後に、和解があったのかどうかは知られていない。

植民地行政は CEFA を明確に敵対視しており、そうした行政官たちが残した史料にのみ依拠しているため、CEFA の立場からみて、選挙活動がどのように行われていたのかを直接知る手掛かりはない。カンカン・ムーサ・ジャキテの証言には偏りがある可能性は否定できない。しかし、選挙運動のなかで、友・敵関係が露骨に先鋭化されたことは確かなことであろう。このように、それ以前においては必ずしも敵対関係になかった、あるいは友好関係になかった人や集団が、選挙運動という政治を通して、新たな友・敵関係を構成していた。その意味においては、ブラザヴィル会議以降にもたらされた代表民主制と選挙は、支持政党や支持団体の差異によって友・敵関係を構成することによって新たな政治の場を切り開いたのである。

このように、CEFA ボボ・ジュラソ支部は 1945 年 8 月 23 日に結成され、急速に構成員



を増やし、活動を展開していたが、翌年 1946 年 5 月 29 日のボボ・ジュラソ支部の集会において、第一回憲法制定議会選挙で当選していたウフエ＝ボワニが、CEFA の解散を提起し、同年 8 月に解散した<sup>21</sup>。

ウフエ＝ボワニによって主導された、この CEFA ボボ・ジュラソ支部の解散は、断片的な史料しか残されておらず、不明な点が多いが、いくつ同時代の政治状況が挙げられるだろう。

まず、1946 年 6 月 2 日に第二回憲法制定議会選挙を直前に控えていた。前回の第一回憲法制定議会選挙で、ウフエ＝ボワニは、オート・ヴォルタ植民地の再構成をかかげるモシの候補者と接戦となっており、この第二回選挙では、あらかじめ、モロ・ナーバと会談し、オート・ヴォルタ植民地の再構成を確約し、投票日直前に、モシ側の立候補はとりさげられ、事実上、ウフエの信任投票となった(Madiega 1987: 345)。この合意のあり方をめぐって、再構成の賛成派、反対派のそれぞれに、ウフエに反発する者たちがおり、CEFA の解散が提起された 1946 年 5 月 29 日のボボ・ジュラソ支部の集会では、再構成を支持したウフエの演説中に激しいヤジが飛ぶことになった<sup>22</sup>。つまり、CEFA 内にウフエに反発する勢力があった。

また、ウフエはこの時期には共産主義団体との協力関係を鮮明にするようになっていた。前年 1945 年の第一回憲法制定議会選挙の際に、ヴィシー派の放逐のためにコートディヴォワール総督ラトリーユの仲介のもと、ウフエはフランス共産党の影響下のコートディヴォワールの GEC(les Groupes d'études communistes、共産主義研究会)と協力関係に入り、1946 年 4 月に SAA を発展させた PDCI(le Parti démocratique de Côte d'Ivoire、コートディヴォワール民主党)を結党していた(Suret-Canale 1994: 61-62)。CEFA ダカール本部の創設者たちの経歴(表 7-1)でみたように、CEFA ダカール本部はフランス社会党との強い結び付きをもっていた。こうした背景を踏まえて、植民地行政の治安当局者は、ボボ・ジュラソ支部の解散について、ウフエが「[フランス社会党との協調関係にあった]ラミン・ゲイによって創設された CEFA の運動に反対した」と述べている<sup>23</sup>。

こうした社会党と共産党の会派對立は、これ以降のバマコ会議でさらに鮮明になった。

---

<sup>21</sup> ANOM 14mim/2193 Rapport au sujet réunion électorale, Bobo-Dioulasso, le 30 mai 1946., ANOM 14mim/2515 Renseignement, le 7 août 1946.

<sup>22</sup> ANOM 14mim/2193 Rapport au sujet réunion électorale, Bobo-Dioulasso, le 30 mai 1946.

<sup>23</sup> ANOM 14mim/2515 Lettre du chef de la brigade mobile Bobo au chef de la sûreté Abidjan, le 4 juillet 1946.

ウフエらの呼びかけによって、1946 年 10 月 18 日から 21 日にかけて開催されたバマコ会議では、仏領西アフリカ連合の各植民地の枠を越えた政治家が集結し、政治・経済・社会の諸問題の現状についての議論と解決のための指針が示され、RDA(le Rassemblement démocratique africain、アフリカ民主連合)が結成され、ウフエが総裁となった(Suret-Canale 1977: 63-69; Kipre 1989: 142)。フランス社会党と人民共和運動の指導者たちは、バマコ会議を「共産主義者の策略」であるとし、バマコ会議への参加に圧力をかけ、フランス社会党の影響下にあったセネガル選出のラミン・ゲイとサンゴールはバマコ会議に参加しなかった(Suret-Canale 1977: 65)。社会党と共産党の仏領西アフリカへの主導権をめぐる抗争があり、ウフエはその抗争を利用しつつ、自らの影響力を高めようとしていたといえるだろう。

まとめれば、CEFA のボボ・ジュラソ支部の解散は、ウフエによる組織内の主導権争いとそれによる反対派の排除の結果であった。社会党と共産党の対立が、果たして、この主導権争いの背景であったのか、あるいは、単なる口実であったのかは不明ではあるが、ボボ・ジュラソで急速に進展した政治運動はわずか 1 年で一つの転換点を迎えたのである。

結果的にみると、ボボ・ジュラソ支部の幹部のなかで、会長のジョップだけがウフエに明確に反対したため、1946 年 6 月 31 日の会合で会長の解任が可決され、事務局の他の構成員はウフエが率いるコートディヴォワール民主党(のちに、RDA)に合流し、CEFA ボボ・ジュラソ支部は事実上解散となった<sup>24</sup>。そして、フランス共産党と協調し、武装闘争路線をとった RDA ボボ・ジュラソ支部は、オート・ヴォルタ植民地が再構成された 1947 年以降、多数の事件を引き起こすようになっていく。

しかし、RDA ボボ・ジュラソ支部の展開の前に、ワガドゥグの同時代の政治状況がある程度まとめる必要があるだろう。ボボ・ジュラソで CEFA が活動していた同時期に、ワガドゥグではまったく異なる政治運動が展開されていたのである。次項では、モロ・ナーバによるオート・ヴォルタ植民地再構成の運動を概観する。

### 7-1-3. ワガドゥグにおける政党政治の起源

前項でみたように、ボボ・ジュラソでの運動の発端は、ブラザヴィル会議以降のダカー

---

<sup>24</sup> ANOM 14miom/2193 Rapport au sujet réunion électorale, Bobo-Dioulasso, le 30 mai 1946., ANOM 14miom/2515 Lettre du chef de la brigade mobile Bobo au chef de la sûreté Abidjan, le 4 juillet 1946., Renseignement, le 7 août 1946.

ルでの文化政治運動としての CEFA の設立にあった。少なくとも、発端としては、高学歴のいわばエリートが運動の引き金を引いたといっていよう。これに対して、同時期のワガドゥグでは、本稿 5 章 2 節でみた「伝統的首長」のなかでも最も高い地位と給与があたえられたモシの王、モロ・ナーバによって主導された政治運動が展開された。

綿花政策を中心とした植民地経営の行き詰まりから、1933 年にオート・ヴォルタ植民地は解体され、隣接する仏領スーダン、ニジェール、コートディヴォワールに分割併合された。本稿に関連する代表的な地域でいえば、ワガドゥグもボボ・ジュラソとともにコートディヴォワール植民地に併合され、ワイグヤとトゥーガンは仏領スーダン植民地、ファダ・ングルマはニジェール植民地に併合された。この併合の結果、オート・ヴォルタ植民地の政庁のおかれていたワガドゥグは、徴税によるフラン通貨の集積・再分配される拠点としての地位を失い、それ以前から生じていたコートディヴォワール、英領ゴールド・コーストへの移民の流れが加速することになった。後述するように、少なくとも、ワガドゥグのモロ・ナーバはそうのように認識していた。こうしたことから、モロ・ナーバ・コーム 2 世(Koom II、在位期間：1905-1942 年)の働きかけによって、1937 年 1 月にコートディヴォワール植民地内に、オート(上)・コートディヴォワールという行政単位が成立し、ワガドゥグにふたたび、オート・コートディヴォワールの政庁所在地という位置づけが与えられるようになった(Madiaga 1987: 342)。

こうした経緯の後、第二次世界大戦を挟み、1945 年 10 月 21 日の第一回憲法制定議会選挙が布告されると、モロ・ナーバ・コーム 2 世の跡を継いだモロ・ナーバ・サーガ 2 世(Sagha II、在位期間：1942-1957 年)はオート・ヴォルタ利益擁護連合(La défense des intérêts de la Haute-Volta)という政党を結成し、側近のバルム・ナーバ(モレ語で「首相」の意)であるテンガ・ウエドラオゴを出馬させた(Benoit 2010: 220)。

オート・ヴォルタ利益擁護連合という名称やテンガ・ウエドラオゴの出馬の経緯はいまだ概略的なことしかわかっていない(Madiaga 1987: 343; Skinner 1989: 181-182; Benoit 2010: 220)。それによれば、オート・ヴォルタ利益擁護連合は、近代教育を受けた若いモシのカトリック教徒の支援を受けつつ、ウフエ＝ボワニの主張していた強制労働の廃止に加えて、オート・ヴォルタ植民地の再構成を公約として掲げ、オート・コートディヴォワールでの選挙運動をおこなうことになった(Skinner 1989: 181-182)。いまだワガドゥグのカトリック教会大司教の座にあったテヴェヌはオート・ヴォルタ植民地の再構成を後押しし、テンガ・ウエドラオゴもまたカトリックに対して明らかに好意的であったが、彼が候補者

に選出されたことには落胆していた(Bouron 2010a: 70-71)。ウエドラオゴは 70 歳であり、さらに決定的なことに、フランス語の読み書きができなかったのである(Madiaga 1987: 343; Bouron 2010a: 71)。このような悪条件を考慮すると、ウエドラオゴがウフエとの決選投票に持ち込み、1945 年 11 月におこなわれた決選投票において僅差で敗れたことは、むしろ驚くべきことである(Skinner 1989: 182; 表 7-3)。その要因の分析については別稿に譲るが、ワガドゥグの白衣宣教団の日誌によれば、1945 年の選挙においてワガドゥグの投票所では投票の自由が確保されておらず、周囲の人たちがだれに投票したのかをみているなかで投票がなされていたとされており(Beucher 2012: 463)、こうしたことが初期の選挙でのモシの候補者に優位に働いたのであろう<sup>25</sup>。いずれにしても、オート・ヴォルタ利益擁護連合という名称やテンガ・ウエドラオゴの出馬にみられるような、第一回憲法制定議会選挙に対するモロ・ナーバの対応がちぐはぐなものであった<sup>26</sup>。

しかし、決選投票以後、この選挙を通じて打ち出されたオート・ヴォルタ植民地の再構成という政治的な目的の達成のために、モロ・ナーバは精力的に活動を開始することになる。まず、決選投票の約 1 か月後の 1945 年 12 月に、モロ・ナーバは弟のエティエンヌ・コンゴ(Etienne Congo)とともにダカルにある仏領西アフリカ連合の総督府を訪問し、連合総督と会談、オート・ヴォルタ植民地の再構成の要望を伝えた<sup>27</sup>。この訪問との時系列的な前後関係は不明であるが、同年 12 月 2 日、モロ・ナーバの署名で植民地大臣宛の書簡が出されている。

その書簡のなかで、モロ・ナーバは、「私の国はフランスであり、つねにフランスにとどまるであろう」こと、「つねにフランスの人道主義(la France Humanitaire)を信賴していること」を述べたうえで、先代の父がオート・ヴォルタ植民地の再構成を望んでいたこと、ニジェール川灌漑事業、セネガルと仏領スーダンを結ぶティエ・カイ(Thies-Kayes)鉄道にモ

---

<sup>25</sup> このほかにも、アビジャンのモシの代表者となっていたゼバンゴ・ポイ(Zebango Pahi)がモロ・ナーバ支持を明確に打ち出したこと(Skinner 1989: 181)も幾分かの意味をもっていたと思われる。

<sup>26</sup> モシの近現代政治史を扱った近年の博士論文では、このモロ・ナーバの対応は、モロ・ナーバが自ら出馬し惨敗した際の名声の急落のリスクと、新興のエリートたちにすべて任せていた場合における自身の政治的影響力の低下のリスクとのアンビバレントな状況におかれた結果として「想像できる」ことを指摘している(Beucher 2012: 461)。非常に魅力的な解釈ではあるが、自身も認めている通り、この点に関する史料が示されていない。

<sup>27</sup> ANOM 14miom/2193 Rapport sur la reconstitution éventuelle du territoire de la Haute-Volta., Lettre de Moro-Naba Sagha, chef supérieur des provinces Mossi au Haut-commissaire de la république française en A.O.F., le 18 mai 1946.

シの労働者を供出しても恩恵を受けていないこと、第一次世界大戦、第二次世界大戦とともにモシの人びとを戦場に送り出し貢献してきたこと、コートディヴォワール植民地に併合されてからは、南へと労働者が流出し、特に英領ゴールド・コーストへ大規模な移民が生じていることを述べて、オート・ヴォルタ植民地の再構成を訴えている<sup>28</sup>。

こうした要望への返答をまったく得られないなか、モロ・ナーバとモシの政党は CEFA とは異なる方法で勢力基盤を拡張させ、オート・ヴォルタ植民地の再構成の主張を浸透させていった。

1946 年 3 月、オート・ヴォルタ利益擁護連合からヴォルタ連合(l'Union Voltaïque、UV)へと改称し、モロ・ナーバが名誉会長、エティエンヌ・コンゴが党首に就任した<sup>29</sup>。公安による諜報活動では、この時期には、ワガドゥグのカトリック宣教団大司教のテヴェヌは熱心に UV の活動を支援していたとされ<sup>30</sup>、テヴェヌが共産主義的な傾向をもつウフエ＝ボワニを強く警戒し、モロ・ナーバを支持していることが伝えられている<sup>31</sup>。ワガドゥグの宣教団の日誌には選挙活動についての記事が多くあり、内部情報についても一定程度得ていたものと思われる<sup>32</sup>。こうした密告そのものが 6 章で論じた宗教-政治そのものであるため、この内容を無批判に事実として受けとめることはできないが、UV の構成員の多くがカトリック教徒であったことは確かなことであろう。このことを数量的に示す史料は限定的であるが、1954 年のワガドゥグとボボ・ジュラソでの市評議会選挙の候補者名簿をみると、UV の候補者の 36 名中 29 名、約 8 割がカトリック教徒であった<sup>33</sup>。他党との比較の詳細は後に述べるが、これは際立った UV の特徴である。

またワガドゥグの宣教団を対象に批判的なカトリック宣教史を展開しているブロンが指摘するように、UV による政治の言説がキリスト教的な世界観で構成されていた、あるいは

---

<sup>28</sup> ANOM 14miom/2193 Lettre de Moro-Naba, chef supérieur de la province Mossie au ministre des colonies, le 2 décembre 1945.

<sup>29</sup> ANOM 14miom/2317 Lettre du gouverneur général de l'Afrique occidentale française au ministre de la France d'outre-mer direction du plan, le 11 juillet 1946.

<sup>30</sup> ANOM 14miom/2193 Lettre du chef sûreté Niger au directeur sûreté général, Niamey, le 9 juillet 1946.

<sup>31</sup> ANOM 14miom/2193 Renseignements, s.d. 前後の史料から 1946 年 9 月前後のものと想定される。

<sup>32</sup> たとえば、1945 年 10 月から 11 月の日誌の記事には、バルム・ナーバの遊説先がモシの管区を越えてなされていたことや、モロ・ナーバが自宅に有権者を招いていたことなどが記載されている(Beucher 2012: 466)。

<sup>33</sup> ANOM affpol/2230 Lettre du gouverneur de la Haute-Volta au Haut-commissaire de la république, gouverneur général de l'A.O.F., le 10 août 1954.

少なくとも、一部にはその傾向がみられていた(Bouron 2010a: 72)。UV のボボ・ジュラソ支部の支部長によって 1946 年 5 月に書かれたパンフレットには、こう書かれている。

「付属の文書の「オート・ヴォルタのための弁護」や「ヴォルタ連合の計画」を読めば、みなさんは多くの票とともにわれわれの側に確実につくことでしょう。

ヴォルタの大家族が幸福となるために、フランス連合のもとに偉大で繁栄したナシオン(NATION)となるために、団結せよ！(SOYONZ UNIS！)

…われわれはみなさん全員を必要としています。連合すること、それは生であり、力です。分割、それは確実な死です。

われわれが本当にみな兄弟(FRÈRES)であることをみなさんはよくご存じです。つまり、か弱き者であろうが強き者であろうが、富める者であろうが貧者であろうが、大きい者であろうが小さきものであろうが、白人であろうが黒人であろうが、われわれはすべて同じ父(PÈRE)と神(DIEU)をもっているからです。…神がわれわれとともにあるならば、われわれの連合に祝福が与えられ、全世界はわれわれにまったく反対することはない！  
…」(0内の大文字は原文ママ)<sup>34</sup>

この文書を書いた UV ボボ・ジュラソ支部の会長であるラルバ(A. Larbat)が果たしてカトリック教徒であったかどうかは不明である<sup>35</sup>。しかし、「同じ父と神」をあえて強調するこの文書がキリスト教の基本的な世界観に則ってキリスト教徒を主たる対象として書かれていることは明白である<sup>36</sup>。その意味では、この文書は、幹部に一定数のムスリムを有する CEFA ボボ・ジュラソ支部に対して、プロテスタントも含めたキリスト教徒にプロパガン

<sup>34</sup> ANOM 14miom/2193 Sans titre par Albert Larbat, Bobo-Dioulasso, le 16 mai 1946.

<sup>35</sup> ラルバはもともと CEFA ボボ・ジュラソ支部の副代表であったが、就任後、数カ月で辞職している。彼は 1900 年に旧オート・ヴォルタ植民地のファダ・ングルマに生まれた「混血」(métis)で、1926 年から 1927 年までファダで臨時契約教員を務め、1939 年にボボ・ジュラソに移住してきた人物で、1946 年当時、フランスの大手商社(CFAO)に勤務していた。ANOM 14miom/2515 Rapport du commissaire de police de Bobo, le 3 décembre 1945., ANOM 14miom/2193 Lettre du délégué dans les fonctions de gouverneur du Niger au haut commissaire de la république française, Niamey, le 17 juin 1946.

<sup>36</sup> なお、ここでは、「ナシオン」の含意については、検討の外におく。「ナショナルリズム」や「トライバリズム」といった不用意な——多分に政治的であり、文脈によってその実質的な意味を変容させる——用語には、西アフリカ政治史と西アフリカ政治学における学説史上の慎重な検討が必要とされる。ここで論じようとしていることは、「ナショナルリズム」と一括される政治運動を、「ナショナルリズム」という語を用いずに、記述・分析することである。

ダの照準をあわせたであろうことや、フランス共産党との連携を強めるウフエ＝ボワニへの対抗から——白人との平等のために不平等を告発するのではなく、不平等に言及せずに「父と神」の前の白人との平等を主張するという保守的な論調にみられるような——保守的な立場を明確に打ち出そうとする戦略の結果としても理解できるだろう<sup>37</sup>。

一方で、モロ・ナーバは請願活動を継続させていた。1946年5月18日に、仏領西アフリカ連合総督宛に書簡を再び送付している。その書簡では、数か月経過しているが、前回の書簡についての返事がいまだないことや前回の書簡で触れた内容を反復しつつ、「モシ(les Mossi)」にとっては、現状は、ファダ・ングルマやドリがニジェール植民地に、ワイグヤやトゥーガンが仏領スーダン植民地に分断されている状況にあること、これまでなされてこなかったモシの土地への鉄道敷設の延長を望んでいることが述べられている<sup>38</sup>。しかし、最も着目すべき点は、この書簡にあらわれる以下の一節である。

「…モシの諸管区を[コートディヴォワール、仏領スーダン、ニジェールという]3つの植民地に分割することが1896年[正確には1897年]にモシ皇帝とヴレ(Voulet)とシャノン(Chanoine)によって結ばれた保護条約の精神に反することを承知しているがゆえに、ただ一つの植民地にヴォルタのかつての管区を再編成することをわれわれはさらに強く主張しているのである。この条約の複写はつねに手元に置かれており、われわれの領土の再編成に反対することについて私は理解に苦しんでいる。…」

この主張の内容が西アフリカの植民地統治の正当性についての法的な矛盾を暴露する、極めて重大な主張であったことは指摘しておく必要があるだろう<sup>39</sup>。そのうえで、モロ・ナ

<sup>37</sup> もっとも、解釈としては、そのような戦略をとらざるを得なかったという受動的な選択の結果も成り立ちうるだろう。ただし、このような解釈を裏打ちする史料はいまのところ見つかっていない。

<sup>38</sup> ANOM 14miom/2193 Lettre de Moro-Naba Sagha, chef supérieur des provinces Mossi au Haut-commissaire de la république française en A.O.F., le 18 mai 1946.

<sup>39</sup> 歴史的な経緯としては、フランス政府はモシ王国と保護条約を結び、保護国にしたのちに、何ら法的な手続きを経ずに保護国を植民地領内に併合していた。フランス政府はモシ「国王」を承認したうえで条約を結んだにもかかわらず、その保護国内に「国王」とは無関係の管区司令官をおくことは、フランス政府の承認した秩序をフランス政府が無視するということになり、いわばクーデターとなってしまう(Saul and Mayor 2001: 75-76)。どの段階で保護条約を失効したとみなせるのかは定かではないが、仏領西アフリカ連合という植民地統治の正当性は保護条約を失効したものとみなさなければ成立しないものであった。その意味で、いまだ保護条約が有効であるとする主張は——おそらく、その意図はなかつ

一バの主張を確認すると、1897年に結ばれた保護条約の第6条にある、モロ・ナーバを国王とする「モシ保護国」の範囲を、「モシ語の用いられているあらゆる領土」としている箇所(Kambou-Ferrand 1993: appendix 10)を念頭において、モシの民族の居住するワガドゥグ、ファダ、ワイグヤなどが3つの植民地に分割されていることを批判している。この主張は先に述べた再構成の必要性を訴える一つの要素であり、一方的に締結された保護条約の内容を逆手にとって交渉を展開しようとしたことは強調しておかなければならない。

再構成は、上述の労働力流出や財政上の懸念、また後に触れるRDAと植民地行政との関係の変化といった諸条件が総合的に勘案されて決定されたため、保護条約を持ち出して再構成を正当化する議論は、実質的にはそれほど大きな位置を占めていなかった。しかし、後にフランス海外領土省内で作成された再構成についての報告書<sup>40</sup>では、保護条約の趣旨を踏まえて、フランス政府による「モシ王国の一体性(l'unité du royaume Mossi)」の尊重が求められるとしており、一定程度、有効性をもった議論であったとはいえるだろう。そして、より重要な点であるが、少なくとも形式的には、モロ・ナーバは、この主張に則って、分割されたモシの居住地それぞれの「伝統的首長」との連名による要望という形を整えるための政治活動を展開していったのである。

モロ・ナーバは、1946年6月2日の第二回憲法制定議会選挙直前の5月29日に、旧オート・ヴォルタ植民地で、当時は隣接するニジェール植民地に組み込まれていたファダ・ングルマを訪問し、代表的な「伝統的首長」と会談し、オート・ヴォルタ植民地の再構成の賛意をとりつけている<sup>41</sup>。選挙は各植民地の枠内で実施されているため、ニジェール植民地の「伝統的首長」との外交交渉は選挙にはまったく資するものではなかった。選挙戦の最終盤におけるモロ・ナーバの行動は、選挙という狭義の政治(la politique)よりも、オート・ヴォルタ植民地の再構成のための「伝統的首長」への広義の政治(le politique)を優先させたものとして捉えられるだろう。結局のところ、第二回憲法制定議会選挙に立候補していたモロ・ナーバの弟でUVの党首のエティエンヌ・コンゴは、投票の1時間前に立候補をとりさげることになった。

この立候補取り下げは、選挙戦で対抗馬となっていたウフエに勝利することが困難であ

---

たと思われるが——本来的には植民地統治の正当性を揺るがす問題を提起していたのである。

<sup>40</sup> ANOM 14miom/2193 Rapport sur la reconstitution éventuelle du territoire de la Haute-Volta.

<sup>41</sup> ANOM 14miom/2193 Rapport sur la reconstitution éventuelle du territoire de la Haute-Volta.



ると判断し、敗北して名声が失墜することを懸念したこと(Beucher 2012: 470)、あるいはすでにオート・ヴォルタ植民地の再構成を約束したウフエとの政治的取引の結果(Madiega 1987: 344)として解釈されている。つまり、モロ・ナーバは再構成のための担保を確保したうえで、はっきりと決着のつく選挙を避けると同時に、立候補をとりさげることで投票率を下げて存在感を示すという安全策を取ったのであろう。

この戦術は一定程度、功を奏した。オート・コートディヴォワールでの投票率は約 3 割にまで下回り、ワガドゥグ管区の大半では投票者が一切いないという異例の事態となった(表 7-4)。注目すべき点は、ボボ・ジュラソやガワといった CEFA の熱心な活動があった地域においても、棄権者が約 4 割もいたことである。ウフエによる CEFA の突如とした解散によって、支持基盤が揺らいだことの証左である。後述するが、このことが、1946 年 11 月の第一回国民議会選挙において、ウフエのモロ・ナーバに対する一定の譲歩を引き出したとも捉えられるだろう。

管区	地区	有権者数	投票者数	棄権率
Bobo-Dioulasso	Bobo-Dioulasso	1,008	604	40.1%
	Banfora	592	495	16.4%
	Oredars	287	250	12.9%
	Hounde	226	178	21.2%
Gaoua	Batie	517	271	47.6%
Koudougou	Koudougou	1,358	819	39.7%
	Dedougou	1,069	853	20.2%
	Yako	911	13	98.6%
Kaya	Kaya	1,151	102	91.1%
	Boulza	376	2	99.5%
Ouagadougou	Ouagadougou	1,042	199	80.9%
	Lai	683	0	100%
	Leo	631	485	23.1%
	Kombissiri	1,888	0	100%
	Limberin	1,963	0	100%
	Sapone	856	0	100%
合計		14,558	4271	70.7%

表 7-4. 第二回憲法制定議会選挙のオート・コートディヴォワールにおける棄権率<sup>42</sup>

第二回憲法制定議会選挙が終わると、モロ・ナーバはワイグヤ管区の訪問を計画し、1946 年 7 月、ワイグヤ管区のヤテンガ・ナーバ、グルマンシェの「上級首長」(le chef supérieur)

<sup>42</sup> ANOM 14miom/2193 Lettre du gouverneur général de l'Afrique occidentale française au ministre de la France d'outre-mer direction du plan, le 11 juillet 1946.をもとに筆者作成。なお、カヤ管区のブルザ(Boulza)では、354 票が白票として投票されたが、これは棄権に分類した。

と会談し、オート・ヴォルタ再構成についての賛同を得ている<sup>43</sup>。そして、7月21日、ワガドゥグ、ワイグヤ、ファダ、テンコドゴ、ブッスマ(Boussouma)の首長の連名でフランス海外領土大臣宛のオート・ヴォルタ植民地の再構成を要望する書簡<sup>44</sup>が送られた。この書簡で書かれている内容はすでに述べられたものを基本的に反復したものであったが、同年9月、仏領西アフリカ連合総督がオート・ヴォルタ植民地の再構成の検討を指令し、同年11月14日、フランス海外領土大臣からモロ・ナーバ宛の書簡が発せられ、重要性に理解を示し、再構成の検討を目的とした監査官を派遣することを伝えている<sup>45</sup>。

やや時期が前後するが、1946年11月10日にフランス国民議会選挙が予定されていた。ウフエ・ボワニは選挙前に、モロ・ナーバと会談した。ウフエはオート・コートディヴォワールへの財政上の優遇とオート・ヴォルタ植民地の再構成の支持を示し、モロ・ナーバは独自の候補を立てず、ウフエの推したモシのフィリップ・カボレ・ジンダ(Philippe Kaboré-Zinda)をモシの代表として承認した(Madiaga 1987: 344)。カボレはクドゥグ管区のモシの村長の息子であると同時にウィリアム・ポンティ師範学校の卒業生であり、RDAの結成された1946年9月のバマコ会議に出席していたが、当時いまだ27歳の若者であった<sup>46</sup>(Beucher 2012: 475)。最終的に、「ウフエ名簿」と呼ばれる、選挙時の暫定的な統一会派を構成し、ウフエ・ボワニ、ウエザン・クリバリ、カボレ・ジンダの3名が「ウフエ名簿」に登録され、投票者数127,670名のうち、125,285票を獲得し、3名が選出された(Madiaga 1987: 344)。

この当選を受けて、1947年2月20日、カボレはオート・ヴォルタ再構成の要請のためにパリに派遣された(ibid.: 345)。このカボレの交渉がどこまで成果を挙げたのかは定かではないが、1947年5月にはオート・ヴォルタ植民地の再構成にとっては追い風となる政治状況が生じていた。これはおよそ3点にまとめられる。第一に、フランス社会党の党首がモシの居住地が3つに分断されているという主張を受け入れ、モロ・ナーバらの請願を支持し

---

<sup>43</sup> ANOM 14mion/2193 Rapport sur la reconstitution éventuelle du territoire de la Haute-Volta.

<sup>44</sup> ANOM 14mion/2193 Lettre au ministre de la France d'outre-mer, Ouagadougou, le 21 juillet 1946.

<sup>45</sup> ANOM 14mion/2193 Rapport sur la reconstitution éventuelle du territoire de la Haute-Volta.

<sup>46</sup> 付言すれば、6章2節で言及した、『モロ・ナーバの帝国』の著者で植民地行政内の宗教-政治の闘争に敗れ、1940年に死去したディム・デロブソムは、このカボレの義理の父親である。子供のなかったデロブソムはカボレを養子として引き取っていたという(Ouattara 2013: 99)。しかし、カボレもまた夭逝することになる。彼は1947年5月25日、アビジャンで病死した(Beucher 2012: 475)。

たこと、第二に、フランス共産党が内閣から排除され、フランス共産党と協調関係にあった RDA に対して、植民地行政が敵対的な関係になったこと、第三に、同年 5 月 25 日にカボレがアビジャンで亡くなり、補欠選挙をめぐって RDA と UV の対立関係が浮上したことである(ibid.: 346-347)。こうした政治状況のなかで植民地行政は UV を支持し、オート・ヴォルタ植民地の再構成を容認する方向へと舵が切られ、1947 年 9 月 4 日、オート・ヴォルタ植民地は再構成された(ibid.: 347)。

#### 7-1-4. CEFA とモロ・ナーバの政治活動の対照性

1945 年から 1947 年までの期間に、ボボ・ジュラソとワガドゥグで、それ以前にはみられなかった政治運動が生じてきたことは明らかである。両者の運動は、ブラザヴィル会議以降の新秩序が形成されていくなかで展開していった。一方で、ボボ・ジュラソとワガドゥグでは、政治運動の中身がまったく異なっていた。ボボ・ジュラソでは、ダカールの高学歴者のもたらした CEFA という組織を介して、白人との平等を謳うスローガンが人頭税・賦役の拒否といった抵抗運動に翻訳され、地元の農民へと一定程度、運動が波及していったが、ワガドゥグでは、モロ・ナーバを主たるアクターとして、オート・ヴォルタ植民地の再構成を目的として、有力な「伝統的首長」を連合させた請願活動が主として展開された。

ボボ・ジュラソとワガドゥグの双方において政治結社が結成されたが、その経緯と中身もまた、対照的なものであった。ボボ・ジュラソでは、最初期にはダカールのフランス社会党系のいわばエリートが支部の設立に寄与し、ボボ・ジュラソに居住する商人や商社勤めを中心に幹部が構成されていった。他方で、ワガドゥグでは、カトリック宣教団の支援を受けつつ、モロ・ナーバの主導のもとに政党が構成された。

ボボ・ジュラソとワガドゥグの対照的な政治運動は、奇しくもモロ・ナーバが征服期に締結された保護条約を持ち出したことにみられるように、フランス軍による征服からブラザヴィル会議までの植民地統治の歴史を反映させたものとなっている。すなわち、ワガドゥグでの政治運動がモロ・ナーバを中心に展開したことは、征服期に戦略上、最重要視された「モシの王」としてモロ・ナーバを認識し(本稿 4 章 2 節)、その内容で保護条約を結び、植民地行政内の「伝統的首長」の給与体系のなかで最高位を与えてきたこと(本稿 5 章 2 節)の結果であった。モロ・ナーバがオート・ヴォルタ植民地の再構成の政治的な主体となりえたのは、植民地統治期に維持されてきた特権に拠るものであった。

再構成のためにモロ・ナーバが引き合いに出したモシの分断という論理もまた、植民地統治期に成立した政治状況や歴史認識を前提としたものであった。多くの論者が指摘するように、植民地統治以前のモシ王国は不安定であり、それほど階層的に整備されていたわけではなく、植民地統治のなかで人頭税徴集の手数料と給与を権力の源泉として、植民地行政の階層的な行政単位に対応した階層的な秩序を整備させていった(たとえば、川田 2001 ; Hilgars 2009 : 88-96)。したがって、そもそも「モシ王国の一体性」なるものはなく、その起源はあえていえば、征服期に当時のモロ・ナーバが締結した保護条約にもとめられるだろう。その意味では、モロ・ナーバによる保護条約の新解釈は、「モシの国王」というフィクショナルに仮構された主体に新たな政治的含意をもたせたのである。

他方で、ボボ・ジュラソでは、このような運動が生じえなかった。征服期に締結された保護条約は、そもそも国家が不在のなかで結ばれたため(本稿 4 章 1 節)、モロ・ナーバほど高い地位も与えられず、実質的な影響力をほとんどもたなかったため、ボボ・ジュラソにおいて保護条約を結んだ主体は、1900 年代から 1910 年代のあいだに紆余曲折はあったものの、郡長位を解任されていた(Saul and Royer 2001: 83-84, 116-117)。1940 年代頃のボボ・ジュラソの郡長は植民地統治以前からボボ・ジュラソに居住していた一部の住民に対しては一定の影響力を保持していたが、CEFA 支部の幹部となった外来の商人たちとはほとんど関係をもっていなかった(本稿 8 章)。

こうした歴史的な経緯によって、1945 年から 1947 年までのボボ・ジュラソとワガドゥグにおける政治運動の対照性が説明されるだろう。つまり、征服時における国家と国家をもたない社会との差異は、1940 年代までの植民地統治を経て、このような対照的な政治運動をもたらした。ここでもまた、国家をもたない社会の「アナーキー」と国家との差異が反復されるのである。

オート・ヴォルタ植民地の再構成について総括したダカールの仏領西アフリカ連合の政治局による内部文書<sup>47</sup>は、モシ王国が 11 世紀ごろに北部のトンブクトゥへと侵略を行っていたという、この当時よく知られていた学説をまとめたのちに、以下のように述べている。

「それ[モシのかつての王国]がどのようなものであれ、アフリカのアナーキーな政治において、モシは、ヤテンガとモロ・ナーバの王朝を中心に、少なくとも 1000 年前から強固に組織化され階層性を持ち、諸民族の中核となってきたのである。」ここで、「モシ王国」とい

---

<sup>47</sup> ANOM 14miom/2193 Note sur la reconstitution éventuelle de la colonie de la Haute-Volta, Dakar, le 30 janvier 1947.

う伝統の創造を指摘したいのではない。むしろ、重要な点は、「モシ王国」とその他の「アナーキーな政治」という対比が、統治の観点からは実体的な意味をもち、一部の農村で納税・賦役の拒否を展開したボボ・ジュラソの政治運動と、モロ・ナーバによって主導されたワガドゥグの政治運動の差異を明瞭に指し示していることである。度重なる選挙戦のなかで、ミクロな政治状況——個人の政治信条や地方支部の主導権闘争、あるいはストライキなどの経済活動上の競合——やマクロな政治状況——RDA、共産党、カトリック宣教団、植民地行政の対立関係——に左右されて、従来にはなかった友・敵関係が新たに構成されていった一方で、国家をもたない社会の「アナーキー」と国家との差異が反復してあらわれていることが指摘できるだろう。

さて、オート・ヴォルタ植民地が再構成されると、ボボ・ジュラソを中心とした RDA とワガドゥグを中心とした UV の対立関係がより明示的になり、両者のちょうど中間に位置したムフン川湾曲部では、暴力事件が多発することになる。次節では、1948 年から 1956 年までのオート・ヴォルタ全体の政治史を概観したのちに、ムフン川湾曲部における 1947 年以降の RDA と関連する暴力事件群を検討する。

## **7-2. 第三勢力の出現とムフン川湾曲部における政党政治**

### **7-2-1. オート・ヴォルタ植民地再構成後の政党の流れ**

ムフン川湾曲部における政党政治の展開を見る前に、1948 年以降のオート・ヴォルタ植民地における政党の変遷を概観する。前節でみたように、1947 年以前はボボ・ジュラソを中心とした RDA とワガドゥグを中心とした UV に大きく分けられ、基本的には、この RDA と UV の対立軸を中心に政局は展開していった(図 7-1)。

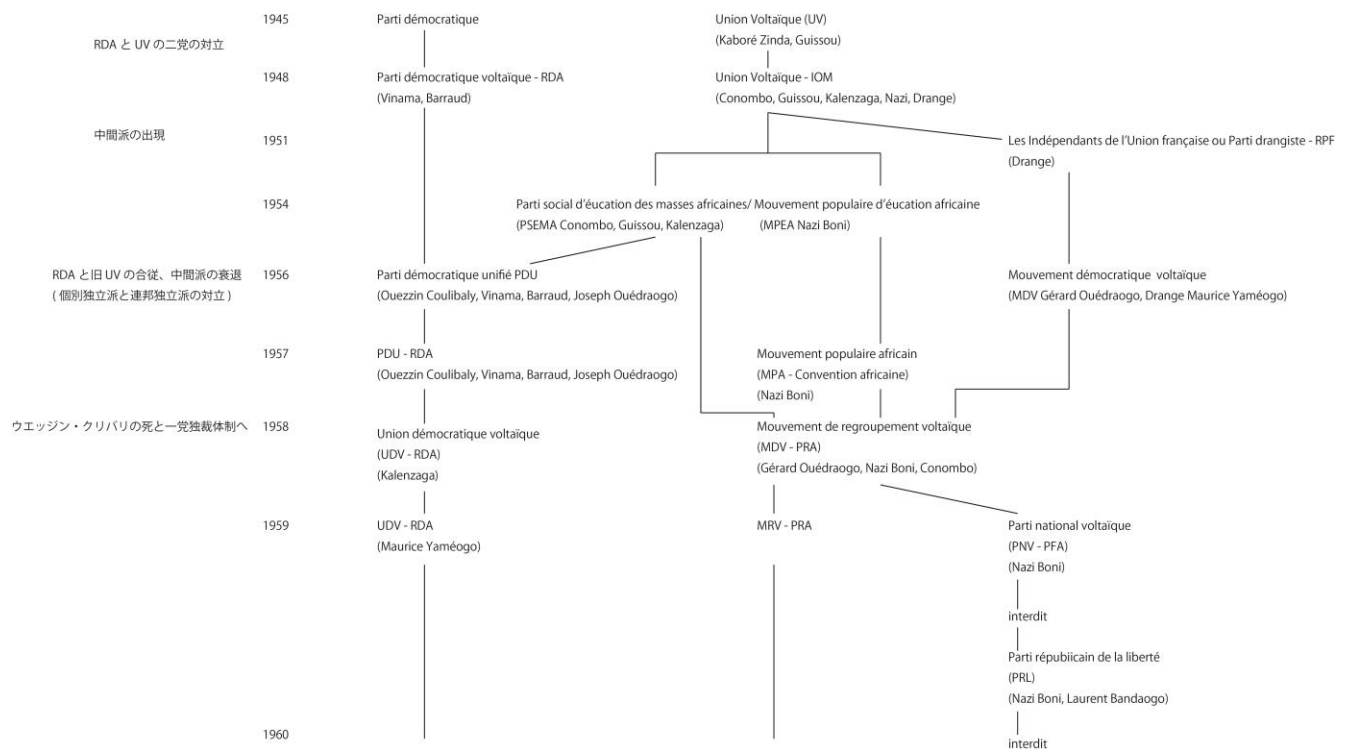


図 7-1. 1945 年から 1960 年までのオート・ヴォルタ植民地の政党の変遷<sup>48</sup>

まず、UV と歩調を合わせていたグループのなかから分裂が生じた。1947 年 4 月にフランスでドゴールによって結党された保守政党のフランス国民運動(*le Rassemblement du peuple français : RPF*)の支部が、同年 5 月にボボ・ジュラソに結成され、400 名ほどのフランス人と 300 名ほどのアフリカ人によって構成された<sup>49</sup>。この政党を母体としつつ、UV の一部の支持者をあつめて、サンシール陸軍士官学校出身のフランス人の元軍人のドラランジェ(M. Drange)がワイグヤを中心に活動を行なうようになる<sup>50</sup>。ドラランジェは第二次世界大戦に従軍した折に、旧オート・ヴォルタ植民地出身の兵士と出会い、心打たれた経験から、第二次世界大戦後にワイグヤの植民地行政官に転任し、1948 年 6 月のオート・ヴォルタ植民地評議会選挙にワイグヤの選挙区で UV から立候補し、当選している(Madiega 1995: 433)。ドラランジェが特に問題としていたことは退役軍人の年金の確保であり、その利害をめぐって「伝統的首長」や地方の植民地行政とも対立することがあった<sup>51</sup>。こうした経緯か

<sup>48</sup> Madiega 1992: 388 に一部加筆。

<sup>49</sup> ANOM 14miom/2200 Rapport sur la Haute-Volta, 1948.

<sup>50</sup> ANOM 1affpol/2263 Les partis politiques en A.O.F. et les consultations électorales de 1945 à 1955.

<sup>51</sup> ANOM 1affpol/2263 Les partis politiques en A.O.F. et les consultations électorales de

ら、1952 年頃からドゴール主義者というよりもドランジェ主義者といった性格を帯びるようになり<sup>52</sup>、ジェラルド・カンゴ・ウエドラオゴ(Gerard Kango Ouedraogo)といったワイグヤの政治家を巻き込み、1956 年に MDV(le Mouvement démocratique voltaïque、ヴォルタ民主運動)という政党を立ち上げることになる(Madiega 1995: 433-434)。

つぎに、UV のなかから分裂したのが、ナジ・ボニ(Nazi Boni)の率いる政党である。後に述べるが、ボニはデドゥグ管区出身でウィリアム・ポンティ師範学校を卒業した教員で、1946 年 12 月のコートディヴォワール植民地評議会選挙、1948 年 6 月のフランス国民議会選挙に UV から出馬し、それぞれ当選を果たしている<sup>53</sup>。ボニはデドゥグ管区を中心に政治活動をおこなっていたが、1950 年 12 月に UV 内部に非モシの住民を組織化するアソシアシオンの AV(l'Amicale Voltaïque、ヴォルタ親睦会)を設立した。デドゥグ管区内やボボ・ジュラソにおいて RDA に反発する勢力を組み込んでいく一方で、1952 年以降、UV との対立も表面化し、1954 年 10 月に AV を発展解消させた政党 MPEA(le Mouvement populaire d'évolution africaine、アフリカ進歩人民運動)を設立し、ボニが党首となった<sup>54</sup>。

さらに、UV のモシ内部においても、左派と右派の分裂が二度生じ、左派は RDA と合流するようになる。1947 年末、オート・ヴォルタ植民地の再構成の後に、UV の副事務局長であったギヨーム・ウエドラオゴ(Guillaume Ouedraogo)が RDA に合流し、植民地行政、モロ・ナーバ、カトリック宣教団の支持を受けたアンリ・グイス(Henri Gouissou)やジョセフ・コノンボ(Joseph Conombo)などが UV の執行部を構成するようになる<sup>55</sup>。

しかし、1951 年から UV 内部の対立が再燃する。モシの「伝統的首長」を支持し、この「伝統」の枠内での進歩的な発展を唱えるコノンボらに対して、大衆の生活改善のためには「伝統的首長」との対立も辞さない立場を示したジョセフ・ウエドラオゴ(Joseph Ouedraogo)ら「若いモシ」が党内で勢力を拡大する。こうした事態を受けて、1954 年 12 月、党内での議論を踏まえて、党名を PSEMA(le Parti social d'éducation des masses

---

1945 à 1955.

<sup>52</sup> ANOM 1affpol/2263 Les partis politiques en A.O.F. et les consultations électorales de 1945 à 1955.

<sup>53</sup> Magnini 1995: 586-587, 590-591; ANOM 1affpol/2263 Les partis politiques en A.O.F. et les consultations électorales de 1945 à 1955.

<sup>54</sup> ANOM 1affpol/2263 Les partis politiques en A.O.F. et les consultations électorales de 1945 à 1955.

<sup>55</sup> ANOM 1affpol/2263 Les partis politiques en A.O.F. et les consultations électorales de 1945 à 1955.

africaines、アフリカ大衆教育社会党)と改変し、再編成を図った<sup>56</sup>。しかし、1956 年、RDA と PSEMA が合流し、RDA と UV という対立軸そのものが崩れることになる。

ボボ・ジュラソを中心とした RDA も離脱者を多く出しながら、展開することになった。まず、RDA の前身の CEFA の最初期の副会長ラルバ(A. Larbat)は反植民地主義的な傾向を忌避し、ボボ・ジュラソの有数の家畜商であったセネガル出身のサーダ・シセ(Sada Cissé)と結びつき、UV のボボ・ジュラソ支部の設立に関与することになった<sup>57</sup>。また、1946 年の CEFA の解散と RDA 支部設立の経緯のなかで、CEFA を離反した人びとのなかに UV への参加者も少なくなかった<sup>58</sup>。さらに、反植民地主義闘争を激化させていった 1948 年になると、UV のボボ・ジュラソ支部での活動を盛んに行うようになっていたボニの働きかけによって、ボボ・ジュラソ管区内のいくつかの郡長をつとめていたワタラの一部が RDA から脱退し<sup>59</sup>、RPF の支持者を含んでいたボボ・ジュラソの退役軍人会は RDA の構成員だった会長を退任させ、RDA との関係絶つようになった<sup>60</sup>。そして、1950 年末から 1951 年初めの武装闘争路線を放棄した際にも、古参の構成員の離脱がみられた。その代表的な人物は、セネガル出身の教師で、ボボ・ジュラソとその周辺の歴史についての口頭伝承の論考を発表していたシレバ(I. Cire-Ba)である。1950 年末に、シレバは RDA を離脱し、独自の政治グループを設立し<sup>61</sup>、1954 年、ボニによる MPEA 設立とともにこれに合流している<sup>62</sup>。

このように RDA も分裂を繰り返してきたが、UV と比較すると、RDA から分裂したグループは政局を構成するような新たな政党を生み出してこなかった。全体としてみれば、RDA はウフエ＝ボワニ、そしてウフエと緊密に連携していたウエザン・クリバリ (Ouezzin

---

<sup>56</sup> ANOM 1affpol/2263 Les partis politiques en A.O.F. et les consultations électorales de 1945 à 1955.

<sup>57</sup> ANOM 14miom/2193 Lettre du chef de la brigade mobile au chef de la sûreté, Bobo-Dioulasso, le 31 mai 1946., Lettre du haut commissaire de la république gouverneur général de l'Afrique occidentale française au ministre de la France d'Outre-mer, le 11 juillet 1946.

<sup>58</sup> ANOM 14miom/2193 Lettre du haut commissaire de la république gouverneur général de l'Afrique occidentale française au ministre de la France d'Outre-mer, le 11 juillet 1946.

<sup>59</sup> ANOM 14miom/2538 Renseignements sur la comite directrice du R.D.A., Bobo-Dioulasso, le 9 octobre 1948.

<sup>60</sup> ANOM 14miom/2538 Renseignements, Bobo-Dioulasso, le 20 juillet 1948.

<sup>61</sup> ANOM 14miom/2549 Lettre du gouverneur de la Haute-Volta au inspecteur général des services de sécurité de l'A.O.F., le 27 novembre 1950.

<sup>62</sup> ANOM 14miom/2549 Renseignements, Bobo-Dioulasso, le 4 août 1954.



Coulibaly)——1946年11月のフランス国民議会選挙の際に、ウフエ、カボレとともに国会議員に選出され、以後、オート・ヴォルタのRDAの実質的な指導者となった——の強力な指導力のもとに展開していった。付け加えれば、ボボ・ジュラソでのRDAの活動を一貫して支援し続けたパトロンのアルハジ・ラッサナ・ジャキテ、一時的に事務局から離れた時期もあったが、ウエザンの方針を支持し続け、支部の事務局長として敏腕をふるったジブリール・ヴィナマ(Djibril Vinama)などの中核的な構成員の結束も、UVにはみられないものであった。

戯画的に言えば、モロ・ナーバに代表されるモシの「伝統的首長」と、カトリック宣教師の教育を受けてきたモシの若いエリートの基盤をもち、ワガドゥグを中心に展開したUVと、ウフエ・ボワニとウエザン・クリバリの強力な指導力のもとにボボ・ジュラソで発展したRDAを中心にオート・ヴォルタ植民地の政党政治は進展し、UVの分派がRDAからの離脱者を取りこみながら、中間派のドランジエのMDV、ナジ・ボニのMPEAがそれぞれワイグヤとデドゥグを中心に活動をおこなっていった。こうしたことから、ワガドゥグとボボ・ジュラソの中間に位置したムフン川湾曲部のデドゥグ周辺はRDAとUV、あるいはRDAとMPEAの闘争の中心地となり、暴力事件が多発することになる。

実際のところ、オート・ヴォルタ植民地内のRDAの活動のなかでも、デドゥグ管区は最も苛烈に闘争が生じた地域であった。RDAの闘争史をまとめた当事者の一人による著作では、RDAがフランス共産党と結んで武装闘争を展開した時期の仏領西アフリカ各地の暴力事件を紹介しているが、オート・ヴォルタでは、デドゥグ管区内のボンドゥクイ、ボロモ、デドゥグ、ヌーナの事件に言及している(Lisette 1983: 136-138)。

他方で、こうした政党の活動の広がりとは並行して生じたムフン川湾曲部の事件群は、植民地期のオート・ヴォルタの政治史の概観ではほとんど言及されてこなかった。結論を先取りしていえば、最も苛烈に繰り広げられたデドゥグ管区での武装闘争は——それを抜きにしてオート・ヴォルタの政治史を語るができるように——オート・ヴォルタ植民地全体の政治にはほとんど影響を与えることがなかったのである。

さらに、これらの事件群の史料を丹念に読めば、これが必ずしもフランス共産党と連携して武装闘争路線を採用していた時期にとどまらないことがわかる。それでは、これらの事件群とは何であったのか。このことを次項で論じていく。

## 7-2-2. ムフン川湾曲部における政党政治

ムフン川湾曲部での政治活動では、コートディヴォワール民主党(オート・ヴォルタ植民地では後の RDA)が先行していた。1946 年 6 月 2 日の第二回憲法制定議会選挙にむけて、コートディヴォワール民主党のプロパガンダが、地元の植民地官吏、退役軍人、ムスリムを通じて、デドゥグ、ボンドゥクイ、ボロモ、ワッハーブなどで行われていた<sup>63</sup>。ただし、この活動は十分には組織化されていなかったようである。デドゥグとボロモの準管区の報告書では、「[コートディヴォワール]民主党はこの地域では反対にあっていないが、その運動は組織化されておらず、無頭的(acéphale)である」と表現している<sup>64</sup>。

すでにみたように、第二回憲法制定議会選挙は、UV が投票直前に立候補をとりさげたため、ウフエ=ボワニへの信任投票となり、UV の支持者がこぞって棄権した選挙であった。デドゥグ準管区での投票結果をみると(表 7-4)、有権者の約 8 割がウフエに投票しており、選挙前の宣伝活動は功を奏していたといっていよう。

こうした状況のなかで、第二回憲法制定議会選挙の終えた 1946 年 7 月以降、事件が頻発することになる。時期を同じくして、異なる場所で異なる事件が併発していたため、ここではボロモとワッハーブ、ボンドゥクイにおける事件に焦点化して記述をおこなう。ボロモとワッハーブでは(RDA の構成員とされる)住民と植民地行政官の対立が生じ、ボンドゥクイにおいては RDA 支持者と UV/MPEA 支持者のあいだの郡長位をめぐる対立があった。まず、ボロモとワッハーブで生じた事件をみていこう。

ボロモで初めて住民の抗議行動が生じたのは、1946 年 7 月のことである<sup>65</sup>。何に対する抗議であったのかは不明であるが、同年 12 月に、第二回憲法制定議会選挙で選出されたジンダ・カボレがデドゥグとボロモの司令官の不正告発を行っている<sup>66</sup>。この司令官は商人である自らの弟と住民とのあいだに不当な価格での取引を強要させていた。こうした不正に対する不満もあったであろう。

この 1946 年 7 月の抗議行動が RDA によって主導されたものであることを示す直接的な証拠はないが、公安による諜報活動では、1946 年 6 月の第二回憲法制定議会選挙の選挙期

<sup>63</sup> CNABF 3V30 Rapport politique pour les subdivisions de Dedougou et Boromo, 1946.

<sup>64</sup> CNABF 3V30 Rapport politique pour les subdivisions de Dedougou et Boromo, 1946.

<sup>65</sup> ANOM 14mim/2538 Lettre du chef du 1er secteur de la brigade mobile de sûreté au chef de la sûreté de la Haute-Volta, Bobo-Dioulasso, le 4 mai 1948.

<sup>66</sup> CNABF 3V30 Lettre du député Kabore Zinda au gouverneur de la Côte d'Ivoire, le 20 décembre 1946., Lettre du gouverneur de la Côte d'Ivoire au administrateur de Ouagadougou, le 30 décembre 1946.

間中に、デドゥグ管区にフランソワ・ヴィナマ——ボロモ準管区のビチャカ村出身の当時ボボ・ジュラソのアルハジ・ラッサナ・ジャキテの邸宅に住みこみ、ボボ・ジュラソで下級官吏として働いていた、CEFA 時代からの活動家(Anonyme 2012)——の働きかけによってコートディヴォワール民主党(のちの RDA)の支部が設立され、支部長となった人物がボロモに勤務する下級植民地官吏であると報告されている<sup>67</sup>。同じ文書には、彼らが郡長に対する支払をしなくて済むようになることなどが宣伝され、特にボロモとワッハーブでの活動が盛んであることが伝えられている。反植民地主義を掲げる RDA の選挙活動と司令官の不正行為が、この抗議行動を生じさせたと想定される。

この司令官の不正についての捜査がなされているなかで、1947 年 1 月、ワッハーブの住民が——その意図は記されていないが——森に火を放ち、衛兵がこの住民を逮捕しようとした際に、他の住民たちが反発し、衛兵が負傷した。しかし、不正の捜査を受けていた司令官が、この時期に転任となり、衛兵を負傷させた住民の逮捕がなされなかった<sup>68</sup>。のちの報告によれば、この放火を行なったとされる人物は、ワッハーブから北東に 40km ほどのヤホの RDA の支部長であったマラブーのママドゥ・コナテ(Mamadou Konate)であった<sup>69</sup>。

1948 年 4 月 20 日、オート・ヴォルタ植民地総督の一行がボロモに立ち寄った際に、住民は総督らの滞在した司令官ガラ(H. Garat)の邸宅の前で抗議行動をおこし<sup>70</sup>、同月 24 日、この抗議を扇動したとされるワッハーブの住民 3 名が召喚されるも、50 名ほどの住民が抗議のために司令官の邸宅を取り囲み、さらに 3 名が逮捕された<sup>71</sup>。同月 27 日 21 時ごろ、太鼓を叩きならして、住民の一群が司令官の中庭に侵入し、騒ぎをおこし、同月 30 日、ボロモの刑務所から 17 名の服役者が脱獄し——この脱獄を指揮したのはヤホの RDA 元支部長のママドゥ・コナテであるとされている——、司令官の邸宅に押し入り、事務所を荒らして散っていった。ワガドゥグから衛兵 20 名が派遣され、さらに軍の小隊が 17 時半ごろにボロモに到着した時点で騒ぎは収まった。同年 5 月 3 日深夜、2 名のワッハーブの住民に

---

<sup>67</sup> ANOM 14miom/2193 Renseignements, Abidjan, le 6 août 1946.; ANOM 14miom/2538 Lettre du gouverneur de la Haute-Volta au haut-commissaire en A.O.F., le 18 août 1948.

<sup>68</sup> ANOM 14miom/2538 Lettre du chef du 1er secteur de la brigade mobile de sûreté au chef de la sûreté de la Haute-Volta, Bobo-Dioulasso, le 4 mai 1948.

<sup>69</sup> ANOM 14miom/2538 Lettre du gouverneur de la Haute-Volta au haut-commissaire en A.O.F., le 18 août 1948.

<sup>70</sup> ANOM 14miom/2538 Lettre du chef du 1er secteur de la brigade mobile de sûreté au chef de la sûreté de la Haute-Volta, Bobo-Dioulasso, le 4 mai 1948.

<sup>71</sup> ANOM 14miom/2538 Rapport sur des événements ayant une sérieuse importance par comandant la section de gendarmerie, Ouagadougou, le 3 mai 1948. 以下、この段落は子の史料に基づく。

よって率いられた 200 名余りの武装した集団がボロモに向かっているとの密告があった。ワッハーブには弓矢をもった 200 名ほどの住民がおり——住民によれば、集団獵にいかうとしているところであったという——、ワッハーブから離れた地点で移動中の 2 名の住民がみつきり、逮捕された。

植民地行政は、1948 年 5 月 4 日時点でようやく一連の抗議行動が RDA によって引き起こされたものであるという認識を明確にもつようになった。たとえば、1946 年のデドゥグとボロモの年次報告書では、RDA の活動が一定程度なされていることに触れているものの、このことが治安上の大きな問題となりうるものとしては把握されていない<sup>72</sup>。また、1948 年 4 月の事件についての同年 5 月 3 日時点の報告書においても、RDA についての記述はなく<sup>73</sup>、翌日の 5 月 4 日——200 名あまりの武装集団を率いているとされたワッハーブの住民 2 名が明朝、逮捕された日——の報告書で初めて、過去にさかのぼって、1946 年 7 月の住民の抗議が RDA の扇動によるものと記述されている<sup>74</sup>。

実際のところ、1948 年 5 月 4 日に逮捕された 2 名は RDA の構成員であった<sup>75</sup>。彼らはボロモに居住する準管区司令官ガラへの襲撃を企図し、RDA のボボ・ジュラソ支部の実質的リーダーですでに国会議員となっていたウエザン・クリバリに使者を送り、この襲撃への支持をとりつけようとしていた。この 2 名とは、「ボロモのマラブーに影響力をもち」、「村長や準管区長よりも権威をもっている」とされたアリドゥ・サノゴ(Alidou Sanogo)と、「つねにフランスの権威に反抗し、不信仰者に対するジハードを主張している」ンパサノゴ・カランタオ(M'Passanogo/Passanoko Karantao)である<sup>76</sup>。

ンパサノゴ・カランタオは当時のワッハーブの郡長のヤーヤ・カランタオのオジであり(Lisette 1982: 136)、ンパサノゴとヤーヤの父のンパ・カランタオ(M'Pa Karantao)は、マ

---

<sup>72</sup> CNABF 3V30 Rapport politique pour les subdivisions de Dedougou et Boromo, 1946.

<sup>73</sup> ANOM 14mion/2538 Rapport sur des événements ayant une sérieuse importance par comandant la section de gendarmerie, Ouagadougou, le 3 mai 1948.

<sup>74</sup> ANOM 14mion/2538 Lettre du chef du 1er secteur de la brigade mobile de sûreté au chef de la sûreté de la Haute-Volta, Bobo-Dioulasso, le 4 mai 1948.

<sup>75</sup> ANOM 14mion/2538 Lettre du chef du 1<sup>er</sup> secteur de la brigade mobile de sûreté au chef de la sûreté de la Haute-Volta, Bobo-Dioulasso, le 4 mai 1948., Lettre du gouverneur de la Haute-Volta au haut-commissaire de la république en A.O.F., le 25 septembre 1948., Lettre du gouverneur de la Haute-Volta au haut-commissaire en A.O.F., le 18 août 1948.

<sup>76</sup> ANOM 14mion/2538 Lettre du chef du 1er secteur de la brigade mobile de sûreté au chef de la sûreté de la Haute-Volta, Bobo-Dioulasso, le 4 mai 1948.

フムード・カラントオの後を継いだムクタール・カラントオの息子である<sup>77</sup>。1915年に郡長位を継承した直後、ンパ・カラントオは、ヴォルタ・バニ戦争の直前に生じたいわゆる「マラブー事件」("affaire marabaout")に連座されている。「マラブー事件」とは、1914年末にクドゥグ管区で逮捕されたマラブーが反乱を呼びかけたとの嫌疑がなされ——この嫌疑は政敵によって捏造されたものであったが——マフディー(救世主)の到来と反乱を呼びかけるアラビア語の手紙がデドゥグ管区内に流通したとして——実際には、サファネのマラブーの葬儀の際に、マフディーや反乱に関連のないアラビア語の文書が読まれたただけであったが——ワッハーブ、ボロモ、サファネなどのデドゥグ管区のマラブーが逮捕・拷問された事件である(Saul and Royer 2001: 91-93)。ンパ・カラントオは懲役20年を求刑されたが、1916年12月に釈放され、1935年に亡くなり、息子のヤーヤ・カラントオがその地位を継承していた<sup>78</sup>。

植民地行政からの拷問を受けたンパ・カラントオの弟であったンパサノゴ・カラントオが「つねにフランスの権威に反抗」していたこと、ボロモにオート・ヴォルタ総督が立ち寄るという情報を聞きつけて、ワッハーブから多くの住民が抗議に集まったことの背景に、こうした歴史的な経緯を想起することはそこまでの外れとはいえないだろう。他方で、行政文書を読む限りでは、郡長のヤーヤ・カラントオはこうした抗議活動には消極的であり、ヤーヤ・カラントオとンパサノゴ・カラントオとのあいだに確執があった可能性もあるだろう。

ともあれ、1948年5月8日からボロモの準管区司令官のガラはRDAへの積極的な弾圧を開始する。同年6月17日、ワッハーブで郡長のヤーヤへの脅迫と暴動の扇動の容疑で2名のRDAの構成員が逮捕、7月12日、やはりワッハーブのRDAの構成員1名によるヤーヤへの暴行と準管区司令官ガラへの襲撃の共謀の容疑で逮捕され、それぞれに対してRDAボボ・ジュラソ支部は不当逮捕と批判した<sup>79</sup>。

1949年1月19日、アビジャンで開催されたRDA党大会に参加した後に、ンパサノゴ・カラントオと、ワッハーブのイマームであったアルハジ・ブレイマ・ダオ(al-Hadj Bouraima Dao)はワッハーブに帰還し、20日、ワッハーブの大モスクの前で集会を開き、襲撃の準備

---

<sup>77</sup> CNABF 27V11 Carnet signalétique de chef de canton, Yaya Karantao.

<sup>78</sup> CNABF 27V11 Carnet signalétique de chef de canton, Yaya Karantao.

<sup>79</sup> ANOM 14miom/2538 Lettre du gouverneur de la Haute-Volta au haut-commissaire en A.O.F., le 18 août 1948., Renseignement diverse concernant R.D.A., Bobo-Dioulasso, le 12 juillet 1948.

をし、参加者一人一人に指令を出したとされる<sup>80</sup>。21 日、ワッハーブにいたフランス人と親フランスとみなされた住民への襲撃がなされ、ボロモにいたフランス人医師がワッハーブに急行し、襲撃された 5 名の重症者をボロモに搬送した。その後、準管区司令官のガラがこの医師と衛兵 10 名とともにワッハーブに向かい、他の負傷者を探索したが、武装した集団に襲撃され、医師も負傷し、郡長のヤーヤ・カラントオの邸宅に逃げ込んだ後に、ボロモへと引き下がることになった<sup>81</sup>。同日、もしくは後日、準管区司令官ガラは衛兵とともにふたたび、ワッハーブに向かうと、事態は沈静化しており、3 名が逮捕され、武器の摘発がなされた<sup>82</sup>。

こののち、RDA の関係者の逮捕・基礎が相次ぐ。ボロモの RDA 支部設立に関与し、1948 年 6 月のオート・ヴォルタ植民地評議会選挙で当選し、評議員となっていた、ボロモ準管区出身のフランソワ・ヴィナマも裁判にかけられ、1949 年 2 月 2 日、懲役 4 か月、罰金 2,000 フランが課され、さらに、同年 3 月 7 日、RDA の構成員 3 名が反乱の企図を事由として懲役 6 ヶ月、1 名が懲役 1 年に処された<sup>83</sup>。これを区切りとして、ワッハーブとボロモについては、事態は沈静化した。ワッハーブとボロモでの事件は 1949 年 1 月の襲撃事件を最後にそれ以降、継続されることはなかった<sup>84</sup>。

なお、襲撃を受けたボロモの準管区司令官のガラは 1952 年 2 月に死因は不明であるが、この地で亡くなっている。行政官による通信では、ガラの葬儀は厳粛な雰囲気の中、コという民族の——マフムード・カラントオのジハードによって追われ(本稿 3 章)、1936 年にボロモへの再定住が許された(Jacob 2007: 134)、先住の民族の——土地の主によってなされ、ボロモの住民たちも参与したという<sup>85</sup>。当然のことながら、住民と植民地行政官との関係は一枚岩ではなかった。

ワッハーブとボロモで生じた、RDA の構成員による事件は、住民と植民地行政官との対

---

<sup>80</sup> Diocèse Nouna-Dedougou Archives Extraits du diaire de Ouakara. 1949 年 1 月 24 日の記事、CNABF 22V208 Lettre du chef de subdivision, H. Garat au procureur de la république, Boromo, le 28 juin 1949.

<sup>81</sup> CNABF 22V208 Lettre du chef de subdivision, H. Garat au procureur de la république, Boromo, le 28 juin 1949.

<sup>82</sup> Diocèse Nouna-Dedougou Archives Extraits du diaire de Ouakara. 1949 年 1 月 24 日の記事。

<sup>83</sup> ANOM 14mion/2518 Lettre du Haut-commissaire au gouverneur secrétaire général, le 23 septembre 1949.

<sup>84</sup> ACHD s.c. Rapport par l'inspecteur des affaires administratives, Ouagadougou, le 30 septembre 1954.

<sup>85</sup> ACHD s.c. Correspondance. Boromo le 29 février 1952.

立によってなされたものであったが、19 世紀以降、この土地で積み重ねられたローカルな歴史的コンテクストを垣間見せている。

つぎに、同時期のデドゥグ管区において生じていた、(2) RDA 支持者と UV/MPEA 支持者のあいだの郡長位をめぐる対立をとりあげる。すでに述べたように、この対立は、サファネ、デドゥグ、ボンドゥクイで生じていたが、ここではボンドゥクイの対立を中心にみていこう。

ボンドゥクイは、ブワという民族の村で、ダンパン(Dampan)、ボニクイ(Bonikuy)、タンクイ(Tankuy)、ムクナ(Moukouna)という隣接した、祖先の創設者を共有した——どの村が最も古いかという点については競合がある——村々をあわせた町である(Lemoine 1997: 172; Coulibaly 2012: 17, 136)。1888 年にこの地を訪れたバンジェールがこれらの村々の総称として「ボンドゥコイ」(Bondoukoi)と記述し(Binger 1892 t. I: 407)、のちにボンドゥクイ(Bondoukuy)として定着し、行政単位としては 1 つの村となったものと想定される。

1888 年にボンドゥクイを訪れたバンジェールは、「宿主」(d'hôte)——おそらく、ボボ・ジュラソ、あるいはダール・サラミのムスリム商人から紹介されたジャティギ<sup>86</sup>——であるドゥフィネ(Doufine)という人物に歓待を受けている(Binger 1892 t. I: 407)。バンジェールは「ボンドゥコイの連合の首長」(le chef de la confédération de Bondoukoi)と会見しているが、彼はドゥフィネが実際上の首長であると記述している(ibid.: 407)。

また、この時期にはフルベもボンドゥクイに定着していた。口頭伝承によれば、バラニから来たフルベがボンドゥクイに住み着いたとされる(Coulibaly 2012: 35)。バンジェールによるボンドゥクイの地図にも「フルベのコロニー」(Colonie Peule)という地区が書き込まれていることから(Binger 1892 t. I: 408)、19 世紀後半には、バラニ出身のフルベが住み着いていたものと思われる。

ボンドゥクイのブワバによる伝承では、フルベはブワバを対象とした奴隷の売買に関与していた(Coulibaly 2012: 207)。フランス軍によるムブン川湾曲部への初期の征服がなされていた 1896 年ごろは、フランス軍と同盟を結んでいたバラニのウイディから略奪を受けていた<sup>87</sup>。ボンドゥクイのフルベもまた、こうしたバラニのウイディの行動と歩調を合わせていたのであろう。別の伝承では、ボンドゥクイに居住していたフルベの長が最初のボンド

<sup>86</sup> 他の町から来た親族や、知人、友人、あるいは未知の外来者に対して、保護と信用と安全を提供する慣習的な制度(坂井 2003: 132-133)。

<sup>87</sup> ANOM FM SOUD/I/7 Rapport sur la situation politique du Soudan Français au 1er janvier 1896.

ウクイの郡長に任命されたと伝えている(ibid.: 36)。スールー盆地においては、ウイディの推薦によって、ウイディと提携していた商人が郡長になっていたことを踏まえると(本稿 5 章)、このことも十分に想定できるだろう。

また、さきの伝承は、フルベが就いた郡長位は、ドフィニ(Dofini)に譲られたとしている(Coulibaly 2012: 36)。著者の参照しえたボンドゥクイの郡長の最も古い個人調書には、1905 年から 1935 年までボンドゥクイの郡長を務めたシビリ・クリバリ(Sibiri Coulibaly)の父親の項目には「ドフィニ・クリバリ」(Dofini Coulibaly)との記述がある<sup>88</sup>。先行研究によれば、「バンジェールを歓待したリネージの長老」は、20 世紀初頭に郡長の地位を手に入れ、「ブワの姓を捨て、マンデ・ジュラの姓を名乗るようになった」とあり(Lemoine 1997: 172)、このころに「ドフィニ」はクリバリを名乗るようになったとされる。

さらに、典拠が明示されていないが、ソールとマイヤーによるヴォルタ・バニ戦争研究によれば、「シビリの父はすでに悪名高い人物であり、フランス軍がこの地域に最初に到来した 1897 年に、シビリの父が進んでフランス軍と同盟を結び、フランス軍から郡長に任命された、この地域で最も嫌われた人物の一人である」(Saul and Royer 2001: 149)。つまり、ボンドゥクイという単位とその首長位は、フランス軍との同盟関係に裏打ちされて、植民地統治以後に形成されたものであった。

こうしたこともあって、ヴォルタ・バニ戦争では、ボンドゥクイは反植民地側から真っ先に攻撃を受けた村の一つとなった。サモのトマとともに 1913 年に設立された、ボンドゥクイのタンクイのカトリック宣教団の駐在所は徹底的に破壊された<sup>89</sup>。ドフィニの息子であるシビリは、ダンパンの住民による電線の切断に明確に反対し、ダンパンとタンクイの軍からの攻撃をうけてフランス軍の救出まで籠城を続け、フランス軍はダンパンとタンクイを破壊し、ボンドゥクイはフランス軍のデドゥグ管区各地への遠征の拠点となった(Saul and Royer 2001: 149-158)。つまり、1915 年から 1916 年までのヴォルタ・バニ戦争では、ボンドゥクイという行政単位の内部で、親植民地派と反植民地派の戦闘があったのである。

ヴォルタ・バニ戦争以降のボンドゥクイについて言及している史資料はほとんどない。時代は 1940 年代にまで一気に下ることになる。ヴォルタ・バニ戦争を戦ったシビリ・クリバリは 1935 年に死去し、彼の兄弟であったイエズマナ・クリバリ(Yezouma Coulibaly)が

---

<sup>88</sup> CNABF 27V10 Fiche signalétique de chef indigène, nom du chef Yezouma Coulibaly.

<sup>89</sup> Diocèse Nouna-Dedougou Archives 著者不明 年代不明(1966 年以降) Destruction de la mission de Bondokuy.および Saul and Royer 2001: 148-149.



その地位を継承した<sup>90</sup>。1942 年、イエズマナの死去により、いまだ 24 歳であったシビリの息子であるナンク・クリバリ(Nankou Coulibaly)の地位の継承がボンドゥクイの有力者の全会一致で承認された<sup>91</sup>。

しかし、このナンクは素行に問題のある人物であった。ボンドゥクイから東へ 10km ほどのワカラ(Ouakara)には、1935 年からカトリック宣教団の駐在所が設置されていた<sup>92</sup>。1947 年 4 月 28 日夕方、ボンドゥクイ近隣のシ(Si)村からやってきた 2 人が、宣教団を訪ねてきた<sup>93</sup>。彼らの語るところによれば、ボンドゥクイ郡長のナンクが、彼らの村にやってくるなり、何も言わずすぐに、村のある有力者に銃を撃ち放ち、その頭を吹き飛ばしたのだという。この話を聞いた神父は、この問題に介入することはできないことを告げたうえで、その遺体には手を付けず、デドゥグの準管区司令官とボンドゥクイの看護師に確認してもらうように助言した。

この事件に関する行政文書をみつめることはできなかったが、ナンクは訴追されたようである。1948 年 4 月には、ボンドゥクイで、郡長の交代をもとめる議論が生じ、各街区の街区長がその地位を求めたため、議論が紛糾したと宣教団の日誌に書かれている<sup>94</sup>。しかし、同年 5 月「27 日、…ボンドゥクイ郡の前郡長ナク(Nakou)がダカールの控訴院(la cour d'appel)の…判決を受け取り、6 カ月の懲役となった。あまりにもあまりにも軽い!!!」<sup>95</sup>。ナンクの帰還が迫る 10 月 11 日、ボンドゥクイの RDA の構成員が抗議集会の開催を告げ<sup>96</sup>、翌 12 日、ナンクの支持者と彼らに敵対する RDA の構成員とのあいだで乱闘が生じた<sup>97</sup>。

こうした状況のなか、翌週の 10 月 25 日 21 時、RDA の国会議員であったウエザン・クリバリ——ウエザンはデドゥグから 20km ほどのブワのプイ村出身であった(Zan 1995: 15)——がボンドゥクイに入り、大規模な政治集会をおこなう。この集会について、ボンドゥ

<sup>90</sup> CNABF 27V10 Fiche signalétique de chef indigène, nom du chef Yezouma Coulibaly.

<sup>91</sup> CNABF 27V40 Carnet signalétique de chef de canton, Nankou Coulibaly, le 25 septembre 1942., Lettre du commandant le cercle de Koudougou au administrateur superieur de la Haute Côte d'ivoire, le 3 octobre 1942.

<sup>92</sup> Diocèse Nouna-Dedougou Archives 著者不明 年代不明(1966 年以降) Extraits du diaire de Ouakara, 1935 年 4 月 19 日の記事。

<sup>93</sup> DNDA s.c. Extraits du diaire de Ouakara, 1947 年 4 月 28 日の記事。

<sup>94</sup> DNDA s.c. Extraits du diaire de Ouakara, 1948 年 4 月 17 日の記事。

<sup>95</sup> DNDA s.c. Extraits du diaire de Ouakara, 1948 年 5 月 27 日の記事。

<sup>96</sup> ANOM 14mim/2538 Lettre du commandant du subdivision de Dedougou, Henri Grat au gouverneur de Haute-Volta, Dedougou, le 24 décembre 1948.; CNABF 22V208 Lettre du commandant le cercle de Koudougou au gouverneur de la Haute-Volta, le 22 novembre 1948.

<sup>97</sup> DNDA s.c. Extraits du diaire de Ouakara, 1948 年 10 月 12 日の記事。

クイのある農民は次のように証言している<sup>98</sup>。

「ウエザンがボンドゥクイに到着したのは、10月25日の夜のことでした。私は自宅にいて、[集会を知らせる]笛の音をきき、モスクのそばで、集会のすべてを見渡せるところに身をおいて、何が行なわれるのかを見ていました。ウエザンはこう言っていました。泥棒の司令官は人びとを牢屋に送りこもうとしたが、このウエザンがすぐに彼らを解放した。彼らは明日の朝にはここに来るだろうから、たくさんのドロ[ミレット・ビール]を用意しないとイケない。一日中、[祝いの]空砲を打つ準備も必要だろう…。われわれは[新しい]郡長を就任させることに全力を注いでいる。私[ウエザン]は、イマームのイシャーカ(Issiaka)とチェンヴェ・サンガレ(Tienve Sangare)とともに車であらゆる村々をまわって、ナンクに肩をもつあらゆる村長を解任するだろう。私こそが郡長を任命し、辞めさせるのである。[オート・ヴォルタ南西部の管区の]バンフォラではフランス人に従属している7人の郡長を追い払ってきた。フランスのあらゆる力は終わりを迎えたのである。フランス人は力のないハイエナである。ウフエが奴らの牙を砕いたのだ。

フランス人の言うがままになっているあらゆる黒人は裏切り者とみなさなければならぬ。存分に彼らと戦い、彼らの家を、土地を、彼らのもつあらゆるものを奪い、村から追い出さなければならない。

フランス人によって与えられたどんな指令にも、もはや従う必要はない。その指令など、強奪以外のなにものでもない。こうした指令に従おうとするあらゆる者は、彼らが野良犬として扱われていることをあえて口に出すこともない。もしナンクがあえてボンドゥクイにもどろうとするのであれば、デドゥグの準管区司令官、この犬、この豚、この泥棒こそが第一の標的である。

司令官が探している人物こそ、あの豚のナジ・ボニだ。奴がボボ・ジュラソにきて、お仲間のフランス人と会うのなら、鶏のように首を掻き斬られたところだろう。奴は同胞を裏切ったのだ。奴がここに来たら、車を燃やし、追い払い、殺す必要がある。奴がこの指令の責任をとることになるのだ。

質問。はい、彼は、「いかなるヨーロッパ人、ヨーロッパ人に任命されたいかなる首長にも従う必要はなく、何らの危険もなく、彼らを存分に打ちのめすことができる」と確

---

<sup>98</sup> CNABF 22V208 Procès-verbal d'audition de témoin, Mahe Coulibaly, le 20 novembre 1948.

かに言い、何度も繰り返しました。このことを彼が述べたとき、ボボの車の燃える音が聞こえ、彼は黙って、聴衆が話す時間をとりました。

質問。彼が去った後、集まっていた群衆は、一晩中、バラフォン[太鼓]とともに騒ぎ、総督を罵っていました。ろくでなし、豚、野良犬。デドッグの司令官とあらゆるフランス人はろくでなし、豚、野良犬。郡長は、殺人者、犬、豚。ヨーロッパ人に従うあらゆる者は下衆の裏切者。ボンドゥクイにいる RDA でない者はすべて、叩きのめし、追い出せ。」

この集会についてはこのほかに 18 名の証言があり、情報量の多寡に差はあるものの、同様の内容のものとなっている。罵倒の文言に言及している証言では、同様の表現が語られている。もっとも、これらの尋問調書は通訳を介して、デドッグ管区司令官のガラが作成したものであり、証言の信憑性がどの程度のものであるのかは判断がつかない。とはいえ、ウエザンがかなり強い口調で聴衆を煽ったことは後の展開からみても確実であったと考えられる。

ここでは、3つの点を指摘していこう。第一に、フランスの権力の失墜と不服従の呼びかけがなされている。これは前節でみた CEFA の農村部での演説と同様のものであり、この内容はこの時期の RDA の基本的な主張であったものと考えられる。

第二に、この集会はモスクの前で開かれており、イマームが RDA の支持者であった。1948 年 4 月のボロモで生じた RDA の事件の際の捜査においても、RDA のプロパガンダをおこなったとされた 4 名のマラブーが列挙されているが、ヤホ、ワッハーブ、ボロモのマラブーとともにボンドゥクイのイマームが言及されている<sup>99</sup>。

第三に、植民地行政の権威と協調する者たちへの強い非難がなされている。後述するように、この点がボンドゥクイにおける事件群の最大の問題となった。なお、ここで言及されているナジ・ボニはボンドゥクイから 10 数キロのブワン(Bwan)村の出身の政治家で (Magnini 1995: 587)、この当時、UV から立候補してオート・ヴォルタ植民地評議員となっていた。

ちなみに、デドッグ近辺の農村出身でフランス国会議員となったウエザン・クリバリは 1909 年生まれ(Zan 1995: 15)、RDA のボボ・ジュラソ支部の事務局長を長年務めたフランス・ヴィナマ——のちにイスラームに改宗し、ジブリール・ヴィナマとなった——はボ

---

<sup>99</sup> ANOM 14miom/2538 Lettre du gouverneur de la Haute-Volta au haut-commissaire en A.O.F., le 18 août 1948.

ロモ周辺の農村で 1910 年に生まれ(Anonyme 2012)、のちに自らの政党を立ち上げるようになったナジ・ボニもまた 1910 年生まれであり<sup>100</sup>(Magnini 1995: 587)、みなデドゥグの小学校を出て、ウエザン・クリバリとナジ・ボニはダカールのウィリアム・ポンティ師範学校を卒業している。それぞれの伝記では、彼らの交流についてはほとんど言及されていないが、旧知の関係ではあったのだろう。

RDA による植民地行政の権威と協調する者たちへの強い非難は、傷害事件を引き起こしていった。10 月 25 日のボンドゥクイでの演説の報告を受けたデドゥグ準管区司令官のガラは、治安維持の観点から 10 月 27 日のデドゥグでの RDA の集会に許可を出さなかった<sup>101</sup>。このため、10 月 29 日に RDA の集会は個人宅で私的に開かれることになったが、この集会に UV の支持者が乱入し、負傷者を出す事件が生じている<sup>102</sup>。こうした RDA と UV の支持者のあいだでの傷害事件は同年 12 月にも生じることとなった<sup>103</sup>。翌年の 12 月には、親植民地派であったデドゥグ郡長が 11 名の若者たちにウエザンの乗った車の襲撃を計画し、待ち伏せをしていたが、車が現われず、未遂に終わったという事件も生じていた<sup>104</sup>。

ボンドゥクイにおいても、このような RDA と UV の支持者の諍いが生じていた。1950 年には、RDA 支持者が多く住む街区で暮らしていた退役軍人で UV 支持の妻が近所の井戸の利用を断られ、口論となり、この口論の最中になくなった布をめぐって事件に発展し<sup>105</sup>、ナジ・ボニが開いたボンドゥクイの政治集会に参加した人物が RDA の支持者に暴行されるという事件が生じている<sup>106</sup>。

「ボンドゥクイの土地の主」がナンクを支持していたこと<sup>107</sup>、あるいはナンクの後継者

---

<sup>100</sup> ただし、フランス国民議会のデータベースでは、1912 年生まれとなっている([http://www2.assemblee-nationale.fr/sycomore/fiche/%28num\\_dept%29/9086\\_2016/12/15](http://www2.assemblee-nationale.fr/sycomore/fiche/%28num_dept%29/9086_2016/12/15) 最終確認)。

<sup>101</sup> ANOM 14miom/2538 Lettre du commandant de la subdivision de Dedougou, Henri Grat au gouverneur de Haute-Volta, Dedougou, le 24 décembre 1948.

<sup>102</sup> ANOM 14miom/2538 Lettre du chef de la sûreté au gouverneur de la Haute-Volta, le 4 novembre 1948. , Lettre du chef du premier secteur de la brigade mobile de sûreté du territoire au juge de paix, Bobo-Dioulasso, le 1er décembre 1948.

<sup>103</sup> ANOM 14miom/2538 Lettre du commandant de la subdivision de Dedougou, Henri Grat à l'administrateur commandant le cercle de Koudougou, Dedougou, le 23 décembre 1948.

<sup>104</sup> CNABF 22V208 Renseignement, le 15 octobre 1949.

<sup>105</sup> CNABF 22V208 Lettre de l'inspecteur des affaires administrative au gouverneur de la Haute-Volta, Bobo-Dioulasso, le 4 février 1950.

<sup>106</sup> CNABF 22V208 Procès-verbal d'arrestation de Lombo Tiaho, le 16 janvier 1950.

<sup>107</sup> CNABF 22V208 Procès-verbal d'audition de témoin, Zaoule Coulibaly, le 20 novembre 1948.

が容易に定まらなかったことに拠るのか、ナンクは 1954 年までボンドゥクイの郡長位に留まることになる<sup>108</sup>。1955 年 1 月、ボンドゥクイ郡の有力者による投票によって、ナジ・ボニの推すジョセフ・ビカバ(Joseph Bicaba)がボンドゥクイ郡長に就任することになった<sup>109</sup>。ビカバは、ワカラ村の出身者で、ボボ・ジュラソのカトリック宣教団の経営する印刷所でタイピストとして働いていた人物である<sup>110</sup>。郡長選挙では、ボンドゥクイ、ダンパン、ムクナの有力者は RDA の構成員の推したゼケ・クリバリ(Zeke Coulibaly)、ボンドゥクイの一部の街区はサベレ・クリバリ(Saberet Coulibaly)に投票したが、他の村々の有力者がすべてビカバに入れたため、ビカバの圧勝となった<sup>111</sup>。つまり、RDA はボンドゥクイ内部においても候補者が一本化できず、ボンドゥクイ以外の村々の有力者のあいだではほとんど支持を得られていなかった。

1955 年 2 月 20 日、3 名のボボ・ジュラソ在住の事務局メンバーが参加したボボ・ジュラソの RDA 地方支部の会合で、ボンドゥクイ群長選挙の結果が伝えられた。当時、事務局長であったアリ・バロ(Ali Barraud)が RDA の組織強化のために人員を派遣することを提案し、ダールサラーム・ジャロ(Darsalam Diallo)——この数か月後に RDA を脱退し、ナジ・ボニの政党である MPEA に参加することになる人物<sup>112</sup>——は住民がすでに RDA に敵対的であることから反対したが、参加者の大半が事務局長の提案に賛同し、2 名の構成員が派遣された<sup>113</sup>。しかし、のちに、この 2 名からは、デドゥグ管区での RDA 支持が失われていることが報告され、何ら具体的な解決は示されなかった<sup>114</sup>。

注目すべき点は、RDA のボボ・ジュラソ支部がボンドゥクイの状況についてほとんど把握していなかったことである。選挙後に構成員を派遣し、ようやく RDA の支持基盤がほとんど失われていることを認識している。さらに、重要な点はこの会合にボンドゥクイの人間が参加していないこと、あるいは、少なくとも発言が記録に残されるほどの地位が与え

---

<sup>108</sup> AHCD s.c. Rapport sur cercle de Dedougou par l'inspecteur, Ouagadougou, le 30 septembre 1954.

<sup>109</sup> CNABF 27V10 Procès-verbal de consultation, Bondoukuy, le 15 janvier 1955.

<sup>110</sup> CNABF 27V10 Lettre du commandant le cercle de Dedougou au gouverneur de la Haute-Volta, le 26 janvier 1955.

<sup>111</sup> CNABF 27V10 Lettre du commandant le cercle de Dedougou au gouverneur de la Haute-Volta, le 1er février 1955., Telegramme du commandant le cercle de Dedougou au Gouverneur de la Haute-Volta, le 2 mars 1955.

<sup>112</sup> AHCH s.c. Renseignements, le 29 novembre 1955.

<sup>113</sup> CNABF 27V10 Telegramme du commandant le cercle de Dedougou au Gouverneur de la Haute-Volta, le 2 mars 1955., Renseignements, Bobo-Dioulasso, le 20 février 1955.

<sup>114</sup> CNABF 27V10 Renseignements, Bobo-Dioulasso, le 28 février 1955., Renseignements, Bobo-Dioulasso, le 14 mars 1955.

られていなかったことである。

4 月に入り、ウエザン・クリバリやコートディヴォワールの評議員も参加した RDA のボボ・ジュラソ支部の会合では、デドゥグ管区に派遣された 2 名の構成員による「絶望的な」報告がなされたが、ウエザンは彼らを鼓舞して、自らデドゥグ管区に乗り込むことを決定する<sup>115</sup>。しかし、結局、ウエザンはいまだ支持者がいるとされたデドゥグとヌーナにおいてすら集会を開くことができず、このときに初めて、ボンドゥクイ郡だけでなく、サファネ郡においても反 RDA の郡長が成立していたことが理解された<sup>116</sup>。

サファネの郡長位をめぐる闘争については概略を述べるにとどめる。サファネでは、1946 年に郡長が亡くなり、亡くなった郡長の又従兄弟でウィリアム・ポンティ師範学校を卒業した教師のドゥアニ・セレ(Douani Sere)<sup>117</sup>と、亡くなった郡長の弟のウマル・セレ(Oumarou Sere)<sup>118</sup>とが候補にあがり、評価が二分されていたが<sup>119</sup>、ドゥアニが郡長位を継ぐことになった<sup>120</sup>。

ドゥアニは 1948 年 6 月のオート・ヴォルタ植民地評議会選挙に RDA の候補者として当選しており、少なくとも 1948 年までには RDA の活動に参加していた<sup>121</sup>。RDA への活動への関与から、1948 年 12 月、ドゥアニはサファネ郡長を解任され、郡長位はドゥアニからウマルに継承された<sup>122</sup>。その後、1949 年、ドゥアニはボロモとワッハーブでの事件をうけて、フランソワ・ヴィナマとともに訴追され<sup>123</sup>、オート・ヴォルタ総督によって評議員の職を解かれた<sup>124</sup>。

一方で、郡長位を継承したウマル・セレは悪行を働いていた。銃を売るという話を持ちかけ代金を騙しとり、暴行をふるい、貢物を要求するなどしており、1954 年には住民から

---

<sup>115</sup> ANOM 14miom/2549 Renseignements, Bobo-Dioulasso, le 2 mai 1955.

<sup>116</sup> ANOM 14miom/2549 Extrait rapport de tournée des 4, 5 et 6 mai 1955 du chef des services de police de Haute-Volta a Ouagadougou, Dedougou et Koudougou.

<sup>117</sup> CNABF 27V12 Carnet signalétique de chef de canton, Douani Sere.

<sup>118</sup> CNABF 27V12 Carnet signalétique de chef de canton, Oumarou Sere.

<sup>119</sup> CNABF 3V30 Rapport politique pour les subdivisions de Dedougou et Boromo, 1946.

<sup>120</sup> CNABF 27V12 Carnet signalétique de chef de canton, Douani Sere.

<sup>121</sup> ANOM 14miom/2538 Lettre du gouverneur de la Haute-Volta au haute-commissaire en A.O.F., le 18 août 1948.

<sup>122</sup> CNABF 27V12 Décision portant suspension d'un chef de canton et nomination d'un chef de canton intérimaire, le 6 décembre 1948.

<sup>123</sup> ANOM 14miom/2538 Renseignement, Ouagadougou, le 8 mai 1949.

<sup>124</sup> ANOM 14miom/2538 Renseignements sur rapport politique de la comite directrice du RDA en Haute-Volta, Bobo-Dioulasso, le 1 juin 1949.

の評判は芳しいものではなくなっていた<sup>125</sup>。こうした状況を受けて、ウマルの解任を視野に入れた水面下の政治が進行する。1954年5月、植民地行政官は、慎重を期してドゥアニを教員に復職させ、当時、ドゥアニが居住していたボボ・ジュラソよりもさらに遠くのオート・ヴォルタ東部へ異動させる提案を行なっている<sup>126</sup>。この提案はすぐに受け入れられたようである。少なくとも、1954年9月段階でドゥアニはオート・ヴォルタ東部のファダ・ングルマ管区の教師となっている<sup>127</sup>。この時期にはすでにドゥアニの求心力は低下していた。この時期にドゥアニはサファネに帰還しているが、その活動はイマームやかつてのRDAの仲間数人との個人的な訪問に留まった<sup>128</sup>。こうして、1955年1月、ウマル・セレはサファネ郡長を解任され、ウマルの甥でサファネの小学校の校長であったモドゥ・セレ(Modou Sere)が郡長位を継承することになった<sup>129</sup>。翌年の1955年5月、ウエザン・クリバリはデドゥグ管区を訪問し、ボンドゥクイとサファネがナジ・ボニの手に落ちたと感じたこと<sup>130</sup>には、このような背景があったのである。実際のところ、郡長就任後、モドゥ・セレはMPEAの幹部にまねかれることが党の会合のなかで決していた<sup>131</sup>。

このように、1956年にはデドゥグ管区の住民の支持政党は大きく変化していた。前述のように1946年6月の第二回憲法制定議会選挙では約8割がRDAのウフェ＝ボワニに投票していたが、1956年1月のフランス国民議会選挙ではMPEAの党首のナジ・ボニが約9割の票を得て当選し、RDAは1割以下にとどまった<sup>132</sup>。前述のように、RDAは1956年末にモシの政党であるPSEMA(元UV)と合流し、1957年3月のオート・ヴォルタ植民地評議会選挙においては、資金力にものをいわせ、強力な選挙戦を展開することになった。ナジ・ボニの打倒のために、自動車40台あまりのRDAの宣伝団がデドゥグ管区を行きかった<sup>133</sup>。1948年段階では、オート・ヴォルタのRDAが自動車を6台しか保有していなかったこと

---

<sup>125</sup> AHCD s.c. Sur le chef canton de Safane, Oumarou Sere. Dedougou le 3 décembre 1954.

<sup>126</sup> AHCD s.c. Réintégration de M. Douani Sere. Dedougou le 18 mai 1954.

<sup>127</sup> ANOM 14miom/2538 Renseignements, Dedougou, le 10 septembre 1954.

<sup>128</sup> ANOM 14miom/2538 Renseignements, Dedougou, le 1 octobre 1954.

<sup>129</sup> CNABF 27V12 Décision nommant M. Modou Sere, Chef de canton de Safane, Ouagadougou, le 31 janvier 1955., Bulletin de notes concernant le chef de canton de Safane, Dedougou, le 25 décembre 1955.

<sup>130</sup> ANOM 14miom/2549 Extrait rapport de tournée des 4, 5 et 6 mai 1955 du chef des services de police de Haute-Volta a Ouagadougou, Dedougou et Koudougou.

<sup>131</sup> ANOM 14miom/2549 Renseignements, Bobo-Dioulasso, le 10 février 1955.

<sup>132</sup> 正確にはMEPAが91.36%、RDAが5.43%、その他が3.21%となっている。AHCD s.c. Dossier du cercle de Dedougou, climat politique, juin 1957.

<sup>133</sup> AHCD s.c. Dossier du cercle de Dedougou, climat politique, juin 1957.

を考慮すると<sup>134</sup>、この変化は非常に大きなものであった。このことによって、デドゥグ管区における選挙の得票率は、RDA が約 45%、MPEA が約 55%と大幅に変化している<sup>135</sup>。

しかし、1958 年以降、オート・ヴォルタ全体の政治は、こうしたデドゥグ管区における RDA と MPEA の競合という政治状況とまったく無関係に進行していった。次節では、まず、このことの経緯、すなわち、1956 年の RDA と PSEMA の合流から、後に初代大統領となるモーリス・ヤメオゴ(Maurice Yameogo)が政権を握るまでの概略を述べ、そのうえで、オート・ヴォルタ植民地の政党の全体としての特徴を示し、1 節と 2 節で検討したミクロの政治がオート・ヴォルタの政治史にどのように位置づけられるのかを論じ、そのことによって、かつての国家をもたない社会において政党政治の導入がいかなる意味をもったのかを明らかにする。

### 7-3. オート・ヴォルタ植民地における政党政治

#### 7-3-1. 基幹法以後のオート・ヴォルタ植民地の政党間の政治

1956 年 9 月 24 日、ワガドゥグで開かれたモシの政党の PSEMA の党大会でアンリ・グイスとジョセフ・コノンボが主導するかたちで、RDA とモシの政党 PSEMA の融合が承認された<sup>136</sup>。同年 8 月、PSEMA のフランス国会議員であるアンリ・グイス(H. Gouissou)のパリ訪問の際に、グイス、ウフエ＝ボワニ、ウエザン・クリバリの三者による会談がなされ、合意に至ったことが、両党の融合の直接的な契機であった<sup>137</sup>。ウエザンがパリから RDA ボボ・ジュラソ支部に宛てた手紙と諜報による報告では、1956 年 10 月 17-20 日におこなわれる、各植民地を越えた RDA の党大会に PSEMA の代表の派遣の承認、オート・ヴォルタの政党再編をグイスは求めていたとされる<sup>138</sup>。

大局的にいえば、このことは仏領植民地に自治権を一定程度移転させた 1956 年 6 月 23 日の基幹法(le loi-cadre)の制定を受けて生じた出来事として捉えることができる。他の植民地の政党との関係が希薄であった PSEMA が独立にむけた方向性を共有するパイプを欲していたこと、基幹法の制定後のオート・ヴォルタ植民地評議会のなかでの多数派に参画す

---

<sup>134</sup> 内訳は、クライスター2 台、シトロエン 1 台、ルノー1 台、トラック 1 台であった。ANOM 14miom/2200 Rapport sur la Haute-Volta, 1948.

<sup>135</sup> AHCD s.c. Dossier du cercle de Dedougou, climat politique, juin 1957.

<sup>136</sup> ANOM 14miom/2549 Renseignements, Ouagadougou, le 26 septembre 1956.

<sup>137</sup> ANOM 14miom/2549 Lettre du Ouezzin Coulibaly, Paris, le 19 août 1956.

<sup>138</sup> ANOM 14miom/2549 Lettre du Ouezzin Coulibaly, Paris, le 19 août 1956., Renseignements, Bobo-Dioulasso, le 29 août 1956.



る重要性を認識していたことが主たる要因として挙げられる。

他方で、オート・ヴォルタの政治状況のコンテキストでは、二大政党からの変容が、むしろ両党の融合をもたらしたとみることができる。前節で述べたように、1952年頃からミシェル・ドラランジェやナジ・ボニといった RDA や UV ではない、第三の政治勢力が出現してきていた。こうした状況を受けて、ワガドゥグの市議会議員選挙ではこうした第三の政治勢力との対抗の必要性が生じ、1954年8月には、ワガドゥグとボボ・ジュラソのそれぞれで、ドラランジェやボニに対する対抗のための RDA と UV(のちの PSEMA)との選挙上の連携の合意がなされていた<sup>139</sup>。RDA と PSEMA の融合が、こうした選挙での連携の延長線上にあったことは確かなことであろう。

こうした融合によって生じた RDA と PSEMA を下部組織にもつ PDU(Parti démocratique unifié、統一民主党)の結成後の最初の選挙が、1957年3月のオート・ヴォルタ植民地評議会議会選挙であった。その選挙結果が表 7-5 である。PDU は過半数を獲得したものの、内閣を構成するには不安定であったため、ドラランジェの率いる MDV との連立政権を模索する(Madiega 1995: 440)。ウフエ・ボワニの仲介により、1957年4月29日、コートディヴォワールのヤムスクロで PDU と MDV とのあいだの合意がなされ、同年5月、MDV のヤラグド・ウエドラオゴ(Yalagdo Ouedraogo)を議長、PDU のウエザン・クリバリを副議長とし、閣僚10名は PDU と MDV からそれぞれ5名ずつ選出して構成された(ibid.: 440)。

政党		議席数	
PDU	RDA	39	44
	PSEMA	5	
MDV		19	
MPA		4	
無所属		3	
合計		70	

表 7-5. 1957年3月31日、オート・ヴォルタ植民地評議会選挙結果<sup>140</sup>

RDA との融合を主導し、大臣のポストも得ることができなかった元 PSEMA のジョセフ・コノンボにとっては、MDV との連立政権はまったく納得のいかないものであった。こ

<sup>139</sup> ANOM 14miom/2549 Renseignements, Ouagadougou, le 25 août 1954., Renseignements, Bobo-Dioulasso, le 27 août 1954.

<sup>140</sup> CNABF 44V667 Liste des conseillers territoriaux élus dans le Haute-Volta au scrutin du 31 mars 1957.なお、一部の先行研究(たとえば、Madiega 1995: 440)には、数値に微細な誤りがある。

うして、1957年9月、コノンボはPDUを脱退し、PSEMAを再結成する(ibid.: 441)。

一方で、同年7月には、ワイグヤ管区とポ管区において、MDVとPDU-RDAとのあいだの選挙をめぐる対立が再燃する。このことを好機とみたMPA率いるナジ・ボニはPSEMAとMDV、さらにRDAからの離脱者も含めた統一会派GSV(Groupe de la solidarite voltaique、ヴォルタ連帯グループ)を結成し、37名の議員を擁して議会での多数派を構成した(ibid.: 441)。GSVは内閣総辞職を条件に予算審議を拒否し、議会は1958年2月まで機能しなかった(ibid.: 441-442)。

こうした状況で、キャスティング・ボードを握ったのが、モーリス・ヤメオゴであった。モーリス・ヤメオゴはクドゥグ管区のモシの農民の息子として生まれ、地方の小学校を卒業後、宣教団の私塾に通い、植民地官吏の職を得て、1946年のオート・ヴォルタ植民地評議会選挙で当選し、UVの評議員となった。しかし、1952年の植民地評議会選挙で落選し、植民地官吏に復職したが、UVの「若いモシ」の政治家であったジョセフ・ウエドラオゴの勧めで、1954年にはキリスト教系の労働組合活動に参加し、1956年、ジョセフ・ウエドラオゴがワガドゥグ市長となり、ヤメオゴは市長の第一秘書となっている。ヤメオゴはRDAとPSEMAの融合の2か月前にドランジエのMDVに入党し、1957年3月の植民地評議会選挙でようやく当選を果たしていた(Guira 1991)。このように、独立後のオート・ヴォルタの初代大統領となるモーリス・ヤメオゴは、1957年以前はマイナーな政治家であったといっていよう。しかし、1957年末から1958年初頭の政治状況は、ヤメオゴにスポットライトをあてることになる。

GSVによって握られた過半数——半数の35議席にわずか2議席を積み上げた37議席によって、PDU-RDAを率いていたウザン・クリバリは行き詰っていた。そのなかで、ウザンはヤメオゴにアプローチをかける。ヤメオゴは地元のクドゥグ管区選出の2名の議員とともにMDVを脱退し、GSVは過半数を割り、1958年2月6日、ウエザンは新内閣を組閣し、モーリス・ヤメオゴは内務大臣、彼とともにRDAに入った議員は保健大臣に任命された(Madiega 1995: 442)。そして、1958年9月、ウエザン・クリバリの病死によって、ヤメオゴが代理を務め、他の政党を非合法化し、一党体制を確立させ、大統領に就任することになるが、その詳細を追わなくともよいだろう。ここまでの記述で、一党体制の樹立までの道程が議会と政党間の政治によって形作られたことは明らかである。

### 7-3-2. オート・ヴォルタ植民地の政党政治の全体像

ここまでは大まかな時代ごとの定性的な記述をおこなってきたが、以下では各選挙と選挙結果から、1945 年以降のオート・ヴォルタの政治史を概観し、その特徴を浮かび上がらせておきたい。

表 7-6 は 1945 年から 1959 年までのオート・ヴォルタ植民地でおこなわれた主要な選挙の一覧である。ここで指摘しておきたいことは、1945 年から 1948 年の 3 年間に 6 つもの選挙が行われていたという点である。これは第 2 次世界大戦直後のフランスでの政治状況を反映したものであるが、このことはローカルな政治状況にも一定程度影響を与えていた。

前節でみたように、デドゥグ管区では 1946 年から 1949 年までのあいだに RDA の関与する政治事件が多発していた。RDA が武装闘争路線を採用していたという条件はあるにせよ、そもそも頻発する選挙によって継続的な選挙活動がなされ、緊張が高まっていったともいえるだろう。

番号	実施年月	選挙名
①	1945.10.11	フランス国民議会選挙
②	1946.6	フランス国民議会選挙
③	1946.11	フランス国民議会選挙
④	1946.12	コートディヴォワール植民地評議会選挙
⑤	1948.6	フランス国民議会選挙
⑥	1948.6	オート・ヴォルタ植民地評議会選挙
⑦	1951.5	フランス国民議会選挙
⑧	1952	オート・ヴォルタ植民地評議会選挙
⑨	1956.1	フランス国民議会選挙
⑩	1957.3	オート・ヴォルタ植民地評議会選挙
⑪	1959.3	オート・ヴォルタ植民地評議会選挙

表 7-6. 1945 年から 1959 年までのオート・ヴォルタ植民地でおこなわれた主要な選挙<sup>141</sup>

表 7-7 は 1945 年から 1959 年までの選挙ごとの政党別獲得議席数をまとめたものである。ここから、これまで定性的に指摘してきたことを補完して、3 つの点が指摘できるだろう。第一に、主要な政党は、ワガドゥグを中心としたモシの UV(PSEMA)、ボボ・ジュラソを中心とした RDA、ワイグヤを中心とした MDV、デドゥグを中心とした MPEA であった。第二に、UV と RDA が議席のうえでも基本的に中心として展開した。ただし、第三に、1945 年から 1948 年にかけては UV が立候補をとりさげたケースが多く、1951 年から 1956 年に

<sup>141</sup> なお、このなかには、政党間の競合があまりみられなかった、フランス憲法の信任投票、レファレンダム、共和国評議会選挙は除外している。

かけての選挙では RDA は議席をまったく獲得できていなかった。この時期においても、RDA が活動を継続できたことは、RDA の総裁であったウフエ＝ボワニがコートディヴォールにおり、実質的にボボ・ジュラソ支部のトップとなっていたウエザン・クリバリがコートディヴォール選出のフランス国会議員であり、この凋落の期間も議席を保持し続けていたことであろう。そのような意味において、オート・ヴォルタの RDA はコートディヴォールの RDA に依存していた。また、言い換えれば、オート・ヴォルタ植民地内の基盤に乏しかったともいえるだろう。

番号	実施年月	議席数	UV→PSEMA	RDA	CY→PRF→MDV	MPEA→PLA	諸派	無所属
①	1945.10.11	1	0	1(100%)				
②	1946.6	1	—	1(100%)				
③	1946.11	3	—	3*(100%)				
④	1946.12	15	—	15(100%)				
⑤	1948.6	1	—	1(100%)				
⑥	1948.6	16	7(44%)	3(19%)	2(13%)			4(25%)
⑦	1951.5	4	4(100%)	—	—			
⑧	1952	40	22(55%)	0	6(15%)	7(18%)	3(8%)	2(5%)
⑨	1956.1	4	2(50%)	0	1(25%)	1(25%)		
⑩	1957.3	70	5(7%)	39(56%)	19(27%)	4(6%)		3(4%)
⑪	1959.3	75	—	62(83%)	—	13(17%)		

表 7-7. 1945 年から 1959 年までのオート・ヴォルタ植民地における選挙の政党別獲得議席数(網掛けは過半数以上、なお、%は四捨五入)<sup>142</sup>

さらに詳しく選挙結果をみていこう。表 7-8 は 1951 年から 1956 年までの 3 つの選挙の得票率をまとめたものである。残念ながら、1948 年 6 月の選挙の得票率のデータがないため、RDA のそれ以前の得票傾向との比較ができないが、これをみると、1951 年選挙と 1952 年選挙で惨敗し、1956 年にはやや持ち直していることがわかる。

<sup>142</sup> ANOM 1affpol/2263 Les parties politiques en A.O.F. et les consultations électorales de 1945 a 1955. ; CNABF 44V667 Lettre du gouverneur de la Haute-Volta aux gouverneurs généraux et gouverneurs des territoires d'outre-mer et préfets des départements, Ouagadougou, le 8 février 1956., Liste des conseillers territoriaux élus dans le Haute-Volta au scrutin du 31 mars 1957.に基づき作成。一部については、Nohlen et al. 1999 を参照。

番号	実施年月	UV→PSEMA	RDA	CY→PRF→MDV	MPEA→PLA	その他	合計
⑦	1951.5	146,861 57.4%	17,725 6.9%	16,980 6.6%	66,986 26.2%	7,388 2.9%	255,940
⑧	1952	122,817 59.6%	2,488 1.2%	18,699 9.1%	45,502 22.1%	16,460 8.0%	205,966
⑨	1956.1	273,232 43.6%	71,725 11.5%	120,586 19.3%	102,853 16.4%	57,740 9.2%	626,136

表 7-8. 1951 年から 1956 年までのオート・ヴォルタ植民地における選挙の得票率<sup>143</sup>

また、前節の冒頭で UV が分裂し、第三勢力のドラングェやボニの政党が出現していったことを述べたが、この分裂によって、大きく票を失ったのはむしろ RDA であったことがわかる。再三述べてきたように、RDA はボボ・ジュラソを中心としたオート・ヴォルタの西部において展開してきたが、表 7-9 にまとめた管区別の得票率の変化をみると、西部の管区(ボボ・ジュラソ、バンフォラ、デドゥグ、ガワ)において、UV、RDA ではない他の政党が過半数の票を得ている。また、RDA の拠点があったボボ・ジュラソ管区においてすら、ナジ・ボニの政党に負けている。

さらに、モシがマジョリティの管区(ワガドゥグ、ファダ・ングルマ、カヤ、クドゥグ、ワガドゥグ、テンコドゴ)では投票傾向が UV に安定しているのに対して、その他の地域では政党によって票が割れていることが理解できる。全体としてみれば——ドラングェが熱心に活動したワイグヤを除いて——投票傾向はモシとその他の民族に区分される。その他の民族の票をめぐって RDA と第三の政党が競合していた。これがおおまかな全体像である。

<sup>143</sup> ANOM 1affpol/2263 Les partis politiques en A.O.F. et les consultations électorales de 1945 a 1955. ; CNABF 44V667 Lettre du gouverneur de la Haute-Volta aux gouverneurs généraux et gouverneurs des territoires d'outre-mer et préfets des départements, Ouagadougou, le 8 février 1956.に基づき作成。

⑦ 1951.5 フランス国民議会選挙					
管区名	UV	RDA	MDV	MPEA	合計
Bobo-Dioulasso	584	5,369	821	6,142	12,916
Banfora					
Dedougou	180	3,708	1,467	31,119	36,474
Dori	26	58	58	6,498	6,640
Fada N'Gourma	19,310	339	265	54	19,968
Gaoua	156	210	47	12,803	13,216
Kaya	10,595	360	337	82	11,374
Koudougou	31,554	928	430	65	32,977
Ouagadougou	54,696	411	1,213	4,980	61,300
Ouahigouya	6,060	213	11,418	35	17,726
Tenkodogo	21,689	92	88	6	21,875
Tougan	11	27	636	5,202	5,876

⑧ 1952 オート・ヴォルタ植民地評議会選挙						
管区名	UV	RDA	MDV	MPEA	諸派	合計
Bobo-Dioulasso	0	2,226	0	3,377	0	5,603
Banfora	0	0	0	5,882	20	5,902
Dedougou	0	0	0	32,917	0	32,917
Dori	3,431	99	0	0	0	3,530
Fada N'Gourma	9,692	0	0	0	3,176	12,868
Gaoua	0	0	0	0	10,550	10,550
Kaya	12,993	0	0	0	0	12,993
Koudougou	27,916	0	0	0	0	27,916
Ouagadougou	48,597	0	0	0	0	48,597
Ouahigouya	789	0	17,376	0	492	18,657
Tenkodogo	19,399	0	0	0	2,222	21,621
Tougan	0	163	1,323	3,326	0	4,812

表 7-9. 1951 年と 1952 年の選挙の管区別得票数(網掛けは過半数)<sup>144</sup>

ただし、RDA はボボ・ジュラソ市に限定すれば、一定の基盤を有していたようである。このことは表 7-10 の 1954 年のワガドゥグとボボ・ジュラソの市評議会選挙の結果に如実に表れている。

	UV	RDA	MDV	AV(MPEA)	諸派	無所属	合計
ワガドゥグ	17	0	3	5	0	4	29
ボボ・ジュラソ	1	25	0	0	5	3	34

表 7-10. 1954 年のワガドゥグ市とボボ・ジュラソ市の市評議会選挙の結果<sup>145</sup>

最後に、この時代のオート・ヴォルタ政治家の全体としての特徴を概観する。

<sup>144</sup> ANOM 1affpol/2263 Les partis politiques en A.O.F. et les consultations électorales de 1945 a 1955.に基づき作成。

<sup>145</sup> ANOM affpol/2230 Lettre du gouverneur de la Haute-Volta au haut-commissaire de la république, gouverneur général de l'A.O.F., le 10 août 1954.に基づき作成。なお、ワガドゥグ市は 6 つの選挙区、ボボ・ジュラソ市は 11 つの選挙区を有していた。

まず、宗教的帰属をみていこう。この市評議会選挙の選挙結果には、落選者も含む立候補者、補欠候補の宗教帰属についての情報が書かれていた。これをまとめたものが、表 7-11 である。ドランジエの MDV、ナジ・ボニの MPEA(この選挙時点では AV)は数が少なくどの程度それらの党の傾向を示しているかわからないが、UV と RDA にははっきりとした傾向がみてとれる。すなわち、UV はカトリック教徒、RDA はムスリムの候補者が圧倒的に多いということである。これは UV にはカトリック宣教団の教育を受けた者、RDA にはセネガル、ギニア、仏領スーダン出身のムスリムで植民地学校を出た商社勤め(事務職)、植民地官吏、教師が多くいたことを示している。

また、全体として、ムスリムが 5 割、カトリック教徒が 4 割を占めていることも、非常に重要な点である。大雑把な数値ではあるが、1950 年代のオート・ヴォルタ植民地の全人口の約 7 割が宗教的帰属を伝統宗教とし、ムスリムが 3 割、カトリック教徒が 1 割にも満たないことを考慮すると(表 7-12)、人口に比して、政治家、特に都市部の政治家に際立ってカトリック教徒の政治家が多いことがわかる。

	UV	RDA	MDV	AV(MPEA)	諸派	無所属	所属記載なし	合計
伝統宗教	4(11%)	1(3%)	1(14%)	1(13%)	0	0	0	7(5%)
イスラーム	3(8%)	29(76%)	1(14%)	7(88%)	20(80%)	12(43%)	0	72(50%)
カトリック	29(81%)	7(18%)	4(57%)	0	5(20%)	11(39%)	0	56(39%)
記載なし	0	1(3%)	1(14%)	0	0	5(18%)	2(100%)	9(6%)
合計	36	38	7	8	25	28	2	144

表 7-11. 1954 年のワガドゥグ市とボボ・ジュラソ市の市評議会選挙候補者の宗教分布<sup>146</sup>

	1923年	1925年	1930年	1947年	1956年	1961年
伝統宗教	78.0%	84.7%	84.5%	80.8%	75.2%	68.7%
イスラーム	22.0%	15.0%	15.1%	17.0%	20.7%	27.5%
カトリック	0.0%	0.3%	0.4%	2.1%	4.0%	3.7%
プロテスタント				0.1%	0.2%	0.1%

表 7-12. 1923 年から 1961 年までのオート・ヴォルタ植民地の全人口の宗教分布<sup>147</sup>

<sup>146</sup> ANOM affpol/2230 Lettre du gouverneur de la Haute-Volta au Haut-commissaire de la république, gouverneur général de l'A.O.F., le 10 août 1954.に基づき作成。

<sup>147</sup> ANOM 1Affpol/1248 Rapport politique et administratif annuel, 1923., Rapport politique et administratif annuel, 1925., Rapport politique et administratif annuel, 1930., ANOM 14Miom/2200 Rapport politique de Haute-Volta 1947., CNABF 2G56 Rapport général année 1956, Haute-Volta., Service de Statistique et de la Mécanographie 1961 に基づき筆者作成。

つぎに、政治家たちの社会階層をみていこう。表 7-13 は 1956 年のオート・ヴォルタ植民地評議会、表 7-14 は 1947 年から 1959 年までコートディヴォワール植民地評議会の議員の前職を一覧にしたものである。両者ともに、植民地官吏と教師で約半数を占めている点は共通している。政治家は基本的にフランス語の読み書き能力を前提としており、この時代にこうした技能を身につけている人物の大半は植民地行政のなかで働いていたことがわかる。

興味深い点は、相対的に、オート・ヴォルタ植民地では「伝統的首長」が多く、コートディヴォワール植民地には「プランター・トレーダー」が多いことである。オート・ヴォルタ植民地では「伝統的首長」が 1 割を占めているのに対して、コートディヴォワール植民地では行政首長は 1957-1959 年の任期中にわずか 1 人(2.1%)である。これとは反対に、コートディヴォワール植民地では 1952-1959 年の期間に「プランター・トレーダー」が約 2-1 割であるのに対して、オート・ヴォルタ植民地では「商人」、「企業化」、「農民」を合わせても 1 割に満たない。

佐藤(2000)が明らかにしたように、SAA および PDCI-RDA が農村社会を基盤としたプランター組織という性格を帯びていたという議論はなかば神話化されたものであり、「プランター」もまた高学歴者の転身の結果である場合がある。オート・ヴォルタ植民地はそもそもプランテーション経済を有しなかったので、「プランター」という層が存在しなかったが、他方で、パトロンとして政治活動を支えたムスリムの商人たちがほとんど議員となっていないことは指摘されるべきであろう。オート・ヴォルタ植民地では、経済的基盤を有していた集団がほとんど議員となることがなかったのである。

「伝統的首長」については、コートディヴォワール植民地とは異なって、オート・ヴォルタ植民地の「伝統的首長」が議会制民主主義のなかでも一定の影響力を保持していたことを示している。オート・ヴォルタ植民地評議員の「伝統的首長」の内訳は、「モロ・ナーバの大臣」、「ファダ・ングルマ上級首長」と(バンフォラ郡、ドリ郡、カヤ郡、ワガドゥグ郡、サポネ郡の)5 名の郡長となっており、モシの「伝統的首長」が多い。のちにモロ・ナーバを頂点とする「伝統的首長」の組合も設立されていた。植民地統治期のなかで維持・強化されたモシ王国と「伝統的首長」は一定の存在感を維持しており、少なくとも、コートディヴォワール植民地と比較する限りにおいては、オート・ヴォルタ植民地を特徴づけるものとなっている。



1956年

植民地官吏	16	24.2%
校長／教師	13	19.7%
看護師	11	16.7%
「伝統的首長」	7	10.6%
民間事務職	7	10.6%
駅長	2	3.0%
会計士	2	3.0%
医師	2	3.0%
農民	1	1.5%
軍人	1	1.5%
商人	1	1.5%
企業家	1	1.5%
学生	1	1.5%
技師	1	1.5%
不明	3	4.5%
合計	66	

表 7-13. 1956 年のオート・ヴォルタ植民地評議会の議員の前職<sup>148</sup>

	1947-1951	割合	1952-1957	割合	1957-1959	割合
(公的)事務職	8	29.6%	6	22.2%	15	31.3%
教師	7	25.9%	6	22.2%	13	27.1%
医師	6	22.2%	5	18.5%	3	6.3%
薬剤師	1	3.7%	0	0.0%	0	0.0%
弁護士	0	0.0%	0	0.0%	1	2.1%
(民間)事務職	1	3.7%	1	3.7%	5	10.4%
プランター・トレーダー	2	7.4%	7	25.9%	8	16.7%
その他給与取得者	2	7.4%	2	7.4%	2	4.2%
行政首長	0	0.0%	0	0.0%	1	2.1%
合計	27		27		48	

表 7-14. 1947 年から 1959 年までコートディヴォワール植民地評議会の議員の前職<sup>149</sup>

#### 7-4. 国家をもたない社会における政党政治とは何か

まとめよう。まず、1945 年以降のオート・ヴォルタ植民地における政党政治は、ブラザヴィル会議以降に、ボボ・ジュラソとワガドゥグで別様に展開した。ボボ・ジュラソでは、セネガルに本部をもつ CEFA の支部がセネガル出身者によって設立され、反植民地主義のプロパガンダをおこない、急速に支持者を増やしていった。この時期に CEFA は、農村部においては人頭税の支払いの拒否などを主張し、バンフォラ管区では親植民地派の郡長の

<sup>148</sup> CNABF 44V667 Lettre du gouverneur de la Haute-Volta aux gouverneurs généraux et gouverneurs des territoires d'outre-mer et préfets des départements, Ouagadougou, le 8 février 1956.に基づき筆者作成。

<sup>149</sup> 佐藤 2000: 55 を一部簡略化。

解任などの政治介入を行ない、のちのムフン川湾曲部における事件群に先駆となる事件をおこしている。1946年のバマコ会議を経て、このCEFAはのちにRDAの総裁となるウフェ＝ボワニによって発展解消され、一部の離脱者を除き、RDA ボボ・ジュラソ支部に吸収されることになり、以後、ボボ・ジュラソはオート・ヴォルタ植民地におけるRDAの拠点となった。

一方で、ワガドゥグでは、モシ王のモロ・ナーバが旧オート・ヴォルタ植民地の再構成をもとめる請願活動を開始する。当初はモロ・ナーバが単独で請願を行なっていたが、黙殺されたため、ワイグヤ、テンコドゴ、ファダ・ングルマの諸王に相次いで会談し、再構成の賛意をまとめて、再度、フランス政府に対して請願を行なった。この請願では、フランスによる征服時に締結されたモロ・ナーバとフランス政府との保護条約を引き合いにだし、モシの王国が、仏領スーダン、ニジェール、コートディヴォワールという3つの植民地に分断されていることが不当であるという主張を新たに付け加えられていた。この論点がどれほどの実効的な意味をもったかは不明であるが、同時代のフランス国内の政治状況とも相まって、1947年、オート・ヴォルタ植民地は再構成を果たす。

1946年の選挙以来、モロ・ナーバを名誉会長とするUVがワガドゥグを中心にモシの居住する管区において影響力を確立していたが、モロ・ナーバが再構成のための請願活動を優先していたため、1948年までは選挙はRDAの勝利に終始していた。しかし、1948年以降、RDAがフランス共産党と提携し、武装闘争路線を採用し、UVが親植民地行政、モロ・ナーバを中心とした「伝統的首長」の擁護を鮮明にさせていくなかで、RDAとUVの双方において会派の分裂が生じた。大まかにいえば、ワイグヤでは元軍人のドラランジェによるMDV、デドゥグではナジ・ボニによるMPEAが結成された。特に、ボボ・ジュラソとワガドゥグの中間に挟まれたデドゥグ管区では、MPEAとRDAとの対立が顕著となっていた。すでに述べたように、RDAの歴史のなかでも、オート・ヴォルタ植民地では、デドゥグ管区が最も苛烈に武装闘争が展開されたと位置づけられている。

このように、デドゥグ管区では、1946年からRDAが関与したとされる暴力事件が多発するようになった。ボロモとワッハーブでは、1946年頃からRDAの構成員による反植民地主義を掲げる抗議や管区司令官の邸宅への襲撃、行政官や親フランスの住民への暴行が相次いだ。また、ボンドゥクイの郡長の解任をめぐる騒動にRDAが介入し、親植民地行政の立場をとる人間への攻撃を煽り、デドゥグではUV支持者からのRDA支持者への襲撃、ボンドゥクイではUV支持者とRDA支持者のあいだに複数の刑事事件が生じた。1952年

に RDA は武装闘争路線を放棄し、1950 年代半ばにおいては、デドゥグ管区では、RDA は支持を失い、ボンドゥクイ、サファネの郡長は MPEA 支持者によってかためられ、MPEA が影響力をもつようになっていった。

しかし、1956 年以降のオート・ヴォルタ全体の政治は、こうしたデドゥグ管区でのローカルな闘争とはまったく無関係に進行することになった。1956 年、RDA と PSEMA(UV の後身)との融合が決定され、それぞれの党組織を保持しつつ、PDU という統一会派を設立し、選挙での一定程度の勝利を得た。しかし、議会での安定多数を確保できず、PDU の実質的な指導者であったウエザン・クリバリが MDV との連立政権を樹立した。この連立政権を不服としたグループが PDU を脱退し、PSEMA を再結成し、ナジ・ボニの MPEA と結束し、議会の過半数が野党となった。硬直した政治状況のなかで、MDV のモーリス・ヤメオゴら 3 名をウエザンが PDU に引き抜き、ふたたび過半数を奪還した PDU がヤメオゴを内務大臣に据えた新内閣を発足させた。しかし、1958 年 9 月、ウエザンが急死し、ヤメオゴが代理を務め、他の政党を非合法化し、一党体制を確立させ、大統領に就任することになった。

ブラザヴィル会議以降のオート・ヴォルタ植民地における政党政治は、植民地統治以前の国家と国家をもたない社会の枠組みを如実に反映して展開した。本章 3 節 2 項において管区ごとの得票率を踏まえて指摘したように、モシがマジョリティである管区で安定した票を得ていた UV に対して、その他の民族の票をめぐって、RDA と第三の政党が競合していた。オート・ヴォルタ全体の政治は一見すると UV と RDA の二大政党の対峙に見えるがより正確に表現すれば、モシの政党と非モシの政党との対峙となっていた。

むしろ、このことはモシの民族的な一体性、ナショナリズム、あるいはトライバリズムといった用語によって、説明されることではない。むしろ、植民地統治期に、郡長、管区長の任命によって維持・拡張されてきたモシの諸王国の階層制が有効に機能したとみるべきであろう。また、こうした「伝統的首長」に対して不満をもつモシのグループ——本章 2 節 1 項で言及した PSEMA の「若いモシ」のグループ——も存在したが、結果的にはモシの政党の枠組みのなかに留まったことで、モシの政党が大きく分裂することはなかった。つまり、植民地統治以前から存在し、植民地統治期に維持・拡張されたモシの諸王国が、モシの政党と非モシの政党の対峙というオート・ヴォルタ全体の政党政治の構図を生み出していた。

さらに、ブラザヴィル会議以降のモシの政治運動が、モロ・ナーバによるオート・ヴォ

ルタ植民地の再構成から始まったことも注目すべきことであろう。このこともまた、植民地統治以前に存在したかつての国家の存在が重要な役割を果たすことになった。そもそもモロ・ナーバがオート・ヴォルタ植民地の再構成の政治的な主体となりえたのは、本章 1 節 4 項と 5 項で指摘した通り、フランス軍による征服時におけるワガドゥグのモシ王国の戦略上の重要性(本稿 4 章 2 節)と植民地行政内の「伝統的首長」の給与体系の最高位に位置づけられてきたこと(本稿 5 章 4 節)に起因している。

また、再構成の請願のなかで主張されたモシの居住域の分断という論理が、「モシの国王」としてモロ・ナーバを承認した、征服期に結ばれた保護条約に依拠している点も注目されるべき点である。モロ・ナーバによる請願は、保護条約の締結時にはそれほど重要と考えられていなかった「モシの国王」というフィクショナルに仮構された主体に新たな政治的含意をもたせたのである。つまり、それはモシという民族を統治し、その代表者たる「モシの国王」としてのモロ・ナーバという位置づけである。こうして植民地統治以前のかつての国家が、ブラザヴィル会議以降の政治のなかで、新たな実効的な意味をもつようになった。

こうしたモシの政党と「モシの国王」の特異性は、他の民族と比較すると顕著なものとなっている。まず、他の民族において、その民族を代表する「国王」は、すでに存在していなかった。征服期に締結された保護条約は、そもそも国家が不在のなかで結ばれたため(本稿 4 章 1 節)、モロ・ナーバほど高い地位も与えられず、実質的な影響力をほとんどもたなかった。たとえば、ボボ・ジュラソにおいて保護条約を結んだ主体は、1900 年代から 1910 年代のあいだに紆余曲折はあったものの、郡長位を解任されており(Saul and Royer 2001: 83-84, 116-117)、詳細は別稿に譲るが、デドゥグ管区のバラニやワッハーブのかつての「王」たちは、独自の徴税や賦役などを「権力乱用」として処罰を受け、郡内での人頭税の徴税を代行する郡長として、植民地行政の統治の階層制(本稿 5 章 1 節)のなかに組み込まれていた。つまり、植民地統治以前において、民族を代表するような国家が不在であり、植民地統治期を通じて、小規模の国家の「王」の地位は郡長の地位に変容していた。その意味で、特定の民族を代表するような「国王」はモロ・ナーバを除いては存在していなかった。

こうしたことから演繹的に導かれることでもあるが、モシの政党を除いては、政党の支持の動員に民族が旗印として用いられることはなかった。また、民族が引き合いに出される場合であっても、つねにモシとその他の諸民族という対比がなされていた。たとえば、1950 年代、MPEA を率いたナジ・ボニは非モシの民族を合わせた新しい植民地の設立を訴

えていたが、そこではモシと対比して、「慣習」の類似しているボボ、セヌフォ、ロビといった諸民族の同質性が語られている<sup>150</sup>。

また、植民地統治以前、統治以後においても、民族が政治的、あるいは社会的な単一の単位として機能することはなかった。たとえば、ムブン川湾曲部の国家をもたない社会において、政治的な単位は基本的に村で完結しており(本稿 2 章)、村を超えた同盟関係は植民地統治の確立の過程で政治的な実行力を失っていた(本稿 4 章)。また、オート・ヴォルタ植民地では、諸民族がパッチワーク状に入り乱れていたため(本稿 2 章 3 節)、モシの居住域を除いては、行政単位が民族の居住域と対応することもなかった。こうしたことから、民族はそれを内部で統合するような社会関係——モシの諸王国のような国家——を有しておらず、動員の旗印として掲げられることはなかった。つまり、国家の不在は民族を旗印にかかげる政治運動を構成できなかった一つの要因であった。

かつての国家をもたない社会において、民族を旗印にかかげる政治運動を構成しなかったことは、政治運動がなされなかったことを意味しない。むしろ、本章 2 節でみたように、デドゥグ管区における RDA の活動は、ワッハーブ、ボロモ、デドゥグ、ボンドゥクイといった特定の町や村での政治闘争を活性化させていた。反植民地主義を訴える RDA のプロパガンダは、フランスの弱体化、植民地行政官と親植民地的な郡長の排除の訴えへと翻訳され、前述の地域での暴力事件を発生させていた。すでに本章 2 節で指摘したように、こうした運動は、1915 年から 1916 年のヴォルタ・バニ戦争、1930 年代の「カトリック教徒」の不服従の運動などにみられた断続的に行われてきた植民地行政への断続的な抵抗の延長線上にあった。また、1930 年代の不服従の運動にみられた「伝統的首長」と(一部の)住民という対立軸(本稿 6 章 3 節)は反復され、ヴォルタ・バニ戦争以後の武器の接収によって、軍事力を奪われて、「反乱」を形成するには至らなかったという点も共通している。

他方で、RDA によるデドゥグ管区での事件群が、それ以前の反植民地主義的な運動と異なっている点は、こうした闘争が基本的にそれぞれの町や村で完結したことであった。闘争は、特定の郡長や管区司令官の排除が基本的な目的となっており、村を超えて運動は波及していかなかった。

このことの要因は、大きく 2 つ挙げられる。第一に、フランス人の植民地行政官は農村部ではほとんど接触する機会がなく、「共通の敵」の設定が困難であった。本章 2 節でとり

---

<sup>150</sup> たとえば、ANOM affpol/2230 Situation en Haute-Volta par Nazi Boni, le 10 juillet 1953.

あげたボンドゥクイでのウエザンの演説にあるように、フランスの弱体化とフランス人の行政官の排除が語られたが、同様に、植民地行政に加担する村民の排除もまた大きく強調された。RDA は親植民地を「敵」とし、反植民地を「友」とする新たな友・敵関係を導入したが、フランス人のほとんどいない農村においては主たる「敵」は親植民地の住民となった。こうして、デドゥグ管区における住民同士の暴行事件は、基本的にこの友・敵関係のなかで引き起こされることになった。

第二に、反植民地主義を訴えた RDA は、組織としては非常に中央集権的で、中央と地方は縦の関係で結ばれたが、地方のなかでの横の関係はほとんど構築されなかった。たしかに RDA の幹部は各地をまわり、フランソワ・ヴィナマのようにワッハーブの事件に連座して逮捕されることもあった。あるいは、ボボ・ジュラソ支部から人員が派遣され、特定の村の RDA の構成員がボボ・ジュラソ支部やアビジャン本部に赴くこともあった。こうした中央と末端という縦の関係性は一定程度存在していたが、末端と末端をつなぐ横の関係は——少なくとも、史料を読む限りにおいては、という限定がつくが——ほとんどみとることができなかった。ワッハーブやボロモ、サファネ、ボンドゥクイなどのそれぞれの村で活動する人物が他の村についての史料に現われることはなかった。また、それぞれの村での政治闘争は、それぞれの村の歴史と絡み合いながら進行し、RDA の戦略もまた、それぞれの村ごとの政治闘争を合流させていくようなものではなく、植民地行政との潜在的な対立軸を掘り起し、その対立軸で村内の「敵」を駆逐していくというものであった。

実際のところ、デドゥグ管区、部分的にはボボ・ジュラソ管区における RDA の敗退は武装闘争路線による植民地行政からの弾圧に加え、路線変更による支持者の離脱と地域に密着した組織づくりの欠如にあった。ワッハーブやボロモにおいて抗議活動が継続しなかったこと、サファネやボンドゥクイの郡長位をめぐる抗争において MPEA が勝利したことは、植民地行政の介入もあったが、それぞれの地域の RDA の構成員がボボ・ジュラソ支部において、ほとんど有力な地位につくことがなかったことに起因しているように思われる。ボンドゥクイの郡長選挙の敗北直後は楽観的な観測が示されたが、現地入りした後すぐにその観測が裏切られ、何ら手を打つことができなかったことはまさにこのことを端的に示している。また、ウフエ＝ボワニやウエザン・クリバリといった地域から離れて活動する主導部による度重なる路線変更——武装闘争の放棄や PSEMA との融合は、古参の幹部や支持者を離反させていった。たとえば、初期の RDA の活動を支えたボボ・ジュラソの教師で歴史家のシレバはナジ・ボニの政党に合流し、RDA から離反したボボ・ジュラソ管区の複

数の郡長位を占めるワタラをボニの政党に引き入れている<sup>151</sup>。また、シレ・バはある演説のなかで PSEMA との融合を決めた RDA を「全体主義」と批判し<sup>152</sup>、主導部の指令に従う組織のあり方を批判している。また、ナジ・ボニもまた、こうした RDA からの合流者に演説をさせ、そうした RDA の方針を批判し、支持者を増やそうとしていた<sup>153</sup>。1956 年までの選挙結果をみるかぎり、このナジ・ボニの路線はある程度成功していたといえよう。

このように、RDA は確固とした支持基盤を欠いていたが、1957 年以降、一気に議会での多数派を構成するようになる。PSEMA との融合、MDV との連合、モーリス・ヤメオゴの引き抜きといった政党間、政治家間の政治によって、一党優位の体制を構築していったことは前節で述べたとおりである。こうした一党優位の状況が生じた過程を本章の 1 節や 2 節で論じてきたローカルな政治闘争からみると、あまりにもかけ離れた世界で生じていた出来事のようにみえる。ムブン川湾曲部で生じていたローカルな政治闘争はオート・ヴォルタ全体の独立闘争に接続されなかった。

つまり、かつての国家をもたない社会は、政党政治の導入以降、三重の意味で国家と狭義の政治から隔絶されていたといえよう。まず、民族を旗印にするような政党が生じず、モシの政党との何らかの協力関係がなければ、議会内で多数派を構成することができなかった。つぎに、政党政治によってもたらされた新たな友・敵関係は、村を超えた範囲での「共通の敵」を有効に設定することができず、基本的に村内での闘争に終始させることになった。さらに、ローカルな政治闘争とはかけ離れたところで、一党体制が、政党間、政治家間の政治によって構成された。

このように、ブラザヴィル会議以降のオート・ヴォルタ植民地における政党政治は、植民地統治以前の国家と国家をもたない社会の枠組みを如実に反映して展開したが、かつての国家をもたない社会と国家をつなぐ政党という回路は 1945 年から 1960 年のあいだには十分に機能しないまま、独立に至ったといえるだろう。

---

<sup>151</sup> ANOM 14miom/2549 Renseignements, Bobo-Dioulasso, le 19 août 1955.

<sup>152</sup> ANOM 14miom/2549 Renseignements, Bobo-Dioulasso, le 21 octobre 1956.

<sup>153</sup> AHCD s.c. Réception du Député Nazi Boni venant de Paris.

## 8章 ボボ・ジュラソにおけるイスラーム改革主義運動

本章では、第二次世界大戦以後に顕在化したボボ・ジュラソにおけるイスラーム改革主義運動をとりあげ、この運動が在地のイスラームの歴史のなかでどのように生じてきたのかを明らかにする。なお、イスラーム教育に加え、語学としてのアラビア語とフランス語教育、世俗教育を行うメデルサ<sup>1</sup>の設置を行なう運動が開始された。クルアーンの暗記から始まる伝統的な教授法ではなく、近代的な教育をおこなうイスラームの学校をつくる運動は 1940 年代末から 1950 年代にかけて仏領西アフリカで同時並行的に生じており(中尾 2016a)、これをここではイスラーム改革主義運動と呼ぶ。

ボボ・ジュラソにおけるイスラーム改革主義の先行研究は、イスラーム改革主義がセネガル、ギニア、仏領スーダン出身の商人やホワイトカラーなどの植民地経済のなかで現れた新興の「外来者」によって推進され、大モスクのイマームを筆頭とする「土着民」とのあいだのコンフリクトを引き起こしてきたことを明らかにしてきた(たとえば、Cissé 1990; Traoré 2005)。しかし、これらの研究は、新たな運動の主たる担い手が「外来者」であることを強調するあまり、この運動の全体像を捉えそこなっている。本章で明らかにするように、この運動は西アフリカ内陸におけるイスラームの漸次的な広がり の延長線上にあり、「外来者」と「土着民」との対立もまた、植民地行政の介入の意図せざる結果や「土着民」と名指されているムスリム内部の些細な諍いを起源とする複雑に絡み合った諸要因の結果として生じていた。

一方で、たしかに先行研究が言及するように、ボボ・ジュラソにおけるイスラーム改革主義の中核を担ったのは、植民地経済のなかで富を蓄え、フランス語の読み書き能力をも

---

<sup>1</sup> メデルサとは、アラビア語のマドラサのフランス語による訳語である。中東・北アフリカにおけるイスラーム教育をおこなう高等教育の学校としてのマドラサは近代以前に遡るものであるが、フランス語圏西アフリカでは、メデルサは一般的にイスラーム教育に加え、語学としてのアラビア語とフランス語教育、世俗教育を行う学校を指しているため、ここではメデルサという表記をおこなう。また、メデルサは導入された当時から「フランコ・アラブ」(franco-arab)とも呼称されてきた。これは多くのメデルサにおいて、アラビア語のみならず、フランス語や世俗教育も行われていたことに起因する。現在でも、ブルキナファソにおいては、メデルサとフランコ・アラブはほぼ同義に用いられている。とはいえ、すべてのメデルサにおいてフランス語教育がなされていたわけではなく、一部においてはアラビア語のみの教育がなされていた。したがって、広義においては、メデルサはイスラーム教育と近代教育を融合させたものを含意し、メデルサにはフランス語による教育をおこなわないメデルサとフランコ・アラブが含まれている。本稿でとりあげるメデルサはいずれも現在ではアラビア語とフランス語のバイリンガル教育をおこなっているが、いつごろからフランス語教育を導入したのか不明確なものも含まれている。したがって、本稿で言及するメデルサは、フランス語による教育をおこなわないメデルサとフランコ・アラブを含む、広義のメデルサの意味で用いている。



つエリートたちと交流してきた「外来者」であった(Cissé 1990; Traoré 2005)。さらに、こうした「外来者」のなかに RDA の支持者が一定数いたことを明らかにしてきたが、従来の研究では、UV を支持する「土着民」との政治的対立の一つの要素としてしか扱われてこなかった(Traoré 2005)。しかし、実際には、「外来者」と名指されたムスリムたちの政党との関係は時代によって変化していた。そして、なによりも重要なことに、彼らの宗教運動を政党を介して進展させようと働きかけ、部分的にはその目的を果たしていた。

つまり、先行研究では、「外来者」と「土着民」の対立をあまり固定的に捉えてしまい、運動を取り巻く政治的・社会的状況の複雑さを過度に縮減してしまっている。こうしたことを踏まえて、本章では、植民地統治以前のボボ・ジュラソにおけるイスラームの展開とイスラーム改革主義運動が顕在化してくる経緯を丁寧に辿ることになる。具体的には、1 節では、1940 年代頃までのボボ・ジュラソにおけるイスラームの展開の歴史をまとめ、2 節では、「外来者」と「土着民」の対立の起源となる 1941 年のボボ・ジュラソ事件をとりあげ、3 節では、「外来者」と「土着民」の対立とイスラーム改革主義の形成を論じ、4 節で本章の全体のまとめと検討を行う。

## 8-1. 第二次世界大戦までのボボ・ジュラソにおけるイスラームの展開

ボボ・ジュラソのイスラームは、他の土地から来訪したムスリムが断続的に定着することによって変容、発展をとげてきた。まず、1 節では、ボボ・ジュラソのおこりから第二次世界大戦までのイスラームの展開を大まかに概観し、その特徴を明らかにする。

### 8-1-1. 18 世紀以前のボボ・ジュラソのイスラーム

いつ頃から、ボボ・ジュラソがボボ・ジュラソと呼ばれるようになったのか、なぜそのように呼ばれるようになったのか、明確な起源は見つけられていない。1905 年に植民地行政官が都市の名称として正式に採用したことは事実であるが、それ以前からボボ・ジュラソという名称も用いられていたようである。1888 年にヨーロッパ人としては初めてボボ・ジュラソを訪れたバンジェールは、「ボボ・ジュラソ、もしくはシア、もしくはジュラソ」(Binger 1892 t. I: 566)と記述している。

かつてのボボ・ジュラソがどれだけの地理的範囲をもっていたのかを知るために、必ず参照されるのはバンジェールの描いた地図である(図 8-1)。ウエ川の左岸の北から「イマームの村」、「ボボ・ジュラの村(長の村)」、「ボボの村」、川に挟まれて、西から「コンのジュラ

とダフィンの村」、「ハウサとソニンケの村」、南東に離れて「キミネ村」が描かれている。このうち、「イマームの村」と「ハウサとソニンケの村」は筆者の調査も含めた聞き取り調査によってどこに位置しているのか分からなくなっている。

ここでは「ボボ・ジュラの村(長の村)」、「ボボの村」、「コンのジュラとダフィンの村」の位置を確認しておきたい。図 8-2 は現在のボボ・ジュラソの地図に一部修正を加えたものである。聞き取りからは、大モスクの位置している周辺部分が先の三つの村があったと想定されている。

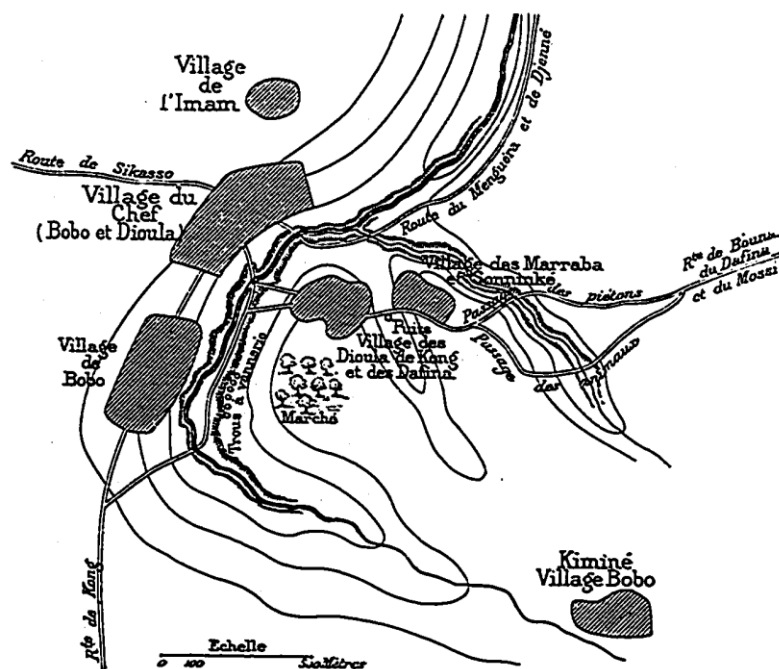


図 8-1. 1888 年のボボ・ジュラソ(Binger 1892 t. I: 569)



図 8-2. 現在のボボ・ジュラソの中心部と街区名

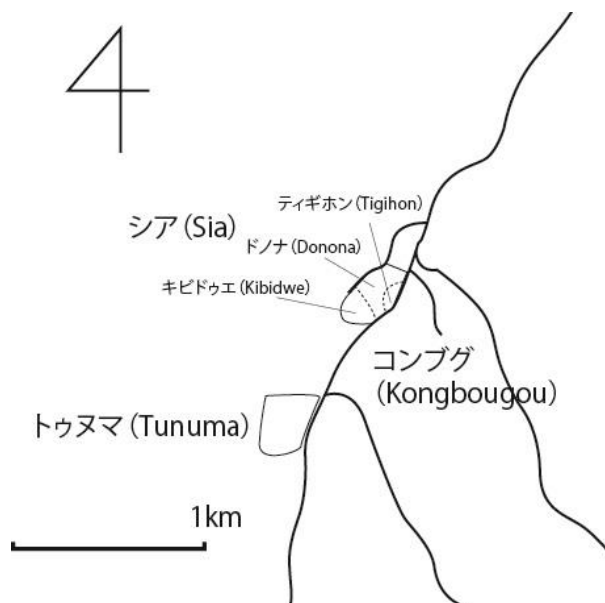


図 8-3. 19 世紀のボボ・ジュラソの想定図(Saul 2011: 46 を元に一部修正)

ソールによって行われた聞き取りの再構成によれば、18 世紀以前はシアとトゥヌマの二つの村がこの地に存在していた(Saul 2011、図 8-3)。シアの内部はドノナ、キビドゥエ、ティギホンの三つの街区に分かれていたが、ドノナの内部にも小分割があったとされる(ibid.:

46-47)。シアとトゥヌマ(現在のトゥヌマ街区とは地理的に異なる)はボボの民族の同じ創設者の祖先にたどることができ、そこから分化したリネージがそれぞれの村、ないしは街区、ないしは地区に集住していた(ibid.: 49-54)。ただし、これらのリネージは相互にライバル関係にあり、伝承の内容も微妙に異なっており、それぞれの村の発展を特定のリネージに帰して考えることは困難であるように思われる。ここでは、(1)ボボ・ジュラソの土地には二つの村があったこと、(2)これらの村はクラン名をサヌ(Sanou/Sanon)とするボボである共通の祖先とその子孫によって形成された(とみなされている)こと、(3)それぞれの村と地区にはそれぞれ別個にいくつかのリネージが集住していたことの3点を確認しておくことに留める。

シアとトゥヌマに限らず周辺地域では、先住のボボの到来以降で、18世紀のコン王国のジュラの到来以前に「マンデから来た」とされる集団がボボ・ジュラ(Bobo-Dioula)ないしはザラ(Zara)と呼ばれている(Le Moal 1980: 16-17)。18世紀のコンの征服以前にボボ・ジュラソに移住したムスリムで現在まで存続しているのは、カッサンバ・ジャビ(Kassamba-Diabi)とフォファナ(Fofana)である<sup>2</sup>。

カッサンバ・ジャビは現在のコートディヴォワールのサマティギラ(Samatiguila)を経由したマンデ起源とされるが、ボボ・ジュラのカテゴリーに入り、ボボとの通婚が認められている(Traoré 1984: 56-57)。現在はコーコ街区に居住しているが、1929年の区画整理以前はトゥヌマ村に居住していたとされる<sup>3</sup>。コン到来以前の口頭伝承は、呪術的要素が強調されている。祖先のマフーマ・カッサンバ(Mahma Kassamba)は雷を落として泉をつくり、マフーマのつくった蜂を呼びだして敵を追い払う笛が伝わっている<sup>4</sup>。

他方で、フォファナはコン出身のジュラで、ボボ・ジュラとの婚姻は認められていない(Traoré 1984: 59)。商業を営んでいたフォファナは、コンの征服以前にシデラドゥグ(Sideradougou)に移住した後に、ボボ・ジュラソに移り、シアにあったとされる古いモスクで礼拝をしていたという<sup>5</sup>。なお、シデラドゥグについては後にふれるが、この村の伝承で

---

<sup>2</sup> 現在の大モスクのイマーム位を継承するサヌのなかには、ボボ・ジュラのサヌの祖先がムスリムであったが、ムスリムのサヌはボボ・ジュラソを離れていったという伝承があるが(Traoré 1984: 12)、これは明らかに後年の操作の結果であろう。

<sup>3</sup> 2013/12/16 Bobo-Dioulasso, al-Hadj Bakai Kassamba-Diabi(コーコ街区のカッサンバ・ジャビの第二モスクのイマーム)。

<sup>4</sup> 2013/12/16 Bobo-Dioulasso, al-Hadj Bakai Kassamba-Diabi(コーコ街区のカッサンバ・ジャビの第二モスクのイマーム)。

<sup>5</sup> 2013/12/11 Bobo-Dioulasso, Moazu Bunjabari Fofana(ジュラソバ街区のフォファナのモスクのイマーム)。

はフォファナについては語られていない。現在のフォファナのモスクはウエ川と隣接して、図 8-3 のティギホンに位置しており、かつてのこの街区に居住していたものと考えられる。つまり、カッサンバ・ジャビはトゥヌマ村に、フォファナはシア村のティギホン街区にそれぞれ別個に居住し、それぞれ別のボボのリネージと互惠関係にあったものと想定される。

このように、18 世紀以前のボボ・ジュラソのイスラームは、他のブルキナファソの地域におけるイスラームとほとんど同様の状況であった。すなわち、首長権と結びついた在来宗教とイスラームとの棲み分けと相互依存の慣行をもち、ムスリムは村内で少数であり、村ごとに一つのリネージにマラブーの職能が独占されていた。しかし、コン王国のワタラの征服ないしは移住を機に状況は大きく変容する。

### 8-1-2. コン王国のワタラとマラブー

ジュラのセク・ワタラ(Seku Wattara)がコンの既成の勢力を打破し、自らの国家を樹立したのは 1710 年頃と考えられている(Saul 1998: 546)。セク・ワタラ自体はムスリムと非ムスリムの双方の有力者とも等しく政治的な関係を保っており、ある伝承によれば、セク本人自体はムスリムであったが、それほどファナティックなものではなかったという(Kodjo 2004: 224)。つまり、セクはムスリムであったが、非ムスリムを排除する立場をとらなかった。

セクはコンとジェンネをつなぐ交易路の確保のために弟のファマガンを北方へ遠征におくり、これは 1730 年代ごろと考えられている(Saul 1998: 548)。口頭伝承では、ファマガンは 8 人の戦争長とともに遠征をおこなったとされ、1 人を除いて、すべて周辺地域の民族の長であった。このなかにボボ・ジュラソのサヌも含まれていた(ibid.: 548)。この「征服」については多くの異なる口頭伝承が残されており、実態はよくわかっていない。確かなことは、コンのワタラはトゥヌマやシアのボボの権威や軍事力を保持させて、同盟関係を結んでいたということである。結果的にみれば、生じていたことは、ボボ・ジュラソでは、コンのジュラの移住であった。

コンから移住してきた戦士のワタラは 5 つのリネージを構成しているが(図 8-4)、実質的には 3 つのグループに分かれていたようである。セク・ワタラの息子のジャンギナ(Janguina)を起源とするジャンギナジョ(Janguinajo)とファマガン・ワタラの 3 人の息子たちを起源とする 3 つのリネージとはライバル関係にあった。後者はシッシラ(Sissira)を中心にして、シアに隣接したコンブグ(Kongbougou)に居住し(Quimby 1972: 34)、前者のジャン

ギナジョはボボ・ジュラソから東に 20km ほどのコテドゥグ(Kotedougou)に居住していた(ibid.: 33)。セク・ワタラと奴隷の妻とのあいだの息子であるバンバ(Bamba)を起源とするバンバジョ(Bambajo)は、ジャンギナジョとファマガンの息子たちのリネージとの仲介と調停を果たすような位置にあったとされる(ibid.: 36-37)。

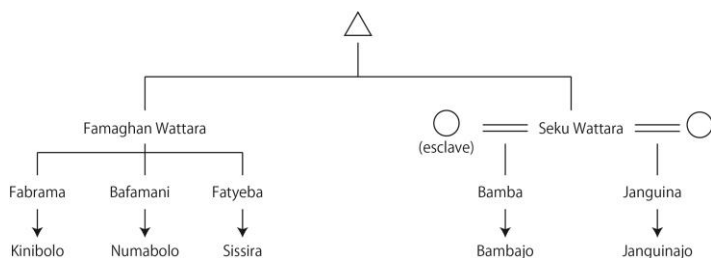


図 8-4. コンのワタラのリネージ(Quimby 1972: 15-16 の記述を基に筆者作成、↓の先がリネージの名称となっている)

コンのジュラでは戦士と聖職者・学者が明瞭に分かれおり、基本的には特定の戦士のリネージに対して専属の聖職者・学者のリネージが恒常的な関係をもつことが知られている(Quimby 1972; Green 1986)。これらのマラブーは戦士の一族の人生儀礼などで祝福や祈禱を捧げ、戦士の一族から定期的に贈与を受けとっていた(Quimby 1972: 50-51)。具体的に、コンブグとコテドゥグに移住してきたコンのジュラのマラブーは、サノゴ、トゥレ、ジャネ、フォファナ、クリバリである(ibid.: 13)。このうち、サノゴはヌマボロ、キニボロ、バンバジョのリネージ、トゥレはシッシラ、ジャネはジャンギナジョに仕えるマラブーであった(ibid.: 43-44)。フォファナとクリバリは特定のリネージには拘束されず、ワタラ全体に仕えるものとされた(ibid.: 44)。これらのマラブーたちがいつ頃やってきたのか詳細はわかっていない。しかし、ワタラの最初の移住に従ってやってきたマラブーはサノゴだけであること(ibid.: 46)、コテドゥグのジャネはすでにコテドゥグに定住していたワタラ(のジャンキジョ)に招かれて来たこと<sup>6</sup>から、段階的にマラブーが増えていったと想定される。

また、ワタラとは無関係にこの時期にマラブーが移住し、マラブーの小さな核となったのが、シデラドゥグである。シデラドゥグはもともとティエフォ<sup>7</sup>(Tiefo)の村であったが、

<sup>6</sup> 2013/12/27 Kotedougou, Alfa Mousa Baafaga Diane(コテドゥグのモスクのイマーム)。

<sup>7</sup> セヌフォのサブ・グループと一般的には分類されている。コートディヴォワール北部、マリ南部、ブルキナファソ南西部に居住する民族集団。

コンからジュラのマラブーのトラオレが住み着いたのちに、同じくコンのジュラのマラブーのトゥレをトラオレがジャティギ<sup>8</sup>(*jatigi*)となり住まわせたとされている<sup>9</sup>。このシデラドゥグのトゥレは、バンジェールとコンブグで面会し、フランス軍によって征服された当時の「女王」とされたギンビ・ワタラ(*Guimbe Wattara*)の夫アルファ・ムーサ・トゥレ(*Alfa Mousa Touré*)を輩出している<sup>10</sup>。植民地化以前に、ムーサ・トゥレは妻のギンビにシデラドゥグにモスクを建てることを要請し、ギンビはこれに応じて遠方より良質の太い木を集めさせたという伝承が残されている<sup>11</sup>。バンジェールは誤認していたのだが、ギンビはワタラの「女王」ではなく、ワタラのリネージのシッシラを束ねる長であった(*Quimby 1972: 34-35*)。クインビー(*Quimby 1972*)の研究では明言されていないが、シッシラに仕えたマラブーのトゥレはシデラドゥグのトゥレであった可能性が高い<sup>12</sup>。つまり、シデラドゥグはボボ・ジュラソの征服をおこなった軍隊に付随してマラブーたちとは異なる発展を遂げた。独自にコンからやってきたマラブーがシデラドゥグに住み着き、マラブーの拠点を形成した。19世紀末には、その名声の高さからシデラドゥグのマラブーがボボ・ジュラソのコンのワタラの庇護のもとに入っていた。

ワタラがパトロンとなることで数多くのマラブーがボボ・ジュラソとその周辺地域に呼び寄せられ、結び付けられることになった。コンのジュラにおける戦士とマラブーとの明瞭な区分と相互補完的な関係は、18世紀以前のボボとボボ・ジュラとのあいだの関係に類似したものであったが、より洗練され規模の大きなものであったことが想定される。分化したリネージごとにいわばお抱えのマラブーをもつといったことは、ボボには見られなかった。さらに、こうしたマラブーも単一のリネージではなく、複数のクランのマラブーが一定の層として存在していたことも、それ以前にはなかったことである。

---

<sup>8</sup> マンデ系の言語に共通にみられる概念。外来者を受け入れる際の身元引受人をさす。

<sup>9</sup> 2014/01/23 *Sideradougou, Baramousa Danyogo*(シデラドゥグの土地の主); 2014/01/23 *Sideradougou, Bagaoussou Traoré*(シデラドゥグのトラオレのモスクのイマーム); 2014/01/23 *Sideradougou, Ahmad Toure* (シデラドゥグのトゥレのモスクのイマーム)。

<sup>10</sup> 2014/01/23 *Sideradougou, Ahmad Toure* (シデラドゥグのトゥレのモスクのイマーム)。

<sup>11</sup> 2014/01/23 *Sideradougou, Ahmad Toure* (シデラドゥグのトゥレのモスクのイマーム)。

<sup>12</sup> ギンビ・ワタラの夫がシデラドゥグのアルファ・ムーサ・トゥレであったことに加え、1904年の行政文書によれば、「アルハジ・ムーサ・トゥレ(*Al-Hajj Moussa Toure*)」は「シダリドゥグ(*Sidaridougou*)」で戦士貴族と特別な互惠関係を結んでいることが記述されている(*Traoré 2012: 241*)。また、ダールサラミの大モスクのイマームは、シデラドゥグのトゥレが「ジャンギナジョのマラブー」であったとしている(2014/01/22 *Darsalamy, al-Hadj Baforemori Sanogo*(ダールサラミのモスクのイマームのオジ))。

### 8-1-3. 19 世紀後半のイスラームの変容——サノゴとサヌ

19 世紀後半になると、コンのワタラとは距離をもつマラブーたちが現われる。その源泉となったのは、ワタラとともにボボ・ジュラソに到来したサノゴの系譜であった。コン出身のサノゴの口頭伝承はウィルクス(Wilks 1968)とトラオレ(Traoré 1986)によっても収集され、サイドとイブラヒムという兄弟がやってきたことは共通し、これは現在でも語られている<sup>13</sup>。ただし、この物語では不可解なことにワタラが登場しておらず、やや混乱している。

ボボ・ジュラソに到来したサイドとイブラヒムの父と祖父はともに高名なマラブーであった。ワタラのコン王国樹立後に、コンのイスラームを刷新させた人物が、アル・アッバス・サノゴ(Al-'Abbas Saghanogo)であり(Wilks 1968: 173; Kodjo 2004: 228)、サイドとイブラヒムの祖父にあたる。アッバスとその息子のムスタファはジュラのなかで有力な学術伝統を形成していった。1950 年代にウィルクスが調査した、コン、ワ、ウェンチ(Wenchi)、ロロペニ(Loropeni)、ダールサラミ(Darsalamy)、ボンドゥグ(Bonduku)、キンタンポ(Kintampo)、ボロモ(Boromo)、ワッハーブ(Ouahabou)、クマシ(Kumasi)などのマラブーたちから収集した 46 のイスナード(教授免状)のうち、34 のイスナードがムスタファとアッバスの系譜に属している(Wilks 1968: 173, appendix 1)。つまり、現在のブルキナ南部、コートディヴォワール北部、ガーナ北部の主要なムスリムの町のマラブーたちの多くは、コンを中心に 18 世紀末から 19 世紀初頭に隆盛したサノゴの学術伝統(本稿 3 章 2 節)を引き継いでいたといえる。そして、その学術伝統に直接連なるサノゴが 19 世紀前半にはコンブグに到来していた。

19 世紀半ばごろに、サイドの息子であるサラバがコンブグを抜けて、ボボ・ジュラソから南西に 15km ほどにダールサラミと名付けた村を設立する<sup>14</sup>。その起源についてダールサラミで語られた伝承<sup>15</sup>をまとめると、以下のようなものである。

ボボ・ジュラの家族がその子供をサラバに預け、クルアーンを学ばせていた。しかし、

---

<sup>13</sup> 2013/12/14 Bobo-Dioulasso, al-Haji Banourou Sanogo(コンブグ街区のサノゴのモスクのイマームの弟)。ただし、サイド・サノゴについての現状の情報は混乱している。19 世紀後半にジャに留学したサキディ・サヌの友人、ないしは師匠もサイド・サノゴとされて、混同されている。ウェルスマンは両者は異なり、後者はセイドゥ・バベマ・サノゴであるとしている(Werthmann 2008: 131)。ここではウェルスマンの解釈に従う。

<sup>14</sup> Traoré 1984: 79-80; Werthmann 2008: 132; 2014/01/22 Darsalamy, al-Hadj Baforemori Sanogo(ダールサラミのモスクのイマームのオジ)。

<sup>15</sup> 2014/01/22 Darsalamy, al-Hadj Baforemori Sanogo(ダールサラミのモスクのイマームのオジ)。



その子供が非ムスリム的な慣行のある祭りに参加したため、サラバはその子供をひっぱたいて叱った。それを知ったボボ・ジュラの両親がサラバを咎めると、サラバはボボ・ジュラと隣り合わせで暮らすことに嫌気がさし、新しく村をつくってそこに移り住むことにした。これがダールサラミの起源である。重要なポイントは、この時期になるとボボ・ジュラのなかからクルアーン学校に通う者があらわれていること、非ムスリム的な慣行への忌避がみられるようになっていたことである。この段階において、18世紀以前にみられた、在来の宗教とイスラームとの棲み分けと相互依存の関係が変容していつていることがわかる。

ダールサラミの設立から20年から30年ほどで、ボボ・ジュラソのイスラームのあり方が大きく変わる。その転換点は、1893年から1897年のあいだに建てられたと推定されるボボ・ジュラソの大モスクの建設である<sup>16</sup>。この大モスクの建設を主導した人物がサキディ・サヌ(Sakidi Sanou)である。伝承は細部で異なっているが、大まかにまとめると以下のようになる<sup>17</sup>。サキディの父であるキエトレ・サヌはサノゴから教えを受け、イスラームに改宗した。しかし、キエトレの妻はサキディの出産直後に死去し、サキディはサイード・バベマ・サノゴ(Said Babema Sanogo)のもとで育てられ、クルアーンを学んだ。サキディは現在のマリのジャに留学し、アブバカル・カラベンタ(Aboubacar Karabenta)のもとで修学し、ボボ・ジュラソに戻り、人びとを啓発して大モスクを建造することにした。

ジャで調査を行った坂井によれば、19世紀初頭にジャのイスラームを刷新したアルファ・ボアリ・カラベンタ(Alfa Boari Karabenta)の息子のアルファ・マーマ・カラベンタ(Alfa Mama Karabenta)にサキディは師事したようである(坂井 2003: 167-168)。ジャはもともと呪術的なイスラームが盛んな街であり、イスラームの知識は呪術と結びつき秘匿され特定のマラブーに独占されていた。アルファ・ボアリ・カラベンタは、このような状況を改革し、呪術から法学教育、アッラーの超越性と唯一性を強調するタウヒードの神学、カーディリーヤ<sup>18</sup>による組織をもつスーフィズムの普及をおこない、マルカの農民やボゾの漁民た

---

<sup>16</sup> ソールによれば、ボボ・ジュラソを実際に訪れた、バンジェール、クロザがモスクに言及していないことから、1893年以後にモスクが建てられたとみている(Saul 2011: 47)。1897年にフランス軍がボボ・ジュラソを征服したが、この時にはすでに大モスクは存在していた。

<sup>17</sup> Traoré 1986; A. Traoré 1993; 2013/12/10 Bobo-Dioulasso, Siaka Sanou(ボボ・ジュラソの大モスクのイマーム)。

<sup>18</sup> カーディリーヤは12世紀のバグダードのイスラーム神秘主義者(スーフィー)であり、ハンバル学派のアブドゥル・カーディル・ギーラーニーを開祖とするイスラーム神秘主義教団で、15世紀以降、北アフリカ、西アフリカ、中東、インドなどに広まった。宗教的立場は概して穏健で平和的であり、正統的イスラームから逸脱することは少なかった(坂井 2003: 500)。

ちにイスラームを広げていったと考えられている(ibid.: chp. 10)。

なぜサキディがジャで修学したのかについては口頭伝承では明示的に語られていない。しかし、アルファ・ボアリ・カラベンタの改革の志向性からは、その理由が推測されるだろう。アルファ・ボワリはもともとボゾの左官であり、学者の出自ではなかった(ibid.: 375, 403)。ジャでは、王・戦士とマラブーといった中核的な集団が町の中心部に居住していたのに対して、農民・漁民・職人が周辺部に居住区を割り当てられており、アルファ・ボワリもまた周辺の住民の階層に属する人びとであった(ibid.: 403)。アルファ・ボワリの改革はこうした周辺の住民へのイスラームの教育をおこなったことであり、彼の学生には既存のマラブーの有力なネーグ出身者が一人もおらず、それ以前はムスリムの社会的なカテゴリーに入っていなかったボゾの出身者や外来者を積極的に受け入れていた(ibid.: 384-385, 463)。もともと、ムスリムの社会的なカテゴリーの出身者ではなく、ジャに留学してきたサキディ・サヌは、まさにこうした人びとの一人であった。こうしたことを踏まえると、サキディ・サヌのジャへの留学は、アルファ・ボワリ・カラベンタの改革の志向性ゆえのものであったと理解することができるだろう。

他方で、興味深い点は、アルファ・ボアリについてのジャの口頭伝承では、スーフィズムの導入が大きく焦点化されているのに対して、サキディについての口頭伝承ではスーフィズムについてはまったく語られていないことである。むしろ、超自然的な力があるとされる藪を切り開いてモスクを建てたことが強調されている<sup>19</sup>。言い換えれば、サキディの登場はローカルな社会的文脈に置いては、既存の在来宗教を凌駕する超自然的な力をもたらした者としての位置づけの方がスーフィズムの導入よりも重要であったといえる。現在では、サキディはボボ・ジュラソに広くイスラームをもたらした人物として、ボボ・ジュラソでは一般的に認知されており、実際、ボボやボボ・ジュラのイスラームへの改宗が大きく生じてきたのもサキディ以降と考えられる(Traoré1986: 117)。

もっとも、サキディは当初よりボボに広く受け入れられていたわけではないようである。このことは口頭伝承からは明らかではないが、断片的な事実を指摘しておこう。まず、1888年にバンジェールがボボ・ジュラソを訪れた際に、彼は「イマームの村」について、「イマームと幾人かのサガノゴの村」と短く言及しており、バンジェールの地図では「イマーム

---

<sup>19</sup> 2013/12/14 Bobo-Dioulasso, al-Haji Banourou Sanogo(コンブグ街区のサノゴのモスクのイマームの弟).; 2013/12/16 Bobo-Dioulasso, Mama Sanou(ムスリム協会ボボ・ジュラソ支部会長).

の村」はシアの北側に位置している(Binger 1892 t. I: 569、図 8-1)。現在では、サキディの子孫はかつてのシアのあった地区に居住しているが、かつては非ムスリムの多く住むシアから距離をとって居住していたのかもしれない。もう一つ興味深い点は、大モスクが建てられた位置である。図 8-3 を比較すると読みとれるように、大モスクはシアとトゥヌマのあいだ、ないしはシアの外部に建てられたことである。これは藪を切り開いた逸話と合致する点であるが、大モスクをシアの村のなかに建てることは許されなかったことを暗に示している。

ともあれ、サキディ・サヌと彼による大モスク建設がボボ・ジュラソのイスラームにとって大きな画期であったことは間違いない。これはヴォルタ地域に広範に普及していたサノゴの学術伝統を直接継承したサイドとイブラヒムの到来によって準備されたものであり、在来の宗教との併存を嫌ったダールサラミの創設もサキディによる変革の予兆であった。そして、非ムスリムの出自であるボボ・ジュラのサキディがボボ・ジュラソを代表するマラブーとして登場することで、ムスリムが特定の家柄に限定されるような状況が大きく変化したと広く認知されるようになった。現在のシカソ・シラ街区の最初のモスク、通称ヒナマサ・モスク(Mosque d'Hinamasa)はボボ・ジュラのサヌによって建てられている。伝承ではこのモスクはシアに居住していたボボ・ジュラの農民ラッシナ・サヌ(Lassina Sanou)、通称ヒナマサ(Hinamasa)がシカソ・シラへと居を移して、植民地以前に建てたとされている<sup>20</sup>。現在ではヒナマサがどのような人物であったのかもよくわからなくなっているが、サキディ以降にはボボ・ジュラのなかからこうした改宗者が出てきていったことの一つの傍証であるとみなせるだろう。

#### 8-1-4. 20 世紀初頭の植民地としての拡張と新たなムスリム移住民

ボボ・ジュラソはバンジェールの報告などによって交易拠点とみなされており、1898 年から 1904 年の期間、セネガンビア・ニジェールの第二軍管区の管区拠点に位置づけられている(Fourchard 2001: 49)。後年のボボ・ジュラソの行政報告によれば、1904 年から 1911 年のあいだに、ボルドーの商社(Maurel et Prom、Dèves et Chaumet、Peyrissac など)の支店がボボ・ジュラソに設立された(ibid.: 49)。

1900 年から 1920 年ほどのあいだに移住してきた商人たちは三つの集団に分類される(Fourchard 2001: 160)。まず、ヨーロッパ人の商社で働いていたセネガル人たちが支社の

<sup>20</sup> 2013/12/19 Bobo-Dioulasso, Sanou Sidiki(シカソシラ街区の最初のモスクのイマーム)。

設立とともに来訪した(ibid.: 160)。1900 年から 1914 年までの期間は彼らが市場周辺の土地所有者であったが、1920 年代以降、これらの土地を手放している(Fourchard 2003: 446)。つぎの集団はギニアのカンカン出身者たちである(Fourchard 2001: 160)。ボボ・ジュラソに最初にやってきたギニアのマンデの商人とされるカンカン・ムーサ・ジャキテ——のちに、UV に投票したことでギニア出身のマンデの商人たちから村八分にされる人物(本稿 7 章 1 節)——は 1908 年に住み着くようになったという(ibid.: 160)。彼らはコーラの実と家畜の地域的な交易に加えて、ゴムの取引にも参与していた(ibid.: 160)。最後の集団がバンジャガラやセグー出身のフルベたちであった。彼らもまた、コーラの実、家畜、岩塩といった地域的な交易に加えて、オート・セネガル・ニジェールの拠点であったバマコの商社への生産物の売却をおこなっていた(ibid.: 161)。

このようにボボ・ジュラソは植民地都市として発展すると同時に、それに伴って新たに移住してきたセネガル、ギニア、マリ出身のムスリムたちを多く受け入れていくことになる。のちにムスリム文化連合を結成する主要な人物たちはこの時期の移住者たちである。そのなかのマラブーとして最も重要な役割を果たした人物が、ジェンネ出身のボゾであるアルファ・モイ・ジェネポ(Alfa Moï Diénépo)である。

彼は 1917 年にボボ・ジュラソに移住してきたとされる(Fourchand 2001: 163)。1932 年に作成されたアルファ・モイ・ジェネポの調書によれば、彼はジェンネでオマル・ソンフォ(Oumar Sonfo)に学んだ<sup>21</sup>。オマル・ソンフォは第一次世界大戦以前において、カーディリーヤのジェンネで最も高名なマラブーの一人とされる<sup>22</sup>(Marty 1920: 141; Monteil 1971[1932]: 155)。1920 年に出版されたマルティによる仏領スーダンのイスラームについての著作のなかでは、ジェンネのマラブーとして挙げられているなかにジェネポの名前を見つけることはできなかったが、ボゾの有力者のなかに改宗者がすでにいたことについては言及されている(Marty 1920: 147)。つまり、ジェネポは特に有力なマラブーの家系ではなかったが、他方でボゾのムスリムもそれほど珍しくはなかったものと考えられる。

興味深いことに、ジェネポがボボ・ジュラソに来たときに、ジャティギとなって自宅に住ませたのはカッサンバ・ジャビであった<sup>23</sup>。その後に、カッサンバ・ジャビは適切な土地

---

<sup>21</sup> ANCI 5EE69 Fiches des renseignements sur marabouts du cercle de Bobo-Dioulasso.

<sup>22</sup> ちなみに、オマル・ソンフォはカーディリーヤの立場からアルハジ・オマルに敵対しており、ジェンネのアルハジ・オマルの建てたモスクに代わる現在の大モスクを建設するように進めた主要な人物の一人でもあった(Bourgeois 1987: 59)。

<sup>23</sup> 2013/12/17 Bobo-Dioulasso, al-Hadj Abraham Diénépo(ハムダライ街区の大モスクのイマ

をみつくりってジェネポに与えたという。この土地に現在まで存続しているジェネポのハムダライ街区の屋敷が建てられることになった。ジェネポが訪れたとき、カッサンバ・ジャビはトゥヌマに居住していたが、1929年の区画整理を機に非ムスリムの多かったトゥヌマから現在のコーコ街区へ移住している<sup>24</sup>。また、カッサンバ・ジャビはアルフォ・モイ・ジェネポのもとに子供を修学させていたようである。クルアーン学校開設のために申請された1956年の文書には、コーコ街区でクルアーン学校を開いた「アルファモイ・ガッサマ」(Alfamoï Gassama)——カッサンバの誤記である——がアルファ・モイ・ジェネポのもとで学んだことが記載されている<sup>25</sup>。さらに、ボボ・ジュラソのムスリム文化連合の紛争委員会の構成員にもまた、「バカリ・カッサンバ」の名前をみつけることができる<sup>26</sup>。このようなカッサンバ・ジャビとジェネポのつながりは、後に「外来者」と「土着民」とを対立的にみる見方に修正を与えるものである。

同時期に来訪した人物のなかで、もう一人の重要な人物がラッサナ・ジャキテである。彼は1880年生まれで、カイの人質学校を飛び級で1899年に卒業し、仏領ニジェール会社(la Compagnie du Niger Française)に勤務し、バマコとボボ・ジュラソの支社を行き来した後、自前で商売を始めるようになり、1926年にシカソ・シラ街区の土地を購入し、邸宅を建てている(Fourchard 2003: 459)。本稿7章1節で言及したように、ラッサナ・ジャキテはCEFA ボボ・ジュラソ支部の名誉会長となり、1946年にRDAが設立されると、ボボ・ジュラソ支部を創設し、ラッサナ・ジャキテの邸宅の中庭で会合がしばしば開かれるようになった(Fourchard 2001: 322)。のちに述べるように、ラッサナ・ジャキテはムスリム文化連合の初代会長でもあり、彼の邸宅でムスリム文化連合の支部設立の話題も議論されていた(マガネ 2016: 90)。

このように、1900年代以降、植民地経済の興隆とともに、ボボ・ジュラソには、セネガル、ギニア、仏領スーダン出身の商人、商社勤め、植民地官吏、教師、マラブーが到来していた。彼らはハムダライ街区を中心に、コーコ街区、シカソ・シラ街区に居住し、独自のムスリムのコミュニティを各々形成していたようである。それぞれの街区には、「外来者」

---

ーム)。

<sup>24</sup> 2013/12/16 Bobo-Dioulasso, al-Hadj Bakai Kassamba-Diabi(コーコ街区のカッサンバ・ジャビの第二モスクのイマーム); Fourchand 2001: 164

<sup>25</sup> CNABF 28V30 Correspondance relative à l'ouverture d'écoles coraniques. Cercle de Bobo-Dioulasso (1952-1958).

<sup>26</sup> Procès-verbal de l'assemblée générale constitutive de l'union culturelle musulmane, section régionale de Bobo-Dioulasso, le 12 janvier 1958. マガネ 2016: 62-63 収録。

や「外来者」と関係のあったムスリムたちによって、小規模のモスクが建てられた。いずれも正確な年代は不明であるが、1940 年以前に、シカソ・シラ街区にはギニア出身のマラブーが<sup>27</sup>、コーコ街区では前述のアルファ・モイ・ジェネボに学んだバカリ・カッサンバ・ジャビがそれぞれモスクを建設しており<sup>28</sup>、ハムダライ街区には、やはり前述のギニア出身の豪商のムフタール・バの邸宅の中庭にモスクが設置されている<sup>29</sup>。

#### 8-1-5. ボボ・ジュラソにおけるイスラームの展開の特徴

ボボ・ジュラソにおけるイスラームの展開の最大の特徴は、各時代ごとに他の地域から断続的にマラブーが到来してきたことである。大まかに区分すれば、(1)コンによる征服以前に到来したボボ・ジュラのカッサンバ・ジャビとフォファナ、(2)コンの征服とともに到来したコンのジュラのサノゴ、トゥレ、ジャネ、フォファナ、クリバリ、(3)コンの征服以後にボボ・ジュラソに到来し、18 世紀末から 19 世紀初頭にコン、ワなどで生じていたイスラームの学術の刷新運動(本稿 3 章 2 節)を伝えたサノゴの兄弟、(4)植民地経済の興隆とともにボボ・ジュラソに到来したセネガル、ギニア、仏領スーダンのムスリムの 4 つの層にわけられるだろう。

他方で、18 世紀以降、(2)のコンの征服以後に生じた変化は重なり合いながら、並行的に進行していた。コンのジュラの核の形成、ボボ・ジュラの改宗(サキディ・サヌの登場)、他の植民地(セネガル、ギニア、仏領スーダン)のムスリムの移住は、それぞれボボ・ジュラソとその周辺のイスラームの状況を 20 世紀初頭の段階でそれぞれ変容させていた。表 8-1 は植民地行政がボボ・ジュラソ管区に在住する 60 名のマラブー、ないしはムスリムの有力者に対してインタビューを実施し、作成された調書からその民族構成をまとめたものである。ボボ・ジュラソ管区全体では、ジュラがマラブーの 6 割を占めている。ここでジュラとされているのはすべてコン出身のジュラであったため、コンのジュラがいかに隆盛していたかが理解されるだろう。ついでボボ・ジュラが 2 割となっている。サキディ・サヌの大モスク建立に象徴される、非ムスリムの社会的カテゴリーの出身者の改宗が相当程度進んでいたことが理解されるだろう。他の植民地の出身者はフルベ(オート・ヴォルタ北西部(ドク

<sup>27</sup> 2013/12/17 Bobo-Dioulasso, Moustafa Traoré(シカソ・シラ街区のイマーム)。

<sup>28</sup> 2013/12/14 Bobo-Dioulasso, Al-Hadj Fouseni Kassamba-Diabi(コーコ街区の最も古いモスクのイマームの兄)。

<sup>29</sup> 2013/12/17 Bobo-Dioulasso, al-Hadj Abraham Diénépo(ハムダライ街区の大モスクのイマーム)。

イ)?1名、セネガル1名)、トゥクロール(仏領スーダン1名)、ボゾ(仏領スーダン1名)の4名に限定されている。

また、これまで十分に触れることができなかったが、ダフィンも華々しいエピソードに欠けるものの重要な役割を果たしていることが、この表 8-1 から浮かび上がってくる。さきにふれたように、バンジェールの記述には、「コンのジュラとダフィンの村」、「ハウサとソニンケの村」があったが、「ハウサとソニンケ」は 1917 年から 1932 年の植民地行政の調書ではまったくなくなったおり、かつ聞き取りでも著名なマラブーをみつけだすこともできなかった。この当時、逗留していたハウサは別な地域に移住してしまったと解釈するのが妥当である。ダフィンもまた、特定の街区に集住するといったこともなかったが、聞き取りからは植民地期に限定されず、つねに一定程度のダフィンの流入があったことが窺われた<sup>30</sup>。

ボボ・ジュラソのムスリムの漸次的な増加は、コンのジュラのマラブーの核の形成、既存のマラブーのリネージに限定されないボボ・ジュラの改宗、植民地経済の進展に伴う他領域のムスリムの移住、地味ではあるもののムスリムの多かったダフィンからの恒常的な移住によって進行していた、とみることができる。

民族	人数	割合	民族	人数	割合
ジュラ(Dyula)	38	63.3%	ジュラ(Dyula)	8	38.1%
ボボ・ジュラ(Bobo-Dyula)	14	23.3%	ボボ・ジュラ(Bobo-Dyula)	7	33.3%
ダフィン(Marka/Dafing)	4	6.7%	ダフィン(Marka/Dafing)	2	9.5%
フルベ(Peul)	2	3.3%	フルベ(Peul)	2	9.5%
トゥクロール(Toucouleur)	1	1.7%	トゥクロール(Toucouleur)	1	4.8%
ボゾ(Bozo)	1	1.7%	ボゾ(Bozo)	1	4.8%
合計(total)	60		合計(total)	21	

表 8-1. 1917 年から 1932 年までのボボ・ジュラソの管区(左)と都市(右)のマラブーの民族構成<sup>31</sup>

植民地統治以前から、既存のイスラームを刷新しようとする動きが生じていたことは強

<sup>30</sup> たとえば、ファラカン街区の最も古いモスクは植民地期に建てられたが、この建立を主導したのはダフィンであった(2013/12/24 Bobo-Dioulasso, Baba Bebo Soware,. 2013/12/24 Bobo-Dioulasso, Adama Sanou, (それぞれファラカン街区の異なるモスクのイマーム))。また、サキディ・サヌによって建てられたボボ・ジュラソの大モスクの初代イマームもまた、ダフィンであった(2013/12/10 Bobo-Dioulasso, Siaka Sanou(ボボ・ジュラソの大モスクのイマーム))。

<sup>31</sup> ANCI 5EE69 Fiches des renseignements sur marabouts du cercle de Bobo-Dioulasso.

調しなければならない点である。19 世紀前半に到来したサノゴのサイドとイブラヒムの兄弟の子孫と彼らから学んだサキディ・サヌは、それ以前にはみられないムスリムのあり方を示している。

19 世紀以前にボボ・ジュラソに到来したムスリムは特定の戦士ないしは首長のリネージへのサービスの提供と保護の互惠関係にあり、宗教的なサービスを提供するマラブーを職能とするいわば世襲の職能集団であった。しかし、サイドの息子のサラバ・サノゴは、伝統宗教の非イスラーム的慣行を拒絶し、ボボ・ジュラソのコンブグ街区を離れて、ムスリムのみによって構成されるダールサラミを創設している。

サキディ・サヌの父はサノゴの兄弟の子孫の教えを受けてムスリムとなっているが、もともとマラブーのリネージの出身でないボボ・ジュラのサヌがムスリムとなったことは、実質的にムスリムがマラブーのリネージに限定されていたそれ以前のムスリムの社会的カテゴリーを変更させるものであったといつてよいだろう。こうしたマラブーのリネージではないムスリムへの改宗者のいわば第二世代にあたるサキディ・サヌがジャに留学し、ボボ・ジュラソの最初の大モスクを建設したことはその意味で象徴的な出来事であった。

すでに述べたように、サキディの学んだジャのアルファ・マーマ・カラベンタの父のアルファ・ボアリ・カラベンタは、ジャのイスラームの革新を行なった重要なマラブーであり、それ以前はイスラームの教育の対象とならなかった、マルカの農民やボゾの漁民たちにイスラームを広げていったとされる(坂井 2003: chp. 10)。マラブーのリネージの出身でないサキディがカラベンタに師事したこともまた、こうしたカラベンタの宗教実践のあり方に共鳴したとも考えられるだろう。少なくとも、サキディが西アフリカ内陸のこうしたイスラームの変容——ムスリムが特定の世襲のマラブーのリネージに限定されず、従来はムスリムではないとされた社会的カテゴリーの人びとがムスリムになるという変容——の流れのなかに位置づけられることは確かであろう。つまり、サキディは、ムスリムの社会的カテゴリーの変化を体現する、新しいムスリムであった。このような人物によって建設されたボボ・ジュラソの大モスクは新しいムスリムの理念を体現するものであったといえるだろう。

植民地統治以後にボボ・ジュラソに到来したアルファ・モイ・ジェネボも、広い意味では、こうした 19 世紀以降の西アフリカ内陸におけるイスラームの刷新の流れのなかに位置づけられる。ジェネボはもともと漁民のボゾであり、伝統的には、ムスリムとは位置づけられない民族の出身であった。すでに述べたように、20 世紀初頭のジェンネにはボゾの有



力者のなかに改宗者がすでにいたが(Marty 1920: 147)、1940年代半ばにおいてもジェンネも含むニジェール川内陸デルタでは一般的にボゾは非ムスリムであった(Daget 1949: 73)。あるいは少なくとも、外部の研究者の眼にはそのように映っていた。また、ジャやジェンネの口頭伝承では、漁民のイスラームへの改宗は19世紀後半のジハード国家のトゥクロールの支配を起源としており、ボゾの全体的な改宗は20世紀半ば以降と推測される(竹沢1989: 889)。こうしたことから、アルファ・モイ・ジェネポも、既存のムスリムの社会的カテゴリーからはみ出る新たなムスリムであったといっていよう。

のちにアルファ・モイ・ジェネポの息子たちは父のクルアーン学校を引き継ぎ、発展させていながら、イスラーム改革主義運動を主導する代表的なマラブーとなる。そのような意味において、ボボ・ジュラソにおける第二次世界大戦以後のイスラーム改革主義運動は植民地統治以前にすでに生じていたイスラームの刷新の大きな流れの延長線上に位置している。

また、アルファ・モイ・ジェネポのジャティギとなり、ボボ・ジュラソに受け入れたのが、18世紀以前からボボ・ジュラソに定住していたマラブーのリネージのカッサンバ・ジャビであったことも重要な点である。いわば最も古い世襲のマラブーであったカッサンバ・ジャビも、こうした新しいムスリムたちを好意的に受け入れ、自らの息子をアルファ・モイ・ジェネポのもとで学ばせている。いわゆる「伝統的なマラブー」のなかにも、イスラームの刷新の流れを受けて自ら変容を遂げていった者たちもいたのである。

## 8-2. ボボ・ジュラソ事件と植民地行政の介入による意図せざる結果

前節でまとめたように、ボボ・ジュラソは他の地域からのムスリムが断続的に来訪し、定着することで、徐々に発展を遂げてきた。そうした発展の経過では、ムスリム間の大きなコンフリクトは——少なくとも、口頭伝承や行政文書では語られていないという範囲では——生じていなかった。しかし、1948年頃になると、「土着民」と「外来者」のムスリムとのあいだにコンフリクトが生じるようになる。すでに触れたように、このことの遠因は1941年のいわゆるボボ・ジュラソ事件にあった。そこで本節ではボボ・ジュラソ事件の背景と経過、植民地行政による捜査と処罰、それらがもたらしたボボ・ジュラソのイスラームの変容について述べる<sup>32</sup>。

---

<sup>32</sup> 本節の内容は、中尾(2016b)に一部加筆・修正を加えたものである。なお、ボボ・ジュラソ事件の先行研究とその問題点については、中尾(2016b)を参照。

### 8-2-1. ボボ・ジュラソ事件と事件までの経緯

1941 年 8 月 3 日曜日 23 時頃、仏領西アフリカの地方都市ボボ・ジュラソのホテルに山刀と投槍で武装した黒人の一団が襲撃、民間の白人五名を殺害、九名に重傷を負わせた。一団は同都市の兵営へ向かい、その途上で歩哨と交戦し、士官一名を殺害、二名を負傷させ、散り散りに逃亡した<sup>33</sup>。これが通称ボボ・ジュラソ事件である。

異例の事件であった。この地域では 1915 年から翌年にかけてのヴォルタ・バニ戦争(Saul and Royer 2001)以来、集団による計画的な白人への襲撃は 20 数年ぶりのことであった。本稿 4 章 3 節で述べたように、この戦争直後、植民地行政は、銃、刀、槍、弓などを徹底して接收し、それ以降、大規模な襲撃事件が生じていなかった。後に述べるように、このことは植民地行政に衝撃を与え、異例の捜査がなされることになったが、ここではまず、事件までの経過を明らかにしていこう。

この事件によって捕捉された人物たちの写真(図 8-5)をみると、一部に洋装の者がおり、多くが若い男であることがわかる。唯一背広を着ている人物は事件の主犯格の 1 人のドゥニ・ウレニである。1950 年代以前、ボボ・ジュラソでは洋装が一般的でなかったこと<sup>34</sup>を踏まえると、この写真は彼らの社会的位置づけを示唆している。

---

<sup>33</sup> ANOM 14Miom/2123 Téléggramme du Sûreté générale au Commandant du cercle Bobo-Dioulasso, le 7 août 1941.

<sup>34</sup> ボボ・ジュラソで高齢の仕立て屋への聞き取りを行った遠藤によれば、1946 年ごろから一般的にボボ・ジュラソの住民が衣服を身に着けるようになったとしている(遠藤 2013: 78-79)。



図 8-5. ボボ・ジュラソ事件によって捕捉された人物たちの写真<sup>35</sup>

事件に直接関与した人物の一覧が表 8-2 である。襲撃者たちの職業構成をみると、大半が植民地都市特有の新興の職業(自動車運転手、家具職人見習い<sup>36</sup>、仕立て屋見習い、作業員、荷車引き、軍人(二等軍曹))に就いていた。賃金労働者(あるいは、その予備軍)であった。

<sup>35</sup> ANOM 14Miom/2123 Photo sans title et sans date.ただし、この写真に続いて残されていた、被写体となった人物たちの人名の対応表によれば、1941 年 8 月 25 日、ボボ・ジュラソとある (ANOM 14Miom/2123 Tableau sans title, Bobo-Dioulasso, le 25 août 1941.)。

<sup>36</sup> ボボでは土着の職能集団は基本的にはグリオと鍛冶屋と土器づくりに限定されていた (Le Moal 1980: 124-125)。ここでの「家具職人見習い」は、ボボ・ジュラソの地方学校で職業訓練を受けていた学生を指している。

	人名	出身地	職業	民族
1	Diourabatie Kone	デドゥグ(C.I.)	マラブーの生徒	ジュラ
2	Djigui Traore	シカソ(S.F.)	管区の元衛兵	バンバラ
3	Denis Ouleni	トゥーガン(S.F.)	二等軍曹	サモ
4	Bakary Traore	デドゥグ(C.I.)	マラブーの生徒	ヌヌマ
5	Ousmane Traore	ボボ・ジュラソ(C.I.)	元レンガ工	セヌフォ
6	Moumouni Lalle	トゥーガン(S.F.)	家具職人見習い	サモ
7	Issiaka Zigue	トゥーガン(S.F.)	自動車運転手	サモ
8	Sidiki Drabo	トゥーガン(S.F.)	仕立て屋見習い	サモ
9	Kassoum Zerbo	トゥーガン(S.F.)	商人	サモ
10	Sangare Salim	トゥーガン(S.F.)	自動車運転手	トゥクロール
11	Issiaka Diarra	シカソ(S.F.)	家具職人見習い	バンバラ
12	Bourahima Sidibe	バンフォラ(C.I.)	家具職人見習い	バンバラ
13	Bakary Traore	ボボ・ジュラソ(C.I.)	仕立て屋	ミエンガ
14	Dirassa Konate	デドゥグ(C.I.)	作業員	ダフィン
16	Moussa Zango	クドゥグ(C.I.)	荷車引き	モシ
17	Bakary Minitou	ジェンネ？(S.F.)	農民	ボゾ
15	Daouda Cisse	ブンジャリ(C.I.)	商人	ジュラ
18	Makan Konate	不明	家具職人見習い	ジュラ
19	Hadi Tacouanou	不明	不明	不明
20	Ali Gourma	不明	不明	不明

\*C.I.は仏領コートディヴォワール、S.F.は仏領スーダンの略。

\*\*塗りつぶしは主犯格。

\*\*\*出身地はセルクル単位で記載。

なお、情報が食い違う場合は、日付の新しいものを優先させ、蔑称は改めた。

表 8-2. 事件に直接的に関与した人物の一覧<sup>37</sup>

襲撃者たちは、みな周辺の農村出身者であった(表 8-2, 図 8-6)。都市としてのボボ・ジュラソに植民地統治以前から居住していた集団の出身者がいなかったことは強調すべきことだろう<sup>38</sup>。

都市としてのボボ・ジュラソの人口とセルクル内のヨーロッパ人の人口の推移はほぼ一致し(図 8-7, 8-8)、1930 年代以降に増加している。これは 1934 年にアビジャンとボボ・ジュラソをつなぐ鉄道が完成したことに拠ると考えられる。ヨーロッパ人の人口は絶対数としては少なく、近隣の移住者がこの人口増加をもたらしたと推測される。襲撃者たちは、こうした 1930 年代以降の都市の発展に伴う、農村からの移住者であった。つまり、ボボ・

<sup>37</sup> ANOM 14Miom/2123 Tableau sans titre, le 25 août 1941., Lettre du directeur de police au gouverneur de la Côte d'Ivoire, le 10 août 1941., Télégramme du gouverneur général au Gouverneur de la Côte d'Ivoire, le 10 octobre 1941.を元に筆者作成。ただし、このほかに襲撃に参加した 11 名が逃走したとされ、彼らに関するデータは残されていない(ANOM 14Miom/2123 Télégramme du administrateur supérieur de la Haute Côte d'Ivoire au Haut-commissaire de l'Afrique française. Ouagadougou, le 10 octobre 1941.)。

<sup>38</sup> 都市としてのボボ・ジュラソの先住の民族はボボであり、18 世紀にコンから来たジュラであるが、彼らはこの集団に含まれていない。ボボ・ジュラソ管区の出身者は都市としてのボボ・ジュラソからやや離れた農村の出身である。

ジュラソの先住者は一人もおらず、周辺の農村出身の賃金労働者で主として構成された。彼らは植民地経済のなかで移動し、職を得た者たちである。

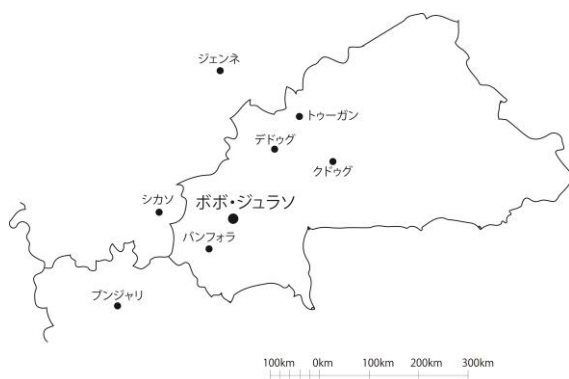


図 8-6. 事件に直接的に関与した人物の出身の管区を示した地図(なお、国境は現在のもの)

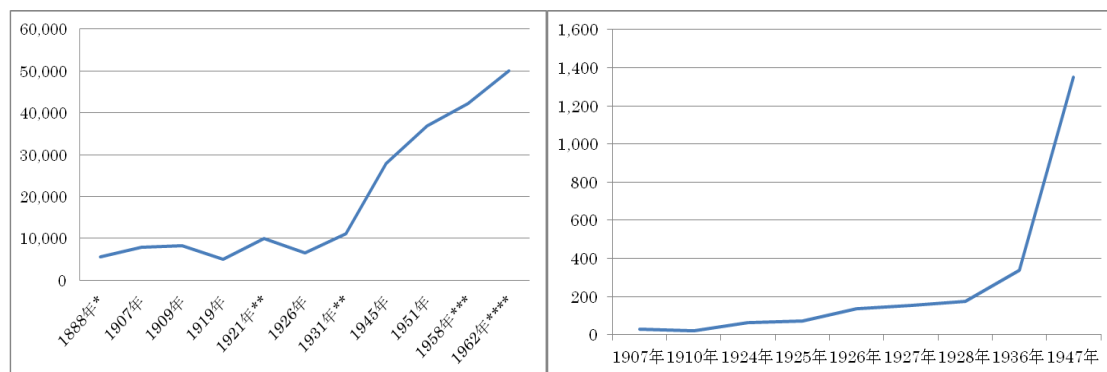


図 8-7. 都市としてのボボ・ジュラソの人口の推移(左)<sup>39</sup>

図 8-8. ボボ・ジュラソのセルクル内のヨーロッパ人人口の推移(右)<sup>40</sup>

<sup>39</sup> 出典は以下。CNABF 22V280 Rapport général sur les opérations de recensement de la ville de Bobo-Dioulasso. 1951. \*1888 年推計; Binger 1892: 370. \*\*Fourchard 2001: 50. \*\*\*AHCH s.c. Lettre du maire de la commune de Bobo-Dioulasso à l'administrateur en Chef Commandant le cercle de Bobo-Dioulasso. Bobo-Dioulasso, le 26 février 1958. \*\*\*\*CNABF 36V140 Projection démographique de la Haute-Volta. 1962.

<sup>40</sup> 出典は以下。1907 年統計: Gouvernement général de l'Afrique occidentale française 1907: 34, 49. 1910 年統計: Gouvernement général de l'Afrique occidentale française 1910: 69, 82. 1924 年統計: ANCI 55 EE 5(2) Rapport annuel du cercle de Bobo-Dioulasso, 1924. 1925 年統計: ANCI 55EE5(3) Rapport annuel du cercle de Bobo-Dioulasso, 1925. 1926-31 年統計: ANOM 1Affpol/1248 Rapport annuel politique et administratif année 1926-1931, Haute-Volta. 1935 年統計: ANOM 1Affpol/624 Rapport par l'inspecteur concernant le cercle de Bobo-Dioulasso 1935. 1936 年統計: ANOM 1Affpol/3449 Rapport politique annuel année 1936, Côte d'Ivoire. 1947 年統計: ANOM 14Miom/2200 Rapport politique du Haute-Volta, 1947. 1949 年統計: ANOM 14Miom/2200 Rapport politique du Haute-Volta, 1949.

襲撃者たちの中心的な役割を果たした一人はドゥニ・ウレニ(Denis Ouleni)である。彼の出生時の名前は、キサンギ・トエ(Kissangui Toe)という<sup>41</sup>。1901年、トゥーガン管区の村で、この地の先住の農耕民であるサモの「アニミスト」の父と「フルベの奴隷」の母とのあいだに生まれた。キサンギが4歳のとき、母は彼を連れてト村へ逃げ、他の男と再婚した。キサンギは再婚相手の夫の兄弟によって育てられ、ラキ(Laki)、すなわち、「養子」という意味の名前が与えられた。

1923年、ラキは居住していたト村の近くに開設されたばかりのトマの宣教団の学校<sup>42</sup>に通い始めた。この学校に4年通い、1927年にドゥニ・ウリ(Denis Wouli)という名で洗礼を受けた。ドゥニは22歳で初めて学校に行き、26歳で洗礼を受けたことになる。この年齢でのキリスト教への改宗はドゥニ本人の自覚的な選択であったと推察される。

1930年、同じ村で洗礼を受けた女性と結婚し、その数か月後、ドゥニ・ウレニの名で軍に入隊した。この期間、ドゥニはフランスで働き、1936年に許可を得て一時帰郷している。その後、第二次世界大戦ではフランスで後方支援に従事した。戦闘には直接参加しなかったものの兵営で敗北の混乱を目の当たりにし、敗戦後、ドゥニは帰還する。その途上、フェズのモスクでウォロフの下士官とともに初めて礼拝を行い、ムスリムとなった<sup>43</sup>。ドゥニは1941年の初めにト村に戻った。ムスリムとしての礼拝を行うドゥニに妻は驚愕し、彼の両親は激怒した。彼は村を出ることになった。ドゥニにとって従軍先でのフランスの敗北の経験は、キリスト教徒としてのアイデンティティ、それまでの家族との関係を根底から覆したと考えられる。

1941年3月15日、ドゥニはトゥーガン管区のある村で、村人から依頼を受けた<sup>44</sup>。聞けば、この村人の兄弟が「軍人として北アフリカにおり、彼からある手紙が送られてきた」という。それは、フランス語で書かれた「メディナの預言者の墓の近くに住む、イサカ・アフメドゥ(Issaka Ahmed)」からの「手紙」であった<sup>45</sup>。この人物は夢のなかで預言者に会

---

<sup>41</sup> ANOM 14Miom/2123 Lettre de l'Administrateur supérieur de H. C. I. au Gouverneur de C. I., le 16 septembre 1941.

<sup>42</sup> 1913年、トマに宣教団が駐在所を設け(Somé, 2004: 91)、宣教団の学校が建てられたのは1921年のことである(de Benoist 1987: 330)。トマの宣教団については本稿6章2節参照。

<sup>43</sup> 第二次世界大戦に従軍した仏領西アフリカ出身者がイスラームに改宗するという事例が一般的であったかどうかは分かっていない。コルゴ出身の退役兵109名へのインタビューと公文書館の史料をもとにした研究では、一般論として、軍隊内ではそれぞれの宗教に対しては立ち入らず、寛容であったことが指摘されている(Lawler 1992: 68)。

<sup>44</sup> ANOM 14Miom/2123 Lettre du Gouverneur général au Contre amiral, Secrétaire d'Etat aux colonies, le 29 août 1941.

<sup>45</sup> 手紙の内容については ANOM 14Miom/2123 Circulaire du Gouverneur de la Côte d'Ivoire

い、預言者は、「翌年」に「天空に卵に似た徴」が現われ、「太陽が西から上り、東に沈み」、「罪を許す扉は閉められ」、さらに「10 年後」、世界にムスリムしか残らなくなる、と語ったという。この知らせを広めることと善き行いを説いて、この「手紙」は閉じられている。ドゥニはこの「手紙」の内容を村人に訳して伝え、筆写したものをボボ・ジュラソに住む、義兄のジギ・トラオレ(Djigui Traoré)に送った。

ジギ・トラオレはシカソ管区出身のバンバラで、管区の衛兵として働き、すでに引退していた<sup>46</sup>。トゥーガンに勤務していた頃にサモの女性を娶っている。この女性はドゥニの親族であったのであろう。ジギがボボ・ジュラソに居住し始めた年代は不明であるが、1920 年代半ば以降の区画整理の際に売り出されていた新興街区ハムダライの土地を彼が買いとり、居を構えたことは確かなことである。このことはジギの財力を物語っている。

ドゥニがいまだ故郷に戻る前の 1940 年 7 月頃から、ジギの屋敷に一風変わった人物が住むようになっていた。この人物はウスマン・トラオレ(Ousmane Traoré)という。彼はボボ・ジュラソ管区北西部のナネレグ生まれのセヌフォであった。しかし、周囲の者たちには彼の生い立ちをほとんど知られていない<sup>47</sup>。「白人のもとで」「レンガ工として働き」、各地を転々としていた。コートディヴォワールのフェルケセドゥグで、ティジャーニーヤのあるマラブーと知り合い、仕事を辞め、祈りに専念することを勧められたとされる。マラブーと知り合う前後に、ウスマンはアッラーの声を聞いた。彼は仕事を一切辞め、経緯は不明であるが、1940 年 7 月頃にはジギの屋敷に居候するようになっていた。

1941 年の年明け、まさにドゥニが戦地からト村に戻っていた頃、ジギの若年の息子が亡くなった。ジギの養子であるバカリ・トラオレ(Bakary Traoré)はジギのもとに弔問に訪れている。バカリはデドゥグ管区出身のヌヌマで、このとき、デドゥグ出身でジュラのジュラバテ・コネ(Dioulabate Kone)という「クルアーンの先生」を連れてきた。二人はいまだ

---

aux Administrateur supérieur de la Haute Côte d'Ivoire et Commandants de cercle, le 23 août 1941.

<sup>46</sup> ANOM 14Miom/2123 Lettre du Gouverneur général au Contre amiral, Secrétaire d'État aux colonies, le 29 août 1941., Lettre du Commissaire du Gouvernement au Vice Président du conseil, le 23 octobre 1941.

<sup>47</sup> ウスマン・トラオレの出身についての情報は彼の逮捕以前と以後で異なっている。彼に関する情報は以下を参照。ANOM 14Miom/2123 Lettre du Directeur de police au Gouverneur de la Côte d'Ivoire, le 10 août 1941., Lettre du Gouverneur général au Contre amiral, Secrétaire d'État aux colonies, le 25 août 1941., Rapport en vue de sanctions administratives contre sept indigènes inculpés dans l'attentat commis le 3 août 1941 à Bobo-Dioulasso., le 4 février 1942., CNABF 44V96 Circulaire de l'Administrateur supérieur de la Haute Côte d'Ivoire aux Commandants et Chefs de subdivision de la Haute Côte d'Ivoire, le 16 septembre 1941.

20 代の若者であった。ジギの屋敷でウスマンに出会ったバカリとジュラバテはすぐにウスマンを崇拜するようになり、二人はそのままボボ・ジュラソに留まることになった<sup>48</sup>。

ドゥニがジギに「手紙」を送った時期は、ちょうどこの頃であった。しかし当初、フランス語で書かれた「手紙」の文意が読みとれず、ジギはこの「手紙」を無視した。そこで、1941 年 3 月、ドゥニはボボ・ジュラソのジギの屋敷を訪れ、ジギ、ウスマン、バカリ、ジュラバテの前で「手紙」の内容を翻訳して聞かせた<sup>49</sup>。一同はこの「手紙」の内容を真実として受けとめ、これをボボ・ジュラソの大モスクで金曜礼拝の際に読みあげさせようと考えた。彼らはアラビア語を書くことができなかったため、ジュラバテの師であったマラブーを呼び、「手紙」を翻訳させ、ウスマンが述べたことをアラビア語で筆記させた<sup>21)</sup>。興味深いことに、ウスマンの口述による手紙では、ウスマン自身が「アッラーに遣わされた者」となっている。それによれば、「神は私をここボボ・ジュラソに遣わし、すべてのムスリムとムスリマが神の日が到来するまで私の言葉を聞かせるようになさった。」この手紙では、ウスマンの言葉に従うことが呼びかけられている。

この手紙は大モスクのイマームのもとに届けられ、ムアッジンがこれを読みあげた。しかし、イマームはこの内容があまりに不遜であるとし、これを金曜礼拝の際に読みあげることはなかった。植民地行政官の報告では、これ以降にウスマンたちは白人への襲撃を計画することになるとされている<sup>50</sup>。たしかに、この出来事より前に書かれた「メディナからの」手紙とウスマンの手紙の双方ともに、武装蜂起はおろか白人についての言及もない。彼らは同じ街区の若者を数多く勧誘し、事件当日の夜 30 名ほどがジギの屋敷に集結した。もっとも、ウスマンらはさらに多くの者が加わると想定していたという。参加しなかった裏切り者への告発を勝利の後に行うために、ジュラバテは集結した者たちの名をアラビア語で記録した。ウスマンは集まった者たちに加護を祈願し、彼らは襲撃へと向かった。

---

<sup>48</sup> バカリとジュラバテについては以下を参照。ANOM 14Miom/2123 Lettre du directeur de police au gouverneur de C. I., le 10 août 1941.

<sup>49</sup> 以下の記述は ANOM 14Miom/2123 Rapport du commandant de cercle sur l'attentat à main armée commis par des indigènes à Bobo-Dioulasso, le 3 Août 1941, le 9 Août 1941., Lettre du Directeur de police au Gouverneur de la Côte d'Ivoire, le 10 août 1941., Lettre du Commissaire du Gouvernement au Vice Président du conseil, le 23 octobre 1941.を参照。

<sup>21)</sup> ANOM 14Miom/2123 Circulaire du Gouverneur de la Côte d'Ivoire aux Administrateurs supérieurs de la Haute Côte d'Ivoire et Commandants, le 23 août 1941.

<sup>50</sup> たとえば、ANOM 14Miom/2123 Rapport du Commandant de cercle sur l'attentat à main armée commis par des indigènes à Bobo-Dioulasso, le 3 août 1941.; CNABF 44V96 Lettre du Gouverneur de la Côte d'Ivoire aux inspecteurs des affaires administratives, le 20 octobre 1941.



## 8-2-2. 襲撃者たちの特徴と不透明な真相

襲撃者たちは在地のイスラームの権威のなかで周縁的な存在であった。マラブーの一族の出身者は一人もおらず、マラブーになるための十分な修学の経験も、ボボ・ジュラソの有力なマラブーたちとのコネクションもなかった。大モスクのイマームへの手紙を代筆したマラブーでさえ、他地域出身のほぼ無名の存在であった<sup>51</sup>。またすでに述べたように、襲撃者の多くは農村から移住し植民地経済の下層で働く賃金労働者たちである。

他方で、こうした人びとが互いに知り合うようになったのが、事件のわずか 1 年ほど前であったことも特筆すべきだろう。事件の中心となった人物たちの結節点は、元衛兵のジギである。すでに引退していたことを考えると、ジギは植民地統治のごく初期に衛兵として雇われたのであろう。この時期の衛兵は通訳とともに行政官と「原住民」をつなぐ特権的な地位にあった。時代とともに、その地位は相対的に低下していったが、初期にあつては地方の植民地行政に参画する少数の「エリート」であり、地位を利用し、私腹を肥やし、横暴に振る舞った衛兵も少なくなかった(Saul and Royer 2001: 98-101)。ジギが他地域出身の豪商やヨーロッパの商人の住むハムダライ街区に土地と屋敷をもっていたことをみれば、在職中に地位を利用して独自のネットワークを形成したパトロンのような存在であったことは間違いない。

ジギはトゥーガンとデドゥグのそれぞれの管区で長期にわたって勤務していた。ジギがトゥーガンで知り合ったサモの女性を娶り、この女性がドゥニの親族であったことがドゥニとジギを結びつけている。また、このことからジギの屋敷にはサモの人物が頻繁に出入りしていたとされる<sup>52</sup>。他方で、ジギがデドゥグ管区で養子としたヌヌマのバカリもまた、襲撃者たちの集団を形成させるうえで重要な役割を果たしている。このバカリと、彼に同行したジュラのジュラバテが、神秘体験を経てボボ・ジュラソのジギの屋敷に居候していたセヌフォのウスマンに出会って信従した。つまり、事件の中心人物たちを結びつけたのは、植民地における衛兵というジギの特殊な立場とそのネットワークにあったといえる。

---

<sup>51</sup> このマラブーはアマドゥ・カマラ(Amadou Camara)という。彼は当時 40 歳ほどで、オジェンネのサマティギラ出身のマラブーで、ボボ・ジュラソに居住していたが、襲撃事件には関与しなかった(ANOM 14Miom/2123 Rapport en vue des sanctions administratives contre sept indigènes inculpés dans l'attentat commis le 3 août 1941 à Bobo-Dioulasso, le 4 février 1942.)。なお、1932 年のボボ・ジュラソ管区でのマラブーの調査では、彼の調書はとられていない(ANCI 5EE69 Fiches des renseignements sur marabouts du cercle de Bobo-Dioulasso.)。彼がボボ・ジュラソで活動を始めたのは、事件の 7 年前からであり、いまだ新参者であったと考えられる。

<sup>52</sup> ANOM 14Miom/2123 Lettre de l'Administrateur supérieur de la Haute Côte d'Ivoire au Gouverneur de C. I., le 16 septembre 1941.

しかし、核心にいたる糸口はここで切れてしまっている。中心人物たちの結節点となったジギとはどのような人物であったのか。アッラーの声を聞いたというウスマンが何を語っていたのか。30 名余りの若者たちはいかにして事件に参加することになったのか。彼らは同時代の状況をどのように捉え、何を考えていたのか。これらは残された史料からは明らかにならなかった。捜査を指揮していた人物たちの関心は別のところにあったのである。つぎに、仏領西アフリカの植民地行政官にとっての同時代的なコンテキストを踏まえながら、事件の捜査と対応、その帰結を検討する。

### 8-2-3. 植民地行政の認識と対応

1932 年をもってオート・ヴォルタは解消されたが、1938 年にはコートディヴォワール内の旧オート・ヴォルタ領をカバーするオート・コートディヴォワールという行政単位が領域内に設置された(Madiega 1987: 342)。この行政単位のトップとなるオート・コートディヴォワール首席行政官に最初に着任したのがルヴォー(E.-D. Louveau)である。彼はフランス本国の敗戦に際して自由フランスへの支持を明確に打ち出したことで、後のドゴールの回顧録のなかで仏領西アフリカでは唯一言及される人物となる(ドゴール 1963: 94)。

1940 年 6 月 18 日のドゴールのロンドンからのラジオ放送をワガドゥグで聞いたルヴォーは、英領ゴールド・コーストを通じてオート・コートディヴォワールの軍をドゴールの指揮下にいれる旨の電報を送っている。彼はゴールド・コーストの使節団とともにボボ・ジュラソに向かい、軍隊をゴールド・コーストへ派遣する手はずを整えていった。しかし、7 月になるとペタン派が領域内でも優位となり、軍隊の派遣は一部に留まった。7 月 22 日、ペタン派支持を明確にした仏領西アフリカ連合総督のボワッソンはルヴォーとボボ・ジュラソで会談し、28 日にダカールに召還した後、逮捕した(Louveau 1940: 2-21)。

このような領域内の混乱をおさえるために、ヴィシー政権の打ち出した「国民革命」——「労働・家族・祖国」のスローガンのもと、権威と階層制に基づく秩序の再建を標榜する理念と政策(松沼 2007: 20)——を旗印として、連合総督のボワッソンへの絶対的な権力の集中が図られ、領域内の監視体制によって、「ドゴール派」、「共産主義者」、「ユダヤ人」、「フリーメイソン」の排除が行われた(Ramognino 2006: 113-122, 149-157)。ヴィシー政権期の仏領西アフリカでは、400 名の行政官のうち、21 名が「政治的理由」、10 名が「フリーメイソンであること」を理由に解任されている(Cohen 1971: 158)。

領域内のムスリムに対する警戒は、次節で述べるハマウィーヤとともに、「外部」からの

「影響」に関心を集中させていた。ペタンが首相に就任する前日の 1940 年 6 月 16 日、コートディヴォワール総督のデシャンは、中東情勢に関連した「外部」からのプロパガンダに注意を喚起し、ムスリムへの監視強化を命じている<sup>53</sup>。これに関連して、1941 年 4 月、連合総督のボワッソンは、マラブーの移動への監視が重要であり、通信技師として雇った「現地人」から情報を収集することが適切であるという旨の通達を発していた<sup>54</sup>。

ボボ・ジュラソ事件が生じたのは、自由フランスを支持したルヴォーの逮捕から約 1 年後、1941 年 8 月 3 日のことである。本節の冒頭で述べたように、集団によるヨーロッパ人への襲撃事件は 20 数年ぶりのことであり、治安維持に過敏になっていたヴィシー政権下において、事件への対応も異例のものとなった。

事件の翌日 4 日 18 時頃、コートディヴォワール総督とオート・コートディヴォワール首席司令官が急遽ボボ・ジュラソに駆けつけ、捜査の陣頭指揮を執った。5 日早朝に警察局長、同日 9 時には仏領西アフリカ連合総督のボワッソン (P. Boisson) が到着した。事件当時出張でブアケにいたボボ・ジュラソ管区司令官が帰還した 5 日正午には、コートディヴォワールの最高責任者である総督、仏領西アフリカ全体を統括する連合総督までもが一堂に会していた<sup>55</sup>。一地方都市の事件のためだけに、現場にこれほど高位の行政官がわずか二日のあいだに集結していた。事件後わずか 2 日で、連合総督ボワッソンを含む高位の行政官がボボ・ジュラソに集結したことは、植民地行政が治安維持、反体制派の排除にいかに関心をもち、神経をとがらせていたのかを明瞭に示している。

襲撃者がムスリムであることは、ホテルで襲撃を受けた生還者による証言——襲撃者がアッラーの語を口走っていたこと——から推測された<sup>56</sup>。しかし、襲撃者がムスリムである

---

<sup>53</sup> CNABF 44V96 Circulaire du Gouverneur de la Côte d'Ivoire aux tous les cercles et subdivisions, le 16 juin 1940.

<sup>54</sup> CNABF 44V96 Circulaire du Gouverneur général au Gouverneurs et Administrateurs, le 7 avril 1941.

<sup>55</sup> ANOM 14Miom/2123 Rapport du Commandant de cercle sur l'attentat à main armée commis par des indigènes à Bobo-Dioulasso, le 3 août 1941, le 9 août 1941. なお、ボボ・ジュラソのセルクル司令官が、コートディヴォワール総督よりも到着に時間がかかったのは、前者がアビジャンから自動車でボボ・ジュラソに引きかえたのに対し(ANOM 14Miom2123 Rapport du Commandant de cercle sur l'attentat à main armée commis par des indigènes à Bobo-Dioulasso le 3 août 1941, Bobo-Dioulasso le 9 août 1941.)、後者は当時ブアケにおいて汽車でボボ・ジュラソにむかった(Deschamps 1975: 251-252)ためであった。なお、オート・コートディヴォワール上級行政官は事件当時、コートディヴォワール総督とともにブアケにおいて、行動を共にしていた(ANOM 14Miom2123 Lettre du Administrateur Supérieur de la Haute Côte d'Ivoire à Haut-commissaire de l'Afrique Française. Abidjan, le 12 août 1941.)。

<sup>56</sup> ANOM 14Miom/2123 Lettre du Directeur de police au Gouverneur de la Côte d'Ivoire, le 10 août 1941.

ことしか明らかになっていないにもかかわらず、事件の捜査は極端な断定に基づいて展開した。事件の翌日、コートディヴォワール総督のデシャン (H. Deschamps) はボボ・ジュラソから連合総督に電信を送っている。「おそらく十一数珠[タリーカ(イスラーム神秘主義教団)の一つであるハマウィーヤ(後述)の別称]と関係をもっている狂信的な少数の運動であるように思われる」<sup>57</sup>。以後、植民地行政は事件とハマウィーヤとの関連を執拗に見いだそうとしていったが、この判断には仏領西アフリカのイスラーム認識が深く関わっている。

トリオ(Triaud 2000: 171)によれば 1840 年以降の仏領西アフリカでは、著者の調査では遅くとも 1917 年からのオート・ヴォルタにおいては、「黒イスラーム」論に基づいて、集団や個人はタリーカによって分類されていた。たとえば、ムスリムの監視のために植民地行政によって作成されたマラブーの個人調書では、「人種」(Race)に次ぐ項目として「宗教」(Religion)が設定され、ムスリムの場合、タリーカを記載することが慣例となっていた<sup>58</sup>。

植民地行政はタリーカによってムスリムを分類・把握し、西アフリカ内陸への侵略の段階から、統治にとって「良き」タリーカと「悪しき」タリーカを区別していた(Triaud 2000: 173)。「悪しき」タリーカは時期によって変遷したが、ボボ・ジュラソ事件の生じた頃は、ハマウィーヤが唯一の「悪しき」タリーカとして認識されていた。

ハマウィーヤはティジャーニーヤの分派で、フランス植民地権力に弾圧されながら、そのことによってかえって各地に支持者を増やしていったタリーカである(坂井 2005a: 220)。もともとハマウィーヤは、現在のマリ北西部のニョロでのティジャーニーヤ内部における教義上の確執に端を発している。この分派運動の背景には、ティジャーニーヤの主流派が植民地行政と結託し、政治的な影響力を保持していたことへの一部の反発があった。1909 年以降、この小分派を指導していたのが、ハマーフッラーであった。ハマウィーヤのもとには、ティジャーニーヤの主流派に反感をもつ者たちが結集し、短期間のうちに、セネガル、仏領スーダン、モーリタニアにまたがる地域に広がっていった。ティジャーニーヤの主流派は、ハマウィーヤの拡大をおそれ、植民地行政に働きかけ、植民地行政も潜在的な不安定要因とみなし、監視と弾圧を行った。1924 年に主流派とハマウィーヤとの衝突が生じ、ハマーフッラーは流刑となったが、1936 年に一時流刑を説かれてニョロに帰還した(坂

---

<sup>57</sup> ANOM 14Miom/2123 Télégramme du Gouverneur de la Côte d'Ivoire au Gouverneur général, le 4 août 1941.

<sup>58</sup> たとえば、ANCI 5EE69 Fiches des renseignements sur marabouts du cercle de Bobo-Dioulasso, 1917-1932., CNABF 225 Haute-Volta. Correspondance sur le sujet des marabouts; fiches biographiques des marabouts influents, 1922-1923. ただし、不明の場合、その旨が記載されるか、記載そのものがなされていない。

井 2005a: 220-221)。しかし、ヴィシー政権期に入った、1940 年 8 月、衝突がふたたび生じ、1941 年 6 月、植民地行政によってハマーフッラーは逮捕され、アルジェリアに追放された (Traoré 1983: 162-171)。

この衝突はティジャーニーヤの主流派とハマウィーヤのあいだで生じたものであった。しかし、植民地行政の警戒は、ヴィシー政権期の治安維持への過剰な意識と相まって奇妙な展開をみせる。1941 年 2 月 20 日、モーリタニア総督はコートディヴォワール総督に対して前年 8 月の衝突の内容を知らせるとともに、運動の拡大によってハマウィーヤが「フランコフォビア」の性質を帯びる可能性がある伝え、さらに同月 28 日、連合総督ボワソンは全総督宛の通達で「ハマリストの運動が隣接する一部の英領植民地と関係をもつことがありえないことではない」とし、監視を強化するように命じている<sup>59</sup>。ここでは、ハマウィーヤは治安を脅かす存在であるという認識から進んで、潜在的に植民地行政に敵対しうる存在と規定され、さらにヴィシー政権に敵対する英領植民地と結びつく可能性にまで論理が展開している。こうした植民地行政の論理に基づけば、ボボ・ジュラソ事件は、まさに危惧していた事態の現実化として受け取られたことは想像に難くない。

事件発生直後から、連合総督、コートディヴォワール総督の指示に基づいて、捜査の主眼は襲撃者とハマウィーヤとのつながりを示す証拠探しに絞られた。まず、かつて 1933 年にクチャラ(現在のマリ)で一時的に拘束されたハマリストの親族がボボ・ジュラソに居住していたことがダカールの警察庁から指摘された<sup>60</sup>。しかし、この人物の名がその後の史料に現れることはなかった。つぎに、総督らの意向を受けて、ボボ・ジュラソ管区司令官が襲撃者たちの多くの出身地であったトゥーガン管区でのハマウィーヤの活動をトゥーガン管区司令官に依頼したが<sup>61</sup>、トゥーガン管区司令官からの返信は、当地にはそもそもムスリムがほとんどいないという冷ややかなものであった<sup>62</sup>。先述のルヴォーに代わってオート・コートディヴォワール首席行政官に着任したばかりのトビ(J. Toby)は、クドゥグ管区でムスリムの大規模な会合が開かれることを察知し、ハマウィーヤとの関連を疑ったが、実際には、

---

<sup>59</sup> CNABF 44V96 Lettre du Gouverneur de la Mauritanie au Gouverneur de la Côte d'Ivoire, le 20 février 1941., Circulaire du Gouverneur général au Gouverneurs, le 28 février 1941.

<sup>60</sup> ANOM 14Miom/2123 Télégramme du Sûreté générale au Commandant de Bobo-Dioulasso, le 7 août 1941.

<sup>61</sup> ANOM 14Miom/2123 Télégramme du Commandant de Bobo-Dioulasso au Commandant du Tougan, le 8 août 1941.

<sup>62</sup> ANOM 14Miom/2123 Télégramme du Commandant du Tougan au Commandant de Bobo-Dioulasso, le 9 août 1941.

地元の有力者の息子のクルアーン修了のための祝賀会にすぎなかった<sup>63</sup>。

これらの捜査は、この地域のイスラームについての基本的な知識の欠如を露呈している。そもそも、1940年の段階で、ボボ・ジュラソ、クドゥグの両管区では、ハマウィーヤの活動はなかった。トゥーガン管区では、歴史的にムスリムの移住が遅く、フランスの征服の時期に生じた小規模なジハードによる略奪の影響もあって、ムスリムはマイノリティであり、そのためにカトリック宣教団の活動が盛んであった<sup>64</sup>。トゥーガンの司令官の冷やかな返信はこのような状況を踏まえたものである。こうしたローカルな状況に接していた現場の行政官は、後述するように非常に早い段階からハマウィーヤの関与を否定していた。

しかし、総督らは「外部」からの「影響」を特に警戒し、ドゴール派と遊学のために移動するマラブーの「影響」説に執拗にこだわった。ダカールの諜報部は事件から約1週間後にドゴール派の関与の可能性に言及し<sup>65</sup>、約1か月後には、事件前に英領ゴールド・コーストで、ドゴール派が事件のあったホテルを標的とする内容のラジオ放送を行っていたことが明らかにされた<sup>66</sup>。しかし、この放送を襲撃者が聞いていた可能性は低く、彼らの来歴からもドゴール派とのつながりを見出すことはできなかった<sup>67</sup>。

「外部」のマラブーへの捜査では、仏領ギニアからボボ・ジュラソ近辺を経由してデドゥグ管区に帰省していたマラブーと、英領ゴールド・コーストからボボ・ジュラソ管区へ移動していたマラブーが搜索の末、逮捕、尋問された<sup>68</sup>。しかし、ハマリストではなく、襲撃者との接触もなかった<sup>69</sup>。ハマウィーヤとの関連が唯一うかがわれたのは、ウスマンの師がハマーフッラーの居住していたニョロで学んだことだけであった。しかし、この人物はハマウィーヤではなくティジャーニーヤに属していた<sup>70</sup>。捜査は「外部」からの「影響」と

<sup>63</sup> CNABF 44V96 Circulaire de l'Administrateur supérieur de la Haute Côte d'Ivoire aux Commandants et Chefs de subdivisions de la Haute Côte d'Ivoire, le 16 septembre 1941.

<sup>64</sup> この1910年代から1930年代までのトマのカトリック宣教団の活動については本稿6章2節を参照。

<sup>65</sup> ANOM 14Miom/2123 Renseignements, le 11 août 1941.

<sup>66</sup> ANOM 14Miom/2123 Lettre du Gouverneur de la Côte d'Ivoire au Gouverneur général, le 31 août 1941.

<sup>67</sup> ANOM 14Miom/2123 A propos de la sauvagerie agression de Bobo-Dioulasso par Justice Militaire. Sans date.

<sup>68</sup> CNABF 44V96 Circulaire du Chef de la subdivision de Dedougou au Commandant de Bobo-Dioulasso, le 17 septembre 1941., ANOM 14Miom/2123 Télégramme du Commandant de Bobo-Dioulasso à l'Administrateur supérieur de la Haute Côte d'Ivoire, le 27 octobre 1941.

<sup>69</sup> ANOM 14Miom/2123 Lettre de l'Administrateur supérieur de la Haute Côte d'Ivoire au Gouverneur de la Côte d'Ivoire, le 27 octobre 1941., Télégramme du Commandeur de Bobo-Dioulasso à l'Administrateur supérieur de la Haute Côte d'Ivoire, le 27 octobre 1941.

<sup>70</sup> ANOM 14Miom/2123 Lettre de l'Administrateur supérieur de la Haute Côte d'Ivoire au

関連しうる僅かな情報をことさらに重視したが、何らの成果ももたらさなかった。

このような捜査の迷走は、治安維持に過敏になり、ハマウィーヤへの警戒を強めていたヴィシー政権期のコンテキストに加え、植民地行政の高官たちによる情報の参照のあり方によっても部分的に説明されるだろう。本国植民地大臣のプラトン(C. Platon)、連合総督、警察長官、コートディヴォワール総督、オート・コートディヴォワール首席行政官は、行政官や諜報部によって提出された仏領西アフリカ全域のアルシーヴを駆使して、過去 20 年ほどにわたる、かけ離れた 4 つの管区で生じた事件を参照している。事件の三日後の 8 月 7 日に 1933 年に中部マリのクチャラで生じたハマリストの傷害事件、8 月 8 日に 1940 年に北部マリのニョロで生じたハマリストの傷害事件、8 月 12 日に 1927 年にニジェールのニヤメで生じた「マフディスト」による殺人事件、8 月 29 日にはこれらすべての事件に加え、1934 年の中部マリのセグーで生じた若いムスリムの改宗者による強制労働拒否の事件との関連を上述の高官らはことさらに主張した<sup>71</sup>。このように、高官たちにとってボボ・ジュラソの事件をハマウィーヤに関連づけることはしごく当然なことであり、過去の事件を参照することで彼らはその認識を補強していった。しかしより重要な点は、高官たちの探究がローカルで個別的な情報よりも、仏領西アフリカ全体の動向との関連に向かい、かけ離れた地域の相互に無関係の事件が関係するかのよう把握されていったことである。つまり、ボボ・ジュラソ事件が、仏領西アフリカにおいてあまりに特異な事件であったために、高官が捜査に直接介入したが、そのことがかえって捜査の迷走を引き起こしたといえる。

先述のように、現場の行政官はハマウィーヤの関与を早くから否定していた。ボボ・ジュラソ管区司令官は 8 月 12 日にすでにこの見解を示している<sup>72</sup>。しかし、これは黙殺され、高官たちは長期間、「外部」の「影響」説に執着し続けた。この事件の軍事裁判のために現場で捜査にあたった軍人は、ハマウィーヤだけでなくドゴール派の関与も否定した報告書を提出したが<sup>73</sup>、9 月 9 日、この軍人の報告は「時宜を得ていない」とし秘匿したうえで、広く通達を行わないことがコートディヴォワール総督と仏領西アフリカ連合総督のあいだ

---

Gouverneur de la Côte d'Ivoire, le 16 septembre 1941.

<sup>71</sup> ANOM 14Miom/2123 Télégramme du Sûreté générale au Commandant de Bobo-Dioulasso, le 7 août 1941., Télégramme du Ministre des Colonies au Gouverneur général, le 8 août 1941., Lettre de l'Administrateur supérieur de la Haute Côte d'Ivoire au Gouverneur général, le 12 août 1941., Lettre du Gouverneur général au Contre amiral, Secrétaire d'État aux colonies, le 29 août 1941.

<sup>72</sup> ANOM 14Miom/2123 Télégramme du Commandant de Bobo-Dioulasso au Gouverneur général, le 12 août 1941.

<sup>73</sup> ANOM 14Miom/2123 A propos de la sauvagerie agression de Bobo-Dioulasso par Justice Militaire, Flassch, Sans date.

で合意された<sup>74</sup>。9月13日、事件を担当する検事、裁判官、オート・コートディヴォワール首席行政官による会合がボボ・ジュラソで開かれたが、ここでも見解の相違が浮き彫りとなった。会合後の文書では、検事は現場の報告の内容を支持した一方で、オート・コートディヴォワール首席行政官はハマウィーヤの直接的な関与がなかったことを認めつつ、「外部」のマラブーに対する捜査は終結していないとし、「外部」の「影響」の可能性を否定しなかった<sup>75</sup>。連合総督は遅くとも10月4日まで、事件が「外部」の「影響」であると確信していた<sup>76</sup>。1941年10月10日、事件の軍事裁判が開かれたが、判決文はなく、被告人氏名、職業、容疑、刑罰を簡潔に示した一覧のみが残されている<sup>77</sup>。

付言すると、同年10月にはコートディヴォワール総督のデシャンも文書のなかでハマウィーヤの関与を否定したが、彼は後年の回顧録とアフリカの宗教の概説書において、この事件がハマウィーヤによるものと明記している(デシャン 1963: 106; Deschamps 1975: 251-252)。デシャンの事件に対する認識が修正されることはなかったのである。

#### 8-2-4. 「行政的処罰」とその帰結

捜査と同時並行して、裁判を待たずに、事件に直接関連していない人びとへの「行政的処罰」もまた行われた。オート・コートディヴォワール首席行政官トビは、8月27日、ボボ・ジュラソに直接出向き、自らの指揮の下で大モスクのイマームとムアッジンを「事前に告発しなかった」かどにより解任、9月9日から13日にハムダライ街区にやはり自ら赴き、ジギ・トラオレのコンセッションに隣接するすべての区画の建造物に対する破壊を実行し、ジギの住んでいたハムダライ街区全体に対し1万フランの罰金を科した<sup>78</sup>。そのうえで、トビは解任したイマームとムアッジンに加え、カントン長、ハムダライ街区の街区長、同街区の有力者であったムクタール・バと彼の自宅の敷地内にあった同街区のモスク<sup>79</sup>のイ

---

<sup>74</sup> ANOM 14Miom/2123 Télecgramme du Gouverneur général au Gouverneur de la Côte d'Ivoire, le 9 septembre 1941.

<sup>75</sup> ANOM 14Miom/2123 Lettre du Procureur de la république près le tribunal de 1ère instance de Grand-Bassam au Procureur général, chef du service judiciaire de l'Afrique Occidentale française, le 15 septembre 1941., Lettre de l'Administrateur supérieur de la Haute Côte d'Ivoire au Gouverneur de la Côte d'Ivoire, le 16 septembre 1941.

<sup>76</sup> ANOM 14Miom/2123 Télecgramme du Gouverneur général au Gouverneur de la Côte d'Ivoire, le 10 octobre 1941.

<sup>77</sup> ANOM 14Miom/2123 Compte-rendu de l'audience des le 9, 10, et 11 octobre 1941.

<sup>78</sup> ANOM 14Miom/2123 Lettre de l'Administrateur supérieur de la Haute Côte d'Ivoire au Gouverneur de la Côte d'Ivoire, le 16 septembre 1941.

<sup>79</sup> 2013/12/17 Bobo-Dioulasso, al-Hadj Abraham Diénépo(ハムダライ街区の大モスクのイマーム).



マームなどに対して、「事前に告発しなかった」ことを理由として、収監と強制労働の処罰を提案し、判決ではこの提案がそのまま現実のものとなった<sup>80</sup>。

ワガドゥグに政庁をおく首席行政官のトビがあえて自らボボ・ジュラソに赴き、直接イマームらを解任し、住居の破壊を行ったことから伺えるように、一連の「行政的処罰」に現場のボボ・ジュラソ管区司令官は積極的ではなかったようである。少なくとも、彼はムクタール・バへの処罰については、ティジャーニーヤの最有力者で連合総督とも近しかったセイドゥ・ヌール・タル(Seydou Nourou Tall)とバが懇意であったことを理由として明確に反対したとされる<sup>81</sup>。こうした姿勢がどこまで影響したのかは不明であるが、デシャンは11月23日に事件の見解に相違のあった検事らとともにボボ・ジュラソ管区司令官を挙げて、事件発生時の出張による不在、「原住民」への監視不足を指摘し、処罰を要請、12月18日、ボボ・ジュラソ管区司令官はその職を解任され、本国への異動が決定された<sup>82</sup>。

事件のほぼ1年後のギニア総督からボワッソンへの電報にはこうある<sup>83</sup>。「ボボ・ジュラソ軍事裁判ニヨリ、フォトバ刑務所ニ収監セラレタル二名。禁錮重労働ニ処サレシ、アマドゥ・ムクタール・バ、7月13日ニ死セリ。ボボ・ジュラソ・モスク・イマーム・カヤモカッス・サヌ、8月5日ニ死セリ。」

「カヤモカッス・サヌ」とは、ボボ・ジュラソの大モスク5代目イマーム、サキディ・サヌの一族のセイドゥ・サヌ(Seydou Sanou)のことである<sup>84</sup>。彼がイマーム位に就いたのは、事件のわずか三ヶ月前であった。彼の突然の解任によって、ボボ・ジュラソの大モスクのイマーム位は急速に不安定なものとなった。まず、アマドゥ・サヌ(Amadou Sanou)がこれを継いだ。しかし、アマドゥは大モスクの設立者であるサキディ・サヌの一族の者ではなく、植民地行政から俸給をうけ、モシの民族政党で親植民地派のUVに同調していたため、批判を受けて退き、それ以後、3人の者が代わる代わるイマーム位に就いてはやめていった。

---

<sup>80</sup> ANOM 14Miom/2123 Rapport de la commission permanente du conseil de Gouvernement au Gouverneur général, le 14 octobre 1941.

<sup>81</sup> ANOM 14Miom/2123 Lettre de l'Administrateur supérieur de la Haute Côte d'Ivoire au Gouverneur de la Côte d'Ivoire, le 16 septembre 1941.

<sup>82</sup> ANOM 14Miom/2123 Lettre du Gouverneur de la Côte d'Ivoire au Gouverneur général, le 23 novembre 1941., Lettre du Directeur des affaires politiques et administratives au Directeur du personnel, le 18 décembre 1941.

<sup>83</sup> ANOM 14Miom/2123 Télégramme du Gouverneur Guinée française au Gouverneur général, août 1942.

<sup>84</sup> CNABF 7V485 Notice de renseignements sur les deux grandes mosquées de Bobo-Dioulasso, le 29 juillet 1964. 2013/12/10 Bobo-Dioulasso, Siaka Sanou(ボボ・ジュラソの大モスクのイマーム)..

最終的に、1947 年、商人としてブアケに住んでいたサリア・サヌ(Salia Sanou)がその兄弟によって推挙され、ボボ・ジュラソに呼び出された<sup>85</sup>。このサリア・サヌが、のちの「土着民」と「外来者」の対立を引き起こす主要な人物となる。イスラームのローカルな権威と無関係であったドゥニらの活動が植民地行政の対応を媒介として大モスクとハムダライの金曜モスクに集うムスリムたちに影響を与えることになるのである。

### 8-3. 「外来者」と「土着民」の対立とイスラーム改革主義の形成

本節では、まず、「外来者」と「土着民」の対立がどのように生じたのかを辿り、こうした対立のなかでハムダライ街区の大モスクが建設されるに至った経緯を述べる。つぎに、ハムダライ街区の大モスクに集まるマラブーや商人たちを中心にムスリム文化連合ヴォルタ支部が設立された経緯、ムスリム文化連合の政治的な目的がメデルサの創設であったこととメデルサの創設がどのように達成されたのかを明らかにする。最後に、「土着民」によるメデルサ創設の動きと、再燃する「外来者」と「土着民」の対立と、この対立の霧消化がいかように生じたのかを述べる。

#### 8-3-1. 「外来者」と「土着民」の対立

事件が生じたのは、1949 年 7 月 29 日のことであった<sup>86</sup>。この日に、UV の支持者でハムダライ街区長であったサーダ・ジャワラ(Sada Diawara)が、RDA の構成員であったチェトゥレ・コネ(Tieoure Kone)から暴行を受ける。サーダ・ジャワラは警察に通報し、ボボ・ジュラソの UV の指導者たちはこのことを問題として大きくとりあげた。翌日 7 月 30 日、UV の構成員 30 名ほどがチェトゥレ・コネの自宅を取り囲み、コネは警察に事情聴取を受けた。8 月 1 日深夜、200 人あまりの人びとがコネの自宅前に集結し、サーダ・ジャワラらの襲撃によってコネは負傷する。

8 月 2 日早朝、RDA の事務所で集会が開かれる。午前 9 時、グリオ[専業の語り部]が町中をかけめぐり、RDA の事務所に集合せよと呼びかけていった。この直後、当局は憲兵と

---

<sup>85</sup> CNABF 7V485 Notice de renseignements sur les deux grandes mosquées de Bobo-Dioulasso, le 29 juillet 1964. なお、現在のボボ・ジュラソの大モスクのイマームへのインタビューでは、セイドゥ・サヌとサリア・サヌあいだの人物たちは歴代のイマームとして言及されなかった(2013/12/10 Bobo-Dioulasso, Siaka Sanou(ボボ・ジュラソの大モスクのイマーム)).

<sup>86</sup> 以下、一連の事件の内容については ANOM 1affpol/2259 Lettre du chef de la sûreté de la Haute-Volta au gouverneur de la Haute-Volta, Bobo-Dioulasso, le 3 août 1949.を参照。

警察を召集する。10 時には、事務所に 2,000 名ほどが詰めかけていた。集まった人びとは武器をもっていなかったが、町中への布告を続けていたグリオの 1 人は武器をもてと叫んでいる。この異常事態に、UV の複数の指導者が警察に保護をもとめた。

10 時 5 分、植民地評議会議員のダウダ・ジャロ(Daouda Diallo)ら数名の RDA の指導者が警察署を訪れ、チェトゥレ・コネを襲撃した人物の訴追がなされなければ、群衆をおさえることはできないと通告する。これを受けて、植民地行政官は、病院に入院していたサーダ・ジャワラの病状を確認する。医師は、拘置所に勾留可能ではあるが、医療者の付き添いが必要であるとし、12 時 15 分、サーダ・ジャワラは看護師の付き添いのもとに拘置所に収容された。RDA の事務所では、会合が続けられ、「今日こそが、RDA が生きるべきか、死ぬべきかの時だ」との掛け声が発せられている。

13 時ごろには、サーダ・ジャワラが拘置所に勾留されたとの情報が RDA に伝わる。RDA のダウダ・ジャロらは事態の沈静化を模索していたが、アルハジ・ルナフ・ジャキテ(al-Hadj Rounaf Diakite)やジュラのムスリムたちは「今日こそが、RDA が生きるべきか、死ぬべきかの時だ」の掛け声を続けている。聴衆はジャワラの勾留をほとんど信じていなかった。

14 時、UV の支持者であったボボ・ジュラソ郡長と彼の家族が警察に避難所の提供を要求する。15 時、RDA の集会にはさらに人びとが集まってくる。RDA の婦人部は裁判所の前で抗議行動を行ない、RDA の各代表は近隣の村々へと集会参加の呼びかけを行う。ヨーロッパ人の数店の商店は臨時休業にし、警察のパトロールが繰り返されていた。

16 時、RDA の指導者たちが保安局を訪問し、局長と会談し、サーダ・ジャワラの勾留の確認を要求する。局長はこれを受諾する一方で、群衆の解散を公的に求めた。勾留の確認がなされた後、17 時、RDA の群衆は解散した。その後、夜通し、警察のパトロールがなされたが、事件は生じず、事態は一時的に沈静化した。

この事件の原因は、事件の 1 年前に遡る<sup>87</sup>。サファネのあるマラブーの夫人であったアルハッジャ・ビントゥ(al-Hadja Bintou)が夫と死別し、再婚相手を探していた。候補に挙がったのが、前年の 1947 年にボボ・ジュラソの大モスクのイマームに就任していたサリア・サヌ(Salia Sanou)と、ファラカン街区の街区長で RDA の熱烈な支持者であったシディキ・サヌ(Sidiki Sanou)の息子のムーサ・サヌ(Moussa Sanou)であった。ビントゥはサリア・サ

---

<sup>87</sup> 事件の原因については、ANOM 1affpol/2259 Lettre du commandant de cercle de Bobo-Dioulasso au gouverneur de la Haute-Volta, Bobo-Dioulasso, le 3 août 1949.; CNABF 7V485 Notice de renseignements sur les deux grandes mosquées de Bobo-Dioulasso, le 29 juillet 1964.に基づく。

ヌを選んだが、のちにビントゥとサリアは不仲となった。

1948年5月、ムーサ・サヌはサリア・サヌをイマーム位から追い落とそうと植民地行政に働きかけをおこなった。サリア・サヌに不満をもつ植民地評議員のサニ・サヌ(Sany Sanou)、フルベのマラブーで裁判所第一書記官であったアリ・サンガレ(Ali Sangare)、大モスクの元イマームであったアマドゥ・サヌ、大モスクを建設したサキディ・サヌの孫のスルカラ・サヌ(Souroukara Sanou)などがこうした運動に加わった。

ムーサらが問題としたのが、ラマダーン月の集団礼拝であった。彼らはサリアを敬意に値する人物ではないとして、ラマダーン月の最初の夜の集団礼拝をサリアをイマームとして行うことを拒絶し、他の場所での別に集団礼拝をおこなうことを主張した。これによって、ラマダーン月の最後の夜の集団礼拝にまでボボ・ジュラソのムスリムたちのあいだでの口論と諍いを巻き起こした。ムーサらのサリア・サヌの批判に、「外来者」を多く含むハムダライ街区のムスリムも加わり、新たな展開をみせるようになる。

1948年12月、ハムダライ街区のムスリムの有力者であった有力な家畜商であったセネガル出身のサーダ・シセ(Sada Cissé)、仏領スーダンのバンジャガラ出身のアルハジ・バカリ・ボクン(al-Hadj Bakary Bokoum)、アルファ・モイ・ジェネポの息子でマラブーのバモイ・ジェネポ(Bamoï Diénépo)らが、ボボ・ジュラソ事件に連座したムフタル・バの邸宅の中庭にあったモスクに代わる、ハムダライ街区の新しいモスクを建設する許可を植民地行政に申請した。サーダ・シセはUVの支持者で、この当時、フランス国会議員となっていたナジ・ボニと親交があったため、ナジ・ボニを介して、ハムダライ街区の新モスク建設に植民地行政から50,000フランの資金援助と建設資材として11トンものセメントの援助を引き出している。むろん、これだけでは十分ではなかったため、RDAボボ・ジュラソ支部の実質的なパトロンであったシカソ・シラ街区のラッサナ・ジャキテら豪商たちも多く、の寄付を行っていた。

1949年7月、ラマダーン月の集団礼拝の問題が再浮上する。アルハジ・バカリ・ボクンら、ハムダライ街区に住むRDAの有力な構成員が、サリア・サヌをイマームとして容認していないこと、彼のもとでの集団礼拝を拒絶し、ラマダーン月の最後の夜の集団礼拝をハムダライ街区のモスクで行うことの許可をハムダライ街区長のサーダ・ジャワラに書面でもめた。前述のサーダ・シセとサーダ・ジャワラはこれを拒否し、こうした動きを禁止するように市長に働きかけを行なった。ラマダーン月の最後の日まで、RDAとUVの双方がそれぞれ集団礼拝の分離の賛成と反対の誓願を市長や管区司令官に行ったが、結局のところ

ろ、7月27日の夜、ラマダーン月の最後の夜の集団礼拝がボボ・ジュラソの大モスクとハムダライ街区の大モスクのそれぞれ行われることになった。この日は平穏に過ぎていった。しかし、前述のように、この2日後、ハムダライ街区の街区長でUV支持のサーダ・ジャワラがRDAの構成員から襲撃を受け、ボボ・ジュラソ全体を巻き込む騒動に発展した。

対立の要因をいくつか整理しておこう。直接的な引き金は、サリア・サヌとムーサ・サヌとのあいだの女性問題であった。しかし、ムーサ・サヌによるサリア・サヌへの反対運動に、かつてのボボ・ジュラソの大モスクのイマームが加わっていたことにみられるように、大モスクのイマーム位をめぐるボボ・ジュラのムスリムのあいだにも合意が得られていなかったことがわかる。これは、1941年のボボ・ジュラソ事件の「行政的処罰」によって、無関係にもかかわらず、就任間もなかった大モスクのイマームが追放され、大モスクのイマーム位が不安定になっていたことを遠因としているといえる。

他方で、ムーサ・サヌらが集団礼拝をサリア・サヌのもとでおこなうことへの不満を表明した後からは、RDA支持者とUV支持者の対立に変化している。ここでは2つの事態の変化をみることができる。

第一に、女性問題をめぐるボボ・ジュラのサヌのリネージ間の問題が、ボボ・ジュラソの大モスクのイマームの品位を問う、あるいはボボ・ジュラソのムスリムを代表する人物とは誰になるのかを問う、いわば「公共的な」問題へと迫りあがっている。ここでは、集団礼拝の際に、ムスリムたちの前に立って礼拝をおこなう人物の、すなわち、イマームの正統性がひろくボボ・ジュラソのムスリムたちの合意によって担保されるべきであるという問題提起がなされている。この問題提起によって、潜在的にサリア・サヌに不満を抱いていたハムダライ街区のムスリムたちがこの問題に深く関与するようになったとみるべきであろう。

第二に、ボボ・ジュラソ市全体を巻き込む騒動への展開は、イマーム位をめぐる問題とは別次元で生じていた。植民地行政官の報告を読む限りでは、RDAの集会では、イマーム位は問題化されず、あくまでもRDAの構成員を襲撃したUVの構成員に対する報復が焦点化されている。7章で指摘したように、RDAボボ・ジュラソ支部の幹部や有力な支持者には、ギニア出身者が多かった。また、公安による文書によれば、1949年に完成したハムダライ街区のモスクにはRDAの支持者が多く集まっていたことから「RDAのモスク」と一

部では揶揄されていたとされる<sup>88</sup>。こうしたことから、「外来者」と「土着民」のムスリム、あるいは RDA 支持者と UV 支持者のムスリムの対立として、行政文書ではまとめられている<sup>89</sup>。

しかし、「外来者」と「土着民」という対比は、いくつかの例外を含んでいるという点で十分ではない。すでに指摘したように、植民地統治以前からボボ・ジュラソに定住していたマラブーのカッサンバ・ジャビはジェネポラと緊密な関係をもっていたし、ボボ・ジュラのムスリムのなかにサリア・サヌに反発をもつ人物たちがいたことも事件の起こりをみれば明らかである。また、セネガル出身のサーダ・シセらは必ずしもハムダライ街区の大モスクでの集団礼拝に賛同していたわけではなかった。あるいは、のちに述べる仏領スーダンのジェンネ出身でハムダライ街区に居住していたマラブーのガオス・カメナ(Gaoussou Kamena)<sup>90</sup>は政党とのつきあいを倦厭していた<sup>91</sup>。

RDA と UV の支持層もおおまかには、ハムダライ街区での集団礼拝の容認派と否認派にわかれているが、完全に対応しているわけではなかった。たとえば、ムーサ・サヌに同調してサリア・サヌのもとでの集団礼拝に反対したフルベのアリ・サンガレはコンのジュラのアルハジ・ママドゥ・サノゴ(al-Hadj Mamadou Sanogo)とともに熱心ではないものの、UV の支持者であった<sup>92</sup>。そして、すでに指摘したように、RDA 自体も、イマーム位や集団礼拝のことを問題化したわけではなく、あくまでも、UV の構成員に RDA の構成員が襲撃されたことを問題化しており、この事件後も、党として、イマーム位や集団礼拝を問題化することはなかった。

### 8-3-2. 対立の修復の試みと同時代の仏領西アフリカにおけるイスラーム改革主義運動

1949 年 7 月から 8 月にかけての事件以降、1953 年まで、この対立を修復させようとする動きがみられた。オート・ヴォルタ植民地の四半期報告によれば、1950 年のあいだに、

---

<sup>88</sup> CNABF 7V485 Notice de renseignements sur les deux grandes mosquées de Bobo-Dioulasso, le 29 juillet 1964.

<sup>89</sup> たとえば、CNABF 7V485 Notice de renseignements sur les deux grandes mosquées de Bobo-Dioulasso, le 29 juillet 1964.; ANOM 14miom/2200 Rapport politique, Haute-Volta, 4eme trimestre 1953.

<sup>90</sup> 2014/01/20 Bobo-Dioulasso, Sidi Aboubakar Kamena(ジャラドゥグ街区のメデルサの校長・ガオス・カメナの息子).

<sup>91</sup> CNABF 28V30 Correspondance relative à l'ouverture d'écoles coraniques. Cercle de Bobo-Dioulasso (1952-1958).

<sup>92</sup> CNABF 28V30 Correspondance relative à l'ouverture d'écoles coraniques. Cercle de Bobo-Dioulasso (1952-1958).

ハムダライ街区の豪商のサーダ・シセや RDA ボボ・ジュラソ支部の幹部であったシレ・バ  
らによって、和解の試みが何度かなされていた<sup>93</sup>。

また、他の植民地の著名なマラブーが 1950 年から 1951 年にかけて相次いでボボ・ジュ  
ラソを訪問している<sup>94</sup>。四半期報告では、こうしたマラブーが対立を解消するのに資するの  
ではないかと毎回期待を寄せていることから、植民地行政による要請によって、これらの  
マラブーがボボ・ジュラソを訪問したと推測される。

実際のところ、これらの四半期報告書で言及されている、他の植民地のマラブーの 6 名  
のうち、彼らの背景を特定できた 3 名の人物はみな親植民地派のマラブーたちであった。  
たとえば、シェク・モハメド・シャリーフ(Cheikh Mohamed Cherif)という人物が 1950 年  
の前半にボボ・ジュラソを訪問している<sup>95</sup>。この人物はギニアのカンカンの有力なマラブー  
で、同年の 1950 年に仏領スーダンのバマコに郡長とイマームの要請で招かれ、植民地行政  
への忠誠の必要を演説している(Kaba 1997: 296-297)。おそらく、このバマコ訪問の前後で  
ボボ・ジュラソに立ち寄ったのであろう。また、1950 年 11 月にボボ・ジュラソを訪問し  
た「シ・ベン・アモル・ティジャーニ」(Si Ben Amor Tidjani)がフランスへの忠誠を訴え  
る説教を行っているが<sup>96</sup>、この人物はアルジェリアのラグエ(Laghouet)出身のティジャーニ  
ーヤの親フランスのマラブーで、1948 年にカメルーンのアダマワを訪問し、同様の説教を  
行っている(Bah et Fah 1993: 111)。

そして、もっとも着目すべき人物は、1950 年初頭、まず初めにボボ・ジュラソを訪問し  
たアルハジ・アブドゥル・ワッハーブ・ドゥクーレ(al-Hadj Abdoul Wahab Doukoure)<sup>97</sup>で  
ある。ドゥクーレは、仏領スーダンにおける、イスラームのいわゆる「対抗・改革」(la  
contre-réforme)<sup>98</sup>を推し進めた主要な人物の一人であった。「対抗・改革」については同時代  
のセネガル、仏領スーダンで生じていたイスラーム改革主義運動についての説明が必要だ  
ろう。

1940 年代から 1950 年代初頭にかけて、セネガルのダカール、仏領スーダンのカイ、バ

---

<sup>93</sup> ANOM 14miom/2200 Rapport politique, Haute-Volta, 1er trimestre 1950., Rapport  
politique, Haute-Volta, 3eme trimestre 1950.

<sup>94</sup> ANOM 14miom/2200 Rapport politique, Haute-Volta, 1<sup>er</sup>-4e trimestre 1950., Rapport  
politique, Haute-Volta, 4eme trimestre 1951.

<sup>95</sup> ANOM 14miom/2200 Rapport politique, Haute-Volta, 2eme trimestre 1950.

<sup>96</sup> ANOM 14miom/2200 Rapport politique, Haute-Volta, 4eme trimestre 1950.

<sup>97</sup> ANOM 14miom/2200 Rapport politique, Haute-Volta, 1er trimestre 1950.

<sup>98</sup> この名称は、ムスリム事情局(le bureau des affaires musulmanes)の当時の局長であったカ  
ルデール(M. Cardaire)によって名づけられたものである(Triaud 1997: 515)。

マコ、セグーで、それぞれ個別に、近代教育によって、イスラーム教育とアラビア語、フランス語と世俗教育をおこなう、いわゆるメデルサ、あるいはフランコ-アラブを設立する運動が生じていた(中尾 2016a: chp. 2)。最初にメデルサ設置を試みたのは、セネガル出身のウォロフのアルハジ・マフムード・バ(al-Hadj Mahmoud Bâ)で、マッカで初等教育から高等教育まで学んだ後に、1941 年から 1942 年にかけてダカールでメデルサを設立しようとしたが、地域のマラブーと植民地行政の反対にあって失敗した後、1947 年に仏領スーダンのカイでメデルサを開設している(Kane 1997)。仏領スーダンのセグーでは、クルアーン学校で学んだ後に公立の小学校を出たサーダ・オマル・トゥレ(Sada Oumarou Toure)らが 1945 年ごろにメデルサを開設し(Brenner 2000)、同年、カイロのアズハル大学を出たギニア、ガンビア出身のアルハジ・カビネ・カバ(al-Hadj Kabine Kaba)らが仏領スーダンのバマコでメデルサ開設の申請を出していた(Kaba 1972)。やや遅れて、セネガルのジャカンケのシェイク・トゥレ(Cheikh Toure)がモーリタニア、アルジェリアに留学後、1953 年にムスリム文化連合(l'Union culturelle musulmane)を設立し、ダカールにメデルサを開校している(Loimeier 1998)。

さきに言及した、親植民地派のマラブーであったギニアのカンカンのシェク・モハメド・シャリーフが 1950 年にバマコを訪問したこともこうした同時代的な背景があったものと推測される。アズハル大学を出たギニア出身のカバらによるバマコのメデルサ開設は、バマコのマラブーや植民地行政の妨害によってなかなか認可が下りず、1950 年 7 月によりやく開設されたものの、地元のムスリムとの暴力事件を経て 1951 年 12 月に植民地行政によって閉鎖されることとなっていた(Kaba 1976: 409)。つまり、スーフィー教団による伝統的な教育法を批判し、近代教育を導入しようとしていたイスラーム改革主義運動と、地元の「伝統的な」マラブーとのあいだの緊張が、1950 年のバマコでは高まっていたのである。

そして、こうしたイスラーム改革主義運動に対抗するかたちで、植民地行政の当局であるムスリム事情局(le bureau des affaires musulmanes)の支援のもとに展開されたのが、「対抗-改革」の運動であった(Triaud 1997: 515)。アルハジ・アブドゥル・ワッハーブ・ドゥクレーは、6 章で言及したオート・ヴォルタ植民地のかつての植民地官吏で、当時、フランス・黒アフリカ研究所(l'Institut français d'Afrique noire)のバマコ支部に勤務していたハンパテ・バとともに、アフリカ諸語を用いたイスラーム教育センターを、仏領スーダンのセグー、カイ、シカソ、ジャファラベに設立している(ibid.: 515)。この運動には一部の在地の政治家、あるいはムスリムの支持をうけていたようである。たとえば、ボボ・ジュラソ



の大モスクを建設したサキディ・サヌが留学したジャにおいても、仏領西アフリカの評議会議員になっていたアルマーミ・コレイシ(Almamy Koreissi)とマーシナの「伝統的首長」らが、ハンパテ・バにマーシナ準管区内の公立学校、特にジャにおいて、こうした教育を広げるようにもとめている<sup>99</sup>。

このように、1940年代後半から1950年代初頭にかけて、セネガルと仏領スーダンの一部の都市において、イスラーム改革主義運動と地元のマラブー——特に、スーフィー教団の指導者たち——とのあいだに緊張関係が生じていた。特に、バマコのイスラーム改革主義運動はRDAとともに反植民地主義を強く掲げており、植民地行政の当局であるムスリム事情局はこの運動を警戒していた(Kaba 1972, 1976)。

一方で、1940年代以前から、植民地行政はティジャーニーやムリッドといったスーフィー教団の指導者を懐柔する——教団の指導者からみれば、植民地行政をいわば利用する——という、いわゆる「イスラーム政策」をとり(坂井 2005a)、1950年代初頭には「対抗-改革」運動を支援することで、ムスリム間の問題に介入しようとしていた。

こうした同時代のイスラームをめぐる政治状況のなかで、親植民地派のティジャーニーや教団の有力なマラブーや「対抗-改革」運動の主導者がボボ・ジュラソに続々と来訪していた。さきに指摘したように、1949年7月から8月のボボ・ジュラソでの事件は、「外来者」と「土着民」の対立として植民地行政によって捉えられていた。親植民地派のマラブーの来訪に植民地行政の要請があったとすれば、他の地域で頻発していたイスラーム改革主義運動と地元のマラブーとの対立という構図で植民地行政がボボ・ジュラソの事件を把握し、こうしたマラブーの派遣をおこなっていたと考えられる。あるいは、植民地行政の要請がなかったとしても、仏領西アフリカで広域に活動していた親植民地派のマラブーたちが、植民地行政の抱いていた認識を共有していたのであろうと考えられるであろう。

しかし、親植民地派の有力なマラブーの訪問によっては、ボボ・ジュラソにおけるムスリム間の対立は解消されなかった<sup>100</sup>。結局のところ、ボボ・ジュラソの大モスクとハムダライ街区の大モスクの双方で別々に集団礼拝がなされるということで、1952年から1953年のあいだに、事態は一時的に決着をみた<sup>101</sup>。

<sup>99</sup> ANOM affpol/2259 Revue des questions musulmanes en AOF et en AEF, 4eme trimestre 1953.

<sup>100</sup> ANOM 14miom/2200 Rapport politique, Haute-Volta, 1<sup>er</sup>-4e trimestre 1950., Rapport politique, Haute-Volta, 4eme trimestre 1951.

<sup>101</sup> ANOM 14miom/2200 Rapport politique, Haute-Volta, 2eme trimestre 1952., Rapport politique, Haute-Volta, 4eme trimestre 1953.

### 8-3-3. ボボ・ジュラソにおけるメデルサ

こうした対立を含みつつ、前項でみた、セネガルと仏領スーダンで生じていたメデルサの設立をおこなうイスラーム改革主義運動は、ボボ・ジュラソにおいても、1950年代後半以降に本格化する。まず、セネガルと仏領スーダンにおけるイスラーム改革主義運動の基本的な特徴を概観のちに、ムスリム文化連合と「土着民のメデルサ」以外のボボ・ジュラソにおけるメデルサの創設者と開設に至るまでの経緯を述べて、ボボ・ジュラソにおけるメデルサ設立にどのような特徴があるのかを指摘する。

すでに別に論じたが(中尾 2016a)、セネガルと仏領スーダンにおけるイスラーム改革主義運動は、イスラームに近代教育を導入することを最大公約数としている。そのうえで、1947年に仏領スーダンのカイでメデルサを開設したアルハジ・マフムード・バ(Kane 1997)、1945年からバマコでメデルサの認可の申請を出し 1950 年によりやく開校させたアルハジ・カビネ・カバたち(Kaba 1972)、1953 年にダカールにメデルサを開設したシェイク・トゥレ(Loimeier 1998)は、程度の差はあるものの、中東・北アフリカに留学し、アラビア語の語学教育とアラビア語による近代教育の導入——後者の 2 つのグループでは、フランス語教育・世俗教育を含む——を図っている。ここには 2 つの特徴がある。第一に、中東・北アフリカの留学後にメデルサの設立がなされていること、第二に、それぞれの留学先は異なり、まったく個別に展開したことである。

一方で、仏領スーダンのセグーに 1945 年にメデルサを設立したサーダ・オマル・トゥレは、中東・北アフリカへの留学経験がなく、当人が語ったところでは、サーダ自身が受けた教育であるクルアーン学校と公立小学校の教育法をまったく独自に組み合わせて、メデルサを始めたとされる(Brenner 1992: 74)。しかし、当初、サーダ・トゥレとともにこの運動に携わったハシミ・ティアム(Hashimi Thiam)とアブー・バクル・ティアム(Abu Bakr Thiam)は別の見解を示している。彼らによれば、ハシミがすでにのちにバマコでメデルサを設立することになるアズハル大学を卒業したグループと接触し、新しい教育法を見学し、ティアム兄弟がメデルサの創設をサーダにもちかけたという(ibid.: 76)。サーダも、ティアム兄弟がメデルサの創設の話をもちかけたこと自体は認めているが、それ以前からすでにメデルサの教育を自ら行っていたのだという(ibid.: 76)。1950 年代には、ティアム兄弟はサーダと袂を分かち、前述の対抗・改革運動に参加することになる(ibid.: 76)。したがって、サーダ・トゥレがメデルサを独自に構想したものであるのかはわかっていない。少なくともいえることは、メデルサのアラビア語の語学教育が、中東・北アフリカでのアラビア語に

よる高等教育を受けたことのない在地のムスリムによっても、教授可能であったということである。

ボボ・ジュラソにおけるメデルサ開設の運動も、基本的には、サーダ・トゥレによるものと類似している。つまり、メデルサの構想の由来は曖昧なところがあるのだが、中東・北アフリカへの留学者ではなく、西アフリカ内陸でのいわゆる伝統的な教育を受けてきたマラブーたちが始めたものであった。

表 8-3 は、1960 年代までにボボ・ジュラソで設立された 6 つのメデルサの創設者、創設者の民族、設立された街区、設立年をまとめたものである。ムスリム文化連合によるメデルサと「土着民によるメデルサ」は次項で論じるため、そのほかのメデルサについて、ここで述べておこう。

創設者	創設者の民族	メデルサの街区	設立年	付記
イブラヒム・ジェネボ	ボゾ	アッカル・ヴィユ	1948	最初のメデルサ
アルハジ・マフムード・サノゴ	ダフィン	ビンドゥクソ	1957	
ペインケ・マガネ	マルカ	シカソーシラ	1958	ムスリム文化連合によるメデルサ
アルハジ・ティジャーニー・デメ	ダフィン	ヨロコーコ	1959	
ガオス・カメナ	ソングイ／コロボロ	ジャラドゥグ	1960	
ガオス・サヌ	ボボ・ジュラ	コンブグ	1962-1963	「土着民によるメデルサ」

表 8-3. 1940 年代から 1960 年代までに開設されたボボ・ジュラソのマドラサの一覧<sup>102</sup>

ボボ・ジュラソで最も古い——このことはオート・ヴォルタで最も古いということの意味するのだが——メデルサが、ジェネボのメデルサであることは、少なくとも、ボボ・ジュラソのメデルサに関わるムスリムにとってはよく知られていることである。

ジェネボのメデルサは、ジェンネ出身のボゾのマラブーであるアルファ・モイ・ジェネボのクルアーン学校に遡る。彼は 1929 年にハムダライ街区の自宅でクルアーン学校を開き、1932 年の段階では、農民たちの子ども 20 名ほどを生徒としていた<sup>103</sup>。現在のハムダライ街区の大モスクのイマームによれば、アルファ・モイ・ジェネボの息子たちはみな、このクルアーン学校で父から学んだ後に、ジェンネに修学し、次男のイブラヒム・ジェネボ

<sup>102</sup> 2013/12/23 Bobo-Dioulasso, Oumar Diénépo(アッカル・ヴィユ街区のメデルサの校長・イマーム), 2014/01/13 Bobo-Dioulasso, Amidou Sanogo(ファラカン街区のメデルサの校長), 2014/01/04 Bobo-Dioulasso, Cheick Sowari Deme(ヨロコーコ街区のメデルサの創設者の息子・メデルサの元教師), 2014/01/20 Bobo-Dioulasso, Sidi Aboubakar Kamena(ジャラドゥグ街区のメデルサの創設者の息子・メデルサの前校長), 2013/12/23 Bobo-Dioulasso, Arouna Sanou, Seydou Sanou, Adama Sanou(コンブグ街区のメデルサの関係者),およびマガネ 2016: 90 をもとに筆者作成。

<sup>103</sup> ANCI 5EE69 Fiches des renseignements sur marabouts de cercle de Bobo-Dioulasso.

(Ibrahim Diénépo)は父の指示でセネガルなどの各地を遊学したという<sup>104</sup>。アルファ・モイ・ジェネポの死後、長男のバモイ・ジェネポがクルアーン学校を継いだのちに、1948年、バモイとイブラヒムが現在のアッカル・ヴィユ街区に学校を設立し、1952年には生徒数は200名ほどになっている<sup>105</sup>。これがブルキナファソの最初のマドラサ「バモイ・ジェネポ・イスラーム学校」(l'École Islamique Diénépo Bamoi)(の前身)である。

こうした最初期のメデルサの関係者はすべて亡くなってしまっていたため、いつ頃、どのように近代教育のスタイル(教室、黒板、ノート、語学としてのアラビア語教育)が導入されたのかは筆者の聞き取りでは明確に知ることができなかった。1987年にイブラヒム・ジェネポとマハムード・サノゴ(Mahamoud Saghanogo/Sanogo)がイーサ・シセに語ったところでは、以下のような経緯であった。

イブラヒム・ジェネポのメデルサは1955-1956年に設立され、マハムード・サノゴは1947年から1956年のあいだに仏領スーダンのジウマ(Diouma)、トンブクトゥ、バルウェリ(Barweli)、セグーで学んだ後にボボ・ジュラソにもどり、1957年にメデルサを開設している(Cissé 1990: 59)。イーサ・シセによれば、イブラヒム・ジェネポも、マハムード・サノゴも、セグーでメデルサをすでに運営していたサーダ・トゥレに言及し、ジェネポはサーダ・トゥレから教育法について助言を受け、サノゴはセグー滞在時にサーダ・トゥレのメデルサで学んだという(ibid.: 59)。

すでに述べたように、ジェネポの子孫やマハムード・サノゴへの筆者の聞き取りでは、こうしたことは語られなかった。すでに失われた記憶であるのかもしれない。ジェネポのメデルサの創立の年代については、やや混乱している。

現在では、1948年とされており<sup>106</sup>、1953年に植民地行政へのクルアーン学校の届出においても、アッカル・ヴィユ街区のジェネポの「クルアーン学校」は1948年に開設されたと書かれている<sup>107</sup>。また、オート・ヴォルタ植民地の1952年の第三四半期報告書では、「フランコ-アラブ・マドラサ」(une médersa franco-arabe)の開設のための申請が植民地行政

---

<sup>104</sup> 2013/12/17 Bobo-Dioulasso, al-Hadj Abraham Diénépo(ハムダライ街区の大モスクのイマーム)。

<sup>105</sup> CNABF 28V30 Correspondance relative à l'ouverture d'écoles coraniques. Cercle de Bobo-Dioulasso (1952-1958). 2013/12/23 Bobo-Dioulasso, Oumar Diénépo(アッカル・ビュ街区のメデルサの校長・イマーム)

<sup>106</sup> 2013/12/23 Bobo-Dioulasso, Oumar Diénépo(アッカル・ビュ街区のメデルサの校長・イマーム)。

<sup>107</sup> CNABF 28V30 Correspondance relative à l'ouverture d'écoles coraniques. Cercle de Bobo-Dioulasso (1952-1958).

に対してなされたとしている<sup>108</sup>。さきに述べたように、1953年時点で、アッカル・ヴィユ街区のジェネポの「クルアーン学校」は200名あまりの生徒を抱えていた。同時期の生徒数の記載のある他のクルアーン学校では生徒数34名が最大であり<sup>109</sup>、すでにこの時点で多数の生徒を教えるための近代教育が導入されていたと推測される。

しかし、イブラヒム・ジェネポがイーサ・シセに1955-1956年に設立されたと語ったことも理由のないことではなかった。オート・ヴォルタ植民地の1953年の第四四半期報告書では、ボボ・ジュラソにおけるメデルサの試みが在地のムスリムの反対にあって潰えたとされている<sup>110</sup>。1962年に、後に述べるボボ・ジュラソのムスリム文化連合のメデルサに入学し、同校のメデルサの教師として働いているサリア・サヌ(Salia Sanou)は、ジェネポのメデルサが、当初は長老たちの反対にあっていたことを語っていた<sup>111</sup>。長老たちは、地べたに座って木の板のうえにクルアーンの章句を書いて覚えるクルアーン学校とは異なって、黒板をつかっておこなうような授業は植民地行政の学校のだとして納得しなかったのだという。もっとも、こうした反対派の意見は徐々に力を失っていったように思われる。表8-3でみるように、1957年以降に続々とメデルサが開校されていった。

さらに、多くの場合、こうしたメデルサを始めたマラブーたちは、イブラヒム・ジェネポのように1940年代ごろまでにボボ・ジュラソで影響力があったと考えられるマラブーの弟子たちであった。

このことは、クルアーン学校の開設の届出の書類から一定程度、明らかにすることができる。1952年から1966年までのボボ・ジュラソ管区では、47校のクルアーン学校が植民地行政に届出を提出している<sup>112</sup>。この文書には、届出の提出者であるマラブーの修学歴が基本的に記入されており、ボボ・ジュラソ管区内の35名のマラブーの修学先がわかっている。この文書を読むと、前述のアルハジ・マフムード・サノゴの父のアルハジ・ユースフ・サノゴ(al-Hadj Yousouf Sanogo)もまた、アルファ・モイ・ジェネポに比するような教育者であったと推測される。

<sup>108</sup> ANOM 14miom/2200 Rapport politique, Haute-Volta, 3eme trimestre 1952.

<sup>109</sup> CNABF 28V30 Correspondance relative à l'ouverture d'écoles coraniques. Cercle de Bobo-Dioulasso (1952-1958).

<sup>110</sup> ANOM 14miom/2200 Rapport politique, Haute-Volta, 4eme trimestre 1953.

<sup>111</sup> 2014/01/08 Bobo-Dioulasso, Salia Sanou(シカソ・シラ街区のメデルサの卒業生で教員、ファラカン街区のモスクのイマーム).

<sup>112</sup> CNABF 28V30 Correspondance relative à l'ouverture d'écoles coraniques. Cercle de Bobo-Dioulasso (1952-1958)., CNABF 44V683 Ouverture d'écoles coraniques des différents cercles. 1952-1966.

アルハジ・ユースフ・サノゴは、ダフィンのランフィエラから分岐したサノゴ——本稿 4 章で言及した、ランフィエラのカラモコ・バこと、ママドゥ・サノゴのサノゴの一族——の一族であり、ユースフはサファネ周辺のバラ村出身であった<sup>113</sup>。クルアーン学校の開設に関する文書からは、ユースフは少なくとも現在のコートディヴォワールでクルアーン学校を開いたのちに、1930 年代にボボ・ジュラソに落ち着いたものと考えられる<sup>114</sup>。息子のアルハジ・マハムード・サノゴのほかにクルアーン学校の教師でアルハジ・ユースフ・サノゴから教えを受けたのは、ファラカン街区のダヌマ・カマラ(Danouma Camara)、タヌ・パコ(Tanou Pako)、ハムダライ街区のラッシナ・ゾロメ(Lassina Zorome)、ボボ・ジュラソ管区のバマ村のアマラ・サヌ(Amara Sanou)がいる<sup>115</sup>。この文書群のなかで、アルハジ・ユースフ・サノゴが修学先として最も言及の多い人物であった。

ヨロコーコ街区にメデルサを設立したアルハジ・ティジャーニー・デメ(al-Hadj Tidjani Deme)も、アルハジ・ユースフ・サノゴと同様にダフィンのマラブーであった。アルハジ・ティジャーニー・デメの父のソワリ・デメ(Sowari Deme)はコンに住むダフィンのマラブーであったが、サモリ・トゥレの来襲を聞きつけ、ボロモの周辺に逃げ込んだという<sup>116</sup>。1915 年から 1916 年のヴォルタ・バニ戦争でデドゥグに連行された——おそらく、いわゆる「マラブー事件」(本稿 4 章 3 節及び 7 章 2 節 1 項)に連座された——のちに、1920 年代ごろにボボ・ジュラソに定着するようになった。この後に、アルハジ・ティジャーニー・デメが生まれている。アルハジ・ティジャーニー・デメはボボ・ジュラソに居住していたダフィンのイドリッサ・シセ(Idrissa Cissé)、コンのジュラのマラブーであるバサリク・サノゴ(Bassoualikou Sanogo)、ダールサラーム出身の学名高いマルハバ・サノゴ(Marhaba Sanogo)から学び、二度のマッカ巡礼を経た後、1959 年に語学としてのアラビア語も教えるメデルサを設立した。

イドリッサ・シセは、ワッハーブ出身のダフィンのマラブーで、英領ゴールド・コーストのクマシでマラブーをしたのち、遅くとも 1939 年からボボ・ジュラソに居住し<sup>117</sup>、1940

---

<sup>113</sup> 2014/01/13 Bobo-Dioulasso, Amidou Sanogo(ファラカン街区のメデルサの校長).

<sup>114</sup> CNABF 28V30 Correspondance relative à l'ouverture d'écoles coraniques. Cercle de Bobo-Dioulasso (1952-1958).

<sup>115</sup> CNABF 28V30 Correspondance relative à l'ouverture d'écoles coraniques. Cercle de Bobo-Dioulasso (1952-1958).

<sup>116</sup> 以下、デメの一族についての内容は 2014/01/04 Bobo-Dioulasso, Cheick Sowari Deme(ヨロコーコ街区のメデルサの創設者の息子・メデルサの元教師).

<sup>117</sup> CNABF 28V30 Correspondance relative à l'ouverture d'écoles coraniques. Cercle de Bobo-Dioulasso (1952-1958).

年代に建てられたコンブグ街区の二代目のイマームを務めている<sup>118</sup>。なお、イドリッサ・シセ以降のイマームはみな、アルハジ・ティジャーニー・デメに学んだとされる<sup>119</sup>。イドリッサ・シセの教え子でクルアーン学校を開いた人物は、アルハジ・ティジャーニー・デメのほかに、ワッハーブ出身でトヌマ街区のウスマン・ジャロ(Ousmane Diallo)、居住地は不明であるが、ムムニ・ダンベレ(Moumouni Dembele)がおり<sup>120</sup>、イドリッサ・シセは一定の影響力をもったマラブーであったことがうかがわれる。

このように、イブラヒム・ジェネボ、マハムード・サノゴ、ティジャーニー・デメはいずれも父親がマラブーであり、それぞれすでにボボ・ジュラソで一定の影響力のあるマラブーから学んでいたが、1960年にジャラドゥグ街区にメデルサを設立したガオス・カメナ(Gaoussou Kamena)の場合はやや異なっている<sup>121</sup>。ガオス・カメナの父のアブバカル・カメナは、ジェンネ出身のコルボロ(ソンガイ)でボボ・ジュラソに移り住んできた。アブバカルはムスリムで、クルアーンについての多少の知識はあったものの、商人として働いていた。彼は息子のガオス・カメナを、ボボ・ジュラソに在住していたマリ出身のアルマーミ・スワリ(almamy Soumari)のもとに学ばせた。しかし、このアルマーミ・スワリの来歴についてはわかっておらず、この人物そのものはそれほど著名ではなかった可能性が高い<sup>122</sup>。

このアルマーミ・スワリの死後、彼には息子がいなかったため、ガオス・カメナがそのクルアーン学校を継いだ。1953年にガオス・カメナによって提出されたクルアーン学校の届出には、植民地行政官からの付記がつけられている。これによれば、ガオスはワイグヤ、ワガドゥグを頻繁に訪問し、1950年にはアビジャン、1952年にはバマコを訪問しており、そのマラブーとしての名声が非常に高いとされている<sup>123</sup>。ガオス・カメナは息子であるシ

---

<sup>118</sup> 2014/01/03 Bobo-Dioulasso, al-Hadj Sanou(コンブグ街区のモスクのイマーム)。

<sup>119</sup> 2014/01/03 Bobo-Dioulasso, al-Hadj Sanou(コンブグ街区のモスクのイマーム)。

<sup>120</sup> CNABF 28V30 Correspondance relative à l'ouverture d'écoles coraniques. Cercle de Bobo-Dioulasso (1952-1958)。

<sup>121</sup> 以下、ガオスの家族についての記述は 2014/01/20 Bobo-Dioulasso, Sidi Aboubakar Kamena(ジャラドゥグ街区のメデルサの創設者の息子・メデルサの前校長)。

<sup>122</sup> ガオスがアルマーミ・スワリに学んだという点については、1954年に提出されたガオスのクルアーン学校開設の申請書とガオスの息子の説明の双方が一致している。しかし、この人物がマリの出身者であること以上をガオスの息子のシーディー・アブバカル・カメナ氏も知らなかった。1930年代にとられたボボ・ジュラソ管区の著名なマラブーの個人調書の史料群(ANCI 5EE69 Fiches des renseignements sur marabouts de cercle de Bobo-Dioulasso.)やその他の報告書等で、この人物についての情報を得ることはできなかった。

<sup>123</sup> CNABF 28V30 Correspondance relative à l'ouverture d'écoles coraniques. Cercle de Bobo-Dioulasso (1952-1958)。

ーディー・アブバカルを自身のクルアーン学校に学ばせ、その当時、すでにハムダライ街区にあったとされるアフマド・トゥレ(Ahmed Toure)のメデルサ——アフマド・トゥレには子孫がおらず、またこのマドラサも現存していなかったため、アフマド・トゥレの詳細は不明である——に通わせたのちに、シーディー・アブバカルは公立の小学校を卒業した。1960年、ガオス・カメナは、息子のシーディー・アブバカルをフランス語教師として、近代教育を行うメデルサを開設した。

ここまで、1960年代までにボボ・ジュラソに設立された、ムスリム文化連合と「土着民のメデルサ」以外の4つのメデルサの創設者についてまとめてきた。まず指摘できることは、中東・北アフリカへの留学によってメデルサが持ち込まれたわけではない、ということであった。

他方で、先行研究では、ボボ・ジュラソのメデルサはいわば外からもたらされたことを指摘してきた。イーサ・シセによる先駆的な研究では、ボボ・ジュラソのメデルサは、イブラヒム・ジェネポとマハムード・サノゴをとりあげて、仏領スーダンのセグーでメデルサを運営していたサーダ・トゥレのメデルサがボボ・ジュラソに移入されてきたものとして論じられていた(Cissé 1990)。

すでに述べたように、現在、こうした経緯はよくわからなくなっている。そうした調査上の偏りがあることは認めなければならない。しかし、ここまで述べてきた筆者による調査では、イーサ・シセのとりあげなかったメデルサやマラブーの師弟関係を明らかにすることで、ボボ・ジュラソ内部でのイスラーム教育の漸次的な発展のなかにメデルサが位置づけられるようになったと考えている。端的に言えば、本項でとりあげたメデルサの創設者の4名はいずれも植民地統治以降にボボ・ジュラソに到来した人物であるが、彼らの修学のネットワークは必ずしも植民地統治や植民地経済を前提とするものではなかった。

基本的なことであるが、彼らはみなマラブーであった。植民地官吏、公立学校の教師、商社勤めとは異なって、転勤によって西アフリカ内陸の都市を行き来したわけではなかった。階層制をもった公立学校の修学が、地方の農村の小学校、ワガドゥグの中学校、ダカールの高等師範学校といったように、生徒を一定の経路をもって移動させ、緊密な人間関係を構成させたこと、この人間関係が仏領西アフリカ全体にまたがる政治家たちの活動を支えたことと対比して考えれば、これまで述べてきたマラブーたちの修学歴がほとんど植民地統治の直接的な影響を受けていないことがわかる。在地の高名なマラブーから学習していることや各地を渡り歩く修学の形態は、むしろ、植民地統治以前からのものと何ら変



わりはない。

また、ここでとりあげたマラブーたちがバマコやセグーのメデルサに集中して学んだわけでもなかった。直接、セグーのメデルサで学んだとされるマハムード・サノゴでさえ、サーダ・トゥレのメデルサは数ある修学先の一つに過ぎなかった。おそらく他のメデルサの創始者たちも、イブラヒム・ジェネポのようにサーダ・トゥレから助言を受けたようなかたちで、メデルサの方法論を受容していったものと考えられる。

植民地統治の影響をしいて見出すのであれば、植民地経済の発展によって、ボボ・ジュラソが都市としての発展をとげ、都市に多様な地域のマラブーたちが集まってきたことであろう。イブラヒム・ジェネポ、ガオス・カメナの父は仏領スーダンのジェンネの出身者であり、マハムード・サノゴ、ティジャーニー・デメの父はダフィンの出身者であった。部分的にはコンのサノゴといった在地のマラブーから学ぶことはあったが、それぞれ個別の既存のネットワークのなかで彼らは修学を遂げている。もちろん、語られることはなかったが、おそらく相互の部分的な交流はあったのであろう。しかし、重要な点は、唯一の中心があったわけではなく、複数のマラブーたちが同時並行的にメデルサの創設に至ったということである。このことは、西アフリカ内陸における伝統的なイスラーム教育の一部には、内発的にイスラームの近代教育へと発展することを可能とするポテンシャルを有していたことを示している。

次項で述べるように、イブラヒム・ジェネポはムスリム文化連合に当初から参与していたが、他のメデルサの創設者はそうではなかった。しかし、1960年代になると、ティジャーニー・デメ、ガオス・カメナはムスリム文化連合に参与するようになる。1962年のムスリム協会(ムスリム文化連合の改称)内の「専門評議会」の委員にデメは着任しており<sup>124</sup>、1965年の「情報委員会」の委員にはカメナの名前を見出すことができる<sup>125</sup>。おおまかにいえば、ボボ・ジュラソのメデルサ創設の流れはムスリム文化連合を通じて緩やかに合流するようになった。

次項では、ボボ・ジュラソにおけるムスリム文化連合ヴォルタ支部の設立までの経緯と、その活動によって生じたムスリム文化連合によるメデルサと「土着民のメデルサ」がどのように成立したのかを論じていく。

---

<sup>124</sup> マガネ 2016 に収録された Procès-verbal de la réunion de la Communauté Musulmane, Bobo-Dioulasso, 19/8/1962.

<sup>125</sup> マガネ 2016 に収録された La liste des membres de la commission d'information, 1965.

#### 8-3-4. ムスリム文化連合のメデルサと「土着民のメデルサ」

すでに述べたように、ムスリム文化連合は、モーリタニア、アルジェリアに留学したセネガル出身のシェイク・トゥレによって、1953年にダカールに設立された。いかなる経緯によって、ボボ・ジュラソにムスリム文化連合の支部が設置されるようになったのか、正確なことはわかっていない。しかし、創設メンバーの息子のイブラヒム・マガネ(Ibrahim Magane)によれば、RDA ボボ・ジュラソ支部を熱心に支援していたアルハジ・ラッサナ・ジャキテ(本稿 7 章参照)の邸宅に頻繁に集っていたムスリムたちを中心にして、ムスリム文化連合の支部が 1956 年に設立されたとされる<sup>126</sup>(マガネ 2016: 90)。ラッサナ・ジャキテの邸宅では、RDA の会合もしばしばひらかれており、ダカールのムスリム文化連合の情報がもたらされたことはそれほど不思議なことではないだろう。ラッサナ・ジャキテはヴォルタ支部の初代会長に就任するが、この年に亡くなり、モリ・ジャキテ(Mori Diakite)が二代会長となった(ibid.: 91)。

一般論としていえば、最初期にムスリム文化連合に参加した人びとは、セネガル、ギニア、仏領スーダンの出身の商人とマラブーであった<sup>127</sup>。しかし、その詳細はよくわかっていない。1957 年ごろに、ムスリム文化連合ヴォルタ支部の創設メンバーの写真がとられているが(図 8-9)、このうち、経歴がわかっている人物はイブラヒム・ジェネポとベインケ・マガネ(Benge Magane)である。

アルハジ・ベインケ・マガネは、仏領スーダンのシンサニ出身のマルカで、両親ともにマラブーの一族の生まれであった(ibid.: 89)。セネガル、仏領スーダン、アラブ諸国をまわったのちに、1948 年からボボ・ジュラソに住み、クルアーン学校を開いたとされる(ibid.: 89-90)。1955 年に提出されたクルアーン学校の届出では、マガネはボボ・ジュラソでアルファ・モイ・ジェネポのもとで 8 年、その後、仏領スーダン南西部のトゥバ(Touba)で 8 年学んだとされる<sup>128</sup>。どのような伝手によるものか、その後、どのようなになったのかは不明であるが、1955 年までにマガネは自身のクルアーン学校にエジプト出身のアルハジ・シェイク・モハメド(al-Hadj Cheick Mohamed)を教師として招いている(ibid.: 90)。

<sup>126</sup> ただし、マガネ 2016 収録の史料 Procès-verbal de l'assemblée générale constitutive de l'union culturelle musulmane, section régionale de Bobo-Dioulasso, 12/1/1958.によれば、ムスリム文化連合第一回連邦大会の後の 1958 年 1 月に結成されたと書かれている。

<sup>127</sup> Traoré 2004; 2013/12/17 Bobo-Dioulasso, al-Hadj Abraham Diénépo(ハムダライ街区の大モスクのイマーム)。

<sup>128</sup> CNABF 28V30 Correspondance relative à l'ouverture d'écoles coraniques. Cercle de Bobo-Dioulasso (1952-1958).

いずれにしても、イスラームの近代教育に対して積極的であった仏領スーダン出身のマラーブーと大商人たちが結集してつくられたのが、ムスリム文化連合ヴォルタ支部であった。

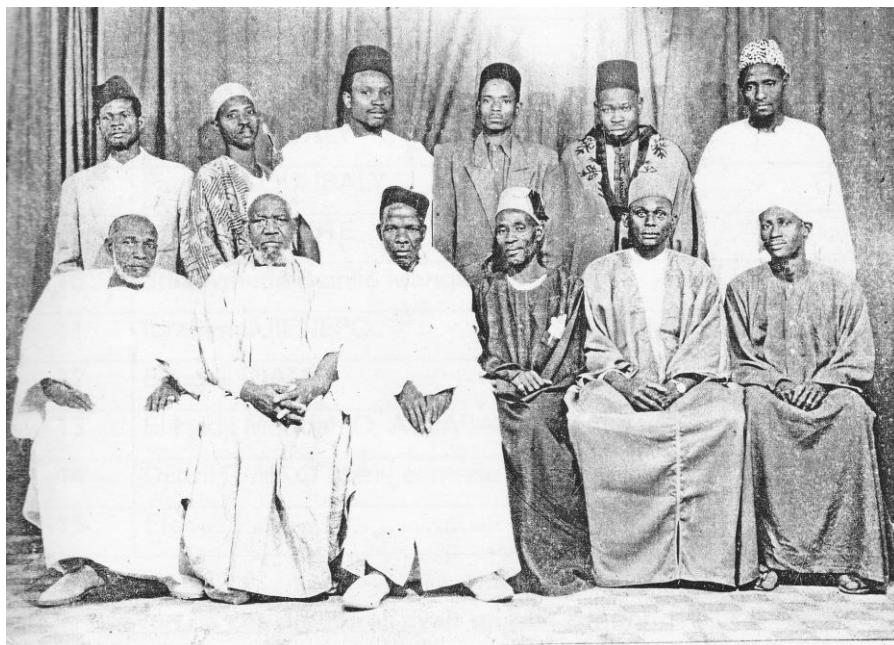


図 8-9. ムスリム文化連合ヴォルタ支部の創設メンバー(マガネ 2016: 91、後段右から 3 人目がベインケ・マガネ、その右隣がイブラヒム・ジェネボ)

1957 年 12 月 22 日から 25 日にかけて、各植民地の枠を超えた、ムスリム文化連合の第一回連邦大会がダカルで開催された。ヴォルタ支部は、ベインケ・マガネとイブラヒム・ジェネボとベンガリ・ジャネ——この人物の来歴は不明——の 3 名をこの連邦大会に派遣している(ibid.: 92)。この連邦大会以前から、ヴォルタ支部が運営する公認のメデルサを設置する構想があったのかどうかはわからないが、この連邦大会を機にヴォルタ支部は公認のメデルサの設置に動き出すことになる。

まず、マガネらの代表団は、この連邦大会でセネガル出身のウォロフのンジャワール・ンジェイエ(N'Diawar N'Dieye)を将来のヴォルタ支部のメデルサのアラビア語教師として雇う契約を行っている(ibid.: 92)。こうして翌年の 1958 年にンジャワール・ンジェイエがボボ・ジュラソに来訪し、ンジェイエを校長、ベインケ・マガネ、ムクタール・バの息子のアブバカル・バをアラビア語教師、植民地官吏の退職者であった「セニ翁」(le vieux Seni)をフランス語教師として、ムスリム文化連合のメデルサが開校された(ibid.: 105-106)。

しかし、1958 年時点では、校舎がなく、ハムダライ街区のmamou・フォファナ(Mamou

Fofana)の個人宅で授業がなされ、教師たちへの給料の支払いはヴォルタ支部の創設メンバーの一人であったアルハジ・ママドゥ・コネという個人によってなされた(ibid.: 105)。ムスリム文化連合のメデルサの土地探しは難航したが、最終的に、当時、ボボ・ジュラソ市長であったジブリール・ヴィナマ——RDA ボボ・ジュラソ支部の幹部を歴任した人物(本稿 7 章)——の主導で、シカソ-シラ街区の土地が用意され、校舎、トイレ、教員宿舎の建設費用のすべてをボボ・ジュラソ市が負担した(ibid.: 106)。1960 年に後者が完成し、教師も増員され、ジェネポのメデルサからも自発的に児童が集まるようになっていった(ibid.: 105-106、図 8-10)。

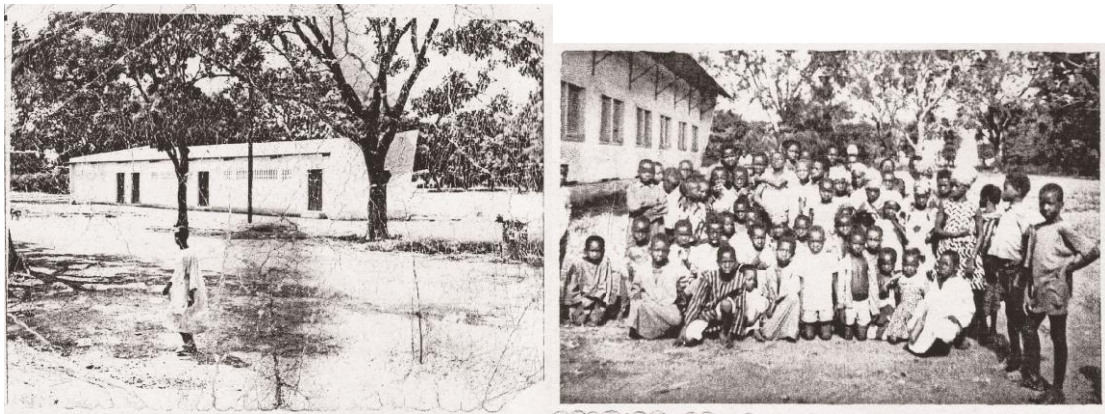


図 8-10. 1960 年開設当時のメデルサと児童の写真(マガネ 2016: 105)

このように、1958 年にムスリム文化連合のメデルサが開校し、1960 年に校舎が完成することになった。こうしたムスリム文化連合の活動は広く受け入れられていき、徐々にボボ・ジュラソのマラブー全体を巻きこむようになっていった。このことはヴォルタ支部の組織名簿から垣間見ることができる。やや年代が遡るが、1956 年 12 月のムスリム文化連合の第一回連邦大会の報告会が 1957 年 1 月にボボ・ジュラソでおこなわれた。このときの事務局の構成が表 8-4 である。これをみると、事務局が基本的に、シカソ-シラ街区とハムダライ街区の商人、商社勤め、マラブーによって構成されていたことがわかる。これはすでに述べた設立当初の一般的な傾向と合致している。

役職	人名	職業
会長	Mory Diakite	シカソーシラ街区の商人
副会長	Sounkalo Konate	シカソーシラ街区の有力者
事務総長	Mory Conde	シカソーシラ街区の商人
事務補佐	Abdoulaye Coulibaly	ハムダライ街区の運送業者
運営幹事長	al-Hadj Mouda	商社(S.C.O.A.)勤務
運営補佐	Amaou Diakite	バンジェール通りの商人
宣伝事務長	al-Hadj Bangaliy Diane	商人
宣伝事務長補佐	Beinke Magane	クルアーン学校教師
財務長	al-Hadj Mamadou Kone	ハムダライ街区の商人
会計監査	al-Hadj Famory Coulibaly	商社(S.C.O.A.)勤務
財務長補佐	Aliou Coulibaly	商社(Peyrissac)勤務
教育担当	Ibrahim Dienepo	クルアーン学校教師

表 8-4. 1957 年 1 月時点でのムスリム文化連合ヴォルタ支部の事務局<sup>129</sup>

一方で、1957 年 1 月には、ヴォルタ支部には紛争委員会(le comité de conflit)が設置されている。紛争委員会の活動内容が何であるのか規定は書かれていないが、前述の「外来者」と「土着民」の対立の調停を意図したものと推測される。実際のところ、そのメンバー構成をみると(表 8-5)、種々の立場のマラブーが参加している。ボボ・ジュラソの大モスクのイマームであるサリア・サヌとハムダライ街区の大モスクのイマームのバモイ・ジェネポの両者の名前があり、コン出身のジュラのサノゴのモスクのイマーム(バルル・サノゴ)、ボボ・ジュラの古いマラブーの家系のカッサンバ・ジャビも入っている。

サリア・サヌがいつ頃、ムスリム文化連合に本格的に参加し始めたのか、正確には分かっていないが、1958 年から 1959 年初めのころと推測される。1959 年 7 月の文書ではすでにサリア・サヌはムスリム文化連合の会長にすでに就任している(表 8-6)。このときには、サリア・サヌはムスリム文化連合のメデルサの学期修了式に参列し、祝辞を述べ、メデルサの試みを高く評価し、自ら寄付金を贈り、他の参加者にも寄付を呼びかけている<sup>130</sup>。

<sup>129</sup> マガネ 2016 収録の史料 Procès-verbal de l'assemblée générale constitutive de l'union culturelle musulmane, section régionale de Bobo-Dioulasso, 12/1/1958.から筆者作成。人名の明白な表記の誤りは訂正した。

<sup>130</sup> CNABF 7V485 Renseignement sur l'activité de l'union culturelle musulmane de Bobo-Dioulasso, le 27 juin 1959.

紛争委員会(le comité de conflit)

人名	職業
Salia Sanou	ボボ・ジュラソ大モスクのイマーム
Bamoï Dienepo	ハムダライ街区大モスクモスクのイマーム
Baloulou Sanogo	コンブグ街区のモスクのイマーム
Bakary Kassamba-Diabi	コーコ街区の街区長
Mamadou Diarra	シカソーシラ街区のモスクのイマーム
Dramane Sanou	ファラカン街区のマラブー
al-Hadj Karamocokie Sanogo	ファラカン街区の商人
al-Hadj Bacar Bocoum	ハムダライ街区の商人

表 8-5. 1957 年 1 月時点でのムスリム文化連合ヴォルタ支部の紛争委員会<sup>131</sup>

役職	人名	職業
会長	Salia Sanou	ボボ・ジュラソ大モスクのイマーム
事務長	Abdoulaye Coulibaly	不明
補佐	al-Hadj Bounaf Diakite	ハムダライ街区の商人
	al-Hadj Mamadou Kone	ハムダライ街区の商人

表 8-6. 1959 年 7 月時点でのムスリム文化連合ヴォルタ支部の事務局主要メンバー<sup>132</sup>

このようにムスリム文化連合への参与を深めるなかで、1959 年 6 月ごろから、サリア・サヌは、「ボボ・ジュラソの出身者」によるメデルサの開校を模索するようになる<sup>133</sup>。サリア・サヌはこのメデルサの教師として 1958 年にガーナからの国外追放によってボボ・ジュラソにもどっていたアルハジ・マルハバ・サノゴ(al-Hadj Marhaba Sanogo)を第一の候補に掲げていた。

マルハバ・サノゴは、ダールサラミを創設したジュラのサノゴの家系に生まれ、ダールサラミで学んだ後に、サタマ・ソコロ(Satama-Sokoro、コートディヴォワール中央部)、ボンドゥク(Bondoukou、コートディヴォワール北東部)、ソコト(Sokoto、ナイジェリア北西部)、ザイラ(Zaira、ナイジェリア北部)、クマシ(Kumase、ガーナ南部)で学び、マッカ巡礼を果たした後に、現在のガーナの首都のアクラでクルアーン学校を開いていた(Wilks et al. 2003: 554; Traoré 2012: 245-246)。マルハバが政治上の理由でアクラを離れたことは知

<sup>131</sup> マガネ 2016 収録の史料 Procès-verbal de l'assemblée générale constitutive de l'union culturelle musulmane, section régionale de Bobo-Dioulasso, 12/1/1958.をもとに筆者作成。人名の明白な表記の誤りは訂正した。

<sup>132</sup> 7V485 Renseignement sur l'activité de l'union culturelle musulmane de Bobo-Dioulasso, le 27 juin 1959.をもとに筆者作成。なお、職業については他の史料を参照した。

<sup>133</sup> CNABF 7V485 Renseignement sur la gestion d'une éventuelle médersa des originaires de Bobo-Dioulasso, le 26 juin 1959.

られているが、具体的にどのようなものであったのかはわからなくなっている<sup>134</sup>。

マルハバはヴォルタ川流域のマラブーのなかでも格段に多くのアラビア語の著作を残した人物であり(Wilks et al. 2003)、ヴォルタ川流域のイスラーム史を初めて著したウィルクスの主要なインフォーマントであった<sup>135</sup>。マルハバの学識はボボ・ジュラソを越えて広く知られていたようである。植民地統治末期と独立後のニジェールの国会議長をつとめた政治家で著述家のブブ・ハマ(Boubou Hama)がマルハバの著作をニジェールに移したほどであった<sup>136</sup>。

しかし、マルハバがメデルサで教えることに関しては、ボボ・ジュラの最年長の有力者であったシディキ・バレ(Sidiki Bare)やボボ・ジュラソ郡長のアリ・サヌ(Ali Sanou)が「政治的」であるとして反対したため<sup>137</sup>、マルハバを校長にしようとしたが<sup>138</sup>、最終的にはボボ・ジュラのマラブーであったガオス・サヌ(Gaoussou Sanou)が校長となった<sup>139</sup>。なお、マルハバは 1976 年にダールサラームにメデルサを開設している<sup>140</sup>。

このメデルサの現在の教師らによれば、1963-1964 年に、公安による史料では 1960 年にこのメデルサは開校した<sup>141</sup>。このメデルサの教師となったのは、先述のガオス・サヌ、コンのジュラのマラブーであるバサリク・サノゴ、アルファ・モイ・ジェネポに学んだアルファ・モイ・カッサンバ・ジャビ、パコ・タヌ(Pako/Fako Tanou)である<sup>142</sup>。特に注目すべきは、異色の経歴をもつパコ・タヌである。タヌはクルアーン学校に通いつつ、公立の小学校を卒業し、商社、郵便局員を経て、メデルサを創設したマハムード・サノゴの父のアルハジ・ユースフ・サノゴに学び、1950 年からファラカン街区でクルアーン学校を開いて

---

<sup>134</sup> 2014/01/10 Bobo-Dioulasso, Aramatou Sanogo(マルハバ・サノゴの孫娘)、2014/01/15 Bobo-Dioulasso, Mahamoud Sanogo(マルハバ・サノゴの孫)。

<sup>135</sup> Wilks 1968, 2000 の脚注を参照。

<sup>136</sup> 2014/01/15 Bobo-Dioulasso, Mahamoud Sanogo(マルハバ・サノゴの孫)、および川田 2000: 20-21 の「サイ」とは Sya、つまり、ボボ・ジュラソの誤りであろう。

<sup>137</sup> CNABF 7V485 Renseignement sur la gestion d'une éventuelle médersa des originaires de Bobo-Dioulasso, le 26 juin 1959.

<sup>138</sup> CNABF 7V485 Renseignement sur la médersa des autochtones de Bobo-Dioulasso, le 30 septembre 1959.

<sup>139</sup> 2013/12/23 Bobo-Dioulasso, Arouna Sanou, Seydou Sanou, Adama Sanou(コンブグ街区のメデルサの関係者)。

<sup>140</sup> 2014/01/21 Darsalamy, Al-Hadj Bousa Sanogo (ダールサラームのイマーム)。

<sup>141</sup> CNABF 7V485 Renseignement sur la médersa des autochtones de Bobo-Dioulasso, le 2 juillet 1960. 2013/12/23 Bobo-Dioulasso, Arouna Sanou, Seydou Sanou, Adama Sanou(コンブグ街区のメデルサの関係者)。

<sup>142</sup> CNABF 7V485 Renseignement sur la médersa des autochtones de Bobo-Dioulasso, le 30 septembre 1959.

いた<sup>143</sup>。

近代教育の導入にあたって、こうした人物が重要な役割を果たしたことは想像にかたくない。先に述べたように、ムスリム文化連合のメデルサでは、開始当初は、植民地官吏の退職者がフランス語を教えていた。1960年代にマハムード・サノゴのメデルサに通っていた、仏領スーダンのシカソ周辺の農村出身のムスタファ・トラオレ(Moustafa Traoré)は興味深い話を聞かせてくれた<sup>144</sup>。彼は1941年生まれで、中学校まで通った後に、ガーナで英語とフランス語の通訳として働いた後に、1966年にボボ・ジュラソに落ち着き、綿花加工会社で働いていた。出身村でカトリックの洗礼を受けていたが、ムスリムであったオジの教えを受けて、ボボ・ジュラソで彼はムスリムとなった。彼はマハムード・サノゴのメデルサに通い、アルファベットでクルアーンの章句を学ぶ一方、当時、マハムード・サノゴのメデルサでは、フランス語が教えられていなかったため、彼がフランス語を教えていたという。

多くのムスリムにとって、フランス語とアラビア語の双方を学ぶ機会は、メデルサ以前にはほとんどなかった。これは単に学習の機会がなかったことにとどまらない。植民地官吏や商社勤めのホワイトカラーのようなフランス語の読み書き能力を用いる者たちの世界と、イスラームとアラビア語に通じたマラブーたちの世界とが、まったく分離していたのである。メデルサは、いわば文字言語によって分割されていた世界を繋ぎ合わせようとする試みであった。次項では、このことの含意をムスリム文化連合の目的と活動から浮き彫りにする。

### 8-3-5. ムスリム文化連合の目的と活動

結論からいえば、ムスリム文化連合の主たる目的は、アラビア語の近代教育の普及とそのための行政による支援の確保にあった。このことは、1956年12月にダカールで開かれたムスリム文化連合第一回連邦大会の「全体決議」においても、明瞭に示されている<sup>145</sup>。

「全体決議」では、西アフリカ連合全体の予算による学生の中東・北アフリカ諸国への留学と「アラビア語学校」の建設、アラビア語教育の権利の承認、中等教育以上での公立

---

<sup>143</sup> CNABF 7V485 Renseignement sur la médersa des autochtones de Bobo-Dioulasso, le 30 septembre 1959.

<sup>144</sup> 2013/12/17 Bobo-Dioulasso, Moustafa Traoré(シカソ・シラ街区の第二モスクのイマーム).

<sup>145</sup> マガネ 2016 に収録されている Les résolutions générales présenté au 1er Congrès Fédéral de l' U.C.M. du 22-23-24 et 25 décembre 1957.



学校におけるアラビア語講座の設置が、まず最初に要求されている。それに続いて、留学経験者や「アラビア語教育」をうけた学生を優先的に行政で雇用すべきこと、アルコール飲料の輸入禁止や禁酒法の制定、マッカ巡礼の制度的支援が要求される項目にあがっている<sup>146</sup>。

この決議は、1957年1月のボボ・ジュラソのムスリム文化連合支部の全体会合においても、読みあげられている<sup>147</sup>。この会合は熱気にあふれていたこと、特に異論が出されたことは書かれていないことから、ボボ・ジュラソにおいても、同様の方針が共有されていたのであろう。実際のところ、ボボ・ジュラソのヴォルタ支部は1958年9月に、RDA-PDUの党大会において、(1)ムスリム事情局の閉鎖、(2)ムスリム事情局に代わってムスリム文化連合をその任にあてること、(3)ワガドゥグ、ボボ・ジュラソ、クドゥグ、ワイグヤ、バンフォラの5つの都市に公立の「フランコアラブ学校」(メデルサ)を建設することの動議を発することを決定している<sup>148</sup>。なお、(1)と(2)の主張は、第一回連邦大会の「全体決議」には含まれてはいなかったが、「指針報告」のなかで述べられており、ヴォルタ支部の発案というわけではなかった<sup>149</sup>。

これらの要求がそのまま受け入れられた形跡はないが、ボボ・ジュラソ市では部分的には達成されることになった。すでに述べたように、ボボ・ジュラソ市長となったジブリール・ヴィナマによって、ムスリム文化連合のメデルサの建設費用は市の財政から支出されることになった。同様に、1962年には、(同年にムスリム文化連合から改称された)ムスリム協会がコーコ街区に共用のモスクを要望し、ジブリール・ヴィナマによって受理されたモスクが建設されている<sup>150</sup>。

これらはジブリール・ヴィナマの支援に拠るところが大きかったのかもしれない。彼はムスリム文化連合の初代会長でRDA支部のパトロンであったラッサナ・ジャキテの邸宅に住んでいたこともあり、1950年代にカトリックからイスラームへと改宗した人物でもあっ

---

<sup>146</sup> これらのほかに、1957年5月に生じたバマコでのイスラーム改革主義者とその反対派の暴力事件の徹底した捜査、アルジェリア戦争の休戦が要求されている。

<sup>147</sup> マガネ 2016 収録の史料 Procès-verbal de l'assemblée générale constitutive de l'union culturelle musulmane, section régionale de Bobo-Dioulasso, 12/1/1958.

<sup>148</sup> マガネ 2016 に収録されている Motion adressée aux dirigeants politique du Rassemblement Démocratique Africain (R.D.A.) en séance de leur congrès territorial du 02 au 05 septembre 1958 à Ouagadougou.

<sup>149</sup> マガネ 2016 に収録されている Rapport sur l'orientation présenté au 1er Congrès Fédéral de l' U.C.M. du 22-23-24 et 25 décembre 1957.

<sup>150</sup> 2013/12/21 Bobo-Dioulasso, Ibrahim Kassamba(コーコ街区のモスクのイマーム).

た(Anonyme 2012)。また、ムスリム文化連合と RDA のメンバーは一部重なり合っていた。1958 年時点のムスリム文化連合の管理委員会にはボボ・ジュラソ市長代理が参画しており<sup>151</sup>、1959 年 7 月のムスリム文化連合のメデルサの学期修了式にも RDA の専従職員が参列している<sup>152</sup>。

しかし、市の財政的支援を受けたメデルサやモスクはこの 2 例にとどまり、以後、継続されることはなかった。1956 年から 1964 年まで 2 期 8 年、ボボ・ジュラソ市長を務めたジブリール・ヴィナマは、RDA 内部の世代間闘争に敗れ、3 度目の当選を果たすことはなかった(Anonyme 2012)。正確な経緯は不明であるが、ムスリム協会(ムスリム文化連合)と RDA の蜜月の関係は 1960 年代後半には変容してしまったのである。

さて、ここまで述べてきたように、ムスリム文化連合の主たる目的は、アラビア語の近代教育の普及とそのための行政による支援の確保にあり、部分的には達成されることになった。政治的には、アラビア語の近代教育を行なう学校の認可とこれらの学校への補助金の取得こそが、第一の目的であった。このことには、私立学校の認可と補助金を取得していたカトリック宣教団への対抗意識があったことが窺われる。現在のムスリム協会のボボ・ジュラソ支部の会長は、ムスリム文化連合の当初の目的がアラビア語とイスラームの近代教育にあったことを述べたのちに、こう語っている<sup>153</sup>。「ムスリム文化連合の設立当時、ムスリムの子どもたちは公立の小学校に通っていた。それしかなかったのだ。一方で、カトリック教会は彼らの私立の小学校を持っていた。ムスリムには知識を求めるニーズがあったのに、それに応えるものがなかった。」

ムスリム文化連合の第一回連邦大会の「指針報告」では、カトリック宣教団の活動に植民地行政の資金援助がなされていることとその不当さについて言及されているが<sup>154</sup>、カトリック宣教団の熱心な活動が展開されたオート・ヴォルタ植民地では(本稿 6 章)、より切実で大きな問題であった。たとえば、マドラサの開設が進んでいた 1958 年のオート・ヴォルタの領域予算では、91,679,000 フランがカトリックの私学に助成金として注ぎ込まれてい

---

<sup>151</sup> マガネ 2016 収録の史料 Procès-verbal de l'assemblée générale constitutive de l'union culturelle musulmane, section régionale de Bobo-Dioulasso, 12/1/1958.

<sup>152</sup> CNABF 7V485 Renseignement sur l'activité de l'union culturelle musulmane de Bobo-Dioulasso, le 27 juin 1959.

<sup>153</sup> 2013/12/16 Bobo-Dioulasso, Mama Sanou(ムスリム協会ボボ・ジュラソ支部会長).

<sup>154</sup> マガネ 2016 に収録されている Rapport sur l'orientation présenté au 1er Congrès Fédéral de l' U.C.M. du 22-23-24 et 25 décembre 1957.

る<sup>155</sup>。こうした事実が、ラッサナ・ジャキテやジブリール・ヴィナマらを介して、ムスリム文化連合ヴォルタ支部の構成員に広く知られていたとしても不思議ではないだろう。さらに、ボボ・ジュラソに絞っていえば、1959年には、市内にカトリックの私学が9校あり、2,742名の児童を抱えていた<sup>156</sup>。1950年代のクルアーン学校が、200名余りの児童をもつジェネボのものを除けば、最大でも34名であったことを踏まえると<sup>157</sup>、その差が歴然と感じられたことも想像に難くない。

植民地統治期のオート・ヴォルタにあつては、小学校の卒業者でも十分にエリートであった。植民地統治期を通じて、初等教育の就学率はオート・ヴォルタ植民地の全人口の1割以下である(表8-7)。そして、初等教育を受けた児童の約4割が、大半はカトリック、一部はプロテスタントの宣教団による私学の小学校<sup>158</sup>に通っていた(表8-8)。前章でUVの市評議会議員の約8割がカトリック教徒であること、1961年にあつてもキリスト教徒はオート・ヴォルタ植民地の全人口の5%以下であることを踏まえると(本稿7章3節2項)、エリートたちのあいだにムスリムが少ないことは明白に感じられたことであろう。

年度	1911年	1914年	1920年	1925年	1947年	1956年	1960年
就学率	0.16%	0.18%	0.36%	0.72%	3.33%	7.06%	8.94%

表8-7. オート・ヴォルタ植民地における1911年から1960年までの初等教育就学率<sup>159</sup>

<sup>155</sup> CNABF 22V55 Budget Territorial Exercice 1958, Haute-Volta.

<sup>156</sup> AHCH s.c. Rapport annuel, Bobo-Dioulasso, 1959.

<sup>157</sup> CNABF 28V30 Correspondance relative à l'ouverture d'écoles coraniques. Cercle de Bobo-Dioulasso (1952-1958).

<sup>158</sup> 1953年の段階でオート・ヴォルタ植民地の私学小学校61校のうち、59校がカトリック、2校がプロテスタントであった(ANOM 14Miom/2200 Bulletin mensuel des renseignements, Haute-Volta, octobre 1953.)。

<sup>159</sup> 出典は以下。Gouvernement général de l'Afrique occidentale française 1912: 262; Haut-Sénégal et Niger 1914: 129; Haute-Volta 1920: 69; ANOM 1Affpol/1248 Rapport politique et administratif en Haute-Volta, 1926.; ANOM 14Miom/2200 Rapport politique de Haute-Volta 1947.; ONUESC (l'Organisation des Nations Unies pour l'Éducation, la Science et la Culture) 1961; なお、1956年以前の就学可能児童数は、1961年統計の7 - 14歳の児童数の人口全体の割合を、1956年以前の人口(Gervais 1998: 73-76)に当てはめて算出した。

年度	1947年	1949年	1952年	1960年
私学に通う児童の割合	38.0%	38.0%	40.2%	39.2%

表 8-8. オート・ヴォルタ植民地における 1947 年から 1960 年までの初等教育における私学児童の割合<sup>160</sup>

1950 年代から 1960 年代にムスリム文化連合ヴォルタ支部を支えたムスリムたちが、カトリック宣教団の私立学校についてどのような認識を抱いていたのかを直接知ることのできる史料は残念ながら残されていない。しかし、現在のムスリム協会のボボ・ジュラソ支部の会長が述べたようなカトリック宣教団の教育活動に対する対抗意識は、少なくとも、その当時の状況をみる限りでは、十分に存在していたように思われる。

再三述べてきたように、ムスリム文化連合の政治的な目的は、アラビア語の近代教育を行なう学校の認可とこれらの学校への補助金の取得にあった。カトリック宣教団がライシザシオンを経てヴィシー政権期までのあいだに私学の認可や補助金を段階的に獲得してきたことを踏まえると(本稿 6 章)、ムスリム文化連合の活動は不均等なライシザシオンの適用に対する現状変更の要求にあり、カトリック宣教団とは対抗しつつも、かつて宣教団がおこなってきたことをなぞるように展開していったと捉えることもできるだろう。その意味では、ムスリム文化連合は植民地統治以降の宗教運動であったといえる。

#### 8-4. ボボ・ジュラソにおけるイスラーム改革主義運動

本章では、ボボ・ジュラソにおけるイスラームの長期的な展開を踏まえつつ、様々な集団や個人の入り組んだ関係を可能な限り辿りながら、ボボ・ジュラソにおけるイスラーム改革主義運動を位置づけてきた。そのうえで、ボボ・ジュラソにおけるイスラーム改革主義運動の特徴は以下の 4 点にまとめられるだろう。

第一に、この運動は 19 世紀からのイスラームの刷新の延長線上にあるものであった。本章 1 節で指摘したように、19 世紀ごろから、ボボ・ジュラソを含む西アフリカ内陸では、それ以前にはムスリムではなかった社会的カテゴリーの出身者がムスリムとなっていた。ボボ・ジュラソの大モスクを建設したサキディ・サヌはその代表的な人物であり、ジェン

<sup>160</sup> 私学の児童数については ANOM 14Miom/2200 Rapport politique de Haute-Volta 1947.; CNABF 3V19 Budget de Haute-Volta. Exercice 1949. p. 56-57; ANOM 14Miom/2200 Revue Trimestrielle de Haute-Volta, avril-mai-juin 1952.; 1960 年については INSD 1996 を参照し、就学可能な児童数の算出は表 8-7 と同様。

ネから来たアルファ・モイ・ジェネポもまた、非ムスリムの漁民のボゾのマラブーであった。そして、アルファ・モイ・ジェネポの息子たちがボボ・ジュラソで最初のメデルサを創設し、ムスリム文化連合に設立当初から参加することになった。

第二に、ボボ・ジュラソのメデルサは、基本的には、植民地統治以前と同様のマラブーの修学のネットワークを通じて個別的に展開していった。中東・北アフリカへの留学経験者はおらず、既存のメデルサに集中的に学んだ者もいなかった。メデルサを創設したマハムード・サノゴやイブラヒム・ジェネポは、すでにセグーでメデルサを運営していたサーダ・トゥレにその手法を学んだとされるが、彼らの修学歴のなかでサーダ・トゥレは決して重要な存在であるとはいえず、他のメデルサの設立者であるティジャーニー・デメやガオス・カメナもまた、都市としてのボボ・ジュラソに集まっていたマラブーたちから学んだだけであった。

第三に、一部に対立はあったものの、「土着民」も含めて、ボボ・ジュラソのムスリムたちは全体としてはメデルサの創設を支持していた。これまで明らかにしてきたように、ボボ・ジュラソのムスリム間にみられた対立を「外来者」と「土着民」の対立として把握することは正確であるとはいえず、その対立の起源もまた複雑なものであった。本章 2 節や 3 節の前半では、この複雑な背景を辿っていったが、この対立が「外来者」の新しいイスラームに対する不満といったものに起因するわけではまったくないことが明らかになった。1960 年以後も、いわゆる「外来者」と「土着民」のムスリム間の緊張関係や対立は何度か再燃したが、ムスリム文化連合の活動に早くから「土着民」のマラブーも参与し、すぐに「土着民のメデルサ」を創設しようとする運動がでてきたことは、ボボ・ジュラソのムスリムたちが全体としてはメデルサの創設を支持していたことを示している。

第四に、ムスリム文化連合の活動は、近代教育をめぐるヘゲモニー闘争の一環として展開された。本章 3 節 5 項で論じたように、カトリック宣教団は段階的に私学教育の認可や補助金を獲得し、オート・ヴォルタ全体の人口では 5%にもみたないにもかかわらず、1950 年代には就学児童の約 4 割が宣教団の私学学校に通うようになっていた。ムスリム文化連合の活動は、基本的に、メデルサの認可と補助金の獲得にあり、こうした同時代の教育状況を踏まえたものであったと考えられる。従来は、植民地行政と宣教団とのあいだで教育の主導権をめぐるヘゲモニー闘争が繰り広げられていたが(本稿 6 章)、ムスリム文化連合はこのヘゲモニー闘争にアラビア語とイスラームの近代教育をかかげて参入していったのである。第 1 点、第 2 点で述べたように、この運動は植民地統治以前からの延長線上にある

ものであったが、教育をめぐるヘゲモニー闘争であるという点においては、植民地統治以後の新しい運動であったといえることができる。

これらの 4 点は、西アフリカにおけるイスラーム改革主義運動についてのこれまでの研究を大きく覆すものである。ローネイとソアレスによる「イスラームの領域」(Islamic sphere)論(Launay and Soares 1999)を紹介し、本章のこれまでの記述に照らして、どのような問題点を抱えているのかを指摘し、本章の検討を閉じたい。

1980 年代のいわゆる政治的自由化以降、西アフリカ諸国におけるイスラーム改革主義運動が公共空間に進出し、国際社会と研究者の双方によって注目され、現在に至るまで、西アフリカのイスラーム改革主義運動は主として歴史学・政治学・人類学の研究の対象となってきた(たとえば、Otayek and Soares 2007; Holder 2009; Holder et Sow 2014)。これらの研究で議論の出発点として広く参照されているのが、さきのローネイとソアレスによる「イスラームの領域」(Islamic sphere)論(Launay and Soares 1999)である。

この論文で提示されたイスラームの領域とは、植民地統治期の西アフリカにおいて、民族、親族、「カースト」、奴隷出身といった特定のCATEGORYや、植民地国家やポスト植民地国家から概念的に離れた「空間」として、植民地の政治経済の条件下で生じたものである(ibid.: 498)。ジハード期も含めて、植民地統治以前では、ムスリムはローカルなコンテクストにおける特定の世襲的な社会的CATEGORYであった(ibid.: 501)。

しかし、植民地統治以後、こうした社会的CATEGORYは変容し、イスラームの領域が出現したとされる。イスラームの領域の生成の条件は二つである。ひとつはフランスの「民族政策」である。これによって集団がカテゴライズされ、イスラームはこうした集団を横断するCATEGORYとして把握された(ibid.: 503)。もうひとつは植民地経済の隆盛である。植民地統治以前の交易都市が後退し、軍事国家と交易商人という結びつきは弱まり、商業にもさまざまなCATEGORYの人たちが参与し、イスラームに改宗するようになった(ibid.: 505)。こうして、民族や親族などの世襲的なCATEGORYである特殊性を離れて、イスラームの領域という一般性をもった空間が生じた。

もうひとつの重要な点は、ハマウィーヤとイスラーム改革主義運動を例に挙げて、植民地統治以後のイスラームの改革は、それ以前の国家建設を目指すジハード運動とは異なり、ムスリム共同体の内部での抗争を展開するという特徴があることである(ibid.: 507)。さらに、ハマリスト(ハマウィーヤの信奉者)やイスラーム改革運動の一部が RDA に親和的であった一方で、RDA はこれらに反対する者たちも受け入れていた事実を挙げて、これらの運動は

国家の領域を問題とせず、イスラームの共同体の内部でのあり方を問題にしていたのだと論じている(ibid.: 513)。つまり、イスラームの領域は国家の領域とは区分される。こうして、イスラームの領域とは、民族、親族、「カースト」、奴隷出身といった特定の категорияや、植民地国家やポスト植民地国家から概念的に離れた「空間」として、植民地の政治経済の条件下で生じたとされる(ibid.: 498)。これが論文の概略である。

まず、植民地統治以降に、世襲ではない、一般性をもった社会的カテゴリーとしてのムスリムが生じたという主張は誤っている。そもそも、この論文では、この主張の根拠がほとんど示されていないが、本章 1 節での記述をみれば、19 世紀以降に、こうした変化がすでに生じていたことがわかる。

ボボ・ジュラソでは、サノゴの兄弟の到来以後、もともとムスリムの社会的カテゴリーではなかった農民のボボ・ジュラのサキディ・サヌの父が改宗していた。さらに、同時期のジャでは、アルファ・ボワリ・カラベンタのイスラーム改革がなされ、漁民や外来者からの改宗者を積極的に受け入れ、イスラームの教育を施していった。そうした改革の行われていたジャに、サキディ・サヌが留学した後に、ボボ・ジュラソに大モスクを建てていた。他方で、植民地統治以降にボボ・ジュラソに到来したアルファ・モイ・ジェネボもまた、ジェンネ出身のボゾであり、その出自は 19 世紀以前にはムスリムの社会的カテゴリーに入っていなかった。つまり、一般性をもった社会的カテゴリーとしてのムスリムは、遅くとも 19 世紀ごろには、西アフリカ内陸で同時並行的に徐々に出現しつつあった。

つぎに、植民地経済の発展が「イスラームの領域」を生成させる基盤となったということもまた、少なくとも、ボボ・ジュラソの事例においては事実と反している。植民地経済によって広範に移動することになった商人たちは運動のパトロンとなることはあっても、運動の主体はマラブーたちであった。そして、マラブーたちは植民地統治以前から継続している修学の伝統のなかで学んでおり、この点において、特に植民地統治の影響はなかった。

また、本章 3 節 3 項で述べたように、植民地経済の影響を強いていえば、ボボ・ジュラソが人口規模の大きな都市となり、比較的広域にマラブーが集まるようになったことである。しかし、少なくとも師弟関係をみる限りでは、それぞれ個別のグループのなかで修学しており、ボボ・ジュラソの都市のなかにおいてすら、「イスラームの領域」と呼びうるような公共空間が生じたとはいえない。

イスラーム改革主義運動の政治をムスリム共同体内部の抗争に還元していることが最も

大きな問題である。たしかに、ムスリム文化連合と RDA の活動はイコールで結び付けることはできない。しかし、行政に対して、メデルサの認可と補助金を出させるという政治的な目的の達成こそが、ムスリム文化連合の活動の目標であった。ほとんど、このことが唯一の政治的な課題であったといってもよい。オート・ヴォルタ植民地の教育状況を踏まえれば、これはムスリム共同体内部に向けた政治では全くなく、国家の領域内における教育のヘゲモニー闘争であったのである。この点において、ムスリム文化連合の活動が植民地統治以後の新しい運動であったということができるのであり、「イスラームの領域」論はその運動の核心部分を捉えそこなっている。

「アニミスト」の土地とみなされ、いわゆるイスラーム政策のなかったオート・ヴォルタ植民地における、植民地統治のイスラームへの影響は間接的であった。行政機構の導入に伴うフランス語の文書を扱う領域が出現したことで、アラビア語にもとづく知識とアラビア語そのものの社会全体のなかでの相対的地位の低下が生じた。イスラーム改革主義運動がこうした状況に対する問題意識のなかで生じたものと捉えられることはすでに述べたとおりである。

「イスラームの領域」論は、西アフリカ内陸のイスラームの近代を植民地統治による変容に帰している点が最大の問題であった。口頭伝承と種々の史料を総動員して浮かび上がったことは、19 世紀頃から、世襲的なカテゴリーとしてのムスリムが一般的な社会的カテゴリーとしてのムスリムへと変容してきていたことである。この変容は、植民地統治によって、加速したことはあっても、それによって生じたものではなかった。その意味において、ボボ・ジュラソにおけるイスラームの近代は、植民地統治以前からの変容が継続・展開したものとみなせるのである。



## 9 章 西アフリカ内陸における近代と新しい歴史人類学

本稿では、これまでムブン川湾曲部における新石器時代からオート・ヴォルタ植民地の独立に至る、政治・経済・宗教の変化を論じてきた。各章では、それぞれの主題ごとにその内容を論じてきたが、本章では、各章で論じられてきた内容を整理し、西アフリカ内陸における近代とは何かという問いに答えることとしたい。そのつぎに、それらの記述を踏まえたうえで、本稿のいう歴史人類学が人類学の理論のなかでどのように位置づけられるのかを述べる。そのなかで、歴史人類学の新たな地平を示す。

### 9-1. 西アフリカ内陸における近代

#### 9-1-1. 政治・経済・宗教の複合の萌芽としてのカラントオのジハード

1 章では、西アフリカ内陸の新石器時代以降の歴史を概観した。そのなかで、紀元 1 千年紀に農耕に依存するような定住生活が開始されたことを確認した(本稿 1 章 4 節)。10 世紀ごろから内陸デルタで国家が形成され(本稿 1 章 5 節)、17 世紀ごろから大西洋岸のゴールド・コーストでの奴隷貿易の隆盛と並行して(本稿 1 章 6 節)、ニジェール川中流域とヴォルタ川中流域には奴隷の交易と、サヘルと森林地帯を横断する交易を経済基盤とする諸国家が現れるようになった(本稿 1 章 7 節, 3 章 1 節)。19 世紀には、ムブン川湾曲部は、こうした諸国家に奴隷を供給する後背地となっていた(本稿 1 章 7 節)。

このように、本稿の対象としたムブン川湾曲部は、カラントオのジハード以前には国家と呼びうる存在がなく、村落が点在するような状況にあった(本稿 2 章)。その特徴は以下のようにまとめられる。すなわち、ムブン川湾曲部の村落は、(1)土地の生産性の低さと土地の豊富さ、先住者が優位に立つという広範に共有されたイデオロギーによって分散する傾向にあり、(2)村落は一定の人口規模(およそ 1,000 人以下)になると村落内における分離・移住が生じること、さらに、(3)人口 500 人以上の中核村が点在し、親族関係や呪物を共有するゆるやかな同盟関係があること、(4)こうした同盟関係によって村落間の抗争が複数の村落間の抗争へと発展することで、村落を越えて強固なヒエラルキーをもつ国家の出現を阻んでいた。特に同盟関係が戦争時に機能することで連鎖的に敵対的な関係が構築され、国家の出現を阻むシステムを本稿では「国家をもたない社会」における「国家に抗するシステム」と定義づけた(本稿 2 章 8 節)。

あえて単純化していえば、「国家に抗するシステム」は、生態的条件に規定された生業形態と先住原理というイデオロギーが結びついたものであった。ここには経済と政治と宗教

の複合が見出せるだろう。つまり、土地の生産性の低さに由来する粗放的な農法という経済的条件は小規模の村落の点在を生じさせ、これは、基本的に村ごとに自律した政治的単位と村を越えた同盟関係という政治のあり方と、村ごとの土地の霊への供犠を執り行う土地の主と村を越えて影響力を及ぼす呪物という宗教のあり方とを結び付けている。そして、こうした経済、政治、宗教の複合のあり方を変容させる試みがカラントオのジハードであったといえるだろう。

すでに述べたように、ムフン川湾曲部は、19 世紀には、奴隷を供給する国家の後背地となっていた。19 世紀半ばに生じたカラントオのジハードは、こうした奴隷の獲得のフロンティアで自ら奴隷を「生産」し「輸出」しようとした運動とみなせるだろう。さらに、ムフン川湾曲部は南北をつなぐ主要な交易路の中間に位置する空白地であり、カラントオのジハードはこうした空白地であった交易路を確保する運動でもあった(本稿 3 章 5 節)。

こうした経済上の変化と連動して、カラントオのジハードは「国家に抗するシステム」を超えて新たな形態の政治と宗教をムフン川湾曲部に生じさせようとしていた。ジハード以前のムフン川湾曲部の戦争はあくまでも報復と略奪にとどまっていたが(本稿 2 章 7 節)、ジハードでは征服した一部の村(ボロモ、ワッハーブ、コーホ、ナーニ)に新たに村長を任命し、新秩序を打ち立てようとした(本稿 3 章 4 節)。そこでは、供犠をおこない土地の分配をおこなう土地の主の制度を廃止、先住原理による政治と宗教の体制を変容させ、ムスリムによってのみ構成される空間を新たに生み出した(本稿 3 章 5 節)。このような意味において、カラントオのジハードは、新たな経済-政治-宗教の複合を形成させようとした萌芽であった。

### 9-1-2. 植民地統治における経済、政治の布置の変容

しかし、このような経済-政治-宗教の複合は、植民地統治によって早々に解体することになる。本稿 4 章で論じたように、植民地統治の確立は、段階的な植民地行政による暴力の独占によって成し遂げられた。

フランス軍による初期の征服の過程は、国家である主体との友-敵関係の連鎖、フランス軍に対する村々による散発的な襲撃とそれに対する報復によって進行していくことになった(本稿 4 章 2 節, 4 章 4 節)。1892 年のアル・カリのジハードの鎮圧、1896 年のサモの蜂起の鎮圧、1897 年のマサラへの示威的な軍事行動と同年のボボ・ジュラソの占領は、そうしたものであった。国家をもたない社会における征服は、国王の殺害や王都の陥落といった征服を完了させる明確な指標がなく、1897 年の段階においては、フランス軍は在地の勢

力に依存し、いくつかの点在する駐在所をもち、それぞれの駐在所に小隊を配置させている存在に過ぎなかった(本稿 4 章 3 節)。

こうした状況を変容させたのは、1897 年以降の植民地行政の導入であった(ibid.)。これ以降、それまで同盟関係を結んでいたバラニやワッハーブの王たちの奴隷狩りや略奪が「権力乱用」と認識され、植民地行政による懲罰の対象となり、1904 年のオー・セネガル・ニジェール植民地が構成され、民政移管がなされると、それぞれの王国や村々の軍事力や統治権が徐々に制限・縮小されていった(ibid.)。特に 1915 年から 1916 年のヴォルタ・バニ戦争によって数多くの村々が破壊され、武器の大規模な接収によって、個々の村々の軍事力が失われた(ibid.)。これによって、「国家に抗するシステム」を基礎づけていた村々の同盟や国家を形成しつつあったカラントオの勢力の軍事力は失われ、これらの村々は階層制をもつ植民地の行政機構に組み込まれることになった(ibid.)。そして、1919 年にオート・ヴォルタ植民地が成立した。

植民地の行政機構は、植民地>管区(>州/準管区)>郡>村というヒエラルキーをもった行政区分に則って編成され、郡・村には「原住民」から郡長・村長が任命された(ibid.)。郡長には必ずしも中核村が選ばれたわけではなく、ムフン川湾曲部の一部では「平定」期のフランス軍と良好な関係を結び、郡長や村長の地位を手に入れていった(本稿 4 章 1 節, 3 節, 6 章 1 節)。郡長・村長は植民地行政からの給与と域内での権限を受ける代わりに、郡長・村長による徴税・労働力徴集の代行の任務を受けるという互惠関係が構成された(本稿 4 章 3 節, 5 章 2 節, 6 節)。こうした郡長・村長の地位は、土地の霊との関係を保つ土地の主とは異なる新たな政治・経済的な特権を有するものとなった。

経済的な秩序も大幅に変容した。まず、奴隷制が廃止された。奴隷制の廃止は賃金労働の導入と同義ではない。貨幣が十分に浸透しておらず、労働市場がないなかでの賃金労働とは、恣意的に決定された賃金による事実上の強制労働——実際のところ、植民地行政に設定された賦役には無償のものも含まれており、賃金も安価に設定されていた——であった(本稿 5 章 3 節, 4 節)。

植民地行政と私企業によって、農村部から労働者の徴用が行なわれ、オート・ヴォルタ植民地内外で使役された。これは強制的なものであったと推測される。この徴用によって、多数の死者と脱走者が生じ、労働条件のより良い英領ゴールド・コーストへの移民が生じている(本稿 5 章 3 節)。労働市場のない地域において、強制力を用いて労働者を調達するという点においては、奴隷狩りと強制労働はほとんど同様のものではあったが、ムフン川湾曲

部全体としてみると、地域における資本形成を阻害するように働いた(ibid.)。

奴隷狩りにおいては労働者そのものが商品となったため、地域全体としては、労働力の損失はタカラガイなどの富との交換によって補填され、奴隷を収奪した主体や中間取引をおこなった商人などに資本が形成されるようになっていた(本稿 1 章 6 節)。しかし、他地域への徴用を行なう強制労働では労働者に公定賃金が支払われる形態をとったことから、労働力の損失への補填はなされず、一方的に、労働力が流出することとなった(本稿 5 章 3 節)。つまり、カラントオのジハードを支えた経済基盤は失われただけでなく、奴隷を介した域内での資本形成がなくなった。さらに、農村にはほとんど貨幣が蓄積しなかった。人頭税の支払は、強制労働による賃金収入や換金作物の売却による収入をはるかに上回る額となっていたのである(本稿 5 章 4 節)。このような圧制によってコートディヴォワール植民地や英領ゴールド・コーストへの大規模な移民を出すことになったオート・ヴォルタ植民地は、1933 年に解消され、近隣の仏領スーダン、ニジェール、コートディヴォワール植民地に分割・併合されることになった(本稿 5 章 3 節)。

植民地行政は人頭税を介して農村から都市部への富の移転を行なった。港湾をもたないオート・ヴォルタ植民地では関税からの収入が大きくなり、その財政の約 7 割を人頭税に依存していた(本稿 5 章 3 節)。オート・ヴォルタ植民地の予算の半数は人件費に充てられたが、人員の配置は政庁のおかれたワガドゥグ、商業拠点とされたボボ・ジュラソを頂点として、各管区の管区長所在地に傾斜的に配分されていたため、人件費は傾斜的に分配されることになった(ibid.)。また、その他の予算は、植民地行政関連施設、工場、病院、学校の維持・整備に充てられたが、これらの施設もまたワガドゥグとボボ・ジュラソを中心に傾斜的に配置されていたため、同様の分配が行なわれていた(ibid.)。ワガドゥグとボボ・ジュラソは植民地統治以後、都市化が進展したが、これは植民地統治以前には考えられないほどの富の移転が農村から都市部へと行われた結果として捉えられるだろう。

こうしたオート・ヴォルタ植民地における貨幣は、植民地行政による人頭税とその不均衡な分配を主たる駆動因として循環することになった。そのため、貨幣を入手し、蓄積できる人びとは、基本的に、植民地行政の活動に何らかのかたちで参与する者たちが主であった。具体的には、行政からの賃金・年金によって貨幣の収入を得ていた「伝統的首長」・退役軍人・植民地官吏・教師、換金作物の輸出やヨーロッパ製品の輸入に携わった商人・ヨーロッパ商社のホワイトカラーが挙げられる。彼らのなかの一部は第 2 次世界大戦後の政党政治、そして、ムスリム文化連合のなかで中心的な役割を果たすようになった。

### 9-1-3. カトリック宣教団と宗教-政治

植民地統治は、宗教をとりまく条件を変容させる。オート・ヴォルタ植民地では、ムスリムの諸集団に直接的に介入するような、いわゆるイスラーム政策はなかったが(Kobo 2012a)、カトリック宣教団と植民地行政によって、宗教をとりまく新たな条件が構成された。

まず、植民地行政は、統治にあたって、「民族」とともに宗教を、「臣民」の把握のためのインデックスとしていた。植民地・管区ごとの年次報告では、それぞれに諸「民族」の推定人口が記載され、諸民族の密度の濃淡としてそれぞれの植民地・管区が把握されていた(本稿 4 章 3 節)。これと同様に、こうした年次報告では、「アニミスト／フェティシスト」、ムスリム、カトリック教徒、プロテスタントの推定人口が記述されている。そして、オート・ヴォルタ植民地にあたる地域は、全般的に「アニミスト」の土地として把握された。いわゆるイスラーム政策がおこなわれなかったことも、こうした認識に基づいているといえるだろう。1940 年代までの仏領西アフリカにおけるイスラーム認識、いわゆる「黒イスラーム」(*l'islam noire*)論の主要な論者で植民地行政官であったマルティ(P. Marty)は、仏領西アフリカの各植民地のイスラームの状況について何らかのかたちで報告をおこなっているが、オート・ヴォルタ植民地だけは報告を残さなかったことはこのことを如実にあらわしている。

「黒イスラーム」論は論者によって、その内容が微妙に変化しているが、おおよそ共通していることは、西アフリカのイスラームはスーフィー教団が強い影響力をもち、伝統宗教との混交がみられるということであった(Triaud 2000)。特にスーフィー教団については、ムスリムを把握するためのムスリム内のサブカテゴリーとしての意味をもち、植民地行政は教団の指導者を統治に役立つアクターとして把握していた(本稿 8 章 2 節 3 項)。こうした認識はオート・ヴォルタ植民地のムスリムの把握と統治にはほとんど役に立たなかった。1941 年のボボ・ジュラソ事件における植民地行政の捜査の迷走はこのよい例となっている(本稿 8 章 2 節)。

一方で、イスラームは植民地行政にとって治安維持のための監視の対象であった。遅くとも 1910 年代後半には各植民地の管区ごとのマラブーの個人調書が作成され、植民地行政に対する政治的な態度が調査されている<sup>1</sup>。また、マラブーが秘密裏に植民地行政に反抗す

---

<sup>1</sup> ANCI 5EE69 Fiches des renseignements sur marabouts du cercle de Bobo-Dioulasso, 1917-1932., CNABF 225 Haute-Volta. Correspondance sur le sujet des marabouts;

る活動を行っているという偏執的な思考はしばしば植民地行政官に現れるものであった。たとえば、1886 年のサモの蜂起を扇動したとされるママドゥ・サノゴの処刑(本稿 4 章 2 節)、ヴォルタ・バニ戦争の直前に生じたマラブーの一斉検挙(本稿 4 章 3 節)、1941 年のボボ・ジュラソ事件の捜査(本稿 8 章 2 節)は、その代表的な事例である。

このことと重なって、「黒イスラーム」論では、「アニミスト」のイスラームへの改宗が、反植民地主義的な「狂信主義」を生み出すという発想がみられる。1922 年から 1929 年までニジュール植民地総督を務め、1930 年から 1936 年まで仏領西アフリカ連合総督の座にあったブレヴィエ(P. Brévié)はその著書『「自然主義」に抗するイスラーム』(*L'Islamisme contre 'Naturisme'*)(Brévié 1923)のなかで「アニミスト」がムスリムになることで反植民地主義的な思想が育まれると主張している。この著作は、コートディヴォワール植民地総督のデシャンが、ボボ・ジュラソ事件の総括のなかで全面的に援用しているように、一部の植民地行政官のあいだではよく知られ、共有されていたものであったと考えられる。

カトリック宣教団は、このような植民地行政による宗教認識、あるいはイスラーム認識を共有しつつ、宣教活動を行っていた。まず、宣教団はイスラームをライバル視し、「アニミスト」の宣教を主眼においていた(本稿 6 章 1 節)。また、「アニミスト」がムスリムに改宗することで「狂信主義」が生じるという考えも共有していた(ibid.)。こうした宗教認識にたって、非ムスリムの多いモシ、ブワ、サモといった民族への宣教が優先されることになった(本稿 6 章 1 節, 2 節)。

しかし、植民地行政とカトリック宣教団との関係はつねに良好なものでも、安定的なものでもなかった(本稿 6 章 1 節)。1903 年まではフランス軍と宣教団は互惠関係にあったが、1903 年末の教育制度改革を中心にライシテの原則が徹底されると両者の関係は冷え切った(ibid.)。1911 年以降に、ワガドゥグ管区司令官、オート・ヴォルタ植民地初代総督が宣教団の支援に積極的であったため、宣教団による私学学校の公認がなされ、1920 年代以降、活発な宣教活動が行われるようになった(ibid.)。さらに、フランス本国、仏領西アフリカの植民地行政がともに保守化した 1940 年代のヴィシー政権期には、宣教団の学校への補助金が植民地行政から支給されるようになった(Badou 1957: 221-222)。

このように、オート・ヴォルタ植民地においてカトリック宣教団は、植民地行政のライシザシオンに抗して段階的にその活動——主として教育活動の権利を獲得していった(本稿 6 章 1 節)。宣教団にあって、この宣教の歴史は植民地行政、あるいは植民地行政内部のフ

---

fiches biographiques des marabouts influents, 1922-1923.

リーメイソンとの闘争による権利獲得の歴史として認識されていた(本稿 6 章 1 節, 3 節)。

このような宗教認識と植民地行政との関係を前提として、オート・ヴォルタ植民地におけるカトリック宣教団の活動は、宗教の帰属によって友・敵関係を構成する宗教・政治の陣地戦を生じさせた。この陣地戦は、郡長位と植民地行政内部の構成員をめぐって行われた。

郡長の地位には、植民地行政からの給与、人頭税手数料の取得、域内における強制力の行使の実質的な権限が付与されていた(本稿 4 章 3 節, 5 章 2 節, 6 章 2 節)。こうした郡長の地位をめぐって、ムフン川湾曲部の北部のトマにおける郡長位をめぐるイサ・パレとヤクバ・ジボの抗争(本稿 6 章 2 節)、ムフン川湾曲部の中央部のマサラとその周辺で生じた「カトリック教徒」による郡長に対する抵抗運動(本稿 6 章 3 節)が生じた。前者は特権を有する郡長位を保守／奪取しようとする「伝統的首長」同士の抗争であり、後者は郡長位の特権そのものへの住民の抵抗であった。つまり、本質的には、植民地統治によって成立した政治・経済の特殊な複合の象徴ともいべき郡長位をめぐる抗争であった。

しかし、この 2 つの抗争においては、宗教の帰属が友・敵関係を構成する要素として持ち出されることになる。トマにおける抗争では、トマにおけるモスク建設は植民地行政官がムスリムを優遇する措置であるとカトリック宣教団は認識し、このような宗教の帰属をめぐる宗教・政治を踏まえて、郡長位にあったイサ・パレは、政治的対立が宗教の帰属の対立になる可能性を問題化することで、ライバルのヤクバ・ジボを追い落としている(本稿 6 章 2 節)。マサラにおける抗争では、郡長と宣教団のあいだに潜在的な対立がすでにみられていたが、宣教団側は郡長の「権力乱用」を問題化したのに対して、郡長・植民地行政官側はカトリック宣教団の活動によって治安悪化が生じているとし、宗教・政治を展開した(本稿 6 章 3 節)。

これらの事例において重要な点は、宗教の帰属による友・敵関係が必ずしもフィクショナルに仮構された対立といいきれないところにある。トマにおける抗争では、カトリック宣教団側はムスリムによる勢力拡大を実体として捉え、ワガドゥグの大司教であったテヴェヌ自らがトマに足を運んでいる(本稿 6 章 2 節)。マサラにおける抗争においては、郡長・植民地行政官側によるカトリック宣教団に対する懲罰的行為が実施されており(本稿 6 章 3 節)、この懲罰的行為は実質的に宣教団の排除であった。ここで生じていたことは、郡長位を中心としたローカルな政治において敵を排除しようとする陣地戦である。

植民地行政の内部で宣教団が展開した宗教・政治は、植民地行政全体の体制変更をもとめるのではなく、植民地行政内部での敵を排除し、友を増加させていくという陣地戦であっ

た(本稿 6 章 4 節)。ワガドゥグの大司教テヴェヌによる、トマに勤務していたハンパテ・バの転任騒動やディム・デロブソムなどの追放は(本稿 6 章 2 節, 3 節)、こうした植民地行政内部での陣地戦の結果である。そして、植民地行政内部での陣地戦は、教育をめぐる闘争においても展開されていた。宣教団の学校教育を通じて、植民地行政にカトリック教徒を送り込むことも同様に、植民地行政内部での陣地戦として理解できるだろう。

さらに付け加えれば、カトリック宣教団は、結果として、教育を通じた陣地戦において、かなりの成果をあげることになった。すなわち、カトリック宣教団はオート・ヴォルタ全体的カトリック教徒の割合を劇的に増やすことができなかったが、エリート内部での割合を圧倒することができていたのである(本稿 6 章 4 節, 7 章 3 節, 8 章 3 節 5 項)。

すでに述べたように、カトリック宣教団は、植民地行政の全面的な体制変更を企図せず、あくまで植民地行政内部における宗教・政治の展開によって、段階的に宣教団の活動を植民地行政に積極的に容認させ、拡張させていこうとする陣地戦を行ってきた。このような陣地戦は、植民地統治以降の宗教をめぐる条件を前提として行われている。そして、その諸条件はムスリムの認識の如何に係わらず、イスラームの社会的な位置づけを規定するようになった。

まず、植民地行政による暴力の独占が完遂され、シャリーア(イスラーム法)に基づく統治というプロジェクトは破綻した。軍事力によって政治権力を直接的に奪取するという思想や企図が消滅した結果、イスラームが統治に直接的に関わるということが現実的でなくなった。植民地統治によって、軍事力による全面的な体制変更としてのジハードは基本的にムスリムたちの選択肢にはなくなった。その意味において、ムスリムたちもまた、カトリック宣教団と同様に陣地戦を余儀なくされた。植民地統治以降の宗教をめぐる第一の条件とは、こうした政治権力と宗教との直接的な結びつきの排除であった。

植民地行政の導入はもう一つの宗教をめぐる条件をもたらした。それは、宗教と文書活動の位置づけをめぐるものである。ムブン川湾曲部では、アラビア語による文書作成の伝統はほとんど確立されていなかったが、1911 年の連合総督通達によって<sup>2</sup>、従来、一部の行政文書におけるアラビア語の使用を廃し、フランス語が唯一の行政上の公用語とされ、アラビア語の読み書き能力は実質的に狭義の宗教実践のために限定されるようになった。こ

---

<sup>2</sup> ANOM 14miom/1084 Lettre du Gouverneur général de l'A.O.F. a Gouverneur du Sénégal, du Haut-Sénégal et Niger, et a Procureur général, chef du service judiciaire de l'A.O.F., Dakar, le 1er septembre 1911.



のことは、「首長国」が温存され、またシャリーアが統治に活用され、アラビア語の読み書き能力と知識の社会的な需要が保たれ、結果として、アラビア語、アラビア文字を用いたハウサ語の知識の生産と流通が継続して行われたナイジェリア北部(坂井 2015a: 55-58)と比較すると、セネガルを除く仏領西アフリカにおいては、アラビア語の地位は大きく低下したといえる<sup>3</sup>。

#### 9-1-4. ムスリム文化連合における政治-経済-宗教の新たな複合

ムフン川湾曲部において、1944 年のブラザヴィル会議以降の政党政治の中心地となったのは、ボボ・ジュラソであった。植民地統治以前においても、ボボ・ジュラソはヴォルタ川中流域とニジェール川中流域をつなぐ交易の中継地点としても一定程度の人口をもつ都市として栄えていたが(本稿 3 章 5 節)、植民地統治以降、植民地経済の交流とともに急速に人口を増やしていた(本稿 5 章 2 節)。都市に集まる商人や商社勤めのホワイトカラー、植民地官吏や教師らが、ボボ・ジュラソの政党政治の中核を担うようになる<sup>4</sup>。

一方で、植民地統治以前の村を越える政治的な主体は 1940 年代にはすでに存在せず、植民地行政の階層制に則った郡長と村長がおしなべて配置されるようになっていた(本稿 4 章 3 節, 4 章 4 節)。言い換えれば、郡長よりも上級の位階が与えられていた、モシの諸王国のような植民地統治以前の「国王」たちは、ムフン川湾曲部には存在しなかった(本稿 5 章 2 節, 7 章 1 節 3 項, 7 章 3 節 2 項)。こうしたことから、ボボ・ジュラソでは、ダカールの高学歴者のもたらした CEFA という組織を介して、白人との平等を謳うスローガンが人頭税・賦役の拒否といった抵抗運動に翻訳され、地元の農民へと一定程度、運動が波及していったが(本稿 7 章 1 節 2 項)、ワガドゥグでは、モロ・ナーバを主たるアクターとして、オート・ヴォルタ植民地の再構成を目的として、有力な「伝統的首長」を連合させた誓願活動が主として展開された(本稿 7 章 1 節 3 項)。つまり、ブラザヴィル会議以降の政党政治は、植民地統治以後の政治、経済の再編成を前提として動いていった。

モロ・ナーバ率いる UV はオート・ヴォルタ植民地の再構成を最優先にさせて政治運動

---

<sup>3</sup> セネガルでは、スーフィー教団が植民地統治下で発展し(坂井 2005a)、セネガルのリュフィスク、ダカールといったアラビア語活版印刷技術が導入された植民地都市でスーフィー教団によるアラビア語文書が多く作成されることになった(坂井 2015c)。

<sup>4</sup> たとえば、RDA ボボ・ジュラソ支部の実質的なパトロンであった商人のラッサナ・ジャキテ、指導者であった元教師のウエザン・クリバリ、ボボ・ジュラソ支部の主要な幹部であったジブリール・ヴィナマは植民地官吏であり、シレバは教師である(本稿 7 章)。

を展開したため、UV は 1948 年まで選挙活動はそれほど積極的には行わず、基本的に RDA の活動を中心に行っていた(本稿 7 章 1 節 3 項, 7 章 1 節 4 項)。しかし、1947 年にオート・ヴォルタ植民地が再構成され、1948 年に RDA がフランス共産党と提携し、武装闘争路線を採用すると事態は大きく変容するようになる。UV は親植民地行政、モロ・ナーバを中心とした「伝統的首長」の擁護を鮮明にさせていき、RDA と UV の双方において会派の分裂が生じた(本稿 7 章 2 節 1 項)。大まかにいえば、UV から分裂した集団によって、ワイグヤでは元軍人のドランジェによる MDV、デドゥグではナジ・ボニによる MPEA が結成された(ibid.)。

ムブン川湾曲部のデドゥグ管区では、1946 年から RDA が関与したとされる暴力事件が多発するようになった(本稿 7 章 2 節 2 項)。ボロモとワッハーブでは、1946 年頃から RDA の構成員による反植民地主義を掲げる抗議や管区司令官の邸宅への襲撃、行政官や親フランスの住民への暴行が相次いだ。また、ボンドゥクイの郡長の解任をめぐる騒動に RDA が介入し、親植民地行政の立場をとる人間への攻撃を煽り、デドゥグでは UV 支持者からの RDA 支持者への襲撃、ボンドゥクイでは UV 支持者と RDA 支持者のあいだに複数の刑事事件が生じた。1952 年に RDA は武装闘争路線を放棄し、1950 年代半ばにおいては、デドゥグ管区では、RDA は支持を失い、ボンドゥクイ、サファネの郡長は MPEA 支持者によってかためられ、MPEA が影響力をもつようになっていった。

反植民地主義を訴える RDA のプロパガンダは、フランスの弱体化、植民地行政官と親植民地的な郡長の排除の訴えへと翻訳され、デドゥグ管区での暴力事件を発生させたといえるだろう(本稿 7 章 4 節)。こうした運動は、植民地統治によって秩序付けられた政治体制のローカルな変容をもとめるものであり、人頭税の徴収や郡長の横暴に対する不満に立脚しているという点では、1915 年から 1916 年のヴォルタ・バニ戦争、1930 年代の「カトリック教徒」の不服従の運動などにみられた断続的に行われてきた植民地行政への断続的な抵抗の延長線上にあった。つまり、植民地統治の確立以来、断続的・散発的に行われてきた抵抗は、政党政治を介して新たな政治運動を構成する萌芽をみせていた。

しかし、デドゥグ管区における RDA の暴力事件が新たな政治運動を構成するには至らず、各村内における政治対立を残したまま、独立を迎えることになる。1956 年以降のオート・ヴォルタ全体の政治は、こうしたデドゥグ管区でのローカルな闘争とはまったく無関係に進行していった。概略は本稿 7 章 3 節 1 項で述べたが、議会内の多数派を構成するために、政党間の合従や政治家同士の取引がなされ、独立までに一党優位の政治体制が確立される

ようになった。

他方で、政党政治は、政治、経済、宗教が新たな運動を生み出す経路となり、ムスリム文化連合の活動はその結節点となった(本稿 8 章 3 節)。仏領西アフリカでは、1940 年代末から 1950 年代にかけて、イスラーム教育に加え、語学としてのアラビア語とフランス語教育、世俗教育を行うメデルサが各地の植民地都市で同時並行的に開設されていた(本稿 8 章 3 節 3 項)。ボボ・ジュラソにおいても、1950 年代以降、ボゾ、ソンガイ、ダフィン、ボボ・ジュラのマラブーたちによって、メデルサが開設されていた(本稿 8 章 3 節 3 項, 8 章 3 節 4 項)。ムスリム文化連合ヴォルタ支部は、こうしたイスラーム教育を刷新しようとする運動を政治運動として結実させていった。

ムスリム文化連合の目的は、メデルサの設置と普及であり、政治的には、行政からのメデルサの認可と補助金の取得にあった(本稿 8 章 3 節 4 項)。このことは、近代教育をめぐるヘゲモニー闘争として理解できるだろう(本稿 8 章 3 節 5 項)。カトリック宣教団は段階的に私学教育の認可や補助金を獲得し、オート・ヴォルタ全体の人口では 5%にもみまないにもかかわらず、1950 年代には就学児童の約 4 割が宣教団の私学学校に通うようになっていた(ibid.)。従来は、植民地行政と宣教団とのあいだで教育の主導権をめぐるヘゲモニー闘争が繰り広げられていたが(本稿 6 章)、ムスリム文化連合は、カトリック宣教団が先んじておこなっていた教育を通した陣地戦に自覚的に参与するようになったのである。

そして、政党政治という経路を通じて、ボボ・ジュラソ市では部分的には達成されることになった。RDA の古参のメンバーでボボ・ジュラソ市長となったジブリール・ヴィナマによって、ムスリム文化連合のメデルサの建設費用は市の財政から支出され、1962 年には、(同年にムスリム文化連合から改称された)ムスリム協会がココ街区に共用のモスクを要望し、ジブリール・ヴィナマによって受理されたモスクが建設された(本稿 8 章 3 節 4 項)。ボボ・ジュラソにおける RDA のメンバーや支持者がムスリム文化連合のメンバーとすべて合致するわけではなかったが、双方の活動に参加するムスリムが一定程度いたことも確かなことである(本稿 8 章 3 節 1 項)。

ボボ・ジュラソにおけるメデルサの設立の流れを全体として捉えると、植民地統治以前のイスラームの刷新との連続性がみてとれるが(本稿 8 章 4 節)、設立当初のムスリム文化連合に焦点をあてると、植民地経済のなかで富を蓄えていったムスリムたちによって、支えられた運動であったことがわかる。RDA ボボ・ジュラソ支部のパトロンであったラッサナ・ジャキテがムスリム文化連合ヴォルタ支部の初代会長であったことに象徴されるよ

うに、設立当初は、ムスリム文化連合ヴォルタ支部は、主として、商人、商社勤め、マラブーによって構成される団体であった(本稿 8 章 3 節 4 項)。そして、結成から 10 年ほどの短期間のうちに、ムスリム文化連合は在来のボボ・ジュラのマラブーやすでにメデルサを開設させていた他のマラブーたちも巻き込みながら(ibid.)、ボボ・ジュラソのムスリムの代表性を帯びる団体へと変容を遂げていくようになる。

このようにしてみると、ムスリム文化連合ヴォルタ支部の活動とは、植民地統治以降の政治、経済、宗教の変容が独自の仕方結びつき、社会を変革させていった運動であったといえるだろう。植民地経済のなかで新たに富を蓄えた商人たちをパトロンとした、イスラーム教育の近代化を目指すマラブーたちが、RDA への働きかけをおこない、あるいは RDA のメンバーをその運動に組み込むことで、自らの政治的な目的を達成させていった。イスラームに基づく国家の創設という構想が失われたなかで、教育改革に焦点をあてたムスリム文化連合の活動は、RDA という政党を介して、行政からの私学学校の認可と補助金の取得という教育をめぐる陣地戦に積極的に参入していく試みであったのである。

#### 9-1-5. 植民地統治とは何であったのか

こうした一連の変容の過程のなかで、植民地統治以降に生じた最大の変容は、行政機構の導入である。行政機構が一つの巨大な経済主体であったことが大きな変容をもたらす要因であった。端的に言えば、行政機構は、人頭税を基軸として、それ自体の再生産をおこなう一つのシステムであった。

仏領西アフリカ植民地は独立採算であったため、オート・ヴォルタ植民地の財政のほとんどが人頭税に依存していた。行政機構を維持するための基盤は、基本的に人頭税であった。ムブン川湾曲部において、フランス軍による征服以降に生じた、暴力の独占と、郡長と村長の配備と平準化は、究極的には、人頭税の円滑な徴収のためになされたものである。さらに、人頭税によって得られた財政の一部を郡長や村長らに給与として再分配することで、行政機構の末端の組織化と安定化を図ったといえよう。

植民地統治以降、換金作物の売却であれ、家畜の売却であれ、強制労働による賃金獲得であれ、いずれの手段であれ、農村ではフランが入手され、人頭税として支払われた。言い換えれば、人頭税は労働力と生産物を、フランを用いた商取引の市場に流すように機能していた(本稿 5 章 6 節)。つまり、行政機構の維持・拡張のために、フランによる貨幣経済が浸透・拡張した。行政機構だけが貨幣経済を浸透させたとはいえないものの、オート・

ヴォルタ植民地内に行政機構の財政規模と肩をならべるほどの経済主体がなかったことを踏まえれば、貨幣経済の浸透の主たる駆動因が行政機構にあったことは間違いないだろう。

こうした行政機構による経済は副次的に都市化を加速させた。行政機構は、ワガドゥグとボボ・ジュラソを中心として、管区や郡の拠点へと傾斜的に予算の配分を行ったため、ワガドゥグとボボ・ジュラソは植民地統治以降、急速に人口を増加させている(本稿 5 章 2 節)。

このような経済上の変容に加えて、決定的であったことは、行政機構の運用にフランス語の文書が用いられたことである。仏領西アフリカ植民地では、行政機構にほとんどフランス人がおらず、財政同様に、植民地官吏もまた「現地調達」された。植民地統治の最初期にカトリック宣教団が優遇されていたのは、フランス語の読み書き能力をもつ「原住民」を行政機構が必要としていたからである。こうしてフランス語の読み書き能力をもつ者たちの大半は植民地官吏か教師となり、その一部は換金作物の輸出と植民地行政の公共事業の物資供給をおこなうヨーロッパ商社に勤めるようになった。

かつてグッディは植民地統治以前の西アフリカにおけるアラビア語の読み書き能力が宗教職能者に限定されていることを指して、「限定的リテラシー」という概念を生み出したが(Goody 1968)、フランス語の読み書き能力もまた特定の集団と組織にのみ限定されているという点では「限定的リテラシー」であったといえるだろう。行政機構の再生産は、フランス語の教育を不可欠としており、西アフリカ内陸にフランス語という新たな「限定的リテラシー」をもつ集団と組織を生み出したのである。そして、このことがアラビア語の相対的な価値を下げたことはすでに述べたとおりである。

つまり、行政機構の導入とは、暴力の独占による、それ以外の勢力による徴税権の排除(政治上の変化)と、フランの流通する空間とフランス語の読み書き能力をもつ人間の活動する場の創出(経済、宗教上の変化)であった。植民地統治による変容とは、このように要約される。

#### 9-1-6. 植民地統治以前からの変容

政治上の変化でいえば、行政機構の導入は、たしかにそれ以前に生じていた国家形成の動きを抑え込み、小規模の国家を郡長と村長の行政機構の末端に再編成させるものであった。しかし、経済とイスラームにおいては、行政機構の導入が、植民地統治以前からの変容をすべて失わせたわけではなかった。

貨幣経済そのものはムブン川湾曲部においても植民地統治以前から部分的には流入していた。バンジェールの記述を読む限りでは、1888 年段階で、中核村の商人たちはタカラガイを通貨として用いており、木綿の織物や家畜が小規模ながら生産され、他地域に輸出されている。主たる輸出「商品」であった奴隷の売買が禁止され、換金作物が導入されたことで、こうした小規模の生産物は相対的な地位を下げていったものと考えられるが、西アフリカ内陸を全体としてみれば、家畜の交易は植民地統治期以降、飛躍的にその規模を大きくしていった。

再三触れてきたように、西アフリカ内陸において家畜は資本化しやすい例外的な生産物であった。植民地統治以前の 19 世紀においても、ヴォルタ川中流域のサラガでは都市化が進展しており、おそらく数千頭の家畜が北部から輸出されていた(本稿 5 章 5 節)。植民地統治以降、治安の改善、交通網の整備、都市化の加速によって、家畜は数万頭から数十万頭の規模でオート・ヴォルタ植民地の南へと輸出されていった(ibid.)。

このような植民地統治以前から行われていた交易が、植民地統治以降に、さらに拡張していくという事例は他の商品においてもおそらく看取されるであろう。コーラの実やシア・バターの交易は家畜と同様に植民地統治以降も拡張していったものである。貨幣経済の進展そのものは植民地統治以前から生じており——植民地行政による通貨に変更されるという変化はあったものの——その後に飛躍的に伸びていった。

イスラームの革新と広がりもまた、同様であった。ムスリムが特定の世襲の社会的カテゴリーに限定されるという状況は 19 世紀ごろから徐々に変容しつつあった。このような変容の起点がいつどこにあったのか特定することは困難であるが、19 世紀前半のアルファ・ボワリ・カラベンタの革新運動(坂井 2003)や、その流れを受けたサキディ・サヌによる 19 世紀末のボボ・ジュラソにおける大モスク建設はこうした変容を象徴する出来事であった(本稿 8 章 1 節)。ボボ・ジュラソにおけるムスリム文化連合の主要なメンバーの一人であったイブラヒム・ジェネボもまた、その父が伝統的なムスリムの社会的カテゴリーの出身者ではなかったことを踏まえると、植民地統治以降に生じたイスラーム改革主義運動も、長いタイムスパンで捉えれば、特定の世襲の社会的カテゴリーに限定されていたイスラームが広く一般に普及していく流れのなかにあった(本稿 8 章)。

イスラームの近代教育をおこなうメデルサや、その公的な認可と補助金の取得を政治的な目的としたムスリム文化連合の活動は、当然のことながら、植民地統治があったからこそ生じた運動であった。しかし、こうした運動を担った人びとの来歴をみるのであれば、

この運動が植民地統治によってのみ生み出されたとは到底いえないことは明らかである。

メデルサは 2000 年代以降、中東諸国の援助を背景として急速に増加しているが、1960 年代初頭のボボ・ジュラソを例外として、公的な補助はおろか、1980 年代まで行政からの認可が取得できず、ブルキナファソ(旧オート・ヴォルタ)において、それほど大きく普及することはなかった。その意味では、都市部の限定された運動であった。

他方で、ブルキナファソ全体のムスリム人口は植民地統治期から徐々に増加し続け、現在では全人口のおよそ 6 割がムスリムになっている。都市部から農村に至る広範で漸次的なムスリムの増加は、特定の集団や出来事によって生じたものではなく、その要因を特定することは困難である。しかし、少なくとも結果として、ムスリムが特定の世襲の社会的カテゴリーに限定されなくなったことが一般化したことは間違いない。

経済上の変容とは異なって、こうしたイスラームの変容は植民地統治によって飛躍的に進行したわけではなかったが、大きく妨げられることもなかった。あえて挙げるとすれば、アラビア語の相対的な地位の低下によって、フランス語教育をおこなうカトリック宣教団というライバルが出現したことであろう。

このような植民地統治以前からの経済、イスラームのなかの変容もまた、西アフリカ内陸における近代と名指されるべきものである。したがって、西アフリカ内陸における近代とは、前述の行政機構の導入と、植民地統治以前から生じていた貨幣経済の進展とイスラームの一般化である。

## 9-2. 口頭-文書の歴史人類学の再興にむけて

本稿でなされてきた検討の個別的な主題の人類学的意義については、各章で論じてきたとおりである。ここでは、通史全体を踏まえたうえで、本稿のいう歴史人類学がどのような方向性をもっているのかを述べる。

### 9-2-1. ポストモダン人類学の先へ：史料としての民族誌と歴史の一場人物としての人類学者

本稿の序論 3 節において、民族誌、伝記的小説、行政文書が、そのすべてではないものの、連続的なものとして捉えられることを指摘したうえで、こうした認識とそれに基づく史資料に対するアプローチの方法論が本稿のいう歴史人類学であると述べた。そして、これらの史料を総動員して書かれたものが、本稿のこれまでの記述であった。こうした歴史

人類学の手法は、これまでの具体的な歴史の検討と叙述を踏まえたうえで、人類学一般の理論のなかでどのように位置づけられるのだろうか。

民族誌と小説を同列に扱うという点で、人類学上、最もよく知られている研究は、クリフォードによる研究であろう。クリフォードは、民族誌の「客観性」を問いに付し、テキストとして民族誌と文学が同等のものとして扱いうることという認識を前提にして(クリフォード 1996: 43-45)、たとえば、マリノフスキーの『西太平洋の遠洋航海者』・『マリノフスキー日記』の読解を、コンラッドの『闇の奥』の読解と行き来しながら、マリノフスキーの「虚構的な自己成型の過程」(クリフォード 2003: 143)を明らかにしている(ibid.: chp. 3)。彼の中心的な主張である民族誌家の権威と調査の政治性への批判は、ここではとりあげない。史料として民族誌を捉えるのであれば、その史料批判の手続きは前提ではあっても、結論ではありえないからである。

クリフォードの研究を本稿のいう歴史人類学の立場から捉えるのであれば、その固有の限界が明瞭に示される。少なくとも、そのキャリアのスタートとしては思想史家であったクリフォードは、彼の博士論文で対象とした民族誌家のレーナルトについての研究と同様に、とりあげる人類学者の生涯とその同時代的状況とを重ね合わせながら、民族誌を再読するという方法論を常套としていた。グリオールやマリノフスキーの民族誌の読解では、その方法論が如何なく発揮されている(ibid.: chp.2, 3)。民族誌をその書かれた歴史のなかで捉えるという点では、歴史人類学と立場を同じくしているといえる。分岐となる点は、民族誌の対象となった社会と歴史についての関心の有無である。端的に言えば、クリフォードの研究では、テキストとしての民族誌は対象となっても、その民族誌の表象する社会の歴史は対象とはならなかった。

このことは、思想史家と歴史人類学者の差異であるともいえるが、理論上の問題としても問いうるだろう。クリフォードは、対象となる人物の生涯と同時代の歴史をその著作のなかに読みこむという思想史家としての方法論だけではなく、民族誌の認識論においては根本的にはテキスト理論に依拠していた(たとえば、クリフォード 1996: 5, 8)。テキスト理論に基づいて、フィクションとしての民族誌の側面を強調するその立場は(ibid.: 10-11)、民族誌と小説とを同じ土俵にあげることは適していたが、歴史の再構成のために用いるものとしての行政文書と民族誌を論じることは、その理論的な立場から演繹的に除外される



だろう<sup>5</sup>。つまり、クリフォードの研究は、当時、アメリカ合衆国の文学研究において、その地位をちょうど確立したばかりのテキスト理論による同時代的な制約に限界があったのである。テキスト理論の流行がほとんど完全に過ぎ去った現在において、もはや、テキスト理論に拘泥することに積極的な意義を見出すことはできない。むしろ、テキスト理論の制約を外すことで、民族誌と小説とを同じ土俵に上げたクリフォードらの研究には、民族誌と小説に行政文書も加えた、胎動しつつある新たな歴史人類学の源流のひとつとしての位置づけが与えられるだろう。

クリフォードらのいわゆるポストモダン人類学以前から、植民地統治と人類学を対象とした研究は行われてきたが(たとえば、ルクレール 1976[1972]; Asad 1973)、ポストモダン人類学は植民地統治期の研究を活性化させた。そうした研究の一部は、植民地統治のいわば統治理性を対象とする研究を進展させていき、植民地統治期の行政文書を積極的に用いるようになっていった(たとえば、Cooper and Stoler 1996; 真島 1999, 2000; 三瀬 2000, 2002; 渡辺 2003; ストローラー 2010[2003])。特に、19 世紀末から 20 世紀初頭にインドで行われたセンサスとそれを主導した人類学者のリズレイの位置づけを論じた三瀬(2000)の研究は重要である。そこでは、リズレイの著作とセンサスに関連する史料とを往還しつつ、英領インドの植民地統治のあり方と人類学史のなかでのインド研究の位置づけの双方が不可分に結びついたものとして論じられている。ここにおいて、民族誌と行政文書が同じ分析の俎上にあがるようになった。

このような研究の延長線上に、いまだひとつの潮流を形成していないものの、新たな歴史人類学となりうる一群の研究が、近年、それぞれ個別の歴史人類学として現れてきている。それらの研究は、民族誌と行政文書、小説と行政文書を往還しつつ、植民地統治そのものに焦点をあてていた研究から、植民地統治のなされた社会の歴史の研究へと向かっていった。

このような研究群のなかで、モノグラフとしてまとめ、その理論的立場を明確にしたものとして、アルマンとパーカーによるタレンシの歴史人類学が挙げられるだろう(Allman and Parker 2005)。彼らはフォーテスの民族誌とフィールドノートを経典史料として扱い、植民地統治期の行政文書と部分的には口頭伝承を駆使して、フォーテスが焦点化しなかつ

---

<sup>5</sup> ヘイドン・ホワイトを筆頭に、史料、歴史書、歴史叙述に対して、テキスト理論は応用されたが、そこでも、問題とされたことは、フィクションとしての歴史という認識論であった。このことについては論争と数多くの文献があるが、ここでは立ち入らない。

たものの、断片的に記述を残している、タレンシの巡礼地の歴史を主題とした。

フォーテスの民族誌の対象となったタレンシの居住域のホームに位置づけられるトング丘陵(Tong Hills)は、少なくとも 20 世紀初頭にはタレンシを越えて周辺諸民族からの参拝者の訪れる巡礼地を形成していた(ibid.: 44-47)。タレンシに対する最初の征服がなされた 1899 年から 1911 年まで、英領ゴールド・コースト(現、ガーナ)の植民地行政官たちは国家をもたない社会のタレンシの征服に手を焼いており(ibid.: 57)、多くの人びとを惹きつけていた巡礼地を中心としたタレンシの居住域は、植民地軍によって数回、懲罰的軍事行動を受け、1911 年には巡礼地の呪物が徹底的に破壊されている(ibid.: 59, 65-70)。1911 年から 1928 年までは、タレンシの一部の住民たちは植民地行政官と関係を構築することを模索し、その特定の関係性に依拠した偏りのある植民地統治が行なわれた(ibid.: 81-87)。1928 年、ラットレイ——彼も初期の英語圏を代表する行政官＝民族誌家である——が統治への援用を想定した、タレンシを含む北部領域の伝統的な慣習と社会組織の調査を行ない、おおまかには 1920 年代末以降、北部領域ではいわゆる「間接統治」が確立されるようになっていた(ibid.: 107-109, 183)。このようなタレンシを含む英領ゴールド・コーストの北部領域における植民地統治の改革がなされていたなか、1930 年代にタレンシの居住域にやってきたのが、フォーテス夫妻であったのである(ibid.: 183)。

このように、タレンシの歴史のなかにフォーテスの民族誌をおきなおすと、フォーテスが記述の対象となるべき歴史上の人物となることは明瞭である。したがって、アルマンとパーカーが焦点化するのは、西アフリカ内陸における諸民族の相互交流としてのタレンシの歴史とともに、「冷静な民族誌的観察者というよりもむしろ、歴史的なアクターとしてのフォーテス」の双方ということになる(ibid.: 14)。かつての「物語<sup>フィクション</sup>の一登場人物である民族誌家」(クリフォード 1996: 25)という認識が、大きく変容していることをみてとれるだろう。民族誌家は歴史の一登場人物となったのである。

実際のところ、民族誌の対象となった社会の歴史を研究するという関心のなかで民族誌を読むと、断片的な細部の記述が際立った重要性を帯びてくる。史資料のまばらなローカルな歴史を再構成しようとする、地域の社会組織や経済状況についての記述はもちろんのこと、記述のなされる村の一つ一つの名前や叙述のほんの隅に書きつけられた個人名が見逃すことのできないものとなる。地名と人名が、フィールド調査で見聞きした、あるいは行政文書に登場する地名や人名と交錯するとき、民族誌で展開されている人類学上の議論やその叙述全体のテキストの構成を越えて、民族誌に時折あらわれる固有名に火がとも

され、その固有名の周囲にある細部の記述に新たな光が当てられることになるのだ<sup>6</sup>。このように、民族誌は歴史史料として捉えることでふたたび新たな読解の対象となるだろう。

さらに、パーカーはフォーテスの民族誌だけではなく、フォーテスの遺した文書群を用いた新たな研究を展開している(Paker 2013)。近年、フォーテス夫妻それぞれが書いていた日誌とフィールドノートを含むフォーテスの遺した文書がケンブリッジ大学図書館に寄贈された(ibid.: 642)。こうした文書を丹念に読むなかで、パーカーは民族誌にわずかに名前のみられる、フォーテスのフィールド調査を可能とした調査助手や現地の有力者たちが、1930年代のタレンシ社会において、いかなる立場にあったのかを明らかにしている(ibid.)。

このように人類学者を歴史の一登場人物として捉え、民族誌や小説などの彼らの著作と行政文書とを往還しつつ、歴史を再構成する研究は、フォーテスとタレンシの研究のようなモノグラフに比するものはないが、論文レベルでは、近年、それぞれ個別に、同時並行的に出現してきている。本稿全体のなかで、他に言及したものが、バランディエ(本稿序論1節2項)、デロブソム(本稿6章3節)、ハンパテ・バ(本稿6章2節)の研究である。

たとえば、マンはフランス黒アフリカ研究所勤務時代のバランディエと彼の同僚で政治運動を行っていたマデイラ・ケイタについての行政文書を用いて、彼らの活動内容や植民地行政との緊張関係を明らかにし、そうした同時代的状況を踏まえて、彼らの刊行された論文を読み解き、彼らの研究が政治的関心と結びついて展開されていたことを明らかにしている(Mann 2013)。ここで行われていることは、まったくアランとパーカーの研究の方法論と重なっている。

あるいは、ブルキナファソの最初の叙述家とも評されるデロブソムにも、このような研究(Kevane 2006)がある。ディム・デロブソムはワガドゥグの近郊のある郡のモシの「伝統的首長」の息子として生まれ、植民地学校を出た後に、1920年代にオート・ヴォルタ植民地の「原住民行政官」となった人物で(ibid.: 13)、1930年代初頭に『モロ・ナーバの帝国』、『黒妖術の秘密』という著作をフランス語で出版している。ケヴァヌはデロブソムを対象

---

<sup>6</sup> 固有名はジャンルの異なる史料間をつなぐ結節点となり、歴史の再構成において決定的に重要な意味をもつ。このことは口頭伝承と史料との比較検討の出発点となるものであるが、何らかの固有名に付託して自らの来歴や出自にかかわる歴史を構成しているという点で、口頭伝承そのものにも、固有名を結節点とすることは共通している。この点については、本稿3章における歴史的人格の議論を参照。固有名によって具現化される人格と歴史という主題は、本稿でいう歴史人類学の示す地平のひとつである。なお、地名もまた、ゲニウス・ロキなどといった言葉で体現される位格をもっており、人格に対応する適切な語で表現されなければならないだろう。また、こうした論点は、非文字資料の歴史研究を開拓していった川田による「肖像と固有名詞」(川田 2004: chp. 6)などの議論と接合するだろう。

として、二次文献と行政文書を組み合わせつつ、彼の生涯とカトリック宣教団との闘争を論じているが、そのなかでデロブソムの著作を再読し、そこでの「伝統」の論じ方に、「伝統」への行政の介入のあり方をめぐる、デロブソムのおかれた政治的状況と彼の戦略を見出している(ibid.: 19)。

この『モロ・ナーバの帝国』(Delobsom 1932)は、帝国、大臣などといったフランス語の概念をモシの政治組織に安易に当てはめて記述したものとして批判されており(たとえば、川田 2001[1976]: 260)、人類学や口頭伝承研究が精緻化されていくなかでは、基本的に比較検討の対象からは外されていた。このことを鑑みると、ケヴェヌはデロブソムの著作に新たな光をあて、再読の方向性を示したといえる。つまり、デロブソムの著作の出版それ自体が政治的な行為であり、その出版を可能とした諸力もまた、歴史を再構成するうえで重要な意味をもつことを浮き彫りにした。このことを踏まえれば、著作の内容がその記述の真偽とは別の水準で、どのような政治的な意図で特定の内容が書かれ、あるいは書かれなかったのかというように読むことができるだろう。ケヴェヌの研究(Kevane 2006)では、部分的にそのことが示されているといえる。本稿 6 章 3 節においても、この著作に序文を寄せた行政官＝民族誌家のアルノーの政治的な立場に言及したが、デロブソムの著作の再読からは他の論点も浮かび上がるだろう。

ハンパテ・バをめぐる研究は、近年、一部で活況をみせている(Austen 2008, 2015; Austen and Soares 2010; Pondopoulo 2010)。この研究は、ワガドゥグとボボ・ジュラソの都市史のモノグラフを上程したフルシャルが、その研究のなかで、ハンパテ・バの伝記『ワングランの不思議』の主人公ワングランの本名をボボ・ジュラソでの聞き取りから明らかにし、ボボ・ジュラソに実際に居住していたことを突き止めたこと(Fourchard 2001: 150-151)を起点としている。のちにこの証言そのものは、幾つかの記憶違いを含んでいることが指摘されたが<sup>7</sup>、この証言は小説に描かれた「現地人行政官」で通訳であったワングランとその生涯が歴史的な事実である可能性を示唆することになった。

オースティンは植民地行政の膨大な決定事項(デクレ(政令)、アレテ(命令)、通達など)の記載された官報を可能な限り全て閲覧し、ワングランの本名の登場する「現地人行政官」の任命や転任の記録を見つけだし、これがほぼ『ワングランの不思議』の記述と対応することを明らかにした(Austen 2008)。その一方で、同書で語られる、裁判沙汰になったバン

---

<sup>7</sup> 多数の関連する行政文書にあたったオースティンが、この証言の録音をフルシャルとともに再検討し、他の人物についての記憶の混同がみられることを指摘している(Austen 2015)。

ジャガラでの事件については、バンジャラガの年次報告などを参照しても見いだすことができなかったと報告している(ibid.)。このことを受けて、行政文書の史料調査から『ワングランの不思議』で語られている内容に対応し、「現地人行政官」であったハンパテ・バが知り得た事件を見つけだしている(Pondopoulo 2010; Austen 2015)。つまり、小説の事件のモデルがいくつか探し出されることになった。

こうした研究は『ワングランの不思議』についてのいわば史料批判の段階にあるが、本稿では、ハンパテ・バの自伝的小説の記述と直接には対応しないものの、おおまかに関連する、ある郡長の権力乱用があったことを指摘した(本稿 6 章 2 節)。そのうえで、ハンパテ・バの自伝的小説に言及されるデロブソムが、植民地行政内におけるカトリック宣教団とムスリムとの宗教・政治のなかに巻き込まれていたことを示し、こうした事態がまさに同書のトゥーガン管区勤務時代についてのハンパテ・バ自身の経験(とされるもの)を記述した章の主題となっていることを指摘した(ibid.)。ハンパテ・バの伝記的小説の検討ははまだ多くが手付かずに残されており、本稿で論じたように、その小説内の登場人物の特定をおこなうという検討もほんの端緒についたばかりである<sup>8</sup>。

このように、ポストモダン人類学から始まり、それを受けた植民地統治の歴史人類学を経た、新たな歴史人類学は、民族誌、伝記的小説、行政文書をひとしく史料としてみなし、同じ土俵で論じ、人類学者を歴史の一登場人物と捉え、これらの文書を相互に参照しつつ、歴史の再構成を志向するようになった研究としてまとめられるだろう。これらの研究は、ある場合においては、行政文書から同時代のコンテキストを補うことで、民族誌／伝記的小説をテキストとして読み、別の場合には、その逆をおこなうという、テキストとコンテキストの共振を行ない(本稿序論 3 節 2 項)、歴史に厚さをもたらしている。文書史料が相対的に少なく偏りのある地域の歴史研究にあって、史料的制約の隘路を抜ける道筋を、この方法論は示しているのである。

しかし、以下のような批判がありうるだろう。このことは歴史研究の対象とする史料の範囲を広げただけではないか。こうした分析の可能な民族誌／伝記的小説は限定されているのではないか。現に、こうした記述と分析は本稿 6 章に限定されているのではないか。たしかに、このままではひとつの史料論にとどまる。バランディエのおこなったように(本

---

<sup>8</sup> ハンパテ・バの伝記的小説には、おびただしい数の地名と人名が具体的に言及されている。このことは、その小説の大きな特徴をなすものであり、おそらく意図的なものであったのだろう。この膨大な固有名それぞれの歴史と小説内の記述との検討は、固有名をおびただしく埋め込んだ、この小説のテキストとしての特徴とともに論じられる必要があるだろう。

稿序論 1 節 2 項)、史料論を社会論と統合したものとしての歴史人類学を示す必要がある。そこで次節では、史料論と社会論を統合する歴史人類学の視座について述べる。

### 9-2-2. 諸言語の社会的布置と口頭-文書の歴史人類学

史料論と社会論の統合の萌芽もまた、ポストモダン人類学にみることができる。かつてクリフォードがまさに部分的に論じたように、テキストが、どの言語で書かれ(クリフォード 2003: 130-132, 145)、どのカテゴリーに分類されるのか(ibid.: 220-221)という点(の葛藤)は、テキストとその著者を捉えるうえで重要な点である。クリフォードの限界はこのことを英仏の民族誌と文学の歴史にしか適用しなかったことにある。ここでは舞台を西アフリカ内陸に移して、ハンパテ・バのテキストにおける言語とテキストのカテゴリーがどのような歴史のなかで選択されたのかをみて、史料論と社会論の統合のための基本的な視座を示しておこう。

西アフリカ・イスラーム史を専門とするブレンナーは、仏領スーダン(現在のマリ)のセグーでメデルサを独自に開設したサーダ・トゥレ<sup>9</sup>とハンパテ・バを対照させている。すなわち、両者とも生まれた場所と世代こそ違っていたが<sup>10</sup>、ともにアルハジ・オマルのジハードに参加したムスリムの家系に生まれ(Brenner 1997: 20)、幼い頃にクルアーン学校に通ったが、両親の望みに反して植民地学校に行くことになり、この経験は両者の人生に大きな影響を与えることになった(ibid.: 21)。しかし、この経験から両者はクルアーン学校に正反対の意味付けを与えた。のちに、ハンパテ・バはクルアーン学校での経験を敬意をもって言及することになったが、サーダ・トゥレはクルアーン学校を批判するようになる(ibid.: 468)。

サーダ・トゥレは植民地学校を出た後、本人の意図に反して、父親の圧力によってクルアーン学校にふたたび入れられ、高度なレベルの伝統的な宗教教育を受けた(ibid.: 468)。彼は、アラビア語の習得の前になされるクルアーンの丸暗記に代表される伝統的な教育法に疑問をもち、植民地学校で受けた近代的な教育法を応用したメデルサを新設することになった(ibid.: 468)。このことは、仏領スーダンの政庁のおかれたバマコで展開された、アズハル大学留学経験者によるメデルサ設置の流れと並行して生じていたため、メデルサは中東からの汎イスラーム主義の流入を警戒した植民地行政からの監視を受けた(ibid.: 468, 485)。

---

<sup>9</sup> サーダ・トゥレと仏領スーダンのメデルサ設立の歴史については本稿 8 章 3 節 3 項を参照。

<sup>10</sup> サーダ・トゥレはセグー、ハンパテ・バはバンジャガラで生まれ、ハンパテ・バはサーダ・トゥレよりも 15 歳年上であった(Brenner 1997: 467)。

ハンパテ・バは植民地学校の初等教育修了後も進学し、「原住民行政官」となり、1920年代から1933年までオート・ヴォルタ植民地で勤務した後、生まれ故郷のバンジャガラにもどり、スーフィー教団の彼の師であったチェルノ・ボカールから教えを受けた(ibid.: 468, 478)。1940年代から、彼はフランス黒アフリカ研究所のバマコ地方局に勤め、1950年代にはムスリムの監視・監督のためのムスリム事情局にも関与し、メデルサに対抗したいいわゆる対抗・改革運動をおこすことになる(ibid.: 468, 485)。対抗・改革運動は、植民地学校において週に3時間、現地語によるイスラーム教育を行なうというものであった(ibid.: 485)。ムスリム事情局の局長であったカルデールはこの運動を積極的に支援し、学校教育はフランス語しか認めないという原則についても、課外活動として捉えることで容認している(ibid.: 487)。

つまり、サーダ・トゥレは宗教教育の基礎としてアラビア語の近代教育を導入し、ハンパテ・バは近代教育に伝統的な宗教教育を付加させようとしたのである。そして、前者は植民地行政と対立し、後者は連携していた。このことが、ハンパテ・バのテキストの生産と流通を規定する同時代のコンテキストであった。

ハンパテ・バのリテラシー(読み書き能力)は、経歴と同時代のコンテキストと不可分に結びついていて、彼はアラビア語を基本的に口頭でしか学ぶ機会がなかったため、彼の文書化の手段はフランス語に限定されている。このことが独自の改革運動と重なり合うものであったことは容易に読みとれるだろう。このようにしてみると、ハンパテ・バのテキストがフランス語で書かれ、そのために、最初期の著作は民族誌というカテゴリーに入るテキストとして生み出され、先行する民族誌に模範を見出すことのできない植民地統治期の歴史を扱った著作は小説というカテゴリーに入るテキストとなったことがわかる。

1950年代、フランス語でなされる植民地学校での教育に、現地語によるイスラーム教育を付属させるという対抗・改革運動と並行するかたちで、ハンパテ・バは所属する植民地行政機関のフランス人とともに民族誌をフランス語で書いていた。すなわち、フランス黒アフリカ研究所の研究員であったダジェとの共著の1955年の『マーシナのフルベ帝国』(Daget et Bâ 1955)、ムスリム事情局の局長であったカルデールとの共著の1957年の『チェルノ・ボカール：バンジャガラ の賢者』(Bâ et Cardaire 1957)<sup>11</sup>である。共著という形態

---

<sup>11</sup> この著作はのちに、ハンパテ・バによって加筆・修正され、『チェルノ・ボカールの生涯と教え：バンジャガラ の賢者』(Bâ 1980)として再版される。カルデールとの共著との異同の精査もまた重要な論点であるが、これは別の主題であり、別の機会に論じることとする。

をとらざるを得なかった、当事者を越えた構造的な権力関係については論をまたないであろう。

それに加えて、重要な点は、すでに高い評価を得ていたフランス人類学の民族誌をそれぞれ模範として書かれていることである。植民地統治以前のアルハジ・オマルのジハード国家についての口頭伝承をまとめた著作(Daget et Bâ 1955)は、植民地統治以前のセグー王国とカアルタ王国についての口頭伝承のまとめを含む、行政官＝民族誌家のモンテイユによる『セグーとカアルタのバンバラ：仏領スーダンのある民族についての歴史的・民族誌的・文学的研究』(Monteil 1924)を模範とし、ハンパテ・バの師のチェルノ・ボカール個人に焦点をあて、彼の日常的な挿話とチェルノ・ボカールとの問答によって、その世界観を開示させた著作(Bâ et Cardaire 1957)は、オゴテンメリとの問答からドゴンの世界観を描き出したグリオール『水の神』(グリオール 1981[1948])を模範としているとおおまかにはいえるだろう<sup>12</sup>。

現地語で語られる西アフリカ内陸におけるムスリムの特定の歴史と哲学を文書化することとは、ハンパテ・バの来歴からは、フランス語という回路を通らざるをえず、その回路を通ると必然的に民族誌というカテゴリーにテキストをはめ込まなければならなかった。そして、特定個人の歴史という叙述の形式をとった『ワングランの秘密』や自伝は、先行する民族誌に模範が見いだせず、当時の西アフリカ内陸を対象とした歴史学のオーソドックスな歴史研究とも異なっていたため、小説というカテゴリーのテキストとして提示されたと捉えることができる。

他方で、現地語で語られるムスリムの知識をフランス語で文書化するという営為が、フランス語でなされる植民地学校での教育に、現地語によるイスラーム教育を付属させるという対抗・改革運動と並行していたことは、単なる偶然ではありえないだろう。そもそもハンパテ・バが伝記を書いたチェルノ・ボカールは、アラビア語のリテラシーをもたない人びとのために簡単な図表を用いながら、口頭のフルベ語で教育を行っていた人物であっ

---

<sup>12</sup> ハンパテ・バの著作と先行する民族誌とのあいだには、その主題の選択を含むいくつかの点で重大な差異があり、ハンパテ・バが従来の民族誌の欠けている点を補うことを意図していた、あるいは、少なくとも、結果的に補うようなものを生み出したこともまた、確かである。これは別の主題であり、別の機会に論じることとする。なお、『チェルノ・ボカール：バンジャガラ賢者の』(Bâ et Cardaire 1957)の文書化の経緯の詳細は、坂井(2009b)に詳しい。坂井は、『チェルノ・ボカール：バンジャガラ賢者の』の出版を即し、ハンパテ・バと書簡を通じた親密なやりとりをしていた当時のフランス黒アフリカ研究所所長のモノ(T. Monod)との共鳴関係を明らかにし(ibid.: 121-124)、イスラームとキリスト教の出会いとして論じている(ibid.: 127)。



た(坂井 2009b: 103-104, 132)。その意味では、ハンパテ・バにとって、チェルノ・ボカールの伝記を書くことは、彼の思想と実践を受け継ごうとするものであったといえるだろう。あるいは、ハンパテ・バは、自らの思想と実践の根拠を遡及的にチェルノ・ボカールにもとめていたとも部分的にはいえるだろう。いずれにせよ、チェルノ・ボカールの伝記を書くことと対抗・改革運動への参与は不可分に結びついたものであり、ハンパテ・バの活動はチェルノ・ボカールの教育活動の延長線上にあった、あるいはそのように自ら位置づけたことは確かである。ハンパテ・バが目指していたことは、現地語によって口頭で表現されるムスリムの知識を、フランス語で書かれる知識に埋め込むことと併存させることであった。つまり、植民地行政との対話<sup>13</sup>によって、現地語の口頭の知識とフランス語の文書の知識を連続的なものとするというかたちでのイスラームの近代をハンパテ・バは志向したのである。

ハンパテ・バによって志向されたイスラームの近代は、植民地行政の存在を抜きには語ることはできない。しかし、これもまた、植民地統治以前からの変容と合流したものであった。チェルノ・ボカールはドゴンの主たる居住域のバンジャガラで活動を行っていた。バンジャガラのドゴンのなかでムスリムへの改宗者があらわれたのは、19 世紀後半のトゥクロールによる、この地域の征服以後のことであった(ibid.: 106)。こうしたことから、ドゴンの新改宗者の受け入れに積極的だったチェルノ・ボカールは、20 世紀初頭から、アラビア語のリテラシーを必要としない、日常言語のフルベ語による口頭のイスラーム教育を行っていたのである(ibid.: 106)。対抗・改革運動における現地語でのイスラーム教育という発想と、一般的な社会的カテゴリーとしてのムスリムというあり方は、チェルノ・ボカールにおいても相互に結びついており、ハンパテ・バにおいても、そうであったのである。

しかし、このイスラームの近代がすべてであったわけではない。ハンパテ・バの対抗・改革運動が、サーダ・トゥレらのメデルサ設置に対抗して行われていたことからわかるように、同時代には別様の試みがなされていた。本稿 8 章で論じたイスラーム改革主義では、アラビア語の近代教育の導入し、これにフランス語教育と世俗教育を組み合わせるという

---

<sup>13</sup> このことは、ハンパテ・バの著作ではイスラームとキリスト教との対話という主題として書かれている。この点については、坂井(2009b)が詳しい。なお、植民地行政とキリスト教は当然のことながらイコールではない。しかし、ハンパテ・バが植民地行政ではなく、キリスト教との対話を主題としたこと、ハンパテ・バにとっては植民地行政との関わりがキリスト教との関わりと部分的に重なっていたことの意義は問われるべきであろう。ここでの筆者の論述は、植民地行政との関わりを述べている。

メデルサの設置によるイスラームの近代化が志向された。彼らは、植民地行政と対峙し、現地語による知識とアラビア語の伝統的な書字文化とは離れて、あくまでも語学としてのフランス語とアラビア語の教育の近代化に焦点をあてるというかたちでのイスラームの近代を志向したのである。こうした運動もまた、19世紀ごろからの、世襲的なカテゴリーとしてのムスリムから、一般的な社会的カテゴリーとしてのムスリムへという大きな流れのなかに位置づけられることは本稿8章で論じたとおりである。

このように対抗・改革運動とイスラーム改革主義運動は、おおまかには根源を同じくする対照的な運動であった。イスラーム改革主義運動の当事者を親族にもつカバによって、1974年に出された先駆的なイスラーム改革主義運動研究は、この対照的な関係を克明に示している(Kaba 1974)<sup>14</sup>。このなかで、カバは、ハンパテ・バを名指しで言及し、ヨーロッパ社会への同化を目指す「近代主義者」として位置づけ、イスラーム改革主義運動をイスラーム文明の近代化によってオルタナティブな近代を目指す「改革主義者」として位置づけている(ibid.: 24-25)。カバの著作は、西アフリカ内陸のイスラーム史を歴史学的にアプローチしたウィルクスの指導の下、ノースウェスタン大学に提出された博士論文をもとにしたもので(ibid.: xi)、英語で出版されている。

このカバのテキストもまた、二重の意味で重要である。第一に、このテキストは、国際的な学術世界に向けて、それ以前の改革主義運動を危険視する植民地行政官による研究やハンパテ・バの活動と著作への対抗言論を構成しようとするものであった。第二に、フランス語ではなく英語で、人類学ではなく、歴史学として提示されているという点で、ローカルなイスラームの知識が流通する回路がフランス語にはハンパテ・バの通ったものしか、それ以前にはなかったということを露呈している。

このように、テキストが、どの言語で書かれ、どのカテゴリーに分類されるのかという

---

<sup>14</sup> カバはギニア出身の研究者で、おそらく彼のオジがマリのバマコで展開されていたイスラーム改革主義運動に参加していた当事者であった(Kaba 1974: xi)。イスラーム史研究の泰斗のウィルクスの指導の下、ノースウェスタン大学に提出された博士論文がもとになっている(ibid.: xi)。マリにあるフランス植民地期の行政文書、反植民闘争を一時展開し、イスラーム改革主義運動と連携した RDA の会報、イスラーム改革主義運動を率いた人物たちへのインタビューに依拠し、1960年代までのフランスの植民地行政官による黒イスラーム論の延長線上にあったイスラーム改革主義研究に一石を投じる革新的な研究であった。こうした運動に参加していた当事者からの内側の視点は、当時の書評においても高く評価された(Berhrman 1975; Fisher 1976)。しかし、他方で聞き取りの内容をそのまま記述したようなディテールの連続に対して分析が足りないことへの批判(Berhrman 1975)、ジュラの商人によるイスラーム化の歴史的な過程や近代以前のマッカ巡礼の歴史的背景が踏まえられていないとの指摘がなされた(Fisher 1976)。

点に着目すると、同時代における複数の言語のいわば社会的布置というべきものが浮かび上がってくることがわかるだろう。種々の言語によって口頭で語られる知識、西アフリカ内陸内で書かれてきたアラビア語の手稿書、フランス語で書かれた文書、英語で書かれた文書はそれぞれ異なる社会集団の範囲で流通していたのである。

ムスリムを例として、やや単純化していえば、以下のようなになる。すなわち、クルアーン学校に通うと、長期の修学を通じて、種々の現地語での口頭による知識を伝承しつつ、アラビア語のリテラシーを徐々に習得し、マラブーの学術の人的ネットワークに参入することで、手稿書へのアクセスが可能となるが、フランス語の流通する範囲の社会領域には進出できなくなる。他方で、植民地学校に通うと、フランス語のリテラシーを相対的に早期に習得し、フランス語の流通する範囲の社会領域で職を得ることができるが、アラビア語の手稿書へのアクセスが困難となる。サーダ・トゥレとハンパテ・バは、このアラビア語とフランス語の流通する範囲のあいだに位置づけられる存在であったといえるだろう。

つまり、アラビア語とフランス語ではそれぞれに口頭の知識を文書化する際の回路が異なり、その回路によって文書の位置づけられるカテゴリーが異なっている。そして、イスラーム改革主義運動と対抗・改革運動は、それぞれ別様に、流通する範囲を規定する言語の社会的布置を変更させようとするものであった。言い換えれば、西アフリカ内陸におけるイスラームの近代とは、言語の社会的布置の変容でもあったのである。

実際のところ、西アフリカ内陸におけるイスラーム改革主義は本質的にアラビア語の教育改革であった。本稿 8 章で論じたように、ボボ・ジュラソにおけるメデルサ設置やムスリム文化連合の活動は、アラビア語の近代教育を行なうメデルサの設置、その公認・助成金の取得を政治的目的としていた。イスラーム改革主義の中核的な活動が教育改革にあったことは、オート・ヴォルタのワガドゥグでも同様であり (Kobo 2012b)、仏領スーダン (Brenner 2000)、セネガルとナイジェリア北部 (坂井 2016)、英領ゴールド・コースト北部 (Iddrisu 2012)、コートディ・ヴォワールのブアケ (LeBlanc 1998; Miran 2006) においてもみられる。

これらの指導者たちは必ずしも中東・北アフリカに留学した者ではなかったし、単一の中心地から拡散して広まっていったものでもなかった (中尾 2016a: 133-135)。しかし、同時並行的に類似した運動が生じたことは単なる偶然ではないだろう。むしろ、宗教をめぐる条件 (本稿 6 章) が共通しており、そのことによって、いずれの地域でも、上述のようにまとめたアラビア語とフランス語 (あるいは英語) の流通範囲を規定する言語の社会的布置が存

在していたものと考えられる。言語の社会的布置を大きく変容されたのが、行政機構であった。行政機構は、領域内で最大規模の文書の生産と流通をおこなっていた。歴史史料の多くが行政文書であるということは、このことの結果でもある。

この地点において、ようやく史料論と社会論の統合をみることができるだろう。人類学者を歴史の一登場人物として扱い、彼らの生みだした民族誌、小説、行政文書を相互に補完し合う史料として捉え、それらの史料がどの言語でどのような種類の文書として書かれているかに着目することで、歴史を再構成する手段を拡張させるだけではなく、歴史を表象する口頭伝承と文書の社会的な関係性、すなわち、諸言語の社会的布置を捉えることができるようになる。これが本稿の到達した歴史人類学の新たな地平である。

この地平に立ったとき、この理論的立場は、西アフリカ内陸の歴史人類学を出発点としながらも、分離してしまったリテラシー研究の流れと結びつくだろう。この発端は、ガーナをフィールドとしたグッディの研究にもとめられる。グッディは、リテラシーと社会とが相互に関連していることを踏まえつつ、西アフリカ内陸のアラビア語の書字文化を「限定的リテラシー」(restricted literacy)として捉え、地域と時代の異なる研究者とともに論集としてまとめた(Goody 1968)。ここでいう「限定的リテラシー」の限定とは、本の流通する範囲が特定の集団に限られており(ibid.: 11-14)、特定の技術——たとえば、呪術——にのみ適用され、社会生活に用いられていないことを指す(ibid.: 16-20)。

グッディの議論は、オングの口承文化と書字文化の歴史的変遷の研究(オング 1991[1982])と結びつつ展開される一方で、開発研究の文脈でのリテラシー研究に批判的に継承されていった(中村 2009a)。もともと中村はマリのグリオ(語り部)の口頭伝承と文書・カセットテープなどのメディアとの関係を研究していたが(中村 1995)、グッディ以降の研究史を踏まえたうえで、認知科学とアーカイブズ学の成果を導入し、人類学における新しいリテラシー研究を提示していることになった(中村 2009b)。そこでは、文書を生産から記録、保管、参照、破棄までの循環プロセスとして捉えることが提唱されている(ibid.)。このような文書認識は、上述の本稿における史料認識と部分的には重なるものであろう。

他方で、本稿の歴史人類学の立場は、グッディの「限定的リテラシー」概念に、いまいちど新たな含意をもたせることができるだろう<sup>15</sup>。グッディはこの概念の適用範囲をいわゆ

---

<sup>15</sup> 近年、グッディの再評価が進んでいる(たとえば、Olson and Cole 2006; Hann 2008, 2015; Hart 2014)。主としてとりあげられる点は、世界的な規模での、親族内の継承と相続についての比較研究(Hann 2008)、近代史を比較し文明史的な枠組みで把握する研究(Hart

る伝統社会にもとめていたが、本稿のこれまでの記述を踏まえれば、植民地統治期のオート・ヴォルタにおけるフランス語もまた「限定的リテラシー」であったことがわかる。このようなリテラシーと社会との相互関係をあつかうものとしても、本稿のいう歴史人類学は言い換えることができるだろう。

もっとも、この地点においてもなお、以下のような批判がありうるだろう。なるほど、史料論と社会論を統合したとする歴史人類学は、本稿第2部と第3部の議論に部分的に重なり合うだろう。しかし、第1部で論じた口頭伝承の研究とは分離したままではないか。結局のところ、植民地統治以前とそれ以降の歴史を同じ地平で捉えられていないのはいか。理論的には、次のように応えられる。まず、口頭伝承は、つねに現在においてしか語られず、参照しうる過去に語られた口頭伝承は文書化されたものであり、その文書化は——植民地統治以前のアラビア語の文書を除けば——植民地統治以後になされたものである。つまり、文書化されたものであれ、そうではないものであれ、口頭伝承は、必然的に、近代以降のものとなっており、行政機構の導入以後の諸言語の社会的布置のなかで語られたものとなっている。このような認識がどのような口頭伝承と文書の新たな歴史人類学のかを示すのか、本稿と密接に結びついた事例を簡潔にとりあげて示しておこう。

さきに言及した「限定的リテラシー」の概念を示したグッディの論集には、タンバイアやブロックなどとともに、ウィルクスが寄稿している。ウィルクスはこの論文のなかで、ブルキナファソ、コートディヴォワール、ガーナ北部を含むヴォルタ川流域へのイスラームの展開をまとめ、この地域のイスラーム史の歴史を定式化した(Wilks 1968a)。以後、この論文は、「限定的リテラシー」の議論とは離れて、現在に至るまでヴォルタ川流域のイスラーム史では必ず引用され、無批判の前提となっている。

他方で、この論文の註釈を注意深く読むと理解できることではあるが、この論文の主要な歴史観とそのデータは、ボボ・ジュラソの著名なマラブーのマルハバ・サノゴへのインタビューや彼から提供された史料に大きく基づくものであった。近年、ウィルクスは、自身の研究をふりかえりつつ、絶対年代についての評価以外はほとんどマルハバ・サノゴからの聞き取りに依拠していたことを率直に書いている(Wilks 2011: 6)。

マルハバ・サノゴは、ボボ・ジュラソのマラブーたちのあいだでは一定程度、その名声

---

2014; Hann 2015)であり、これらの内容のもとに加えてリテラシー研究についても再評価が行なわれている(Olson and Cole 2006)。グッディの再評価についても重要な論点であるが、これは別の主題であり、別の機会に論じることとする。

が知られている。彼は西アフリカ内陸を広域に行き来し学識を積み、マッカ巡礼を果たし、その学識を前提としてメデルサの普及を積極的におこなっていた(本稿 8 章 3 節 4 項)。マルハバのもとに多くの学生や政治家が訪問してきたことは、彼の旧宅に住む孫娘にはしっかりと記憶されている<sup>16</sup>。一方で、彼の著作は晩年に書かれたというチュニジアで出版された小冊子しか残されていなかった。

やや脱線するが、1990 年代ごろまで、ボボ・ジュラソにはカトリック宣教団による「サバンナ出版」(*l'Imprimerie de la savane*)という印刷所しかなかったという<sup>17</sup>。宣教団は、この印刷所を通じて、先着の民族で非ムスリムであった農耕民のボボの言語をアルファベット化し、ボボの民話を収集し、小冊子として出版している。宣教師たちの在来宗教の民俗への関心(の限定)は、「アニミスト」を宣教の対象として設定し、「アニミスト」の土地としてのオート・ヴォルタ植民地という宗教認識(本稿 6 章)の延長線上にあるものであったといえるだろう。

アラビア語の印刷という手段をもたなかったマルハバは、植民地統治以前から行われてきた手書きで、その知識を書き残すことになった。彼はヴォルタ川流域の歴史についての広範にアラビア語で手稿書を書いており、これら(のコピー)は現在、ニジェールの政治家のボボ・ハマによってニジェールの大学に、そしてウィルクスによってガーナの大学にそれぞれ運ばれ、所蔵されている(Wilks et al. 2003)。つまり、マルハバ・サノゴによって書かれたアラビア語の手稿書は、ボボ・ジュラソでは流通範囲を失い、その一部が大学に保管されるようになったのである。

同時に、マルハバ・サノゴの文書と聞き取りを利用したウィルクスの研究をみると(Wilks 1968a, 1989, 2000)、その大半はマルハバからのインタビューに依拠していることが分かる。彼の文書も用いられているが、引用の頻度はインタビューのほうが高い。要するに、書いたものよりも語ったもののほうが、情報量が多かったのであろう。ウィルクスにとっては、マルハバの手稿書は彼への聞き取りと組み合わせられることで大きな意味をなしたのである。このことは、手稿書が口頭での解説によって補われることで、総体としての歴史の知識が得られるものになっていることを示しているように思われる。

こうしたウィルクスの調査の開始は 1954 年に遡る。前年の 1953 年に、オックスフォー

---

<sup>16</sup> 2014/01/10 Bobo-Dioulasso, Aramatou Sanogo(マルハバ・サノゴの孫娘)。

<sup>17</sup> 2014/01/23 Bobo-Dioulasso, サバンナ出版の社員からの聞き取りによる。なお、この人物の父もサバンナ出版で働いており、独立以前からあったとのことであった。

ド大学の博士課程にいたウィルクスは、ゴールド・コースト大学(現、ガーナ大学)での哲学講師に2年採用され(Wilks 2011: 8)、1954年、当時、ゴールド・コースト政府の社会学調査官(the Sociological Research Officer)であったグッディとともにウィルクスは北部領域での調査を行ない、「白ヴォルタ流域のゴールド・コースト西部、北部領域についての民族誌」を提出した(ibid.: 7)。この調査のなかでグッディが、1920年代に英領ゴールド・コースト北部と委任統治領の植民地行政官が現地のマラブーに伝統的な慣習についてアラビア語で書かせた手稿書を用いていることをみて、ウィルクスは現地にあるアラビア語の手稿書に関心を抱くようになったという(ibid.: 7-8)。1955年半ばに、ウィルクスは北部領域での教育活動に参加した際に、ローカルのムスリムたちがアラビア語の手稿書のコレクションを喜んでみせることに驚き、この調査の有効性を確信した(ibid.: 8)。この調査は、1958年まで継続され(ibid.: 9)、いったん中断されたものの、汎アフリカ主義を掲げていたシクルマがアフリカ研究のための研究所設立を熱心に支援し、この恩恵を受けて1961年からウィルクスは調査を再開している(ibid.: 11)。そして、1966年、ウィルクスはボボ・ジュラソでマルハバ・サノゴにインタビューを行なっている(Wilks 1968a: 170)。この2年後の1968年、くだんの論文がウィルクスによって書かれることで、マルハバの口頭の知識はウィルクスを介して英語によって国際的な学術世界へと接続されていったのである。

このような経緯を踏まえると、なぜフランス語ではなく、英語によって口頭での知識が文書化されるようになったのかがわかるだろう。本稿6章と8章で述べたように、植民地行政はオート・ヴォルタ植民地を基本的に「アニミスト」の土地であると認識し、マラブーたちを監視することはあっても、統治に積極的に利用する意図はまったくなかった。グッディが利用したような行政文書がそもそも、オート・ヴォルタ植民地にはなかったのである。また、仏領西アフリカではイスラームの研究は、1920年代のマルティ以降、ほとんどなされなくなっていた。さらに、マルティは他の仏領西アフリカ植民地のイスラームについて何らかの報告を残しているのだが、オート・ヴォルタ植民地だけは何らの記述もなされていなかった。グリオールに代表されるように、当時の民族誌学の主たる関心は在来宗教に向かっていた。このような宗教認識と統治と学術の相互に結び付いた傾向が、オート・ヴォルタ植民地におけるイスラームへの無関心を招いていたことは確かである。フランス語ではなく、英語で文書化されたことは、こうした状況を背景にしている。

他方で、マルハバが歴史に対して特別な関心を抱いていた人物であったことも強調されるべきであろう。現存するマルハバの著作のリストには、歴史書が多く含まれている(Wilks

et al. 2003)。重要な点は、マルハバが書いた歴史書には、先行する年代記のようなモデルがないものが含まれていることである。この点がウィルクスの 1968 年論文を著名なものたらしめているのであるが、この論文でウィルクスはアルハジ・サリム・スワレという学者にヴォルタ川を南下したジュラのムスリムの始祖において、イスラームの展開を語っている(Wilks 1968a, 2000)。王国についての年代記や特定の家族の系譜でもなく、いわばイスラーム学者の系譜ともいえるべき歴史観がここでは示されているのである。そして、アルハジ・サリム・スワレの伝統をウィルクスに強調した人物こそ、マルハバ・サノゴであった(Wilks 2011: 6)。つまり、マルハバは彼以前にはなかった歴史叙述の形式を導入していたのである。

一方で、セネガンビアのジャカンケには、アルハジ・サリム・スワレの伝統を強調する口頭伝承が報告されている。そのなかでは、本稿 3 章 3 節 1 項で論じたように、始祖をアルハジ・サリム・スワレに帰属させるような語りがみられた。このことは、アルハジ・サリム・スワレに始祖をおくような口頭伝承が存在し、それをマルハバがアラビア語による歴史叙述に反映させたともみることができる。これらは推論の域をでないが、重要な点はマルハバ自身もまた口頭伝承からの文書化をおこなっていたということである。

これらを踏まえると、口頭伝承とそれらの文書化も、諸言語の社会的布置のなかで生じていたことがわかる。筆者のボボ・ジュラソの調査では、マルハバの歴史についての知識を継承したとされる人物はボボ・ジュラソにはいないと語られ、実際に、そのような人物に出会うことはなかった。このことは、まさに行政機構の導入以後の諸言語の社会的布置の変容によって、アラビア語の手稿書を口頭での解説とともに学ぶような学術の伝統そのものが失われていったことと関連しているように思われる。マルハバの集積した口頭伝承とアラビア語の手稿書にもとづく西アフリカ内陸の知識は、ウィルクスを介して英語で学際的に流通するようになった一方で、ローカルには口頭伝承が残らず、ナショナルなレベルではフランス語で書かれなかったため、ブルキナファソ全体としては一般的にはまったく知られない存在となっている。この状況は、諸言語の社会的布置の結果として理解されるだろう。

このように、口頭伝承の文書化それ自体を歴史の対象として扱うことは、これまで註釈にしか書かれてこなかった西アフリカ内陸の知識人を歴史の一登場人物とすることに繋がっていく。このようにしてみると、これまでの西アフリカ史研究が、どのような西アフリカ内陸の人びとの知識をもとに構成されてきたのかが明らかになるだろう。多数のアラビ



ア語の手稿書を収集し、多数の知識人にインタビューを行ない、それらの膨大な相互比較を行ったウィルクスのイスラーム史研究への貢献は揺るぐことはないが、ヴォルタ川流域のイスラーム史研究に限っていえば、ここで指摘したように、マルハバの果たした役割は決定的なものであった。このことは独立前後の歴史への関心の高まりという同時代的状況と並行したものであり、ウィルクスの調査はそのことによって可能となったものでもあった。植民地統治以前の歴史がいかに語られ、いかに文書化されるのかは、そのことが生じた同時代の歴史と不可分に結びついている。史料論と社会論を統合した本稿でいう歴史人類学は、語られた対象の歴史と語られた場面の歴史とを、行き来しつつ論じるという地平を示しているのである。

## 結論

最後に、本稿でこれまで論じられてきた内容を概観し、本稿の意義を述べる。

序論では、まず、西アフリカ内陸を対象とした歴史人類学の先行研究をまとめ、先行研究の問題点として、伝統と近代の混淆という視座から 20 世紀に生じた変容を植民地統治に由来するものにしてしまっていることを指摘した。そのうえで、近代を、19 世紀にみられる持続と変容が、20 世紀初頭以降の植民地統治に由来する変容に合流したものと捉え、植民地統治以前とそれ以降の変容を分けて考えるために、それぞれを同時に記述・検討の対象とするとともに、植民地統治が具体的にどの点において変容をもたらしたのかを検討することとした。

このような近代の概念規定に基づいて、本稿はおおきく 3 部に構成した。すなわち、第 1 部では 19 世紀後半まで、第 2 部では 1890 年代から 1930 年代、第 3 部では 1940 年代から 1960 年までの歴史をそれぞれ記述・分析した。

第 1 部では、19 世紀までのムブン川湾曲部の社会が、どのような特徴を持続的に有し、どのような変容が生じてきたのかを明らかにした。1 章では、西アフリカ内陸を広域に捉え、新石器時代から 19 世紀ごろまでにどのような持続的な特徴をもつ社会が形成されてきたのかを明らかにし、2 章では、より地域を限定し、本稿の対象となるムブン川湾曲部において、19 世紀までの農村社会が、「国家に抗するシステム」としてまとめられる特徴を有する国家をもたない社会であったことを指摘した。3 章では、19 世紀前半にムブン川湾曲部で生じたマフムード・カラントオのジハードをとりあげ、このジハードが、それ以前とは異なる政治と経済とイスラームの新たな複合を生みだし、「国家に抗するシステム」の閾値を越えつつあるものであったことを示した。

第 2 部では、主として 1890 年代から 1930 年代までの、オート・ヴォルタ植民地におけるフランスによる植民地統治について論じた。4 章では、ムブン川湾曲部における軍人による探索から「平定」、暴力の独占が生じるまでのプロセスを分析し、政治・軍事上の変容を明らかにし、5 章では、行政機構と人頭税に着目しつつ、植民地統治以降に生じた経済の変容を論じた。6 章では、主としてカトリック宣教団の活動に焦点をあて、文明化の主導権をめぐる宗教・政治の陣地戦が展開され、そのことが間接的にイスラームに影響を与えたことを述べた。

第 3 部では、主として、1940 年代から 1960 年までのムブン川湾曲部における政治とイスラームの展開を論じた。7 章では、1945 年から 1960 年までのオート・ヴォルタ植民地の独立に至る政党政治の展開を論じ、ブラザヴィル会議以降のオート・ヴォルタ植民地における政党政治が、植民地統治以前の国家と国家をもたない社会の枠組みを如実に反映して展開したことを明らかにし、ムブン川湾曲部で生じていたローカルな政治闘争はオート・ヴォルタ全体の独立闘争に接続されなかったことを指摘した。

8 章では、1940 年代後半から顕在化したムスリム文化連合を核とするイスラーム改革主義運動を対象として、この運動が、(1)19 世紀からのイスラームの刷新の延長線上にあること、

(2)ムスリム文化連合の活動が近代教育をめぐるヘゲモニー闘争の一環として展開されたことを指摘した。

9章の前半では、これまで論じてきた内容を統合させ、ムフン川湾曲部の19世紀から1960年に至るまでの通史を前半にまとめ、まず、19世紀前半に生じたマフムード・カラントオのジハードが政治・経済・イスラームの複合の萌芽として捉えられることを確認した。そのうえで、暴力の独占による植民地統治の確立と行政機構の導入によって、経済と政治の領域が大きく変容したことを指摘した。植民地統治による変容は、基本的に、行政機構の導入による変容として捉えられることを明らかにした。行政機構の導入は、暴力の独占によるそれ以外による徴税権の排除(政治上の変化)と、フランの流通する空間とフランス語の読み書き能力をもつ人間の活動する場の創出(経済、宗教上の変化)として要約できると指摘した。

一方で、貨幣経済の進展という経済上の変容は、植民地統治以前からの変容を加速されたものとして理解できること、その例として飛躍的に増大した家畜の取引を挙げた。イスラームの革新もまた、19世紀ごろからの世襲的なカテゴリーから一般的な社会的カテゴリーとしてのムスリムへの転換が生じており、こうしたイスラームの変容は植民地統治によって飛躍的に進行したわけではなかったが、大きく妨げられることもなかったことを指摘した。したがって、西アフリカ内陸における近代とは、行政機構の導入と、植民地統治以前から生じていた貨幣経済の進展とイスラームの一般化であると述べた。

9章の後半では、これらを踏まえて、本稿のいう歴史人類学が人類学の理論のなかでどのように位置づけられ、いかなる地平を示しているのかを述べた。そこでは、本稿のいう歴史人類学は、ポストモダン人類学から始まり、それを受けた植民地統治の歴史人類学を経た、民族誌、伝記的小説、行政文書をひとしく史料としてみなし、同じ土俵で論じ、人類学者を歴史の一登場人物と捉え、これらの文書を相互に参照しつつ、歴史の再構成を志向するようになった研究としてまとめられると主張した。

そのうえで、それらの史料がどの言語でどのような種類の文書として書かれているかに着目することで、歴史を再構成する手段を拡張させるだけではなく、諸言語の社会的布置を捉えることができるようになることを指摘した。

さらに、このような諸言語の社会的布置を捉える研究は、かつてグッディの論じたようなリテラシー研究に再解釈の余地を与えることになり、口頭伝承の文書化それ自体を歴史の対象として扱うことを可能にする。このような視角をもとに文書化のプロセスの歴史を検討することで、語られた対象の歴史と語られた場面の歴史とを、行き来しつつ論じるという新たな歴史人類学的地平があると主張した。

こうした本稿の叙述全体を踏まえたうえで、本稿の全体としての意義は通史と歴史人類学の理論の2つにまとめられるだろう。

第一は、通史としての意義である。これまでムフン川湾曲部の歴史は、本稿で論じたような長期の通史としてまとめられてこなかった。全体としてほぼ一次資料に依拠した、本

稿の通史は、この地域の歴史研究の基盤となるものである。

第二は、歴史人類学の理論への貢献である。本稿では、植民地統治以前とそれ以降の歴史を包括して論じる、新たな歴史人類学の理論的立場を示した。本稿では、十分に展開できなかった部分はあるものの、新たな歴史人類学がどのようにありうるのかは具体的に示されたものと考えている。

本稿の対象は、著者の時間と能力に比してあまりに広大であった。各章の端々には、十分に検討されなかった論点が多く残されている。こうした点は本稿内部の一貫性を弱めているかもしれない。しかし、同時に、これらの多くの論点は今後の研究の具体的な方向性を示しているともいいうるだろう。これらの論点を具体的に浮き彫りにしたこともまた、本稿の重要な意義である。

## あとがき

本稿は、2012 年から 2016 年にかけて断続的に実施された(2012 年 10 月-2013 年 1 月、2013 年 6 月-2014 年 1 月、2015 年 2 月-3 月、2016 年 2 月-3 月)、ブルキナファソでの計 11 か月のフィールド調査と史料調査、コートディヴォワール国立公文書館及びフランス国立海外公文書館における計 2 か月の史料調査に基づくものである。本稿の主題に比して、調査期間があまりにも短いことは、率直に認めなければならないだろう。

フィールド調査では、基本的に通訳を介したフランス語でのインタビューを行なった。私のあまりにつたない語学能力を補ってくれたのは、辛抱強く話を聞き、調査の意図を汲み取ろうとしてくれた調査助手である。サファネ周辺ではスワロ・セレさん、ボボ・ジュラソ周辺ではユースフ・トゥグマさんに、それぞれ非常にお世話になった。彼らの力によって、曲がりなりにも歴史人類学の研究として本稿をまとめることができた。

ブルキナファソでの調査期間のうち 5 ヶ月ほどは、スワロさんのオジにあたる、シウ村のママドゥ・セレさんの屋敷に住まわせていただいた。思えば、村の起源譚を最初に聞いたのは彼からであった。調査のあいだ、ママドゥさんを初め、多くの方々が、私の質問に答えてくださった。こうしたことがなければ、本稿はありえなかった。

特に、ボボ・ジュラソのイブラヒム・カリール・マガネさんには、多くの史料を提供していただいた。私の調査の前年に、彼は父の遺したムスリム文化連合ヴォルタ支部の文書を整理し、パソコンで印刷した小冊子をつくっていた。ムスリム文化連合を調査していた私は、人づてにマガネさんの紹介を受けた。私はすでにワガドゥグの公文書館で得ていたムスリム文化連合の史料のコピーを彼に贈り、マガネさんは私に彼の小冊子のコピーを渡してくれた。この小冊子に収録された史料によって、すべてが明らかになるわけではなかったが、ムスリム文化連合の目指す方向性や活動の具体的な変遷を知ることができたこと、そうした歴史をマガネさんと共有できたことは何よりも大きな手ごたえとなった。ささやかなものかもしれないが、私の研究にも私個人の問題関心を越えた意義があると感じられたことが何とか本稿に至らしめたのだと思う。

マガネさんの小冊子は、その後、清水貴夫さん(広島大学教育開発国際協力研究センター・研究員)の後押しと、遠藤仁さん(秋田大学国際資源学研究所・プロジェクト研究員)のアドバイスをいただきながら、史料集として出版することができた。このことは、田中樹先生(総合地球環境学研究所・教授)が、総合地球環境学研究所「砂漠化をめぐる風と人と土」プロジェクトの成果の一部として、マガネさん自身の編集・執筆によるフランス語の史料原文・

解説に、私の翻訳・解説とあわせて本にすることを快諾していただいたことによって可能となった。この本を直にお渡しすることはできなかったが、郵送によって届いたことの報告をマガネさんから電話でいただいたときの喜びの分かち合いは格別なものであった。ふりかえると、結果的に、この翻訳は本稿への重要なステップとなった。

マガネさんの本の件のみならず、清水さんには、ブルキナファソ研究の先輩として、私は実に多くのことを教わり、助けていただいた。7年ほど前から、清水さんとは、藏本龍介さん(南山大学人類学研究所・一種研究員)とともに、南山考古人類学勉強会やまるはち人類学研究会を通じて、「宗教の経営」研究会を行なってきた。この研究会のなかで、クルアーン学校やメデルサの論点について長く議論を重ねてきたことは、本稿の隠れた基礎となっている。

藏本さんの主導のもとに、この研究会は大きく展開していったが、特に藏本さんと岡部真由美さん(中京大学現代社会学部・准教授)による東南アジアの「出家者」研究会に参加させていただいたことは私にとって大きな糧となった。ここでの討議を通じて、浮びあがって来た、制度宗教の人類学ともいうべき新たな視座は、本稿の歴史人類学をまとめるうえで大きく役立つことになった。

ガーナ北部のダゴンバの社会と歴史を研究している友松夕香さん(東京大学東洋文化研究所・日本学術振興会特別研究員 PD)との1対1の研究会やメールでの議論のやりとりも、私の研究の視野を広げていった。ブルキナファソとガーナ北部を一体として捉える視角、グッディやフォーテスの再評価、史料と民族誌の往還などといった本稿の基軸は、友松さんとの議論のなかで形作られたものであった。

南山大学大学院人類学専攻の博士論文中間審査では、人類学専攻の先生方から様々なアドバイスをいただいた。特に本稿で扱った口頭伝承の位置づけについての本質的な問いは、直接的な返答を書き込むことはできなかったが、序論の展開において一つの道筋をつけていただいたように思う。

未完成のつたない原稿を読んでいた竹沢尚一郎先生(国立民族学博物館・教授)には、本稿を書き上げるうえでの重要な手がかりを与えていただいた。原稿の抱えていた決定的な問題点をご指摘いただき、序論の書き直しを促していただいたことで、本稿の理論的視座が、少なくとも、以前のものよりはまっとうなものになったと感じている。

また、廣田緑さん(中部大学国際関係学部・非常勤講師)、加藤英明さん(南山大学大学院人類学専攻・博士後期課程)には、本稿の校正などのお手伝いをお願いした。本稿の進捗が

大幅に滞ったために、短期間で大量の文章を目に通してもらうことになったが、お二人には多くの誤りをただしていただいた。

博士前期課程からの指導教員であった坂井信三先生には、非常にお世話になった。古典的な著作を含む、数多くの文献をお貸しいただいたこと、先生の研究室での原稿の検討に多くの時間を割いていただいたことによって、本稿を書き上げることができた。

坂井先生との関係については、あまりに個人的でやや長くなるが、その内容が南山大学における人類学の歴史の一つの断片と関連しており、本稿が南山大学大学院人類学専攻に提出する博士論文であることから、ここに記すことをご寛恕いただきたいと思う。

本稿を書き始めた段階で、おそらく、そうなるのではないかと感じていたが、本稿は先生の博士論文をもとにした『イスラームと商業の歴史人類学——西アフリカの交易と知識のネットワーク』を継承し、私なりに展開したものとなった。

博士後期課程に進学したときには、このようなことになるとは想定していなかった。ブルキナファソにおいてイスラーム史の調査を始めた頃ですら、そうしたことはまったく考えていなかった。しかし、ボボ・ジュラソの調査のなかで、大モスクを建てたサキディ・サヌがジャで学んだことや、先述のマガネさんの父がマルカでシンサニ出身のマラブーであったことを聞き、ジャやシンサニのムスリムの歴史を対象とした先生の研究とのつながりを意識するようになり、多かれ少なかれ、先生の研究との連続性を考える必要があると自覚するようになっていった。

手元にある先生の著書はもうボロボロになっている。私が高校 2 年のとき、図書館でたまたま手に取った、川田順造先生の『無文字社会の歴史』を読んで西アフリカの歴史に興味をもち、関連する本を探しているなかで、栃木の実家の本棚でみつけたのが、先生の著作であった。この本は 2003 年 3 月に出版されている。私が読み始めたのは、この年の初夏のことであった。

その意味を理解したのは、大学生になってからであったが、実家にあった本には「謹呈」と印字された紙が挟まっていた。当時、私の父は単身赴任で福岡に住んでいた。大学で西アフリカの歴史を学ぼうと考えていると私が父に直接話したのか、そのことを母が父に伝えたのか、記憶が定かではないが、高校 3 年にあがる前に父が西アフリカのことを研究している「大学の先生」のメールアドレスを(たしか電話で)教えてくれた。この「大学の先生」が坂井先生であった。おそろおそろメールを出し、西アフリカ史研究におけるアラビア語

の重要性を教えていただき、当時、苦手であった英語の克服もあって、私は東外大のアラビア語専攻一本で受験をすることになる。結局、アラビア語は身にならず、本稿の研究に至るまでに長い紆余曲折を経ることになるのだが、そのことはここではよいだろう。

メールアドレスを教えてもらうまで、私は父に「大学の先生」の知り合いがいることをまったく知らなかった。母から聞くところによれば、同じ大学で学んだ年来の友人であり、私の家族が八王子に住んでいた頃、1980年代半ばで先生が初めてマリにいったあとに、父に撮った写真のスライドをみせたこともあったそうだ。私の生まれる前のことである。

ずいぶん経った後に、父と坂井先生が学部時代に南山大学文化人類学研究会というサークルに所属し、ともに調査をしていたことを知った。南山大学人類学研究所に所蔵されている同サークルの会報には、昭和46年(1971年)3月以降から4回にわたって行われた与論島の共同調査の報告が120ページほどの分量で書かれている(伊藤ほか1972)。序文には調査の経緯がこう書いてある。「この調査は与論島町朝戸地区の社会人類学的調査として始まった。しかし、昭和46年8月に実施した第2次調査終了後、与論島の家(ヤー)、祖先祭祀、シヌグ、世界観その他に関する intensive な継続調査の必要性が確認され、第3次、第4次の調査を実施するに至った」という(ibid.: 10)。

この調査のすべてに参加したのが、伊藤静行、坂井信三、そして、父の中尾格二郎である(ibid.: 11)。3部構成になっているこの報告は、第I部は中尾・坂井の共著、第II部は中尾の単著、第III部は伊藤・坂井の共著となっている(ibid.: 131)。この報告の末尾には、「なお最後にIVとして社会構造と世界観をとりあげて全体のまとめとする構想であったが、内容から言って未だ調査が充分とは言えず、また資金面でも問題があったので、今回は割愛することにした」(ibid.: 131)と書かれている。

その後、坂井先生は東京都立大学大学院、父は南山大学大学院にそれぞれ進学した。父は与論島での調査を継続し、「社会構造と世界観をとりあげて全体のまとめとする」内容の修士論文を書き上げている。私が南山大学の博士前期課程に進学することを坂井先生に相談しに行った折——その時、先生は他の大学院を勧めていたのだが——当時、父が長期の入院から帰ったばかりであったことを知って、父の修士論文のコピーを私に渡してくれた。

この修士論文を私は一度だけ栃木の実家に帰る電車のなかで読んだ。構造機能主義的な親族研究を「平板」と批判し、家(ヤー)の物理的な空間が祖先祭祀の世界観と対応して構成され、それが親族の構成原理と結びついている、つまり、社会構造と世界観が不可分に結びついているといった内容のものであったと記憶している。この記述のための理論を、父



はメダルト・ボスの実存主義的精神分析に求めている。時代の制約であろう。いまふうにいえば、人類学における存在論の研究である。これを読み終えた頃、私はちょうど最寄りの駅に着いていた。実家に帰って修士論文のコピーを手渡した後、父は黙ってその論文をずっと読んでいた。

父は修士論文を書いた後に、専門学校に入り直し、視覚障害者の歩行訓練士となった。大学に進学するまで、私は父から人類学のことなど聞いたことがなかった。今でも、研究の突っ込んだ話はほとんどしていない。しかし、母によれば、若い頃はずいぶんと子どもの教育に人類学の話を引き合いに出していたという。

私は博士後期課程に進学した後、修士論文を提出し社会人となった同期や先輩との対話のなかで、研究ではないかたちでの人類学と社会との関係に関心をもつようになっていった。南山大学の人類学専攻では、修士論文を提出した後に、就職し働く人たちのほうが多く、彼ら・彼女らの仕事の話を開くなかで、こうした関心を抱くようになったことは必然的な流れであった。そうしたことから、私は社会人と人類学というテーマで同期の監物もに加と共著を書き、まるはち人類学研究会で数回研究会を開いてきた。この問題意識は、修了していった同期や先輩の話を開くなかで形成されていったものであったが、父がまさに修士論文を提出したのちに研究ではないかたちで就職していった人であったことを了解したとき、私は何ともいえない不思議な感覚におそわれた。

結果としてみると、坂井先生と父の個人的な関係がめぐりめぐって、本稿や現在の私の問題意識に行きついていったように思える。無論、歴史は事後的に語られ、語り手の現在の認識が過去に投影され、一貫した物語が構成されることは、歴史人類学の教えるところである。私自身も、つい4年前まで、こうした研究に行きつくとはまったく考えていなかった。

とはいえ、私個人としては、西アフリカの歴史に関心をもち、それを学び、研究する過程が、父の個人史を知り、了解し、その歴史との関連で自らの人生に意味付けを与える過程と重なっていた。ささやかで非常に個人的なものではあるが、南山大学における人類学の歴史の断片が、私の博士論文につながっていたのである。

最後に妻の奈歩と子の治<sup>はる</sup>に謝意を述べたい。海外調査や本稿の追い上げでは家事・育児で大きく妻に負担をかけることになった。この間の妻の援助がなければ、本稿はおろか、本稿のもととなる調査も成立しなかっただろう。息子も、最後の追い込みの期間は病気に

ならず、元気に保育園に通い、ときに泣き、ときに笑って、私を励ましてくれた。息子はもうすぐ3歳になり、ずいぶんと話せるようになってきた。長期調査を終えて、博士論文にまとめていく過程は息子の成長と重なっていた。自ら立つこともできなかった、私のこの研究も息子も、ようやく自らの考えをたどたどしく言えるようになったように思う。思考を秩序だてて語るにはまだ長い時間が必要であるが、研究の展開も息子の成長も大いに楽しみである。

このように、本稿は、私の調査・研究をすすめるなかで、直接・間接にいただいた多くの人たちのお力添えで可能となった。ここで直接お名前を挙げるができなかった方々も含めて、深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

## 文献目録

アグリエッタ、M.と A. オルレアン（共編）

2012 『貨幣主権論』坂口明義(監訳)、藤原書店

アミン、S.

1979a 『世界的規模における資本蓄積（1）世界資本蓄積論』野口祐ほか訳、柘植書房

1979b 『世界的規模における資本蓄積（2）周辺資本主義構成体論』野口祐・原田金一郎訳、柘植書房

1981 『世界的規模における資本蓄積（3）中心=周辺経済関係論』原田金一郎訳、柘植書房

アンダーソン、B.

1997 『増補 想像の共同体：ナショナリズムの起源と流行』白石隆・白石さや訳、NTT出版

市田良彦・王寺賢太・小泉義之・長原豊

2013 『債務共和国の終焉——わたしたちはいつから奴隷になったのか』、河出書房新社

伊藤静行、坂井信三、中尾格二郎

1972 「鹿児島県大島郡与論町調査報告」、『南山大学文化人類学研究会会報』7: 8-131.

伊東未来

2016 『千年の古都ジェンネ 多民族が暮らす西アフリカの街』、昭和堂

石本雄大

2012 『サヘルにおける食糧確保—旱魃や虫害への適応および対処行動』、松香堂書店

市川光雄

1997 「文明を生んだ生態環境」、宮本正興・松田素二編『新書アフリカ史』：48-62、講談社

岩田拓夫

2006 「「下からの政治」とアフリカにおける国家」、川端正久・落合雄彦編『アフリカ国家を再考する』：171-194、晃洋書房

岩本由輝

1994 『もう一つの遠野物語 追補版』、刀水書房

ヴィエイロス・デ・カストロ、E.

- 2015 『インディオの気まぐれな魂』 近藤宏・里見龍樹訳、水声社
- ウォーラーステイン、I.
- 1981 『近代世界システム——農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立（1・2）』  
川北稔訳、岩波書店
- 遠藤聡子
- 2013 『パーニュの文化誌——現代西アフリカ女性のファッションが語る独自性』、昭  
和堂
- 遠藤貢
- 2000 「アフリカ「市民社会」論の展開」、『国際政治』 123: 13-29.
- 小川了
- 2015 『第一次大戦と西アフリカ：フランスに命を捧げた黒人部隊「セネガル歩兵」』、  
刀水書房
- オング、W.
- 1991 『声の文化と文字の文化』 桜井直文ほか訳、藤原書店
- 門村浩
- 1987 「熱帯アフリカにおける晩氷期-完新世中期の環境変動」、『アフリカ研究』 30:  
71-93.
- 加茂省三
- 2006 「アフリカ国家論争を俯瞰する」、川端正久・落合雄彦編『アフリカ国家を再考  
する』：82-103、晃洋書房
- 荻谷康太
- 2012 『イスラームの宗教的・知的連関網 ——アラビア語著作から読み解く西アフリ  
カ』、東京大学出版会
- 川田順造
- 1977 「首長位の継承と政治組織：モシ・マンプルシ・ダゴンバ族の事例」、『民族學  
研究』 41: 330-367.
- 1991 『サバンナの博物誌』、筑摩書房
- 1992 『サバンナの王国——ある“作られた伝統”のドキュメント』、リプロポート
- 2001 『無文字社会の歴史—西アフリカ・モシ族の事例を中心に』、岩波書店
- 2004 『人類学的認識論のために』、岩波書店

川端正久

- 2006 「アフリカ国家論争を俯瞰する」、川端正久・落合雄彦編『アフリカ国家を再考する』：1-81、晃洋書房

木村重信

- 1986 「民族芸術学とは何か」、木村重信編『民族芸術学—その方法序説』：7-24、日本放送出版協会

クラストル、P.

- 1987 『国家に抗する社会：政治人類学研究』渡辺公三訳、書肆風の薔薇  
2003 『暴力の考古学 未開社会における戦争』毬藻充訳、現代企画室

グリオール、M.

- 1981 『水の神：ドゴン族の神話的世界』坂井信三・竹沢尚一郎訳、せりか書房

クリフォード、J.と J.マーカス

- 1996 『文化を書く』春日直樹 ほか訳、紀伊国屋書店

クリフォード、J.

- 2001 『文化の窮状：二十世紀の民族誌、文学、芸術』太田好信 ほか訳、人文書院

小泉義之

- 2009 「フーコーのディシプリン 『言葉と物』と『監獄の誕生』における生産と労働」、  
『現代思想』37: 206-218.

小林和夫

- 2009 「ウィリアムズ・テーゼと奴隷貿易研究」、『パブリック・ヒストリー』6: 112-125.

坂井信三、大稔哲也

- 2008 「ガオ・サネのアラビア語碑文をもつ墓碑」、坂井信三編『平成 18・19 年度文部科学省科学研究費補助金(基盤研究 B)研究報告書 西アフリカの歴史的文明の形成と展開過程に関する歴史人類学的研究』：29-48

坂井信三

- 1988 「西スーダンの歴史的文明における自己と他者の表象」、小川正恭・小松和彦・渡辺欣雄編『社会人類学の可能性 2: 象徴と権力』：105-122、弘文堂  
2003 『イスラームと商業の歴史人類学：西アフリカの交易と知識のネットワーク』、世界思想社  
2004 「西アフリカのタリーカと社会変動下の集団編成」、赤堀雅幸・東長靖・堀川徹

編『イスラームの神秘主義と聖者信仰』：204-228、東京大学出版会

2005a 「西アフリカのタリーカと社会変動下の集団編成」赤堀雅幸・東長靖・堀川徹編、『イスラームの神秘主義と聖者信仰』：204-228、東京大学出版会

2005b 「西アフリカ内陸における宝貝の流通と交換」、宮沢千尋編『アジア市場の文化と社会』：219-251、風響社

2009a 「歴史の叙述と社会の記述-社会人類学における歴史的人格の位置づけをめぐって」、『社会人類学年報』 35: 1-31.

2009b 「植民地支配下西アフリカにおけるイスラームとキリスト教の出会い——チェルノ・ボカールとアマドゥ・ハンパテ・バ」、宮沢千尋編『社会変動と宗教の〈再選択〉--ポスト・コロニアル期の人類的研究』：93-136、風響社

2015a 「北部ナイジェリアのムスリム・コミュニティとイスラーム改革運動」、『サハラ地域におけるイスラーム急進派の活動と資源紛争の研究：中東諸国とグローバルアクターとの相互連関の視座から』：53-74、日本国際問題研究所

2015b 「ニジェール川中流域の国家形成と非形成」、『アカデミア』 10: 11-29.

2015c 「西アフリカのムスリム・コミュニティにおける：文書活動研究の可能性」、「アフリカに関する史的研究と資料」研究会発表原稿、2015/6/20、東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所

2016 「イスラーム改革主義運動の歴史的展開——仏領西アフリカと英領ナイジェリアの教育改革の比較から」イスラーム過激派研究会発表原稿、2016/12/14、日本国際問題研究所

櫻井武司

1997 「サヘルの草地資源と旱魃保険の可能性--ブルキナファソの農家家計調査より」、『農業総合研究』 51: 1-63.

2006 「戦乱ショック，貧困，土壌劣化：ブルキナファソの農家家計データを用いた実証」、『農業経済研究』 78: 34-45.

櫻井武司・井上亮

2014 「ブルキナファソ農村の 30 年：貧困から抜け出せたのか?」、『経済研究』 65: 23-41.

佐久間寛

2013 『ガーロコイレ-ニジェール西部農村社会をめぐるモラルと叛乱の民族誌』、平凡社

佐藤章

2000 「コートディヴォワール独立運動におけるアフリカ人農民組合（SAA）の役割：再検討の試み」、『アフリカ研究』56: 53-66.

2015 『ココア共和国の近代：コートジボワールの結社史と統合的革命』、アジア経済研究所

嶋田義仁

1988 「バランディエ——フランス政治人類学の巨頭」、綾部恒雄編『文化人類学群像2』：217-236、アカデミア出版会

1995 『牧畜イスラーム国家の人類学：サヴァンナの富と権力と救済』、世界思想社  
シュミット、C.

1970 『政治的なものの概念』田中浩・原田武雄訳、未来社  
シュレ＝カナル、J.

1987 『黒アフリカ史』野沢協訳、理論社  
ストーリー、A.

2010 『肉体の知識と帝国の権力 人種と植民地支配における親密なるもの』永渕康之・水谷智・吉田信訳、以文社

スコット、J.

2013 『ゾミア：脱国家の世界史』佐藤仁監訳、みすず書房

高橋基樹

2010 『開発と国家 アフリカ政治経済論序説』、勁草書房

竹沢尚一郎、ママドゥ・シセ

2008 「西アフリカ最古の王宮の発見」、『アフリカ研究』73: 31-48.

竹沢尚一郎

1989 「「水の精霊」とイスラム：ボゾ族における社会変化と宗教変化」、『国立民族学博物館研究報告』13: 857-896.

2001 『表象の植民地帝国——近代フランスと人文諸科学』、世界思想社

2007 『人類学的思考の歴史』、世界思想社

2008 『サバンナの河の民 記憶と語りのエスノグラフィ』、世界思想社

谷憲一

- 2015 「世俗主義批判の射程——イスラーム復興に関する人類学の最前線」、『文化人類学』79: 417-428.

デシャン、H.

- 1963 『黒いアフリカの宗教』山口昌男訳、白水社

ドゥルーズ、G.=F. ガタリ

- 2010 『千のプラトー：資本主義と分裂症 下』、河出書房新社

ドゴール、C.

- 1963 『ドゴール大戦回顧録 III』村上光彦・山崎庸一郎訳、みすず書房

等松春夫

- 2011 『日本帝国と委任統治』、名古屋大学出版会

友松夕香

- 2015 『男と女の農村経済—西アフリカ・サバンナの父系社会における資源の配分と分配の民族誌』、東京大学院農生命科学研究科提出博士論文

内藤敦之

- 2007 「貨幣・信用・国家：ポスト・ケインズ派の信用貨幣論と表券主義」、『季刊経済理論』44: 66-76.

中尾佐助

- 1966 『栽培植物と農耕の起源』、岩波書店

中尾世治

- 2016a 「解説」、I. K. マガネ著『ムスリム文化連合ヴォルタ支部史料集』：119-184、田中樹・清水貴夫・遠藤仁監修・中尾世治訳、総合地球環境学研究所

- 2016b 「植民地行政のイスラーム認識とその運用—ヴィシー政権期・仏領西アフリカにおけるホテル襲撃事件と事件の捜査・対応の検討から—」、『アフリカ研究』90: 1-13.

中村雄祐

- 1995 『西スーダンにおける内婚世襲の語り部・楽師の制度、ジェリヤの歴史的変遷』、東京大学大学院総合文化研究科博士学位論文

- 2009a 「発展途上国における文書と生存—ボリビアの職業訓練工房におけるアクション・リサーチの試み」、斎藤晃編『テキストと人文学』：135-152、人文書院



- 2009b 『生きるための読み書き—発展途上国のリテラシー問題』、みすず書房  
西川長夫
- 1995 『地球時代の民族=文化理論』、新曜社  
バア、A.
- 1984 『ワングランの不思議 生きていたアフリカの知恵』石田知己訳、リブロポート  
バランディエ、G.
- 1983 『黒アフリカ社会の研究——植民地状況とメシアニズム』井上兼行訳、紀伊國屋書店  
バンセル、N.ほか
- 2011 『植民地共和国フランス』平野千果子・菊池恵介訳、岩波書店  
平野克己
- 2003 「アフリカ経済とリカードの罫」、平野克己編『アフリカ経済学宣言』: 137-185、アジア経済研究所
- 2009 『アフリカ問題—開発と援助の世界史』、日本評論社  
平野千果子
- 2014 『フランス植民地主義と歴史認識』、岩波書店  
福井勝義
- 1987 「牧畜社会へのアプローチと課題」、福井勝義・谷泰編『牧畜文化の原像—生態・社会・歴史』: 3-62、京都大学学術出版会
- 1995 「自然と民族のアフリカ」、『アフリカの民族と社会』: 11-150、中央公論社  
福井憲彦
- 2004 「テキストとプラティークの間——あるいは史料・現実・想像力」、上村忠男他編『歴史を問う 4 歴史はいかに書かれるか』: 61-86、岩波書店  
福西隆弘
- 2003 「アフリカにおける開発ミクロ経済研究の成果—農家および製造業企業の生産行動」、平野克己編『アフリカ経済学宣言』: 67-108、アジア経済研究所  
福本勝清
- 2014 「西欧におけるアジア的生産様式論争の展開 1964-1974 (上)」、『明治大学教養論集』 497: 95-137.

フォーテス、M.

- 1972 「ゴールド＝コースト北部地域におけるタレンシ族の政治体系」、F. フォーテス・E. エヴァンズ＝プリチャード編『アフリカの伝統的政治体系』：290-334、大森元吉など訳、みすず書房

フーコー、M.

- 1977 『監獄の誕生——監視と処罰』 田村俣訳、新潮社
- 2006a 「統治性」 石田英敬訳、『フーコー・コレクション 6 生政治・統治』：238-277.
- 2006b 『精神医学の権力 コレージュ・ド・フランス講義 1973-1974 年度』 慎改康之訳、筑摩書房
- 2007a 『社会は防衛しなければならない コレージュ・ド・フランス講義 1975-1976 年度』 石田英敬・小野正嗣訳、筑摩書房
- 2007b 『安全・領土・人口 コレージュ・ド・フランス講義 1977-1978 年度』 高桑和巳訳、筑摩書房

布留川正博

- 2015 「大西洋奴隷貿易の新データベースの歴史的意義」、『同志社商学』66: 1073-1090.

ブルデュー、P.

- 1989 『実践感覚 I』 今村仁司ほか訳、みすず書房
- 1990 『実践感覚 II』 今村仁司ほか訳、みすず書房

ホブズボウム、E.と T. レンジャー

- 1992 『創られた伝統』 前川啓治ほか訳、紀伊国屋書店

ボベロ、J.

- 2009 『フランスにおける脱宗教性の歴史』 三浦信孝・伊達聖伸訳、白水社

マーカス、J.と M. フィシャー

- 1989 『文化批判としての人類学：人間科学における実験的試み』 永渕康之訳、紀伊国屋書店

マガネ、I.

- 2016 『ムスリム文化連合ヴォルタ支部史料集』 田中樹・清水貴夫・遠藤仁監修・中尾世治訳、総合地球環境学研究所

真島一郎

- 1991 「面（おもて）の不在を生きる仮面－ダン族仮面文化に於ける『力』の正当化と

排除」『民族学研究』55: 406-432.

1997 「西大西洋中央地域（CWA）とポロ結社の史的考察—シエラレオネ、リベリア、ギニア、コートディヴォワール」『アジア・アフリカ言語文化研究』53: 1-81.

2000 「歴史主体の構築技術と人類学：ヴィシー政権期・仏領西アフリカにおける原住民首長の自殺事件から」、『民族学研究』64: 450-473.

2006 「中間集団論—社会的なるものの起点から回帰へ」、『文化人類学』71: 24-49.

2007 「ウフェ=ボワニの統治倫理に関する覚書」、佐藤章編『統治者と国家—アフリカの個人支配再考』: 277-345、アジア経済研究所

2012 「アフリカ民主連合の結成（一九四六年）」、歴史学研究会編『世界史史料第 11 巻—20 世紀の世界』: 42-44、岩波書店

松沼美穂

2007 『帝国とプロパガンダ ヴィシー政権期フランスと植民地』、岩波書店

2012 『植民地の〈フランス人〉 第三共和政期の国籍・市民権・参政権』、法政大学出版局

三瀬利之

2000 「帝国センサスから植民地人類学へ——インド高等文官ハーバード・リズレイのベンガル民族誌調査に見る統計と人類学の接点」、『民族学研究』64: 474-491.

2002 「史料の歴史学——英領インド国勢調査資料の由来」、森明子編『歴史叙述の現在』: 36-63、人文書院

峯陽一

1999 『現代アフリカと開発経済学—市場経済の荒波のなかで』、日本評論社

メイヤスー、C.

1977 『家族制共同体の理論——経済人類学の課題』川田順造、原口武彦訳、筑摩書房

ラッツァラート、M.

2012 『「借金人間」製造工場：“負債”の政治経済学』杉村昌昭訳、作品社

ルクレール、G

1976 『人類学と植民地主義』宮治一雄・宮治美江子訳、平凡社

ル・ロワ・ラデュリ、E.

1990 『モンタイユー ピレネーの村 1294～1324 (上)』井上幸治・渡邊昌美・波木居

純一訳、刀水書房

1991 『モンタイユー ピレネーの村 1294～1324 (下)』 井上幸治・渡邊昌美・波木居

純一訳、刀水書房

レンジャー、T.

1992 「植民地下のアフリカにおける創り出された伝統」、『創られた伝統』: 323-406、

前川啓治ほか訳、紀伊国屋書店

ロサルド、R.

1996 「テントの入り口から—フィールドワーカーと異端審問官」西川麦子訳、クリフ

ォード、J.と J・マーカス編『文化を書く』: 141-181、紀伊国屋書房

家島彦一 (訳註)

2002 『大旅行記 8』、平凡社

渡辺公三

2003 『司法的同一性の誕生——市民社会における個体識別と登録』、言叢社

Acemoglu, D. et al.

2001 The colonial origins of comparative development: an empirical investigation.

*American Economic Review* 91: 1369–1401.

2002 Reversal of fortune: geography and institutions in the making of the modern

world income distribution. *Quarterly Journal of Economics* 117: 1231-1294.

Adamu, M.

1978 *The Hausa Factor in West African History*. Oxford: Oxford University Press.

Ageron, C.-R.

1972 Gambetta et la reprise de l'expansion coloniale. *Revue Française d'Histoire*

*d'Outre-Mer* 59 : 165–204.

Alence, R.

1990 The 1937-1938 Gold Coast Cocoa Crisis: The Political Economy of

Commercial Stalemate. *African Economic History* 19: 77-104.

Allman, J., & Parker, J.

2005 *Tongnaab: the history of a West African god*. Bloomington: Indiana

University Press.

Al-Naqar, U.

- 1972 *The Pilgrimage Tradition in West Africa: an historical study with special reference to the nineteenth century*. Khartoum: Khartoum University Press.
- Amblard, S. and J. Pernès
- 1989 The identification of cultivated pearl millet (*Pennisetum*) amongst plant impressions on pottery from Oued Chebbi (Dhar Oualata, Mauritania). *African Archaeological Review* 7: 117-126.
- Amselle, J.-L. et E. M'Bokolo (éds.)
- 1985 *Au cœur de l'ethnie: ethnies, tribalisme et État en Afrique*. Paris: La Découverte.
- Amselle, J.-L.
- 1977 *Les Négociants de la savane: histoire et organisation sociale des Kooroko (Mali)*. Paris: Éditions Anthropos.
- 1985 Le Wahabisme à Bamako (1945-1985). *Canadian Journal of African Studies* 19: 345-57.
- 1990 *Logiques métisses : anthropologie de l'identité en Afrique et ailleurs*. Paris: Payot.
- 1993 Anthropology and Historicity. *History and Theory* 32: 12-31.
- Anghie, A.
- 2005 *Imperialism, Sovereignty and the Making of International Law*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Anonyme
- 1901 Vicariat apostolique du Sahara et du Soudan. *Bulletin Mission des Pères blancs* 145: 48-54.
- 1905 Les végétaux utiles de l'Afrique tropicale française *La Quinzaine coloniale* 16: 356-358.
- 1907 Vicariat apostolique du Soudan. *Bulletin Mission des Pères blancs* 182: 9-12.
- 1908 Vicariat apostolique du Soudan. *Bulletin Mission des Pères blancs* 187: 213-218.
- 1912 Vicariat apostolique du Soudan Français. *Bulletin Mission des Pères blancs* 212: 262-269.

- 1918 Extrait des rapports pour l'exercice 1916-1917. *Bulletin Mission des Pères blancs* 252: 364-369.
  - 1919 Extrait des rapports pour l'exercice 1917-1918. *Bulletin Mission des Pères blancs* 257: 129-132.
  - 2012 Biographie. *Répertoire numérique du Fonds des Archives Privées de monsieur Tiemounou Vinama François Djibrill*. Bobo-Dioulasso: CNA.: 3-5.
- Arcand, J.-L. et al.
- 2000 How to make a tragedy: on the alleged effect of ethnicity on growth. *Journal of International Development* 12: 925-38.
- Asad, T. (ed.)
- 1973 *Anthropology and the colonial encounter*. London: Ithaca Press.
- Asad, T.
- 1986 *The idea of an anthropology of Islam*. Washington: Center for Contemporary Arab Studies, Georgetown University.
- Austen, R. and B. Soares
- 2010 Amadou Hampâté Bâ's life and work reconsidered: critical and historical perspectives. *Islamic Africa* 1: 133-142.
- Austen, R.
- 2008 Who was Wangrin and why does it matter? MANSA Conference Paper at Lisbon, June 2008, ([www.mandestudies.org/Lisbon...files/Austen\\_R.doc](http://www.mandestudies.org/Lisbon...files/Austen_R.doc)) (2014 年 9 月 17 日閲覧).
  - 2010 The medium of tradition': Amadou Hampâté Bâ's confrontations with languages, literacy, and colonialism. *Islamic Africa* 1: 217-228.
- Austin, G.
- 2005 *Labour, land and capital in Ghana : from slavery to free labour in Asante, 1807-1956*. Rochester: University of Rochester Press.
  - 2008 Resources, techniques and strategies south of the Sahara: revising the factor endowments perspective on African economic development, 1500-2000. *Economic History Review* 61: 587-624.
  - 2009 Cash crops and freedom: Export agriculture and the decline of slavery in

- colonial West Africa. *International Review of Social History* 54: 1-37.
- 2011 A. G. Hopkins, West Africa, and Economic History. in Falola, T. and E. Brownell (eds.) *Africa, Empire and Globalization ; Essays in Honor of A. G. Hopkins*. Durham: Carolina Academic Press.: 51-80.
- 2014a Explaining and evaluating the cash crop revolution in the "peasant" colonies of tropical Africa, ca. 1890-ca. 1930: beyond "vent for surplus". in Akyeampong, E. et al. (eds.) *Africa's development in historical perspective*. Cambridge: Cambridge University Press.: 295-320.
- 2014b Vent for surplus or productivity breakthrough? The Ghanaian cocoa take-off, c.1890-1936. *Economic History Review* 67: 1035-1064.
- Bâ, A. et M. Cardaire
- 1957 *Tierno Bokar, le sage de Bandiagara*. Paris: Présence Africaine.
- Bâ, A.
- 1980 *Vie et enseignement de Tierno Bokar : le sage de Bandiagara*. Paris: Seuil.
- 1991 *Amkoullel l'enfant peul*. Paris: Actes Suds.
- 1994 *Oui mon commandant !* Paris: Actes Suds.
- Bah, T. et G. Taguem Fah
- 1993 Les élites musulmanes et la politique au Cameroun sous administration française: 1945-1960. dans J. Boutrais (dir.) *Peuples et cultures de l'Adamaoua, Cameroun*. Paris: ORSTOM.: 103-133.
- Balandier, G.
- 1950 Aspects de l'évolution sociale chez les Fang du Gabon. *Cahiers internationaux de sociologie* 9: 76-106.
- 1951 La situation coloniale: approche théorique, *Cahiers internationaux de sociologie* 11: 44-79.
- 1967 *Anthropologie politique*. Paris: Presses universitaires de France.
- 2002 La situation coloniale : ancien concept, nouvelle réalité. *French Politics, Culture and Society* 20: 4-10.
- Balima, S.-A.
- 1970 *Genèse de la Haute-Volta*. Ouagadougou: Presses africaines.

1996a *Légendes et histoire des peuples du Burkina Faso*. Paris: J.A. Conseil.

1996b Édouard Hesling: Premier gouverneur de la colonie de la Haute-Volta. *Eurêka* (Publication Trimestrielle du CNRST) 19

(<http://www.nzdl.org/gsdmod?e=d-00000-00---off-0tulane--00-0---0-10-0---0---0direct-10---4-----0-11--11-en-50---20-about---00-0-1-00-0--4----0-0-11-10-0utfZz-8-00&a=d&cl=CL2.19.3&d=HASH31a74db0cda808da550582.7.7>) 2017/1/17 最終確認

Barbour, B. and M. Jacobs

1985 The Mi'raj : a legal treatise on slavery by Ahmad Baba. in J. Willis (ed.) *Slaves and Slavery in Muslim Africa*. Vol. 1. London: Frank Cass.: 125-159.

Barbieri, C. et al.

2012 Contrasting Maternal and Paternal Histories in the Linguistic Context of Burkina Faso. *Molecular biology and evolution* 29: 1213-1223.

Barth, F.

1969 *Ethnic groups and boundaries: The social organization of culture difference*. Oslo: Universitetsforlaget.

Barth, H.

1859 *Travels and Discoveries in North and Central Africa: being a Journal of an Expedition undertaken under the Auspices of H.B.M.'s Government, in the Years 1849-1855*. V. 3. New York: Harper & Brothers.

Bates, R.

1979 *Markets and States in Tropical Africa*. California: University of California Press.

1983 *Essays on the Political Economy of Rural Africa*. California: University of California Press.

Baudu, P.

1957 *Vieil empire, jeune église: Monseigneur J. Thévenoud, 1878-1949*. Paris : Editions La Savane.

Bayart, J.-F. and S. Ellis

2000 Africa in the world: a history of extraversion. *African affairs* 99: 217-267.

Bayart, J.-F.



1976 L'analyse des situations autoritaires: étude bibliographique. *Revue française de science politique* 26 : 483-520.

1981 Le politique par le bas en Afrique noire: Questions de méthode. *Politique africaine* 1: 53-82.

1983 La revanche des sociétés africaines. *Politique africaine* 11: 95-127.

1989 *L'État en Afrique. La politique du ventre*. Paris: Fayard.

Bayart, J.-F. (dir.)

1993 *Religion et modernité politique en Afrique noire*. Paris: Karthala.

Bazémo, M.

2007 *Esclaves et esclavage dans les anciens pays du Burkina Faso*. Paris: L'Harmattan.

Bazin, J.

1975 Guerre et servitude à Segou. dans C. Meillassoux (ed.) *Esclavage en Afrique précoloniale*. Paris: Maspéro. 135-181.

1982 État guerrier et guerres d'État. dans Bazin, J. and E. Terray (eds.) *Guerres de lignages et guerres d'États en Afrique*. Paris: Éditions des Archives Contemporaines.: 319-372.

Bazin, Mgr.

1904 La question religieuse au Soudan. *Bulletin Mission des Pères blancs* 163: 238-243.

Bedeaux, R. et al. (eds)

2005 *Recherches archéologiques à Dia dans le Delta intérieur du Niger (Mali) : bilan des saisons de fouilles 1998-2003*. Leiden: Research School of Asian, African, and Amerindian Studies, Leiden University.

Behrman, L.

1975 Review: The Wahhabiyya: Islamic Reform and Politics in French West Africa by Lansine Kaba. *International Journal of African Historical Studies* 8: 466.

Bellagamba, A. et al.

2013 *African Voices on Slavery and the Slave Trade: Volume 1, The Sources*. Cambridge: Cambridge University Press.

Benoit, B.

- 2010 La reconstitution de la Haute-Volta, enjeu de transcation hégémonique entre le pouvoir colonial et la royauté Moaaga de Ouagadougou (1919-1947). dans Bantenga, M. et la. (éds) *La reconstitution de la Haute-Volta*. Ouagadougou: Harmattan Burkina.: 203-225.

Benoit, M.

- 1982 *Oiseaux de Mil, les Mossi du Bwamu (Haute- Volta)*. Paris: ORSTOM.

Bernus, E.

- 1967 Cueillette et exploitation des ressources spontanées du Sahel nigérien par le Kel Tamasheq. *Cahier ORSTOM, serie Sciences Humaines* 4 : 31-52.
- 1980 Famines et sécheresses chez les Touaregs Sahéliens: les nourritures de substitution. *Africa* 50 : 1-7.

Berthier, S.

- 1997 *Recherches archéologiques sur la capital de l'empire de Ghana; Etude d'un secteur d'habitat à Koumbi Saleh, Mauritanie. Campagnes II-III-IV-V (1975-1976)-(1980-1981)*. BAR International Series 680. Oxford: The Basingstoke Press.

Beucher, B.

- 2012 *Quand les hommes mangent le pouvoir: dynamiques et pérennité des institutions royales mossi de l'actuel Burkina Faso (de la fin du XVe siècle à 1991)*. T. I. Thèse de Doctorat. l'Université de Paris-Sorbonne (Paris IV).

Binger, G.

- 1892 *Du Niger au Golfe de Guinée*. t. I-II. Paris : Hachette.

Blanchard, M.

- 1955 Correspondance de Félix Faure touchant les affaires coloniales (1882-1898). *Revue d'Histoire des Colonies* 42: 133–185.

Blench, R.

- 2006 *Language, Archaeology, and the African past*, Lanham, MD: Altamira Press
- 2007a Using linguistics to reconstruct African subsistence systems: comparing crop names to trees and livestock. In Denham, T. et al. (eds.) *Rethinking*

- agriculture: archaeological and ethnoarchaeological perspectives*. California: Left Coast Press.: 408-438.
- 2007b The intertwined history of the silk-cotton and baobab. In R. Cappers (ed.) *Fields of change: Progress in African Archaeobotany*. Groningen: Groningen University Library.: 1-19.
- Blegna, D.
- 1990 *Les masques dans la société marka de Fobiri*. Stuttgart: Franz Steiner Verlag.
- Bloud, H.
- 1925 *Le Problème cotonnier et l'Afrique occidentale française. Une solution nationale*. Paris: Larose.
- Bohannan, P.
- 1955 Some Principles of Exchange and Investment among the Tiv. *American Anthropologist* 57: 60-70.
- 1959 The Impact of Money on an African Subsistence Economy. *Journal of Economic History* 19: 491-503.
- Boni, N.
- 1962 *Crépuscule des temps anciens*. Paris: Présence Africaine.
- Bonnet, D.
- 1984 Biographie et travaux de Louis Tauxier. *Journal des africanistes* 54: 107-113.
- Bouche, D.
- 1975 *L'Enseignement dans les territoires français de l'Afrique occidentale de 1817 à 1920*. T. I, II. Lille: Université Lille III.
- Bourgeois, J.
- 1987 The History of the Great Mosques of Djenné. *African Arts* 20: 54-92.
- Bouron, J.-M.
- 2010a La Mission catholique et la reconstitution de la Haute-Volta. Intérêts, rôle, conséquences. dans Batenga, M. et al. (éds.) *La reconstitution de la Haute-Volta*. Ouagadougou: L'Harmattan.: 63-90.

- 2010b Les Pères Blancs, acteurs du jeu colonial. Mission catholique et enjeux politiques en Haute-Volta au lendemain de la seconde guerre mondiale. *Histoire et Missions Chrétiennes* 14: 59-81.
- 2010c Indépendance des élites voltaïques, indépendance du pays : la mission catholique entre deux feux (1950-1960). dans Caroline, S. et S. Olivier (éds.) *Mission et engagement politique après 1945. Afrique, Amérique latine, Europe*. Paris: Karthala.: 153-168.
- 2011 Discours concurrentiels, stratégies spatiales et regards consensuels dans un territoire multiconfessionnel. Le cas de la Haute-Volta coloniale. dans Eyezo'o, S. et Zorn, J.-F. (éds.) *Concurrences en mission. Propagandes, conflits, coexistences (XVIe-XXIe siècles)*. Paris: Karthala.: 215-230.
- 2012 D'un discours à l'autre. Concurrences rhétoriques et rapports interreligieux en Haute-Volta coloniale. *Archives de sciences sociales des religions* 158: 33-52.
- Boutillier, J-L.
- 1964 *Les structures foncières en Haute-Volta*. Ouagadougou: ORSTOM.
- Brenner, L. and M. Last
- 1985 The role of language in West African Islam. *Africa* 55: 432-446.
- Brenner, L.
- 1997 Becoming muslim in Soudan français. dans Robinson, D. et J.-L. Triaud (éds.) *Le Temps des Marabouts. Stratégies et itinéraires islamiques en Afrique occidentale (v. 1880-1960)*. Paris: Karthala.: 467-492.
- 2001 *Controlling knowledge: Religion, power, and schooling in a West African Muslim society*. Bloomington: Indiana University Press.
- Breunig, P. and K. Neumann
- 2002a From hunters and gatherers to food producers: New archaeological and archaeobotanical evidence from the West African Sahel. In Hassan, F. (ed.) *Droughts, food and culture: Ecological change and food security in Africa's later prehistory*. New York: Kluwer Academic/Plenum.: 123-155.
- 2002b Continuity or discontinuity? The first millennium BC crisis in West African

prehistory. In Lenssen-Erz, T. et al. (Hrsg.) *Gezeiten der Wüste: Beiträge zu Archäologie und Umweltgeschichte Afrikas zu Ehren von Rudolph Kuper*. Köln: Heinrich-Barth-Institut.: 491-505.

Brunschwig, H.

1967 Note sur les technocrates de français en Afrique noire. *Revue Française d'Histoire d'Outre-Mer* 54: 171–187.

Bulman, S.

1999 Sunjata as written literature: the role of the literary mediator in the dissemination of the Sunjata epic. in R. Austen (ed.) *In Search of Sunjata: The West African Epic as History, Literature and Performance*. Bloomington: Indiana University Press.: 231-251.

Capron, J.

1973 *Communautés villageoises bwa*. Paris : Institut d'Ethnologie.

Carsten, J. & S. Hugh-Jones. (eds.)

1995 *About the House: Levi-Strauss and Beyond*. Cambridge: Cambridge University Press.

Černý, V. et al.

2011 Genetic structure of pastoral and farmer populations in the African Sahel. *Molecular biology and evolution* 28: 2491-2500.

Cissé, I.

1989 *Introduction à l'étude des medersas au Burkina Faso: des années 1960 nos jours*. Mémoire de Maîtrise. Université de Ouagadougou.

1990 Les médersas au Burkina. L'aide arabe et la croissance d'un système d'enseignement arabe-islamique. *Islam et sociétés au sud du Sahara* 4: 57-72.

2004 *Guide du Lecteur*. CNA: Ouagadougou.

Cissé, M.

2010 *Archaeological investigations on early trade and urbanism at Gao Saney (Mali)*. Ph. D thesis. Rice University.

Chauveau, J.-P. et al.

- 1981 Histoires de riz, histoires d'igname: le cas de la Moyenne Côte d'Ivoire. *Africa* 51: 621-658.
- Chauveau, J.-P. et J.-P. Dozon
- 1985 Colonisation, économie de plantation et société civile en Côte d'Ivoire. *Cahiers de l'ORSTOM* 21: 63-80.
- Chauveau, J.-P.
- 1976 Note sur les échanges dans le Baule précolonial. *Cahiers d'études africaines* 16: 567-602.
- 1977 Société baule précoloniale et modèle segmentaire. Le cas de la région de Kokumbo. *Cahiers d'études africaines* 17: 415-434.
- Chouin, G. and C. Decorse
- 2010 Prelude to the Atlantic trade: new perspectives on southern Ghana's pre-Atlantic history (800–1500). *Journal of African History* 51: 123-145.
- Clarín, R.
- 1961 *Enquête démographique par sondage en République de Haute-Volta 1960-1961*. T. I. Paris: INSEE.
- Coquery-Vidrovitch, C.
- 1969 Recherche sur un mode de production africain. *La Pensée* 144: 61-78.
- 1975 L'impact des intérêts coloniaux: SCOA et CFAO dans l'ouest africain. *Journal of African History* 16: 595–621.
- 1976 La mise en dépendance de l'Afrique noire. Essai de périodisation, 1800-1970. *Cahiers d'études africaines* 16: 7-58.
- Cohen, W.
- 1971 *Rulers of empire: the French colonial service in Africa*. Stanford: Hoover Institution Press.
- Conklin, A. L.
- 1997 *A Mission to Civilize: The republican idea of Empire in France and West Africa, 1895-1930*. Stanford: Stanford University Press.
- 2008 Histories of Colonialism: Recent Studies of the Modern French Empire. *French Historical Studies* 30: 305-332.

Conseil de gouvernement de l'A.O.F.

- 1903 *Organisation du service de l'enseignement*. Saint-Louis: Imprimerie du gouvernement.

Comaroff, J. and J. Comaroff

- 1997 Postcolonial politics and discourses of democracy in southern Africa: An anthropological reflection on African political modernities. *Journal of Anthropological Research* 53: 123-146.

Comaroff, J. and J. Comaroff (eds.)

- 1993 *Modernity and its malcontents: Ritual and power in postcolonial Africa*. Chicago: University of Chicago Press.
- 1999 *Civil society and the political imagination in Africa: Critical perspectives*. Chicago: University of Chicago Press.

Conombo, J.

- 2003 *Acteur de mon temps : un Voltaïque dans le XX<sup>e</sup> siècle*. Paris: L'Harmattan.

Cooper, F. and Stoler, A. (eds.)

- 1997 *Tensions of empire: colonial cultures in a bourgeois world*. California: University of California Press.

Cooper, F.

- 1981 Africa and the world economy. *African Studies Review* 24: 1-86.
- 1994 Conflict and connection: rethinking colonial African history. *American Historical Review* 99: 1516-1545.
- 1996 *Decolonization and African society: The labor question in French and British Africa*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 2002 Decolonizing Situations: The rise, fall and rise of colonial studies, 1951-2001. *French Politics, Culture, and Society* 20: 47-76.
- 2005 *Colonialism in question : theory, knowledge, history*. Los Angeles: University of California Press.

Copans, J.

- 2001 La «situation coloniale» de Georges Balandier: notion conjoncturelle ou modèle sociologique et historique? *Cahiers internationaux de sociologie* 1:

31-52.

Cordell, D. and J. Gregory

1980 Historical demography and demographic history in Africa: theoretical and methodological considerations. *Canadian Journal of African Studies* 14: 389-416.

1982 Labour reservoirs and population: French colonial strategies in Koudougou, Upper Volta, 1914 to 1939. *Journal of African History* 23: 205-224.

1983 A response. *Canadian Journal of African Studies* 17: 105-106.

Cornevin, R.

1988 Données historiques. dans Centre des hautes études sur l'Afrique et l'Asie modernes (éd.) *Les pays du Pacifique et l'Afrique*. Paris: la Documentation française.: 15-23.

Coulibaly, Y.

2012 *Les cahier Yézouma. Enquêtes 2000-2001 des 475 chefs d'exploitations de Bondoukuy, Sud-Ouest du Burkina Faso*. Paris: L'Harmattan.

Coulibaly, Z.

1997 *L'évolution de l'enseignement et de la formation des enseignants du primaire au Burkina Faso (1903-1995). La qualité de l'enseignement primaire en question*. Thèse de Doctorat. Université des Sciences et Technologies de Lille.

Coulon, C.

1981 *Le marabout et le prince: Islam et pouvoir au Sénégal*. Paris : Pedone

Cuoq, M.

1975 *Recueil des sources arabes concernant l'Afrique occidentale du VIIIe au XVIe siècle : (Bilād al-Sūdān)*. Paris: Éditions du Centre national de la recherche scientifique.

Curtin, P. (ed.)

1967 *Africa remembered: narratives by West Africans from the era of the slave trade*. Madison: University of Wisconsin Press.

Curtin, P.



- 1969 *The Atlantic slave trade: a census*. Madison: University of Wisconsin Press.
- Cremer, J.
- 1924 *Matériaux d'ethnographie et de linguistique soudanaises. Vol. 3. Les Bobo*. Paris: Geuthner.
- Cruise O'Brien, D.
- 1971 *The Mourides of Senegal: the political and economic organization of an Islamic brotherhood*. Oxford: Clarendon Press.
- 1981 La filière musulmane: confréries soufies et politique en Afrique noire. *Politique africaine* 1: 7-30.
- Crozat, F.
- 1891a Rapport du docteur Crozat sur sa mission au Mossi. *Journal officiel de la République française. Lois et décrets* 270: 4797-4801.
- 1891b Rapport du docteur Crozat sur sa mission au Mossi (suite). *Journal officiel de la République française. Lois et décrets* 271: 4806-4809.
- 1891c Rapport du docteur Crozat sur sa mission au Mossi (suite). *Journal officiel de la République française. Lois et décrets* 272: 4820-4823.
- Czerniewicz, M. V.
- 2004 L'évolution de la décoration et de la forme des céramiques pendant l'Âge du Fer au Nord du Burkina Faso. *Préhistoires Méditerranéennes* 13: 127-132.
- Daaku, K.
- 1972 Aspects of precolonial Akan economy. *International Journal of African Historical Studies* 5: 235-247.
- Daget J.
- 1949 La pêche dans le delta central du Niger. *Journal de la Société des Africanistes* 19: 1-79.
- Daget, J. et A. Bâ
- 1955 *L'empire peul du Macina*. Bamako: l'Institut Française d'Afrique noire.
- Dalton, G.
- 1965 Primitive Money. *American Anthropologist* 67: 44-65.
- 1969 Theoretical issues in economic anthropology. *Current Anthropology* 10:

63-102.

d'Andrea, A. and J. Casey

- 2002 Pearl millet and Kintampo subsistence. *African Archaeological Review* 19: 147-173.

d'Andrea, A. et al.

- 2001 Archaeobotanical evidence for pearl millet (*Pennisetum glaucum*) in sub-Saharan West Africa. *Antiquity* 75: 341-348.

d'Andurain, J.

- 2012 *La Capture de Samory (1898)*. Paris: SOTECA.

Dassetto, F. et al.

- 2013 *Un islam confrérique au Burkina Faso*. Paris: Karthala.

de Benoist, J.-R.

- 1987 *Église et pouvoir colonial au Soudan français: les relations entre les administrateurs et les missionnaires catholiques dans la Boucle du Niger, de 1885 à 1945*. Paris: Karthala.

de Card, E.

- 1897 *Les traités de protectorat conclus par la France en Afrique, 1870-1895*. Paris: A. Pedone.

Delafosse, M.

- 1912a *Haut-Sénégal-Niger*. tome I. Paris: Emile Larose.  
1912b *Haut-Sénégal-Niger*. tome II. Paris: Emile Larose.  
1912c *Haut-Sénégal-Niger*. tome III. Paris: Emile Larose.

De L'Etoile, B.

- 2007 Internationalization and 'scientific nationalism': the International Institute of African Languages and Cultures between the wars. in Tilley, H. and R. Gordon (eds.) *Ordering Africa*. Manchester: Manchester University Press. : 95-116.  
2008 Hegemonic Gravity and Utopian pluralism: A comparative framework for analyzing the international space in anthropology. *Journal of the World Anthropologies Network* 3: 111-129.

Der, B.

1998 *The Slave Trade in Northern Ghana*. Accra: Woeli.

Deschamps, H.

1975 *Roi de la brousse: Mémoires d'autres mondes*. Paris : Berger-Levrault.

Diallo, M.

2000 Les parlers marka au Burkina Faso: contrastes au niveau grammatical.  
*Mandenkan* 36: 65-83.

Diallo, Y.

1997 *Les Fulbe du Boobola: genèse et évolution de l'État de Barani (Burkina Faso)*. Köln: Köppe.

Diawara, Y.

1975 Sur la révolte du 3 août 1941 à Bobo-Dioulasso. *Notes et Documents Voltaïques* 8: 3-35.

Dolor, V.

1935 L'emploi des cauris monétaires chez les Lobis *Bulletin hebdomadaire d'information et de renseignements* 74: 5-8.

Douglas, M.

1967 Primitive Rationing: a study in controlled exchange. In R. Firth (ed.) *Themes in Economic Anthropology*. London: Tavistock. : 119-141.

Doumbo, M. et A. Traoré

2004 Le Systeme des places de marche de Bamako. dans D. Requier-Desjardins (dir.) *Stratégie des acteurs, dynamiques urbaines et structuration des territoires*. Paris: Germdev: 191-205.

Dozon, J.-P.

1977 Économie marchande et structures sociales : le cas des Bete de Côte d'Ivoire. *Cahiers d'études africaines* 17: 463-483

Dueppen, S.

2012 *Egalitarian Revolution in the Savanna: The Origins of a West African Political System*. Sheffield: Equinox.

Dueppen, S. and D. Gallagher

- 2013 Adopting agriculture in the West African savanna: Exploring socio-economic choices in first millennium CE southeastern Burkina Faso. *Journal of Anthropological Archaeology* 32: 433-448.
- Duperray, A.
- 1984 *Les Gourounsi de Haute-Volta. Conquête et colonisation 1896-1933*. Stuttgart: Franz Steiner Verlag Wiesbaden GMBH.
- Dupuis, J.
- 1824 *Journal of a Residence in Ashanti*. London: H. Colburn.
- Echenberg, M.
- 1969 Jihad and State-Building in Late Nineteenth Century Upper Volta: The Rise and Fall of the Marka State of Al-Kari of Boussé. *Canadian Journal of African Studies* 3: 531-562.
- 1991 *Colonial Conscripts: The Tirailleurs Sénégalais in French West Africa, 1857-1960*. London: Heinemann.
- Ehret, C.
- 1984 Historical/Linguistic Evidence for Early African Food Production. in Clark, J. D. and S. Brandt (ed.) *From Hunters to Farmers*. Berkeley: University of California Press.: 26-35.
- 2000 Language and history. In Heine, B. and D. Nurse (eds.) *African Languages: An Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.: 272-297.
- Eltis, D.
- 2001 The volume and structure of the transatlantic slave trade: a reassessment. *The William and Mary Quarterly* 58: 17-46.
- Englebert, J.
- 2000 Pre-colonial institutions, post-colonial states, and economic development in tropical Africa. *Political Research Quarterly* 53: 7-36.
- Evans, E. and D. Richardson
- 1995 Hunting for rents: the economics of slavery in pre-colonial Africa. *Economic History Review* 48: 665-686.
- Fafchamps, M. et al.

- 1998 Drought and Saving in West Africa: Livestock a Buffer Stock? *Journal of Development Economics* 55: 273-305.
- Fage, J.
- 1955 *An introduction to the history of West African*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fall, B.
- 1993 *Le travail en force en Afrique-Occidentale française (1900-1946)*. Paris: Karthala.
- Ferguson, P.
- 1972 *Islamization in Dagbon: a study of the Alfanema of Yendi*. Ph. D. Thesis. University of Cambridge.
- Fiéloux, M., Lombard, J., et J. Kambou-Ferrand
- 1993 *Images d'Afrique et sciences sociales: les pays lobi, birifor et dagara (Burkina Faso, Côte-d'Ivoire et Ghana): actes du colloque de Ouagadougou, 10-15 décembre 1990*. Paris: Karthala.
- Fisher, H.
- 1976 Review: The Wahhabiyya: Islamic Reform and Politics in French West Africa by Lansine Kaba. *Journal of African History* 17: 147-149.
- Fortes, M. and E. Evans-Pritchard (eds.)
- 1940 *African Political Systems*. London: International African Institute.
- Fortes, M.
- 1943 A note on fertility among the Tallensi of the Gold Coast. *Sociological Review* 35: 99-112.
- 1949 *The Web of Kinship among the Tallensi*. Oxford: Oxford University Press.
- 1969 *Kinship and the social order: the legacy of Lewis Henry Morgan*. Chicago: Aldine.
- 1971 Introduction. in Fortes, M. and J. Goody (eds.) *The Developmental Cycle in Domestic Groups*. Cambridge: Cambridge University Press.: 1-14.
- 1978 Parenthood, marriage and fertility in West Africa. *Journal of Development Studies* 14: 121-149.

Foucault, M.

- 2013 *La société punitives: Cours au Collège de France 1972-1973*. Edited by B. Harcourt. Paris: Gallimard.

Fourchard, L.

- 2001 *De la ville coloniale à la cour africaine. Espaces, pouvoirs et sociétés à Ouagadougou et à Bobo-Dioulasso (Haute-Volta) fin XIXe siècle – 1960*. Paris: L'Harmattan.

Frank, T. et al.

- 2001 The Chaîne de Gobnangou, South-East Burkina Faso: Archaeological, Archaeobotanical, Archaeozoological and Geomorphological Studies. *Beitrag zur Allgemeinen und Vergleichenden Archäologie* 21: 127-190.

Frankema, E.

- 2010 Raising revenue in the British empire, 1870–1940: how “extractive” were colonial taxes? *Journal of Global History* 53: 447-477.

Frankema, E. and M. van Waijenburg

- 2012 Structural impediments to African growth? New evidence from real wages in British Africa, 1880–1965. *Journal of Economic History* 72: 895-926.
- 2014 Metropolitan blueprints of colonial taxation? Lessons from fiscal capacity building in British and French Africa, c. 1880–1940. *Journal of African History* 55: 371-400.

Gagné, N.

- 2012 The Study of Colonial Situations: The Emergence of a New General Approach? *Reviews in Anthropology* 41: 109-135.

Gallais, J.

- 1960 La signification du village en Afrique soudanienne de l'Ouest: Essai comparatif. *Cahiers de Sociologie Economique* 2: 126-162.
- 1962 Signification du groupe ethnique au Mali. *L'Homme* 2: 106-129.
- 1984 *Hommes du Sahel*. Paris: Flammarion.

Gallay, A. et al.

- 1990 *Hamdallahi: capitale de l'Empire peul du Massina, Mali: première fouille*

*archéologique, études historiques et ethnoarchéologiques*. Stuttgart: Steiner.

Galvin, K. and M. Little

- 1999 Dietary intake and nutritional status. In Little, M. and P. Leslie (eds.) *Turkana Herders of the Dry Savanna*. Oxford: Oxford University Press.: 125-145.

Garvey, M.

- 1983 *The Marcus Garvey and Universal Negro Improvement Association Papers, Vol. I 1826-August 1919*. Edited by R. A. Hill. London: University of California Press.

Gatelet, A.

- 1901 *Histoire de la conquête du Soudan français (1878-1899)*. Paris : Berger-Levrault.

Gervais, R.

- 1983 Verités et mensonges: les statistiques coloniales de population. *Canadian Journal of African Studies* 17: 101-103.
- 1993a Archival Documents on Upper Volta: Here, There, and Everywhere. *History in Africa* 20: 379-384.
- 1993b *Contribution à l'étude de l'évolution de la population de l'Afrique occidentale française, 1904-1960*. Paris: CEPED.
- 1994 La Politique Cotonnière de la France dans le Mosi Colonial (Haute-Volta) (1919-1940). *Revue française d'histoire d'outre-mer* 81: 27-54.
- 1998 Contrôler, Compter, Comparer. La Production et la Gestion de l'information démographique en Haute-Volta avant 1960. *Histoire et Mesure* 13: 59-76.

Gervais, R. and R. Marcoux

- 1993 Saving Francophone Africa's Statistical Past. *History in Africa* 20: 385-390.

Geschiere, P.

- 1995 *Sorcellerie et politique en Afrique: la viande des autres*. Paris: Karthala.

Ginio, R.

- 2006 *French colonialism unmasked. The Vichy years in French West Africa*. Nebraska: Nebraska University Press.

- 2010 French Officers, African Officers, and the Violent Image of African Colonial Soldiers. *Historical Reflections* 36: 59-75.

Gluckman, Max

- 1947 Malinowski's 'Functional' Analysis of Social Change. *Africa* 17: 103-121.

Godelier, M.

- 1964 *La notion de "mode de production asiatique" et les schémas marxistes d'évolution des sociétés*. Paris: Centre d'études et de recherches marxistes.

Gold Coast

- 1923 *Report on the blue book for 1922-1923*. Accra: Government Press.  
1928 *Report on the blue book for 1927-1928*. Accra: Government Press.

Goody, J.

- 1963 Feudalism in Africa? *Journal of African History* 4: 1-18.  
1967 *The social organisation of the LoWiili*. 2<sup>nd</sup> ed. London: Oxford University Press.  
1968 Introduction. in J. Goody (ed.) *Lietracy in Traditional Societies*. Cambridge: Cambridge University Press.: 1-26.  
1971a *Technology, tradition and the state in Africa*. Oxford: Oxford University Press.  
1971b The Fission of Domestic Groups among the LoDagaba in Fortes, M. and J. Goody (eds.) *The Developmental Cycle in Domestic Groups*. Cambridge: Cambridge University Press.: 53-91.  
1973 Polygyny, economy, and the role of women. in J. Goody (ed.) *The character of kinship*. Cambridge: Cambridge University Press.: 175-190.  
1995 *The expansive moment: the rise of social anthropology in Britain and Africa 1918-1970*. Cambridge: Cambridge University Press.

Gordon, G. (ed.)

- 2016 *Ethnologue: Languages of the World*. 19th Edition. (Web version)  
<http://www.ethnologue.com>

Gouvernement général de l'Afrique occidentale française

- 1904 *Territoires du Haut-Sénégal Moyen-Niger. 1900-1903*. Paris: Imprimerie



Firmin-Didot.

1907 *Situation générale de l'année 1906*. Gorée: Imprimerie du Gouvernement general.

1908 *Situation générale de l'année 1907*. Gorée: Imprimerie du Gouvernement general.

1912 *Situation générale de l'année 1911*. Gorée: Imprimerie du Gouvernement general.

1913 *Rapport d'ensemble annuel*. [Gorée: Imprimerie du Gouvernement general.]

Green, K.

1986 Dyula and Sonongui Roles in the Islamization of the Region of Kong. *Asian and African Studies* 20: 103-123.

Gregory, J., Cordell, D., et V. Piché

1989 La mobilisation de la main-d'oeuvre burkinabé, 1900–1974: Une vision retrospective. *Revue canadienne des études africaines* 23: 73-105.

Graeber, D.

2011 *Debt: The First 5000 Years*. Brooklyn: Melville House.

Grupp, P.

1971 Gabriel Hanotaux. Le personnage et ses idées sur l'expansion coloniale. *Revue Française d'Histoire d'Outre-Mer* 58: 383–406.

Guilhem, M. et J. Hebert

1961 *Precis d'histoire de la Haute-Volta*. Paris: Ligel.

Guirma, F.

1991 *Comment perdre le pouvoir ? Le cas de Maurice Yameogo*. Paris: L'Harmattan.

Guyer, J.

2004 *Marginal gains. Monetary transactions in Atlantic Africa*. Chicago: The University of Chicago Press.

Hagberg, S. and A. Tengan

2000 *Bonds and boundaries in northern Ghana and southern Burkina Faso*. Uppsala: Acta Universitatis Upsaliensis.

Hann, C. and L. Hart

- 2011 *Economic Anthropology. History, ethnography and critique*. Cambridge: Polity.

Hann, C.

- 2008 Reproduction and Inheritance: Goody Revisited. *Annual Review of Anthropology* 37: 145-58.
- 2015 Goody, Polanyi and Eurasia: an unfinished project in comparative historical economic anthropology. *History and Anthropology* 26: 308-320.

Harding, L.

- 1971 Les écoles des Pères Blancs au Soudan Français, 1895-1920. *Cahiers d'études africaines* 41: 101-128.

Harrison, B. and A. Harrison

- 2001a *Sociolinguistic survey report for the Marka-Dafing language*. Dallas: SIL International.
- 2001b *Sociolinguistic survey report for the Marka-Jula language*. Dallas: SIL International.

Harrison, C.

- 1988 *France and Islam in West Africa, 1860-1960*. Cambridge: Cambridge University Press.

Hart, K.

- 2014 Jack Goody: The Anthropology of Unequal Society. *Reviews in Anthropology* 43: 199-220.

Haute-Volta

- 1920-1928, 1931-1932 *Budget de la Haute-Volta*. Koulouba: Imprimerie du Gouvernement général.

Haut-Sénégal-Niger

- 1903-1906, 1909-1911, 1914-1918 *Budget local du Haut-Sénégal et Niger*. Saint-Louis : Imprimerie du Gouvernement général.

Hawkins, S.

- 1996 Disguising Chiefs and God as history: questions on the acephalousness of

LoDagaa politics and religion. *Africa* 66: 202-247.

Hébert, J. et J. Bicaba

1977 La Révolte des enfants des pères (1933-1934). *Notes et Documents Voltaïques* 10: 25-60.

Hébert, J.

1958 Une page d'histoire voltaïque: Amoro, chef des Tiéfo. *Bulletin de l'IFAN* 20: 377-405.

1995 Une grande figure de Bobo-Dioulasso : la princesse Guimbe Ouattara. dans Massa, G. et Y. Madiega (dir.) *La Haute-Volta coloniale. Temogingages, recherches, regards*. Paris: Karthala. : 509-522.

Héritier, F.

2010 *Retour aux sources*. Paris: Galilée.

Henry, Y.

1906 *Rapport sur l'exploitation du caoutchouc en Afrique occidentale française*. Gorée: Imprimerie du Gouvernement général.

Hilgers, M.

2009 *Une ethnographie à l'échelle de la ville: urbanité, histoire et reconnaissance à Koudougou, Burkina Faso*. Paris : Karthala Editions.

Hogendorn, J. and M. Johnson

1986 *The shell money of the slave trade*. Cambridge: Cambridge University Press.

Holder, G. et M. Sow(dir.)

2014 *L'Afrique des laïcités. État, religion et pouvoirs au sud du Sahara*. Paris: IRD.

Holder, G. (dir.)

2009 *L'islam, nouvel espace public en Afrique*. Paris: Karthala

Holl, A.

2009a Iron Metallurgy in West Africa : An Early Iron Smelting Site in the Mouhoun Bend, Burkina Faso. In S. Magnavita, L. Koté, P. Breunig & O.A. Idé (eds.), *Crossroads / Carrefour Sahel. Cultural and technological developments in first millennium BC/AD West Africa. Développements culturels et*

*téchnologiques pendant le premier millénaire BC/AD dans l'Afrique de l'Ouest. Journal of African Archaeology Monograph Series 2.* Africa Magna Verlag, Frankfurt a. M.: 59-68.

2009b West African early metallurgies : New Evidence and old orthodoxy. *Journal of World Prehistory* 22: 415-438.

Holl, A. and L. Kote

2000 Settlement Patterns, Food Production, and craft Specialization in the Mouhoun Bend (NW Burkina Faso) : Preliminary results of the MOBAP 1997-1999 Field Seasons. *West African Journal of Archeology* 30: 69-107.

Holmes, L. V.

1977 *Tieba Traoré, Fama of Kenedougou: Two Decades of Political Development, 1873-1893.* Ph.D Thesis. University of California, Berkeley.

Hopkins, A.

1973 *An economic history of West Africa.* New York: Columbia University Press.

2009 The new economic history of Africa. *Journal of African History* 50: 155-177.

Horton, R.

1971 Stateless societies in the history of West Africa. in Ajayi, J. and M. Crowder (eds.) *History of West Africa.* London: Longman.: 87-128.

Hubbell, A.

2001 A view of the slave trade from the margin: Souroudougou in the late nineteenth-century slave trade of the Niger bend. *Journal of African History* 42: 25-47.

Hugot, L.

1901a Le journal du capitaine Hugot. *Bulletin du Comité de l'Afrique française* 11: 304-307.

1901b Le journal du capitaine Hugot (suit). *Bulletin du Comité de l'Afrique française* 11: 340-342.

Hunter, M.

1934 Methods of study of culture contact. *Africa* 7: 335-350.

Hunwick, J. (translation)

- 1999 *Timbuktu and the Songhay Empire. Al-Sa'dī's Ta'rikh al-sūdān down to 1613 and other contemporary documents*. Leiden: Brill.
- Huillery, E.
- 2009 History matters: The long-term impact of colonial public investments in French West Africa. *American Economic Journal* 1: 176-215.
- 2014 The Black Man's Burden. The cost of colonization of French West Africa for French taxpayers. *Journal of Economic History* 74: 1-38.
- Huysecom, E. et al.
- 2009 The emergence of pottery in Africa during the tenth millennium cal BC: New evidence from Ounjougou (Mali). *Antiquity* 83: 905–917.
- Iddrisu, A.
- 2012 *Contesting Islam in Africa. Homegrown Wahhabism and Muslim Identity in Northern Ghana, 1920-2010*. Durham: California Academic Press.
- Iliffe, J.
- 2007 *Africans: the history of a continent*. 2<sup>nd</sup> ed. Cambridge: Cambridge University Press.
- Inda, J. X. (ed.)
- 2008a *Anthropologies of modernity: Foucault, governmentality, and life politics*. Oxford: Blackwell.
- Inda, J. X.
- 2008b Analytics of the Modern: An Introduction. in Inda, J. X. (ed.) *Anthropologies of modernity: Foucault, governmentality, and life politics*. Oxford: Blackwell.: 1-22.
- Inikori, J.
- 1977 The import of firearms into West Africa 1750–1807: A quantitative analysis. *Journal of African History* 18: 339-368.
- 2007 Africa and the globalization process: western Africa, 1450–1850. *Journal of Global History* 2: 63-86.
- INSD (Institut National de la Statistique et de la Demographie)
- 1996 *Annuaire séries longues du Burkina Faso*. Ouagadougou: INSD.

Insoll, T.

- 1996 *Islam, archaeology and history: Gao region (Mali) ca. AD 900-1250*. BAR international series 647. Oxford: Tempus Reparatum.

Izard, M.

- 1970 *Introduction à l'histoire des royaumes mossi*. Paris: Laboratoire d'anthropologie sociale.
- 1971 Les Yarse et le commerce dans le Yatenga pré-colonial. dans Meillasoux, C. et D. Forde (éds.) *L'évolution du commerce africain depuis le XIXe siècle en Afrique de l'ouest*. London: Oxford University Press.: 214-227.
- 1985 *Gens du pouvoir, gens de la terre: les institutions politiques de l'ancien royaume du Yatenga (bassin de la Haute-Volta blanche)*. Paris: Maison des sciences de l'homme.

Jacob, J.-P.

- 1997 L'administration coloniale comme puissance antisorcellaire. dans Hainard, J. et R. Kaehr (éds.) *Dire les autre. Réflexions et pratiques ethnologiques*. Lausanne: Payot Lausanne.: 291-308.
- 2003a Imposer son tutorat foncier: usages autochtones de l'immigration et tradition pluraliste dans le Gwendégoué (centre-ouest Burkina Faso). dans Lentz, C. et al. (éds.) *Histoire du peuplement et relations interethniques au Burkina Faso*. Paris: 75-96.
- 2003b Gestion trans-villageoise des ressources naturelles: le cas du Gwendegoué (centre-ouest Burkina Faso). dans I. Butare (dir.) *Pratiques culturelles, la sauvegarde et la conservation de la biodiversité en Afrique de l'Ouest et du Centre*. Dakar: CRDI.: 164-192.
- 2007 *Terres privées, terres communes : gouvernement de la nature et des hommes en pays winye*. Paris : IRD.

Jézéquel, J.

- 2003 Histoire de bancs, parcours d'élèves. Pour une lecture "configurationnelle" de la scolarisation à l'époque coloniale. *Cahiers d'études africaines* 169-170: 409-433.

Johnson, M.

- 1965 *Salaga Papers*, Volume I. Compiled by Mrs. M. Johnson. Legon: Institute of African Studies, University of Ghana.

Jousse, H. et I. Chenal-Velarde

- 2002 Nouvelles données sur la faune mammalienne de Kobadi (Mali) au Néolithique. Implications paléoéconomiques et paléoenvironnementales. *Préhistoires Méditerranéennes* 10-11: 145-158.

Kaba, L.

- 1974 *The Wahhabiyya: Islamic Reform and Politics in French West Africa*. Evanston: Northwestern University Press.
- 1997 Sheikh Mouhammad Chérif de Kankan: le Devoir d'Obéissance et la Colonisation (1923-1955). dans Robinson, D. and J.-L. Triaud (éds.) *Le temps des marabouts: itinéraires et stratégies islamiques en Afrique occidentale française v.1880-1960*. Paris: Karthala.: 277-298.

Kabore, G.

- 1962 Caractère "féodal" du système politique mossi. *Cahiers d'études africaines* 2: 609-623.

Kahlheber, S. and K. Neumann

- 2007 The development of plant cultivation in semi-arid West Africa. In Dehnam, T. et al. (eds.) *Rethinking agriculture: Archaeological and ethnoarchaeological perspectives*. Walnut Creek: Left Coast Press.: 320-346.

Kambou-Ferrand, J.-M.

- 1993a Guerre et résistance sous la période coloniale en pays lobi/birifor (Burkina Faso) au travers de photos d'époque'. dans Fiéloux M., et al. (dir.) *Images d'Afrique et sciences sociales, les pays lobi, birifor et dagara*. Paris: Karthala-ORSTOM.: 75-99.
- 1993b *Peuples voltaïques et conquête coloniale, 1885-1914: Burkina Faso*. Paris: L'Harmattan.

Kane, M.

- 1997 La vie et l'œuvre d'Al-Hajj Mahmoud Ba Diowol (1905-1978): du pâtre au

patron de la Révolution al-Falah'. dans Robinson, D. and J.-L. Triaud (éds.) *Le temps des marabouts: itinéraires et stratégies islamiques en Afrique occidentale française v.1880-1960*. Paris: Karthala.: 431-465.

Kan, J.

1986 *Approche de la société Bwa du Bwee précolonial*. Mémoire de Maîtrise. Université de Ouagadougou.

Kanya-Forstner, A.

1969 *The Conquest of the Western Sudan*. Cambridge: Cambridge University Press.

Kawada, J.

2002 *Genèse et dynamique de la royauté: les Mosi méridionaux, Burkina Faso*. Paris: L'Harmattan.

Kevane, M.

2006 Dim Delobsom: French Colonialism and Local Response in Upper Volta. *African Studies Quarterly* 8: 12-26.

Kiethaga, J.-B.

2003 L'enseignement de l'histoire au Burkina Faso. dans Madiéga, Y. et O. Nao (éds.) *Burkina Faso. Cent ans d'histoire, 1895-1995*. T. 1. Paris : Karthala.: 47-60.

Ki-Zerbo, J.

1999 *Alfred Diban : premier chrétien de Haute-Volta*. 2eme éd. Villeneuve-d'Ascq: Ressource.

Klee, M. and B. Zach

1999 The exploitation of wild and domesticated food plants at settlement mounds in north-east Nigeria (1800 cal BC to today). in M. van der Veen (ed.) *The exploitation of plant resources in ancient Africa*. Boston: Springer.: 81-88.

Klee, M. et al.

2004 Four thousand years of plant exploitation in the Lake Chad Basin (Nigeria), part III: Plant impressions in potsherds from the Final Stone Age Gajiganna Culture. *Vegetation History and Archaeobotany* 13: 131-142.



Klein, M.

- 1987 The demography of slavery in western Soudan. The late nineteenth century. In Cordell, D. et al. (eds.) *African population and capitalism. Historical perspectives*. Madison: University of Wisconsin Press.: 50-61.
- 1998 *Slavery and colonial rule in French West Africa*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 2007 Tirailleurs as a Link between France and Africa. *Journal of African History* 48: 322-324.
- 2011 Slaves and Soldiers in the Western Soudan and French West Africa. *Canadian Journal of African Studies* 45: 565-587.

Kobo, O.

- 2012a Islamic reform in colonial space: The jihad of Shaykh Boubacar Sawadogo and French Islamic policies in Burkina Faso, 1920-1946. *Journal for Islamic Studies* 32: 47-69.
- 2012b *Unveiling Modernity in Twentieth-Century West African Islamic Reforms*. Leiden: Brill.

Kodjo, G.

- 2006 *Le royaume de Kong (Côte d'Ivoire), des origines à la fin du XIXe siècle*. Paris : L'Harmattan.

Koulibaly, F.

- 1970 Histoire des Marka de Haute-Volta. *Notes et Documents Voltaïques* 3: 43-51.

Kuba, R.

- 2003 Comment devenir Phuo ? Stratégies d'inclusion au sud-ouest du Burkina Faso. dans Kuba, R. et al. (éds.) *Histoire du peuplement et relations interethniques au Burkina Faso*. Paris: Karthala.: 135-165.

Kuba, R. and C. Lentz

- 2002 Arrows and earth shrines: towards a history of Dagara expansion in southern Burkina Faso. *Journal of African History* 43: 377-406.

Labouret, H.

- 1931 *Les tribus du rameau Lobi*. Paris: l'Université de Paris.

Lalande, M.

- 1927 La production du coton en Haute-Volta. *Coton et Culture Cotonnière* 2: 78-84.

Larou, B.

- 1985 *Evolution de la société marka au contact de l'islam des origines à 1915. Le cas de Safané*. Mémoire de Maîtrise. Université de Ouagadougou.

Larregain, Père M.

- n.d. *Sur les pas de l'évêque de Nouna Missionnaire et soldat*. Ronchin: Voix d'Afrique.

Launay, R. et B. Soares

- 1999 The formation of an "Islamic Sphere" in French Colonial West Africa. *Economy and Society* 27: 497-519.

Lawler, N.

- 1992 *Soldiers of Misfortune: Ivorien Tirailleurs of World War II*. Athens: Ohio University Press.

Lawrance, B. et al.

- 2006 African Intermediaries and the 'Bargain' of Collaboration. in Lawrance, B. et al. (eds.) *Intermediaries, Interpreters, and Clerks: African Employees in the Making of Colonial Africa*. Madison: University of Wisconsin Press.: 3-34.

Leguy, C.

- 2010 Dialiba Konaté, ou celui qui donne à voir la parole des griots. *Cahiers de littérature orale* 67-68: 203-222.

LeBlanc, M.

- 1998 *Youth, Islam and Changing Identities in Bouaké, Côte d'Ivoire*. Ph. Thesis, University College London.

Lemaitre, Mgr.

- 1914 Vicariat apostolique du Soudan Français. *Bulletin Mission des Pères blancs* 224: 276-283.

Le Moal, G.

- 1980 *Les Bobo. Nature et Fonction des Masques*. Paris: ORSTOM.

Lemoine, P.

- 1999 Ba-za et kaya-wa dans les communautés villageoises Bwa de 1887 à 1934: relation clientélaire? *Hypothèses* 2: 165-174.

Lentz, C.

- 1993 Histories and political conflict: a case study of chieftaincy in Nandom, northwestern Ghana. *Paideuma* 39: 177-215.
- 2000 Colonial constructions and African initiatives: the history of ethnicity in Northwestern Ghana. *Ethnos* 65: 107-136.
- 2013 *Land, Mobility, and Belonging in West Africa: Natives and Strangers*. Bloomington: Indiana University Press.

Levtzion, N.

- 1968 *Muslims and Chiefs in West Africa. A study of Islam in the middle Volta basin in the pre-colonial period*. Oxford: Clarendon Press.
- 1978 Islam in West African Politics: Accommodation and Tension between the 'ulamā and the Political Authorities. *Cahiers d'études africaines* 57: 333-345.
- 1979 Patterns of Islamization in West Africa. in N. Levtzion (ed.) *Conversion to Islam*. New York: Holmes and Meier.: 207-216.

L'hote, Y. and G. Mahé

- 1996 *West and Central Africa mean annual rainfall (1951-1989)*. Paris: OSTROM.

Linseele, V.

- 2010 Did specialized pastoralism develop differently in Africa than in the Near East? An example from the West African Sahel. *Journal of World Prehistory* 23: 43-77.
- 2013 From first stock keepers to specialized pastoralists in the West African savannah. in Bollig, M. et al. (eds.) *Pastoralism in Africa: Past, Present and Future*. New York and Oxford: Berghahn Books.: 145-170.

Lisette, G.

- 1983 *Le combat du rassemblement démocratique africain pour la décolonisation pacifique de l'Afrique noire*. Paris: Presence Africaine.

Loimeier, R.

- 1998 Cheikh Touré, un musulman sénégalais dans le siècle: du réformisme à l'islamisme. dans Kane, O. and J.-L. Triaud (éds.) *Islam et islamismes au sud du Sahara*. Paris: Karthala.: 155-168.

Lougue, S. et L. Zan

- 2009 *Monographie de la Region de la Boucle du Mouhoun*. Ouagadougou: INSD.

Louveau, E.-D.

- 1946 *Au bagne, entre les griffes de Vichy et de la milice*. Bamako: Soudan imprimerie.

Lovejoy, R.

- 1982 Polanyi's "Ports of Trade": Salaga and Kano in the Nineteenth Century. *Canadian Journal of African Studies* 16: 245-278.
- 1986 *Salt of the Desert Sun. A History of Salt Production and Trade in the Central Sudan*. Cambridge: Cambridge University Press

Lunn, J.

- 2009 Remembering the Tirailleurs Sénégalais and the Great War: Oral History as a Methodology of Inclusion in French Colonial Studies. *French Colonial History* 10: 125-149.

Lynn, M.

- 2002 *Commerce and economic change in West Africa: The palm oil trade in the nineteenth century*. Cambridge: Cambridge University Press.

MacDonald, K.

- 1994 *Socio-economic diversity and the origins of cultural complexity along the Middle Niger 2400 BC-AD 300*. Ph. D. Thesis, Cambridge University.
- 1996 The Windé Koroji Complex: evidence for the peopling of the eastern Inland Niger Delta (2100-500 BC). *Préhistoire anthropologie méditerranéennes* 5: 147-165.
- 1997 Koroukorokale Revisited: The pays Mande and the West African Microlithic Technocomplex. *African Archaeological Review* 14: 161-200.

MacDonald, K. C. et al.

- 2003 New Light on the Tichitt Tradition: a preliminary report on survey and excavation at Dhar Néma. In Mitchell, P. et al. (eds.) *Researching Africa's Past: New contributions from British Archaeologists*. Oxford: Oxford University Press.: 73-80.

Madiega, G.

- 1987 Le rôle du R.D.A. dans la reconstitution de la colonie de la Haute-Volta (1947). dans *Actes du colloque international de Yamoussoukro, 18-25 octobre 1986*. Abidjan : CEDA.: 337-348.
- 1992 Les partis politiques et la question des fédérations en Haute-Volta (Burkina Faso). dans Ageron, C.-R. et M. Michel (éds.) *L'Afrique noire française : l'heure des indépendances*. Paris: CNRS.: 383-399.

Magnavita, S.

- 2003 The Beads of Kissi, Burkina Faso. *Journal of African Archaeology* 1: 127–38.

Mahmood, S.

- 2005 *Politics of Piety: The Islamic Revival and the Feminist Subject*. Princeton: Princeton University Press.

Mair, L.

- 1934 The study of culture contact as a practical problem. *Africa* 7: 415-422.
- 1938a The place of history in the study of culture contact. in L. Mair (ed.) *Methods of study of culture contact in Africa*. Oxford: Oxford University Press.: 1-8.

Mair, L. (ed.)

- 1938b *Methods of study of culture contact in Africa*. Oxford: Oxford University Press.

Malinowski, B.

- 1929 Practical Anthropology. *Africa* 2: 22-38.
- 1938 Introductory Essay in L. Mair (ed.) *Methods of Study of Culture Contact in Africa*. Oxford: Oxford University Press.: vii-xxxviii.
- 1945 *The Dynamics of Culture Change: An Inquiry into Race Relations in Africa*. New Haven: Yale University Press.

Manessy, G.

- 1999 Langues et histoire des peuples voltaïques: signification et limites de la comparaison historique. *Gur Papers/Cahiers Voltaïques* 4: 3-18.
- Mangin, P.
- 1908 Quelques jours de voyage au Mossi. *Missions d'Afrique des Pères Balncs* 187: 339-347.
- Mann, G.
- 2005 Locating colonial histories: Between France and West Africa. *American Historical Review* 110: 409-434.
- 2006 *Native sons: West African veterans and France in the twentieth century*. Durham: Duke University Press.
- 2013 Anti-Colonialism and Social Science: Georges Balandier, Madeira Keita, and "the Colonial Situation" in French Africa. *Comparative Studies in Society and History* 55: 92-119.
- Manning, P.
- 2010 African Population: Projections, 1851-1961. in Ittmann, K. et al. (eds.) *The Demographics of Empire: The Colonial Order and the Creation of Knowledge*. Ohio: Ohio University Press.: 245-275.
- Manning, K. et al.
- 2011 4500-year old domesticated pearl millet (*Pennisetum glaucum*) from the Tilemsi Valley, Mali: new insights into an alternative cereal domestication pathway. *Journal of Archaeological Science* 38: 312-322.
- Maquet, J.
- 1961 Une hypothèse pour l'étude des féodalités africaines. *Cahiers d'études africaines* 2: 292-314.
- 1962 A Research Definition of African Feudality. *Journal of African History* 3: 307-310.
- Marchal, J.
- 1980 *Chroniques d'un cercle de l'A.O.F. Ouahigouya*. Paris: ORSTOM.
- 1982 Brève histoire du développement économique de la Haute-Volta. *Economie et Humanisme* 265: 49-57.

Marshall, F. and E. Hildebrand

- 2002 Cattle before crops: the beginnings of food production in Africa. *Journal of World Prehistory* 16: 99-143.

Martin, B.

- 1965 Arabic materials for Ghanaian history. *Research Review (Institute of African Studies, University of Ghana)* 2: 74-83.

Marty, P.

- 1920 *Études sur l'Islam et les tribus du Soudan*. T.II Paris: Leroux.

Mauss, M.

- 1950 Une catégorie de l'esprit humain: la notion de personne celle de "moi". *Sociologie et anthropologie*. Paris: Presses universitaires de France.: 333-364.

Merle, I.

- 2004 De la «légalisation» de la violence en contexte colonial. Le régime de l'indigénat en question. *Politix* 17 : 137-162.
- 2013 «La situation coloniale» chez Georges Balandier. *Monde(s)* 2: 211-232.

Meillassoux, C.

- 1960 Essai d'interprétation du phénomène économique dans les sociétés traditionnelles d'auto-subsistance. *Cahiers d'études Africaines* 4 : 38-67.,
- 1967 Mise au point. *L'Homme* 7: 91-97
- 1972 From reproduction to production: A Marxist approach to economic anthropology. *Economy and Society* 1: 93-105.
- 1986 *Anthropologie de l'esclavage, le ventre de fer et d'argent*. Paris: Presses universitaires de France.

Meillassoux, C. (dir.)

- 1971 *L'Évolution du commerce africain depuis le XIX<sup>e</sup> siècle en Afrique de l'Ouest*. Oxford: Oxford University Press.
- 1975 *L'Esclavage en Afrique précoloniale*. Paris: Maspero.

Meunier-Nikiema, A.

- 2008 La place de Ouagadougou dans le réseau urbain. dans Fournet, F. et al.

*Ouagadougou (1850-2004): une urbanisation différenciée.* Marseille: IRD éditions.

McIntosh, R. and S. McIntosh

1980 *Prehistoric Investigations in the region of Jenne, Mali.* Oxford: BAR.

1981 The inland Niger delta before the empire of Mali: evidence from Jenne-Jeno. *Journal of African History* 22: 1-22.

McIntosh, R.

1998 *The Peoples of the Middle Niger.* Oxford: Blackwell.

McIntosh, S.

1995 *Excavations at Jenné-Jeno, Hambarketolo, and Kaniana (Inland Niger Delta, Mali), the 1981 season.* Berkeley: University of California Press.

1999 Modeling political organization in large-scale settlement cluster: a case study from the Inland Niger delta, Mali. in S. McIntosh (ed.) *Beyond Chiefdoms: Pathways to Complexity in Africa.* Cambridge: Cambridge University Press.: 66-79.

Miers, S. and I. Kopytoff

1977 *Slavery in Africa: historical and anthropological perspectives.* Madison: University of Wisconsin Press.

Millet, D.

1990 *Les potieres Marka de Tcheriba (Burkina Faso). Ethiques, comportements et techniques.* Genève: Institut universitaire d'études de development.

Monteil, C.

1924 *Les Bambara du Ségou et du Kaarta: étude historique, ethnographique et littéraire d'une peuplade du Soudan Français.* Paris: Larousse.

1971 *Une Cite Soudanaise. Djénné.* 2ème éd. Paris: Anthropos.

Monteil, P.-L.

1895 *De Saint-Louis à Tripoli par le lac Tchad : voyage au travers du Soudan et du Sahara, accompli pendant les années 1890-91-92.* Paris : F. Alcan.

Moraes Farias, P.

2003 *Arabic Medieval Inscriptions from The Republic of Mali: Epigraphy,*



- Chronicles, and Songhay-Tuareg History*. Oxford: Oxford University Press.
- Miran, M.
- 2006 *Islam, histoire et modernité en Côte d'Ivoire*. Paris: Karthala.
- Moore, H. and T. Sanders (eds.)
- 2001 *Magical Interpretations, Material Realities: Modernity, Witchcraft and the Occult in Postcolonial Africa*. London: Routledge
- Mouralis, B. et A. Piriou (éds.)
- 2003 *Robert Delavignette savant et politique (1897-1976)*. Paris: Karthala.
- Muhammad, A.
- 1974 *Dyula intellectualism in the Ivory Coast and Ghana: a study of the life and career of al-Hajj Salih b. Muhammad b. Uthman*. Ph. D. Thesis, University of Edinburgh.
- Munson, P.
- 1976 Archeological data on the origins of cultivation in the Southwestern Sahara and their implications for West Africa. In Harland, J. and A. Stemler (eds.) *Origins of African Plant Domestication*. The Hague: Mouton.: 187-209.
- Naepels, M.
- 2010 Anthropologie et histoire: de l'autre côté du miroir disciplinaire. *Annales. Histoire, sciences sociales* 65: 873-884.
- Newbury, C.
- 1966 North African and Western Sudan trade in the nineteenth century: a re-evaluation. *Journal of African History* 7: 233-246.
- Nixon, S.
- 2007 *The archaeology of Early Islamic Trans-Saharan trading towns in West Africa: a comparative view and progressive methodology from the entrepot of Essouk-Tadmekka*. Ph. D Thesis, University College London.
- Nohlen, D. et al.
- 1999 *Elections in Africa: A data handbook*. Oxford: Oxford University Press.
- Nunn, N.
- 2007 Historical legacies: a model linking Africa's past to its current

- underdevelopment. *Journal of Development Economics* 83: 157-175.
- 2008 The long-term effects of Africa's slave trades. *Quarterly Journal of Economics* 23: 139-172.
- Osborn, E.
- 2004 'Rubber Fever', Commerce and French Colonial Rule in Upper Guinée, 1890-1913. *Journal of African History* 45: 445-465.
- Otayek, R. et B. Soares (éds.)
- 2009 *Islam, État et société en Afrique*. Paris: Kathala.
- Otayek, R.
- 1981 Libye et Afrique: assistance financière et stratégie de puissance. *Politique africaine* 1: 77-98.
- 1984a La crise de la Communauté musulmane de Haute-Volta. L'islam voltaïque entre réformisme et tradition, autonomie et subordination. *Cahiers d'études africaines* 95: 299-320.
- 1984b Islam et politique extérieure au Nigeria. Essai de mise en perspective historique. *Revue canadienne des études africaines* 18: 522-545.
- 1988 Muslim Charisma in Burkina Faso. in O'Brien, D. and C. Coulon (eds.) *Charisma and Brotherhood in African Islam*. Oxford: Clarendon Press.: 91-112.
- 1993 Une relecture islamique du projet révolutionnaire de Thomas Sankara. dans J.-F. Bayart (dir.) *Religion et modernité politique en Afrique noire*. Paris: Karthala.: 101-127.
- Otayek, R. (dir.)
- 1993 *Le radicalisme islamique au sud du Sahara: Da'wa, arabisation et critique de l'Occident*. Paris: Karthala.
- Ouattara, V.
- 2013 *Les Secrets des sorciers noirs*. Paris: Publibook.
- Ouedraogo, D.
- 2003 Panorama des institutions archivistiques étrangères depositaires de sources de l'Histoire du Burkina Faso. dans Madiéga, Y. et O. Nao (éds.) *Burkina*

- Faso. Cent ans d'histoire, 1895-1995*. T. 1. Paris : Karthala.: 61-72.
- Oloruntimehin, B.
- 1972 *The Segou Tukolor Empire*. Bristol: Longman.
- Olson, D. and M. Cole (eds.)
- 2006 *Technology, literacy, and the evolution of society: Implications of the work of Jack Goody*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- ONUEC (l'Organisation des Nations Unies pour l'Éducation, la Science et la Culture)
- 1961 *Situation et perspectives de l'enseignement en Haute-Volta*. Paris: UNESCO.
- Ozainne, S. et al.
- 2014 A question of timing: spatio-temporal structure and mechanisms of early agriculture expansion in West Africa. *Journal of Archaeological Science* 50: 359-368.
- Parker, J. and R. Reid (eds.)
- 2013a *The Oxford Handbook of Modern African History*. Oxford: Oxford University Press.
- Parker, J. and R. Reid
- 2013b Introduction--African Histories: Past, Present and Future. in Parker, J. and R. Reid (eds.) *The Oxford Handbook of Modern African History*. Oxford: Oxford University Press.: 1-20.
- Parker, J.
- 2013 The dynamics of fieldwork among the Talensi: Meyer Fortes in northern Ghana, 1934-7. *Africa* 83: 623-645.
- Patterson, K.
- 1980 The Veterinary Department and the Animal Industry in the Gold Coast, 1909-1955. *International Journal of African Historical Studies* 13: 457-491.
- Pauliat, P.
- 1995 Les Pères Blancs en Haute-Volta : 1900-1960. dans Massa, G. et Y. Madiega (éds.) *La Haute-Volta coloniale. Témoignages, recherches, regards*. Paris: Karthala.: 181-198.

Paulme, D.

- 1940 *Organisation sociale des Dogon (Soudan français)*. Paris: Domat  
-Montchrestien.

Person, Y.

- 1968 *Samori. Une révolution dyula*. T. I Dakar: IFAN.  
1970 *Samori. Une révolution dyula*. T. II Dakar: IFAN.  
1975 *Samori. Une révolution dyula*. T. III Dakar: IFAN.

Petit, L. et al.

- 2011 *Oursi hu-beero: a medieval house complex in Burkina Faso, West Africa*.  
Leiden: Sidestone Press.

Philippeau, M.

- 2009 Micro-histoire de la diffusion de l'islam en Afrique de l'Ouest. Création de  
réseaux et de chaînes d'enseignement en Bwamu (Burkina Faso). *Cahiers  
d'études africaines* 196: 969-1000.

Pondopoulo, A.

- 2010 Amadou Hampâté Bâ and the Writer Robert Arnaud (Randau): African  
Colonial Service and Literature. *Islamic Africa* 1: 229-247.

Porret, H. et A.-M. Gauthier

- 1995 Les Sœurs blanche ne Haute-Volta, 1913-1960. dans Massa, G. et Y. Madiéga  
(éds.) *La Haute-Volta coloniale. Témoignages, recherches, regards*. Paris:  
Karthala.: 199-210.

Posnansky, M.

- 1973 Aspects of early West African trade. *World Archaeology* 5: 149-162.

Quimby, L.

- 1972 *Transformations of Belief: Islam among the Dyula of Kongbougou from 1880  
to 1970*. Ph. D. Thesis, The University of Wisconsin.

Ramognino, P.

- 2006 *L'Affaire Boisson. Un proconsul de Vichy en Afrique*. Paris: Les Indes  
Savantes.

Ranger, T.

- 1967 *Revolt in Southern Rhodesia, 1896-97*. London: Heinemann.
- 1968 Connexions between 'Primary Resistance' Movements and Modern Mass Nationalism in East and Central Africa. Part I. *Journal of African History* 9: 437-453.
- 1977 The people in African resistance: a review. *Journal of Southern African Studies* 4: 125-146.
- 1979 European Attitudes and African Realities: the rise and fall of the Matolac chiefs of south-east Tanzania. *Journal of African History* 20: 63-82.
- Reardon, T. et al.
- 1992 Determinants of effects of income diversification amongst farm households in Burkina Faso. *Journal of Development Studies* 28: 264-296.
- Reese, S.
- 2014 Islam in Africa/Africans and Islam. *Journal of African History* 55: 17-26.
- Reichmuth, S.
- 2000 Islamic Education and scholarship in Sub-Saharan Africa. in Levtzion, N. et al. (eds.) *The history of Islam in Africa*. Ohaio: Ohaio University Press.: 419-440.
- Reid, R.
- 2012 *A history of modern Africa: 1800 to the present*. 2nd ed. West Sussex: John Wiley & Sons.
- Rey, P.-P.
- 1998 Les gens de l'or et leur idéologie, l'itinéraire d'Ibn Battuta en Afrique occidentale au XIV<sup>e</sup> siècle. dans Schlemmer, B. (dir.) *Terrains et engagements de Claude Meillassoux*. Paris: Khartala : 121-155.
- Richards, W.
- 1980 The import of firearms into west Africa in the eighteenth century. *Journal of African History* 21: 43-59.
- Robert-Chaleix, D.
- 1989 *Tegdaoust V: Recherches sur Aoudaghost. Une concession médiévale à Teghaoust: implantation, evolution d'une unite d'habitation*. Paris: Éditions

Recherche sur les Civilisations.

Roberts, R.

- 1980 Long distance trade and production: Sinsani in the nineteenth century. *Journal of African History* 21: 169-188.
- 1987 *Warriors, merchants, and slaves: The state and the economy in the middle Niger valley, 1700-1914*. Stanford: Stanford University Press.

Robinson, D. et J.-L. Triaud (éds.)

- 1997 *Le Temps des Marabouts. Stratégies et itinéraires islamiques en Afrique occidentale (v. 1880-1960)*. Paris: Karthala.

Robinson, D.

- 1985 *Holy War of Umar Tal*. Oxford: Oxford University Press.
- 1988 *La Guerre sainte d'Al-Hajj Umar: le Soudan occidental au milieu du XIXe siècle*. Traduit de l'anglais par Henry Tourneux et Jean-Claude Vuillemin. Paris: Karthala.
- 2000 *Paths of accommodation: Muslim societies and French colonial authorities in Senegal and Mauritania, 1880-1920*. Ohio: Ohio University Press.

Rouch, J.

- 1956 Migrations au Ghana. *Journal de la Société des Africanistes* 26: 33-196.

Rousseau, J.

- 2006 *Rethinking Social Evolution: The Perspective from Middle-Range Societies*. Montreal: McGill-Queen's University Press.

Roy, B.

- 2000 The Beads. In T. Insoll (ed.) *Urbanism, archaeology and trade: further observations on the Gao Region (Mali), the 1996 field season results*. Oxford: John and Erica Hedges.: 98-126.

Saad, E.

- 1982 *Social history of Timbuktu: the role of Muslim scholars and notables 1400-1900*. Cambridge: Cambridge University Press.

Saada, E.

- 2003 Citoyens et sujets de l'empire français, Les usages du droit en situation

coloniale. *Genèses* 53 : 5-23.

Salamone, F.

- 2000 The International African Institute: the Rockefeller Foundation and the development of British social anthropology in Africa. *Transforming Anthropology* 9: 19-29.

Sanankoua, B.

- 1990 *Un empire peul au XIXe siècle. La Diina du Maasina*. Paris: Karthala.

Saint-Martin, Y.

- 1968 Un fils d'El Hadj Omar: Aguibou, roi du Dinguiray et du Macina (1843?-1907). *Cahiers d'études africaines* 8 : 144-178.

Saul, M. and P. Royer

- 2001 *West African Challenge to Empire. Culture and History in the Volta-Bani Anticolonial War*. Ohio: Ohio University Press.

Saul, M.

- 1998 The war houses of the Watara in West Africa. *International journal of African historical studies* 31: 537-570.
- 2004a Money in colonial transition: cowries and francs in West Africa. *American Anthropologist* 106: 71-84.
- 2004b The Dominance of the Cowry Relative to the Franc in West Africa. in Werner, C. and D. Bell (eds.) *Values and Valuables*. Oxford: Altamira.: 101-127.
- 2011 Les foyers zara de Sia et de Tounouma à la fin du XIXe siècle. dans Werthmann, K. et M. Sanogo (éds.) *La ville de Bobo-Dioulasso au Burkina Faso. Urbanite et appartenances en Afrique de l'Ouest*. Paris : Karthala. : 43-68.

Savadogo, K. et al.

- 1994 Farm productivity in Burkina Faso: effects of animal traction and nonfarm income. *American Journal of Agricultural Economics* 76: 608-612.

Savonnet-Guyot, C.

- 1986 *Etat et société au Burkina : essai sur le politique africain*. Paris:

Karthala.

Sebastian, K. (ed.)

- 2014 *Atlas of African Agriculture Research and Development*. Washington: International Food Policy Research Institute.

Schaub, J.-F.

- 2008 La categorie "études coloniales" est-elle indispensable? *Annals. Histoire, Science Sociales* 63: 625-646.

Shea, P.

- 2006 Big is sometimes best: The Sokoto Caliphate and economic advantages of size in the textile industry. *African Economic History* 34: 5-21.

Shinnie, P. and P. Ozanne

- 1962 Excavation at Yendi Dabari. *Transactions of the Historical Society of Ghana* 6: 87-118.

Schmidt, A.

- 2005 Parure: perles, labrets, bracelet, pendentifs et cauris. In Bedeaux, R. et al. (éds) *Recherches archéologiques à Dia dans le Delta intérieur du Niger (Mali) : bilan des saisons de fouilles 1998-2003*. Leiden: Research School of Asian, African, and Amerindian Studies, Leiden University: 263-281.

Schwartz, A.

- 1993 Brève histoire de la culture du coton au Burkina Faso. dans Association «Découvertes du Burkina» *Découvertes du Burkina*. T. I Ouagadougou: A.D.D.B.: 207-237.
- 2003 La politique cotonnière du gouverneur Hesling et la dislocation de la colonie de Haute-Volta en 1932. dans Madiéga, Y. et O. Nao (éds.) *Burkina Faso : Cent ans d'histoire, 1895-1995*. T. II Paris : Karthala . : 1289-1310.

Sibeud, E.

- 2002 *Une science impériale pour l'Afrique? la construction des savoirs africanistes en France 1878-1930*. Paris: Recherches d'histoire et de sciences sociales.

Sidibe, M.

- 1927 Contribution à l'étude de l'histoire et des coutumes des indigènes de la



région de Bobo-Dioulasso (Haute-Volta). *Bulletin de l'enseignement africain* 64: 54-71.

Singaravélou, P.

2011 *Professor l'Empire*. Paris : Publications de la Sorbonne.

Sissao, C.

2003 Le problème des sources d'archives de l'histoire coloniale du Burkina Faso (ex Haute-Volta) : reflet de l'évolution d'un territoire au sein de l'A.O.F. dans Madiéga, Y. et O. Nao (éds.) *Burkina Faso. Cent ans d'histoire, 1895-1995*. T. 1. Paris : Karthala.: 73-80.

Skinner, E.

1960 Labour migration and its relationship to socio-cultural change in Mossi society. *Africa* 30: 375-401.

1962 Trade and Markets among the Mossi People. in Bohannon, P. and G. Dalton (eds.) *Markets in Africa*. Evanston: Northwestern University Press.: 237-278.

1989 *The Mossi of Burkina Faso : chiefs, politicians, and soldiers*. Prospect Heights: Waveland Press.

Smith, A. B.

1974 Preliminary report of excavations at Karkarichinkat Nord and Karkarichinkat Sud, Tilemsi Valley, Republic of Mali. 1972. *West African Journal of Archaeology* 4: 33-55.

1975 A note on the flora and fauna from the post-palaeolithic sites of Karkarichinkat Nord and Sud. *West African Journal of Archaeology* 5: 201-204.

Soares, B. and R. Otayek (eds.)

2007 *Islam and Muslim politics in Africa*. New York: Palgrave Macmillan.

Soares, B.

2005 *Islam and the Prayer Economy: History and Authority in a Malian Town*. Michigan: University of Michigan Press.

2014 The historiography of Islam in West Africa: an anthropologist's view. *Journal of African History* 55: 27-36.

Somda, N.

- 1976 Les cauris du Lobi. *Notes et Documents voltaïques* 10: 75-91.
- 1993 Les cauris du pays Lobi. In M. Fiéloux, J. et al. (éds) *Images d'Afrique et sciences sociales: Les pays lobi, birifor et dagara*. Paris : ORSTOM. : 232-246.

Somé, M.

- 1995 Le mouvement de conversion des Dagara au christianisme (1932-1933). dans Massa, G. et Y. Madiega (éds.) *La Haute-Volta coloniale. Témoignages, recherches, regards*. Paris: Karthala.: 211-224.
- 1998 La christianisation des Dagara du Burkina: flux et reflux des conversions (1932-1952). *Revue française d'histoire d'outre-mer* 85: 33-57.
- 2004 *La christianisation de l'Ouest-Volta*. Paris: L'Harmattan.

Stahl, A. and P. Stahl

- 2004 Ivory production & consumption in Ghana in the early second millennium AD. *Antiquity* 78: 86-101.

Suret-Canale, J.

- 1964 Les sociétés traditionnelles en Afrique tropicale et le concept de mode de production asiatique. *La Pensée* 117: 3-24.
- 1972 *Afrique Noire : de la décolonisation aux indépendances*, Paris, Éditions Sociales.
- 1994 *Les Groupes d'Etudes Communistes (G.E.C.) en Afrique noire*. Paris: L'Harmattan.

Sutton, I.

- 1983 Labour in commercial agriculture in Ghana in the late nineteenth and early twentieth centuries. *Journal of African History* 24: 461-483.

Sztutman, R.

- 2011 Le vertige des prophètes et des guerriers amérindiens: déploiement de quelques paradoxes clastriens. dans Abensour, M. et A. Kupiec (éds.) *Pierre Clastres*. Paris: Sens et Tonka Editeurs.: 193-210.

Takezawa, S. et M. Cissé (éds.)

- 2016 *Sur les traces des Grands Empires : Recherches archéologiques au Mali*. Osaka: Le Musée Nationale d'Ethnologie d'Osaka.
- Tamari, T.
- 1991 The development of caste systems in West Africa. *Journal of African History* 32: 221-250.
- Tabutin, D. et B. Schoumaker
- 2004 La démographie de l'Afrique au sud du Sahara des années 1950 aux années 2000. *Population* 59: 521-622.
- Tauxier, H.
- 1912 *Le Noir du Soudan. Pays mossi et gourounsi*. Paris: Larose.
- 1924 *Nouvelles notes sur les Mossi et les Gurunsi*. Paris: Larose.
- Tcherneva, P.
- 2006 Chartalism and the tax-driven approach to money. Arestis, P. and M. Sawyer (eds.) *A Handbook of Alternative Monetary Economics*. Cheltenham: Edward Elgar.: 69-86.
- Terray, E. et J. Bazin (éds.)
- 1982 *Guerres de lignages et guerres d'États en Afrique*. Paris: Éditions des Archives contemporaines.
- Tengan, A.
- 2000 Space, Bonds and Social Order: Dagara House-based Social System. in Hagberg, S. and A. Tengan (eds.) *Bonds and Boundaries in Northern Ghana and Southern Burkina Faso*. Stockholm: Elander Gotab.: 87-102.
- Traoré, A.
- 1983 *Islam et colonisation en Afrique. Cheikh Hamahoullah homme de foi et résistant*. Paris: Maisonneuve et Larose.
- Traoré, B.
- 1984 *Le processus d'islamisation à Bobo-Dioulasso jusqu'à la fin du XIXe siècle. Approche historique et sociologique*. Mémoire de maîtrise. Université de Ouagadougou.
- 2005 Islam et politique à Bobo-Dioulasso de 1940 à 2002. dans M. Gomez-Perez

(dir.) *L'islam politique au sud du Sahara: Identité, discours et enjeux*. Paris: Karthala.: 375-394.

- 2012 Al-Hajj Marhaba Saganogho (1891-1981) . La quête de positionnement d'un lettré musulman à Bobo-Dioulasso. dans Goerg, O. et A. Pondopoulo (éds.) *Islam et sociétés en Afrique subsaharienne à l'épreuve de l'histoire. Un parcours en compagnie de Jean-Louis Traiaud*. Paris: Karthala. : 237-268.

Triaud, J.-L.

- 1997 Le crépuscule des Affaires musulmanes en AOF, 1950-1956. dans Robinson, D. and J.-L. Triaud (éds.) *Le temps des marabouts: itinéraires et stratégies islamiques en Afrique occidentale française v.1880-1960*. Paris: Karthala.: 493-519.
- 2000 Islam in Africa under French colonial rule. in Levtzion, N. and R. Pouwels (eds.) *The History of Islam in Africa*. Ohio: Ohio University Press.: 169-188.
- 2014 Giving a name to Islam south of the Sahara: an adventure in taxonomy. *Journal of African History* 55: 3-15.

Triaud, J.-L. et D. Robinson (éds.)

- 1997 *Le temps des marabouts. Stratégies et itinéraires islamiques en Afrique occidentale (v. 1880-1960)*. Paris: Karthala.

Trigger, B.

- 1990 Maintaining economic equality in opposition to complexity: an Iroquoian case study. in S. Upham (ed.) *The Evolution of Political Systems: Sociopolitics in Small-Scale Sedentary Societies*. Cambridge: Cambridge University Press.: 119-145.

Turcotte, D. et H. Aube

- 1983 *Lois, règlements et textes administratifs sur l'usage des langues en Afrique occidentale française (1826-1959)*. Quebec: Les presses de l'Université Laval.

Van Den Boogaart, E.

- 1992 The trade between western Africa and the Atlantic world, 1600–90: estimates of trends in composition and value. *Journal of African History* 33: 369-385.

Vernet, R.

- 1993 Le Sahel. dans *Vallées du Niger*. Paris: Éditions de la Réunion des musées nationaux.: 75-82.

Weiss, H.

- 2008 *Between Accommodation and Revivalism: Muslims, the State, and Society in Ghana from the Precolonial to the Postcolonial Era*. Helsinki: Finnish Oriental Society.

Werthmann, K.

- 2008 Islam on both Sides: Religion and Locality in Western Burkina Faso. in Stauth, G. and S. Schielke (eds.) *Dimensions of Locality: Muslim Saints, Their Place and Space*. New Brunswick: Transaction Publishers.:125-148.

White, O.

- 2005 Networking: freemasons and the colonial state in French West Africa, 1895–1914. *French History* 19: 91-111.

Wilder, G.

- 2003a Unthinking French History: Colonial studies beyond national identity. In A. Burton (ed.) *After the imperial turn*. Durham: Duke University Press.:  
2003b Colonial ethnology and political rationality in French West Africa. *History and Anthropology* 14: 219-252.

Wilks, I.

- 1968a The Transmission of Islamic Learning in the West Sudan. in J. Goody (ed.) *Literacy in Traditional Societies*. Cambridge: Cambridge University Press. : 162-197.  
1968b Abu Bakr al-Siddiq of Timbuktu. in P. Curtin (ed.) *Africa Remembered: Narratives by West Africans from the Era of the Slave Trade*. Madison: The University of Wisconsin Press.: 152-169.  
1975 *Asante in the Nineteenth Century: The Structure and Evolution of a Political Order*. Cambridge: Cambridge University Press.  
1982 Wangara, Akan and Portuguese in the fifteenth and sixteenth centuries. II. The struggle for trade. *Journal of African History* 23: 463-472.

- 1989 *Wa and the Wala. Islam and polity in northwestern Ghana*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 2000 The Juula and the expansion of Islam into the forest. In N. Levtzion et al. (eds.) *The history of Islam in Africa*. Ohaio: Ohaio University Press.: 93-116.
- 2011 Al-Hajj Salim Suwari and the Suwarrians: a Search for Sources. *Transactions of the Historical Society of Ghana, new series* 13: 1-79.
- Wilks, I. et al.
- 1986 *Chronicles from Gonja: a tradition of West African Muslim historiography*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Williamson, K. and R. Blench
- 2000 Niger-Congo. in Heine, B. and D. Nurse (eds.) *African Languages: An Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.: 11-42.
- Zahan, D.
- 1954 Notes sur les marches mossi du Yatenga. *Africa* 24: 370-377.
- Zehfuss, N. M.
- 2005 From Stereotype to Individual: World War I Experiences with Tirailleurs Sénégalais. *French Colonial History* 6: 137-157.